金子洋文の研究 ―その文化活動から―

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2014年10月

天雲成津子

概要

論文題目

金子洋文の研究 ―その文化活動から―

概要

明治 27 年（1894）、秋田県南秋田郡土崎港町（現在は秋田市）に生まれた金子洋文（かねこようぶん）は大正 10 年（1921）、小学校の同級生だった小牧近江と共に雑誌『種蒔く人』を創刊した。この雑誌は日本のプロレタリア文化運動の興隆に大きく寄与したとされ、金子は『種蒔く人』の中心的な人物として評価されている。関東大震災時の権力側による虐殺を告発した「種蒔き雑記―亀戸の殉難者を哀悼するために」を著した金子は、『種蒔く人』の後継誌『文芸戦線』を創刊する際には、同人達から編集を任せられ、その終刊時にも編集人となっている。

『種蒔く人』と『文芸戦線』というふたつの雑誌の創刊に関わった金子は、プロレタリア文化運動を研究する上で注目すべき人物のひとりである。彼は大正から昭和にかけて、両誌のほかに、『解放』、『新潮』、『中央公論』、『太陽』など、多くの雑誌に小説や戯曲作品を発表している。小説や戯曲作品を書くだけではなく、新劇、新派、新国劇ら多くの舞台公演にも携わり、自作だけでなく他の作家の作品を演出、脚本化する仕事も数多く手がけた。文学と演劇の双方で活躍し、戦中、終戦、さらに戦後も劇作家、演出家としての活動を続けていた。

金子の晩年は、雑誌『種蒔く人』が「昭和初年のあらゆる進歩的文学・文化運動の源流がここにある」（小田切秀雄著『私の見た昭和の文学と思想の五十年（下）』集英社、1988 年）と評されることになった。小田切の主張は「ナップの眼鏡をはずせ」で広く知れわたり、それまでのプロレタリア文学＝共産主義系文学という見方から脱却し、その後の文学史観を大きく変えることとなった。『種蒔く人』再評価が行われた過程で、小田切の手によって、雑誌『種蒔く人』が復刻されているが、その実現には金子洋文が保存していた資料や、小牧近江、今野賢三ら土崎出身の『種蒔く人』同人たちの協力があった。金子洋文は『文芸戦線』復刻の際にも自らの資料を提供している。金子が果たした役割のかげには、彼が生涯保管してきた資料の存在があった。

本稿では金子洋文がのこした資料を中心に多くの資料調査を行い、彼の生涯を俯瞰したうえで、彼がたずさわった種々の文化活動の意義に着目した。多岐にわたる金子の創作活動を、農民文学、プロレタリア同人誌、演劇、俳句といったテーマごとに捉えた。こうした作業から浮かび上がってきたの

は、地方性・ローカリティに固執する姿であり、広く民衆に自らの信ずる思想を伝達する手段を模索した姿である。金子の活動の根幹には、貧しい暮らしを余儀なくされる人々への思いがあり、地方の現実から遊離することはなかった。若くして出会った社会思想を多くの民衆に伝えようと、金子は文芸から演劇へと民衆がより馴染みやすい、伝達方法を選んでいっていた。資料調査の結果をもとに各種のデータ・ベースを作成し、金子洋文の活動について量的な解析をふまえた分野ごとの検証を行った結果、金子の各分野における創作活動には、地方とのかかわりが色濃いことが明らかになった。

各章は以下の構成である。

第 1 章 序論

金子洋文の生涯を総括し、青年期までをすごした東北の港町、土崎の地理的、文化的環境が彼の活動にどのように影響をもたらしたか明らかにする。『種蒔く人』が刊行された土崎港町には、周辺の農村部とは異なる町の文化があった。当時の土崎港町からは、海外と関わり深い分野で活躍する人材が多く輩出したが、土崎小学校の同級生で彼の盟友となった小牧近江もその中に含まれる。欧州で第一次世界大戦を体験した小牧が、フランスから持ち帰ったクラルテの思想を受け止めて、『種蒔く人』の発行となった。進取の気性をもつこの町は、金子の人格、能力形成に大きな影響を及ぼしている。

第 2 章 金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に―

大正期の同人雑誌である『白樺』と『種蒔く人』との関わりについて、金子の書簡を中心に、金子と白樺派との交流を一連の流れであらわした。

金子は母校の土崎小学校に代用教員として勤務していた。この時期の彼に影響を与えたのが雑誌『白樺』と『第三帝国』であり、彼は両誌に積極的に接近し、自らの進路を切りひらいていた。まず、当時最も尖鋭な「民本主義」的立場を展開した雑誌『第三帝国』の地方欄に投稿をしている。やがて雑誌の主宰者のひとり、茅原華山の知遇を得て、東京での就職先を斡旋してもらう。その一方で、『白樺』の武者小路実篤へ自らの新聞記事を送っている。就職して上京した直後に武者小路宅を訪問し、我孫子の新居住み込みを果たす。金子が小牧近江の伝える思想に同調できる素地は、武者小路と彼の周囲に住んでいた白樺派との交友を間近にみて体感したことから醸成されたものであり、武者小路の家を出た後も、白樺派と交流があった。のこされた書簡からは、金子と彼等との交流が明らかとなる。

第 3 章 金子洋文と農民文学

『種蒔く人』という誌名、土崎版表紙の、ミレーの同題の絵は金子洋文が選んだものである。『種蒔く人』土崎版における農村の暮らしを描いた作品に、地方農村の窮状を書き著した畠山松治郎の小説

「貧乏人の涙」と、金子によるロシアの貧農を現したチェーホフ作品「農人」の解説がある。両者を論じ、『種蒔く人』が東京に移った後の農村への目線を考察する。都会と地方、地方都市と農村の格差という現代にも通じる格差が生じた当時の農村の困窮を取り上げた。

金子は『地獄』、『赤い湖』など農村を舞台に描いた作品があるが、出世作となった『地獄』では、地主の富裕な生活と対比して明るい未来を望めない農民たちの姿を描いた。文学作品として農民の暮らしをテーマに書く者が少なかった当時、金子は『種蒔く人』の同人中、最も農民や農村の生活を描いた人であり、農民文学の先達の一人であった。

第 4 章 金子洋文とプロレタリア文学雑誌

金子の社会主義運動は『種蒔く人』から始まる。この雑誌は、世界のプロレタリア文化運動の大きな流れを決定づけたロマン・ロランとアンリ・バルビュスとの議論を紹介している。この論争の意味を伝えた後、金子に何をもたらしたかを考察した。

本章では『文芸戦線』のすべての記事を網羅した記事目録データ・ベースを作成した。頁面積に置き換えた記事分量を集計し、金子に関わる記事と秋田地方に関わる記事について数値的な解析を試みた結果、金子と秋田関係の頻出度は一定の割合で存在していた。金子編集体制となって以降はその高さは顕著となっている。これは後期『文芸戦線』が、金子ら秋田の関係者によって大きく支えられていたことを裏づけるものである。

第 5 章 金子洋文と俳句

金子洋文が生涯を通じ親しんでいながら、特に注目されていなかった活動に俳句づくりがある。職業作家となる以前の投稿作品が地元新聞に多く見受けられ、戦後からのノートに記された俳句が数多く存在している。長く俳句に親しみ、周囲には久保田万太郎をはじめ俳人も数多いが、これはあくまで個人的な楽しみであるとして公表することはなかった。

長い期間発表される予定もなく書きためられていた金子の俳句は、晩年に句集『雄物川』として一冊の本として、秋田で刊行された。この章ではのこされたノートから、金子の俳句との関わり深さを明らかにした。加えて昭和 7 年（1932)に、地元紙である秋田魁新報紙上で、金子と地元の俳人が繰り広げた俳句論争をとりあげ、その影響を考察した。

第 6 章 金子洋文と演劇―演劇人として

演劇関係者の登場の流れを数量化し、金子洋文が小山内薫、土方与志、岸田国士、村山知義と比し

て演劇界で独自な位置を占めていたことを明らかにした。

さらに早稲田大学演劇資料館のデータ・ベース、金子洋文資料、松竹大谷図書館所蔵資料など各種上演記録の中から金子が関与した上演作品を抽出し、金子洋文上演記録を作成した。金子の書いた戯曲が最も上演されたのは昭和 4 年(1929)で、金子はその後、演出家、舞台監督といった仕事へ次第に移っていた。金子が浅草オペラ、新国劇、新派、歌舞伎といった新しい演劇活動の現場で第一線にかかわり続けていたこと、演劇界における証言者ともいえる位置にあったことが明らかになった。

第 7 章 金子洋文と故郷―地方性の存在

金子洋文の裡に認められる地方を考察し、彼が秋田の文化にもたらしたふたつの事例に着目する。昭和 43 年(1968) 上半期第 59 回芥川賞候補に秋田在住の同人誌作家、杉田瑞子がなった背景には、当時の芥川賞の選考委員であった石川達三らに、杉田を紹介していた金子の存在があった。金子は秋田の同人誌とも繋がりをもっており、秋田からの後進作家を中央に紹介しようとしていた。文学以外に、昭和 14 年(1939)頃に舞台演劇にも使用した新民謡「秋田港の唄」作詞作曲など、秋田と中央を結びつける役目を果たしていた。

東京在住の金子であるが、従来のプロレタリア文学運動の人物という定義だけではとらえきれない、郷土と密着した作家として、多くの働きをしていたことが明らかになった。

終章 結論

金子洋文の生涯を伝える資料からは、金子が秋田という地方と中央とをつなげる活動に力を注いでいた様子が浮かび上がってくる。都会と地方との格差は、金子の内部でも大きな課題となっており、『種蒔く人』にあったプロレタリア文化運動の思想に適うものであった。プロレタリア文化運動として語られてきた金子は、秋田を作品に反映させた郷土作家でもあった。金子にとってプロレタリア文化活動とは、地方にいる人々も幸せに生きられることを目指した活動であった。

以上、今回の研究対象となった資料は、金子が保存することに価値を見出し強い意志をもって保持し続けていたもので、保存し伝えることの意味を表すことになる。その保存と活用が課題として存在している。

Abstract

Title

A Study of Yobun Kaneko -From his Cultural Activities-

Abstract

Yobun Kaneko was born in Tsuchizaki-Minatomachi (Tsuchizaki port town), Minami Akita-gun of Akita prefecture (current Akita city) in 1894. Kaneko founded the magazine, "Tane Maku Hito" (The Sowers) in 1921 along with Oumi Komaki (Komaki Oumiya), his classmate from elementary school. This magazine is said to have greatly contributed to the flourishing of Proletarian cultural movements in Japan, and Kaneko is recognized to be a central figure of "Tane Maku Hito". In the extra issue, "Tanemaki Zakki – Kameido no Junnansha wo Aitou suru tame ni"(Condolences for the martyrs of Kameido), which was published after "Tane Maku Hito" had ended. Kaneko wrote about the massacre carried out by those with power when the Great Kanto Earthquake occurred. He was tasked with editing by his colleagues when launching "Bungei Sensen"(Literary arts front), a publication that succeeded "Tane Maku Hito", and was also the editor of its final issue.

Kaneko was involved in the establishment of two Proletarian literary magazines that play as important role, which were "Tane Maku Hito" and "Bungei Sensen", and for this reason he is a noteworthy figure in the research of Proletarian cultural movements.

This paper focused on the significances of the various cultural activities Kaneko took part in with an overview of his life and mainly studying the materials he left behind. Then, each theme of Kaneko's various creative works such as peasant literature , Proletarian coterie publications, drama, and haiku were analyzed. The common traits discovered from these observations were his adherence to locality and his effort to find a method to communicate the ideas he believed in to the public. At the base of his activities were his thoughts towards people who were forced to live in poverty, and he never separated himself from the reality in local regions.

A great deal of documentary research was conducted beginning with documents left by Yobun Kaneko. Then, various databases were created and verifications using quantitative analysis regarding his activities were carried out. The structures of each chapter are as follows

Chapter 1　Introduction

This chapter summarizes Yobun Kaneko's life and clarifies the influences he received in his activities, which were from the geographical as well as cultural environments of Tsuchizaki, the port town of Tohoku where he lived during his youth. "Tane Maku Hito" was published in Tsuchizaki Minatomachi, and this town had a different culture compared to the surrounding rural communities.

Chapter 2　Yobun Kaneko and the People of the Shirakabaha –Focusing on his Epistles-

Here the sequence of events regarding Kaneko's interchange with the Shirakabaha was clarified by examining the relationships between "Shirakaba"(White Birch) and "Tane Maku Hito", which were literary coterie magazines during the Taisho period, while focusing on Kaneko's epistles.

During his time as a substitute teacher at Tsuchizaki Elementary School, he was influenced by the magazines "Shirakaba" and "Daisan Teikoku" (The Third Empire) and opened up his career by actively attempting to receive attention from both magazines. He also sent his own newspaper article to Saneatsu Mushanokoji of "Shirakaba". Kaneko visited the house of Mushanokoji immediately after arriving in Tokyo to work, and convinced him to be allowed to live in his new house in Abiko as a residential staff. Kaneko was able to sympathize with the ideas of Oumi Komaki through his close experience with Mushanokoji and those of the Shirakabaha around him. It was possible to observe the influences of the Shirakabaha on early Proletarian activities by focusing on Kaneko.

Chapter 3　Yobun Kaneko and Peasant Literature

The title of "Tane Maku Hito" and the painting of Millet used for the cover of the Tsuchizaki version of the magazine were chosen by Yobun Kaneko. While he worked on the magazine he also began to create his own works.

"Jigoku" (Hell) and "Akai Mizuumi" (the Red Lake) are works of Kaneko that take place in rural villages. "Jigoku" won him reputation, and this work depicted the life of the wealthy landlord as opposed to the peasants who had no future. In a time when there were few who wrote about the lives of peasants in literary works, Kaneko wrote the most about the everyday lives of peasants as well as farming villages while he also worked on "Tane Maku Hito", and became one

of the pioneers of peasant literature.

Chapter 4　Yobun Kaneko and Proletarian Literary Magazines

An article catalogue database that covers all articles of “Bungei Sensen” was created in this chapter. As a result of totaling the amount of articles that were replaced onto pages and attempting a numerical analysis regarding articles relating to Kankeo as well as the Akita region, there existed a certain amount of articles relating to Kaneko and Akita. After Kaneko became the editor this became more evident. This demonstrates the fact that “Bungei Sensen” in its latter period was greatly supported by Kaneko and those related to Akita.

Chapter 5　Yobun Kaneko and Haiku

Among some of the works of Kaneko that had not received much attention was creating Haikus, which Kaneko had been extremely fond of throughout his life. The many haikus of Kaneko, which were stored with initially no intention of publicizing, were released in a book of his haiku collections, “Omonogawa”, later in his life. This chapter clarified Kaneko’s deep relation with haikus that could be observed in his notebooks left behind. In addition, the debate between Kaneko and local haiku writers that took place on the local newspaper, Akita Sakigake Shinpo, was taken up and its effect was studied.

Chapter 6　Yobun Kaneko and Theatrical Activities –As a Man of Theater

A performance record of Yobun Kaneko was created by extracting staged works that Kaneko was involved in from the data base of Waseda University’s theater archives museum, the Yobun Kaneko documents, and references belonging to Shochiku Otani Library. The year in which dramas written by Kaneko was most performed was 1929, and after that Kaneko shifted his role to director and stage director. It became clear that Kaneko served as a witness of the theater world as he continued to be involved at the forefront of new theatrical activity sites such as Asakusa Opera, Shinkokugeki, Shimpa, and Kabuki.

Chapter 7　Yobun Kaneko and his Hometown –The Existence of Locality

Regions that had influence on his upbringing were studied and two cases of things that Kaneko

brought upon the culture of Akita were focused on. In 1968, Mizuko Sugita, a writer for coterie magazines who lived in Akita, was nominated for the 59th Akutagawa Award. The reason behind this was the existence of Kaneko who had introduced Sugita to Tatsuzo Ishikawa and others who were members of the selection committee at the time. Kaneko also had ties with coterie magazines of Akita and had been attempting to introduce writers of the next generation to the city. Apart from literature, Kaneko also fulfilled his role to link Akita with the city through writing lyrics and composing for the new folk song, "Akita minato no Uta", which was also used in stage theater productions around 1939.

Final Chapter　Conclusion

From materials that describe the life of Yobun Kaneko, it can be observed that he devoted himself to activities for linking the region of Akita with the city. The disparity between the city and local regions was also an important issue within Kaneko, and it met with the ideas of Proletarian cultural movements mentioned in "Tane Maku Hito". While Kaneko became known as a person involved in Proletarian cultural movements, he was also a native writer who reflected Akita in his works. For Kaneko, Proletarian cultural activities were efforts to help people living in local regions lead a happy life.

目　次

第1章　序論 1

第1節　研究目的・背景 1

第2節　研究方法 3

第3節　先行研究 3

第4節　金子洋文について 8

1.金子洋文が育った港町「土崎」 8

2.金子吉太郎から金子洋文へ 10

3.金子洋文の盟友、小牧近江 12

4.『種蒔く人』刊行後の金子洋文 14

第2章　金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に― 16

第1節　金子洋文著『生ける武者小路実篤』 16

第2節　雑誌『白樺』と『種蒔く人』 17

第3節　白樺派の人々と金子洋文との関わり 19

第3章　金子洋文と農民文学 31

第1節　近代文学における都市と農村の位相 31

第2節　農民文学と『種蒔く人』 33

第3節　近代日本の農村の窮乏 35

第4節　『種蒔く人』誌面にみる農民文学 38

第5節　金子洋文「チェホフの『農人』から」にみる農民への共感 41

第6節　畠山松治郎の農民文学―「貧乏人の涙」 44

第7節　金子洋文の農民文学―「地獄」、「赤い湖」 47

第4章　金子洋文とプロレタリア文学雑誌……51

第1節　プロレタリア文化運動史にみる「クラルテ運動」……51

第2節　「クラルテ運動」はどう伝えられたか……52

1.雑誌『種蒔く人』が伝える「クラルテ運動」……53

2.雑誌『種蒔く人』の思想論争……56

3.ロラン対バルビュス……56

4.『種蒔く人』後のクラルテ……60

第3節　『文芸戦線』にみる金子洋文の働き……62

1.雑誌『文芸戦線』全体からみた動き、金子洋文の影響に関する量的調査……63

2.グラフと分析……64

第4節　プロレタリア文芸誌同人としての金子洋文……68

第5章　金子洋文と俳句……71

第1節　金子洋文と俳句との関わり……71

第2節　金子洋文資料にみる俳句―「句と歌と感想」……72

1.「句と歌と感想」……72

2.「俳句随筆」……75

3.『雄物川』にいたる句作の流れ……75

第3節　金子洋文の俳句論争……76

1.秋田地方の俳人……76

2.『秋田魁新報』昭和 10 年(1935)1 月の俳句論争……77

(1) 藤田紫橋の批判……78

(2) 金子洋文の反論……80

(3) 問題点……81

(4) 論争……84

3.まとめ……85

第6章　金子洋文と演劇―演劇人として……86

第1節　演劇人としての金子洋文……86

第2節　『日本現代演劇史』にみる金子洋文……88

第3節　金子洋文上演作品記録一覧……94

1.金子洋文上演作品リストのデータ項目説明……95

2.金子洋文上演作品記録にみる演劇活動の推移……96

3.明治末から大正期の演劇界……100

4.大正から昭和期戦中期―新劇の動向を中心に……101

5.終戦、戦後占領期以降……105

第4節　上演作品記録にみる金子洋文の演劇活動……106

1.初期の浅草での演劇活動……106

2.新国劇との関わり……107

3.金子洋文とプロレタリア文化運動……109

4.戦後の演劇界と金子洋文……112

第5節　作品にみる金子洋文の特色……113

第6節　金子洋文の演劇活動……114

第7章　金子洋文と故郷―地方性（ローカリティ）の存在……115

第1節　はじめに……115

第2節　秋田出身の芥川賞候補作家たち……115

第3節　金子洋文書簡にみる杉田瑞子―土崎ゆかりの作家……119

第4節　金子洋文の郷愁―新民謡……122

第5節　最晩年の金子洋文と秋田……125

第6節　金子洋文資料 129

第8章　結論 131

第1節　本章の目的 131

第2節　金子洋文について 131

第1章 序論 131

第2章 金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に― 131

第3章 金子洋文と農民文学 132

第4章 金子洋文とプロレタリア文学雑誌 132

第5章 金子洋文と俳句 133

第6章 金子洋文と演劇―演劇人として 133

第7章 金子洋文と故郷―地方性の存在 133

第3節　まとめ 134

第4節　今後の課題 136

謝辞

文献リスト

全研究業績のリスト

図表の目次

第１章　序論

（表１）大正元年の秋田県内新聞一覧　（本文 9 頁）

第３章　金子洋文と農民文学

（表 2）『種蒔く人』における農民文学作品一覧　（本文 38 頁）

（表 3）『種蒔く人』における農民、農村に関連する同人記事一覧　（本文 39 頁）

第４章　金子洋文とプロレタリア文学雑誌

（表 4）『文芸戦線』にみるプロレタリア文学運動雑誌の流れ－文戦派と戦旗派を中心に　（本文 62 頁）

（表 5）『文芸戦線』目録内容一覧　（末尾に添付）

（表 6）『文芸戦線』の盛衰と金子の関与　（本文 64 頁）

（図 1）金子の関与状況（雑誌全体に占める金子関与記事の割合）　（本文 65 頁）

（表 7）金子が関与した記事の頁数の推移　（本文 67 頁）

（図 2）記事の頁数分布の推移にみる、金子の関与の質的変化　（本文 67 頁）

（表 8）金子関与記事と秋田関連記事の頁占有率（雑誌全体に対する占有率%）の推移（本文 68 頁）

（図 3）金子関与記事と秋田関連記事のページ占有率の推移　（本文 68 頁）

第６章　金子洋文の演劇活動 ―演劇人として

（表 9）『日本現代演劇史』全篇登場者一覧　（本文 89 頁）

（図 4）『日本現代演劇史』全篇登場演出家上位 8 名の巻別登場数の推移　（本文 93 頁）

（表 10）金子洋文上演作品記録　（末尾に添付）

（表 11）プロレタリア同人誌活動期の演劇活動対比　（本文 98 頁）

（図 5）金子洋文の演劇活動における仕事の推移　（本文 99 頁）

第1章　序論

第1章　序論

第1節　研究目的･背景

金子洋文（かねこ・ようぶん）（本名は金子吉太郎、以降は金子洋文と記す）は、明治 27 年（1894）4 月 8 日、秋田県南秋田郡土崎港町（現；秋田市土崎港）に生まれた。今日では金子が生まれ育った秋田でも、金子の文学作品を読む者はまれで、彼の名はプロレタリア文化運動の魁となった雑誌『種蒔く人』の創刊者のひとりとして記憶されている。

秋田市立土崎図書館には、金子がのこした大量の資料が遺族から寄贈されている。それらに接する機会をもった筆者は、彼の文学作品やその後の演劇活動に触れるに及び、秋田が生んだこの人物の生涯と活動に触発され、当時の人々について関心を持ち、研究をするようになった。多岐にわたる分野で長く活躍していた金子の文化面における活動は、金子の生き方の変化を伝えるものとなっている。金子の 90 年にわたる生涯には、文化における地方と中央の問題や、両者の文化を橋渡ししようとした動きがみられる。本論はこの点に着目して考察を進めるものとする。

金子は大正 10 年（1921）2 月、小学校の同級生だった小牧近江（本名は近江谷駒〔おうみや・こまき〕、以降は小牧近江もしくは小牧と記す）と雑誌『種蒔く人』を創刊した。

雑誌の発行地は彼らの郷里で、人口 2 万人足らずの土崎港町である。後に東京に本拠を移して刊行された。この雑誌は日本のプロレタリア文化運動に寄与したとされ、金子は『種蒔く人』の中心的な人物として評価されている。金子は、関東大震災の折に、軍や警察によって平沢計七ら労働運動家や朝鮮人の殺害が行われた亀戸事件の存在を告発する『種蒔き雑記―亀戸の殉難者を哀悼するために』を執筆した。震災直後には土崎で「号外」を印刷して東京に運び込んでいる。これら時代の証言となった一連の仕事は、軍や警察による白色テロを伝えるという危険なものであった。金子は、事実をもとにしながら、事実として主張するのではなく、ノンフィクション文学ともいえる手法で伝えたのである[1]。文学という表現で伝えることで、文学者が果たせる役割を知らしめたものであった。彼の震災時の一連の活動が、後の『種蒔く人』の評価に与えた影響は大きかった。

---

[1] 『種蒔き雑記』(種蒔き社、1923 年)は、『種蒔く人』の別冊に位置付けられる。その編輯後記に「この記録は総同盟でつくった(亀戸労働者事件調査)から抜粋したものである。」とある。

『種蒔く人』の後継誌として『文芸戦線』を創刊する際に、金子は同人達から編集を任せられ、その終刊の時にも編集を担当していた。『種蒔く人』と『文芸戦線』というふたつの雑誌の創刊と終刊の際の編集に関わった金子は、プロレタリア文化運動を研究する上で注目すべき人物のひとりとなっている。

金子はこの 2 誌のほかにも、大正から昭和にかけて、『解放』、『新潮』、『中央公論』、『太陽』など、多くの雑誌に小説や戯曲作品を発表しているが、小説や戯曲作品を著すだけではなく、新劇、新派、新国劇ら多くの舞台公演にも携わり、自作だけでなく他の作家の作品を演出、脚本化する仕事も数多く手がけている。彼は文学界と演劇界の双方で活躍し、戦中戦後に劇作家、演出家としての活動を続けた。

金子が老齢期を迎えた頃、雑誌『種蒔く人』の見直しが行われた。「ナップの眼鏡をはずせ」で広く知れわたった小田切秀雄（1916-2000）の主張は、それまでの共産党系のナップ（ＮＡＰＦ）[2]の機関誌である雑誌『戦旗』のみをプロレタリア文学の主流とする見方から脱却させ、その後の文学史観を大きく変える。「昭和初年のあらゆる進歩的文学・文化運動の源流がここにある」（小田切秀雄『私の見た昭和の文学と思想の五十年（下）』集英社、1988 年）と評されることになった。

『種蒔く人』の再評価が行われた過程で、小田切秀雄は雑誌『種蒔く人』を昭和 36 年（1961）に復刻している[3]。復刻にあたっては、小牧近江、金子洋文、今野賢三といった土崎出身の『種蒔く人』同人たちが協力している。戦記復刻刊行委員会が昭和 58 年（1983）に『文芸戦線』を復刻した際にも、金子は保存していた原資料を提供している。

彼らがのこした資料についていえば、今野の資料は、「種蒔く人」顕彰会が収集し、秋田県立図書館と秋田市立土崎図書館に収蔵された。小牧がのこした資料の多くはあきた文学資料館に託され、金子の資料については、彼の死後、遺族から秋田市立土崎図書館に寄贈された。この資料について、直接金子との交わりがあった日本文学研究者の分銅惇作（1924-2009）が次のように述べている。

> 家に丹念に資料を保存しておられる。明治四十一年に上京した頃、電気屋の小僧をやっておった頃から資料がチャーンと張っているんです。おそらく少年の頃から何か期するところがあったんじゃないかと思ってますけれと（ママ）も、これほど丹念に資料を保存している人は珍しいんじゃないでしょうか[4]

---

[2] 全日本無産者芸術連盟のエスペラント語 Nippona Proleta Artista Federacio の頭文字からの略称がナップ。機関誌が『戦旗』。
[3] 昭和 36 年（1961）1 月 28 日付小牧から金子宛の手紙（秋田市立土崎図書館所蔵）に、小田切秀雄から雑誌全巻復刻へ協力依頼があった事が伝えられている。
[4] 分銅惇作「金子洋文その人と文学ー『種蒔く人』55 年記念講演会特集Ⅱ」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）25-35 頁。

分銅によれば、その資料のおかげで『金子洋文作品集（一）（二）』（筑摩書房、1976 年）に載せた「金子洋文年譜」を作るには困らなかったという。

一部見当たらない年代[5]はあるが、金子の広い交際範囲、周囲との繋がりの深さを伝える書簡類をはじめ、原稿、草稿、新聞の切り抜き、舞台や映画の台本、雑誌、プログラム、写真等その数は一万点を超える。彼宛ての書簡は、明治 41 年(1908)に高等小学校を卒業した後に上京し、山本電営舎に就職した 14 歳から晩年にいたるまでのものが保存されており、少年期から大切に保管していたことが知られる。近代から現代を生きた金子に関する資料群であるだけでなく、近現代という時代の動向を伝える資料でもある。

金子の出身地である秋田では、『種蒔く人』を顕彰する活動がかねてから行われ、節目ごとに記念行事が開催されてきた。これらの活動は、当時を知る者や、当時の同人たちを直接知る者たちによる顕彰にとどまっていた。当時を知る者がいなくなりつつある現在は、記憶だけではなく、記録から、すなわち、彼等がのこした資料を活用した検証を含めた相対的な評価が必要な時期に入っている。

本稿では、金子の文化活動を、改めて問いなおすことを目的とした。プロレタリア文化運動に深く関わり、文学・演劇の世界で活躍してきた金子の仕事がどのようなものであったのか、一次資料を中心に考察を加え、金子の業績を実証的に検証し、金子が果たした文化活動の意義について明らかにする。

第2節　研究方法

本稿は、秋田市立土崎図書館「種蒔く人」資料室に保管されている、金子洋文に関する資料を通して彼の活動を検証し、農民文学、プロレタリア文芸同人誌、演劇、俳句といった多岐にわたる創作活動をテーマ別に分析する。そのために金子に関する文献資料調査を行い、各種のデータベースを作成して、彼の活動について量的解析も含め、各分野ごとにその活動の相対的な評価を行う。

第3節　先行研究

金子洋文研究にとって、土崎小学校の同級生小牧近江と創刊した雑誌『種蒔く人』は重要な意味を

[5]『種蒔く人』を刊行していた頃の手紙はない。昭和 12 年(1937) 12 月 15 日の人民戦線事件の際の報道で、金子は次回の逮捕者と予想されていた。逮捕される覚悟と用意をしていたが、結果として翌年 2 月 1 日の第二次検挙は免れている。

もつ。文学研究者の小田切秀雄が「昭和初年のあらゆる進歩的文学・文化運動の源流がここにある」[6]と評した雑誌『種蒔く人』だが、所持しているだけで危険分子の証と目されていた時代が長く、この雑誌についての研究が始まったのは、戦後からである。それまでは記憶の中で語られ、研究者の間ではいわば伝説と化していた。昭和 28 年（1953）に、前述の小田切秀雄が、従来の近代文学研究が、日本共産党よりのプロレタリア文学史観に結びついているとし、後に「ナップの眼鏡を外せ」で知られる文学史観の見直しを提唱した「退廃の根源について―日本近代文学の場合」[7]を発表し、『戦旗』登場以前にさかのぼった文学研究が活性化した。稲垣達郎が「近代日本における政治と文学の交流―再刊「種蒔く人」細目(未定稿)」[8]で『種蒔く人』内容目録を作成し、「日本の文芸雑誌―「種蒔く人」」[9]を 3 回に分け『文学』（岩波書店、1958 年）に掲載した。稲垣は土崎版の存在などを含め、この雑誌の詳細を伝えていた。当時は、雑誌同人たちによる数多くの回想的記録が、研究に先行して行われていた。日本近代文学館の設立に努め、後に理事長となった小田切進は、多方面から近代文学を分析した結果、「『種蒔く人』の出発」『昭和文学の成立』（勁草書房、1965 年）で、この雑誌を昭和の文学のはじまりと位置付けている。秋田在住の文学研究者である野淵敏、雨宮正衛による『秋田県大正文芸史の研究―「種蒔く人」の形成と問題性』（秋田文学社、1967 年）は、小牧に取材した成果を伝えている。佐々木久春は、秋田県土崎港町出身の同人達が主要同人であることに着目し、同誌を風土性からとらえることを試みた「東北の文芸における二つの型--「種蒔く人」と宮沢賢治の場合」[10]を著した。佐々木は後に土崎出身の同人、今野賢三の土崎時代の日記を解析した『花塵録 ―「種蒔く人」今野賢三青春日記 』(無明舎出版、1982 年) を刊行している。北条常久は土崎出身の同人達に着目し『『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―』（桜楓社、1992 年）を上梓した。この中に含まれている金子についての作家研究、作品研究の詳細は、後に述べる。『種蒔く人』研究は、国際共産主義運動、クラルテ運動と同誌の関係など、多面的な広がりをみせている。日本の社会・労働文学研究に携わっている大和田茂は、『社会運動と文芸雑誌―『種蒔く人』時代のメディア戦略―』（菁柿堂、2012 年）で、近年の大正期・昭和初期の社会文学研究動向をまとめている。雑誌『種蒔く人』に関する研究は、これまで多く行われており、創刊来の同人でかつ主要作家であり、かつ、この雑誌の声望を高めた関

---

6 小田切秀雄『私の見た昭和の文学と思想の五十年(下)』(集英社、1988 年)245 頁。

7 「退廃の根源について―日本近代文学の場合」『思想』351 号(岩波書店、1953 年) 1061-1069 頁。

8 稲垣達郎「近代日本における政治と文学の交流―再刊「種蒔く人」細目(未定稿)」『人文科学研究』11 巻(早稲田大学人文科学研究所、1952 年)73-150 頁。

9 稲垣達郎 「日本の文芸雑誌―「種蒔く人」」『文学』26 巻 1 号、3 号、5 号(岩波書店、1958 年)。

10 佐々木久春「東北の文芸における二つの型--「種蒔く人」と宮沢賢治の場合」『秋田大学教育学部研究紀要. 人文科学・社会科学』21 号(秋田大学教育文化学部、1971 年)101-113 頁。

東大震災時の軍や警察による殺害を伝えた金子について触れられている[11]。それに比べ各同人の個人研究は進んでいない。作品に触れる機会が少ないことに加え、調査そのものが困難であることにもよろう。

金子は自らを語る人であった。自ら話す機会が多かった金子を前に、研究者が金子をとりあげることには制約や難しさがあったと考えられる。以下に金子を対象とした研究について、執筆者ごと、初出年代順に述べていく。

まず、日本近代文学研究者、分銅惇作の研究がある。前述の「金子洋文年譜」は、金子洋文研究の基礎的なものとなっている。ただし、この年譜が編まれたのは 1976 年 7 月であり、金子が亡くなるまでの約 10 年間の空白がある。分銅は、金子の人物像と、その作品を概説した「金子洋文その人と文学」[12]で、その目録作成の折に金子が保管してきた資料について紹介している。「「種蒔く人」と金子洋文」[13]では、金子の作品について、戯曲『雄物川』を軸に、小説や戯曲など多くの作品評論も含め、まとまった金子洋文作品論を展開している。これらは金子洋文研究の基礎的な位置をしめている。

熊木哲は、「金子洋文の思想形成について―＜電営舎時代＞から＜日本評論時代＞まで―《附》金子洋文著作目録」[14]で、『種蒔く人』以前の金子作品をとりあげて金子本人の発言を実証、補足した。論末に、大正 7 年（1918）5 月までの著作目録を付している。「金子洋文―「種蒔く人」創刊以前について―」[15]は、「民本主義」を唱えた茅原華山に傾倒し『日本評論』に就き、武者小路実篤の我孫子の家を退去した金子の動きを辿り、浅草オペラの脚本書きをしていた金子の作品を明らかにしている。「金子洋文「外務省の一室」をめぐって―《附》金子洋文著作目録稿（大正九年迄）」[16]では、作品集にも未収録の作品をとりあげ、前論に続いて大正 7 年（1918）から 9 年の目録を加えた。一連の論文で、雑誌『種蒔く人』創刊以前の金子の創作を時代ごとに特徴を述べて、初期の創作を論じている。

北条常久が著した「金子洋文の文学的出発」[17]は、金子の秋田在住時を、地方新聞『秋田魁新報』、大正期の雑誌『第三帝国』、『洪水以後』の掲載から、初期文学の傾向を探ったものである。北条は「金

---

11 たとえば、森山重雄は、大正期労働文学や民衆芸術論からプロレタリア文学を繋ぐ第四階級の文学の例として、雑誌『種蒔く人』土崎版の作家 3 人の作家論と当時の作品をとりあげている。森山は、金子作品には新旧の対立と庶民の明るさがあり、震災以前の作品に彼の本領が現れているとしている。「「種蒔く人」の作家」『序説転換期の文学』（三一書房、1974 年）186-219 頁。

12 分銅惇作「金子洋文その人と文学」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）25-35 頁。

13 分銅惇作「「種蒔く人」と金子洋文」『悲劇喜劇』31 巻 7 号（早川書房、1978 年）8-16 頁。

14 熊木哲「金子洋文の思想形成について―＜電営舎時代＞から＜日本評論時代＞まで―《附》金子洋文著作目録」『中央大学大学院論究　文学研究家篇』10 巻 1 号（中央大学大学院生研究機関誌編集委員会、1978 年）29-42 頁。

15 熊木哲「金子洋文―「種蒔く人」創刊以前について―」『九州大谷研究紀要』8 号（九州大谷学会、1981 年）37-60 頁。

16 熊木哲「金子洋文「外務省の一室」をめぐって―《附》金子洋文著作目録稿（大正九年迄）」『九州大谷研究紀要』9 号（九州大谷学会、1983 年）28-42 頁。

17 北条常久「＜論文＞金子洋文の文学的出発」『聖霊女子短期大学紀要』17 号(聖霊女子短期大学、1989 年)107-115 頁。

子洋文の「赤い湖」論」[18]で、プロレタリア文学の「目的意識論」と劇手法を繋げようとして「赤い湖」が生み出されたと論じた。さらに「金子洋文の「古川町モノ」」[19]で、金子の「赤い湖」以来のプロレタリア文学作品をとりあげ、土崎版の同人だった畠山松治郎が社会主義運動から脱退したため、金子が立候補し落選した、昭和5年（1930）普通選挙以降の作品にある社会主義的主張を取上げ、出身地古川町を描こうとしていたと推測している。畠山については、本論第 3 章で詳しく述べている。「金子洋文「地獄」自筆原稿をめぐって」[20]は、自筆原稿の伏せ字を金子本人に確認した上で読み解いた「地獄」の作品論である。「金子洋文の戯曲と演劇活動」[21]は、懸賞脚本に応募した初期の「袈裟と盛遠」、「村の慈善会」から、金子の脚本についてとりあげている。以上は、北条の『種蒔く人研究ー秋田の同人を中心として』（桜楓社、1992 年）にまとめられており、金子の原資料も活用しつつ金子の文学作品と土崎時代の同人たちとの関わりを論じている。

分銅惇作と北条常久は、生前の金子と交流があった文学研究者で、彼らの研究が現在も基本となっている。熊木哲は金子が語った内容から、初期の金子作品を実証的に研究し、より詳細な著作目録の作成を進めた。

茅原健は「若き日の金子洋文―茅原華山との邂逅をめぐって―」『茅原華山と同時代人』（不二出版、1985 年）で、大正期の言論雑誌『第三帝国』の主筆で、「民本主義」という概念を初めて提唱した茅原華山（1870-1952）と金子との関わりをとりあげ、『第三帝国』、『日本評論』に掲載の金子の執筆記事を明らかにした。後に大杉栄によって「自由民権の寺子屋」と評された『第三帝国』は土崎港町出身の石田友治（1881-1942）と茅原崋山が創刊した雑誌で、当時地方青年から熱烈に支持されていた[22]。

大正デモクラシーに影響をもたらした雑誌『第三帝国』に着目した水谷悟は「雑誌『第三帝国』と金子洋文―「種蒔く人」の思想形成」『年報日本史叢 2002』（筑波大学歴史・人類学系、2002 年）で、土崎在住時の金子が茅原華山との関与があり、思想的な影響を受けていたことを明らかにした。

『秋田魁新報』の記者であり、同人文芸誌『文芸秋田』などでも生前の金子と交流があった千葉三郎は、土崎図書館に寄贈された金子洋文の資料を活用しつつ、「宛書簡に見る金子洋文」『「種蒔く人」

---

18 北条常久「金子洋文の「赤い湖」論」（『昭和文学研究』第21集（昭和文学会、1989年）初出未見、『「種蒔く人」研究－土崎の同人を中心に』（桜楓社、1992 年）181-196 頁。

19 北条常久「＜論文＞金子洋文の「古川町モノ」」『聖霊女子短期大学紀要』18 号（聖霊女子短期大学、1990 年）72-79 頁。

20 北条常久「金子洋文「地獄」自筆原稿をめぐって」『日本近代文学』第 28 集（日本近代文学会、1981 年）初出未見、『「種蒔く人」研究－土崎の同人を中心に』（桜楓社、1992 年）160-180 頁。

21 北条常久「金子洋文の戯曲と演劇活動」『日本文芸思潮論』（桜楓社、1991 年）初出は未見、同論文『種蒔く人研究―土崎の同人を中心に―』（桜楓社、1992 年）197-216 頁。

22 『第三帝国』については、松尾尊兊『大正デモクラシー』（岩波書店、1974 年）が詳しい。同著者の解説する『第三帝国＜解説・総目次・索引＞』（不二出版、1984 年）によれば、主張においてもっとも先鋭であり、かつインテリよりも亜インテリに、帝大生よりも私大生に、中央の都会人よりも地方の住民に好んで読まれる特色があった。読者には、金子以外に鈴木茂三郎、佐々木味津三、尾崎士郎ら、地方在住の若者達かいた。

の精神 ： 発祥地秋田からの伝言』（「種蒔く人」顕彰会、2005 年）を著し、土崎在住の時から我孫子に移住するまでの金子の実人生と文学上の活動を追っている。

須田久美は、「金子洋文の＜眼＞―『種蒔く人』のころ」『日本文学研究』22 号（大東文化大学日本文学会、1989 年）で、『種蒔く人』掲載の作品から眼のモチーフを読み取った作品論を展開している。「『神々のへど』から『兄いもうと』までを見る」『室生犀星研究』9 輯（室生犀星学会、1993 年）は、室生犀星の原作「あにいもうと」が収録された本の書名『神々のへど』が、「兄いもうと」という題で金子によって脚本化され、人気を博したことから、本の題に変遷が生じていったことを述べている。「金子洋文の恋―習作期の作品から」『日本文学論集』18 号（大東文化大学大学院日本文学専攻院生会、1994 年）は、秋田の地方紙に掲載された金子の投稿作品を調べ、当時の金子の様子を詳述している。「金子洋文と茅原華山および武者小路実篤に関する一考察」『日本文学研究』33 号（大東文化大学日本文学会、1994 年）は、茅原健の研究を受け、金子資料で発見した新聞切抜から、土崎小学校代用教員時代の『華山と無車』と題した新聞連載で金子が両者を対比していた事を明らかにしている。「秋田在住期間・金子洋文著作目録稿」『日本文学研究』34 号（大東文化大学日本文学会、1995 年）は、初期の金子の創作を調査し、熊木の先行目録稿に追加・補足している。「金子洋文の児童向け読み物」『『種蒔く人』の潮流：世界主義・平和の文学』（文治堂書店、1999 年）は、『種蒔く人』前後の金子の出版物を調査、紹介したものである。「青年期の金子洋文―茅原華山、武者小路実篤からの訣別」『フロンティアの文学 雑誌『種蒔く人』の再検討』（論創社、2005 年）で、茅原華山と武者小路実篤と金子洋文の関係について、須田は、武者小路との訣別を公けにした一方、茅原との関係は公けにもできないものとして意図的に表されなかったと結論づけしている。「『種蒔く人』以前の金子洋文―習作期概観」『「種蒔く人」の精神： 発祥地秋田からの伝言』（「種蒔く人」顕彰会、2005 年）では、秋田の地方新聞を調査した結果をまとめて報告している。「金子洋文宛て川端康成書簡 ：〔全集未集録〕秋田市立土崎図書館蔵」『川端文学研究』22 号、川端文学研究会編（銀の鈴社、2007 年）では、川端康成からの金子宛書簡を紹介し、金子が同人誌に影響力があったことを明らかにしている。須田は、土崎図書館所蔵の金子洋文関係資料から、金子と文学創作との関わりを明らかにした論文を著しているが、これらは『金子洋文と『種蒔く人』―文学・思想・秋田』（冬至書房、2009 年）にまとめられている。同年、金子の短篇作品数篇を編集した『金子洋文短編小説選』（冬至書房、2009 年）を刊行しているが、その巻末に分銅惇作製作の年譜に、自らの調査の成果である土崎時代の事績を加え、より詳細な「金子洋文年譜」を掲載している。

このように従来行われてきた金子洋文研究の多くは、文学研究から取り組まれ、特定作品を対象にしたものか、期間を初期もしくは昭和前半までとしたものが大半である。土崎在住時代からの『種蒔

く人』としての思想形成にかかわる研究や、代表作『地獄』、『赤い湖』や戯曲『兄いもうと』など金子の文芸思想とその内容を分析した作品研究であった。結果として金子の研究と評価については、27歳の時に創刊した『種蒔く人』の3年間、もしくはそれ以前が多く、『種蒔く人』からのプロレタリア文学運動関連に偏りがちであった。プロレタリア文学以外の広範な文化的活動を含めた金子の活動を、一連の流れとしてとらえる試み、そこに流れる一貫した社会観、歴史観をまとめ、彼の思想で変わらぬものは何があったのか、という視点からの取り組みはされてこなかったのである。

第4節　金子洋文について

本論に入る前に、金子洋文の生涯について簡単に述べておくこととする。金子には、自伝ともいうべき『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）という随筆がある。以下の記述は主にそれによるが、それ以外の引用については出典を付記する。

金子は明治 27 年（1894）、秋田県南秋田郡土崎港古川町雄物 2 番地に生まれた。本名は金子吉太郎、金子子之松とヨシの 4 番目の男子であったが[23]、戸籍上では 5 男となっている。古川町は雄物川が運んできた砂で形成された海に面した場所である。雄物川が家のすぐ前を流れていた。

1.　金子洋文が育った港町「土崎」

土崎は、船乗りの中継地点として歓楽街[24]、寺社などを構えた交易の町で、多くの人びとは港を関わる仕事を生業にした。遠来からの言葉も習慣も異なる人を相手にしたやりとりは、都会からの物資とともに情報をもたらした[25]。農業に従事する周囲の村落とは異なる生業であった土崎の住民は、周囲とは異なる生活空間にあり、異なる風俗習慣をもっていた。北前船が寄港する歓楽街を要する港町であるということは、異なる地域に育った者たちとコミュニケーションをする必要があり、知識を必要とし、新しいことへの関心は強くそれが土崎という町の文化を形成していった。周辺地域住民との違いが大きかった土崎港町の住民は、結束が必要とされ、まとまっていった。他との違いを強く主張し、対抗する必要があったのである。明治期の土崎港町には商港（みなと）町の経済力を背景に、か

23　金子は早くに亡くなったふたりを数えて 11 人兄弟、当時の家々によくみられる数字で子沢山と死亡率の高さを伝えている。また、日付や名前、名義など、当時の戸籍手続きは現代ほど厳密ではなかったことから、事情に合わせて記されていた。実際はふたりの兄とひとりずつの姉と弟、妹4人である。これだけの子供達を育てる家計は厳しく、成人後にも金子が兄弟姉妹をたびたび援助していた。

24　往時は土崎に百人位の芸者衆がいたという(談);料亭「池鯉亭」(明治 4 年開業)三代目の越中谷太郎氏（土崎史談会長）談。大地進『黎明の群像－苛烈に生きた「種蒔く人」の同人たち－』(秋田魁新報社、2002 年)32 頁。

25　土崎の住民の名字に、日本海側の地名が多く、宗派の異なる寺社仏閣があることは、土崎の外からこの地についた人が少なくなかったことを証している。

っての城下町から県庁所在地となった久保田（秋田）に対して、郡庁所在地としての対抗意識をもつ独特の住民気質が形成されていた。

そのひとつのあらわれとして、土崎は、人口に比べ新聞の発行部数が県内の他都市と比較しても飛び抜けて高かった事をあげたい。明治末期の秋田市の戸数は 6,181 戸、南秋田郡は 18,711 戸、その内土崎港町は 2,578 戸である（明治 43 年「『秋田県戸口統計』)。そして土崎港町の 3 割以上の 881 戸が商業を生業とし、744 戸が工業、501 戸が日雇い労働者である（『南秋田郡町村要覧』[26]）。土崎周辺の南秋田郡の他地区では農業従事が 4～5 割となっていた。

（表１）大正元年の秋田県内新聞一覧

誌名	発行地	発行頻度	年内頒布数（部）	１回頒布数（部）
秋田新報	秋田市大町一丁目	日刊	10,851,774	29,730.9
秋田時事	秋田市大町二丁目	日刊	7,715,500	21,138.4
秋田毎日新聞	秋田市中長町	日刊	1,238,070	3.392.0
秋田実業週報	秋田市土手長町上丁	月 3 回	9,840	273.3
秋田石油ｱｽﾌｧﾙﾄ時報	秋田市茶町扇ノ丁	月 2 回	6,005	250.2
秋田県教育雑誌	秋田市土手長町中丁	月 1 回	19,586	1.632.2
北羽新報	山本郡能代港町畠町	日刊	34,200	93.7
本荘時報	由利郡本荘町中町	月 3 回	35,000	972.2
仙北新報	仙北郡大曲町大曲	月 3 回	54,000	1,500.0
羽後新報	平鹿郡横手町上丁	日刊	122,420	335.4
実業之増田	平鹿郡増田町増田本町	月 1 回	2,400	200.0
北辰公論	北秋田郡大館町字弁天町	月 3 回	1,200	33.3
阿仁新報	阿仁合町銀山	月 1 回	400	33.3
能代商法新報	山本郡能代港町畠町	月 2 回	3,700	154.2
土崎商業新報	南秋田郡土崎港町旭町	週 1 回	152,262	2,928.1
土崎商報	南秋田郡土崎港町酒田町	週 1 回	5,000	96.2
県南商業	平鹿郡角間川町	月 2 回	2,000	83.3

[26] 秋田は『秋田県戸口統計』(秋田県内務部庶務課、1910 年)、南秋田郡の数値は『秋田県南秋田郡町村要覧　大正2年4月1日現在』(南秋田郡役所、1913 年)による。

『秋田県史県治部第二冊教育篇』(秋田県、1917 年)より作成。※発行に土崎が関与する新聞に着色。
※1 回頒布数は、年内頒布数を発行頻度で割った平均部数。小数点一桁以下を四捨五入で計上した。

日刊の『秋田新報』は後の『秋田魁新報』である。『秋田時事』は、大正 6 年(1931)7 月 5 日で廃刊された。『秋田毎日』は、明治 44 年 (1911) 9 月 11 日創刊で、土崎築港整備促進を目的に秋田で刊行されたもので、土崎の県議たち村山喜一郎、金子為吉が中心となっていた。大正期は『秋田魁新報』と双璧をなしていたが、昭和 10 年(1935)春には、廃刊となった新聞である。

秋田県内では、県政を知らせる機能として期待されて新聞が創刊されたという経緯からもわかるように、県都秋田の発行が多いことは当然として、土崎港町系の新聞の発行が多く、それによる情報の伝達が群を抜いて盛んであったことが当時の数字からもわかる。明治末の土崎の人口は1万6千人で、戸数約 2,600 戸であった。戸数を上回る『土崎商業新報』の部数からすると、土崎以外の相当な数の人間が新聞を読んでいたことになる。活発な商業活動によって外部との往来が多かったこと、知的好奇心を活性化させる環境がこの土地にあったということが、この数からもうかがえるのである。

明治に生まれ、日本海に面した地方の港町に少年時代を過ごしていた金子洋文や小牧近江たちは、こうした土崎の環境のなかで育った。この頃の土崎からは、世界とのかかわりを持つ分野で、日本を代表するような仕事をする人材が巣立っている。土崎小学校の出身者というだけでも小牧をはじめ、金子の 5 歳年長には、『和独大辞典』を編纂した木村謹治(1889-1948)、4 歳上には世界的な仏教学者となった多田等観 (1890-1967)、2 歳上には、日本の秘密諜報機関「東」を組織したスペイン公使の須磨弥吉郎 (1892-1970) がいた。彼らが成し遂げた仕事には、いずれも海外の情報と深いつながりをもつという共通点がある。

2. 金子吉太郎から金子洋文へ

金子の実家は附船回船問屋(つけふねかいせんどんや)を営む中流の家であったが、明治 35 年(1902)に鉄道が開通すると船の利用は減少し、港を中心とした町の経済は悪化する。金子の家も経済的理由で小間物店など、度々商売替えをすることとなり、家計は苦しくなった。そのために洋文は新聞配達をして収入を得ながら高等小学校を卒業したが、学校の成績は優秀だった。卒業後は町の名士だった小牧の父、近江谷栄次 (1874-1942) の推薦で、東京の山本電営舎の見習工となった。金子は後年、当時について次のように述べている。

この時期、休日には富士見町にいって小牧らと遊んだ。雑誌をだしてみる。ベースボールをやる。

近江谷家は我々を差別しないんだ。この二年近い、小牧との一週間に一度の結びつきがなかったならば、『種蒔く人』は、生まれなかったと思う[27]。

「二年近い、小牧との一週間に一度の結びつき」で遊んだという中には、雑誌を作ることがあった。当時、国会議員であった小牧（＝駒）の父、近江谷栄次は息子だけでなく、自らの実家である畠山家を始めとする親族の子弟たちの大勢を東京の学校に通わせていた。金子のいう「差別をしない」家の人達の中には、後に『種蒔く人』土崎版の同人となる、畠山松治郎と近江谷友治もいた。金子は後に「小牧が赤くなって帰ってきたので困っている」という栄次の話を聞く機会を得て、外務省勤めの小牧に連絡を取ったという。意気投合し、その日のうちに雑誌『種蒔く人』創刊が決まったのであった。

満 30 歳で衆議院議員に初当選した近江谷栄次は、かねてからのフランス贔屓で、子どもや眷属 11 人を、フランスのカトリック系のマリア会の宣教師たちが運営する東京の暁星学園に進学させていた。駒も暁星中学で寄宿生として学んでいた。明治 43 年（1910）に、ベルギーのブリュッセルで開かれた万国議員会議に出席する代議士の父に連れられて、17 歳でヨーロッパへ渡り、10 年間を過ごす。

金子の東京での電気屋勤めは 2 年未満で終わる。学費を工面するという長兄の手紙を受けて、山本電営舎を退職したあと明治 43 年（1910）、秋田工業学校（現；秋田県立秋田工業高校）に 16 歳で入学した。しかし、あてにしていた兄からの援助は思ったほど得られず、このときもまた新聞配達をしながら秋田工業学校機械科を卒業した。

卒業後は 3 年間、郷里の母校である土崎小学校で代用教員をつとめるが、当時の制度では師範学校を卒業しないと正規な教員になれないこともあって、仕事にやりがいは感じながらも将来の不安をかかえていた。

この代用教員をしていた時代に、金子は積極的に地元雑誌や新聞に金子洋文の名で投稿し、将来文章を書くことで生きることを意識し、具体的な行動をとるようになっていった。当時の土崎港町は、周囲の村落よりはるかにひらけた環境にあり、港に出入りする船や人びとがもたらす新しい情報に恵まれていた。同人誌、新聞などの発表の場がいくつかあった。土崎港町出身の石田望天（本名；石田友治）（1881-1942）が大正 2 年（1913）から 7 年（1918）まで刊行した『第三帝国』[28]には、本名である金子吉太郎の名で投稿している。この雑誌には読者の投稿欄があり地方の青年たちの投稿が数多

---

27 金子洋文「講演－『種蒔く人』55 周年記念講演会特集－（1976 年、於秋田市協働社大町ビル）」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）11-19 頁。

28 『第三帝国』は、大正 2 年（1913）10 月 10 日創刊、大正 4 年（1915）11 月 11 日の 57 号を最期に茅原の『洪水以後』と石田の『新理想主義』とに分かれる。『中央公論』大正 4 年（1915）12 月号に「茅原華山論」で大杉栄はこの雑誌を「新しい意味での自由民権の寺小屋」と評している。石田の『新理想主義』は翌年 7 月 1 日、70 号において旧誌名『第三帝国』に復して大正 7 年（1918）11 月の 100 号をもって『文化運動』と改称し、大正 15 年（1926）4 月に 156 号で廃刊した。

く掲載されている。

大正 4 年（1915）、土崎港町出身の石田望天の一行が秋田に来たとき、金子は、石田とともに雑誌『第三帝国』を創刊した茅原華山（1870-1952）の知己を得ることができた。そして翌大正 5 年（1916）には、代用教員の職を辞して、茅原が関係している出版社に就職するために上京した。これは金子にとって大きな転機となった。読書を通して敬愛していた武者小路実篤（1885-1976）と知り合うきっかけとなったからである。そして翌年には、我孫子にあった武者小路の家に家庭教師として寄寓することができ、白樺派の人たちの謦咳に接することができた。当時、我孫子には武者小路をはじめ、志賀直哉、柳宗悦たちが住んでおり、彼らと毎日のように交流していた。このことは金子の歩む道に大きな影響をあたえた。金子は自伝のなかでこう述べている。

> ここにいる間、私は一度も貧富の差や階級の差別を感じなかった。平等であり、自由であり、しかも人間関係の暖かさにあふれていた。私は武者夫妻と一しょに、よく志賀さんの家へ遊びに行ったが、一度も差別や不快を感じたことがなかった。まったく友人にひとしい扱いであり、口ではそれといわないが、見事なデモクラシーが花と開いていた[29]。

我孫子の武者小路宅に金子がいたのは半年であったが、この経験は電気工時代に身元をひきうけてくれた東京の近江谷家の人々との交流とともに、金子にとっては得難いものとなった。そしてこの時期を経た後、東京で新聞記者をしながら創作活動を続けていた金子の前に、長らくパリへ行っていた小学校時代の友人、小牧近江があらわれ、クラルテという思想を金子に伝えた。それが『種蒔く人』の創刊と深く結びついてくる。金子について考えるにあたって、小牧の存在と『種蒔く人』という雑誌のふたつは重要な位置を占めている。

3. 金子洋文の盟友、小牧近江

小牧近江は明治 27 年（1894）5 月 11 日に金子と同じ土崎港町で生まれている。父、近江谷栄次と共にシベリア鉄道経由でフランスにつき、パリの名門校アンリ 4 世校に寄宿生として入学した。だが帰国した父の事業失敗から、送金も途絶え、授業料が滞納となり放校になってしまった。逓信省から在仏大使館へ出向してきていた人の斡旋でホテルを確保した後、保証人シャントローの友人の世話によって、パテ商会で働きはじめる[30]。やがて父の知人であった石井菊次郎大使のつてで、大使館で仕

---

29 金子洋文『種蒔く人伝』(労働大学、1984 年)42 頁。
30 小牧近江『ある現代史』(法政大学出版局、1965 年)23 頁。

事をすることができた。小牧はこうして働きながら、パリ大学法学部で民法を学び、卒業している。

小牧は第一次世界大戦にパリで遭遇することになった。これらの経緯については、『異国の戦争』(日本評論社、1930 年。後、かまくら春秋社、1980 年）や『ある現代史―“種蒔く人”前後―』（法政大学出版局、1965 年）に詳述されている。小牧は、大正 8 年（1919）1 月に「パリ講和会議」がはじまると、代表団の現地雇員として、はじめはフランス人運転手たちの取りまとめ役を命じられ、やがて外務省から来た松岡洋右が率いる新聞係の一員として働くことになった。

ドイツの賠償問題、民族自決、国際連盟の創設などを決めたパリ講和会議は大正 8 年（1919）6 月 28 日をもって終わり、日本代表団は帰国したが、小牧は、その後もパリに残った。

彼はパリ講和会議が終わって間もない同年 10 月、旧知のスヴェリーヌの尽力で、フランス滞在中の吉江喬松とともに、「ル・ポピュレール」社の 3 階にあった「クラルテ」社を訪れて、アンリ・バルビュスに面会した。この時のバルビュスの様子や彼が語った言葉を、小牧は後年自著の『異国の戦争』で伝えている。戦争中フランスの作家たちは何をやったかと口火を切ったバルビュスは、思想の国際化・インターナショナルの必要性を語り、「労働者には労働者の、農民には農民の、兵士には兵士の任務があるように、思想の鉾（ほこ）もまた世界的に結束されなければならない」と説いたという[31]。

この会見から小牧はこの運動を日本にも広めようと決心した。12 月末に帰国してすぐの翌年 1 月に、九州に武者小路を訪ね、クラルテ運動について伝えている[32]。

帰国後の小牧はパリ時代の縁で、翌大正 9 年（1920）外務省情報局に嘱託として採用され、そのかたわら小学校以来の友である金子と東京で会い、仲間たちで雑誌を出すことになる。ふたりは郷里の友人今野賢三を誘い、さらに近江谷友治、畠山松治郎らを加えて、故郷土崎港で菊版 18 頁の小冊子を刊行した。これが日本のプロレタリア運動の魁となった雑誌、土崎版『種蒔く人』である。創刊号は大正 10 年（1921）2 月、部数は 200 部であった。編輯兼発行人は近江谷駒（小牧近江）、印刷人は寺内林治、印刷所は秋田県南秋田郡土崎港清水八九の寺林印刷所、発行所は種蒔き社、定価は 20 銭だった。

小牧は、幸徳秋水の大逆事件をはじめとする社会主義に対する厳しい弾圧を、身をもっては知らなかった。検閲下の日本では「革命」という言葉はもとより、「社会」という言葉すら危険な言葉となりつつあった。雑誌を刊行するにあたって、金子はこうした社会の状況が分かっているよき相手だった。しかも方言訛りを意に介さずに通じる友でもあった。後に小牧は金子を「天が洋文を私に授けたので

---

31 小牧近江『異国の戦争』(かまくら春秋社、1980 年) 219-222 頁。
32 小牧近江『種蒔くひとびと』(かまくら春秋社、1978 年) 55-58 頁。

す」と語っている[33]。

帰国直後の彼には、日本語よりフランス語で書く方が容易であり、事実、『我等』3 巻 8 号の、「クラルテについての運動と日本の思想」の原稿は大山郁夫に直してもらい、『解放』掲載の「インターナショナルの歴史」は、小牧に聞いた事実を金子が書いた[34]。

金子にとっては、小牧がフランスから持ち帰ってきた思想は新鮮なものであり、それを日本で普及させる仕事はやりがいのあるものに思えた。大震災後、他の雑誌がとりあげなかった朝鮮人虐殺の事実や、亀戸事件をあえて雑誌の号外でとりあげたのは、「誰もいなければ二人でやる」[35]（「『文芸戦線』をめぐって」『唯物史観』、1975 年）という思いからであった。こうして培われたふたりの交わりは、小牧が死去するまで続いた。

『種蒔く人』の刊行は、「帝都震災号外」、そして別冊『種蒔き雑記―亀戸の殉難者を哀悼するために』の発行をもって終わったが、亀戸事件を告発した別冊号は、金子が執筆したものである。

4. 『種蒔く人』刊行後の金子洋文

『種蒔く人』の後継誌として、『文芸戦線』、『文戦』、『レフト』、『新文戦』が刊行されて、それぞれがプロレタリア文学の重要な発表の舞台となったが、金子はその編集の中心的位置にあった。そして自らも、川端康成（1899-1972）に激賞された小説『地獄』をはじめ多くの小説を発表したほかに、後には、移動演劇、新劇、新派、新国劇、歌舞伎などの脚本、脚色、演出を手がけるようになる。

金子の活動は、こうした文学、文芸の分野だけにとどまらず、政治活動もしている。昭和 5 年（1930）の第 17 回衆議院議員総選挙では無産党から立候補した。しかし、この選挙は自発的に立候補したものではなく、これは選挙区の農民の 4 千票を、他の候補へ回さないという目的のため説得されたのであった。この時、金子を説得したのは、『種蒔く人』土崎版の同人であり、労働運動家で小牧の叔父にあたる近江谷友治であり、加えて彼は、小牧の父、近江谷栄次という、金子にとって断りがたい人を同道していたという。

さらに昭和 22 年（1947）、戦後の第 1 回参議院選挙では、全国区に社会党から立候補して当選した。だが次の参議院選挙では、労働組合ごとに票が割り当てられたために、組合に属していない金子に社会党からの票がまわされず落選となる。

このように金子の議員生活は参議院議員の 1 期 6 年と短かったが、議員在職中はサンフランシスコ

---

33 小牧近江「『種蒔く人』55 周年記念講演会特集　小牧近江」『雑草』、創刊号（雑草舎、1977 年）6 頁。

34 野淵敏・雨宮正衛『＜種蒔く人＞の形成と問題性』（秋田文学社、1967 年）24 頁。「第三インターナショナルの歴史的研究」『解放』大正 10 年（1921）5 月特輯号に小牧近江の名で掲載された論文がある。

35 向坂逸郎、金子洋文、小牧近江他「『文芸戦線』をめぐって」『唯物史観』15 号（十月社、1957 年）17-42 頁。

講和会議[36]に出席したほか、昭和 27 年（1952）のパリでの第 7 回ユネスコ総会に政府顧問として出席し、国立国会図書館運営委員もつとめた。

金子は終生、故郷である土崎とのつながりを持ち続けた。土崎港の曳山祭りのときは、帰省し、皆とカスベ[37]を食べ、酒を呑んで、山車を曳いた。後年演劇界の重鎮となった金子が、土崎地区の婦人部の踊りを指導する写真がのこっている。

秋田の郷土魚、鰰を愛し「鰰（ハタハタ）」というタイトルの戯曲ものこしている。自分が秋田人であることのこだわりと誇りが強く、彼の作品が雑誌『中央公論』に採用されたのは、編集者の滝田樗陰が、「秋田県人をなんとかしたいという気持ちのあった人だな。俺の「犬」が載ったのは、秋田県人だからなんですよ。」[38]と述べている。伊藤永之介、野口達二、渡辺喜恵子など、秋田出身の多くの後進作家と関わり、東京にあっても故郷を大事にしていた。「石川啄木は石もて故郷を追われたのにわたしには暖かく迎えてくれる友達がいる。」[39]と述べている。

金子は文学とともに演劇の分野にも進出したが、そこには庶民の苦しい生活への共感があり、芝居という多くの人びとに理解しやすい媒体を通して、社会の理不尽な現実やそれに抵抗する農民や庶民の姿を伝えたいという思いにもとづくものであった。金子は文戦劇団という、地方巡回の劇団を組織して秋田を中心とする地方をまわり、その後はより多くの観客が期待できる商業演劇にも進出した。

---

36 金子はサンフランシスコ講和条約締結に反対し、帰国した唯一の議員であった。
37 土崎港曳山祭りは別名カスベ祭りともいわれる。干しエイ（カスベ）を甘辛く煮付けて食する。
38 野添憲治『労農運動に生きる―秋田の先覚者たち―』（能代文化出版社、2001 年）159 頁。
39 金子功子「私のお父さん」『『種蒔く人』70 年記念誌』（「種蒔く人」七十年記念誌編集委員会、1993 年）25-28 頁。

第2章　金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に―

第2章　金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に―

第1節　金子洋文著『生ける武者小路実篤』

『種蒔く人』創刊当初からの同人であった金子洋文が大正 11 年（1922）に著した『生ける武者小路実篤』[40]は、雑誌『種蒔く人』を創刊した種蒔き社が最初に出版した単行本である。

種蒔き社の広告によれば、「人と思想叢書」と題されたシリーズを企画しており、金子の本はその第 1 巻に位置づけられていた。広告によれば、『生ける長谷川如是閑』を村松正俊、『生ける秋田雨雀』を佐々木孝丸、『生ける山川均』を平林初之輔、『生ける小川未明』を山川亮が執筆する予定であった。書名はすべて『生ける某々』と統一して、『種蒔く人』の同人の思想に近く、雑誌に寄稿している人たちについて、同人が書くことになっていた。ただ、金子の『生ける武者小路実篤』以外には刊行された形跡が見られないことから、これが種蒔き社が刊行した唯一の単行本だったと考えられる。

紅野敏郎（1922-2010）は、講談社から刊行された「日本現代文学全集」の月報[41]で、この『生ける武者小路実篤』を紹介し、ここに掲載された目録が、武者小路実篤の作品目録として初めて編まれたものとしている。その意味で、実篤研究史上、見過ごすことができないものでもある。また紅野は、次のように述べている。

> 『生ける武者小路實篤』に關していえば、白樺派とプロレタリア文學、人道主義と社會主義とのひとつの接觸のしかたを如實に提示してくれていて、この本だけでも刊行されたことをわたくしはひそかにうれしく思っている。

この指摘のように、白樺派の文芸がプロレタリア文学者たちに影響をあたえたことは首肯され、金子もその例外ではなかった。小林多喜二（1903-1933）も志賀直哉（1883-1971）の文学に学ぶところが大きく、志賀の短篇を書き写して参考にし、手紙をだしている。『生ける武者小路実篤』は、日本の

---

40 大正 11 年(1922)刊行のこの本には、本文 99 頁、附記に武者小路実篤「僕の生たち」8 頁、金子洋文「新らしき村訪問記-吉呂港にて船待つ間-」9 頁があり、続いて「創作目録」2 頁があった。

41 紅野敏郎「『生ける武者小路實篤』のこと」『武者小路実篤集』(日本現代文学全集　第 47 巻)月報 22 号(講談社、1982 年)5-7 頁。

文芸思想をたどるうえで、歴史的意味をもつものであった。

第2節　雑誌『白樺』と『種蒔く人』

『白樺』と『種蒔く人』は共に関東大震災で終刊となった大正期の同人雑誌である。

『白樺』は、明治 43 年（1910）に、学習院に学んだ人たちの回覧雑誌としてまず創刊された。この同人達は雑誌名にちなんで、後に白樺派と称せられた。同人には、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎（1878-1923）がいる。雑誌終刊後も日本の文化活動に大きな影響をもたらした。文芸を中心に、近代人の自己実現のあり方をテーマに、明治期以来の自然主義に対抗して、理想主義、人道主義を唱えた。それは同時に、家や国がもっとも重要であるとする生き方ではなく、個を大切にし、各人が理想を追及することこそ最善であるという信念を掲げ、多くの若者を惹きつけた。芥川龍之介（1892-1927）が、雑誌『白樺』の出現を「我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて爽（さはやか）な空気を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵（くびす）に接して来た我々の時代、或は我々以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。」[42]と評したことはよく知られる。

この雑誌を読んだ大正期の若者たちは、その影響を受け、美しきもの、善き生き方にあこがれた。『白樺』は、日本の近代文学だけでなく、思想の面でも大きな役割を果たしている。故郷の土崎で代用教員をしていた金子は、書店「太陽堂」に集まった文化グループの読書会から様々な本を入手し読んでいた[43]。雑誌『白樺』の場合、東京から届いてすぐ、本来の持主よりも先に読むほどに熱心な読者であった。

先にも触れたように、一方の『種蒔く人』は、大正 10 年（1921）2 月に、フランスから帰国した小牧近江が、小学校の同級生であった金子洋文や今野賢三らと語らって、秋田県の土崎港町で創刊した雑誌である。第 3 号までを土崎で刊行したあとは、東京に拠点を移して大正 13 年（1923）まで刊行された。

刊行された期間は 3 年間にすぎなかったが、いち早く、日本へ第三インターナショナルの結成とその意味を詳しく紹介した。世界の労働者の連帯を訴え、反戦思想を中心に活動を行った。有産者階級と無産者階級という概念を提起し、その間の闘争が変革をうながすという思想は、社会全体のあり方の変革を目指すプロレタリア文学・思想運動のさきがけとなった。

有産者階級出身が結集する白樺派と、同人に無産者階級出身者もおり、またその主張も無産階級や

42　芥川龍之介「あの頃の自分の事」『中央公論』大正 8 年（1919）1 月号初出。『現代日本文学大系43　芥川龍之介集』（筑摩書房、1968 年）103 頁より引用。
43　金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）36 頁。

農民よりの『種蒔く人』は、一見すると両極に位置しているともみられがちだが、両雑誌の同人たちはさまざまな面でかかわりを持っていた。

『種蒔く人』を主導した小牧は、武者小路が戦争の悲惨と愚かしさを告発した戯曲『或る青年の夢』をパリ滞在中に読んで、故国日本にもこうした反戦思想を鮮明にした作家がいると驚き喜んだ。彼はこの作品をフランス語に翻訳して、それを私淑していたロマン・ロランに献呈したという[44]。第一次世界大戦の惨状をヨーロッパで体験した数少ない日本人であった小牧は、第一次大戦後、作家アンリ・バルビュスが主導した反戦平和運動「クラルテ」に共鳴し、それを日本にも広げようと、帰国後に雑誌『種蒔く人』を創刊したのである。

大正 8 年（1919）12 月、小牧は日本に帰国するとすぐに、反戦運動を広げる運動への参加を要請するべく、武者小路のいる九州の「新しき村」を訪ねた。だが武者小路からは、作品の掲載は了解するが、自分は本来「群れることは好まない」と運動への参加は断られた。このあと小牧は翌大正 9 年（1920）に、東京で小学校の同級生であった金子と再会する。

このときの金子は、武者小路の家に書生として住み込んだ後、東京で記者としての仕事につき、その傍らで創作を続けていた。武者小路、志賀、柳ら白樺派の人たちとの直接の接触を通して、デモクラシーを体感した後の実生活は、「天国から地獄に落ちた自分を発見した」[45]と後に語っている。社会的矛盾を経験してきた金子は、小牧が語るヨーロッパでの反戦思想を理解し、ふたりは意気投合した。その結果が、『種蒔く人』刊行となったのであった。

土崎小学校の同級生で、金子とつきあいが深かった今野賢三も土崎版からの同人となったが、今野も、白樺派のひとり、有島武郎と関係があった。活弁士であった彼は早くから小説家をめざし、有島に教えを乞い、その弟子となっていた。小牧が「新しき村」に武者小路を訪ねたとき、自分は参加できないが有島ならと紹介されていた。今野は『種蒔く人』土崎版を有島に送っている[46]。そして『種蒔く人』を東京に移して再刊する際には、有島は資金面も含め、さまざまな援助を惜しまなかった[47]。『種蒔く人』で企画した種々の活動にも協力を惜しまず、ロシアでの飢饉救済のキャンペーンでは、有島は秋田で講演を行っている。有島は大正 12 年（1923）6 月 9 日、『婦人公論』の女性記者、波多野秋子と軽井沢の別荘で横死をとげた。亡くなる間際まで『種蒔く人』に協力し、「種蒔き少年」に掲載するための子息の詩を届けていたことを、小牧は『種蒔く人』8 月号の追悼記事[48]で述べている。

---

44 北条常久『『種蒔く人』研究―土崎の同人を中心に』（桜楓社、1992 年）20 頁。
45 金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）42 頁。
46 須田久美「有島武郎と『種蒔く人』」『金子洋文と『種蒔く人』』（冬至書房、2009 年）147 頁。「「種蒔く人」をお送り下さって難有（ママ）う あなた方のご成長を祈ります。」1921 年 3 月 22 日付葉書が紹介されている。
47 小牧近江『種蒔くひとびと』（かまくら春秋社、1978 年）70-72 頁。
48 『種蒔く人』大正 12 年（1923）8 月号。

第3節　白樺派の人々と金子洋文との関わり

金子洋文はその生涯にわたり膨大な資料をのこした。なかでも明治 41 年（1908）からはじまり、最晩年までにわたる 4,155 点もの書簡は、彼の広い交友関係を知る上で貴重な資料である。ただし、大正 10 年（1921）から大正 13 年（1924）にかけて、『種蒔く人』を刊行した当時の書簡はほとんどのこされていないため、当時のことを記した資料は多くない。ただ少ないとはいえ武者小路実篤、房子夫妻との手紙[49]をはじめ、有島武郎たち白樺派の人たちとの交流を示す書簡が保存されており、当時の彼の動向と思想を知ることができる。

この書簡をとりあげた先行研究としては、千葉三郎「宛書簡にみる金子洋文―大正二年～同八年の資料―」（『「種蒔く人」の精神』「種蒔く人」顕彰会、2005 年）がある。のこされた書簡から、金子が秋田から上京して、我孫子の武者小路宅に寄寓した前後の 7 年間の動向を明らかにしている[50]。また須田久美は『金子洋文と「種蒔く人」―文学・思想・秋田』（冬至書房、2009 年）に収録された論文[51]「有島武郎の金子洋文宛て葉書二葉」で、金子の書簡から、金子と有島武郎の接触がかなり早い段階からあったことを明らかにしている。

ここからはこれらの研究を踏まえつつ、秋田にあって上京を目指しながら、あこがれの武者小路に接触を試みた金子の動向、さらにはこれまで見過ごされてきた書簡から浮かび上がったその後の白樺派の人々との交流について述べる。

現在のこされている書簡のなかで、金子が武者小路から受け取った最初の手紙と考えられるのは、大正 4 年（1915）10 月 1 日付のものである。

> 御ハガキと新聞ありがたう。「裸体の踊り」は面白く見ました。君の元気が見へるやうに思ひました。私はこゝに先月から引越しました。まだこゝに引越してから仕事らしい仕事はしません。その内に何かかきたいと思つてゐます。もし御上京になつた節はおたより下さい。　（1915 年 10 月 1 日付）

---

49 確認できた武者小路夫妻からの書簡は 42 通である。

50 千葉三郎は生前の金子洋文、小牧近江と交流しており、土崎図書館の金子洋文資料目録事業の当初から関わっていた。この論文は『秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料目録」』（秋田市立土崎図書館、2007 年）以前、「種蒔く人」の精神編集委員会編『「種蒔く人」の精神―発祥地　秋田からの伝言』（「種蒔く人」顕彰会、2005 年）に掲載された。最も早い段階で金子書簡を網羅的に紹介したものである。

51 「有島武郎の金子洋文宛て葉書二葉」231-238 頁。初出は、『有島武郎研究』10 号（有島武郎研究会、2007 年）。

「裸体の踊り」とは、9 月 19 日から 25 日まで『秋田毎日新聞』に掲載された金子の「裸体の踊り－武者小路実篤様に－」である。「私はこゝに先月から引越しました。」と記していることから、金子が前の住所へ手紙を出したことをうかがわせる。そのことは、この時点の金子が武者小路にとり、引越しをあらかじめ知らせるほどの存在でなかったということになる。また「新聞」とあるが、新聞そのものか切り抜いたものであるか不明である。ただし、題に「武者小路実篤様に」とある以上、切り抜きではなく新聞そのものを送るのが礼にかなったものと考えられる。なお金子の旧蔵資料には、『秋田毎日新聞』を切り抜いてスクラップにした「裸体の踊り―武者小路実篤様に―」が含まれている。金子は、自分のためのものとは別に入手した新聞を、武者小路に送ったものと思われる。

また武者小路から以下の 2 通の葉書がある。

おハガキと新聞ありがたう御ざいました。御厚意を嬉しく思ひました。四月御上京の時はおいで下さい。その内には仕事らしい仕事をしたいと思つてゐます。御礼まで。　(1915 年 11 月 8 日付)

賀正　御ハガキと新聞うれしく拝見しました、おほめ言葉は恐縮もしますが、君達の豫期して下さる御厚意に背かないだけの自信は感じております。　(1916 年 1 月 2 日付)

大正 4 年（1915）11 月の段階で金子は 4 月上京をほのめかしていたことになる。それより先、金子が『秋田魁新報』(1915 年 3 月 12・13 日掲載）に、「たとひ短い二年半であらうても」と、2 年半という具体的な数字を述べていること[52] から、須田久美は、金子が教員に採用される際におおよその雇用期間が言い渡されていた可能性が高いとしている。金子が実際に土崎小学校の代用教員をやめて上京したのは大正 5 年（1916）10 月である。

なお、武者小路に送った「新聞」については、残された資料から金子が書いた記事の特定はできていない。当時の『秋田毎日新聞』[53]は未見、『秋田魁新報』から金子の書いた記事は見当たらない。武者小路に関わる評論である可能性がある。

金子が上京を目指していた教員最後の年度の半年に、『秋田毎日新聞』に評論「雪降る夜」、「華山と無車」[54]、戯曲「海の上の夢」、『洪水以後』に評論 2 篇、『日本評論』に手紙と評論が 1 篇ずつ掲載さ

---

52 須田久美『金子洋文と『種蒔く人』－文学・思想・秋田』(冬至書房、2009 年)88 頁。「悲哀と真実の生活」『秋田魁新報』(1915 年 3 月 12・13 日掲載)に、金子が「たとひ短い二年半であらうても、刻々に自己を向上せしめたいと思つたから」教員検定試験を受けたと述べていることにふれ、2 年半という具体的な数字から、教員になるにあたって、おおよその期間が言い渡されていたのではないかと述べている。

53 『秋田毎日新聞』は、国会図書館にも保存されておらず、秋田県立図書館に一部あるのみで当時の記事は未見である。

54 「華山と無車」の華山は茅原華山、無車は武者小路実篤を指している。茅原華山は、雑誌『第三帝国』の主宰で、「民本主

れている。『洪水以後』（1916 年 4 月 11 日号）に長篇評論「『哲人』たること『人間』たること」が掲載された時には、茅原華山が金子に対する期待を伝える紹介文を添えて掲載している。このように小学校の代用教員最後の年の金子は、執筆活動に力を注いでいた。文筆で生活することへの意欲をみてとることができる。

土崎出身の石田が茅原と大正 2 年（1913）10 月に創刊した雑誌『第三帝国』は、『万朝報』の記者だった茅原が主宰をつとめ、地方都市や農村の青年に愛読者が多かった。金子はこの雑誌に、「欧州出兵断じて不可」（大正 4 年 1 月 15 日号）と「此醜態を見よ」（同年 2 月 25 日号）の 2 本の論文を寄稿している[55]。

大正 4 年（1915）の夏、『第三帝国』一行による東北遊説の旅が行われ、『第三帝国』には、金子の記事が「各地講演会消息」（1915 年 7 月 25 日）に掲載されている。この時、金子は華山の目に留まり[56]、大正 4 年（1915）8 月 9 日と 8 月 23 日付の 2 通の手紙を受け取っている。それには、

> 近ごろ何うなさいました。一昨日新潟県から帰りました。御上京は何時ころ（1915 年 8 月 9 日付）

> 御手紙拝見しました。準備が出て来たならば何時でも上京し玉へ、上野まで迎へに行きます。（1915 年 8 月 23 日付）

とあり、華山は秋田で会った金子に期待し、その上京を促している。ただ、金子が上京する前年には『第三帝国』での編集をめぐって、土崎出身者である石田と華山との間で深刻な分裂騒ぎがもちあがっていた。金子は華山を支持する立場をとっており、翌年秋に上京すると、華山の紹介で、華山の弟が経営する一元社に入社することができた。

後に金子は、華山とのつながりを、「一時ブームをおこした雑誌『第三帝国』に熱中し、主宰者の茅原華山に傾倒するありさまで」と記している。（「その種は花と開いた」『種蒔く人伝』、労働大学、1984 年）華山は早い段階で金子の才能を見出した人であり、彼のつてで雑誌に論文を掲載することができた。さらに大正 5 年（1916）10 月に土崎小学校を辞めて上京して、一元社の記者として働くことを得た。その上で、これまで書いた論文を武者小路に読んでもらうことで、白樺派への接近という道筋が生まれるのだが、その点を考えても、金子の人生における華山との出会いは大きな意味をもっていた。

先に述べたとおり、金子は講演のために土崎に立ち寄った華山との邂逅から東京の仕事先を得ただ

義」を提唱した。

55 須田久美「金子洋文と茅原華山および、武者小路実篤に関する一考察」『金子洋文と『種蒔く人』』収録（冬至書房、2009 年）

56 北条常久「金子洋文の文学的出発」『『種蒔く人』研究−秋田の同人を中心として−』（桜楓社、1992 年）139 頁。

けでなく、武者小路に自分の作品が掲載されている記事を送り続けた。そして大正 6 年（1917）秋に上京すると、その直後の 10 月 5 日付で、武者小路から次の葉書を受け取った。

御手紙拝見御上京を祝します。 よかつたら九日にお目にかゝりたい気がしてゐます。お目にかゝった上で。私の処は大塚車庫前で電車をおりて上図のやうに最初の横町ばかりをまがつてくるとこられます。九日に御用がおありでしたら十日でも十一日でも前に御一報下されば待つてゐます。（植物園からは一寸あります）　（1916 年 10 月 5 日付）

葉書には日を指定して家の案内図が書かれていた。こうして金子は武者小路に面会することができたが、当日は武者小路宅には大勢の人が居合わせていたため、直接話をする時間は少なかったようである。

次に武者小路から来た葉書には

先日は切角来て下さつたのに大勢だったので失礼しました。御原稿は拝見しました。全体をつらぬいての感じが十分にかけてゐないやうに思いました。あつた時にお話しします。いゝ素質は出てゐると思ひましたがまだ表現の骨をのみこまれない処があるやうに思ひました。（又来て下さい）　（1916 年 10 月 16 日付）

とあり、金子は自作の原稿をみてもらうように置いていったことがうかがわれる。またこれ以外にも、武者小路が金子の相談にのっていたことを示すのが、次の葉書である。葉書で内容を示さずに題だけを記して相談することもあろうが、その内容をみてもらって題について意見を求めるのがより妥当性があろう。このことから、金子は前後して武者小路に原稿をみてもらっていると考えるものである。葉書の送り先の住所は金子の勤務先である一元社になっている。

御ハガキ拝見。題は少し嫌味で他人の不幸をよろこぶやうで氣になります。「自然に反する主義の犠牲か？」とでもするか。「自然の意志の矛盾の解決の不足から」とでもするか。たゞもつとすなほな「今度のことに就て」とかしてほしく思ひます。好奇心と云ふ言葉が自然の意志をもつとよく知りたいと云ふ意味になりは通じない言葉ですから氣になります。（十六日はなるべく来れるやうにしたまへ）　（1916 年 11 月 14 日付）

題について具体的な代案をあげて親切に忠告している。続く同月 25 日の手紙では、風邪で具合が悪く臥せっているが、朝 8 時なら時間をとるという知らせを妻房子に代筆させている。この時期の武者小路は、我孫子への引っ越しを進めており、その手配で忙しく、文中にも我孫子に行かなければならない旨が記されている。さらに 29 日には、原稿に関わる相談があったのか、実篤自身の作家たちとのつき合い方を伝える、親身な葉書が届けられている。

では、このとき武者小路実篤に相談した原稿は何であったのか。葉書には具体的な題が記されていないが、金子は大正 6 年（1917）1 月の『日本評論』に、「生田長江氏に与ふ」を掲載している。発表時期から考えれば、これがその原稿である可能性が高い。舌鋒鋭い明晰な評論で著名な作家にむける文を中央の雑誌に載せるということであれば、おのずからこれまでの地方新聞での記事とは違う心構えが必要であり、慎重にならざるをえなかったと考えられる。

なお、武者小路自身、「生田長江氏に戦を宣せられて一寸」（『時事新報』、1916 年 11 月 2 日）を書いて、白樺派を「自然主義前派」と規定した生田長江との間で、有名な論争を行っていた。武者小路は金子が生田長江（1882-1936）に関する原稿をみせるのにふさわしい存在であった。

白樺派の人たちが我孫子に住まいを移すきっかけになったのは、仲間である柳宗悦（1889-1961）が、大正 3 年（1914）にここへ引越して、そのよさを吹聴したことがきっかけであった。その後志賀直哉や武者小路が転居してきたのである。柳からも、金子宛に葉書が届いている。

> ハガキ及雑誌を有り難う。こないだは失敬しました。又遊びに来玉へ。君が書いた我孫子の記事を読みたい。今度又君が来る頃は無車君の家も大概片づいてゐる頃と思ふ（以下略）　（1916 年 12 月 24 日付）

この翌日の 12 月 25 日付で、武者小路は、手伝いへの礼と、金子が落とした蟇口を探したが見つからなかったことを伝えている。この日金子は、『日本評論』を持参して表紙にサインを書いてもらったらしい。文中に、金子の蟇口を探して柳や志賀の家へも行ってみた、とあることから、金子は彼らの家三軒に行っていたことが分かる。

柳がいう「こないだ」とは、20 日の武者小路の引越しの時とみるのが自然で、金子が柳に送った雑誌とは、時期や経過からみて前述の金子が書いた「生田長江氏に与ふ」が掲載された『日本評論』（大正 6 年 1 月 1 日号）であろう。また金子が書いた我孫子の記事とは、この時点に書かれていた点から「手賀沼から」（『秋田毎日新聞』、1917 年 2 月 27 日掲載）という可能性が高い。

次は武者小路から大晦日に送られてきた手紙である。

御手紙見ました。逢つて話したく思ひます。しかし私の処は二月からでないと室の都合がよくありません。今たてましをしてゐますからそれが出来ればいゝかと思つています。しかし君の空想がよすぎると、イルージョンがこわれる時のことが頭に浮びます。その時の用心をちやんとしておくことを望みます。くわしくはお目にかゝつて話たく思ひます。来月の五六日頃よかつたら一度来て下さい。　（1916 年 12 月 31 日付）

手紙の内容は、1 月 5、6 日に、金子が我孫子の武者小路の家に住むことで相談をしたい、部屋の用意ができるのは 2 月以降になるので、それ以降なら受け入れの用意ができるというものだが、金子は「元旦から寄寓した」と語っている[57]。12 月 31 日の書簡を受けてからとすると、早すぎる展開であるが、金子が武者小路家に年始に行き、そのまま寄寓を進めていった可能性はある。松の内の 1 月 7 日付で、今野賢三から武者小路宅の金子宛てという書簡があることから、早々と自らの連絡先として武者小路家の住所を今野へ伝えていたことがわかる。金子としては、我孫子の武者小路家に住むことは願ってもないことである。後に『種蒔く人』発刊を小牧と会ったその日のうちにきめて実行した人である。こうと思ったらすぐ行動に移す彼の性格がここでも見られたといえよう。我孫子の武者小路宅には文学関係者が大勢出入りしており、年始のあいさつなども賑やかに行われたと考えられる。金子は転居する以前から、武者小路の家に頻繁に出入りして、年長の文学者や他の文学青年と交流する機会を持っていた。

兄よ、原稿を送ります。どうぞ批評して下さい。題は何としていいのかわかりませんので書きません。二つに別れてはゐますがつづいたものとして見てください。叢書は如何なりましたか。私も入れて下さる様に兄からお願ひして下さい。　（1917 年 3 月 21 日付）

これは後に、「新しき村」名誉村民第 1 号となった川島傳吉からの金子宛ての手紙である。

他にも文学で身を立てることを望みつつ、その望みがかなわないのではないかとの悩みを正直に伝えた手紙もある。以下は砥上常雄から金子宛ての手紙である。

昨日アビコに行った。君が創作してゐることを羨ましく思ひます。僕は僅かに讀書してゐます。色々な悲しみが心をみたして来ますが、真実な生活だけは営みたいと思ひます。上京の日を待っ

57 金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）41 頁。

てゐます。毎日新聞の方がダメになつたことを残念に思ひます。　（1917 年 8 月 5 日付）

これはすでに千葉三郎によって紹介されている[58]。それには、砥上常雄が如何なる人物か不明としているが、当時武者小路家に出入りしていた文学青年で後に読売新聞記者となったという[59]人物である。金子は我孫子の武者小路家を 7 月中旬に出て土崎港町に帰郷している。土崎で創作に励んでいたことを知らせていたと思われる[60]。この手紙は、同年 8 月 5 日付で、金子が武者小路の家から出た後のもので、金子に紹介した東京毎日新聞の職を得られなかったことについて同情し、金子不在の我孫子で金子の創作のことが話題になったということであろう[61]。砥上からは、仕事を探していた金子に新しい仕事先を紹介する手伝いを約した手紙ものこされている。彼も作家希望で、金子に創作の苦労や執筆の環境を整えることの悩みを打ち明けていた。

金子は秋田在住の時から当時全国に居た武者小路の熱烈な信奉者のひとりであった。そして原稿を送るうちに、武者小路からの批評を得られるようになり、さらに上京後は直に出入りを許された。あこがれの作家の家に部屋をあたえられて創作に励み、白樺派の人たちと直接言葉をかわすことができる環境について、金子は次のように述べている。

文壇の諸星や編集者の往来もひんぱんであり、毎日の生活がすべて文学、芸術とつながっていたので、政治青年は次第に文学青年に解消する過程をたどった。…（略）高貴な文学精神をむさぼるように吸収し学び得た[62]。

また、このような生活であったからこそ、「我孫子を去った半年後には、私は天国から地獄に落ちた自分を発見した」[63]のであった。ただ金子と白樺派の人たちとの交流は、我孫子の武者小路の家を出てからも絶えることはなかった。8 月 25 日付で土崎に届いた武者小路からの手紙がある。

---

58 「宛書簡にみる金子洋文―大正二年～同八年の資料―」『「種蒔く人」の精神－発祥地秋田からの伝言』種蒔く人顕彰会編（DTP出版、2005 年）86～130 頁。

59 「その時分、金子洋文が秋田から出て来て、彼の所へたづね、間もなく我孫子に一緒に住むことになつた。その後、後で読売の記者になつた砥上常雄君が来たり、川島伝吉が来たり、…」とある。「或る男」『武者小路実篤全集第五巻』（小学館、1988 年）275 頁。

60 須田久美「金子洋文年譜」『金子洋文短篇小説選』（冬至社、2009 年）306～315 頁。

61 千葉三郎「宛書簡にみる金子洋文―大正二年～同八年の資料―」『「種蒔く人」の精神－発祥地秋田からの伝言』種蒔く人顕彰会編（DTP出版、2005 年）86～130 頁。8 月 3 日付で砥上からの葉書があり、毎日新聞社会部外交記者募集を知らせていた。

62 金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）42 頁。

63 同上 42 頁。

久しく御無沙汰。僕は先月から今月にかけて一幕もの一つ、短篇二つをかいて近頃になく働きました。故郷にゐる内に勉強をすることを望んでゐました。その内又出て来たくなつたら、仕事が見つかるまで氣楽に来て下さい（以下略）　　（1917 年 8 月 25 日付）

金子が我孫子で暮らすまでに金子に送られた武者小路の手紙は、金子から送った手紙への返信という形であったが、この手紙は武者小路の側から、金子の近況と作品の出来を気にかけて声をかけたものであった。師として弟子を気づかう温かなものが感じられる。

有島武郎から金子に送られた手紙の存在については、須田久美が紹介している[64]。

実はまだ拝見してゐませんでしたから早速に返送致します 朝日に出たら十分に拝見します 社員のする予選といふものがあるので是れが私から申しては如何か知れないけれどもかなり心配なものだと思ひますが兄のが夫れを通過される事を祈つてゐます　　（1919 年 3 月 6 日付）

これは金子が有島に原稿を送り、感想と新聞掲載へ助力を乞う手紙に対する返事である。金子は最初、有島を頼りにしていたが、有島から、作品を読む時間がなく、掲載の援助についてもできかねると伝えられている。金子は『種蒔く人』の同人のなかで有島の弟子とされていた今野賢三よりも早い時期[65]に、有島と接触していた。

白樺派の中心人物、志賀からは、大正 10 年（1921）5 月 14 日付で旅先からの手紙がある。

お手紙と雑誌二部ありがたう。小品読みました。僕は月末から月初め十日位まで忙しくしてゐます。十八日我孫子に（以下略）　　（1921 年 5 月 14 日付）

雑誌二部とあるが、この時は土崎版『種蒔く人』が休刊したあとに、東京で再始動をしている時期で、『種蒔く人』を志賀直哉にも送っていた可能性が高いことに注目したい[66]。

さらに金子が、志賀に宛てて昭和 5 年（1930）に刊行した自作『魚河岸』を贈っていたことが、志賀が小林多喜二に送った手紙から明らかになっている。『蟹工船』を読んだ志賀が、「小説が主人持ち

---

64 須田久美「有島武郎の金子洋文宛てハガキ二葉」『金子洋文と『種蒔く人』』（冬至書房、2009 年）231～233 頁。
65 「亡き有島先生と自分」『種蒔く人』1923 年 8 月号。今野は「文通は大正 8 年 7 月にはじまつた」と述べている。
66 大正 10 年（1921）の瀧井孝作宛て書簡で、「5／11 今日上京、明晩から一寸奈良へ行くつもり…（略）十六日の午前東京へ帰つて来て我孫子へは十七日の午后かへります」とある。そして金子への手紙と同じ 14 日に京都から杉田英男に手紙を出している。『志賀直哉全集第 12 巻』（岩波書店、1974 年）142～143 頁。

である点　好みません。」と評したことで有名な、多喜二に送った昭和 6 年（1931）の手紙の中に、「前に洋文から『魚河岸』といふ本を貰い、その前、津田青楓にすすめられて『ゴー・ストップ』[67]といふ本を見たきりで所謂プロレタリア小説といふものは他に知らない」とあり、「作品としては兎に角運動が目的なら、もう少し熱があってもよさそうなものだと感じましたが、その点君のものには熱が感じられ愉快」と、『蟹工船』と比較してもいる。志賀にとって金子は、プロレタリア小説の書き手として認識されていたのである。

時間が前後するが、大正 11 年（1922）5 月 2 日に、日向の「新しき村」を訪れた金子は、武者小路から、西洋紙に筆書きされた言葉を訪問記念に受け取っていた。

生きてゐるうちに面白い世界をつくって見たいものだな君　（1922 年 5 月 2 日付）

金子洋文が「新しき村」の訪問記を記したのは、同年 5 月 5 日である。刊行されていた雑誌『種蒔く人』には、武者小路も詩を提供するなど協力していた。

金子が種蒔き社から『生ける武者小路実篤』を刊行したのは同年 10 月のことである。「生ける某々」というシリーズ名からも察せられるように、武者小路という作家について、作品だけでなく、その生き方やその生活を含めて論評するのを目的としたものであった。武者小路を生涯にわたり師と仰いでいた金子だが、ここでの金子は、武者小路の「新しき村」の思想と一線を画そうとしているとみられている[68]。また金子は、武者小路的なものを保ちつつ転進したのだということも、この本からは読みとれるのである[69]。

> 而し吾々は今別々の途に立つてゐる。それは何故か。それは新らしき社會を建設するための手段の相違である。吾々は奮き家をこわして新らしき家を造らうとする。彼は奮き家をそのまゝにして、新らしき家を建てやうとする[70]。

こうした金子に対して、武者小路自身の反応はどうであっただろうか。彼は社会主義者やその運動

---

67 「ゴー・ストップ」は貴司山治（1899-1973）の作品。彼は多喜二虐殺後に刊行した『小林多喜二全集』の編纂に関わった。

68 須田久美「青年期の金子洋文-茅原華山。武者小路実篤からの決別-」『金子洋文と『種蒔く人』－文学・思想・秋田』（冬至書房、2009 年）59～74 頁。

69 紅野敏郎「『生ける武者小路實篤』のこと」『日本現代文学全集　月報 22』（講談社、1962 年）5～7 頁。「金子は武者小路に悪罵、嘲笑を決然と放つことによつて「種蒔く人」に近づいたというよりは、むしろ武者小路的なものをたぶんに温存しつつ轉進したようだ。「白樺」と「種蒔く人」との關係を、わたくしはこういつた面からさらにあきらかにしてみたいと思つている。」

70 金子洋文『生ける武者小路実篤』（近代作家研究叢書 147）（日本図書センター、1993 年）95 頁。

に対して懐疑的だったことは明らかである。彼は「気まぐれ日記」の「1923 年 8 月 30 日」の項で、以下のように記している。

社会主義の字引以外の文句をつかうことを恥とするＫ．Ｙが何か僕のことをかいてゐるらしい。身の程知らない、お弟子根性そのもの、馬鹿には困つたものである。お弟子根性の強いものは、安心して人間を歪なものにすることが出来る。困つた馬鹿だ。あいつは人間ではなく、社会主義のお化けだ[71]。

Ｋ．Ｙとは金子洋文を指すのだろう。かって弟子であった金子について「お弟子根性」と評した言葉には、個人としての思想を確立せずに無条件にただ奉る姿勢への批判、群れをなして大勢に流される者への批判がこめられているように思われる。弟子が信じる社会主義思想が、組織を優先し、個の確立とその自由を妨げる危険性があると指摘しているともとれ、弟子のＫ．Ｙへのいらだちと否定が述べられているとも受け取れる。

金子は『種蒔く人』7 月号に「午前十時その他」で、「武者小路実篤氏に」と題し、詩の文体で武者小路が『婦人公論』で書いたこと[72]について、遺憾に思うとしていた。

あなたを尊敬してゐる故に、
あなたの言ふことが気にかゝります。
あなたは『婦人公論』で、
社會主義の理論はいゝが
暴力を鼻にかける人間がゐるので
社會主義も嫌らひだ、と言つてゐます。
かういふことを
あなたがまだ平氣で言つてゐるのを遺憾に思ひます。
同じ非難をあなたに向けたら
あなたは何う答へます。
あなたのぐるりにも

71 武者小路実篤「気まぐれ日記」『武者小路実篤全集第五巻』(小学館、1988 年)457 頁。
72 武者小路実篤「階級闘争に就て」『婦人公論』8 巻 5 号(中央公論社、1923 年)31-35 頁。

鼻持ちのならない
人道主義がうようよしてゐることが
氣がつきませんか。
これはM君も言つてゐました[73]。（以下略）

前後の「である」とした諸氏あての文章[74]とは姿勢の違いが明らかで、金子の気遣いが見て取れる。「です」「ます」調の、武者小路の影響を思わせる詩での表現は、他の諸氏向けと異なる書き方を採っている。武者小路を師とたてながら諫言を行うという立場での言葉であった。ここで金子は新しき村を「立派な共産主義の村」とし、社会主義者の姿勢を批判した実篤に遺憾の意を示していた。共産主義と社会主義が同一でなくなるのは後のことであるとして、新しき村を共産主義の村と同一としていたことは、目指す社会は同じという金子の考えを意味する。それは、新しき村と社会主義運動とを区別する実篤の意に適うものではなかった。

志賀直哉は小林多喜二の文学的資質を評価していたが、後に贈られた作品の感想として、「主人もちの文学」[75]と評したことがあり、白樺派と種蒔く人同人たちの、時代への向き合い方は異なってきていた。

武者小路のプロレタリア文学への批判の影響があったからであろうか、『種蒔く人』が盛んに活動した、大正 10 年（1921）から大正 13 年（1924）にかけて、武者小路や志賀直哉、柳たちからの手紙は金子ののこした資料のなかにはほとんど見当たらない。それでも実篤の前妻、武者小路房子とのあいだには交流が続き、手紙の往来もあった。そうした房子からの手紙の一節――

（前略）夏には赤ちゃんがお生まれになる由どんなにおうれしいでせう（中略）又赤ちゃんお生まれましたら私のとこへもお忘れなくおしらせ下さいませ　私のおやぢさまは奈良へ所帯を持ちました　志賀さんのまねきですからよろしいでせう　私は小さなおやぢさまの小室を心から愛して祝福しております　私のお山の仙女生活も心から楽しんで‥‥（以下略）　（1926 年 1 月 22 日付）

73 金子洋文「午前十時その他」『種蒔く人』5 巻 1 号、（種蒔き社、1923 年 7 月）12-16 頁。
74 同上藤井真澄君にとして「言いたいのは「狐」に対するイプセン會の批評についてだ。」とし、宮島資夫氏には「あなたも/僕たちの仲間の言ふことを/虚心で聞いてもらひたい。」と綴られている。
75 小林多喜二宛ての志賀直哉の書簡（昭和 6 年[1931]8 月 7 日付）で志賀は「運動の意識から全く独立したプロレタリア芸術が本統のプロレタリア芸術になるものだと思ひます。」と、作中の人物に思想をむき出しに語らせるのではなく、事実なり体験なりの描写を通して思想を感じ取らせるのがプロレタリア芸術と、その識見を語っていた。

房子夫人のために、本を送ったり、「新しき村」では入手できないコティーのお白粉を求めに金子の家人がデパートに行ったりしている[76]。金子はその後も、曾我廼家五九郎劇で武者小路の戯曲作品「ある日の一休」を演出[77]している。武者小路とのつながりは途絶えていなかった。武者小路からは、昭和 30 年（1955）10 月 5 日、川島傳吉が死亡したことを知らせる手紙がある。昭和 40 年（1965）の手紙には、個人対個人としての親しみが感じられる。

先日の菓子礼。君の故郷からだったので礼状は出しません。僕も八十になったが、相不変　（以下略）

武者小路が亡くなった折、遺族から葬儀案内（昭和 51 年[1976]4 月 19 日）が届き、4 月 24 日の葬儀参列への礼状が書簡類にのこされている。金子にとって若き日に私淑した武者小路実篤は、最後まで大切で格別な存在であった。自らの師として語り続け、後に演劇雑誌『悲劇喜劇』が 1980 年 11 月号に「特集・武者小路実篤の戯曲」とした際に、金子は「武者小路実篤の青春」を著している。

76 金子洋文の息女、金子功子さん談。武者小路房子と金子一家との交流があったことが伝わるエピソードのひとつである。なお、先稿「『種蒔く人』同人金子洋文と白樺派 ： 金子洋文資料から」種蒔く人白樺派」『社会文学』社会文学 35 号において著した「口紅」は「白粉」の誤りで、ここで訂正する。2013 年 5 月 18 日聞取り確認。

77 1925 年の凌雲座で金子は、曾我廼家五九郎劇団の『ある日の一休』を演出している。

第3章　金子洋文と農民文学

第3章　金子洋文と農民文学

第1節　近代文学における都市と農村の位相

近代文学において農村を題材に描いた作家は、多くない[78]。農民文学は、その時々で土への賛美、都会生活者の郷愁といった要素も加わり、書き手や題材など様々な定義付けがなされてきた。日本農民文学会を例にとると、その目的に人と自然環境との調和、農村文化の発展も目指すものとしている。本論では、農耕従事者だけでなく周辺の住民や自然も含んで、農村を描写するものを農民文学ととらえていく。

『東京朝日新聞』に明治 43 年（1910）6 月から 11 月に連載された長塚節（1879-1915）の「土」[79]が、本格的な日本の農民文学作品としてあげられている[80]。農民の生活を、その自然や習俗を交え現実的に描いた、自然主義の流れにある文学作品であった。やがて農民文学という言葉が定着し、農民の立場に立って社会的諸関係を意識的に描き出すプロレタリア文学運動の流れが現れてくるようになる。文学運動として、農民文学というとらえ方が、大正 11 年（1922）以降に起こる。

本章ではまず、長塚節の小説「土」と金子洋文の「地獄」とを比較し、「地獄」にみられる農民像についての考察を試みる。その背景にある明治以降の農村の窮乏が進展していた事情を、秋田県の農村実態を例に述べる。そして『種蒔く人』に見られる農民文学との関わりに着目し、金子が果たした役割に着目する。さらに、『種蒔く人』土崎版にある農民を題材にした金子と畠山松治郎をとりあげ、畠山の作品中にみられる農村の現実と、金子にもたらした影響を明らかにする。

『東京朝日新聞』に掲載された長塚の「土」が、明治 45 年（1912）、『土』と題し、春陽堂から単行本として刊行された際、夏目漱石はその序文で、

「土」の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土

78　在村農民を著した作品として、明治 40 年以降の、長塚節の「土」、真山青果「南小泉村」があげられる。

79　伊藤左千夫とともに、『アララギ』を創刊した歌人である長塚節は、明治 43 年（1910）『東京朝日新聞』に「土」を連載した。明治 45 年（1912）に春陽堂から『土』が刊行された。

80　『日本現代文学大事典』（明治書院、1994 年）では、「農村や農民の生態を描いた文学。わが国では明治末期に長塚節の『土』が書かれ、真山青果の『南小泉村』と共に自然主義文学のひとつの現実描写に道をひらき、有島武郎も『カインの末裔』によって農民を新しい角度から捉えたが、農民文学運動の機運が高まったのは大正末期から(以下略)」とある。

の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。（略）彼等の獣類に近き、恐るべく困憊を極めた生活状態を、一から十迄誠實に此「土」の中に收め盡したのである。

としたうえで、

斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んで居るといふ悲惨な事實を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の是から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として利益を與へはしまいか。

と続けている。漱石にとって農民は

下卑で、浅薄で、迷信が強くて、無邪気で、狡猾で、無欲で、強欲で、ほとんど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上がりがたいところである。

であった。この漱石の言葉から、都市に住む人びとが農民をどのようにみていたのか、その生活をどのように感じていたのかを知ることができる[81]。近代化へと一路進もうとする日本の知識人の目には、農村や、農村での暮らしは前近代的なものとして映っていた。農民の暮らしは彼等にとって遠い世界であった。

近代文学は、自立した個人の生き方を中心的なテーマにすえ、近代人の重要なテーマである自我に目覚めた日常的な人間の生き方を考えることに熱心であった。それには、人が集まり築いた都会という空間で暮らす人間を主人公にすえることが適していた。農村の生活、そこで生を営む農民に踏み込んで描いた作品の登場は、明治末のことである。

しかし都市は単体では成り立たず、農村からの供給があって成立するものである。都会で生み出される様々な新しい文化も、その根は農村が支えて成立している筈のものである。にもかかわらず、文化は都市でつくられ、都市で消費されて、農村はその余沢にすらなかなかあずかれなかった。明治期、日本の総人口の 8 割を占めていた農民数[82]を思う時、近代人に向けて表現する近代文学が、彼等をと

---

81 「農民文学が日本近代文学の主流にとってかわるということは決してありませんでした。犬田卯や小川未明がいかに都市文明の退廃と堕落を非難しようと、日本は工業化社会をめざして資本主義の道をひた走るのみでありました。そして文学の主流もまた都市文学である白樺派や耽美派の文学であり、新感覚派の文学であり、昭和初期からの拾年間のプロレタリア文学を含めて日本近代文学の主流はつねに都市文学でした。」堀江泰紹「農民文学の歴史的展開と現代農民文学」『日本文学誌要』32 号（法政大学、1985 年7月）42-50 頁。

82 山口和夫「明治十年代の職業別階層別人口構成」『北海道大學　經濟學研究』13 号（北海道大学大学院経済学研究科、

りあげることが少なかったという事実は、都会と地方、農村との交流が遮られていたとみることができる。都会との往来がある田園小説はあるとして、地方の農民においては都会との距離ははるか遠く、都会の住民には農村の実態はおぼろであった。

「土」は北関東の農村に暮らす貧しい百姓一家の数年間を、四季の自然、村の風俗行事など細緻な描写を交えて描いた作品であった。百姓勘次と妻お品、彼らの娘おつねや与吉、後にはお品の父卯吉といった登場人物たちは、自分たちの貧しさについて考えることをしない。解決策を求めることもないまま、貧しさに喘ぎつつ生きている。お品は貧しい生活から堕胎をした結果、身体を毀し苦痛の中で死ぬ。またギリギリまで追い込まれた暮らしのなかで、勘次は他人の作物を盗むこともあり、年頃となった娘おつねを離すまいと拘束するまでになる。他の登場人物の暮らしも貧しく、事態の改善に向かおうとする姿勢は見られない。長塚は、明治時代の農民の抜き差しならない貧困や悲惨を淡々と描写することに終始していた。

これとは対称的な農民が大正になって描かれている。大正 12 年（1923）3 月の『解放』に発表された金子の「地獄」である。旱魃、飢えという厳しい環境にある農民の貧しさを主眼にしつつも、その解決に目を向けて、問題解決のために闘う農民たちを描きだしていた。金子の描く農民たちは、大地主に自分たちの権利として、蔵米を要求する。これは人間らしい暮らしを守るために立ち上がり「闘う」農民の文学であった。農民を視野にいれた金子が書き表した農民文学には、自然と融和しながら暮らす人々の生命力、村に生きる農民の生活する姿があった。金子の代表的な作品のひとつである。

第2節　農民文学と『種蒔く人』

『種蒔く人』という誌名と、土崎版の表紙に描かれたミレーの同題の絵は金子洋文が選んだものである。金子には、労働者向けの雑誌に農民を含めることについて、違和感がなかったことになる。『種蒔く人』創刊時から、農村で働く人々を読者として意識していた金子には、農民の存在が近かったのである。土崎港町の周囲には農村地帯が広がっており、土崎版の同人である畠山松治郎は、その地に代々住む肝煎り[83]の家の息子であった。『種蒔く人』には、農民の心を伝える「農民文学」[84]作品が掲載されていた。

1957 年）35-54 頁。「農林業センサス累年統計　－農業編－　総農家数及び土地持ち非農家数」によれば、明治 37 年以来大正昭和初期の農家戸数はほぼ横ばいである。http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/images/xls.gif（2013 年 11 月 26 日参照）

83　小牧の父、近江谷栄次はその家の出自。

84「農村の風土や生活体験にねざし、農民独自の立場から主題を展開した文学」『日本国語大辞典　第二版』（小学館、2001 年）、「農村生活の実態を農民の立場に立って描き出した文学。農民の労働体験に基づいて書いた一種のプロレタリア文学をもいう。」『広辞苑　第五版』（岩波書店、1998 年）

大正 15 年（1926）に新潮社が刊行した『農民小説集』に掲載された作家と作品をみると、金子や今野賢三をはじめ、小川未明、中西伊之助、秋田雨雀、細田民樹など、『種蒔く人』同人や彼らと親しい書き手が多い。

『種蒔く人』が特集したテーマは、「水平社運動」、「無産婦人」というように、社会的弱者をとりあげたものが多い。最終号（大正 12 年 8 月号）のテーマは、苛酷な環境に置かれた農民たちを伝える「農村」特集であった。また、「地方欄」という地方の読者からの投稿を載せる欄があり、そこには地方農村からの声も多かった。ここでは『種蒔く人』の誌面で、農民の生活がどのような描かれ、それが農民文学にもたらした影響を、金子との関わりを中心に検討してみる。『日本農民文学史』（1958 年）[85]冒頭で、犬田卯（1891-1957）は以下のように述べている。

> 農民文学として、ある一定の内容、主張を持ち、目標（目的意識）をもって広く世間に呼びかけて来た文学ジャンルが、初めてわれわれの前に姿を現わしたのは――言いかえれば、それが新しい文学運動としての形を取りはじめたのは、実に、大正十二年三月からのことであり、そして、直接的にその動機となったものは、その前年（大正十一年）十二月二日、東京神田の明治会館で行われた『シャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会』であった。

「シャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会」は、小牧がフランス在住時に知り合い、共にアンリ・バルビュスのもとを訪ねた吉江喬松と企画したものである。小牧はフランスにいたときから庶民の質素な生活を描くフィリップの作品を愛読していた[86]。小牧は大正 8 年（1919）12 月に帰国してすぐの大正 10 年（1921）には、『フィリップ全集、第一輯』として、「シャルル・ブランシャアル」を翻訳して、叢文閣から刊行した。この作品は、木靴つくりを生業とした彼の父の生活を描いたもので、フランスのある田舎町の日常がとりあげられている。小牧は、日本でもこうした地方の生活を味わい深く描くような作家の登場を心待ちにしていたという。

「シャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会」を予告する新聞記事[87]のなかで、小牧は、「地方の疲弊、それらに手をさし延ばそうとしない都会の芸術家、思想の労働者の不用意から、地に住む人々は益々苦しんでいる」と指摘し、さらに「都会に向きがちな地方の芸術家に向かって、百姓の友達、農民の代弁者たるべき芸術家がこの国にも数々現れてほしい。もっと地方的に動いていいのでは

---

85 犬田卯著、小田切秀雄編『日本農民文学史』（農山漁村文化協会、1958 年）

86 小牧近江『ある現代史』（法政大学出版局、1965 年）40～42 頁。

87 小牧近江による、フィリップの講演会予告記事「地から生まれる芸術の要求」は、『東京朝日新聞』（1922 年 10 月 3 日～5 日）の「学芸欄」に連載された。

ないか」と語る。その具体例として小牧自身の従兄弟で、『種蒔く人』の同人で未完の小説「貧乏人の涙」という農民文学作品を書いた畠山松治郎（1897-1945）を紹介している。

> 僕にひとりの従弟がある。その従弟がかつて創作をしようとした。僕は彼に言つた。君は農村に生まれた。誰よりも農村の生活を知り、生れながらにして農村の苦しみを知つている。どうか、ありのまゝの農民の生活をわれらに知らしてくれ。…（略）…彼は郷里に踏みとゞまつて秋田の農民運動にいそがしい。

『種蒔く人』土崎版創刊号の編集後記は、「偽りと欺瞞に充ちた現代の生活に我慢しきれなくなつて「どうにかしなければならない」という氣持が一つとなつて生れたのがこの雑誌です。」という言葉から始まる。秋田県土崎港町の周囲には農村が広がっていた。金子や畠山らがテーマとしてとりあげた当時の秋田県を中心にした農村の現実の暮らしをここでとりあげる。

第3節　近代日本の農村の窮乏

小牧近江は生活の中にある文化から生まれる文学こそ、社会の仕組みに目が行き、改革の必要性を自覚することにつながっていくと考えていた[88]。金子や畠山が書いた農民小説（後述）には、当時の農民たちの現状とその原因が織り込まれて描かれている。

農村の窮乏は、明治になって貨幣経済が浸透した影響が大きい。近代化を急ぐ明治の日本では、それまでの幕藩体制から中央集権制度に移り、近代化のためのインフラ整備（教育や情報の環境も含まれる）が立ち遅れる中で、地方は都会より下位という位置づけが確立していった[89]。資本主義経済の枠に組み込まれた価値観の中で、貨幣経済に乗り遅れた経済基盤が弱体とされた地方農村の相対的地位は低下し、同様の意味から地方農民もそれに連動していったのである。

与えられた土地での耕作にしばりつけられた生き方をしてきた農民にとって、実物経済から、いわば架空のものが本質である貨幣、金融経済へ移行した動きは、大きな分水嶺となった。近世までの農村経済では貨幣の出番は少なく、百姓たちは貨幣の手持ちは乏しかった。多くの者は自らの米を貨幣

88　野淵敏・雨宮正衛『「種蒔く人」の形成と問題性―小牧近江氏に聞く―　秋田県大正文芸史の研究』（秋田文学社、1967 年）25 頁。

89　高根正昭『日本の政治エリート―近代化と数量分析』（中公新書　429）（中央公論新社、1976 年）一代目は明治維新の功労者たちが占めていた政府中枢は三世代目となると学歴階層で識別されるようになる。高学歴を得るためには教育機関がある都会の住民となる必要があり、地方には得られない環境であった。高学歴者たちは都会生活における大学生活を共通の世界観として持つことになる。都市文化は地方文化より上位階層として位置づけられることになったのである。

に換金する方法も持っていなかった。しかし、社会のしくみはこれまでの米を中心とした石高制から貨幣制による金融経済への移行が著しく進展する。明治 6 年（1873）の地租改正によって、土地の私的所有権が確立され、土地の持ち主は現金で納税しなければならなくなった。さらに、村単位とする賦課体系を廃し、個別の土地単位で賦課されたのである。通貨をもたない農民たちは地主に金納してもらい、先祖代々耕してきた田畑を耕し、藩に米を納めたように地主に物納してゆくことになる。現金収入が少ない農村の大多数の農民は、自らが耕す土地を売るしかなかったのである。

この地租改正から土地の私的所有は急速に進み、自作農の漸減と、その結果として寡占地主と小作農の増加をもたらした。加えて明治 15 年（1882）のいわゆる「松方デフレ」と呼ばれる政策の結果、米価が暴落した。自前の流通ルートを持たない小規模の農家の経営は難しく、米作だけではなく副業として野菜や果物、養蚕などに努めても、高い小作料のために小作の生活は終始赤字となっていた。農民は、地主や彼らが経営する地方銀行から小売りの利子で金を借りて、毎年の赤字をうめるしかなかった。多くの自作農が小作農となった。

秋田県の例をあげてみる。南秋田郡飯田川町の場合、明治 23 年（1890）から 9 年後の明治 32 年（1899）には、自作農が 135 戸から 73 戸と約半分に減り、小作農は 80 戸から 135 戸と増えている[90]。少数地主への土地の集中が進んだ。

さらに、村外からの豊富な資金をもった者による、土地への投資が行われるようになり、大地主、不在地主が増えていった。地主たちの中には、小作人をまるで農奴のようにあつかうものもあったという[91]。土地を失った農民たちはやむなく都会へ流出して労働者となった。高利の借金返済と毎年の赤字で借金がさらにふくらんだ農民たちは、土地を失い、自分や子供たちともども労働力を唯一の頼りに厳しい暮らしをするしかなかった。

明治末年には、「自小作を行う小資産者は〈一家ノ経ノ最モ困難ニ陥リタルモノ〉」とされるが、村内における負債の 6 割がこの層にあって、「モッカ破産ニ瀕シツツアルモノ少シトセズ」（『秋田県史県治部 第三冊』秋田県、1917 年）と指摘されている村の例がある。

男鹿半島や八郎潟周辺の農村は半農半漁の地で、北海道には松前藩の時代からこの地からの出稼ぎ農民達がいた。貴重な現金を稼げる漁業の仕事を求めたものではあったが、北の海の仕事は厳しく、

---

90 秋田近代史研究会編『近代秋田の歴史と民衆』（秋田近代史研究会、1969 年）81-82 頁。（元資料として『秋田県史第 5 巻』秋田県、1917 年）460 頁に準拠とある。

91 当時の農村に大きな変化が生じている様子を伝えている証言が記録されている。「小作人ニ対スル地主ノ態度ハホトンド奴隷視スル者有リ、其小作料ヲ貪リ其小作地ヲ奪ヒ去ルカ如キハホトンド朝飯前ノコトニ属シ、…」昭和町伝承館所蔵「乾田奨励状況と稲作五害調査(仮題)」(1911 年 7～9 月回答)『秋田県史』同上 81 頁。件の農事調査に、山本郡鵜川村農民田森忠左衛門が回答した中に付されていた（勝部眞人「明治・大正期における農業技術の革新と農民-広島・秋田両県の比較から-」『広島大学文学部紀要』57 巻特集号 1、1997 年、84 頁）

命がけの覚悟が必要で、農村での生活が行きづまった者が最後にもとめる選択とされた[92]。

藩政の時代は、村民が管理し共有財産とした山からの収益もあり、飢饉の際にも、海からの産物で飢えを凌ぐことが可能であったが、それが明治維新以後は、山林の多くが内務省所有とされて、山からの収益が村に入らなくなった。この結果、山林の手入れが行き届かなくなり、里山や山野の荒廃がすすんだ。

近代化による新しい問題が出現していた。農具の違いによって生産性の差が生まれ、農村における階層化を生む。農民社会は、地主と小作、小作も出入り、水呑みと分断された。さらに徴兵制度という国家への義務が重くのしかかっていったのである。

兵制を抜本的にあらためた明治政府は、士族だけでなく、士農工商のすべてにたいして兵役の義務を課した。明治 6 年（1873）以降、徴兵令は改正を繰り返し、明治 22 年（1889）に発布された「大日本帝国憲法」では、「兵役ノ義務」が「納税ノ義務」とともに、国民の最も基本的な義務と規定されたのであった。

当初の徴兵制度では、嗣子や官僚、代人料を払うことなどで免役となる事が多く、兵役についたのは 20 歳男子全体の 2 割足らずであったが、この 2 割の多くは、農村の自作農、小作農の次男、三男たちであった。彼らには金を払って兵役を逃れるような術はなかったのである。そして明治 20 年（1887）頃には、在郷軍人会や地方有力者による徴兵制を支援する体制がすすみ、村ぐるみで徴兵制度に協力する体制が定着していった。西南の役、日清戦争、日露戦争と、戦争を重ねるごとに形成され堅固になっていき、「四民による天皇の軍隊」という考えと体制が確立していったのである。その陰には、徴兵によって有力な働き手を奪われる農家があり、その不在分の労働をのこった女子供や年寄りが代わりに引き受けなければならなかった。兵士の死亡や傷痍は避けられず、日露戦争後には、秋田の農村でも、死亡した者や傷病した者の姿が多くみられるようになった[93]。反面、褒章で軍人年金を受け取り暮らしが楽になるなど、軍隊は農村にとって貴重な職となってもいたのである。昭和期の農村社会において、男は兵隊、女は女郎という選択は日常的にあった[94]。男女ともその肉体を贖う悲劇といえる。だが彼等をひとくくりに悲劇というだけで言い表すことは難しい。親元の飢えて辛い当時の村にいるよりは数段楽でましな結果をもたらす可能性があった就職先、という側面を否定することはでき

---

92 北海道は起死回生の可能性をもつ未開の地であると同時に、危険な外地であった。「竈けぇし」（破産の意）が、北海道に行ったと聞けば、いかな借金取りでも、そこで追うことをやめたという話を、筆者も大正生まれの男鹿出身者である人達から聞いたことがある。当時広く伝承していた。

93 『日露戦役勲績栄誉録』（出版同志会、1908 年）には、県内町村ごとの戦死者と勲章について記され、どれほどの戦死者があったか伺い知ることができるが、さらに遺された家族への年金弔慰金まで記されている。軍功を認められた戦死者を伝える資料であることから病死・傷病者らの悲劇はみえにくいものとなっている。

94 筆者の周囲にいた、秋田県内農村（男鹿、仙北）に住んでいた大正生まれの人々から聞き取りした。

ない。それほど生活は貧しく生きにくかった、当時の村人の過酷な現実があったのである。

第4節　『種蒔く人』誌面にみる農民文学

犬田卯著、小田切秀雄編『日本農民文学史』（農山漁村文化協会、1958 年）の巻末には、小田切秀雄と文芸評論家の南雲道雄[95]が編んだ「日本近代農民文学史年表（作品一覧表）」が付されている。農民文学の定義として、農民と農村の生活にふれているもの（ただし作品のうちの一小部分または小道具のようなものとして農民・農村生活が出てくるものは除いたとある）を掲げることにしたとしている。農民文学とされた作品一覧中で雑誌『種蒔く人』に掲載されたものは、以下の通りである[96]。

（表 2）『種蒔く人』における農民文学作品一覧　　「日本近代農民文学史年表（作品一覧表）」から抜粋

発行年号	形式	作品名	著者名
大正 10 年 4 月	詩	若き農夫よ（詩）	金子洋文
大正 10 年 4 月	小説	貧乏人の涙	赤毛布＝白（ママ）山松次（ママ）郎
大正 10 年 11 月	小説	村長殺し	片岡　厚
大正 11 年 1 月	小説	雄阿寒おろし	神近市子
大正 11 年 3 月	小説	夜の水車	金子洋文
大正 11 年 4 月	小説	土地と自由	三和一男
大正 11 年 6 月	小説	帰村せる署長	飲（ママ）田徳田（ママ）郎
大正 11 年 12 月	評論	擡頭期にある農民芸術について	松本淳三
大正 12 年 5 月	評論	労農婦人の印象	鈴木茂三郎
大正 12 年 6 月	小説	酒	金子洋文

※金子洋文の作品欄は着色

小田切・南雲がとりあげた『種蒔く人』に掲載の農民文学とされた作品数は 10 作であり、そのうちの 3 作が金子の作品である。掲載された農民文学作品 10 作のうち、小説は 7 作である。筆者のみるところでは、『種蒔く人』に掲載された農民に関連する記事は 37 点[97]あるが、その中で小説はやはり 7 作、記事数の約 19 パーセントである。『種蒔く人』に掲載された農民文学とされる作品数が少ない理

95 南雲道雄は日本農民文学会の『農民文学』編集長を務めた。『土の文学への招待』で農民文学功労賞を受賞した。
96 「農民文学」の定義は各論があり、採択する際の基準として「何らかの仕方において農民と農村の生活に触れているものは大体すべて掲げることにした」と述べている。
97 『種蒔く人 復刻版』（日本近代文学研究所、1976 年再販）による。

由として、ふたつの理由が考えられる。

農村の人々を描いた小説は 7 作、評論が 5 作あるにもかかわらず、ここでは農民文学作品として数えられていないものがある。何をもって農民文学とするかという定義の違いから含まれていない作品があることが、理由のひとつといえる。たとえば、犬田卯の主張する農民文学とは土を耕す農民からの文学であり、土仕事をする者が書いた作品をもって農民文学としていた。ふたつめは、原稿料や読者数の関係から、他の雑誌に発表されることが多いことも原因と考えられる。たとえば、金子は農民文学である自作「地獄」を『種蒔く人』ではなく、他誌の雑誌『解放』（大正 12 年(1923)3 月号）に掲載していた。

『種蒔く人』は文芸誌というだけではなく、東京版では、題字の下に「行動と批判」と記しているように、思想を伝える活動に力点をおいていた。したがって、この雑誌と農民や農村とのかかわりを検討するために、文学作品だけでなく、記事の中から農民や農村に関して同人や他の寄稿者が書いたものを抽出すると、（表 3）のようになる。頁量が多い書き手、上位三人には着色した。ここでは、同人以外の投稿記事は 1 頁を超えるもの、目次に題が掲載されているものから採ることとした。

（表 3）『種蒔く人』における農民、農村に関連する同人記事一覧

発行年号	形式	作品名	著者名	頁数
大正 10 年 2 月	解説	チェホフの『農人』から（一）	洋文(＝金子洋文)	3
大正 10 年 3 月	解説	チェホフの『農人』から(二)	洋文(＝金子洋文)	3
大正 10 年 3 月	詩	若き農夫よ	ようぶん(＝金子洋文)	1
大正 10 年 4 月	解説	チェホフの『農人』から(三)	金子洋文	4
大正 11 年 3 月	小説	夜の水車	金子洋文	13
大正 11 年 8 月	批評	唯一の女流作家-村の反逆者を読む-	(洋文)＝金子洋文	2
大正 12 年1月	批評	浅草と百姓の生活-『国境の夜』を読んで-	（洋文）＝金子洋文	2
大正 12 年 4 月	批評	Young Communist の「地獄」評	不知火（=若松不知火）	3
大正 12 年 4 月	批評	要求条件一つ	（亮）＝山川亮	1
大正 12 年 4 月	批評	「地獄」評	（光造）＝津田光造	1.5
大正 12 年 4 月	批評	金子の「地獄」	（弘二）＝松本弘二	0.5
大正 12 年 6 月	小説	酒	金子洋文	15
大正 12 年 8 月	随筆	公園で遭った百姓	金子洋文	3

大正 10 年 2 月	小説	貧乏人の涙(一)	M生 (＝畠山松治郎)	5
大正 10 年 3 月	小説	貧乏人の涙(二)	赤毛布(＝畠山松治郎)	6
大正 10 年 10 月	地方欄	赤光會便り	M生(＝畠山松治郎)	1
大正 10 年 12 月	地方欄	八郎湖東より	刹州(＝畠山松治郎)	2
大正 11 年 1 月	地方欄	故村より	刹州(＝畠山松治郎)	3
大正 11 年 4 月	小説	青年指導者	津田光造	9
大正 11 年 10 月	小説	遺産	津田光造	6
大正 12 年 3 月	批評	本営戦と外営戦　農村青年の前進の項	(季吉) ＝青野季吉	0.5
大正 12 年 6 月	評論	大衆の創造性	(青野)＝青野季吉	1.5
大正 10 年 11 月	小説	村長殺し	片岡厚	10
大正 10 年 11 月	地方欄	岐阜の増水	峰人生	1
大正 11 年 1 月	小説	雄阿寒おろし	神近市子	14
大正 11 年 1 月	地方欄	社会思想の田園的浸潤としての小作人組合	矢部甚吾	5
大正 11 年 2 月	地方欄	農村文化の提唱		2
大正 11 年 4 月	評論	土地と自由	三和一男	4
大正 11 年 4 月	批評	末弘博士の永小作権	小牧近江	1
大正 11 年 4 月	地方欄	小田原より	峰人	3
大正 11 年 4 月	地方欄	岐阜の農村より	備前又二郎	2
大正 11 年 4 月	生活	小作人の生活	天川佐吉郎	2
大正 11 年 3 月	詩・画	牛に牽かれて	穴明共三＝柳瀬正夢	1
大正 11 年 11 月	評論	「擡頭期にある農民芸術について」地から生まれる芸術の要求	(淳三)＝松本淳三	2
大正 12 年 5 月	評論	労農婦人の印象	鈴木茂三郎	5
大正 12 年 8 月	題言	農村苦		1
大正 12 年 8 月	評論	農民の社会的立場	平林初之輔	2.5
大正 12 年 8 月	感想	お百姓あひて	前田河廣一郎	4
大正 12 年 8 月	感想	農民芸術の考察―『農夫喜兵衛の死』	今野賢三	3.5
大正 12 年 8 月	感想	農村と思想家	山田清三郎	1

（表 3）から明らかなことは、『種蒔く人』にみえる農民関連の記事を提供したのは、金子洋文の 11 作（うち 1 作は 3 回連載）、頁数を合計すると 52 頁、次いで畠山松治郎の 4 作（うち 1 作は 2 回連載）で 17 頁、津田光造（1889-没年不明）の 2 作で 15 頁の順となる。畠山の場合、彼が書いた小説は「貧乏人の涙」のみであるが、小説以外で農民の暮らしや運動といった農村の現状を「地方欄」で報告をしている。津田光造の作品は、農民文学作品として（表 2）に含まれていない。2 篇とも農村に住む知識人の無力を描くものであり、農村の描写とは目されなかったのであろう。ここでは農村には農民以外も住んでいたという観点から、農民文学として含めたものである。（表 2）では農民文学作品に含まれていないが、青野末吉は批評と評論が 1 点ずつある。彼ら以外は 1 作ずつのみとなる。

金子の場合、『種蒔く人』に載せた小説「夜の水車」と「酒」、他誌である『解放』（大正 12 年(1923)3 月号）に発表した農民文学作品「地獄」について同人たちが言及した批評、「Young Communist の「地獄」評」、「要求条件一つ」、「「地獄」評」、「金子の「地獄」」4 点、6 頁が載っている。他作家が書いた農民文学作品への感想「唯一の女流作家―村の叛逆者を讀む―」、「浅草と百姓の生活―『国境の夜』を読んで―」他、詩や解説、随筆などがある。

金子が、農民の現状に対して読者の関心を喚起する上ではたした役割は、単に彼が書いた作品だけではない。金子が他誌に発表した「地獄」に言及した他の同人たちの記事が多数あり、同人はもとより読者の関心も農民の世界へ向けさせる、きっかけの役割をはたしていた。

第5節　金子洋文「チェホフの『農人』から」にみる農民への共感

金子洋文の「チェホフの『農人』から」と題された解説は、『種蒔く人』創刊号に掲載されたもので、『種蒔く人』創刊当時の金子が農民についてどのような問題意識を抱いていたかを知る手がかりになる。「農人」は 1887 年 4 月に発表された、アントン・チェーホフ（Ａｎｔｏｎ Ｐａｖｌｏｖｉｃｈ Ｃｈｅｘｏｖ:Anton Pavlovich Chekhov、1860-1904）の中編小説（原題Ｍｕｊｉｋｉ）のことである。なお現在は「百姓」と訳されている。

「農人」は、モスクワのホテルでボーイとして働いていた男が病気になり、妻とひとり娘を連れて田舎の実家に帰るところから始まる。生家に帰った男は結局、そこで息をひきとり、彼の妻と娘が村を出ていくまでの数ヶ月間が著されている。全部で 16 人の「家族」が狭い今にも倒れそうな百姓屋で生活し、家畜にもおとるような不潔な暮らしのなかで、酒におぼれ、荒み、罵りあう農民たちの姿が描かれている。どうしようもない現実の生活の中での主人公の死を告げた描写の場面は追突に「ああ、

何という長い、厳しい冬だったろう！」という詠嘆の文章で切り替わり、男の死は忘却され現実の描写が続いていく。

金子が『種蒔く人』で最初にとりあげたロシアの小説が、人道主義を唱えるトルストイではなく、チェーホフの作品であったことに注目したい。自身の才覚で農奴から解放された祖父を身内に持ち、自らも苦学して大学で医師資格を取得したチェーホフは、この短篇小説の登場人物に、「百姓だって人間なのだ。人間並に悩みもするし泣きもする…」と語らせている。ロシア文学者の浦雅春は、その著書の中でチェーホフが「作家の任務は「解決」することではなく「提示」することだ」と述べたとし、彼の感情を排した文体は映像を並べる映画的な思考による[98]と説明している。

淡々と書き進められていく日常、緻密な表現を積み重ねて、農民たちの日常をさりげなく描写するなかで、彼らの生活をしばりつけている苛酷な現実を読む者に感じさせるチェーホフの描写は、一大叙事詩を展開するトルストイとは異なり、当時のロシアの人々がおかれた状況をリアルな描写で伝えている[99]。「チェホフの『農人』から」で金子は、貧しさがもたらす醜悪さを伝えながら、チェーホフの淡々とした情景描写から女性や弱者に注ぐいたわり、終始人間への希望を残している仄明るさも伝えていた。金子のみならず当時文学を志した青年たちは、こぞってチェーホフの作品を読み影響をうけていた。日露戦争以来、ロシア文学への関心は急速に高まり、チェーホフの戯曲は次々翻訳され[100]、数多く上演されていった。「自由劇場」の市川左団次と小山内薫が明治 43 年（1910）にチェーホの『犬』（原題「結婚申し込み」）を有楽座で上演して以来、大正 3 年（1914）1 月に島村抱月と松井須磨子の「芸術座」が『熊』を、翌年 7 月「近代劇協会」が『桜の園』を上演し、その後も『ワーニャおじさん』、『かもめ』と彼の作品は数多く上演されていた。

金子は解説文の冒頭で次のように語っている。金子が是とするチェーホフの姿を伝えることで、金子自身が目指すものを表白しているかのようである。

> チェホフは我々に向って決して説教を試みなかった、そして又彼は決して善と悪と最善と決定しなかった…（略）…人生は寂しい、苦しい、けれ共我々は決して絶望してはいけない、…

金子は「農人」に描かれたロシアの農民たちの姿を、日本の農民の現状に置き換え、日本の農村で

---

98 浦雅春『チェーホフ』(岩波新書)（岩波書店、2004 年）

99 同上「十九世紀末のロシアを知るにはチェーホフを讀むのが一番」40 頁。

100 瀬沼夏葉「月と人」（後の邦題；別荘の人びと）『新小説』（1903 年 8 月）が最初に翻訳紹介して以来、翻訳と紹介が進んだ。俳句の忌日に「チェーホフ忌」があり、中村草田男（1901-1983）の「燭の灯を煙草火としつチェホフ忌」（1937 年作）という句がある。宮沢賢治は「マサニエロ」『春と修羅』（関根書店、1924 年）中に、「蘆の穂は赤い赤い /ロシアだよ チェホフだよ」とある。

も同様な情況があることを指摘した。そして病の兄を弟嫁が罵る場面を引用しつつ、彼女が発するその「恐しい言葉」は、今日の農民や無産階級の人びとが心の底に待つ感情を正直に言葉で表現したのだとし、金子は、「貧困の前では、倫理道徳は意味をもたない」と断じていた。

さらに彼は、貧しい農民たちは無知だが、そのおかげで地主が助かっているとして、読み手に、農民の無知を罵る前に、境遇に左右される人間性に目を向けようと訴えている。文中では「飲め農民よ。狂え労働者よ。だが君等は何よりも先づ理性に眼覚めなければならない。」と農民に呼びかけていた。金子は、貧しさから貞操を売らざるを得ない女性の現実や、盗みをしたことがある自身の経験から、貧乏がどんな悪事も平気にしてしまうことを断言したのである。

チェーホフの原作は、生活に追われる農民たちの中に放置された病人が亡くなる様子をわずか数行だけの描写ですませていた。夫（父）の死への反応も葬儀の場面もなく、春になり墓の前にたつ妻と娘が、村を出て行く姿を描く。日々生きることに精一杯な貧しい農民の生活の中では、その死を嘆く人間的な気持ちさえやり過ごす。語られないことが、重さを感じさせるものとなっている。

そして、それまで過ごした村を立ち去った寡婦と娘が、次に訪れた村の立派な家の前で「御慈悲深いクリスチャンの方々」、「どうぞキリスト様のためにお恵み下さいまし、あなた方のために神様の祝福をお祈りいたします。あなた方のご両親様が、平和な天國に眠りなさいますように」と物乞いをする作中の言葉を引用した後、金子は「左様なら不幸な人々よ。」と告げ、この解説を終える。

金子は「飢えと戦争を防げない文化は真の文化ではない。」という言葉をよく使い、貧困がもたらす悲劇を語っていた。また金子の家族は、「父は、寄ってくる者は受け入れるが、去る者を追うことはしなかった」[101]と語っている。人を責めずに現実を重視する姿勢は、すでにこの初期の文章でもうかがうことができる。

秋田出身の作家、伊藤永之介は、勤務先の日本銀行秋田支店近くにあった石川書店の店頭で、創刊されたばかりの『種蒔く人』土崎版を手に取って読んでいる。そしてその後、金子を頼って上京し、雑誌『文芸戦線』に参加し、その主力作家となり、貧しい農民たちの生活を、共感をこめて書く農民文学の書き手となる。金子の影響をうけていた伊藤は終生を通じてチェーホフの熱心な読者であった[102]。分銅惇作は伊藤の農民文学の傑作とされる「梟」に、金子の「地獄」の影響を示唆している。農民文学の系譜は、金子の「チェホフの『農人』から」によって始まり、「地獄」からの影響を経て、伊藤に受け継がれていったとみることができよう。

101　金子洋文の息女、木下雪子氏、金子功子氏談（2013 年 5 月 18 日に聞取り）

102　高橋秀晴「伊藤永之介年譜」『国文学解釈と鑑賞』別冊（至文堂、1903 年 9 月 15 日）194-202 頁。

第6節　畠山松治郎の農民文学―「貧乏人の涙」

『種蒔く人』に掲載された文学作品のなかに、後に社会運動家に転じた畠山松治郎が著した「貧乏人の涙」という小説がある。農村のくらしを描いた、農民文学として先駆的な作品であった。農村の貧しさがもたらした悲劇をみすえた小説で、畠山が創作、未完に終わった作品である。2 節で紹介した、大正 10 年（1922）年 10 月、『朝日新聞』に掲載された「地から生まれる芸術の要求」で小牧近江が彼を紹介している。小牧は畠山に次のようにいったという。

> 君は農村に生まれた。誰よりも農村の生活を知り、生れながらにして農村の苦しみを知つている。どうか、ありのまゝの農民の生活をわれらに知らしてくれ。

『種蒔く人』の創刊号と第 2 号に続けて掲載された「貧乏人の涙」の著者名は、（一）はM生、（二）は赤毛布となっていた。畠山松治郎が本名を用いなかったのは、その小説の内容にあった。「貧乏人の涙」は、小作農家の悲惨な実態を具体的に記述したもので、小作たちの犠牲の上にあぐらをかく地主への批判を赤裸々に告発した小説であった。畠山は八郎潟近くの一日市という村に住む地主の息子で、現に一族の土地に住んでいたことから匿名にする必要があったのである。

小説には、「金持ちになるには段々悪企みがうまくならねばいけない。世の中は悪で固まった金持ち丈けが生きて行く権利があるのか。駄目だ、駄目だ、此ままの社会組織にして置かれるもんか」という文もある。地主である実家を批判することに繋がるこの小説を、実名では発表できなかった。畠山の小説は（三）まで書かれていたが、この小説の書き手が畠山であることを知って激怒した長兄から日本刀をもって追い回され、勘当されたため[103]、原稿は出せずに終ったという。

大正 10 年（1921）当時、日本の文学界には、農民たちの視点にたって農村を描いた小説は少なかった。まして農村のくらしの現実を詳細に書くことができる書き手はまれであった。

そのような中で農村の現実を、リアリティをこめ描き得た畠山松治郎は、どのような人物だったのか。彼は明治 27 年（1894）年 12 月に畠山鶴松の 4 男として生まれた。一日市（現；八郎潟町）の小学校を卒業した後、伯父の近江谷栄次によって上京し暁星中学に入学する機会を得た。大正 2 年（1913）3 月、暁星中学を卒業したが経済的理由から進学は断念、昼は弁護士事務所で働きながら、夜学の電気学校で学び、大正 9 年（1920）に近江谷栄次が経営する近江谷鉱山で働くが不振のため、同年、故

---

103 大地進『黎明の群像』(秋田魁新報社、2002 年)73 頁。

郷の一日市村に帰り、実家の郵便局や養鶏などに携わった[104]。

弁護士事務所で働いていたときには、同じ事務所に民権派の弁護士山崎今朝弥がおり、彼と関係のある堺利彦や大杉栄などが出入りしていた。山崎は自ら平民学校をつくり社会主義の啓蒙教育をすすめていて、畠山は彼等から社会主義思想を教えられた。そして大正 9 年（1920）につくられた日本社会主義同盟に参加している[105]。彼は若くして本格的な社会運動と関わりをもっていた。

「貧乏人の涙」の物語は、社会運動家らしいMが、都会生活で身を持ち崩してしまったＳから過去に受け取った手紙―Ｓが子供だったころ目にした農民の暮らしと思いを回想したもの―を読むという形で進んでいく。手紙は美しくも、ときに厳しい自然の豊かな八郎潟の近くに住む、半農半漁を生業にする農民一家の暮らしと苦しみを伝えるもので、日露戦争前後の農村の貧窮のなかにある日常と、そこに押し寄せてくる資本主義の重みで押しつぶされそうになる農民の姿を、社会統計的な数字をまじえて物語る。

16、7 歳になる次男がもらう作男としての給金が 1 年で 3 俵とされ小作農である父親が、安すぎると怒る場がある[106]。明らかに生活は立ちゆかないとわかる。それとともに、当時の農村では、労働の報酬が現金ではなく、現物で支払う石高制であったことを示している。

畠山が書いた、別の記事「故村より」では、農村で暮らす者の感慨を伝えると同時に、当時の農村の経済について、具体的な詳しい数値をあげていることが注目される。それによると、農僕の給金が１ヶ月食事付きで 12 円である。大工は 60 円という相場であったから、これも安価であるが、その農僕の給金と比べても、小説中の次男の 1 年間の給金が 3 俵では、かなり安かったことになる。1 年の米俵 3 俵では、大人一人が食べる 1 年の量として、かつかつな量となる。米騒動の高騰した価格で計算しても、1 年の働きが 40 円[107]は、前述した農僕の１ヶ月の給金が食事つきで 12 円であることからみてもひどく安価であることがわかる。

このような環境の中での生活を強いられた彼らには、社会への疑問が宿ってもおかしくないと、畠山は作中で、このような言葉を口にさせている。

---

104 同上、72 頁。

105 日本社会主義同盟に畠山が参加していたことは、大和田茂氏からご教示いただいた。「発掘・日本社会主義同盟名簿--(付)趣意書、規約草案、宣言等（特集 日本社会主義同盟)」『初期社会主義研究』20 号(初期社会主義研究会、2007 年)、「発掘・日本社会主義同盟名簿-その後」前掲 21 号(同前、2008 年)は。日本社会主義同盟名簿についての氏の詳しい論文が載せられている。

106 1 石（＝2.5 俵）の米価は、明治 20 年以降は 8 円から 10 円で推移するが、大正は、投機的な動きがあった。元年は 20 円に急騰する。4 年には 11.85 円、米騒動が起こった7～9 年は 30～40 円と、乱高下が激しい。しかしそれは商品市場の価格であり、高値となっても農村の生産者たちに恩恵は届いていなかった。

107 県農業会議所蔵掛軸「米一石価格」（福井県居関久男氏調べ）より（www.niigatamai.info/userimg/10377/kakaku.html 2013 年 12 月 5 日閲覧）

今の青年は元気がないの、愛国心がないのと云はれてもこんな悲み（ママ）の中に育った子供がどうしてそんなに容易くお調子にのることが出来ませうか。深く考へさせる様に生い立つた青年に盲従を強いることは無理です。（畠山松治郎「貧乏人の涙」『種蒔く人』2 号、15 頁）

一般的に、大規模地主と比べ新興小規模地主の方が待遇は悪く、作男はロシアなどの小説に出てくる農奴のように扱われることが多かったという[108]。作中の次兄が働く先は、この新興地主であり、食事も遠慮を強いられながら食べるといった状態で、そのひどい扱いを訴える描写がある。一方、長兄の勤める先は村一番の地主であるが家作人も多く、待遇もまだましであった。

しかし、こうした農民たちの生活をさらに窮地に追いつめたのが兵役の負担であった。小説でも、長兄は日露戦争で戦死、一家の困窮がすすむなか、身売りして北海道へ出稼ぎにいった次兄は遭難死し、悲惨な農民の境遇をみて育ったために、事務仕事ができる 3 男は都会での工場勤めを選び上京するが、ろくな仕事もなく、行き場のないやりきれなさをかかえて都会の闇に落ちつつある、と農民たちが貧困から抜け出せないでいる先行きを暗示して小説は中断する。

地主の家に生まれ育ち、都会と農村の両方の文化に触れた畠山は、明治・大正の八郎潟沿岸に住む小作農家の現実と、その要因を分析して反映させて描いた作品がこの「貧乏人の涙」であった。だが彼は、この作品以降は、創作の筆は取らず、社会運動家として実践活動に従事し、その観点から『種蒔く人』の「地方欄」に記事を掲載している。農村の現状、小作争議など秋田での農民運動の報告を、具体的な数字をあげて発表することに力をそそいだ。

『種蒔く人』の同人たちは、大正 11 年（1922）の 8 月に、種蒔き社主催で「露西亜飢饉救済講演会」を土崎と秋田で開催し、その盛り上がりを受けて、「秋田青年思想研究会」が 8 月 25 日に設立されている。『種蒔く人』土崎版の同人、畠山と近江谷友治はこの前年に「秋田労農社」を立ち上げて、秋田における労働運動、農民運動の拠点のひとつとなった。ふたりは『種蒔く人』の地方欄に執筆するかたわら、社会運動の指導者の役割をはたしたのであった。

一方、金子洋文はその後も小説や戯曲という形式で、農村を描くことを続けた。彼は大正 12 年（1923）3 月の『解放』に、「地獄」を発表したが、後に新潮社から刊行された『農民小説集』に再録された。この作品によって金子の文壇における評価は大いに高まった。今日のこされている草稿をみると、一頁の冒頭に、「この一篇を種蒔き社同人におくる」と記され、表紙には、「大正十一年七月二八日完成約十日間」と記されている。「露西亜飢饉救済講演会」が盛んに活動中であった秋田の地で書かれたの

108 勝部眞人「明治・大正期における農業技術の革新と農民−広島・秋田両県の比較から−」『広島大学文学部紀要特輯号』57 巻 1 号（広島大学文学部、1997 年）81～84 頁。

であった。

「地獄」は、旱魃で水不足に陥った村の若い小作人たちが団結して、横暴な大地主、酒田（作中では酒田大納言と称され、権勢ぶりを表わしている）をやっつけるという内容で、農村での運動の可能性を伝えるものであった。作中にある酒田の搾取を糾弾する農民の姿は、当時の平均的な農民というよりは、労働運動に目覚めた者達の姿で描かれている。中心となる農民の名前には、松治郎、友治といった、『種蒔く人』の同人のものが使われており、畠山や近江谷が青年たちに社会思想を広める指導者として活動していた現状をふまえた作品であった。「地獄」が、『種蒔く人』の誌面でも大きくとりあげられて議論を呼んだことは先に述べたとおりである。

第7節　金子洋文の農民文学―「地獄」、「赤い湖」

「地獄」は、秋田の農村を舞台に描かれた小説で、大正 12 年（1923）3 月に雑誌『解放』に掲載された。その後、大正 15 年（1926）に新潮社から刊行された『農民小説集』に収録されている。現在は須田久美編『金子洋文短篇小説選』（冬至書房、2009 年）で読むことができる。そのあらすじは次のとおりである。

雨の降らない A 村の、熱湯が噴き出す「地獄」と呼ばれる場所の地響きと、熱暑で川の水も枯れたために、作物へあたえる水を運ぶ苦役の描写からはじまる。だがこの水やりも激しい旱魃には焼け石に水で、苗は次々に枯死していく。農民たちはただそれを見つめるほかはない。村の主だった 9 名の百姓は、善後策を講じるために平吉の家に集まる。平吉の家は、以前は村でも有数の裕福な農家だったが、今は昔の影もない。ただ彼には、明るくて美人の女房がいる。平吉の家に集まった彼等の意見は、老人と若手でふたつに分かれる。老人たちは雨乞いを主張し、若手は村の大地主、酒田大納言（酒田の本間家がモデルとされ、大納言は酒田家当主の敬称という設定）に、小作料の値下げと、飢饉のときの米蔵の解放の申し出ることを主張して対立する。そして話し合いの結果、この両方を行うことになる。

酒田寄りの人物が多い保守的な老人たちと、地主の酒田のやり方に義憤を抱く若手との論争が繰り広げられ、そのやりとりから小作料で富を築いた酒田が村の財政を牛耳り、資金を村に還元することなく町で温泉を経営し、資本家へと変貌していたことが明かされる。酒田と平吉たちの交渉によって、酒田の本質が分かるにつれ、彼を崇拝していた村人たちは、崇拝の対象から自分たちの敵として認識するようになっていく。

一方、村では雨乞いの神事が行われる。村で一番魅力的な平吉の女房も巫女として参加しその妖し

い魅力が一層強調されていった。雨乞いの太鼓の音が、噴出する熱湯の地響きと相まって村中に広がって行く。そして事態は急速に破局へと向かう。彼女の魅惑に幻惑されて襲った酒田を取り押さえた村人たちは、それが酒田とは気づかず神事を妨げる者への懲罰として、地獄に投げ込みに進むのだった。

「地獄」の舞台は、今も熱湯が噴出し、轟音とともに大地の響きをあげる秋田県八幡平温泉郷の御生掛温泉で、ごつごつとした岩だらけの村の風景は鷺の湯温泉から借りている。大地のエネルギーを伝えていて、熱湯と有毒ガスの噴出する「地獄」の環境を、金子洋文は農民の生命力と精神的、肉体的飢餓感をあらわすために巧みに利用している。

「地獄」で表現された、根源的なパワーを秘めた農民の素朴な肉体がもつ魅力にも注目したい。優れた感覚表現で描かれた場面がいくつもある。

灼熱の熱さと喉の渇きをこらえながら、作物に水を運ぶために男も女も作業中は裸になる。少ない水を争って女同士が裸体のまま掴み合いをする。それをただぼんやり見つめるだけで止めようとしない男たちの無反応さを伝えるこの場面は、面白さと共に農民の追い詰められた状況を活写している。

日照りが心配で夜寝つけず、「女房（あば）」、「良人（おど）」と呼び合って裸で寝床から外へ出て、四方の空をみて雨の気配がないことに落胆して、女は「良人（おど）」と呼びかけつつ、男の腕に身を投げる場面がある。ここには深刻な水不足におびえ、互いの肉体で不安を忘れようとする農民のありのままの姿が描かれている。そして都会で遊ぶことに慣れた資産家の酒田は平吉の女房への色欲に目をくらませた結果、地獄に向かったのである。金子はこの小説で単にイデオロギーの宣伝をするのではなく、自然と対比して人間の本質を描ききっていた。

新感覚派の横光利一（1891-1947）は、金子を「片岡鉄兵氏及び金子洋文氏の作はまた構成派として優れて来た」[109]と高く評価していた。作中に太古から脈打たれてきた大地の独特のリズムが響く「地獄」は、横光のみならず川端康成や徳田秋声（1872-1943）も高く評価し、農民文学、プロレタリア小説の評価を高めた作品であった。

『種蒔く人』土崎版の同人で、農民解放の実践運動に携わり、秋田の社会主義運動の発展に貢献した畠山松治郎や近江谷友治を彷彿とさせる農民平吉は、「俺達百姓を救ふものはただ××（革命）しかない」と語っている。酒田との交渉に立ち向かっていく様子は、当時の農村では数少ない闘いに目覚めた百姓の姿であった。「地獄」が発表された大正 10 年代には、まだ少なかった平吉のような農民はその後増え、昭和になると各地で小作争議が見られるようになる。

---

109 横光利一の評論「新感覚論」（発表初出は大正 14 年）www.aozora.gr.jp/cards/000168/files/4888_46710.html 青空文庫（2013 年 11 月 1 日閲覧）

そして金子の「赤い湖」も秋田の八郎潟湖岸の農村が舞台の小説で、このプロレタリア小説作品は、金子の代表作のひとつとされている。昭和 3 年（1928）に『改造』12 月号に発表され、昭和 5 年（1930）に日本評論社から同名の単行本が刊行された。作中には畠山ら実在の労働運動家を彷彿とさせる人物たちが活躍している。

物語は若い農家の娘の恋愛話から始まる。真面目で勤勉な農民である彼女の父は、地主から非道な要求をつきつけられて苦しめられる。周囲の人たちが彼ら親子を救おうとしても、役人まで抱き込んでいる地主には、法律さえ手を出せない状況であり、彼らを救えるのは農民が団結して対抗する以外ない、という金子の主張が表明される。作品のクライマックスでは、地主側の取締をかいくぐった農民たちによって八郎潟の周囲を赤い旗で埋め尽くす場面が描かれている。この場面は視覚的にも優れたメッセージ性をもっているが、文学作品としても優れたものとなっている。

この小説は、昭和 2 年（1927）の春におきた南秋田郡払戸の海道家の小作争議に取材したものである。当時、八郎潟沿岸の各地で小作争議が起きており、赤い湖と呼ばれていた。金子はここで農民運動を成功に導いたリーダー重山の人物像に、秋田県一日市村の小作争議で活躍した畠山を彷彿とさせる姿をあてている。

現実の畠山は、中央における組織の分裂の影響を受けて、秋田の農民運動も分裂する中で、一日市小作争議が解決してすぐの昭和 3 年(1928)の 9 月に、突如政治運動から身を引いてしまう[110]。自らの出自である地主階層と農民のはざまに立ちながら、後にはその農民達を巻き込んだ政治の争いが生じ、畠山は大いに悩んだことが推察される。金子の「赤い湖」には、そうした個人的葛藤は反映されず、運動の将来を、希望をもってみつめる重山の姿を伝えて終わっている。

畠山は昭和 3 年（1928）に行われた第 1 回普通選挙に秋田一区から立候補して 2,999 票を得たが落選した。その次の選挙である昭和 5 年（1930）第 2 回衆議院選挙で、金子は畠山が獲得した農民票を対抗勢力に奪われないために秋田県一区で無産党から立候補し、4,406 票を得たが、落選となる。

チェーホフが描いたロシアの農民の貧しさに目をむけた金子と、自らが住む潟近くの農民一家の悲惨な暮らしを伝える物語を創った畠山は、ともに『種蒔く人』土崎版では農民たちの姿を伝える作家であったが、その後の政治活動でも無関係ではなかったことになる。「何うかに（ママ）しなければならないといふ氣持が一つとなつて」[111]生れ、なんとかしなければという思いから立ち上がったという『種蒔く人』土崎版同人たちの目差しには、都会とは異なる近世を引きずりながら近代の資本経済に蹂躙

110 身を引く際に金子に送った畠山松治郎の書簡がある。彼は政治から身を引いた後、農民の為の病院設置のための活動に取り組んだ。

111 『種蒔く人』創刊号（1921 年 1 月）の編集後記「偽りと欺瞞に充ちた現代の生活に我慢しきれなくなつて「何うかに（ママ）しなければならない」といふ氣持が一つとなつて生れたのがこの雑誌です。」

される農村社会、労働者としての農民の姿が目に入っていた。

『種蒔く人』という雑誌にあらわれた農村の記事、『地獄』関連記事など、金子が農民文学の隆盛にはたした仕事は大きい。しかし、そこには取材源としての畠山の存在が大きかったことも忘れてはならない。畠山が農民たち、とりわけ秋田の農民たちの現状を、都会に住む人たちに伝えた功績は小さくなかった。「文芸好きでしたが文芸に志した人たちではなかったので、別々の道を進むことになりました」と後に小牧が語った同人の畠山は文学から農民運動という実践活動に転じ、その成果が報告されている。各地の活動が集まるようになった『種蒔く人』の「地方欄」は 3 巻 15 号（1923 年 1 月号）から前触れなく消えた。マルクス主義とアナーキズムの共同戦線が崩れつつあったためと目されるが、以後、政治活動重視の流れは加速し、『文芸戦線』にも引き継がれていった。

大正 15 年（1926）、『文芸戦線』6 月号に、編集長山田清三郎（1896-1987）からの依頼をうけ、農民文学を提唱する犬田卯は小説「開墾」を発表する。だが作中で、選挙という政治 6 制度を否定し、集団にあわせることなく自立して生きる農民の生き方を主張した犬田には以後、『文芸戦線』から発表の場を与えられることはなかった。同年 12 月にはマルクス主義以外の同人、中西伊之助、村松正俊らが離れていく。『種蒔く人』から多くの同人達が参加した『文芸戦線』は、政治優先、革命を目的に進むボルシェヴィキ派の思想に傾くこととなり、マルクス・レーニン主義の組織と化していった。

プロレタリア文学運動が対立する表現や作家を排除する姿勢が鮮明化した『文芸戦線』では、自らの理論に従わない農民文学や作家は除かれた。己の土地に拘る姿勢をみせる農民文学は、しまいにはブルジョアジー文学とされ、無視もしくは排斥されていった。農民文学の行く先は、プロレタリア文学陣営から、有馬頼寧農林大臣の提唱によって結成された農民文学懇話会に大きく振れたのである。『文芸戦線』の頃の金子には、農民文学は、畠山の離脱というだけでなく、プロレタリア文学として農村文学を書くことが困難な状況となっていた。金子の農村を舞台にした作品は、演劇で表現されることとなる。

第4章　金子洋文とプロレタリア文学雑誌

第4章　金子洋文とプロレタリア文学雑誌

第1節　プロレタリア文化運動史にみる「クラルテ運動」

金子洋文は、雑誌『種蒔く人』の創刊から終刊まで同人として発行に携わった。『種蒔く人』は大正10年（1921）2月に土崎で創刊され、以来23冊を発行した。関東大震災直後の大正12年（1923）10月の号外発行、そして事実上の最終巻となった翌年の別冊「種蒔き雑記－亀戸の殉難者を哀悼するために」まで続いたことは先に述べたとおりだが、金子はこの間、多くの記事を執筆すると同時にその編集にも携わった。さらに『種蒔く人』の終刊後は、後継誌である『文芸戦線』においても、創刊号の編集を担当した。その後は3巻以降を山田清三郎、石井安一が編者となったが、雑誌後期の7巻以降、昭和5年（1930）5月から昭和7年（1932）7月終刊までの編集発行人をつとめていた。

ここでは、金子が深く関与したプロレタリア文化運動の雑誌、『種蒔く人』や『文芸戦線』の思想傾向を分析する視点として、世界平和を追求する思想運動「クラルテ」がどのように扱われているかを明らかにする。その後、『文芸戦線』の内容から金子の活動、彼の影響について考察する。

『文芸戦線』は、大正13年（1924）6月の創刊から最終刊まで『文戦』、『文芸戦線』と誌名を変えつつ92冊[112]が刊行され、ピーク時には2万部に達していた。

この雑誌はプロレタリア作家達の活躍する舞台であり、プロレタリア階層の多くを占める労働者たちを啓蒙する活動を担っていた。プロレタリア芸術運動は大正末から昭和初期にかけ急速に発展したが、その後の政治的な意見対立から社会民主主義系の文戦派（労農芸術家連盟）と、共産主義系のナップ（NAP:全日本無産者芸術連盟の略称）とに分裂した。『文芸戦線』は労農芸術家連盟の機関誌として芸術運動の指導的な雑誌であり、一般向けの読物も載せる文化的戦略を担った雑誌でもあった。だが意見の対立から左翼の陣営は分裂を繰り返し、『文芸戦線』は共産党系の『戦旗』(1928.5-1931.12)と対立、官憲の弾圧強化もあり、プロレタリア運動そのものが衰退していった。

日本のプロレタリア文化運動は『種蒔く人』からはじまった。社会主義者としての金子の思想も『種蒔く人』の時代に形成されたといえる。これは金子を知る上で重要な意味をもっている。『種蒔く人』

112　日本近代文学館・小田切秀雄編『日本近代文学大事典』(集英社、1977年)による発行点数は95冊とされていたが、後に刊行された復刻版『文芸戦線』(後期)別巻(戦記復刻版刊行会、1983年)解説では、これは最終年の数回の休刊を数えていたことによるとして92冊となっている。

は、「世界主義文芸」と「批判と行動」をスローガンにしていた。後継誌である『文芸戦線』は、金子が関わっていた創刊当初こそ文芸雑誌としての要素が強かったが、一度休刊した後に、編集体制を変えて再出発した以後は、革命志向の色彩を一層強めた。プロレタリア文学運動の流れは、青野季吉のいう「自然成長と目的意識」[113]を促すものという理論づけがなされ、政治的な色あいを強めた、革命のための文学がもてはやされるようになった。こうして共産主義に傾斜した『文芸戦線』では、『種蒔く人』時代にあった様々な思想の持ち主が統一戦線を組むことが難しくなり、政治理念や意見が同じでない同人たちは去っていった。さらに社会革命を目的とする芸術運動を選択した『文芸戦線』は、その後も政治的意見の対立から分裂を繰り返したのである。

第2節　「クラルテ運動」はどう伝えられたか

金子洋文が参加した『種蒔く人』の主要な目的のひとつは、戦争のない世界平和の実現であり、そのためにフランスではじまった「クラルテ」運動の実態を日本に伝えるものであった。世界中の人々が覚醒し、戦争に反対する意識をもつことによって恒久的な世界平和を実現すること、文化人は自らの役割に自覚して、この目的のために積極的に行動する――これがクラルテ運動の主旨であった。金子は、小牧近江から、フランスで起ったこの思想運動を教えられ、これに共鳴し『種蒔く人』を共に創刊した。金子はこうして他のプロレタリア文化人たちとは異なった視点をもつにいたった。

金子が抱いたその視点とはどのようなものであったのか。『種蒔く人』3巻10・11号（大正11年8月）は、クラルテ運動をめぐるロマン・ロランとバルビュスによる論争を翻訳、掲載したが、これは「世界の変革」をもたらすための階級闘争に暴力革命は必要逃れざるものか、当時唯一の社会主義国家ソヴィエト連邦との関わり方を世界の労働者や知識人たちはどうするべきかをめぐるものであった。これはクラルテ運動のみならず、プロレタリア運動を進める上できわめて大きな意味を持ったもので、『種蒔く人』はいち早くその重要性に着目したのである。フランスのクラルテ運動の詳細と国際的な影響に着目した国際シンポジウムが、平成8年（1996）11月9・10日に京都で開催されクラルテ運動について紹介した。ここで『種蒔く人』が韓国独立運動に影響していたことを歴史社会学者、李修京が「反戦運動“クラルテ運動”が日本と朝鮮に与えた影響―アンリ・バルビュス、小牧近江、金基鎮を中心に―」[114]と題して伝えている。小樽時代の小林多喜二が『クラルテ』という雑誌を創刊したこ

113　1926年の『文芸戦線』3巻9月号掲載の論文は、青野本人の意識を超え、この目的意識を巡る解釈と活用の違いから、後の『戦旗』への流れをもたらした。

114　このシンポジウムの内容は、安斎育郎、李修京編『クラルテ運動と『種蒔く人』―反戦文学運”クラルテ”の日本と朝鮮での展開』（お茶の水書房、2000年）にまとめられている。

とを小牧に報告した書簡などから、国内のクラルテ運動との関わりを伝えた大崎哲人「クラルテ運動と小牧近江」[115]がある。このように国際平和を追求しようとしたクラルテ運動と『種蒔く人』がとりあげられることはあったが、論争の内容と意味については触れられていない。しかしこの論文は、『種蒔く人』という雑誌の性格、ひいてはその編集に深くかかわっていた金子の社会主義思想を知る上で重要な意味をもつのである。

1. 雑誌『種蒔く人』が伝える「クラルテ運動」

「クラルテ運動」とは、第一次大戦に一兵卒として加わった経験から、作家のアンリ・バルビュス（Henri Barbusse;1873-1935）が提唱したもので、ヨーロッパを中心に世界中の知識人たちがこれに参加した。

第一次世界大戦は、国家の名のもとに職業軍人だけでなく一般市民までも徴兵され武器をもち前線で戦い、女性を含む国民すべてが戦争に組み込まれる総力戦であった。ヨーロッパを中心に世界中で繰り広げられる戦争は、人類の歴史上はじめての事態であった。当然それは戦後のヨーロッパ社会に深刻な影響をあたえた。これに加えて第一次大戦中にロシア革命がおこり、世界ではじめての社会主義国家が誕生した。こうした状況のなかで生まれたのが、世界平和をめざす「クラルテ運動」であった。小牧は帰国を前にアンリ・バルビュスと会い、その思想を教えられるとともに、「クラルテ運動」を日本でも広めてほしいと希望を託されたのである。

大正5年（1916）12月にフラマリオン社から上梓され、ゴンクール賞を受賞したアンリ・バルビュス『砲火』(Feu）は、一兵卒の目を通して見る戦場のありのままの姿を描いて、日々死に直面する兵士の本音、なぜ戦うかという率直な疑問を読者につきつけた。そしてバルビュスは大正8年（1919）に小説『クラルテ』(Clartè）[116]を発表した。

負傷して戦線から復員した主人公は、「あれほど終始私を熱狂と喜びで満たした祖国という考え」に疑問をいだき、「国家と同じだけの真理が、国家の義務が、利害が、権利があって、それがたがいに相反しあっている」ことを認識し、やがて「万人が平等に持っている、生命への権利の必然的結果である」「世界共和国」を夢想させるのである。

こうしてバルビュスを中心にしたひとつの運動がはじまった。バルビュスは大正8年（1919）5月

---

115 『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会編『フロンティアの文学―雑誌『種蒔く人』の再検討―』(論創社、2005年)41-57頁。北条常久「種蒔く人とクラルテ」『『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―』(桜楓社、1992年)41-55頁。

116 小牧近江と佐々木孝丸の翻訳で『クラルテ』は、大正12年(1923)叢文閣から刊行された。小牧はこの時の原稿料を前払いで受け取り、『種蒔く人』の資金としていた。小牧の翻訳としては、同題で昭和27年(1952)ダヴィッド社から刊行されたものもある。他に田辺貞之助訳で岩波文庫から平成2年(1990)に刊行されたものがある。

10 日、『リュマニテ（ユマニテ）』紙に「グルプ・クラルテについて」を発表し、そこでバルビュスは、「作家と芸術家たちは、有志の熱望に答え、また教育者として、また先導役としての大きな義務から一丸となって、社会的行動を起こそうと決意した」と宣言して、自らの小説の題名「クラルテ」をグループの名前に掲げ、運動の目的を「人間の解放」であるとした。そしてフランス以外の作家や思想家たちにも呼びかけて、「人民のインタナショナル」に並行して、「思想のインタナショナル」の結成を訴えた。そして翌 6 月、「クラルテ・グループ」は、ヴィクトル・シリルを事務局長として「真理の勝利のための知識人の連帯の国際連盟」として正式に発足した。このグループの機関紙『クラルテ』が半月刊として刊行されるのは、大正 8 年（1919）10 月 11 日のことである。

発足時の「クラルテ」運動の担い手には 3 つの層があった。

(1) バルビュスを初めとする平和主義者である既成作家ないし大学教授

(2) 第三インターナショナルに加盟している戦闘的コミュニスト

(3) 過激分子に理解を示しつつも、みずからの戦争体験をなによりも重要視する青年たち

この三者の微妙なバランスの上にたって[117]、「クラルテ」運動は、1920 年 12 月に結党された共産党とは一線を画した、反戦主義にもとづく文化運動組織として歩みだしたのである。このように「クラルテ」は、世界の知識人が参加した国際的平和の文学運動であった。機関紙として発行した『クラルテ』の最盛期の読者は、パリだけで 5 万人もいたといわれる。 世界的な人道主義、社会主義の立場からの平和、解放の運動であった。このグループは、フランス全土で 30、うちパリに 10、その他が地方に支部があり、イギリス、ベルギー、スイス、オーストリア、チェコ・スロヴァキア、オランダ、イタリア、ノルウェーと世界的な広がりをもっていた。(『資料世界プロレタリア文学運動』[118])

バルビュスが新聞に掲載した「グループ・クラルテについて」を小牧の訳で紹介[119]すると、次のようになる。

> 作家と芸術家達は、有志の熱望にこたえ、かつは教育者として、また先導役としての大きな義務から一丸となって、社会運動を起こそうと決意した。

とし、続けて

---

117 渡辺一民「クラルテ運動と『種蒔く人』」安斎育郎・李修京編『クラルテ運動と『種蒔く人』－反戦文学運動“クラルテ”の日本と朝鮮での展開』(御茶の水書房、2000 年)48-49 頁。

118 『資料世界プロレタリア文学運動』(三一書房、1973 年)(再掲;大崎哲人「クラルテ運動と小牧近江」『フロンティアの文学－雑誌『種蒔く人』の再検討－』(論創社、2005 年)47 頁。

119 昭和 27 年(1952)、小牧近江はダヴィッド社からクラルテに関係した 2 冊の翻訳本を刊行している。1 冊は『知識人に与う』の目録(現物は未確認)によると『グループ・クラルテについて』(小牧近江訳)である。もう 1 冊が『クラルテ』である。

戦争はわれわれを曳きずってゆき、そして、これからさきも、曳きずってゆくだろう奈落の正体を明らかにした。抑圧と、専制主義と、特権と帝国主義ーそれは金の力によってのみ保持されるものだーの古い原則はその腹黒さを証拠づけた。…（略）…人類のゆかしい、そして世界的な広さをもった共和主義思想のために仕えるため、いま結束しているフランスの作家たちは、ほかの国々の作家や思想家たちの協力が必要であると見なすものである。彼らはそれらの人たちに手を差しのべ、人民のインターナショナルに並行して思想のインターナショナルを呼びかけるものである。

と述べ、「光は万人のものなのに、万人は闇の中に眠っている。この眠りから民衆を目覚めさせる」活動がクラルテ運動であるとした。

さらに小牧は、大正 10 年（1921）8 月、長谷川如是閑（1875-1969）と大山郁夫（1880-1955）たちがつくる雑誌『我等』の 3 巻 8 号に、「＜クラルテ＞の運動と日本の思想家」と題した文章を寄せて、クラルテ運動について次のように解説している。

「グループ・クラルテ」の目的は、「軍国主義の打破、人間を区別する所の凡ゆる階級の撤廃、人間生活の尊重、男女の差別なき平等社会の建設、健全なる人間の義務労働」等で、「グループ・クラルテ」は労働者のインターナショナルと同様に、世界的一致行動をなす為に、「思想上の労働者」のインターナショ（ママ）ナル大会を開催し、英独露仏伊西日の七箇国語の機関誌「光（クラルテ）」を発行することを期する。「グループ・クラルテ」はそれが性質上、政党的色彩を一切排し、飽迄精気ある理想を中心として生きやうとする人たちの協力事業であること。そふ言ふ次第であるから、「グループ・クラルテ」の加入者は単に学者、文人、芸術家に限らず、苟くも人間の幸福を希ひ、人間苦に同情を注ぐ者は、一寒村の教員学生社会主義者、労働者を問はない。又団体の加盟を勧誘し、国際委員が、専ら執行の衝に当り、且つそれが全責任を負ふことになつてゐる。

長いフランス滞在から帰国したばかりの小牧は、まだ日本の社会情勢や言論規制に詳しくなかったこともあり、日本語で表現する際に慎重な取扱いを必要としていた[120]。小牧によれば、原稿は大山郁

120 検閲制度のもと、「社会」という言葉も危険であり、書き方によっては雑誌に載った一篇の作品からその回の雑誌一冊発禁とされることがあった。

夫が直してくれたという。さらに雑誌『解放』に載った「インターナショナルの歴史」[121]には金子が手を入れ、「彼が書いてくれたも同然だった」と語っている[122]。金子が小牧の原稿に修正を加えたという事実は、小牧と再会した当時の金子が信頼に足る知識をもっていたことを物語るものである。

このときの金子は、土崎で読んでいた『白樺』の人道主義、とりわけ武者小路実篤の「ある青年の夢」から多大な影響をうけていた。さらに金子は、カーペンターの社会主義思想をも学んでおり、小牧がもたらした「クラルテ運動」や当時のヨーロッパで急速に広まりつつあった社会主義思想を咀嚼する下地は十分にそなえていたのである。

2. 雑誌『種蒔く人』の思想論争

金子と小牧が創刊した『種蒔く人』は「国際主義（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ）」を旗じるしに「行動と批判」を信条とし、さまざまな社会思想をもつ同人達が寄り集まった思想雑誌であった[123]。それとともに『種蒔く人』は、ヨーロッパの新しい思想を伝えることを目指していて、土崎版では第三インターナショナルを紹介し、東京版ではクラルテ思想をはじめとする世界の社会運動の状況を伝えている。

『種蒔く人』は創刊以来さまざまな特集を組むことが特徴だったが、そのひとつが「ロマン・ロランとアンリ・バルビュスの論争五通」の掲載であった。この雑誌が果たした役割の中でも大きな意味をもつ。社会主義国家の建設をめざし、労働者のための文化と社会・政治の形成を結びつけた活動は、これまでの日本で知られていない新鮮なものであった。金子のプロレタリア文化運動思想は『種蒔く人』にその根幹があることから、クラルテを巡るロマン・ロランとバルビュスの論争をあらためて辿ってみることとする。

3. ロラン対バルビュス

第一次世界大戦の休戦から 8 ヶ月たった 1919 年 6 月 26 日、フランス社会党の機関紙『リュマニテ』は、ロマン・ロランの名前で「精神の独立宣言」を掲載した。彼はこの中で、

> 戦争はわれわれの隊伍に混乱をひきおこした。大多数の知識人は彼らの知識や芸術や理性を用い

---

121 小牧近江が伝えた「インターナショナルの歴史」という記事は確認できなかった。小牧の著作リストには同年 12 月の『解放』「仏蘭西の共産主義運動」がある。

122 野淵敏・雨宮正衛『種蒔く人の形成と問題性―小牧近江氏に聞く―』(秋田文学社、1967 年)24 頁。

123 小牧近江の思想形成には、大戦直前に平和主義を唱え暗殺された社会主義者ジャン・ジョレスを間近にした体験、ロマン・ロラン、苦しい学生時代に励ましてくれたド・サン=プリ家の人々、革命運動の闘士となり若くして病死したジャン・ド・サン=プリの存在があった。クラルテ思想には、ヨーロッパの社会主義運動がたどる分裂因子をはらんでおり、無政府主義、共産主義、社会主義などが結集した雑誌「種蒔く人」も理論構築がすすむうちにヨーロッパと同様の分裂の危機を迎えた。

て自国の政府に奉仕した。…（略）…「思想」の代表者でありながら、「思想」を堕落させ、「思想」を変じて一つの党派や国家や祖国、あるいは一つの階級と我利我欲との道具と化した

と自己批判を行った上で、「このような危険や卑しい結託やひそかなる隷従から「精神」を脱却させよう」と訴え、

われわれこそ「精神」の従者であって、…（中略）…他に主（あるじ）を持たぬ我々は、人類のために、ただ全人類のためにのみ働く

と決意を明らかにした。

この本文のあとには、アラン、アインシュタイン、ゴリキー、ヘルマン・ヘッセ、バートランド・ラッセル、アプトン・シンクレア、タゴール、ツヴァイクなど世界各国 136 名の知識人が署名していた。そこにはアンリ・バルビュスの名前もあった。

国土の 10 分の 1 が戦場となったフランスでは、総人口の 16%にあたる人命が失われた。負傷者 330 万であり、国庫の負債 300 億フランである。この結果、勝利の翌日から未曽有のインフレに襲われ、生活は窮乏した。1919 年 11 月の戦後初の総選挙で、賠償など対ドイツ強硬策を主張するナショナリストの「国民団結」（多くの元兵士が参加していた）が大勝し、社会党をはじめ左翼の多くが議席を失った。

しかもこの間ハンガリーでは革命政権が生まれ、ドイツでも 4 月から 5 月にかけて、バイエルン州にソヴィエト政府が出現し、その他の都市でも革命の機運は収束しなかった。翌 1920 年に北イタリアでもストライキが続発し、工場占拠がはじまった。こうしたヨーロッパ全体の雰囲気は、フランスにも大きな影響を与えた。

戦争に協力した社会党や労働組織に不信感をもつ若い活動家は、1920 年 2 月の社会党大会で、党をして第二インターナショナルから脱退させる決議を採択させ、CGT（労働総同盟）を動かして、5 月から次々にストを打った。こうして社会的な不安が高まり、フランスも革命前夜という雰囲気に包まれた。だがこの動きは、政府が軍を動員するという強攻策をとったため挫折し、6 月には国内の秩序は回復する。

ただこの年の 12 月 25 日から 4 日間、トゥールで開かれたフランス社会党大会で、第三インターナショナルへの加盟は、3,028 票対 1,022 票で可決され、多数派が党名をフランス共産党に変更、少数派は分裂してフランス社会党をそのまま名乗り、第二インターナショナルに留まった。当時の社会党

員は 18 万人。そのうち 13 万人が共産党に移った[124]。

こうした状況の中で、作家アンリ・バルビュスは、大正 8 年（1919）5 月 10 日の『リュマニテ』紙に「グルプ・クラルテについて」を発表した。6 月、「クラルテ・グループ」は、ヴィクトル・シリルを事務局長として「真理の勝利のための知識人の連帯の国際連盟」として正式に発足し、大正 8 年（1919）10 月 11 日に機関紙『クラルテ』が半月刊として刊行された。「クラルテ」運動は、バルビュスを中心とした反戦主義にもとづいて世界の知識人が参加した世界的な文化運動組織であり、人道主義、社会主義の立場からの平和、解放の運動であった。

東京版の『種蒔く人』は創刊以来いくつかの特集を行ったが、そのひとつに全訳を掲げた、「ロマン・ロオラン對アンリ・バルビユスの論争五通」（第三巻第十・十一號［ママ］、八月特別号の表紙記載の題）がある。 原文は 1921 年 12 月上旬の『クラルテ』第 2 号に発表されたバルビュスの「義務の残りの半分・・・《ロランディスム》について」と、これにたいするロマン・ロランの返事（『ラール・リーブル』、1922 年 1 月号）を初めとする合計 5 篇の公開状である[125]。

バルビュスは、ロマン・ロランが行ってきた過去の「精神の『独立』と思想の権利」への戦いは高く評価するが、「だがそれだけでいいのか？」とあらためて問い直し、「『ロオランデイスト』は論理家や社會改造論者から組織的に超然として『問題の實行的方面』には何等の考慮も拂はない」と弾劾する。（以下、引用は『種蒔く人』掲載の訳による[126]）

彼等がしばしばロにする暴力についていえば、「この言葉は極度に貶められ醜くされたといっていい」と述べたあと、暴力がしばしば問題にされるが、「暴力の介在は、社會革命の一般概念に於ては・・・一切の目的に對する単に一つの細目（デタイユ）[127]であり然も一時的細目に過ぎぬ」と擁護する。そして結語として、『ロオランデイスト』について、「とどのつまり彼等は『平和主義』と『自由主義』の間に一種の装飾的『左翼』を形成」しているに過ぎず、「思想家としての義務の第一の部分だけを果した」だけだとした。

これに対してロランは 1921 年 12 月の日付で返事を寄せた。バルビュスが存在しない『ロオランデイズム』なるものを創りだしたこと、ロランの姿勢を『超脱』と呼び、「餘りに有名過ぎる象牙の塔への逃避」と形容したことに抗議する。その上で暴力にからめて、自らのロシア革命への疑義を表明していく。

---

124 柏倉康夫「小牧近江のヴェトナム」http://monsieurk.exblog.jp/19269002/ （2013 年 10 月 14 日閲覧）

125 ベルナール・デュシャトレ著、村上光彦訳『ロマン・ロラン伝 1866-1944』（みすず書房、2011 年）は、ロマン・ロランの資料から当時の事情を明らかにしているが、彼とバルビュスやクラルテ団との間には、警戒すべき要素が多く両者間の信頼関係は成立していなかったことがわかる。

126 「ロマン・ロオラン對アンリ・バルビユスの論争（五通全譯）」『種蒔く人』3 巻 10・11 号（種蒔き社、1922 年）5-36 頁。以下同。

127 Detail;些事の意。

「理論上、共産主義、新マルクス主義の學説は、私には・・・・實際眞の人類の進化に一致すると思はれない」、「事實として、露西亜に於ける共産主義の適用に於ては悲しむ可き惨忍なる誤謬に夢中になつて」おり、「此の共産主義の施行に際して、新組織の指導者達は、餘りにしばしば重大な機會に、最高の道徳的價値、即ち人道、自由、そして、一切の最も高貴なる眞理を犠牲にした」と指摘した。

次いでロランは自分のよって立つ位置について次のように続ける。

私が一の黨の中に眞理に對する熱情、従つて自由批判に對する必然的尊敬を認め得ない限りは、又私が其處に全ゆる犠牲を拂ひ全ゆる手段に依つて征服せんとする意志と、又運動の利益と正義絶對善の要求のとの單なる混同としか見出し得ない限りは、一言にして云へば、革命信者の精神が厳密に政治の範圍を出でずして、『無政府』や『センチメンタリズム』の名の下に、自由なる良心の擁護を輕んずる間は。さう！其間は、私は此の討論の係爭問題に就いては何等の幻影をも追はず、冷やかなる態度を採つて行く。

ソヴィエト批判に重点を置いたロランの反論にたいする、バルビュスの第 2 の反論は、次の点に要約される。

(1)『一の暴虐に代へるに他の暴虐を以てする』というロランの非難にかかわるもので、コミュニズムも完全無欠ではありえないことを認めた上で、だがコミュニズムこそ「極度にまで、人間の平等といふ意味に於ける生きた確限（ママ）にまで、また、世界主義の意味に於ての極限にまで、押し擴められた共和観念」と述べる。

(2)『超脱』については、結論として、「現に、古い壓迫———それは尚ほ他の幾多の國に附着してゐる———から外へ出た一つの國の血みどろな離脱は、君にたゞ、『暴力』といふ言葉の變化と、そして畢竟ブルヂョワやゝ（ママ）ルキストの批評の姉妹である批評の感興とだけしか、與へてゐないではありませんか。」と批判した。

以後、両者の間では論争が続くが、ロマン・ロランは論争から 12 年経った 1934 年 11 月に、第一次世界大戦から 1930 年代までを総括した「パノラマ」という文章を発表し、そこで論争に触れてこのように書いている[128]。

バルビュスが精神の独立の選手を自称する人たちにおける政治行動への徹底的な無関心を告発し

128 新村猛、山口三夫訳「闘争の 15 年(1919-1934)」『ロマン・ロラン全集 18』(みすず書房、1982 年)313-546 頁、文中の「パノラマ」330-331 頁。

たとき、じじつ彼はまったく正しかった。彼が、＜義務の他の半面＞とは支配的な社会体制の破壊的批評をおこなったのち、新しい秩序の積極的な建設に従事するか援助を与えることである、と論証したのは正しい

続けて、

しかし、バルビュスは、──彼の思想を損ったやや拙劣な表現で、《暴力の介入は細事にすぎない》と答えたが、そうではなく― 暴力は、歴史のある時期には痛ましい必要事であり、また、精神は気楽に手段の選択をするものであるけれども、やむにやまれぬ行動においては、手段はそういう精神の贅沢品ではなく、喉にあてられた刃であり、さらに、殺害されたくないならば、たとい心のなかでは嘆きながらも、確固とした手で刃をつかみ、危害者に切先を返さざるをえないのだ、と答えることができたでもあろう

ロマン・ロランは、社会変革における暴力という手段を求める立場を明らかにした。それについては、その背景にある 1930 年代のヨーロッパにおけるナチス・ドイツの台頭という差し迫った状況を考慮する必要がある。拡大するファシズム勢力に対抗して、民主主義をまもるためには武力による抵抗もやむをえないという立場をとったのである。だが、それはスターリン体制のもとで進む、力による粛清までも是認するものではなかった。このロランの共同戦線という立場は『種蒔く人』の同人たち、とりわけ金子にとって重要な示唆に富むものであり、彼のその後の歩みの原点を形づくるものとなった。

4. 『種蒔く人』後のクラルテ

『種蒔く人』が、『クラルテ』誌所載のバルビュスの掲載だけでなく、討論相手のロマン・ロランの主張もきちんと翻訳して並べていることに注目したい。論争の紹介を開始した一号前の社論で、小牧はこの論争について触れ、「共同戦線の今や実質的に効果をあげようとしてゐる今日の場合に於て真の悲しい現象」で、「日本に於ても早晩惹起すべき問題にせよ、今日自由と平等の論争をなすことは頗る危険」と述べながら、論争をすべて訳して紹介することを選んだのだった。

ロランが表明したレーニン、後にスターリンが主導するソヴィエト共産党への危惧、党員の自由を制約する姿勢にたいする疑問などにも目をつぶることはなかった。二人の論点は、世界の変革に暴力革命は必要か否か、当時唯一存在した社会主義国ソヴィエト連邦を守ることが、世界の全労働者・知

識人の主要命題か否かを巡るものであった。そしてロランは結果的に、運動は暴力革命の是認と、ソヴィエト連邦を守るように主張するバルビュスの意見に傾くこととなった。この論争から当時の読者が何を読み取ったか、それはその後の日本の社会主義の動向が示している。日本共産党は、ソヴィエト連邦を支持、レーニンやスターリンの絶対的権力下の共産党体制に疑問を持たず、その指導を受けて革命にまい進、党の勢力拡大に努めたのであった。

金子にとっても、ロランの立場の変化は大きな意味をもつものであった。

後年、金子が色紙によく書き遺した言葉に「飢えと戦争を防げない文化は真の文化ではない」がある。ここからは人道的社会主義に対して是としていたとみることができる。金子は革命へと傾斜を強めるプロレタリア運動とは次第に一線を画すようになる。

その後のプロレタリア運動の中で、クラルテの運動は、共産主義を信奉するグループからは明確な運動理念に欠け、革命に直結しないとして批判されることになった。運動発祥の地フランスでクラルテ運動は分裂するが、日本でも『種蒔く人』の同人のすべてが参加して創刊された『文芸戦線』はやがて分裂する。共産主義の立場に立つ人たちは日本プロレタリア芸術連盟を結成することになり、共産主義者以外の同人たちは『文芸戦線』から去ることになった。(表 4)「『文芸戦線』にみるプロレタリア文学運動雑誌の流れ－文戦派と戦旗派を中心に」は、『文芸戦線』同人たちの動向を表にしている。ナップ（NAPF: Nippona Artista Proleta Federacio；全日本無産者芸術連盟、後に全日本無産者芸術団体協議会）の機関誌『戦旗』との分裂騒動が繰り返された。

小牧たちの主張は労農芸術家聯盟に受け継がれていくが、労芸からも脱退・分裂が繰り返され、革命を優先とする者にとって「クラルテ運動」は過去のものとみなされるようになった。ナルプ（日本プロレタリア作家同盟:ナップの傘下団体）は、アンリ・バルビュス[129]について、次のような評価を下している。

> 遺憾ながら功績あるプロレタリア作家にしてK・P・Fの一員たるアンリ・バルビュス及び上記マニフェストの彼の協力者等が、厳密なマルクス主義的考察から何とまあかけ離れてゐることか[130]
> (0・ピーハ「国際文学ニュース―混乱のマニフェスト―」『プロレタリア文学』[131]1932 年 4 月号)

---

129 『文芸戦線』中、クラルテに関する題名記事は見あたらない。関連するものとして、バルビュスが赤軍の前で行った「若きアンチ・ミリタリストに訴ふ」という演説を、昭和 3 年(1928) 1 月号に小牧近江が 3 頁にわたり紹介した記事 1 本がある。

130 O・ピーハ「国際文学ニュース―混乱のマニフェスト―」『プロレタリア文学』1932 年 4 月号(日本プロレタリア作家同盟、1932 年)再掲;北条常久「種蒔く人とクラルテ運動」『『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―』(桜楓社、1992 年)53 頁。

131 昭和 7 年(1932) 1 月～翌年 10 月まで 20 冊を刊行。昭和 6 年(1931)のナップ解散から独立機関誌を持つ必要がおこり、創刊されたナルプ機関誌。委員長は江口渙、書記長は小林多喜二、他に中野重治、宮本顕治らが部員であった。

（表 4）『文芸戦線』にみるプロレタリア文学運動雑誌の流れ－文戦派と戦旗派を中心に

『文芸戦線』にみる プロレタリア文学運動雑誌の流れ　—『戦旗』との関係に着目して—

年月		文戦派		戦旗派
1925(大正14)年	2月			中野重治ら、東大新人会系 のマルクス主義芸術研究会(略称:マル芸) 結成
	12月	日本プロレタリア文芸連盟(略称:プロ連)		
1926(大正15)年		再編成が進む。新しい同人が参入(小堀甚二、千田是也、黒島伝治、佐野碩、赤木健介)		
	11月	日本プロレタリア文芸連盟第二回大会に マルクス主義団体とし、名称変更 日本プロレタリア芸術聯盟(略称:プロ芸に改称)	←←合流←←	マル芸は解散してプロ芸に参入
	12月	マルクス以外(『種蒔く人』以来の同人、村松正俊、中西伊之助、松本弘二)脱退		
1927(昭和2)年	6月9日	プロ芸から青野ら脱退し、労農芸術家連盟結成 (略称:労芸)。『文芸戦線』は同人制から機関誌となる。	←←分裂 →→	遺されたプロ芸 は、機関誌『プロレタリア芸術』 7月創刊
	11月	山川均の日本共産党批判記事掲載問題から、山田清三郎らが脱退	→→ 分裂→→	『文芸戦線』脱退者、前衛芸術家同盟(略称:前芸)結成
1928(昭和3)年				『文芸戦線』脱退者らで結成した前芸の機関誌『前衛』1928.1月創刊
3.15事件	3月15日			
	3月25日			マル芸と前芸の合同、全日本無産者芸術聯盟(略称ナップ)結成
	5月			『プロレタリア芸術』『前衛』合流し、機関誌『戦旗』となる。
1930(昭和5)年	8月	岩藤雪夫の代作問題から三名 平林たい子、長谷川進、今村恒夫	→→脱退→→	平林たい子を除きナップへ合流
	11月	黒島伝治、伊藤貞助、高野次郎、山内謙吾、今埜大力、宗十三郎ら 6名脱退	→→脱退→→	文戦打倒同盟を結成、雑誌『プロレタリア』を1930.12.)創刊するが、翌年解散。文戦劇場から脱退した無産者劇場(伊藤貞助と25名の劇団員)はプロット、作家はナップへ合流
1931(昭和6)年	5月11日	細田源吉、藤川靖夫、安藤英夫、米田馨、間宮茂輔、小島勗、宮田保郎、細田民樹、菅野好馬、榊山晃、大山広光、11名脱退	→→脱退→→	第二文戦打倒同盟機関誌、『前線』1931年.6月創刊するが、8月ナップへ合流
満州事変	9月18日			
	12月			『戦旗』終刊
1932(昭和7)年	7月	『文芸戦線』廃刊		

第3節　『文芸戦線』にみる金子洋文の働き

ここで金子洋文が関わった雑誌『種蒔く人』および『文芸戦線』について述べておく。

昭和 38 年（1963）4 月 7 日に財団法人日本近代文学館が設立された折、活動のひとつに雑誌復刻事業があった。この雑誌の復刻は、それまでプロレタリア文学運動のなかで評価が高かった『戦旗』（共産主義系のナップ：全日本無産者芸術連盟の機関誌）だけでなく、その源流として『種蒔く人』、さらにその後継誌である『文芸戦線』の内容を広く研究者に知られる機会をもたらすこととなった。

『文芸戦線』は『種蒔く人』終刊の後をうけて、金子を編集責任者として創刊された。最初は『種蒔く人』がもっていた政治性を控え、文芸作品を中心にした編集方針であったが、マルクス・レーニン主義に添う方向を目指すという指針がたてられ、東京帝国大学新人会系の同人達の参加もあった。『種蒔く人』以来の共同戦線は解消され、マルクス主義以外の同人たちは去ることとなった。

大正 14 年（1925）1 月号の後、『文芸戦線』は休刊している。

しかし同年 6 月には、山田清三郎[132]に編集を委ねて復刊[133]した。労働者や農民ら無産階級自身の手による文芸活動推進など進めた。その後は新人会系の同人達と共に編集の山田も共産党系のナップに移り、まもなく機関誌『戦旗』が刊行された。プロレタリア文化運動は分裂し、『文芸戦線』と『戦旗』の 2 誌が争う情況が続いた。『文芸戦線』はその後『文戦』と誌名を変えて終刊となった。「新しくスタートした『文戦』は、そのまま『種蒔く人』の後身とは解されない」[134]と小牧近江によって後に総括されている。

1. 雑誌『文芸戦線』全体からみた動き、金子洋文の影響に関する量的調査

雑誌『文芸戦線』は、前期と後期に分れて復刻版が刊行されている。前期は大正 13 年（1924）創刊号から昭和 3 年（1928）5 月号までの 45 冊が収められ、小田切進の編集で日本近代文学館から昭和 43 年（1968）に刊行され、以降については戦旗復刻版刊行会から後期として刊行された。これによって雑誌『文芸戦線』の創刊号（1924 年 6 月）から誌名変更して最終巻となった『文戦』（1932 年 7 月）まで、印刷中に押収された 1930 年 4 月末の附録、翌年の号外を除きすべての刊行された臨時増刊を含み刊行された雑誌 92 冊がある。

大正末期から昭和初期に刊行された『文芸戦線』は、誌面の都合で文章が各所に切り貼りを繰り返し、ページ半ばで終わり、別の記事が連なることも多く存在していた。そのためひとつの作品が誌面に占める量が目次に正確に反映されていない。そこで復刻雑誌の本文から掲載記事データベースを作成して、各号でひとつの作品がどれくらいのボリュームを占めているか、分量の点から雑誌の傾向を探ることにした。特集やシリーズなど途中変更についての問題は一部のこされたが、これによって雑誌全体の流れをつかむことを目指した。さらに雑誌全体の記事のうちで、金子洋文が『文芸戦線』とどのような関係を保っていたか、それを知るための具体的方法として掲載記事データベースを作成し集計を行った。分析に際しては、執筆者データおよび話題内容をもとにとりあげる方式で行った。

データの収集と登録には Microsoft Office Excel 2003 を使用し、刊行順に並べた。「シリーズ」、「題名」、「執筆者」、「掲載頁」、「記事量」、「金子洋文」、「金子以外の秋田関係」の項目（フィールド）を設けた。記事量は復刻された『文芸戦線』の本文に個々に当たり、頁数を数えて入力した。このよ

---

132 山田は『日本プロレタリア文芸運動史』(叢文閣、1930 年)を刊行し、プロレタリア文学史の研究、回想記の記述につとめた。『種蒔く人』の最終期に同人として参加、『文芸戦線』同人と編集を経て、『戦旗』の編集などナップ系の重要な仕事を歴任した。『文芸戦線』に発表した「幽霊読者」(1926 年)、「五月祭前後」(1929 年)などの刊行によってプロレタリア作家として認められ、一方『日本プロレタリア文芸運動史』(叢文閣、1930 年)、『ナップ戦線に立ちて』(白揚社、1931 年)などの著書で評論家としても実績を築いた。戦時中は転向し、満州国にわたり、大東亜文学者大会にも参加した。

133 『文芸戦線』の誌型は四六版で再スタートしたが、4 冊で元の菊版にもどっている。

134 小牧近江談。野淵敏・雨宮正衛『「種蒔く人」の形成と問題性―小牧近江氏に聞く― 秋田県大正文芸史の研究』(秋田文学社、1967 年)34 頁。

うに本文に直接当たったのは、当時の雑誌で通例だったように、『文芸戦線』もいわゆる追い込みの形式で誌面が構成されており、目次からでは正確な分量がつかめないからである。また、「金子洋文」、「金子以外の秋田関係」は、この後の分析のため、著者名および記事内容を分析してコード化し入力した。

作成にあたり「記事名」および「執筆者」の漢字・仮名遣いは原則としてできる限り原文表記にすることとした。原本に異体字など漢字の混在があるが、現時点で判明できるものは統一することとした。またシリーズや特集はその位置づけが掲載当時の意図の変更、誤りなどの乱れがあるため、明らかな場合は訂正した。これらについては、(*) で解説を付して対処している。作成した（表 5）「『文芸戦線』目録内容一覧」は、本論文の末尾に添付している。

2. グラフと分析

『文芸戦線』と金子洋文との関連を調査することを目的に、『文芸戦線』目録内容一覧から、金子に関する記事および彼が書いた記事、秋田関係の記事や秋田県関係の人による記事をデータとして採取して経年で追跡した。金子の記事とは、金子自身の文、金子を話題にした文をさしている。秋田関係の記事も同様、秋田県関係者の文、秋田県の話題にした文を指す。なお秋田関係の記事に金子が含まれている場合は金子の記事とし、秋田関係の記事には含めないこととした。

（表 6）は、雑誌全体からみた盛衰と金子の関与状況を年ごとに集計した。集計には発禁となった号も含めている。また、復刊した大正 14 年（1925）6 月から 9 月まで、2 巻 2 号から 5 号の 4 冊のみは、紙面サイズが 26×18.8cm である（他の号は 22×14.7cm）が、頁数には反映させていない。

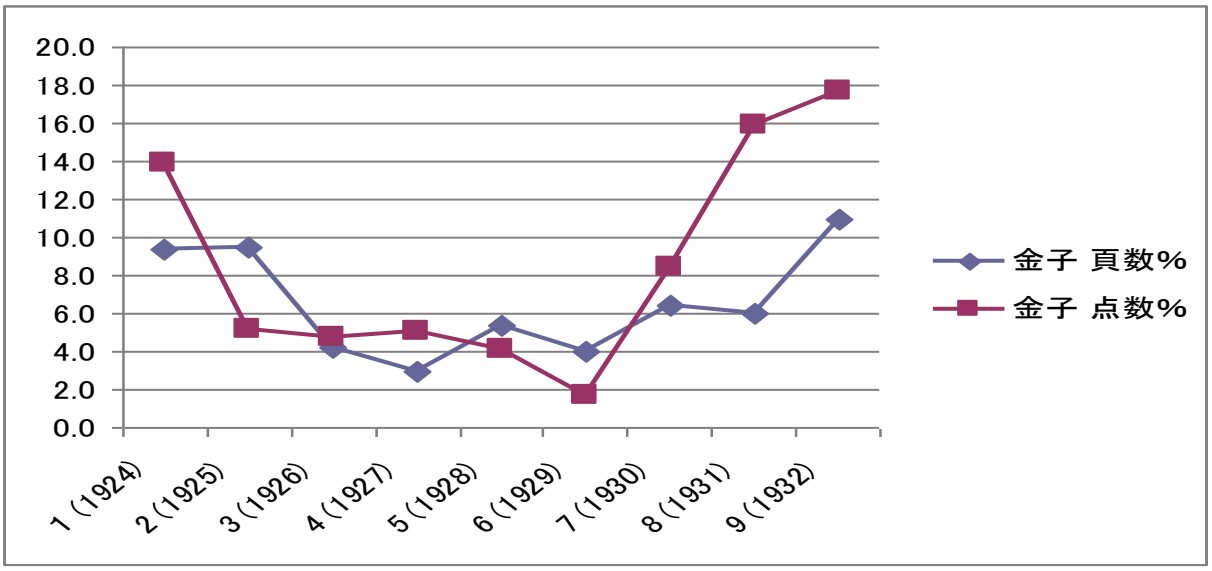
（表 6）『文芸戦線』の盛衰と金子の関与

発行状況		記事の頁数			記事の点数		
巻（年）	号数	A. 雑誌全体	B. 金子	B/A 金子%	a. 雑誌全体	b. 金子	b/a 金子%
1（1924）	1～7	391.5	36.8	9.4	115	16	13.9
2（1925）	1～8	431.6	40.7	9.4	289	15	5.2
3（1926）	1～12	956.5	40.5	4.2	341	16	4.7
4（1927）	1～12	1961.2	57.1	2.9	473	24	5.1
5（1928）	1～12	2250.0	120.8	5.4	515	21	4.1
6（1929）	1～13	2341.8	92.7	4.0	595	10	1.7
7（1930）	1～12	2251.3	144.6	6.4	568	48	8.5
8（1931）	1～11	1857.9	110.8	6.0	535	85	15.9
9（1932）	2,4,5,7	390.9	42.6	10.9	147	26	17.7

雑誌の発行状況、頁数、記事点数からみて、創始期（1～2 巻）、盛期（3～8 巻途中）、終期（8 巻途中～9 巻）に分かれる。創始期は、創刊号の金子から同人達が交代で編集を協力して行っていた時期である。3 巻から 4 巻を、山田清三郎が編集を担当している。山田が脱退して『戦旗』に参加したため、6 巻からは石井安一が編集に就いた後、7 巻 5 号から金子に交替する。

創始の頃はともすれば散漫な印象を伴っていた雑誌の動きが、徐々に葉山嘉樹、伊藤永之介といった有力な書き手が登場し、青野季吉のプロレタリア文学理論が掲載され、声望を高めた。購読層が広がり盛期を迎えたが、内部では先の（表 3）にあるように運動路線を巡って意見対立があったのである。東京帝国大学新人会系との意見対立が生じ、山川均から寄せられた日本共産党批判の論文取扱を契機に、編集長である山田が脱退した。満州事変が昭和 6 年（1931）9 月に起き、検閲や思想統制が厳しさを増した。そのため購読者が減少し、雑誌は終期を迎える。

金子の関与は、頁数・点数がいずれにおいても、創始期・終期で高くなっている。これを比率化しグラフで示したのが、次の（図 1）である。金子が雑誌の立ち上げに貢献し、影響力を発揮した創始期、多数の作家が誌面に参加し、金子もひとりの書き手として関与した盛期、多数の作家が雑誌から離れる中で金子頼りの傾向が強まり、ついには金子が雑誌を支える状況になった終期という動向がみえる。



（図 1） 金子の関与状況（雑誌全体に占める金子関与記事の割合）

編集に関与した創始期と終期は、金子が雑誌立ち上げの中心にあった。編集後記は、ほとんどが金子が関わるもので、点数の割に頁数は多くない。盛期は、金子自身の戯曲・小説・論説を旺盛に発表し、作家としての活躍が目立つ。

雑誌『新興文学』、『文芸市場』などで、プロレタリア文学の書き手たちが原稿料を得られる発表の場とし、運動のための統一戦線とすることに関心を示していた金子だが、『文芸戦線』が危機の際には、他誌ならもっと高く売れたと考えられる自らの原稿をこの雑誌に提供している。8 回と長期にわたり連載された長編大衆小説は、昭和 3 年（1928）年 1 月に「電工見習日記帖」として連載を開始し、次回から「天井裏の善公」に題を変えて掲載し、昭和 3 年（1928）9 月に終了した。この作品は、金子自身の電気屋勤めの経験を活かした娯楽小説で、『文芸戦線』でなく他の商業雑誌であれば、より広範に読まれたであろうと考えられる作品である。文芸戦線社出版部が出版した版、「文芸戦線叢書」[135]の 5 巻には金子の「天井裏の善公」があり、「日本のプロレタリアと農民が持つ唯一無二の大衆的大傑作」との宣伝文句が添えられていた。昭和 7 年（1932）に春陽堂から刊行された「明治大正文学全集」[136]第 60 巻『現代作家篇 第 2』[137]に、葉山嘉樹の「淫売婦」や「セメント樽の中の手紙」、前田河広一郎の「三等船客」、平林たい子の「施療室にて」と並んで金子の「天井裏の善公」が収められていることは、当時の評価を示すものである。

演劇関係の記事提供も多い。笑劇「孫悟空」などの戯曲をはじめ、「労農素人芝居」や「文選劇場」の地方巡回、演劇講座、労農素人芝居などの芝居演劇に関連した指導や活動報告がある。後半は行動を規範とするプロレタリア芸術の具体的な方策を伝えるものも掲載されている。結果としてこれらの作品はまとまって本になって刊行されることはなかった。昭和 6 年（1931）2 月号の編集ノートでは、「この二月が恰度「種蒔く人」創刊以来満十週年に當る」と述べ、10 月号の巻頭言では「プロレタリア文学十年」と記し、プロレタリア文学が『種蒔く人』から始まることを自明のこととして記している。

さらに、金子の関与の質的変化をみるために、金子が関与した記事の頁数分布の推移をみてみる。

（表 7）金子が関与した記事の頁数の推移

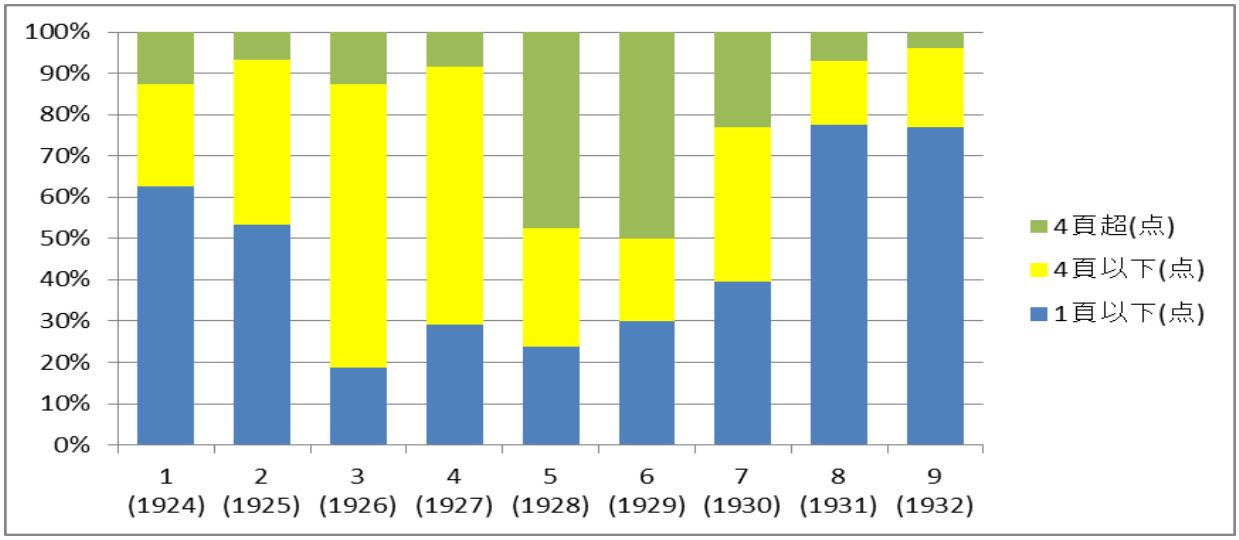
（次頁参照）

135 この叢書の発行人は、当時の『文芸戦線』編集人であった石井安一であり、昭和 5 年（1930）2 月 25 日に刊行された。9 巻には伊藤永之介の「恐慌」を同年 5 月に刊行している。その折、8 巻の青野季吉を次巻予告と載せているが、刊行は確認できていない。

136 この全集は昭和 2 年（1927）6 月から刊行開始。当初 48 巻の予定が 50 巻になり、後に昭和を採り入れ 10 巻が追加となる。全 60 巻昭和 4 年（1929）2 月で完結した。文学書の出版で有名な春陽堂が創業五十周年記念大出版として企画した。51 巻から 60 巻までは昭和を取り入れたため全集名が「明治大正昭和文学全集」に変更となっている。

137 この全集の昭和編 10 巻の中には、ナップ系の作品は第 51 巻に「短編集」で、第 55 巻は、「現代作家篇〔第 1〕」横光利一篇、十一谷幾三郎篇、滝井孝作篇、佐々木茂索篇、川端康成篇、中河与一篇、稲垣足穂篇、坪田譲治篇、竜胆寺雄篇、久能豊彦篇、井伏鱒二篇、堀辰雄篇、嘉村礒多篇、小林秀雄篇である。昭和前期の文学事情、編集側の評価がみえる。

巻（年）	1頁以下(点)	4頁以下(点)	4頁超(点)
1（1924）	10	4	2
2（1925）	8	6	1
3（1926）	3	11	2
4（1927）	7	15	2
5（1928）	5	6	10
6（1929）	3	2	5
7（1930）	19	18	11
8（1931）	66	13	6
9（1932）	20	5	1



（図 2）　記事の頁数分布の推移にみる、金子の関与の質的変化

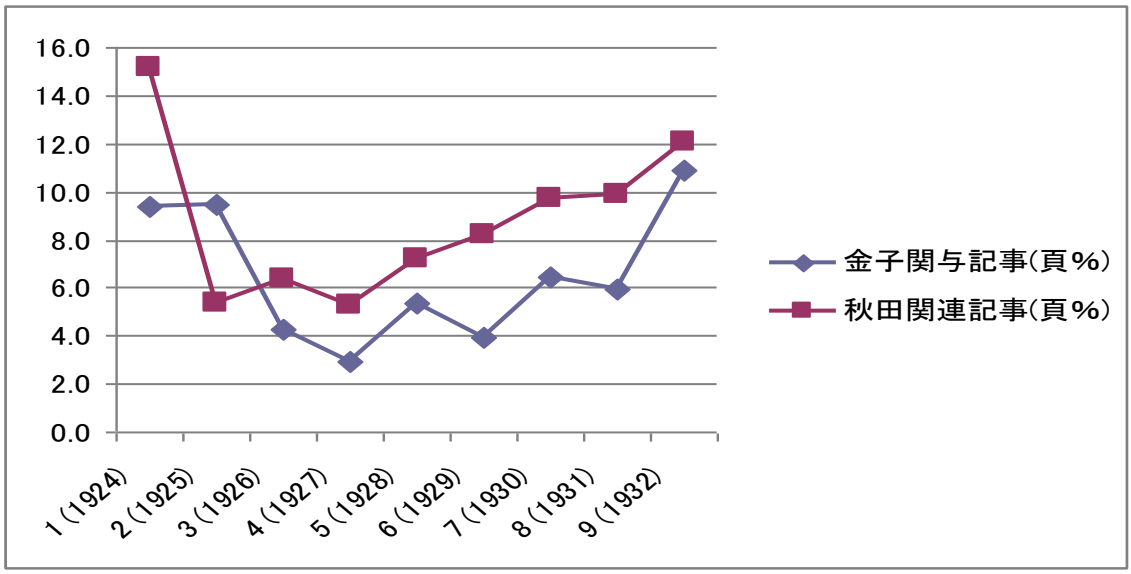
（表 7）、（図 2）は、雑誌に掲載された全記事の頁数分布から、記事頁数を「1 頁以下」、「(1 頁超) 4 頁以下」、「4 頁超」の 3 階級に分け、階級別点数を見たものである。グラフでは、巻ごとに金子関与記事の頁数階級別分布を百分比で示し、その推移を見たものである。始期・終期には会務記事など頁数の短いものが多数を占め、盛期には、長い頁の記事の比率が高くなっている。これは、盛期には作家として積極的に参加し、創始期と終期には雑誌を支える役割を担っていたことを裏付けている。

そして、（表 8）（図 3）で、秋田関係の著者らの記事についても、金子関与記事との関係で推移をみてみる。それぞれの記事の頁数が雑誌全体の中でどの程度の率を占めるかを示している。「金子関与記事(頁%)」は金子が関与した記事の合計頁数÷巻全体の頁数×100、「秋田関連記事(頁%)」は秋田の著者による記事の合計頁数÷巻全体の頁数×100 である。占有率（巻全体の頁数に対する百分比）をみたのは、雑誌全体の盛衰による影響を除去し、標準化するためである。

（表 8）金子関与記事と秋田関連記事の頁占有率（雑誌全体に対する占有率%）の推移

巻（年）	金子関与記事(頁%)	秋田関連記事(頁%)
1（1924）	9.4	15.1
2（1925）	9.4	5.4
3（1926）	4.2	6.3
4（1927）	2.9	5.3
5（1928）	5.4	7.2
6（1929）	4.0	8.2
7（1930）	6.4	9.7
8（1931）	6.0	9.9
9（1932）	10.9	12.0

相関係数 R＝0.59



（図 3）金子関与記事と秋田関連記事のページ占有率の推移

これをみると、金子の貢献と秋田の著者らの雑誌参加がほぼ同じ動きをしており、両者に関連のあることがわかる。試しに両者の相関を計算すると、相関係数 R=0.59 で、比較的高い相関を示している。金子が秋田関係の作家達を積極的に推進していたということがこれらの数字にも表れている。

金子が『文芸戦線』の編集長を勤めていた時代には、自分や秋田県関係者のプロレタリア系の作家の原稿が数多く掲載されている。『文芸戦線』後期は彼等の働きで雑誌が保たれていたといえるほどである。昭和 5 年（1930）、金子は文戦劇場を立ち上げて新潟・秋田を含む、地方巡回公演を行っている。この劇団のメンバーには、秋田出身の青年も多く参加し、活動を報告している。

第4節　プロレタリア文芸誌同人としての金子洋文

日本で「インターナショナル」が最初に歌われたのは大正 11 年（1922）11 月 5 日に、牛込会館で

開かれた「露西亜革命五周年記念前夜祭」[138]で、これは『新興文学』主催の文芸講話であった。

『新興文学』は大正 11 年（1922）11 月から大正 12 年（1923）8 月まで 9 冊が刊行され、後に『種蒔く人』に参加し、『文芸戦線』復刊時の編集長となった山田清三郎が編集をしていた。そしてこの雑誌には金子も関わっていて、発行部数は 2,000 部から 3,000 部、一号に 2,000 円を要し、原稿料は、創作は一枚 1 円、そのほかは 50 銭で、原稿料が出るプロレタリア文学の発表機関を提供する商業誌で、平均 140 頁から 200 頁のボリュームを持っていた。

当時刊行されていた他の雑誌の頁数をあげてみると、大正 12 年（1923）1 月創刊の『文芸春秋』創刊号は 30 頁にみたない。『種蒔く人』は平均 60 頁、『黒煙』が大体 50 頁、『シムーン』が大体 70 頁弱である。これらの雑誌でプロレタリア文学が大きな舞台を得ていたのである。そしてこれらの雑誌から、平沢計七、中西伊之助、前田河広一郎ら多くの新進作家が育ち、小林多喜二も投稿者のひとりであった。

山田清三郎が編集となって『文芸戦線』が再刊された大正 14 年（1925）7 月、今東光が発行編集印刷人となった雑誌『文党』が創刊され、金子は、サトウハチロー、村山知義らとともに、8 人の同人のひとりとなり、後に梅原北明も加わった。同人たちはデモンストレーションとして銀座行進 を行っている。新感覚派よりも奔放な前衛ぶりで、震災後の反社会的な芸術的雰囲気があると評される『文党』は、大正 15 年（1926） 5 月まで、11 冊が刊行された。彼らは「自費出版同盟」の実現を考え、『文芸市場』の創刊へ動くことになる。

大正 14 年（1925）から昭和 2 年（1927）まで 19 巻刊行された『文芸市場』の創刊当初の編集を、金子は梅原北明とも携わっている。雑誌は、「芸術に対する迷信」を打破し、「ダダ、表現主義、新感覚派、コント、プロレタリア文学、新人生派」といった芸術上の新傾向を歓迎し、同時に反資本主義を信条としていた。この傾向は、プロレタリア陣営内の論争が激化するにつれてその度合いが増していった。この雑誌では、主義主張に縛られず、伊藤永之介、伊東憲、平林たい子、林芙美子、里村欣三たちの創作や、平林初之輔、蔵原惟人らの評論が掲載されていた。金子はこうした雑誌のいずれにも深く関係していて、その存在はプロレタリア文化運動のなかで、ひときわ目立つ存在だったのである。青野季吉から『文芸市場』の原稿料を感謝する金子洋文宛ての書簡 がのこされている。川端康成からも金子宛に、同人誌のことで知人を紹介している書簡があることから、当時の雑誌活動に、金子は影響力があると目されていたことがわかる。

金子を頼って秋田から上京し寄寓した伊藤永之介は『文芸戦線』の主要作家となり、農民文学の重要な書き手となった。伊藤の文壇登場、後期『文芸戦線』の高い頻出には金子の存在が大きかったと

138 小牧近江『ある現代史』(法政大学出版局、1965 年)96-100 頁。

みることができる。伊藤永之介が今野賢三の紹介状をもって金子の家を訪ね、当初は住み込みで作家の道を模索したように、作家を目指す者にとって金子は頼れる存在であった。その一方で、金子の活動は、雑誌だけではなく戯曲や舞台公演の活動が大きくなってきていた。彼の主舞台は同人雑誌から演劇の世界に広がっていった。

第5章　金子洋文と俳句

第5章　金子洋文と俳句

第1節　金子洋文と俳句との関わり

金子洋文の遺族から、秋田市立土崎図書館「種蒔く人資料室」に寄贈された資料には、さまざまな手紙、原稿草稿、メモ日記手帖が存在する。そして金子の家族が語る金子の生き方は、来るものは受け、去るものは追わずというものだったという。晩年の刊行物のひとつ、句集『雄物川』のあとがきで、昭和４年（1929）頃、人から依頼されて演出をしたことから、劇作家、演出家になったと語っている。こうした点を考慮すれば、金子の 90 年におよぶ生涯は、人との出会いを大切にすることで人間的関係を築き、それによってさまざまな分野の仕事を手がけたくりかえしから、多彩な活躍に繋がったようにみられる。

これまで、金子と文学との関わりを、白樺派との交流や、『種蒔く人』以来のプロレタリア文学運動と結びついた種々の同人雑誌活動から読み取ってきた。彼の思想を表現する手段として書かれた、農村や貧しい人たちを表現した作品をとりあげ、表現活動が不自由であった時代に、彼がいかにして自らの思いを表出し、それを社会の変革に役立てようとしてきたかをみてきた。

ところで金子の創作活動を俯瞰してみると、もうひとつ欠かせない分野があることに気づく。俳句である。短いとはいえない生涯を通じて句集として発表されたものは『雄物川』一冊のみであり、しかも中央で刊行されたものでなかったことから、余り知られることはなかったが、金子が俳句を身近に書き記していたことは、彼がのこした資料をみると明らかである。のこされた膨大な資料を調べてみると、ごく初期の段階から俳句や和歌が身近にあったことが分かる。金子の創作活動の早い段階から、句歌が記されていたことは注目すべき事象で、金子を語る上で忘れてはならない要件のひとつといえよう。金子の創作活動を語る上で韻文の詩歌は逸してはならない分野なのである。

金子は折にふれて詠んだ句を、手帳などに記していた。これについては、「戦時中から、日常の折々に手帳に俳句を書いていた」という家族の証言がある[139]。

こうして書きためられた句のうち、金子が整理してのこすに価すると判断したものが、戦後 20 年を経たころに、一冊の「句と歌と感想　（1）」というノートにまとめられていた。そして、このノート

139　息女の金子功子氏談。俳句は参議院議員手帳にも記されていた。

を活用して書かれたのが、昭和 55 年（1980）１月１日から３月２日まで、『秋田魁新報』に 19 回にわたって連載された「俳句随筆」である。

さらにこの「俳句随筆」として掲載されたものから、句だけを抜き取って編まれたのが、金子洋文米寿記念刊行会編集の句集『雄物川』である。刊行は昭和 56 年（1981） 12 月、出版は秋田市の金子洋文米寿記念刊行会によるもので、金子はこのとき 87 歳であった。

このように俳句は金子にとって絶えず身辺にあり、時々の思いを伝える表現手段であった。しかし、金子の俳句をとりあげた論文は皆無に等しい。ここでは『雄物川』にいたるまでの流れを中心に、のこされた資料を含めた資料調査から、金子の俳句との関わり方に焦点をあてる。なお「雄物川」とは秋田の歌枕として知られる名所で、これを句集の題名としたことが象徴するように、俳人としての金子は、秋田と関係が深い。金子は戯曲にも「雄物川」という作品があるが、このことばは、金子を論じるにあたって看過できない意味を持つといえる。

第2節　金子洋文資料にみる俳句―「句と歌と感想」

金子は『雄物川』のあとがきで、小島政二郎著の『久保田万太郎』から、「写生は俳句の目的ではなく手段だ。（中略）心に詩を持っている人でなければ俳句は作れない」という言葉を紹介した上で、現在の俳句が「俳句の大道は写生である」といった虚子の言葉にとらわれすぎていると述べた小島の意見に賛同している。金子にとっての「句」は、情景と人の思いを織りまぜて表現するもの、詩情の表現のひとつであり、それこそが俳句をつくることで一番大切なことであった。自らの周囲に展開する風物（自然や社会の）と、作者の心が重なりあう表現形式だったのである。

『雄物川』を刊行した当時、金子は舞台芸術の分野では浅草演劇、農村演劇から新国劇、新派、そして日本の伝統的舞台芸術の歌舞伎までと広く関わってきた重鎮であった。こうした長年の体験を踏まえた彼の俳句論は、句作によっていわゆる「芸術」をめざすのではなく、一般的な読者にも親しみやすいことを大切にするという考えがあり、そこには新国劇からやがて商業演劇に身を投じていった流れに通じる考えがうかがえる。金子がのこした手帖やメモには、折に触れ記された句とともに、こうした考えが記されている。

1. 「句と歌と感想」

ここでのこされたノート「句と歌と感想」を書誌的に述べると、資料の中には、市販のノート（B6 版　KOKUYO　NOTE、21×15.5 センチ）に、「句と歌と感想」と題されたものが 2 冊存在する。前半は

万年筆で記され、後半はボールペンで記されている。表紙上段には、「句と歌と感想（1)」と表題が書かれていて、下段には金子洋文と署名がなされている。そして「句と歌と感想（2)」の表紙は、表題のみが記されている。

内容としては、（１）にはノート 50 頁余りの最初から最後まで、句や詩、さらに歌の歌詞が最後の頁まで書かれていて、ノートは最後の頁まで使用されている。

（２）の方は、若き日の想い出等の日記を中心に、ノートの 113 頁までが使用されている。（１)、（２）ともに、過去に記されたものを整理して、のこすべきものを再度書き写したものであることはその整然とした書き振りから明らかで、書き写したものに、自身で校正やコメントを書き加えている。

内容は、時間的には、古くは大正 2 年の手帖から書き写したものから、昭和 50 年（1975）頃に記されたと本人が推測しているものまで、およそ約 60 年間にわたり書き記された日記や手帖の中から、句や歌を中心に抜粋したものであることが分かる。ただし筆写の順は、必ずしも時代を追ってはいない。収録されている句の数は全部で 237 句である。それに短歌 42 首で、前半は万年筆が用いられ、ノートの半ばあたりに、1 頁の空白を置いた後は、ボールペンで、昭和 50 年 10 月 22 日と記され、以下は「十四年前」に作った句で、当時の年齢を 65 歳頃と記してある。これから推測すると、この部分を記した時の金子の年齢は 79 歳となり、昭和 50 年当時の彼の年齢と一致する。

大正、昭和の作品を書いていた前半部分が万年筆で書かれていることから、万年筆の部分は、昭和 50 年（1975）10 月 22 日以前に書かれたと推測することができる。そしてこの部分はインクの色と書体とが同じであることから、筆写は比較的短い期間で行われたとみられる。そして（１）の最後の部分は、金子がノートを書きはじめた段階で、末尾はすぐに書かれていたと思われることからノートは当初からある構想のもとにまとめられたと考えられる。

「句と歌と感想」（１）の最初の頁は冒頭に「昭和十六年」とあり、続けて次の短歌が書かれている。

新春の光あふれる芝の上に日ねもす子らとたわむれてあり　　（元旦）

続いて俳句が 5 句並べられているが、その中の 1 句だけ、（昭和 14 年）と異なる年が記されている。

このノートの最期の部分に置かれているのは、土崎小学校の校歌である。金子にとって土崎小学校は『種蒔く人』創刊で協力した小牧近江、今野賢三等とともに学んだ母校であり、かつ彼はこの母校で代用教員を務めていた。そしてこの校歌を作詞したのは、金子自身であった。この一事からも、金子のふるさと秋田に寄せる思いが伝わってくる。このノートの目的にそった構成として、土崎小学校校歌をもって終わりに配置しようとしていた。と同時にこのノート（やがてこれを母体とし生まれる

句集の表題が「雄物川」であることも含めて）の目的が、自らの故郷への思いを伝えようとするものであったことがわかる。

金子が創作した土崎小学校の校歌は次のようなものである。金子洋文作詞、市川元作曲で昭和 15 年（1940）に制定されたものを、昭和 24 年（1949）、民主主義の時代に歌詞の一部がそぐわないとして金子自身が修正したもので[140]、金子がこの校歌を大切にしていたことがわかる。

土崎小学校々歌

(1) 明けいく空に 太平の
名峰仰ぐ わが校舎
学びの庭に きょうも集いて
教えの道に いそしまん

(2) 文化秋田の 血をうけて
末かわらじと 雄物川
清き流れに さおさして
お国のために つくさばや

(3) 北荒海の 日本海
吹雪にきたえし 港魂
さかまく波に 帆をあげて
自由の海に こぎいでん

なお、昭和 50 年（1975）10 月 22 日と記した部分から以後は、ボールペンで書かれているが、この部分の書体はかなり急いだ時の筆跡で、一気に最後の頁まで埋められている。金子にはノートの完成を急ぐ事情があったのであろうか。

一方、「句と歌と感想」（２）の内容をみると、「ある夏の生活（大正 10 年 7 月）」、「続・ある夏の生活（大正 11 年 8 月）」と題された日記である。

大正 10 年（1921）は、『種蒔く人』が創刊された年にあたり、若き金子が故郷土崎ですごした当時の日々のことが記されている。大正 11 年（1922）8 月、同人たちは、日本がシベリア出兵を行ってい

140 旧校歌は、「紀元二千六百年」の記念事業として金子洋文作詞、市川元作曲で昭和 15 年（1940）に制定された。昭和 16 年（1941）2 月 11 日の紀元節に初めて第一小学校の第一体操場で披露された。変更箇所は以下の通り。霊峰→名峰、教えのみことかしこみて→学びの庭にきょうも集いて、学びのみちに→教えの道に。勤皇秋田→文化秋田の、御物川→雄物川、皇国の→お国の。やまとだま→港魂、五つの海→自由の海。

るなかにあって、深刻な飢饉に襲われていたロシアへ人道支援としての募金を呼びかけ、その実践活動を行っていた。その一環として、秋田で有島武郎らを迎えて講演会を開催している。事実、彼らによる寄付の記録がロシアにのこされていて、日本から送られた支援の第 1 号と目されている[141]。さらには金子の出世作となった『地獄』が執筆された時でもある。大正 10 年（1921）7 月と、大正 11 年（1922）8 月は金子の長い生涯において、思い出にのこる特別な夏であったといえよう。

金子の日記にはこうした多忙の日々での様子が書かれているが、当時の恋人との心理的葛藤を記した、金子洋文青春日記ともいえる個人的な内容となっている。この時期の日記には、俳句はのこされていない。

2. 「俳句随筆」

自作の俳句の紹介を主な内容とする、連載記事「俳句随筆」は「秋田魁新報」に連載されたもので、のこされたノート「句と歌と感想（1)」から作品を取り出したものである。

「昭和 55 年 11 月 30 日より仝 56 年 8 月 17 日まで」と題した日記には、6 月の日付で、「句作開始」と記されており、また「句集出版」についての話題も記されている。句集出版とは、昭和 56 年に金子洋文米寿記念刊行会から刊行された『雄物川』を指しているのは明らかで、これらのことから、「句と歌と感想」は、こうして動き出した新聞記事の依頼や句集の出版の話が刺激になって、これまでの作品を整理する必要が出てきたものと推察される。金子は生涯にわたって書き留めた句を選定しながらこのノートに写し、その上でひとつひとつの句に、〇付けや削除などして、推敲を重ね加筆している。

3. 『雄物川』にいたる句作の流れ

金子の句の中には、秋田地方で詠まれたり、秋田のことを詠んだりしたものも少なくない。彼がのこした唯一の句集本は『雄物川』である。その書名となった「雄物川」は、名所・歌枕として数々の歌や句が詠まれてきた地であり、現在の秋田県にある。先にも述べたが、金子はこれ以外にも雄物川を作品の題につけたものが存在する。洋文にとって雄物川とは、生家の目前を流れていた身近な川であり、秋田の暮らしにもたらす影響も大きい。ふるさとと自分とのつながりを思い起こさせる意味をもっていた。

金子の晩年に刊行された句集本は秋田で刊行されたものであり、秋田の人たち向けに伝えることを意識していただろうということは想像に難くない。ここで金子は「俳句は詩でもなければならない」

141 「ロシア飢饉救済をよびかけた『種蒔く人』」長塚英雄編『ドラマチック・ロシアin Japan－文化と史跡の探訪』（生活ジャーナル、2010 年）93-107 頁。

と述べている。金子の文芸観を考えるうえでも、無視できない貴重な発言であろう。

さらに、戦時中以降は日常の折々に手帳に俳句を書いていた、という金子と俳句との関わりは、戦前の『秋田魁新報』紙上で、注目すべき一件があったことを、金子自らが『雄物川』のあとがきに記している。

第3節　金子洋文の俳句論争

繰り返し述べてきたように、金子は長く俳句を嗜み、昭和 56 年（1981）、87 歳のときには、秋田市において金子洋文米寿記念刊行会編集の句集『雄物川』が刊行されている。「雄物川」は秋田の歌枕として知られる名所であり、それが句集の題名とされたことで象徴されるように、俳人としての金子は、秋田と関係が深い。このことは当然ながら金子洋文を論じるにあたって看過できないことである。
俳人としての金子について論じるにあたって、次に注目すべきなのは昭和 10 年（1935）、藤田紫橋とのあいだでおこなわれた「俳句論争」である。なぜなら金子が俳句をたしなんでいることが、はじめて公けになったものであり、さらに当時の金子の俳句の知識がうかがわれるからである。 そこで本節では、ふたりのあいだでおこなわれた「俳句論争」について分析し、金子と俳句との関わりについて考察したい。

1.　秋田地方の俳人

秋田地方は、江戸時代から俳諧をたしなむ人が少なからずおり、吉川五明（1730-1803）などの有名俳人がでている。藤原弘編『江戸時代秋田の俳人たち』（加賀谷書店、1966 年）によれば、文化・文政期（1804-1830）に大阪で発行された俳人名簿である『万家人名録』及び『万家人名録拾遺』には、196 名の秋田出身の俳人の名前が掲載されている。このように 200 名近くの俳人がいる状況は、明治維新後も大きく変化することはなかったようで、千葉三郎著『「俳星」明治版の軌跡』（北門文学会、2002 年、240 頁）には、『俳人名簿』（俳書堂、1909 年）によって、秋田県の俳人数を 187 名としている。なお、これは正岡子規門下の俳人で、旧派を含んでいない数字である。秋田では正岡子規から撰された誌名と揮毫した題字を掲げる俳誌『俳星』も発行されていた。子規の高弟である河東碧梧桐は、明治 39 年（1906）8 月 6 日から翌年の 12 月 13 日までの間、東北地方他を旅行しており、秋田には 112 日間滞在している。そのおりの紀行文『三千里』には、

そは兎に角、羽後の俳人の多いことは恐らく全国に冠たるものであらう。町として俳人のおらぬ

處は殆どない。居れば大抵十名内外の團體がある。雄勝郡の俳句は三梨に起り、由利郡の俳句は老方に萠した。三梨、老方とも山中の一僻村である。

と記している。

また秋田の俳人としては、新聞『小日本』の記者で、子規門下の四天王のひとりと目されていた石井露月(1873-1928)、『秋田魁新報』初代社長で郷土史・俳句研究でも著名であった安藤和風(1866-1936)などの活動も注目される。露月は正岡子規の命名した俳誌『俳星』を中心にして日本派の俳句を広め、和風は『秋田魁新報』に俳句の投稿欄を設置して広く俳句を研鑽することに功があった。明治 25 年（1892）には、土崎港町から和綴じの俳誌『五明集』が創刊されている。小牧近江の父、近江谷栄次（号：井堂）は実業家で、政治家であったが、俳句をよくしていた。このような環境にあった金子にとって俳句は身近であり、折につけて俳句で自らの思いを表現することは、ごく自然なことであったといえよう。

金子は 22 歳まで（東京で見習い工として働いた 14 歳からの 2 年を除く 20 年間）こうした秋田の地に育ち住んでいたが、宗匠について俳句を学んだという記録はのこっていない。貧しい家に生まれ、生活におわれていた金子には、秋田で俳句を学ぶ余裕はなかったと思われる。遺族に確認したところ、上京後にも句会に出ることはあっても習うことはなくひとりでたしなんでいた、とのことであった。そのため俳句雑誌に金子の俳句が載るなどといったこともなかったから、秋田の俳人たちに特に注目されることはなかった。そうした金子の俳句が、にわかに秋田の俳人に注目されたのは、昭和 10 年（1935）月、金子 41 歳の時のことである。

2. 『秋田魁新報』昭和 10 年(1935)1 月の俳句論争

昭和 10 年(1935)1 月 1 日付『秋田魁新報』に、「元日や東海道の晝寝かな」と題された、金子洋文の随筆が掲載された。それに対し、1 月 13 日付と 15 日付の『秋田魁新報』に、「文士の句その他」（上・下）と題された、金子の俳句「元日や東海道の晝寝かな」に対する批判文が掲載された。批判したのは藤田紫橋、『秋田魁新報』の記者である。

秋田近代文学史研究会編『秋田文芸人名録稿』（秋田近代文芸史研究会、1970 年）によれば、彼は本名を藤田栄太郎といい、明治 32 年（1899）4 月 1 日生まれである。俳句を嗜み、『秋田魁新報』の川柳欄を担当しており、柳号は「三泥子」であった。

(1) 藤田紫橋の批判

「文士の句その他」で、藤田が問題としたのは「季語」と「切れ字」のことである。周知のように、俳句には次の基本的な三つの約束事がある。

第一が定型であること、すなわち十七音であること。

第二が季語を必要とすること。

第三が切れ字を必要とするということ。

この三つは、俳句をつくり、あるいは鑑賞する場合まず注目される点であり、そのうち二つにかかわることを、藤田が問題としたのである。

【第一の批判根拠】季語、季重なり

藤田は、まず季語については以下のように述べている。

> 「元日」は「新年」であり「晝寢」は「夏季」に属するからだ。俳句の世界では「季重なり」を非常にきらふのである。これは一句の潔癖性の上からばかりでなく、俳句は「季語」を重んずることにおいてその重要なる構成要素とするからである。（中略）「季重なり」も實に甚だしき「新年」と「夏季」との間隔的矛盾（妙な言ひ方だが……）を平気で敢てしてゐる。放膽といふには餘りにも無智な……と叱りつけたい。

藤田が指摘したのは、いわゆる「季重なり」で、これは一句の中に季語が二つあることをいう。

「季語」は、「季」をどのように示すかによって次の三つに分類できる。

ひとつめは、「春」、「夏」、「秋」、「冬」と明示されているもので、たとえば「春の風」といったものがあげられる。二つめは、客観的事実として「季」が定まるもので、たとえば「紅葉」といったものがあげられる。三つめは、習慣や約束として「季」が定まっているもので、たとえば「月」はいかなる季節にも鑑賞することができるが「秋」のものと定められている。

藤田が季語とした「元日」は、2つめの季語で、客観的事実として「新年」のものである。また「昼寝」は、三つめの季語にあたり、「夏」のものである。この2つは、たとえば、当時の俳句鴬声会編『俳句の作り方』（国華堂書店、1918年）や、今井柏浦編『新校俳諧歳時記』（修身堂、1929年）、石野観山編『俳諧歳時記』（成光館書店、1934年）のいずれでも、「新年」と「夏」の季語としてとりあげられている。こうした季語の考え方は当時だけでなく、現代まで受け継がれていることは、山本健吉編『季寄せ』（文藝春秋、1973年）、稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』（三省堂、1986年）と、現代を

代表する俳人の編んだものにも採られていることからうかがえよう。

このように「元日」も「昼寝」も、一部の俳人が使用する目新しい季語ではなく、周知の季語であり、この二つを季語としてとらえれば、金子の句は、藤田が指摘するように「季重なり」であった。

藤田は「俳句の世界では「季重なり」を非常にきらふのである」と述べているが、たしかに「嫌う」俳人は存在したようで、たとえば加藤美侖著『社交要訣是丈は心得おくべし』（誠文堂、1918 年）には、「俳句を作るには季節の言詞を入れるといふ事を心得ねばならぬ」、「季の詞を入れるといつても、之れが重なると素人発句となる」、「僅か十七文字の間にそんな死んだ詞があつては駄句とならざるを得ん理である」としている。

【第二の批判根拠】「切れ字」

次に藤田は「切れ字」を問題とし、以下のように批判する。

> わが洋文氏の一句では「元日や」と先づアタマに感嘆詞を置いて、「晝寝かな」と結句にも感嘆詞をおいてゐるが、これはわが定型派俳人の仲間では「や」「哉」といつて非常に忌みきらふことにしてゐる。

連歌、俳諧で句の「切れ」は重視され、「切れ字」についても重視されている。現代でも、「切れ字」を特にとりあげた、高浜年尾監修、大木葉末著『作句と鑑賞のための俳句切字論』（清水弘文堂、1977 年）が出版されている。

「アタマに感嘆詞」、「結句にも感嘆詞」と述べているのは、俳句は短詩型文芸であるから、内容を盛りだくさんにするのはよくない、とされるからである。従って、金子の句では、「や」の付いた「元旦」が眼目なのか、「かな」の付いた「昼寝」が眼目なのかがわからず、感動の中心が曖昧だというのであろう。

また「「や」「哉」といって非常に忌みきらふ」については、ほぼ同時期に刊行された松本仁著『俳句文法六十講』（立命館出版部、1932 年）に、

> ……や、かなは、伝統的に俳句の世界に於て嫌悪されつゞけてゐる。

とある。「や」、「かな」の二つの切れ字を一句に読むことを嫌う俳人がいたことも事実である。

(2) 金子洋文の反論

藤田の批判に対して金子はすぐに反論した。それが『秋田魁新報』に掲載されたのは 1 月 22 日のことである。自分の句は川柳だから、「季重なり」も「切字」も問題ないと反論した。「春場所や胯からのぞく腹が波たつ」と題された文中で、次のように述べている。

> だが、(元日や東海道の昼寝かな)を俳句と見なされたことが、僕の失策であると言へば言へる。なぜなら僕は一年に千あまりの川柳をつくることはつくるが俳句なぞつくつたことはない、だから季題や定型律もへつたくれもないのである(俳句の方でも僕はくだらんことだと思ってゐる)だから感嘆詞が二つ重ならうと三つ重ならうとお構ひなしだ。川柳でゐるつもりのものを、俳句扱ひされたのがむしろ迷惑至極で、折角頭のいゝところを披見なすつた藤田さんにお気毒な次第だ。

『大辞泉』(小学館、1995 年)「川柳」の項に、

> 江戸中期に発生した雑俳の一。前句付けの付句が独立した十七字の短詞で、その代表的な点者であった初世柄井川柳の名による。季語や切れ字などの制約はなく、口語を用い、人生の機微や世相・風俗をこっけいに、また風刺的に描写するのが特色。川柳点。狂句。

とあるように、俳句における切れ字、季の制約がないものを川柳とする。しかし、金子の句は、それを表題としたこの随筆を読む限り、決して川柳ではないと思われる。以下、その点をみていきたい。

昭和 10 年(1935)1 月 1 日、『秋田魁新報』に掲載された金子の随筆「元日や東海道の昼寝かな」によると、相撲稽古の帰りに、省線電車でうつらうつらしているときに、「元日や東海道の昼寝かな」という句が浮かんだ。この句が浮かんだ背景を、金子は以下のように説明している。

> この正月は、新派が大阪歌舞伎座で上演する「母の土産(みやげ)」といふ芝居の演出で、大阪へ行かねばならぬことになつたからである、行くとすると、三十日の夜出発、だから(元日や……)では嘘つぽつちだが、大晦日の東京を逃げ出して、東海道の列車の中で晝寝をするのも、悪くない、といつた感じが、ふと十七字となつてうかんで来たのだ。
>
> それのみではない。
>
> 私は今、昭和十年度を如何に生活すべきか、その仕事や氣持の上のプログラムを豫定してゐる。それは、相變らず險阻多難な生活と思はれるが、仕事に熱中して愚痴はいはん、といふ心構へで

ある、愚痴をいふ暇があつたら、晝寢をせう……さういふ氣持が、この句に幾分出てゐるのであるまいかと考へられる。

これによれば、「元日や」の句が詠まれたのは、「東海道の列車の中で昼寝をするのも悪くない」という思いと、「愚痴をいう暇があったら昼寝しよう」という思いがあったことになる。今の「感じ」、「気持ち」が十七字として浮かび、それが随筆執筆に用いられたということになろう。元日の紙面に載るものであることを考慮し、「一年の計は元旦にあり」といわれるように、年のはじめに今年の目標を述べたのである。

つまり、「元日や」と「や」をつけて強調したのは、元日の誌面に載るからであって、句だけからは不明だが、「晝寢かな」と「かな」をつけて強調したのは抱負を述べているためで、年賀状の常套的な表現、「新年あけましておめでとうございます、本年は愚痴をいわず、がんばります」のような、新年の挨拶を述べたものなのである。

川柳の定義は諸説ある。切れ字、季がなければ「川柳」とするのであれば、金子の句は、切れ字も季もある。川柳を、人情世帯をうがった内容を持つものとすれば、金子の句は自分の抱負を述べたもので、人情世帯をうがったものではない。形式的にも内容的にも金子の句は俳句である。

とすればここで金子が「川柳」がいかなるものかの理解が足りなかったことが露呈するのである。

(3) 問題点

（ｉ） 季重なりについて

藤田の批判は、先にのべた俳句を詠むにあたっての三つの約束事を重視する俳人にとっては肯定できるものであったと思われる。しかし、問題点がないわけではない。

藤田は「季重なり」を指摘するが、それをしてよいか、ならぬかは別問題である。芭蕉の句には「季重なり」の句が多いが、芭蕉の作品を間違いだらけとはいわない。「〈季重なり〉はよくないとする俳句の世界」では〈嫌う〉だけのことである。たとえば、伊東月草著『俳句の考へ方と作り方』（考へ方研究会、1927 年）に

一句の中に、定められた季語が含まれてあるからといつて必ずしもその句が季感を伴ふといふわけのものでもなく、又定められた季語が取入れてないからといつて、必ずしも季感の出ないといふわけのものでもない。

とあるように、季語の有無といった形式面ではなく、その句全体であらわされる季感を重視する俳人もいる。

また前掲『社交要訣是丈は心得おくべし』にも

> 同季の景物を重ねてもよい場合もある。その二つの同季の景物が、いづれ劣らず相並び相俟つて一首の趣きを成すとか、或は一方が主となり、一方が客となつて妙趣を現はすやうな場合には差支がない。

とあり、「季重なり」を全面的に禁止しているわけではなく、内容によってはよいとする。

また「元日」は客観的事実であるから明らかに「新年」の季語であるが、「昼寝」は習慣的な季語である。同じ習慣的季語「月」は、「春の」を付せば秋の季語ではなくなる。「昼寝」も夏だけに行われるものではない。「昼寝」を夏の季語として用いれば、夏の昼は暑いので、そうした時間帯に活動するのを避けて寝る、ということの季節感をともなうが、季語という意識がなければ、「新年の昼寝」でも問題は生じないということである。たとえば以下のような句も詠まれている。

皆ひとの昼寝のたねや秋の月　　貞徳
よき知らせ冬の昼寝をしておれば　細川加賀
冬晴れや朝かと思ふ昼寝ざめ　　日野草城

（ⅱ） 切れ字について

では切れ字に関してはどうか。三田村熊之介著『発句の栞』（発行者石塚猪男蔵、鹿田書店、1896年）には「寓言体」の用例として

夕顔や秋はいろ／＼のふくべかな

という芭蕉の句を例にあげている。「や」、「かな」を含んでいるが特に問題としていない。また同書には

或人の
　奪ひあふてすり殺したる蛍哉

の句の如きは。殺風景の極にして殆んど風雅の痕迹をも留めず。しかるに、

五月雨や火の雨まじる蛍かな

などいへばいかにも風雅に聞ゆ。同じ詩料にても意匠のつけ方によりては高尚とも卑俗ともなるべし。

とあり、「や」、「かな」があるにもかかわらず、「風雅に聞ゆ」としている。このように「や」、「かな」を問題としない人もいたのである。

以上のように、藤田の批判が全面的に正しいわけでなく、「嫌う」か否かの問題であり、金子に俳句の知識が十分にあれば、「川柳であるから」といった応じ方をしなくてもよかったのである。

（iii） 藤田の批判について

形式的な俳句の世界では、何を詠みたいかを明確にするため、季語や切れ字の詠み方には注意がはらわれる。たとえば俳句入門書として著された石田一位著『俳句の作り方・学び方』（北辰堂、1959年）など、俳句の詠み方の入門書の類で、必ずといってよいほど説かれるところである。

しかし、俳句をはじめた人に、してはいけない、というのはあくまでも初心者向けのテクニックであって、本来いい句になれば、そうした原則を守らなくても問題とされない。

藤田紫橋は、「放胆というには余りに無智な……と叱りつけたい」とし、「「麺麭屑」ほどに輕蔑して俳句をつくること勿れと戒めんがため」にこのようなことを述べたとしている。この言い様は、藤田のほうが金子よりも年上か、立場が上であるかのようである。

秋田近代文芸史研究会が編纂刊行した『秋田文芸人名録稿』（秋田近代文芸史研究会、1970 年）中の、「秋田文芸人名録」中に藤田紫橋の名がある。当時の秋田在住の文芸関係者に、住所、氏名、生年月日、所属先やモットー、愛読書などのアンケート回答 145 名分を全体で 32 頁にしてまとめたこの人名録にわずか数行が記されている。その記述によれば、藤田紫橋（本名栄太郎）は、明治 32 年（1899）4 月 1 日生まれ、金子より五歳年少である。論争時の姿勢は高圧的なものといえる[142]。

金子は『秋田魁新報』（1935 年 1 月 22 日）の反論記事「春場所や胯からのぞく腹が波たつ」の出だしで

藤田さんといふ方はどんなにえらい俳人であるか未だ俳句に接しないので何とも申し兼ねるが、

142 他には、『秋田市史 第14巻（文芸・芸能編）』（秋田市、1998年）中で『秋田魁新報』の後輩記者、千葉三郎が藤田を紹介している。

…（略）…　よほどえらい俳人らしい。

と記しているので、藤田については知らなかった。もしくは知らなくてもおかしくない程度の人とみていたととれる。しかし、藤田は、金子のことを知っており、ここでは俳句宗匠的な立場で、金子洋文を目下のように扱い、初心者向けの批判をしているといえよう。

(4) 論争

1 月 22 日の金子の反論に、26 日、27 日に対して、再び藤田が「續文士の句其他」という、金子の反論記事に掲載した句についても批評を追加し、批評文は、

「金子洋文よ出直せ／＼」だ

という言葉で終わっている。

すると 2 月 14 日、金子は「俳句か川柳か　―藤田君に答へる」で、

本紙の迷惑を慮ばかつて、この論争は打ちきらうと思つてゐたのが方々から（俳句と川柳とどうちがふか）ときかれるので、簡単に藤田君に答へることにした、

という文ではじまる再反論を載せた。文中では、藤田に「御高見多謝！」といいつつ、「僕の句に對して、満點をつけたり零點をつけたりするほどの、おえらい人かどうか」と問いかけ、川柳と俳句の形にこだわることより、「それぞれの本質を見失ふことなしに、一切の規定や束縛を無視して、如何に現実の生活を、芸術的に表現する」ことの立場にあると主張した。また川柳をはじめて十年であり、発表した句が二十句ほどの川柳子であると自らについて述べている。

金子は藤田の批判に応じたものの、金子洋文著『雄物川』（金子洋文米寿記念刊行会、1981 年）のあとがきによれば、安藤和風[143]からは「金子君は俳句を知らんよ」といわれたという。自らの俳句の理解不足を認識したためか、その後、長らく私的に俳句を詠むことはあっても、発表することはなかった 。俳句に関するものを表したのは、論争から 45 年後の昭和 55 年（1980）のことで、この論争の舞台であった『秋田魁新報』に、「俳句随筆」を連載した。俳人としての金子を考えるとき、藤田との

143 安藤和風は戦前の地方紙を代表する新聞人であり、かつ俳諧研究、俳人としても全国的に知られていた。蕉風よりの秋田正風派と呼ばれた独自の句風で、同時代の秋田の俳人、石井露月とともに後進の指導も行っていた。この論争は、『秋田魁新報』社長であった彼のひざ元での論争で、藤田は彼の部下であった。

論争は、結果として公的な場での俳句に関する発表を、45 年もの長きにわたってさせなかった、という意味で注目される。

3. まとめ

ここでは、昭和 10 年（1935）元旦、金子が『秋田魁新報』紙上に公表した俳句を契機に、金子洋文と藤田紫橋とのあいだでおこなわれた「俳句論争」について、両者の主張を分析することによって、当時の金子洋文の俳句に関する知識がそれほど高くなかったということを明らかにした。この論争は、俳人としての金子洋文を考えるにあたって、まずおさえなければならない重要な点であろう。

この論争の後、金子が新聞雑誌などの印刷物に俳句作品を掲載することはしていない。昭和 55 年（1980）1 月 1 日から 3 月 2 日まで、『秋田魁新報』に 19 回連載された「俳句随筆」までの 45 年間、金子はプライベートな楽しみ方をしていただけで、色紙に俳句を記して渡すことはあっても、俳句作品は公表しなかったのである。

金子はそれまでの俳句を振り返りながら、「俳句随筆」を連載し、さらに、それらをとりまとめて句集『雄物川』を 87 才の時に刊行している。雄物川という題をつけたことは、金子にとって特別な意味を持つ。その 22 年前、金子は自らの少年時代を過ごした明治 40 年頃の土崎港を舞台にした戯曲「雄物川」を執筆し、昭和 34 年（1959）夏に発表している。少年時代に過ごした家のすぐ前を流れる雄物川を日々、身近に眺めていた。船の往来を生活の糧に生きる土崎港町、その地に住む人々の暮らし、川と人の情景が彼の裡に離れがたく結びついていた、いわば金子の原点である。戯曲に続き、かなりな高齢となった金子が、己の句をまとめ刊行した、唯一の句集に「雄物川」という大切な名を付けていた。俳句論争を超え、さらに自らの原点まで遡って著したものであった。

第6章　金子洋文と演劇―演劇人として

第6章　金子洋文と演劇―演劇人として

第1節　演劇人としての金子洋文

金子洋文は、雑誌『種蒔く人』の創刊から『文芸戦線』の編集などで中心的役割をつとめ、プロレタリア文学運動に寄与した作家として語られることが多い。さまざまな創作活動に携わってきた金子について、研究はまだ充分なされてきたとはいえない。とりわけ多様な活動が結集して成立する演劇の分野で多くの仕事を行い、自身を劇作家と語ることが多かった金子について、演劇の世界でどのような仕事をし、それによって彼がたえず思いを寄せていた社会的弱者とどのような関係をむすんだのか、この点に焦点をあてた研究はあまりみられない。

そのような中で、分銅惇作編「金子洋文年譜」[144]は、金子の戯曲作品を網羅的に組み込んでおり、また須田久美編「金子洋文年譜」[145]も同様に有用である。前者は金子の生存時に刊行された『金子洋文作品集』に掲載され、金子研究の基本情報として先駆的な役割を果たしたが、刊行後時間が経過しており、金子のその後の活動や、研究の進展が反映されていない。一方、後者は年譜やこれまでの研究をもとに、最新の研究成果を伝えるものである。共に文学作品としての羅列であり、彼の演劇活動、具体的には作品の上演の状況を知るには不十分である。分銅はさらに「「種蒔く人」と金子洋文」(『悲劇喜劇』31 巻 7 号、早川書房、1978 年）で、金子の作品について、昭和 34 年（1959）に完成した戯曲『雄物川』の世界を紹介した後、十数篇の戯曲作品をとりあげている。これらの作品が、単に階級闘争の観点からだけではなく、庶民の人情を織りまぜて、人びとの日常生活の機微を巧みに伝えることで、観る者を納得させ、結果として自らが信じる理想的な社会の姿と、それを支える思想を伝える表現力をもっているのが金子作品の特徴としている。『種蒔く人』期前後から、小説や戯曲など多くの作品評論も含め、まとまった金子作品論となっている。この論文と同じ雑誌に掲載されていた「金子洋文戯曲年譜」『悲劇喜劇』（早川書房、1979 年）は、上演という観点から作成された簡略年譜である。

北条常久は「金子洋文の戯曲と演劇活動」[146]で、初期からプロレタリア要素をもつ演劇作品、15 本

---

144 『金子洋文作品集(一)』(筑摩書房、1976 年) 431-446 頁。
145 『金子洋文短篇小説選』(冬至書房、2009 年) 306-315 頁。
146 『種蒔く人研究―秋田の同人を中心として―』(桜楓社、1992 年) 197-216 頁。片野達郎編『日本文芸思潮論』(桜楓社、1991 年 3 月) 初出。

の作品と脚本作品 5 本の名をあげている。玄文社が出していた『新演芸』の大正 8 年（1919）5 月号の懸賞脚本募集に、応募して佳作となった作品、『袈裟御前(袈裟と盛遠)』に武者小路実篤の影響が明らかに認められるとした上で、葉山嘉樹の「海に生きる人々」の脚本など、その後のプロレタリア的な演劇作品に及ぶ数本の脚本を取上げ分析している。

熊木哲は、「金子洋文―「種蒔く人」創刊以前について―」[147]で、浅草オペラ脚本を含めた初期の戯曲作品を紹介している。『種蒔く人』以前の金子が脚本を書いていたことと、それなりの評価がなされていたことは、注目される。

これらの先行研究は、戯曲作品の文学的表現の分析が中心であった。そこでこの章では、プロレタリア芸術運動のひとつとしての戯曲の上演も見据えつつ、金子の演劇活動を、演じる側からはどう評価しているかに着目したい。いうまでもなくひとつの戯曲を舞台にのせるまでには、作品の執筆と演出、出演者の選定、舞台設計、稽古、観客への広報など、さまざまな要素がからまっている。当日の流動的な諸条件が発生する。金子はその長い演劇活動で、これらのすべての役割を演じ、附属として添付する一覧表にみられるように、膨大な芝居の上演にさまざまな形で携わっている。こうした活動全体を十分に把握し、包括的に論じられることはなかった。

芝居は舞台の上で演じられるその時だけに出現する、ある意味、その場に居合わせた者たちだけが共感できる独特の表現世界である。従ってこの研究には、日本の演劇全体を網羅した体系的な資料の蒐集と集積、整理が必要であったが、それが充分には行われてこなかったのが実情である。とくに金子は、いわゆる「大衆演劇」と呼ばれる舞台に多く関係していた。商業演劇で活躍した劇作家の北条秀司（1902～1996）は、

> 大衆劇の作家は興行師または座長級俳優の委嘱で書くことが常道となっている。そして書き上げた脚本をそのまま舞台に使用され、わずかにその上で観客に観照されただけで忘れられてしまうのが通例である。すなわち活字によって社会に観照を受けることの出来ない宿命を持たされている[148]

と述べている。

北条秀司がのこした膨大な演劇関係の資料は、近年東海大学情報史科学研究所で整理され演劇アーカイブとしての活用がはじまっている。このように近年は、演劇資料についての見直しが進み、多くの演劇資料が公開されるようになってきており、これらを活かして日本の演劇活動を包括的に捉える

---

147 熊木哲「金子洋文―「種蒔く人」創刊以前について―」『九州大谷研究紀要』(九州大谷学会、1981)37-60 頁。
148 日本演劇協会編『昭和大衆劇集』(演劇出版社 1989 年)の表書き冒頭。

ことが可能となってきた。この章では、こうした資料を活用しつつ、金子の演劇活動全体からの検証を試みる。

第2節　『日本現代演劇史』にみる金子洋文

金子洋文の演劇活動が演劇界では、どのような評価がなされていたか。それを知る資料としては、『日本現代演劇史』全８巻がある。この大著は大笹吉雄によって編纂されて、白水社から 1985 年から 2001 年にかけて刊行された。

『日本現代演劇史』は、「明治・大正篇」、「大正・昭和篇」、「昭和戦前篇」、「昭和戦中篇Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「昭和戦後篇Ⅰ・Ⅱ」の８巻からなり、明治から昭和までの、舞台作品、歌舞伎、新派、商業演劇、軽演劇、新劇、前衛劇、ミュージカルなど幅広い領域を網羅し、その変遷があとづけられている。まさにわが国の舞台芸術を歴史にそった基礎的、包括的な現代演劇の通史である。そこからは大量の資料をもとにした、演劇という舞台芸術が映し出す各時代の文化や思想、社会の状況までを読み取ることができるものである。

従来の演劇に関する資料は、ともすれば特定個人の伝記や、歌舞伎、新派、新劇といった特定分野に限定される傾向があった。それらに比べ『日本現代演劇史』は通時的に、舞台芸術を俯瞰していて、他に類を見ない演劇史となっている。そしてこれには詳細な索引が付されていて、ひとつの芝居の登場人物の出現回数までも計ることが可能となっている。さらに一種の社交の場でもあった劇場の様子や、その芝居を観に来た観客と作者や出演者との交流といった要素も浮き彫りにされている。舞台現場で働いた人たちの活動も詳しく書かれ、また演劇史を飾る大小さまざまのエピソードも物語られて、学術研究の場でも演劇史資料として高く評価されている資料である[149]。

『日本現代演劇史』中に名前があがる人物は、その時代における演劇活動の第一線にたっていたということを意味する。明治･大正篇から昭和の戦前篇、戦中編、戦後篇といった演劇通史全巻を通して登場するということは、明治から昭和という変遷が激しい時代全体を通して、演劇の世界で長く第一線の位置にあり続けたとみることが出来、演劇界で高い評価を得ていたといえる。その条件を備えた人物にはどのような人々がいるか、調査したところ、明治期から戦後をとおして、絶えず名があげられている人物は、作者、演技者を通して 35 名であった。登場回数の多い順に並べたものが（表 9）「『日

149　大笹の『日本現代演劇史』に記されている演劇関係の情報の豊富さは、他の追従を許さない労作であり、データ･ソースとしての活用価値は高く評価される。その第１巻を刊行した昭和 60 年（1985）に、早くも、サントリー学芸賞を受賞した。ケンブリッジ大学区図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館をはじめ国内外の大学図書館等 307 館が所蔵している（CiiNII　Books、平成 25 年 12 月 1 日閲覧）

本現代演劇史』全篇登場者一覧」である。35 名の職種は、『世界大百科事典第二版』（平凡社、2006 年）に準拠した。演劇現場との関わりは、演出家と俳優、脚本家という職が最も演劇現場に関わり深いことは想像がつくが、ここで上位をしめているのは演出家である。舞台の外側に位置する者として、興業主 1 名、作家・評論家 11 名、海外作家 4 名の 16 名の名があがる。舞台の現場にいた者としては、俳優 8 名、演出・脚本家 10 名、美術監督 1 名の 19 名となった。金子の名は、35 人中 15 番目に多く登場していた。

（表 9）『日本現代演劇史』全篇登場者一覧

No.	職種	氏名	総計	明治大正篇	大正・昭和初期篇	昭和戦前篇	昭和戦中篇Ⅰ	昭和戦中編Ⅱ	昭和戦後編Ⅲ	昭和戦後篇Ⅰ	昭和戦後篇Ⅱ
1	作家・演出家	村山知義	410	3	21	87	137	28	23	72	39
2	作家・演出家	久保田万太郎	321	20	13	1	17	134	16	45	75
3	演出家	小山内薫	265	83	73	16	29	11	23	18	12
4	俳優	市川猿之助（二代目）	234	29	7	1	5	6	88	40	58
5	演出家	土方与志	229	17	64	18	52	3	4	48	23
6	俳優	滝沢修	219	2	17	23	62	8	2	68	37
7	俳優	花柳章太郎	219	33	2	1	4	108	1	20	50
8	美術監督	伊藤熹朔	211	2	12	8	44	48	14	47	36
9	演出家	岸田國士	192	8	10	4	19	107	3	21	20
10	興業主	大谷竹次郎	179	42	7	1	6	25	40	17	41
11	俳優	山本安英	160	2	36	7	67	5	1	31	11
12	俳優	河合武雄	156	69	7	1	2	69	4	1	3
13	作家	岡本綺堂	132	36	7	2	2	11	38	20	16
14	評論家	坪内逍遙	131	55	18	5	4	4	25	12	8
15	作家・演出家	金子洋文	124	14	7	16	11	35	23	11	7
16	作家・演出家	北村喜八	112	3	37	1	24	22	2	18	5
17	評論家	岡鬼太郎	110	27	3	3	2	10	56	7	2
18	作家	山本有三	103	32	15	9	9	14	16	6	2
19	作家	藤森成吉	96	2	4	36	34	3	9	4	4

20	作家	菊池寛	95	28	16	14	4	8	8	14	3
21	劇作家	イプセン	92	35	13	6	8	7	2	13	8
22	劇作家	シェイクスピア	92	28	10	2	11	6	3	23	9
23	評論家	三宅周太郎	88	16	9	2	7	10	34	3	7
24	作家・**演出家**	**高田保**	79	7	5	9	25	10	10	5	8
25	作家	チェーホフ	74	12	1	4	9	8	1	20	19
26	作家	ゴーリキー	66	9	8	14	23	2	1	4	5
27	作家	森鴎外	66	35	14	4	2	1	1	2	7
28	俳優	細川ちか子	63	1	6	5	33	1	1	8	8
29	作家	武者小路実篤	60	18	12	8	1	9	3	4	5
30	作家・脚本家	八住利雄	60	1	4	3	15	13	10	8	6
31	俳優	高橋とよ（豊・豊子）	51	2	11	3	16	1	8	6	4
32	俳優	澤田正二郎	44	17	10	1	2	1	6	2	5
33	作家	島崎藤村	41	8	1	8	10	1	3	9	1
34	作家・脚本家	北村小松	25	3	7	1	2	6	1	1	4
35	作家	夏目漱石	15	5	2	1	1	2	2	1	1

（註）演出家は氏名欄を太字で右寄せした表示をしている。また各巻毎の最多者の欄には着色した。

舞台の現場に携わる演出家としてみると金子は、村山知義（1901-1977）、久保田万太郎（1889－1963）、小山内薫（1881-1928）、土方与志（1898-1959）、岸田国士（1890-1954）といった、日本の演劇史に足跡をのこした人たちに次ぐ位置をしめている。プロレタリア文化運動を進め、新協劇団を結成した村山の活動は、前衛芸術運動の旗手として高く評価され、美術界の個人展覧会が数多く開催されてきている。久保田は、母校である慶応大学文学部で毎年「久保田万太郎記念講座」として芸術、詩学の講座が開催されている。小山内は日本に近代演劇をもたらしたと評価され、「新劇の父」と称されている。小山内と共に築地小劇場を開設し、小山内亡き後に新築地小劇団を率いた土方の名は、秋田雨雀・土方与志記念青年劇場に残されている。岸田は、若手新劇作家育成のための岸田國士戯曲賞にと、演劇界で評価高い賞の冠とされている。金子は、日本の演劇史に名を遺すこれらの大物演出家たちに次ぐ登場回数であり、彼等と肩を並べた仕事をしていた。

金子は特定劇団の専属、いわゆる座付きではないフリーな立場で、第一線での仕事を維持していた。

自作の戯曲だけでなく、他の作家の作品にも巧みな演出家であった。一例として室生犀星原作「神々のへど」（山本書店、1935 年）の舞台化作品「兄いもうと」がある。この演劇作品は金子が舞台化、脚色演出した。野卑なことばが飛び交う原作の芝居化に、舞台稽古で会った犀星が「呼吸を合わせるのに苦労されたでしょう」[150]とねぎらったという。原作「あにいもうと」が収められた本のタイトルは当初『神々のへど』であったが、後に『兄いもうと』に変わっている。それほどの人気を博したこの芝居は、回を重ねて演じられ、新派、水谷八重子の代表作のひとつとなった。

『日本現代演劇』の明治・大正から昭和戦後まで、全巻を通して登場した人物のうち、登場回数順上位 20 名の中にいる演出家は、前述の演劇人以外に、北村喜八を加えた 8 名である。そしてこの 8 名の各巻ごとの登場回数を比べてみることで、明治、大正、昭和の各時代ごとの活動の移り変わりや、彼らの演劇界との関わりの頻度が分かる。これをグラフにしたものが、（図 4）「『日本現代演劇史』全篇登場演出家上位 8 名の巻別登場数の推移」（節末参照）である。

これによると、明治・大正、そして昭和初期で、もっとも登場回数が多い演出家は、小山内薫（1881-1928）である。彼は、旧来の看板役者中心とした芝居から、戯曲作品の内容を重視してそれを舞台上に表現する演出をこころざした。ヨーロッパやアメリカの舞台を直接観る機会を得た小山内は、役者のリアリティある演技による近代演劇を唱えた。そして多くの海外作品を翻訳し、上演した。小山内こそは、「演出」という言葉であらわされる機能を舞台芸術にもちこみ、演出家という職能をもたらした最初の人物であった。彼は関東大震災後に、ドイツから帰国した土方与志（1898-1959）とともに、築地小劇場を拠点に新劇運動を盛んに行った。この事実を反映して（図 4）では、小山内薫と土方与志が、大正・昭和初期で出現数が伸びている。

昭和に入って、小山内が急死した。その結果として、彼の出現数はそれ以後下降している。築地小劇場は分裂し、土方はプロレタリア演劇を進んで上演するが、その後は海外への亡命をよぎなくされ、帰国後は治安維持法で逮捕された。そのため第二次世界大戦終戦の後に出所するまで、土方の出現数は激減している。このように（図 4）にみる出現頻度数は、それぞれの時代の日本の演劇活動の現状と密接に連動している。

村山知義（1901-1977）[151]の場合、ドイツから帰国した年、大正 13 年(1924)12 月に、築地小劇場で公演されたゲオルグ・カイザー作、土方与志演出の『朝から夜中まで』の舞台装置の制作で、演劇活

150 金子洋文『金子用文作品集(二)』(筑摩書房、1976 年)390 頁。

151 村山の活動は演劇に限らず文学、美術などの様々に分野に及び、その各分野で高い評価がある。ドイツ遊学をへて大正 12 年(1923)前衛美術団体マヴォを結成、震災後は建築、デザインなど多才な彼は、1920 年代後半から主として戯曲・演出に活動の主軸をおいていた。

動に関わることになった。その後、プロレタリア演劇運動に力をそそいだ村山[152]は、数々の戯曲の演出、舞台装置の制作と活躍する。昭和 5 年（1930）5 月、治安維持法違反で検挙され、12 月に保釈。翌年 5 月に日本共産党に入党した。昭和 7 年（1932）4 月、ふたたび維持法違反で検挙され、翌年 12 月に転向を表明して出獄。新協劇団を結成し、その後は、新劇、新派、歌舞伎にも関わった。昭和 15 年（1940）に 3 度目の逮捕をされ、そのため村山が中心であった「新協劇団」は解体のやむなきにいたった。

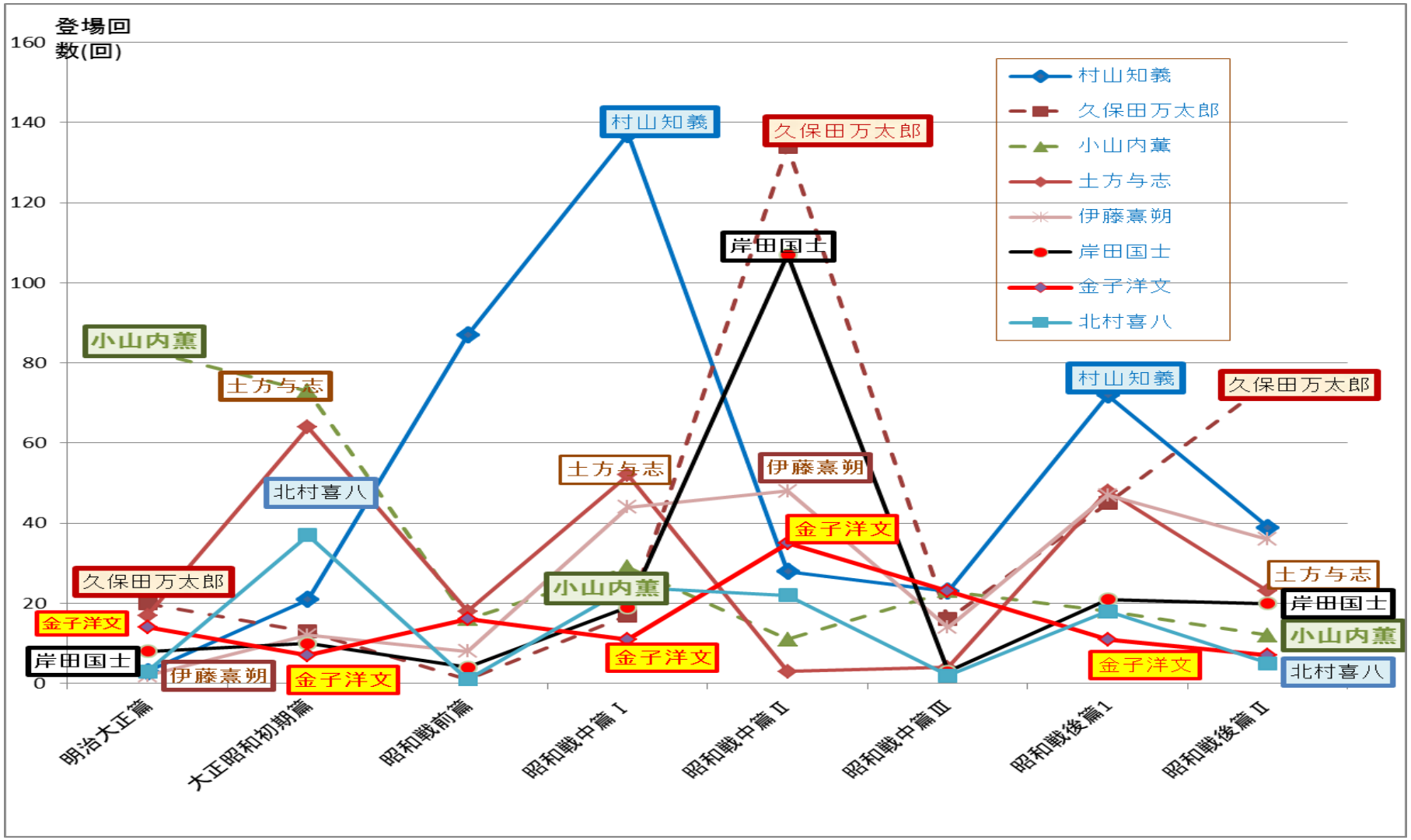
村山は昭和 17 年（1942）6 月保釈されたが[153]、その後、戦時中活動はできなかった。新劇界に復帰するのは、終戦後のことである。このような波乱にとんだ村山の動静が物語るように、演劇活動は政治の動向と密接に絡んでいた。『日本現代演劇史』の、「昭和戦中編Ⅰ」、「戦後篇」からみると、（表 5）のように、村山は最多出現者となっている。

「昭和戦中編Ⅱ」での最多出現者は久保田万太郎で、次いで岸田国士である。大正 12 年（1923）7 月にフランスから帰国した岸田は、演劇が政治と結びついていく時代の傾向に強く異を唱え、昭和 12 年（1937）、顧問をつとめていた築地座を解散し、文学作品を演目の中心に据えた演劇を目指して、同じくフランス帰りの岩田豊雄（獅子文六）、久保田の文学者 3 名で文学座を結成した。昭和 15 年（1940）に大政翼賛会文化部長に就任した岸田は、戦後公職追放となった。一方、政治とは距離を保ち続けた久保田は、新派、新劇、文学座での演出に携わり続けた。

演出家ひとりひとりの出現数には、日本の演劇史にのこる著名な演出家の仕事の移り変わりとともに、時代に翻弄される演劇活動の流れが反映されている。金子の出現数が、こうした人たちの次に位置している事実は、時代の波に激しく揺さぶられた演劇界で、金子が演劇人として、常に重用され続けていた証である。

152 昭和 2 年（1927）2 月には『文芸戦線』社同人となっている。

153 警視総監の名の許、興業取締規則第 97 条によって業務停止を相達されたことによる。俳優で演出家の千田是也も別の名で活動をしていた。



(図 4)『日本現代演劇史』全篇登場演出家上位 8 名の巻別登場数の推移

第3節　金子洋文上演作品記録一覧

金子洋文が関与して上演された劇はどのようなものであったのか。各種資料を調査し、判明したものを、上演日付の順に一覧表にして、そこから彼の活動の実態を明らかにすることを試みる。

データの採取先としては、秋田市立土崎図書館、松竹大谷図書館、早稲田大学演劇資料館の演劇資料（プログラム、台本、チラシ、チケット、ポスター）、および『日本現代演劇史』を対象とし、それらの資料から上演作品記録の一覧を作成した。

演劇資料を収集して管理しているところは、現在その作業を継続中のところを含めていくつか存在する。だが、金子が演劇人として活躍したのは、大正時代から昭和 60 年にかけてであり、今回の目的にかなう演劇関係資料を体系的に保存している施設は限られている。そこで、次の 3 つの施設が保存している資料群からデータを収集し、一覧表を作成することとした。

・秋田市立土崎図書館「種蒔く人」資料室

土崎図書館の「種蒔く人」資料室には、金子がのこした 1 万点をこえる資料が保存されている。これは彼の死後、遺族から提供されたもので、「種蒔く人」資料室で受け入れ、それを整理分類して「金子洋文資料目録」が作成された。この目録は印刷されて一般にも公開されている。

多様な活躍をした金子がのこした資料には、演劇活動とは無関係なものも多くあるが、その中には金子が何らかの形で関与した演劇に関連するものとしては、原稿 326 点、台本 136 点、プログラム 213 点が含まれている。

・松竹大谷図書館

演劇・映画の興行に長く携わってきた松竹の歴史は、そのまま近代歌舞伎をはじめ、映画、演劇の興行の歴史を反映している。松竹の創業者大谷竹次郎は、先に述べた『日本現代演劇史』の全巻にわたって登場する。大谷竹次郎は、自らの会社がもつ演劇・映画の資料を一般公開して活用することができるようにと、昭和 33 年（1958）7 月に、演劇・映画に関する専門図書館を開設した。これが松竹大谷図書館である。この図書館が作成している「上演記録カード」から、多くの作品の上演記録を知ることができる。

・早稲田大学演劇資料館

国内最大級の演劇資料を所蔵する早稲田大学演劇資料館には、所蔵する演劇資料をもとに作成したデータベースがいくつかある。その中のひとつとして、平成 24 年（2012）6 月 1 日から試験的に公開

された「演劇上演記録データベース」は、国内外の近・現代演劇に関する上演記録をまとめたものである。歌舞、新派、新劇、オペラ、剣劇、喜劇、舞踊など、あらゆるジャンルの上演記録を対象とした総合的な演劇上演のデータベースで、これまで公開されていた「近代演劇上演記録」、「現代演劇上演記録」に、海外演劇上演記録を加えて、「演劇上演記録データベース」としたものである。ここでは1 件ごとのデータに、上演主体（劇場）である公演団体、当日の演目ごとの作者、演出者、振付者、訳者、脚色者の項目があり、それらが資料として記載されている。

1. 金子洋文上演作品リストのデータ項目説明

大正期から昭和 60 年（1985）まで、金子の舞台活動を、前述の資料ならびにデータベースから抽出して、それを「金子洋文上演作品記録」と題して作成した。このうち上演作品リストは、各種演劇資料（プログラム、台本、チラシ、チケット、ポスター）や掲載記事をもとにしており、また当日の公演内容や、公演に関わった演劇関係者たちの関係もあらわしたものである。

まず金子がかかわった舞台公演を、上演年順に並べたリスト（表 10）「金子洋文上演作品記録」を作成し、論文の末尾に添付する。演目を調べ、それらが公演された劇場ごとにひとくくりとして、演じた劇団名を記す。金子の関わり方、携わり方がわかるよう、原作、演出、脚色というように、果たした役割を記している。従来のような単なる作品目録だけでは、演劇全体の流れの中で、彼がどのような役割をはたしていたかを捉えるには難がある。そのため今回の表は、演劇資料館のデータベースが採っている様式を参考にして、形式を考えてリストを作成した。金子が関わった作品を、公演ごとに、劇場名と劇団名、さらにその演目を、時系列に沿って並べている。そして演目をスラッシュで区切り、作者、演出、脚本の各欄に、それぞれの作者、演出者、脚色家の氏名を並べている。

舞台は多くの関係者の協力で成立し、その上で欠かせないのが観客の存在である。観客の動員は、その日の演目の組み合わせ、あるいは登場する役者の組み合わせに大きく左右されるものであり、したがってある公演の現状を知るには、ひとつの作品を単独に列挙するのでは不十分である。そこで今回は、ひとつの公演の様子、観客を含め関係者の関わりを浮かび上がらせるために、金子の作品だけでなく、当日、それと組み合わせて上演された他の演目も可能な限り明らかにすることにした。

公演によっては、巡回公演として同じ演目を演ずることがあり、同じ劇団が同じ劇場で連続上演した場合は、これを 1 件と数えた。ただし戦時中などでは、移動演劇集団の活動に関する資料が乏しく、公演場所と日時、一部の演目だけしか分からない場合も少なくなかった。したがって、戦時中の地方公演では、ひとつの劇団が舞台装置も持って、各地をまわったケースが多かったことから、これらは一括して 1 件と数えている。

なお、ここでまとめた金子の演劇活動は、舞台上演を原則としている。金子は商業演劇に広くかかわっていたから、彼が関係したものは舞台以外にも、映画、ラジオ、そして戦後はテレビなど多岐にわたっているが、映画や放送に関しては、再上映や再放送の時間が特定できないことから、映画やテレビなどの活動は省き、舞台で上演されたものに限ることとした。

2. 金子洋文上演作品記録にみる演劇活動の推移

この項末に掲載の（図 5）「金子洋文の演劇活動における仕事の推移」は、金子が原作を書いた作品が上演された記録に加えて、彼が脚本化した作品数、演出家として上演した作品数を、それぞれ年代順にしたものである。これを先の『日本現代演劇史』をもとに、名前の出現数を表にした（図 4）「『日本現代演劇史』全篇登場者中上位 10 名の巻別登場数の推移」と重ねてみると、金子が舞台演劇の現場で活動していたこと、それが時代によって変化していく様子が明らかになる。

金子が書いた戯曲がもっとも上演されたのは昭和 4 年（1929）で、その後、劇作家の仕事から、演出家、舞台監督といった仕事へ次第に移っていく。そしてこの分野では、新派、歌舞伎など異なる方面で活躍していることがわかる。

ここで、『種蒔く人』『文芸戦線』で活動していた時期の演劇活動を対比（項末の（表 9）「プロレタリア同人誌活動期の演劇活動対比」参照）してみる。大正 8 年（1919）、当時人気であった浅草オペラの台本として東京歌劇団の「若いニナさん」を皮切りに、『種蒔く人』が創刊した大正 10 年（1921）には『新潮』10 号に戯曲「老船夫」、翌年の『解放』4 号に、後の昭和 4 年（1929）に新劇で上演された戯曲「洗濯屋と詩人」が掲載されている。大正 12 年（1923）、『解放』3 号に小説「地獄」が掲載され、5 月に自然社から『地獄』が刊行される。翌月、神田中央仏教会館で出版記念講演会が催され、藤森成吉・秋田雨雀らによる感想と水谷八重子らによる朗読があった。同年 4 月『太陽』に「狐」[154]が掲載され、11 月には戯曲集『投げ棄てられた指輪』を新潮社から刊行と、この時期の金子は小説、詩、戯曲などの文学方面では、彼の代表作となる作品を続けて書きあげている。雑誌『種蒔く人』が刊行されていた期間には金子の戯曲作品は、上演にはいたっていない。

彼が本格的に演劇の世界に入るようになるのは、浅草の曾我廼家五九郎劇で『ノンキナトウサン』[155]、そして大正 14 年（1925）4 月には『剣』、翌年『髪』、翌々年『浪人の群れ』と、新国劇の澤田正二郎によって金子の新作が上演されている。そして大正 15 年（1926）、4 月『テアトロ』に発表した「牝

154 大正 14 年(1925)12 月、大阪南演舞場で新派の花柳章太郎によって上演されている。

155 『報知新聞』に麻生豊の漫画「ノンキナトウサン」が出て、これを後に戦後タレント議員となる演歌師、石田一松が、添田唖蝉坊オリジナルの「ノンキ節」を基調に作詞を行い、「ノンキナトウサン節」とも称される独自の「ノンキ節」を制作した。大正から昭和にかけ庶民に広まり、大流行した。

鶏」は昭和元年（1926）12 月の前進座秋田キャラバンで上演（『文芸戦線』3 巻 12 月号 40 頁）、翌年 11 月、帝国ホテル演芸場で新劇協会によって上演される。東北の湖畔の 2 軒の百姓家、そのひとり息子とひとり娘は恋仲であった。彼等とその家人のやりとりが、方言、舞台背景と相乗して地方色ゆたかな詩情あふれる舞台となっている。昭和 4 年（1929）の金子作品 20 回上演のうち、5 回は『牝鶏』である。この戯曲は金子が創作した戯曲中で上演回数が多い作品である。

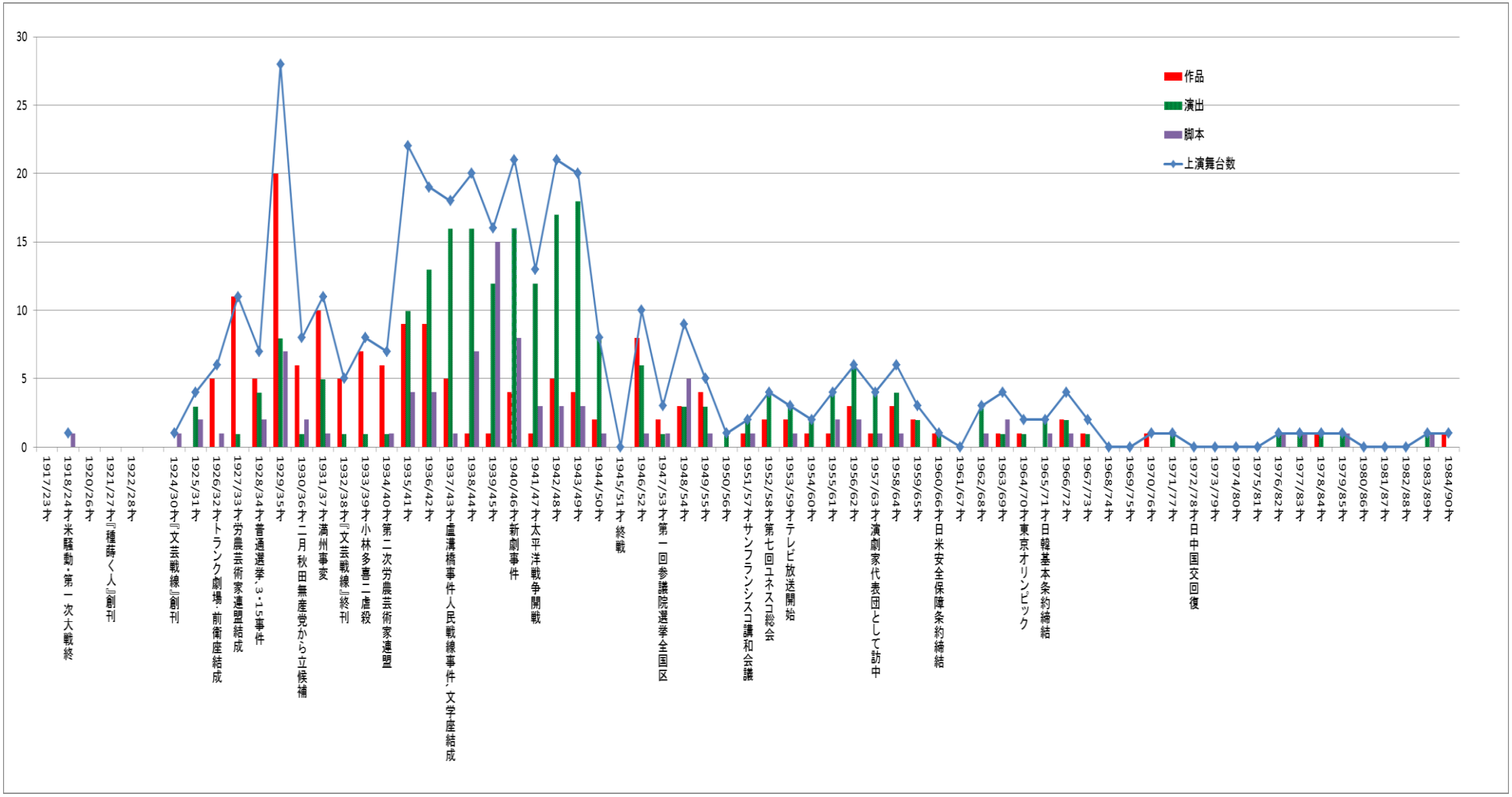
金子の演劇活動は、浅草の大衆演劇から始まっていた。プロレタリア文化運動と結びついてからの活動ではない。彼の演劇作品には、以前から、貧しい市井の人々の暮らしへの思いやりや、地方の農村の情景を伝える地方の描写があった。加えて、亀戸事件で殺害された平沢計七とは知り合いで小牧近江によると同人となる可能性があったということから、金子たち『種蒔く人』同人は、平沢の「東京労働劇団」の活動を知っていたと考えられる。『文芸戦線』後期に金子が指揮した文戦劇場は、平沢計七亡き後の労働争議の劇化とトランク劇場、プロレタリア劇場、前衛座などの系譜に繋がっている。

金子は昭和 10 年（1935）からは、新派や歌舞伎といった分野での演出の仕事へ活動の中心を移していった。時局が切迫しつつあったこの時期、大衆の意識に直接訴えかける演劇の世界には、当局の厳しい目が注がれるようになっていた。それでも金子の場合は、逆にこの時期になって活動が盛んになっていることが、（図 5）から明らかになった。これにはこの年に、彼が東宝の嘱託となったことも大きく影響していると考えられる。早くから戯曲を創作し、地方巡業の経験も豊富な金子は、演出家として作品を深く理解し、演じ手や状況に即して上演できるようにする能力にたけていた。それが当時の演劇界でも貴重なものとされたのであろう。

（表 11）プロレタリア同人誌活動期の演劇活動対比

（注）赤字：発表、上演が確認された戯曲名、緑字：上演情報、青字：出版された作品名

和暦	年齢	重要事件	『種蒔く人』と『文芸戦線』	主な演劇、戯曲関連活動	雑誌『種蒔く人』『文芸戦線』以外の主な文学活動
大正8年（1919）	25歳	コミンテルン創立大会		「袈裟と盛遠」『新演芸』。 「村の慈善会」帝国劇場の脚本募集入選。 「若いニナさん」など浅草オペラ台本を書く。	「外務省の一室」『新公論』、『労働美談の勝利』日本評論社。
大正9年（1920）	26歳	国際連盟成立	雑誌『種蒔く人』発行を計画。		「針」『やまと新聞』、「冬の夜の女」『秀才文壇』、『親と子の汲み交した智慧の泉』実業之日本社。
大正10年（1921）	27歳		2月25日、第一次『種蒔く人』(土崎版)を土崎港町より創刊。10月第2次『種蒔く人』(東京版)を東京から発行。	戯曲「老船夫」『新潮』。	
大正11年（1922）	28歳		種蒔き社主催で8月有島武郎を招き「秋田地方ロシア飢饉救済講演会」公演。	戯曲「洗濯屋と詩人」『解放』。	「犬」『中央公論』、『生ける武者小路実篤』種蒔き社、『耶蘇とお釈迦様』・『仏蘭西帰りの動物学者』・『細菌お友達になつた一寸法師』・『新浦島物語』・『兎と健三さんの夜の世界旅行』・『鳥の巣をたずねて』実業之日本社。
大正12年（1923）	29歳	9月1日関東大震災、虎ノ門事件	『種蒔く人』終刊。	戯曲「狐」『太陽』、戯曲集『投げ棄てられた指輪』新潮社刊行。	小説「地獄」『解放』、「女」『文学世界』、「犬喧嘩」『我観』、「鷗」『週刊朝日』、『墓と一寸法師の決闘』・『地獄から帰つた少年の話』大鐙閣。『地獄』自然社、『お伽理科蝶と華との対話』実業之日本社。
大正13年（1924）	30歳	日本フェビアン協会創立	1月亀戸殉難記録として『種蒔き雑記』発行。6月『文藝戦線』を創刊、編集責任者となる。	「息子」『演劇新潮』。	「蛇（不具な子）」『文芸運動』、「狼」『新小説』、「接吻」『週刊朝日』、『鷗』金星堂。
大正14年（1925）	31歳	3月治安維持法成立	1月「文藝戦線」休刊。6月『文芸戦線』復刊は山田清三郎が編集。日本プロレタリア文藝連盟（プロ連）結成。	「ノンキナトウサン」『文芸戦線』、「理髪師」『演劇新潮』、「塔」『演劇新潮』、「喜劇バクダッドの盗賊」『苦楽』、「盗電」『週刊朝日』、「出帆」『女性』、「竹の子」『演劇新潮』、「身投げ」『サンデー毎日』、映画台本「探偵」『解放』、「狐」(花柳章太郎・大阪南演舞場）上演。	『チョコレートと兵隊』金星堂。
大正15年（1926）	32歳	1月 京大学生事件、初の治安維持法適用	2月トランク劇場結成、共同印刷ストに応援出演。 マルクス主義研究会メンバー参加。	「牝鶏」『テアトロ』、「坂」『演劇新潮』、戯曲「罠」『文芸戦線』。5月新国劇が那楽座で「剣」、11月新劇協会が帝国ホテルで「盗電」「出帆」上演。	1月「プロレタリア文学手引」『文芸春秋』、「赤坊」『週刊朝日』、「靴」『文芸春秋』、「蛍子」『文芸春秋』。
昭和2年（1927）	33歳	金融恐慌	分裂、旧文戦系同人中心に労農芸術家連盟（労芸）結成、『文藝戦線』機関誌（残留）	新劇協会が帝国ホテルで「牝鶏」を上演。『洗濯屋と詩人』エスペラント研究社、『理髪師』金星堂刊行。	
昭和3年（1928）	34歳	第1回普通選挙 『戦旗』創刊 3・15事件		「浪人の群」『苦楽』。新国劇が帝国劇場で上演。脚色「吾輩は猫である」『中央公論』を、新劇協会が講演劇場で上演。	『銃火』春陽堂から刊行。『戦争に対する戦争』南宋書院に「眼」収録。
昭和4年（1929）	35歳	4・16事件(共産党一斉検挙) 世界大恐慌		大仏次郎原作「赤穂浪士」を脚色、新国劇が新橋演舞場で上演。「飛ぶ唄」『平凡』を、築地小劇場上演。新派が市村座で「動物園近く」。「日清談判」『週刊朝日』は、浪花座で上演。『飛ぶ唄』平凡社から刊行。	
昭和5年（1930）	36歳		2月秋田無産党から第2回衆議院選挙秋田第一区に立候補落選。 『文芸戦線』5月号から編集人。 8月13日より10日を秋田、年末を新潟地方に文戦劇場巡回。	「蒼ざめた大統領」『改造』。秋田地方、年末に新潟地方巡回「農民一揆戦」「大竹与茂七」上演。「文戦劇場は如何に闘つたか？—秋田農民組合巡回公演報告—」、「左翼演劇一年」『文芸戦線』。	『赤い湖』日本評論社、『天井裏の善公』文芸戦線出版部、新進傑作小説全集第7巻『金子洋文集』平凡社、『新選金子洋文集』改造社、『部落と金解禁』塩川書房、『魚河岸』日本評論社。
昭和6年（1931）	37歳	9月、満州事変勃発。	『文藝戦線』を『文戦』と改題。		
昭和7年（1932）	38歳		7月『文戦』終刊。左翼芸術家連盟と組織名を改める。新たに『レフト』を創刊。	喜劇「落選二人代議士」・報告「負けて勝った岐阜の公演」『文戦』、戯曲「女中奉公」『レフト』	「佐倉宗五郎」『経済往来』。
昭和8年（1933）	39歳	2月小林多喜二虐殺。		3月新派が東劇で「処女日記」上演。	小説「仕立師」、「三羽烏」、「ある一つの復讐」、「アルプスの山々」、「のら犬」執筆。「夏期の住宅交換」を『朝日新聞』、「郊外笑景」『週刊朝日』、「雷魚」『新潮』。
昭和9年（1934）	40歳		1月『レフト』改題し2月『新文戦』（終刊未確認） 第二次労農芸術家連盟を結成し書記長となる。	「もぐら」『キング』、「魚河岸の朝」上演。「行動の演劇論」『朝日新聞』5月掲載。管裸馬原作「錦島三太夫」脚色・演出で帝国ホテル演芸場で上演。	
昭和10年（1935）	41歳			「河内山宗俊」『新演劇』、矢田挿雲「新版太閤記」を脚色、東宝劇団が有楽座で上演。「もぐら」（東劇）、「母の土産」明治座で、犀星の「あにいもうと」を脚色演出し「兄いもうと」として、水谷八重子一座上演。	



（図 5）金子洋文の演劇活動における仕事の推移

3. 明治末から大正期の演劇界

歌舞伎、能、狂言、人形浄瑠璃など、鎌倉、江戸時代に成立した日本の演劇は、明治維新後も継続的に上演されていたが、近代化の波は舞台芸術の世界にも変化をせまった。明治時代となり西洋文化の到来、条約改正交渉と連動した政府欧化政策として、歌舞伎は演劇改良運動をうけて西欧のような上流階級の社交場で催される演劇に変身した。その結果、庶民の娯楽芝居であった歌舞伎は、悪場所の芝居から帝国の演劇へと変わっていった。 そして明治 20 年（1887）に、天皇が初めて歌舞伎を観るという出来事があった。これをきっかけに、役者の地位は向上し、歌舞伎は伝統芸能とされるようになったが、またそれによって庶民とは距離をもつようになっていった。

現実とは距離をおいて様式美を追及する伝統的舞台に、リアリズムをいかに取り入れるかが演劇の課題となった。明治後期から昭和始めにかけては、文学者による、近代社会を表す「新歌舞伎」となってあらわれた。

西欧近代演劇を摂取し、リアリズムを主体とした新しい演劇の動きは活発化し続け、明治の後半から大正には、新派、新国劇、新劇とこれまでとは異なる多様な演劇が展開されていく。

文章における口語体表現の確立は、演劇においても台詞に変化をもたらした。

会話が重ねられ、物語が展開する作品が多く書かれるようになるが、これらは岡本綺堂、坪内逍遥など、いわゆる座付作者以外の、新文学の担い手たちが創作したものであった。歌舞伎の世界だけでない。明治 20 年代、自由民権運動の流れから派生した壮士芝居から川上音二郎が人気を博し、女形を実際の女性が演じる「新派」もつくられるようになった。当初は歌舞伎と同様に、女形がつとめていた新派は水谷八重子を始めとした女優によって演じられるようになり、明治の世情を反映した作品など、多くの文芸脚色劇が行われ、現代にいたっている。

さらにヨーロッパの芝居に直接学んだ、「文芸協会」や「自由劇場」が誕生し、新劇の模索がはじまり、加えて「新国劇」、「商業演劇」が出現した。

大正 6 年（1917）からはじまり、関東大震災で建物が罹災したために衰退した浅草オペラのように、庶民のための商業演劇への新しい波が次々と育っていった。阪急の小林一三が創案した宝塚少女歌劇は、大正 3 年（1914）4 月 1 日に初めての公演をしている。5 年後に、宝塚音楽歌劇学校の設立とともに、学校組織を母体とした「宝塚少女歌劇団」は、歌劇団全体を組織化して運営している。踊りと歌と芝居をとり混ぜたレビューというスタイルも定着する。

大正 6 年（1917）に新国劇を立ち上げた澤田正二郎は、多くの人々に合わせつつ徐々に芸術性を高めていく演劇半歩前進主義を主張していた。新国劇における剣戟芝居は、澤田の時代からなるもので今も時代劇の剣戟シーンに伝わっている。彼は大衆演劇だけではなく新劇、歌舞伎の演目にも取り組

み続け、興業主、プロデューサー、役者、劇団養成所といった様々な活動を行っていた。新国劇は昭和を代表する劇団であるが、昭和 62 年（1987）に解散する。

プロレタリア演劇の始まりとされるトランク劇場は、大正 15 年（1926）に結成され、「ある日の一休」が上演されている。文学の花園とも称賛される大正期の文学[156]は、小説・戯曲という分野が混然として、自然派、耽美派、白樺派、新思潮派等多くの作家たちが戯曲を書き、雑誌に発表していた。文学と演劇が接近していた。

大正 11 年（1922）8 月、新潮社から刊行された『近代劇十二講』[157]の冒頭で、楠山正雄は次のように述べている。

> ロメ（ママ）ン・ローランは、近代の不思議は芸術家が民衆を発見したことだといつてゐる。(『民衆の芸術』序論）わたしはこの言葉につけ加へて、近代劇はこの新しい発見の上に成立つた新しい芸術だといひたいと思ふ。詩が貴族の遊戯であり、小説がブルジョワの暇つぶしの讀物である時代に、演劇は民衆の必要物である。民衆の力の大いに伸びた時代に演劇も大いに伸びる。政治上や經濟上に民衆の權力が伸びないでも少くとも時代の文化に民衆の生活が大きな影を投げてゐる時代に演劇は榮える。時代の民衆文化の全局を把持する大戯曲家の生れた時に演劇は榮える。

こうした演劇の新時代の到来にあって、多くの劇団が開花した。著者の楠山正雄は、日本における近代劇の流れを、ロマン主義、自我主義、現実主義、自然主義、反自然主義とたどり、民衆と芸術の結びつきによる新しい劇場と、新しい戯曲、つまり民衆劇としてのプロレタリア演劇に至る道のりとして眺めている。

4. 大正から昭和期戦中期―新劇の動向を中心に

日本の新劇は、大正 13 年（1924）6 月の小山内薫と土方与志による築地小劇場の旗揚げからはじまった[158]。写実的な演劇を目指した彼らは、翻訳劇の上演を数多く行っていた。

小山内薫の「歌舞伎でもなく、新派でもなく、ある新しい演劇」という言葉から始まった新劇は、現状をありのままに人間社会の仕組みを浮き彫りにする。関東大震災後、築地小劇場で始まった演劇

---

156 紅野敏郎『文学史の園 1910 年代』(青英舎、1980 年)

157 楠山正雄は演劇評論家、編集者、児童文学者。同書は国立国会図書館所蔵のデジタルライブラリーでは、大正 11 年(1923)8 月 25 日出版、翌年 7 月 20 日で 10 版、翌々年 2 月 20 日で 14 版となっているところから当時かなり売れ、多くの読者がいたとみることができよう。(2013 年 10 月 12 日閲覧)

158 明治末期の文芸協会や自由劇場は、日本の近代演劇の前段階と目されている。

活動は日本の演劇に大きな影響をもたらす。築地小劇場という劇場専属の劇団を持ち、俳優、照明、音響、衣裳でも優れた人材を生み出し、さらに日本で初めて演出家という職能を確立させた。

ドイツから帰ってきた村山知義、フランスから帰ってきた岸田国士らは、海外の演劇思想や社会主義思想も加えた大衆のための演劇を目指した。大衆という存在が認識され、彼らの生活に芸術が果たす役割を見据え、市民社会の形成を目的とした

1920 年代後半の新劇では、左翼思想が主流となり、それを受けて、1930 年代後半にはプロレタリア演劇運動が盛り上がりをみせる。その草分けとしては大正 9 年（1920）の春、新宿中村屋の土蔵で相馬黒光ら脚本朗読の「土の会」から発展した演劇小集団、「先駆座」がある。麹町平河町の中村敷地内に改造した土蔵劇場で、秋田雨雀、佐々木孝丸らの指導で上演されていた。大正 12 年（1923）4 月には、公演が開催されている。小劇場運動のさきがけである。

秋田雨雀、佐々木孝丸、柳瀬正夢らが脚本の朗読を行った、大正 12 年（1923）4 月、彼らは朗読とともに、舞台も上演する「先駆座」を結成した。ちなみに佐々木孝丸と柳瀬正夢は、『種蒔く人』の同人であった。

この翌年の大正 10 年（1921）3 月には、平沢計七による「東京労働劇団」が東京亀戸に組織された。秋田雨雀、土方与志、小山内薫もその舞台を観て、そこで醸成される演じる者と観る者との連帯感に、民衆演劇のモデルとなることを感じて、強い印象を受けた。しかし先にも触れたように、関東大震災の折に、警察や軍が多くの社会主義者を逮捕し、殺害した亀戸事件で、平沢は殺害されてしまう[159]。

大正 14 年（1925）12 月、日本プロレタリア文芸連盟が結成され、翌年 1 月、共同印刷で行われた争議に際して、慰問公演を行った移動劇団「トランク劇場」は、その後「プロレタリア劇場」と名前を変え、昭和元年（1926）12 月には、青野李吉の発案になる前衛座[160]が、築地小劇場で旗揚げ公演を行った。

小山内薫が昭和 3 年（1928）12 月に急逝すると、築地小劇場は分裂状態に陥ったが、翌年には新築地劇団が結成され、5 月 3 日に、築地小劇場で第 1 回公演が開催された。このときは、土方与志の演出で、金子の戯曲『飛ぶ唄』が上演された。その後新築地劇団は、昭和 6 年（1931）になると、日本プロレタリア演劇同盟に加盟し、東京左翼劇場とともに、築地小劇場を拠点したプロレタリア演劇運動をリードしていった。こうして演劇界は急速にプロレタリア演劇運動一方に傾斜していく。

第 1 回の普通選挙が実施されると、社会主義政党（無産政党）の活動に危機感を抱いた田中義一内閣は、昭和 3 年（1928）3 月 15 日、治安維持法違反の容疑で、全国一斉に活動家の検挙に乗り出した。

159 この軍と官憲の手によって殺害された「亀戸事件」は、金子によって『種蒔き雑記』に「亀戸の殉難者を哀悼するために」という副題を付し、体制側による殺戮の存在を世間に知らせることとなった。

160 後に前衛劇場となり、東京左翼劇場、中央劇場に改称後、昭和 9 年（1934）6 月に解散。

非合法であった日本共産党や労働農民党などの関係者約 1,600 人がこのとき検挙された。

プロレタリア演劇が盛んに展開されたのは、昭和初頭から昭和 9 年（1934）までの、わずか 10 年に満たない期間である。この間、日本の政情は急速に変化し、またプロレタリア思想もさまざまな曲折を経たため、それに連動してプロレタリア演劇もまた分裂と集散をくりかえした。昭和 9 年（1934）の 7 月には、村山の呼びかけで、プロレタリア演劇の新協劇団が結成されたが、これを最後に活動は急速に衰えていった。

ただ当時の新劇の舞台にあって、演じ手と観客との結びつきの強さは格別なものがあった。戦争にむかって急迫する時代の状況にあって、人びとは舞台の中でだけで会うことの出来る世界を求めた。舞台の側にも、それを観る側にも、世界のあり方を自覚した者、自覚までには至らないが、そこに何かを感じた者、権力の圧迫の前に自らの信念を封じた者がいた。プロレタリア演劇の運動は、演者も製作側も観客も同じ志を共有していたといえる。

昭和 12 年（1937）、スペインでは人民戦線内閣が成立、7 月にはフランコ将軍がクーデターを起こし、ヨーロッパの覇権を目指すナチス・ドイツのヒトラーは、すかさずフランコ支援を表明、スペインでは左右の対立から内戦へと発展した。イギリスやフランスはこれを傍観したのに対し、スターリンのソヴィエト連邦が唯一スペインの共和政府を支援したが、そのソヴィエト国内ではスターリンの粛清が進んだ。そして中国大陸では、この年 7 月 7 日に起こった盧溝橋事件をきっかけに、日中戦争がはじまった。

文学座[161]が旗揚げしたのは、この年の 9 月である。文学座は岸田国士、岩田豊雄、久保田万太郎らが、築地座の俳優友田恭助（1899-1937）のために創設したとされるが、旗揚げ公演を前に 37 歳の友田は召集となり、まもなく上海郊外で戦死してしまった。

同年 12 月の人民戦線事件では、治安維持法によって、非共産党員の人たちも検挙された。そして翌年 4 月には、国家総動員法が成立した。人民戦線事件の際には、新聞記事では次の逮捕予定者として金子洋文の名があげられていた。

厳しい検閲と度重なる上演禁止、そして劇団員の検束が相次いだ。昭和 15 年（1940）8 月 19 日、新協や新築地劇場の関係者 100 余人が一斉検挙され、両劇団は自発的解散に追い込まれた。村山知義や土方与志も一切の活動を行えない状況となっていった。こうした弾圧のもとで、前衛芸術家同盟（前芸）のメンバーは、商業劇場での演劇活動に鞍替えして、糊口をしのぐ状況だった。ただそうしたなかで、文学座は「知識大衆への精神的娯楽の提供」をすると主張して、存続を許されていた。

事実このころ岸田国士は、左翼思想と結びついた演劇観に批判的で、戯曲のもつ文学性を重要視す

161 9 月 12 日付で、金子に委員として参加を求める岸田からの書簡がある。『金子洋文資料目録』（土崎図書館、2007 年）

ることの必要性を説き、戯曲が文芸の他のジャンルとは異なることを強調[162]した。そして彼は、昭和15 年（1940）10 月から、大政翼賛会文化部長をつとめることになったが、太平洋戦争勃発後の昭和17 年（1942）7 月には、この大政翼賛会文化部長の職も辞任した。

フランス文学者渡邊一民は、『岸田國士論』（岩波書店、1982 年）のなかで、岸田の代表作のひとつ『暖流』について、こう述べている。

> 時代の肯定が前面に出ることによって、はからずもこの作品を典型的な国策小説、時局小説としているのだと言えるだろう。わたしは『暖流』をもって、やはり岸田國士の一種の転向小説だと見なしたいのである。

時代への批判を持つことを自らに封じ、体制に従う姿勢を公けにすることを「転向」と捉えるなら、岸田国士は「転向」したといえる。ただ岸田だけでなく、国策に添うしかない難しい時局のもとで、自分の天職とする活動を続けようとすれば、他に選ぶ道がなかったのも事実であった。岸田は後に、

> 日本の改良が必要だと思った。それは国民のなかから成長するが、上から指導することもひとつの方法であり、手段だと思った（略）これが根本的にまちがっていると自覚しましてね

とした後に、続けて

> 私たちは文化の再建と国民運動を考えて参加したのですが、結果は官僚勢力の拡張だった。官僚に文化や芸術は判らない、というより、彼らは文化という名で批判を抑制しようとした。文化統制が目的だった[163]。

と語っている。芸術を理解しない者による権力の威を借りた干渉である検閲との戦いが、どれほど過酷であったかは、当時の文化人の多くが証言している。舞台美術家の吉田謙吉は、その回想録[164]で当時の現場の様子を伝えている。

---

162 大笹吉雄「岸田国士の演劇論」『日本現代演劇史 昭和戦中篇Ⅲ』（白水社、1994 年）27-34 頁。
163 林克也「敗戦期の岸田國士」『文学』31 巻 5 号（岩波書店、1963 年）13 頁。
164 吉田謙吉『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と―』（八重岳書房、1971 年） 159 頁。

当時の検閲台本というものは、上演十日前までに、警視庁の検閲関係に届けることになっていた。それをすぎると、ぜったいにうけつけないということになる。そのくせ、その台本を劇団にかえしてくれるのは、舞台稽古すれすれはおろか、初日になって、かえしてくれたことさえあるという、意地悪さともいえる状態だった。

同様の証言は、山本安英、村山知義たちものこしている。さらに地方での公演は県によって許可が必要だったが、その基準が県によって異なっていたため、巡業の先々で許可を得なければならなかった。多くの困難を乗り越えて上演されていたのであった。

築地小劇場の出身で、昭和 19 年（1944）に俳優座を結成した俳優で演出家の千田是也は、俳優鑑札[165]をとりあげられていたため、兄である伊藤憙朔や、中川一政[166]たちの手伝いをして糊口をしのいでいた。昭和 18 年（1943）8 月に、真船豊が千田是也にあてた手紙[167]には、「結局、文学座しかないですね」といった千田の言葉が引用されている。当時の新劇関係者の活動の場がいかに厳しく制限されており、その状況でも彼らが必死に演劇を守ろうとしたかを語る証言がのこされている[168]。千田はこの年の 10 月上演された真船豊作・演出とされた公演『田園』では、名を表に出さない形で実質的に演出を担当した。

さらに戦局が悪化した昭和 19 年（1944）には、享楽追放令が出て、主だった大劇場は閉鎖され、増産激励のための移動演劇や慰問以外の芝居の上演はできなくなった。

5. 終戦、戦後占領期以降

敗戦の結果として、連合国軍による東京占領から昭和 27 年に主権回復するまでの 7 年間、日本は進駐軍の統治下にあった。戦時下よりも組織的に実施された検閲制度を始め、多くの進駐政策が行われ、国産映画を例にすると、終戦後の焼け野原や進駐軍による支配を示す情景を撮影することが禁じられていたことから、長い間街頭ロケすらできない状態にいた。当初は民主化を推進する政策から、日本共産党は合法的に活動を始められることとなり、その結果、演劇界でも共産党勢力が拡大する。党の内部抗争や労働運動の激化など、様々な深刻な社会不安から混沌とした状況下にあった時代、地方公

---

165 戦前まで、芸人は県単位の職業鑑札制度があって人頭税を課していた。東京では明治9年（1876）に警視庁が「諸芸人鑑札制度」を設置している。ちなみに俳優の場合は歌舞伎役者、新劇も対象となり等級づけがあった。この届出で許可を得ない者は興業できなかった。

166 伊藤憙朔（1899-1967 年）は舞台美術の先駆者で伊藤憙朔賞に名をのこしている。洋画家・中川一政(1893-1991)は千田是也の姉暢子の夫にあたる。

167 早稲田大学演劇博物館所蔵.千田是也は『もうひとつの新劇史』（筑摩書房、1975 年）471 頁で、「文学座が『田園』の演出に私を選んだのも、たぶん真船さんの推薦であろう。」と記している。

168 前述の山本安英、千田是也、吉田謙吉らの回想。

演が盛んに行われていた。

歌舞伎は、GHQ が「仮名手本忠臣蔵」など、戦前の「耐えて忍んで復讐する」忠孝思想を昂揚させる演目を上演禁止としていたこともあり復興が遅れていた。新派、新国劇も戦前の流れからの脱却に苦しむ中で、新しい時代の演劇として、終戦直後の虚脱からいち早く脱したのは、新劇であった。築地小劇場などの新劇運動やプロレタリア演劇の流れから生まれた文学座・俳優座・民芸の３大新劇団が活発化していく。ところが、今度は一転して、共産党員の公職追放となったのであった。この時期の日本は、演劇界だけでなく諸分野が政治に翻弄される時代であった。上演制限されていた歌舞伎は一転、伝統芸能としての評価を得、昭和 26 年（1951）1 月 3 日、歌舞伎座が焼け跡から復興した[169]。

封建的社会関係といかに闘って成長し、それを越えていくかという近代の自我を命題としていた新劇は、新派、新国劇と同様、戦後思想や生活の急激な変化に即した演劇を模索することとなる。

第4節　上演作品記録にみる金子洋文の演劇活動

1.　初期の浅草での演劇活動

大正中期、若者を熱狂させた浅草オペラには、「ペラゴロ」とよばれる熱狂的なファン[170]がいた。そこにはサトウハチロー、今東光、川端康成などの文学者も含まれていた。

金子はその拠点のひとつである日本館[171]と関係をもち、大正 7 年（1918）に、上演台本『若いニナさん』を書いた。ただ上演に際して内容を勝手に変更され、その対価として 5 円を得たが、これは友人たちとカフェーパウリスタで飲んだら消えてしまったと云っている[172]ことから、金額にも不満があったようである。

この年は地方で米騒動が起き、東京など都会では大正デモクラシーの風潮が盛んになってきていた。そして 11 月には、流行のスペイン風邪で、芸術座の島村抱月が亡くなっている。

先に述べたように、金子は我孫子の武者小路家を出てからは労働新聞社、毎夕新聞社といった新聞

---

169 演目は「仮名手本忠臣蔵」であった。

170 内山惣一郎『浅草オペラの生活』(雄山閣、1967 年 4 月)によると、「ペラゴロ」の語源は、フランス語のジゴロのゴロ(地廻り)と、オペラを取ってつけたもので、名付け親は小生夢坊、金子洋文、佐藤惣之助、辻潤らである。

171 大正 6 年(1917)から関東大震災の大正 12 年(1923)までの浅草オペラ全盛時代、浅草公園六区にあった劇場「日本館」は日本で初めてオペラ常設館となった劇場・映画館。「東京歌劇座」の常設館であったのは大正 6 年(1917) 10 月から翌年 3 月まで、座には秋田県出身の舞踊家石井漠がいた。

172 『喜劇悲劇』31 巻 7 号(早川書房、1979 年)による。当時の浅草オペラの代金は 10 銭から 20 銭で、ブラジル・コーヒーの大衆化を目指して創業した珈琲専門店でパウリスタの珈琲は大正当時 1 杯 5 銭、当時は銀座にあった。この店は芥川竜之介、菊池寛ら文人たちや大学生たちの行きつけとしても著名であった。

社勤めをしていた。彼が言う所の「我孫子を去った半年後には、私は天国から地獄に落ちた自分を発見した」[173]という環境下で、執筆していた作品のうち、大正 8 年（1919）に雑誌『新演芸』の懸賞に投稿した戯曲「袈裟と盛遠」が当選し、さらに帝国劇場の公募脚本に「村の慈善会」が採用された。大正 8 年頃から、このように金子の劇作家としての活動が認められはじめる。こうした作品は、大正デモクラシーと大衆文化の興隆する都会にあって、地方を背景にし、その地に住む人びとの苦悩を伝えるものであった。金子は翌大正 9 年（1920）秋に、帰国した小牧近江と再会するのだが、このときすでに戯曲作家として活動をしていたことになる。

小牧との出会いのあと、金子が『種蒔く人』の創刊にかかわり、この同人誌を舞台に小説や時事報告を次々に発表して世に問うたことは、これまで再三述べたが、その間も彼の念頭には、民衆と直に関わることができる演劇があった。

2. 新国劇との関わり

金子は、昭和 5 年（1926）に自作の『剣』が邦楽座で上演されたのをきっかけとして、新国劇の座長で役者の澤田正二郎（1892-1929）[174] と関係ができた。澤田は演劇のあり方について一家言をもっていた。

澤田は明治 25 年(1892) 生まれで、金子や小牧の 2 才年上である。16 歳で第一高等学校を受験するが失敗する。そのころ自由劇場の翻訳劇『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の公演を観て、新劇の俳優をめざした。そのために早稲田大学の文科予科に入学して、坪内逍遥の文芸協会附属演劇研究所の 2 期生となり、端役で帝国劇場の舞台を踏んだ。その後島村抱月、松井須磨子たちの芸術座に参加するが、大正 6 年（1917）に劇団「新国劇」を 11 人の仲間と結成した。

この経歴でもわかる通り、澤田は知識階級の出で、演劇のあり方についても坪内逍遥について理論を学んでいた。しかしその彼は舞台活動を実践するなかで、ひとつの確信を抱くようになった。舞台は高尚な芸術にかたよることなく、民衆に寄り添いつつ芸術を目指すという、「演劇半歩主義」である。

澤田は新国劇を起こすと、座長兼主役として、行友李風作の『国定忠治』や、中里介山の大長篇小説『大菩薩峠』を舞台化し、剣戟芝居でその人気を不動にした。彼が目指す新国劇は新しい大衆演劇であり、いわば歌舞伎と新劇の中間に位置するものであった。そして彼のこの考えで行われる演劇は、

---

173 金子洋文『種蒔く人伝』(労働大学、1984 年)42 頁。

174 澤田正二郎は坪内逍遥の文芸協会附属演劇研究所に入る。芸術座に参加し『サロメ』で松井須磨子の相手役ヨカナーンを演じたが、大正 3 年(1914)に脱退、仲間の秋田雨雀らと新時代劇協会（第二次）を作っている。大正 6 年（1917）、「新国劇」を結成、演劇半歩主義として歌舞伎・新派と新劇の間の大衆演劇を目指した。関東大震災の半月ほど後の日比谷公園野外音楽堂で、『勧進帳』などを無料で上演した。地方巡業の後に公園劇場の焼け跡に張った『天幕劇場』で公演している。

知識層から庶民層まで広い範囲の支持を得た。

その澤田が、プラトン社の雑誌『映画と演劇』に掲載された金子の「剣」を読んで、連絡してきたのである。金子の「剣」は、人を殺す剣や剣戟を否定していたから、澤田からの突然の連絡に驚いたという[175]。

金子は土崎で代用教員をしていた当時、秋田で上演された芸術座公演を観ていた。この時彼は興奮して帰途につきながら、同行の友人に、自分の作品が上演されるときには招待すると約束した[176]。だが新国劇の初日に、『剣』の上演を友人と一緒に観た彼は、作者の狙いが伝わっていないと、大いに不満であった。翌年、帝国劇場の公演を見たときは、うってかわった出来映えに感激して楽屋を訪れて、澤田正二郎に毎年作品を 1 本提供すると約束した。

『剣』は、人を殺す道具である剣を否定するのが主旨で、その表れとしてこの作品では、剣に関わる主要人物がみな滅んでしまうというものであった。こうした作品の思想が新劇とは異なったものを目指す澤田の気に入ったのである[177]。

澤田の新国劇は、歌舞伎の『勧進帖』、額田六福がエドモン・ロスタン原作の『シラノ・ド・ベルジュラック』を翻案した『白野弁十郎』、中村吉蔵作『大隈重信』、佐藤紅緑作『キリスト』、菊池寛作『父帰る』、小山内薫作『切支丹信長』、そして山本有三作『生命の冠』と、単に剣劇ものだけでなく、じつに多彩な作品に挑戦し続けた[178]。澤田は役者であるとともに、良い脚本を探す座長であり、晩年には役者をやめて演出をやりたいと言っていた。澤田は「ぼくがやらねば日本に新しい劇は生まれない」と新しい演劇を目指していたが、それは客に喜ばれながら芸術的に向上していく「演劇半歩主義」の歩みにほかならなかった[179]。

しかしその澤田は、昭和 4 年（1929）月、新橋演舞場で『赤穂浪士』の公演中に中耳炎で倒れた。彼は孫弟子にあたる映画俳優の大河内伝次郎を代役に起用し、「演出は金子君に一任する」と、病床から伝えてきた[180]。金子の演出家としての活動はここから本格的なものとなったのである。公演は座長なしで続けられ、澤田は病院からはげまし続けたが、その後病状が悪化、3 月 4 日に亡くなった。死

---

175 金子洋文他「金子洋文氏に聞く」『悲劇喜劇』31 巻 7 号（早川書房、1978 年）22-43 頁。

176 芸術座秋田公演の演目は『サロメ』（松井須磨子のサロメ、澤田正二郎のヨカナーン）、中村吉蔵の『飯』。同行した友人とは土崎で短歌誌『極光』を主宰した金子雄二（夕二）である。（金子夕二「洋文氏の秋田での演劇について」『悲劇喜劇』31 巻 7 号、早川書房、1978 年）20-21 頁。金子は、この約束は後に果たされたと語っているので、『剣』初演を一緒にみた友人は金子雄二である。

177 ある稽古の時に澤田は金子に「“赤城の山“はもう古いんじゃないか」と語っていた。『悲劇喜劇』131 巻 7 号（早川書房、1978 年）37 頁。

178 澤田の実力のほどは「マイクのない時代、国技館や日比谷の野外音楽堂などで芝居をする。声がどうにか通るのは、新国劇の沢正（沢田正二郎）と新築地劇団だけだ、と妙なほめられ方をした」とあることからもわかる。山本安英『女優という仕事』（岩波書店、1992 年）25 頁。

179 樋口十一『風雲児・澤田正二郎』（青育舎、1984 年）180 頁。

180 『金子洋文作品集（二）』（筑摩書房、1976 年）405 頁。

因は急性化膿性脳膜炎であった。

澤田の急逝は、演劇の世界に深刻な影響をあたえた。彼の早すぎた死がなければ演劇の歴史は変わっていたとさえいわれるが、金子の演劇活動の方向もまた異なっていたかもしれない。事実、金子が澤田のために書いた『飛ぶ唄』は新国劇ではなく、土方与志によって新築地劇団の第 1 回公演で演じられた。金子作品の上演劇団のデータをみると、新国劇と金子の関わり深さを知る事ができる。澤田の死後も、新国劇では、『瞼の母』、『一本刀土俵入』、『国定忠治』、『人生劇場』と、ヒット作が次々に上演されて大衆の人気を博している[181]。

3. 金子洋文とプロレタリア文化運動

『日本現代演劇史』で出現数の多い職種は、演出家である。明治以降の演劇にあっては、作品の世界観を、現場を通して観客に伝える役割を担う演出家の存在は、新劇、新派、新国劇を問わず、重要な位置をしめるようになっていった[182]。解釈次第、演じ方次第で、舞台から伝わる印象が異なってくることを、金子は自らの作品で体験していた。

プロレタリア文化運動の推進者であった金子は、実践のみならず理論面でもそれを信念としていたが、ともすると理論が先走りかねない他の作家たちとは一線を画していた。細部の「会話や生活場面の活写に特異の才があり」と評され[183]、「文戦劇場」の活動報告として上演するために必要な現実、上演打ち切りを切り札にもつ検閲する側との交渉、資金や宣伝、人手の動かし方など『文芸戦線』誌上に伝えている。彼の場合、体制批判はヒューマニズム、すなわち人間の尊重という思いに裏打ちされており、その自由闊達な性格とあいまって、多くの人に受け入れられた。金子の人となりは劇壇界でも交友を得やすかった[184]。川口松太郎、菊田一男ら、多くの演劇人との交流を示す書簡がある。

金子は自作の戯曲を上演の際も、演出を自ら行うことが多かった。その場合も、プロレタリア運動の思想を、ストレートな表現によって伝えるのではなく、庶民の暮らしのなかにある社会の矛盾を伝え、観客がおのずと舞台で展開する劇に、弱い者への同情と共感を抱くようにするのが、金子演出の特徴であった。

金子が関わった演劇活動をみると、プロレタリア演劇が先鋭化し、弾圧が強化されたころには、戯

---

181 この劇団は、昭和 62 年(1987)に活動を終了し、劇団名を澤田家に返上した。

182 近代演劇における演出家はその必要性を小山内薫が唱えて始まり、それ以降確立した役割である。

183 『演劇新潮』同人で劇作家の関口次郎(1893－1979)の評。「彼は特に会話や生活場面の活写に特異の才があり、新派での『はたはた』『錦島三太夫』『鬼の面』などから、伊藤永之介の脚色などにその特徴がよく現れている。とくに彼が方言を駆使した郷土の秋田物、殊に自伝的の物のもつ独特の雰囲気は印象が深い。」関口次郎「金子とのつきあい」『悲劇喜劇』1978 年 7 月号(早川書房、1978)18-19 頁。

184 前掲文で『演劇新潮』同人で劇作家の関口次郎(1893－1979)は、演劇人としての金子と、彼とのつきあいを述べている。

曲を創作することよりも、演出家としての仕事の方が多くなっている。当時の日本の社会状況では、プロレタリア作家として活動することがますます難しくなっていた。

ここで注目したいのが、『種蒔く人』の創設者のひとり、小牧近江が同人に誘おうとしていた平沢計七の演劇活動である[185]。亀戸事件で惨殺された平沢は、『種蒔く人』創刊と同じ大正 10 年（1921）の 2 月に労働劇団の第 1 回公演を行っている。労働演劇にかかわり、民衆を変革する方法として「東京労働劇団」を組織していた。

彼は労働演劇運動で、下からの民衆の底上げとしての演劇の有効性も着目していた[186]。演劇による労働者の底上げと組織づくりを目指した平沢計七の考えを金子が全く知らなかったとは考えにくい。

『文芸戦線』の労農派の演劇活動は、昭和 6 年（1931）から翌年にかけて、労農演劇同盟や文戦劇場といった、移動巡回公演が中心であった。金子は『文芸戦線』の昭和 5 年（1930）12 月号に、文戦劇場の活動報告、「左翼劇団の一年」を掲載している。これによれば、労働演劇運動を民衆の底上げとして捉えていたことが分かる。こうした金子の考え方、つまり移動演劇の上演によって、労働者の意識の昂揚をもたらし、同時に組織づくりに役立てるという考え方をしていた。

当時、金子の著作を所持していること自体が危険とされ、当局の監視下にあったことをうかがわせる資料が存在する。昭和 8 年（1933）に、門司から満州へ渡ろうとしていたある人物が不審者として監視下におかれたが、その根拠として、「船中常ニ金子洋文著『赤イ湖』ヲ耽読シ言動ヨリ察スルニプロレタリア文学研究ニ相当ノ趣味ヲ有シ」とされている[187]。金子の小説を読むこと自体が危険視されていたわけで、著者への監視はもっと厳しかったのは明らかである。それだけに金子は慎重に行動する必要があった。

検閲の直接の対象は台本であった。また舞台の上演にあたっても、警官が配置されるなど検閲の目は光っていたが、活字に書かれた書物や台本にくらべれば、庶民感情にうったえる含みのある台詞や仕草は、まだ見逃される可能性があった。そのことからも、舞台の幕を開け観客との間に感情を共有し、そこから伝わることを演劇関係者は重要視していたのである。築地劇場では検閲によって台詞がほとんど使えないことから、無言で演じたに等しい舞台もあったという[188]。こうした当局との対応を明かしている点で、前述の公演報告は示唆に富むものである。当時の演出家にとって、当局との対処は仕事のうちで、それを巧みにこなすことは必須の能力だった。

だが弾圧のテンポは急速に厳しくなっていった。昭和 7 年（1932）5 月には労農芸術家連盟（労芸）

---

185 平沢計七については、藤田富士男・大和田茂『評伝平沢計七』(恒文社、1996 年)に詳しい。
186 藤田富士男・大和田茂『評伝平沢計七』(恒文社、1996 年)
187 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref B04013106100（2012 年 11 月 1 日閲覧）
188 山本安英『歩いてきた道』(未来社、1987 年)

は解散させられ、雑誌『新文戦』は昭和 9 年（1934）12 月をもって廃刊に追い込まれた。

昭和 9 年（1934）2 月、左翼芸術家連盟がプロレタリア作家倶楽部と合同して、第二次労農芸術家連盟を結成し、その書記長となった金子は、昭和 10 年（1935）、東宝劇団の嘱託に就任した。

昭和 11 年（1936）の２・２６事件以後、昭和 12 年（1937）の人民戦線事件、盧溝橋事件、翌年の国家総動員法制定、大政翼賛会発会と、日本は坂を転げ落ちるように戦争への道を突き進んだ。演劇を含めたあらゆる芸術活動が、国のためのものとされていった。

金子の上演活動データから、金子が劇作家より演出家としての仕事が増えたのは、昭和 10 年（1935）から昭和 19 年（1944）の間で、彼の演出による舞台の上演回数が最も多いのはこの時期である。その背景には、文学座創立に関わりながら召集され、一度も舞台に上がることなく亡くなった俳優友田恭助に代表されるように、多くの舞台関係者が召集されて、舞台を去ったことがあった。兵役は 20 歳から 40 歳で、戦局が進んだ昭和 18 年（1943）からは、45 歳までが対象となった。さらに学徒も出陣することになり、金子より下の世代の大半が戦場に駆り出される状況となっていた。

戦時下では、新派と歌舞伎、新劇や喜劇の合同公演が増え、生産現場を慰問するために、各地を訪れる移動演劇が行われるようになった。金子はこの間、東京・西荻窪の家に住み、昭和 20 年（1945）[189]以外の全ての年を演劇活動に携わっている。演劇関係者の多くが逮捕され、あるいは戦地に送られるなかにあって、金子が第一線で活動を続けられたのは幸運な要素があった。

先にみてきたように、金子の作品が上演されたピークは、大正から昭和の初期にかけてであって、彼の作品には庶民の暮らしが描きこまれ、観客はそこにある世の不条理を感じとった。その後、金子の作品はこれまで以上に思想性を高め、プロレタリア運動に目覚めた人物が登場するようになったが、それでもいわゆるプロレタリア演劇とは一線を画しており、人情劇の本質を逸脱することはなかった。演劇は時代を映す鏡といわれる。戦中、戦後の日本の新劇は、左翼芸術の有力な表現媒体だったが、金子が演劇でめざしたものは、民衆の心情をあらわす大衆のための劇であった。こうした考えから、金子は時代の変化とともに、松竹や東宝など劇場を有する興行資本が製作する商業演劇に携わることとなった。検閲に詳しい金子は、興行側からみると、現実をわきまえ役者にあわせた手堅い舞台ができる演出家であった。

昭和 15 年（1940）8 月上演の『権三と助十』を執筆するために、金子が信州滝温泉に滞在したときのことである。たまたま同じ温泉に滞在していた荒畑寒村が、「日本も、一度戦争に負けるといいんだ」というのを聞いた。「この一言で、二十年来の思想的懊悩（軍事独裁をいかにして倒すべきか）　がい

189「演劇上演記録データベース」で確認できるこの年の国内上演数は 10 本に満たない（2012 年 8 月 1 日時点）。金子が活動しなかったのではなく、演劇そのものがほとんど上演されなかったのである。

っぺんに吹き飛ぶ思いがした」と後に、『雄物川』（金子洋文米寿記念刊行会、1918 年）のあとがきで述べている。金子は内心で軍部独裁に強い反感をもちつつ、大衆演劇の仕事に従事していた。彼の演劇活動には、雑誌『種蒔く人』以来の思いが秘められていたのである。

4. 戦後の演劇界と金子洋文

終戦後、金子は、演劇の現場から離れ、政治家としての活動に追われる。日本社会党公認で第 1 回参議院選挙の全国区に立候補して当選し、1 期 6 年間を参議院議員として活動し、昭和 27 年（1952）パリのユネスコ総会には、政府顧問として出席している。次の選挙は落選、金子は演劇の世界に戻る。

昭和 31 年（1956）3 月、当時国交がなかった中国との文化交流のための文化人団体として日中文化交流協会が創立され、11 月、中国人民対外文化協会の招請で日本作家代表団として青野季吉、久保田万太郎、宇野浩二、堺誠一郎らが訪中した。昭和 32 年（1957）年 10 月、日本作家代表団として井上靖、山本健吉、多田裕計、十返肇、中野重治、堀田善衛、本多秋五が戦後初めて訪中した。金子は、翌 12 月に久保田万太郎を団長とする日本演劇家代表団の一員として、北条秀司、喜多村緑郎、喜多村九寿子、吉田謙吉、穴沢喜美男、宮口精二、倉林誠一郎らと訪中する。早い時期の文化交流の進展には、竹のカーテンともいわれた中国共産党国家体制下における文化人への関心がみてとれる。戦前からのマルクス思想を実現した社会への期待が先にあったともいえよう。

その後、昭和 40 年代に金子は、松竹歌舞伎審議会の委員を努めている。歌舞伎を日本の伝統芸能として認識し、世界に誇る芸術として大切に伝えることを主張していた。その一方で、金子は、歌舞伎は伝統的であると同時に、新しい要素を取り入れてきたこと、近代劇との交流や興行にあわせた表現を工夫してきたことを知っていた。明治以降の歌舞伎の変遷と名優たちの芸への精進を目の当たりにみてきたのである。演劇界の生き証人とも言える立場であった。

新国劇は「丸橋忠彌」を、回を重ねて演じ、新派の水谷八重子が演じて当たり役となった「兄いもうと」は、十数回を超えて上演されているばかりか、映画化も回を重ねていった。両作品とも戦前からの人気演目であった。

金子の戦後発表作品にはふたつの流れがある。ひとつは、「鬼の面」（『明日』創刊号、1947 年）、「鰰」（『悲劇喜劇』11 月、1954 年）「雄物川」（『悲劇喜劇』7・8 月 1959 年）といった、故郷秋田の人々を題材にした作品である。「雄物川」は、明治 40 年頃の土崎港が舞台である。船の交易に必要悪として据えられた売春婦のひとり、お雪を主人公に、和船の船長、人夫たち、船宿の主や医師、教師、子供たちが登場する。母性的で優しい女が、やがて発狂し、浜の雪小屋に打ち捨てられ、死ぬまでを描いている。様々なしがらみの中に生きる、平凡で気立てのいい女が辿る運命の哀れさを、土崎港の唄や

方言、港の喧騒やにおいまでを伝えるような情景の中に配している。お雪のモデルは実在した売春婦で、金子は第 2 の母とも語っている。金子 65 才の作品であった。人物像、情景の設定など、演ずるには難しい設定の作品で、演じるためというよりは、金子の裡なるふるさと、彼の心象世界を表した自伝的な戯曲といえる。舞台条件に合わせ役者が演じやすい作品を書く巧者とされた金子にとって特別な作品である。

もうひとつの流れはその後続けて発表された「明治の波」(『劇と評論』復刊記念 10 月号、1968 年)、「千利休の死」(『劇と評論』12 月、1969 年)、「松下村塾」(『劇と評論』7 月号、1973 年) という歴史を背景に描かれた作品である。

新劇、新派、新国劇、歌舞伎と日本の演劇界の各方面と関わりを保ちながら、現代劇の大衆化を追求してきた金子が行き着いた境地を表わそうとしているのであろうか。「千利休の死」は、茶の道を追い求めた利休が、権力者豊臣秀吉と対峙した折、その精神での反逆を描いた作品である。その最終場面は、秀吉の夢の中である。「さいごにのこるものは、閑かさ」と語らしめていたこの戯曲には、「観客に生きるよろこびを与えるよう演技、演出すること」と作者からの演出上の注意が付されている。この作品は昭和 44 年 (1969) の 12 月に発表された。その少し前、10 月 18 日に土崎小学校以来の付き合いで『種蒔く人』同人でもあった、今野賢三が逝っている。

第5節　作品にみる金子洋文の特色

金子の演劇作品にみられる大きな特徴として、郷土色豊かな表現描写があげられる。地方性豊かな作品の個性を伝えるものとして方言、お国ことばがある。文字で表現する文学では表ししきれない、言葉のもつ音感が重要なモチーフとして使用される。かって岸田国士は仏領印度支那を舞台にした戯曲「牛山ホテル」で、天草からの出稼ぎ女たちの台詞を普通の言葉では感じが出ないと、方言の台詞を用いている。方言を使うことは、言葉をただ意味を伝えるものとして用いることと異なる内容をもつものになる。劇曲として発表された作品にある方言が判りにくいという意見に岸田は、「(方言によるという＝筆者補) 言葉の蔭に、人物の生活が、気性が、趣味が、習慣が、特殊なニュアンスとなつて潜んでゐるのである。ただそれだけではない。声の調子、表情、姿態までが浮び出てゐるのである」と述べている[190]。しかし「繰り返さるべきことではない。私にしても、恐らく、この試みは最初にして最後のものであらう」という言葉が続いていた。

地方の郷土色をその地方の言葉である方言を使わずに伝えることは難しい。その地域の歴史や文化

190 岸田国士「「せりふ」としての方言」『岸田國士全集 21』(岩波書店、1990 年) 初出:『悲劇喜劇』6 号(早川書房、1929 年)

を背景にもつ言葉である方言を使用することで、どれだけの意味を込めて伝えられるか。劇のもつ意味を表現する際の難しさがある。地域性に込められた豊かな意味付けがあるとして演じることを演技者に求めるということは、観る側にそれを感得させるまでの表現を求めることになる。

金子の作品は、地方の暮らし（多くは秋田地方である）が色濃く関わりを伴って、その地方の文化を感じさせる。「地獄」、「赤い湖」、「牝鶏」、「錦島三太夫」、「鰰」、「鯡」、「雄物川」の幕中で使われる歌やことばが背景となって表現される世界、つまり秋田を舞台にして描かれた作品には、金子の故郷である秋田、東北の自然やそこに生きる人々の生活が表現されている。

反面、標準語ではなく地方の言葉を含ませた作品には、観客に言葉その意味、それなりの必要性を説得できなければならないこととなる。地方色の独自性と共に、観客に理解してもらう普遍性も必要となる。そこに地方言語を使う難しさがあった。ふるさとを感じさせる巧みさは、他の追随を許さない金子の特色とされた。彼の作品から秋田という地方を感じ取った者は多く、郷土作品としての役割を果たしていたことになる。

第6節　金子洋文の演劇活動

金子の演劇活動は、大正期の浅草オペラ、戦前のプロレタリア演劇、戦時下の移動演劇、新国劇や新派、新作歌舞伎といった、幅広い分野に及んでいる。大正初期から戦中、戦後といった 20 世紀前半の時代、激動する社会の変化に近代演劇も毀誉褒貶が激しい中で、金子は常に舞台現場に関与し続けていた。舞台を知り尽くし、演じる側と観る側双方に立って、自らの作品だけでなく他の作家作品を舞台化することにもたけていた。新旧入れ替わりが激しい演劇の世界で長く活動し続けられた理由として、流派、所属という条件の違いを乗り越えて仕事ができるという、金子の状況に柔軟に沿う姿勢があったのではないだろうか。

金子は、権力に苦しめられる者への目線を持ち続けていた。現実に苦しむ人が多い世の中で、舞台によって、生きるよろこびを得られるような芝居を目指した。地方を都会に伝える作品を作っていた。都会の文化を地方に伝える、巡業演劇も行っている。金子の「飢えと戦争を防げない文化は真の文化ではない」という強い思いは、演劇活動にも反映していたとみることができよう。

第7章　金子洋文と故郷―地方性（ローカリティ）の存在

第7章　金子洋文と故郷―地方性（ローカリティ）の存在

第1節　はじめに

金子洋文が秋田からの後進作家達を中央に繋げていたことは、第4章で『文芸戦線』時代の金子の行動を分析し、明らかにした。本章では、金子が秋田の同人誌に関心をはらっていたこと、石川達三（1905-1985）に及ぼした影響と秋田の同人作家、杉田瑞子（1929-1975）が芥川賞候補となったことに関与していたことをとりあげる。さらに、昭和の新民謡の中に浮かび上がる地方性について言及、考察する。前章に引き続き、金子の裡にある地方性（ローカリティ）の発露をとらえ、地方の生活からくる文化を全国的な活動をする中で発信していた、郷土作家としての金子の働き、郷土への貢献を明らかにする。

第2節　秋田出身の芥川賞候補作家たち

純文学の新人作家の発掘をめざして作られた芥川賞は、新人の小説家にあたえられる権威ある文学賞であり、昭和10年（1935）以来、上半期[191]と下半期に、新聞、雑誌（同人雑誌を含む）あるいは単行本として発表された純文学作品のなかから選考委員によって選考されてきた。

第1回の芥川賞を受賞したのは石川達三の「蒼氓」（『星座』昭和10年4月号［創刊号］）で、彼は秋田県横手市の出身であった。秋田出身の作家で芥川賞の候補になった者としては、第3回の候補に矢田津世子（1907-1944）がおり、伊藤永之介（1903-1959）が『梟』[192] で、第4回と第6回目の候補となり、さらに次の第7回でも、『鴉』と『鶯』で立て続けに候補作家にあげられた。

戦後になると、秋田県能代出身の劇作家、伊賀山昌三（1903-1956）が昭和25年下期の第24回に候補となった。

秋田県関係者の受賞は、昭和40年（1965）下期第54回の高井有一（1932- ）まで、待たなくては

191　上半期は12月1日～5月31日まで、下半期は6月1日～11月30日までの掲載である。

192　第4回の「梟」は、『小説』2号［昭和11年/1936年9月］、第6回の「梟」は、『文學界』昭和12年/1937年7月号再録からとりあげられている。芥川賞のすべて・のようなものhomepage1.nifty.com/naokiaward/akutagawa/は、書籍化。川口則弘著『芥川賞物語』（バジリコ、2013年）より。

ならなかった。受賞当時の高井は、東京に住み東京の同人誌を発表の舞台にしていたが、彼の本名は田口哲郎、祖父は角館町出身の小説家劇作家、美術評論家として活躍した田口掬汀(1875-1943)、父は画家の田口省吾（1897-1943）という家の出である。受賞作『北の河』[193]は、終戦の年の秋、疎開をした秋田県の町で自殺した母の死を題材にしたものである。石川達三以来、30 年振りの受賞であった。

次いで昭和 43 年（1968）上半期の第 59 回に芥川賞候補となったのが杉田瑞子である。彼女もまた賞を逃すのだが、この時の受賞作は大庭みな子『三匹の蟹』と丸谷才一『年の残り』で、他の候補者も、山田稔、後藤明生、斎藤昌三、加賀乙彦、山田智彦と錚々たる顔ぶれであった。

杉田瑞子より前に芥川賞候補になった矢田津世子[194]は、都会に移り住んで活動していた。矢田と異なり、杉田は秋田にあって作品を書き続け、秋田で大いに着目され期待される存在だった。彼女は秋田で生まれ育ち、秋田で結婚し、姑に仕え、子供を産み育てる、平凡な主婦業の傍らで小説を書き続けた。昭和 49 年（1974）に刊行された『波瀾万丈』の冒頭には、石川達三が寄せた「祝辞に代えて」という原稿用紙 3 枚分の文章を、直筆原稿の写真版というかたちで掲載されている。石川は自らと郷里との関わりについても語っていることから、長くなるが引用する。

> 秋田は私の郷里ですが、郷里に対する努力を怠っていると郷里からも見放されます。今では親戚知人の消息も絶えてしまって、僅かに年に一度ぐらい石田博英君や小畑知事さんからお便りを頂く程度になってしまいました。同業者では小牧近江氏、金子洋文氏も居られますが、お会いする機会もほとんどありません。伊藤永之介君は私と似たような年齢だったと思います。もっと活躍してほしい人でした。
>
> 郷里の新人作家というような人は、誰も知りません。偶然に人から薦められて杉田瑞子氏の作品を読んだことが有るというだけで、杉田さんにお会いしたこともありません。「北の港」はよく記憶して居りますが、なかなか男まさりの、強い文章を書く人だと思いました。数年をへだてゝ、今度は「波瀾万丈」という長篇傳記小説を発表されておりますようですが、これは資料の調査や選択に骨が折れたことだろうと思います。女流作家はどちらかと申せば情緒的な作風の人が多く、「波瀾万丈」のように情緒をすてて、事実の重みを作品に盛りこむというような作家は少いように思われます。
>
> 私は小学校一年の時まで秋田市に居りました。土崎港とかあらや浜とかいう地名だけは記憶し

193 同人に立原正秋、加賀乙彦、後藤明生らが参加した同人雑誌『犀』に発表した作品。

194 矢田津世子は、五城目町に生まれ育つ。秋田を離れ、大正 5 年(1916)以後は都会に暮らして進学、同人誌『女人芸術』、『日暦』などで活動した。都会で文学修業を重ね、「神楽坂」(『人民文庫』1936 年3月号)で昭和 11 年(1936)上半期の第 3 回芥川賞候補となったが、結核となり昭和 19 年(1944)若くして斃れた。

ていました。杉田さんは土崎に育った（港衆）であるらしく、多少気の強い、威勢の良い中年の御婦人であろうかと思われます。女性の繊細は珍しくありませんが、女流作家の骨格のたしかさは珍重していゝのではないかと思います。私の知る限りでは、杉田さんは派手な人ではなくて、地道な作家であります。「波瀾万丈」も題名だけを見れば華やかに思われますが、内容は堅実な、丹念な、忍耐づよい仕事です。恐らくこの人はいわゆる流行作家などになる人ではなくて、郷土に密着した、故郷に深く根を据えた、（秋田県の作家）としていきていく人だろうという気が致します。私はそういう人を尊重します。そして（虚名）に足を取られてうわついた作品を書きつづけている流行作家などよりも、こういう作家たちに本当の文学作品を期待しております。読者もまた、作家の（知名度）などに煩わされることなく、本当に努力して書かれた、素性の正しい作品を、愛読してほしいものだと思います。（下線は筆者）

昭和 49 年（1974）当時の石川は、郷里との関わりを保つ努力をしなければ、郷里から忘れ去られると語っていた。無名の作家であった石川が同人誌に発表した「蒼氓」は、昭和 10 年（1935）第 1 回芥川賞を受賞する。「蒼氓」は劇化され、昭和 11 年（1936）1 月、明治座で新派によって上演されたが、その脚本化は、金子によってなされている[195]。さらに戦時中にはハノイで小牧近江と会っていた。石川は秋田を自分の故郷であるという認識をもち、『種蒔く人』同人たちを含む多くの同郷人との交流をもっていたのである[196]。後に、秋田市青年会の「ふるさと運動」[197]に共鳴した石川は、昭和 58 年（1963）、自らの肉筆原稿、図書、スケッチなどの資料を秋田市に寄贈している。昭和 58 年（1983）10 月に開館した秋田市立中央図書館明徳館の中に、寄贈された資料をとりまとめた石川達三記念室が昭和 59 年（1984）10 月に開設される[198]。石川には、自らの郷里である秋田を大切に扱おうとする心境がみられるが、その心境に金子という先行する事例が念頭にあったとみることもできよう。

石川は、地方にあって創作活動を続けることを高く評価していた。前掲引用文にある「偶然に人に薦められ」という人は、金子洋文である。『文芸秋田』杉田瑞子追悼号 24 号（文芸秋田社、1975 年）に掲載された千葉三郎作成の「杉田瑞子略年譜」中に、「第五十九回芥川賞候補作となる。金子から芥川賞選考委員石川達三への推薦」[199]と明記されている。千葉は当時この雑誌の編集事務担当であり、

195『蒼氓』は、新派（井上正夫一座・水谷八重子一座大合同劇）という豪華な組み合わせで明治座を舞台に上演されている。舞台演出に金子が関わっていた可能性が高い。
196「秋田の文人諸氏」(『文芸秋田』第 29 号（文芸秋田社、1983 年)2-3 頁。
197 昭和 40 年代から 50 年代にかけ、秋田県、秋田市、秋田魁新報、NHK、秋田放送、秋田テレビが後援して、秋田県連合青年会、秋田県青年会館、秋田県青少年団体連絡協議会の三者が主唱し「秋田のふるさと運動」を展開していた。
198 石川の死は昭和 60 年（1985）1 月 31 日、金子の死 3 月 21 日に先駆けることわずか 50 日であった。
199『文芸秋田』杉田瑞子追悼号第 24 号（文芸秋田社、1975 年）18-20 頁。

『文芸秋田』を関係者に配布し、杉田と金子とのいきさつを知る立場にあった。

杉田瑞子の父、野口陽吉は、「雨郎」の号で明星風の短歌を書き、『種蒔く人』の同人たちと芝居をしたこともある文学青年であった。この父と母テツの次女として生まれたのが瑞子で、上には兄と姉、下に妹が 3 人いた。祖父の野口直平は土崎の豪商野口家の次男で、神戸で野口海運を興し、野口家を隆盛に導いた人物である。

杉田瑞子は若いうちから文筆家を目指した人ではない。昭和 24 年（1969）に宮城女子専門学校を卒業し、弘前学院に勤務した期間を除き、生涯の大半を秋田で暮らした。高校教員として勤め、結婚し、子育てとふつうの主婦業を続けていたのである。出産を機に退職した後は主婦業と子育てしていたところに、執筆活動が加わった[200]のである。昭和 33 年（1958）12 月に創刊された文芸誌『文芸秋田』[201]に同人として参加し執筆活動をしていた。

秋田生まれの秋田育ちの杉田は、その環境の中で文筆の力をのばし、昭和 36 年（1961）に『秋田魁新報』の新年文芸小説部門に入選、さらに『婦人公論』女流新人賞候補となった。そして翌年は雑誌『新潮』の同人雑誌優秀作に選ばれ、この年から本名の杉田瑞子で作品を発表していった。なお杉田瑞子については、昭和 50 年（1975）7 月の『文芸秋田』24 号、および沢井範夫が『秋田の文芸と風土』（秋田 無明舎出版、1999 年）に発表した「杉田瑞子 その人と作品」が詳しい。

昭和 43 年（1968）上半期の第 59 回芥川賞候補となった時の杉田は 39 歳で、その 6 年後、自宅の裏で焼身自殺という衝撃的な最期をとげた。

杉田が終生誇りにしていた父方の野口家、その関係者たちが住む土崎港町との深い結びつき、自らが生活する秋田が直面する現実を鋭い問題意識でとらえ、自身を含めてそこで生きていく人たちの深層心理までを描き出していた。そのために彼女の一連の作品は、秋田の生活の現状が色濃く反映されたものとなっている。

『文芸秋田』の同人で、編集にも携わっていた小野一二は、杉田瑞子の文学の特徴を、

> 作家としての眼はいつも内側へ内側へと向けられていた。そのことによって、肉親、知人を傷つけていたものと思われるが、それよりも自分自身を傷つけていたのであろう。その傷からしたたる血の暗ささえ、じっとみつめてはなさない見逃さない作家の『業』のようなものを、私は彼女の作品とことばから受けとっていた。杉田瑞子はりっぱな作家であった。

---

200 デビュー作は、昭和 33 年（1958）、『河北新報』の読者文芸に入選した短編小説「エンゼル・フィッシュ」であるが、『河北新報』に掲載されておらず、作品そのものを見ることはかなわない。小野正人の話や『河北年鑑』にその名が記されている。

201 創刊には伊藤永之介も関与していた同人誌。

と述べている（小野一二「遣りきれない」、『文芸秋田』24 号、1975 年 7 月）

小野正人もまた、杉田が亡くなったとき、追悼文を寄せている。そこでは、彼女の「エンゼル・フィッシュ」を紹介しつつ、

> この第二作も又すがすがしい作品であった。彼女自身ひそかに心指（ママ）していたらしい妖精のような美少女を描いた短篇は、のびのびした筆が、気持ちよく奔って、好個の掌編となっていた。

とし（小野正人「瑞子さんのこと」、『文芸秋田』24 号、1975 年 7 月）書き手としてあろうとする意識によって生来の杉田の性格との乖離が進んでいったとしている。「エンゼル・フィッシュ」は、河北新報社へ応募する前に、彼女が小野正人にみせて、タイトルは小野がつけたという作品である。本来親切で明るかった杉田が小説を書くという一事で、家族をはじめ周囲の人を傷つけ、それだけではなく自分の身を削っていったことを、小野は悼んでいた。

両者から共通して語られているのは、作家のもつ業と果敢に取り組んで逝った杉田の姿であった。

第3節　金子洋文書簡にみる杉田瑞子―土崎ゆかりの作家

杉田瑞子が昭和 43 年（1968） 7 月 24 日に、東京西荻窪の金子洋文に宛てた書簡が、秋田市立土崎図書館に所蔵されている。

まず、杉田が東京の金子に宛てた書簡から一部を紹介する。芥川賞落選時の杉田から金子にあてた書簡（昭和 43 年[1968]5 月 1 日付）には、次のように書かれている。

> （前略）新聞に出ましてから思いもかけなかった人々から御祝いやら、激（ママ）ましを頂戴いたしましたが、一度も考えたことのなかった 書いていることの社会的責任のようなものを覚え、何か重くなり困りました。もう少し書いているものに、自信の抱ける状態だつたらとか、子供が大きかつたら、虚心に歓ぶこともできましたが、まだ今の状態では 力も及びませんし、家の中が整つておりません。内心の創作意欲からではなく外からの意志で書かせられることになりますもう大変なことになつてしまうと案じておりました。本当に助かりました。唯文芸秋田の同人諸氏が、このことを契機に、大変意欲的になって参りまして、うれしいことでございます。（以下略）

石川達三に送るよう指示した金子へ回答した葉書（昭和 43 年[1968]5 月 19 日付）や、同人誌『文

芸秋田』を芥川・直木両賞の委員（川端、丹羽、舟橋、石川）には毎回寄贈しているが、平林・円地にはこれから贈ると連絡した手紙（昭和 43 年[1968] 7 月 24 日付）がある。手紙には、育児との両立の難しさを乗り越えて書いていること、これまでの作品を紹介した後に、地方の素材に開眼したこと、同人誌の動向など様々なことが綴られている。杉田は、作品への手ごたえをこのように伝えていた。

> 地方在住の家庭の主婦という小さなレンズを通して綴りました身辺の私小説風の作品で、題材の面で、膠着状態に陥っておりました。「北の港」を書きまして、はじめて、眼の中のウロコのとれました思いでございます。地方にも素材がいくらでもある。地方在住者でなければ書けないもの、書くべきものがあると、はじめて、思い知った気持ちでございます。

そして彼女は手紙のなかで、「祖父野口直平の生涯のこと、大伯父銀平の娘達の華麗にして、悲劇的な末路のことなど」をトーマス・マンの『ブロテンブローク家の人びと』のように、いつかは書いてみたいと述べている。トーマス・マンの畢竟の大作は、「一家の滅亡」という副題をもつように、四代にわたるブッデンブローグ家の滅亡をたどっている。ここには北ドイツの港町ハンブルクに居住したマン自身の一家の代々の歩みが投影されていて、健全で素朴な市民階級が、代を経るにつれて精神性と複雑性を増大し、ついには芸術家的人間を生むにいたる過程をたどったものである。と同時に 19 世紀に生まれた市民社会が、古い型の市民層が衰退し、資本主義の発展の波に乗ったブルジョアという新しい層へと変わっていく様子も描いていた。

杉田はこの金子宛ての手紙で野心を語ったように、やがて父方の一家である野口家を題材にして、「波瀾万丈」を書き、昭和 49 年（1974）11 月に自費出版の形で、宝雲新舎出版部から出版した。『波瀾万丈』は、その見開き中央に大きく「この書を謹んでふたりの母（野口テツ・杉田蘭）に捧ぐ」とあり、次頁に「在りし日の野口直平像」の写真が飾られている。その次に配された目次では、石川達三の「祝辞に代えて」、菊村到の「杉田瑞子さんについて」、そして杉田瑞子の作品「波瀾万丈」、「北の港」、「小船で」の 3 編、最後に杉田の「あとがき」が綴られている。「波瀾万丈」の頁表題部には―ある海の男の物語－と添えられている。江戸から明治、大正に移った時代の大きな歴史のうねりの中での土崎の港の様子や、神戸の名だたる船舶商人たち、船成金のけた外れな豪奢な豪遊ぶりなど、史実に基づきながら描かれていた。杉田の祖父、野口直平を主人公にした、まさに海に生き、船商人として財をなした男の一生であり、その周囲の人々の物語である。神戸で大きく成功した直平は、土崎と神戸での二重生活をしていたことや、土崎在住の兄、野口銀平を生涯立てていた直平が、表に出ることはなかったが、野口家の経済は彼が支えること大であったという経営実態、土崎でつつましく暮

らす直平の妻に比べ豪奢に暮らす銀平の妻女たちの様子が語られていた。

石川達三が寄せた「祝辞に代えて」が写真複製されていることは先に述べたが、もうひとりの芥川賞授賞作家、菊村到も「杉田瑞子さんについて」と題した、原稿用紙5枚をよせ、これもそのまま直筆で写真版として掲載されている。

菊村と杉田の関係は、実家、野口家の縁である。昭和20年（1945）8月のある日、陸軍歩兵実習士官として秋田の歩兵部隊にいた菊村は、8月15日の終戦を期して自分でどこかに下宿先を捜さなければならなくなり、友人と彼のつながりで土崎港に下宿させて貰うこととなった。物資も何もない混乱時代に全く未知の他人を引き受けてくれた家が杉田瑞子の実家である野口家であった。彼の印象にある野口瑞子は「セーラー服のかわいい御嬢さんであり、優雅に安定した気品のあるムードが家のすみずみにまでしみ渡り、由緒ある名門の家族であることがすぐわかった」と記している。

杉田は土崎の旧家から嫁いだ嫁としての家庭生活を送りながら、その一方で創作に執念を燃やしてきたのだった。「波瀾万丈」について、父方の家系で作品のモデルとされた一族、野口家に連なる人たちからの反応は厳しかった。野口銀平に連なる者からすれば、「直平は、生涯、本家である銀平一家の浪費癖に悩まされつづける」といった描写には、野口家とその周囲の人たちにとって受け止めがたかった[202]。杉田は自らが誇りとする野口家に連なる人々から厳しく批判されたが、その中には、劇作家青江舜二郎（1904-1983）と野口達二（1928-1999）がいた[203]。劇作家として活躍し、雑誌『悲劇喜劇』に関わっていた青江舜二郎は、作中でその暮らしぶりが揶揄ぎみに紹介されていた銀平の孫娘、麗子の別れた夫であり、歌舞伎の分野を中心に活躍していた野口達二は野口銀平の孫であった。彼等もまた金子との顔見知りの間柄である。

杉田瑞子の最後の創作作品は『文芸秋田』23号（昭和49年7月）に掲載された「ノラにもならず－小説・杉田久女」である。杉田久女（1890-1946）は、九州小倉で俳句を創作し続け、優れた作品を書きながら、中央から認められず周囲の批判にさらされつつ、夢の中でも俳句を編んでいたとされた人であった。明治と昭和の違いはあるが、地方に生きる女が、地方の閉塞と中央との距離を感じながら創作する孤独、時に生ずる周囲との軋轢、家庭の営みに責任をもつ主婦を務めながら創作を続けることの難しさは、杉田瑞子と杉田久女に共通する。

地方の同人活動から全国的な活動をすることの難しさに加え、女性ならではの制約が存在していた。プロ作家はそれを職業とするが、同人作家は経済のために書くものではない。同人作家である杉田は、執筆を「道楽」と口にしていた。これは、複雑な心境を表している。芥川賞候補作家という周囲の期

202 『波瀾万丈』（宝蔵新舎出版部、1974年）63頁。他にも太平山三吉神社の鳥居奉納に際して、「銀平は、この時も、一文も出さずに、連盟の中に加わっているのである。」82頁。

203 野口達二「拝啓、ふるさと様第11回」『ホットアイあきた』363号（秋田県、1992年）29頁。

待は、社会的な責任というみえない圧力となり、休筆して普通の主婦という立場に戻ることもできずにいた。それが身も心も疲弊させ、ついに全てを打ち捨てさせたとみることはできないだろうか。

金子が援けて開いた中央への扉であったが、杉田の場合は進むことができなかった。芥川賞候補となったことがもたらす光と影をともいえよう。芥川賞の趣旨は作家として精進を重ねることを支援する賞であり、その後の活動の積み重ねを求めるものである。その条件その意味を知りつつ、作家として突き進む用意がまだ充分できていなかった杉田は、仕事と家事の両立に悩み、時間に追われる暮らしの中にあって、地方で悩みながら創作活動に向かっていた。現代女性の多くがもつ悩みに加え、作家のもつ孤独な戦いがあった。

第4節　金子洋文の郷愁―新民謡

金子の作品の中には、秋田の情景を伝える歌も含まれていた。土崎小学校の校歌の作詞をしていたことと、「句と歌と感想」と題して自作を取りまとめたノートの最後にこの校歌を配していたことは、前章で述べたが、金子が作った歌はそれだけではない。土崎の春の海を表わした「秋田港の唄」がある。この唄は「新民謡」という分野に属するものとされ、多くの人々に歌われ聞かれ、現在にも歌い継がれている。金子の作品にみられる秋田という地方性が「秋田港の唄」に表現されていたことを見出すことができる。ここでは、地方に豊かにあった表現文化が近代日本の急激な社会の変化で消えていくとして採集していった柳田国男の「民謡覚書」、「民謡の今と昔」を踏まえ、当時の新民謡という活動の最中にあったなかで、金子の唄が持つ地方性とは何であったのかを考察する。

「民謡」という名称は、地方で伝承されていた鄙びた唄「俚謡」をもとに、明治半ばの民俗学がフォークソングの訳語として創出した言葉である。日本民俗学の創始者である柳田邦男は、「民謡の今と昔」の序説[204]で

> 村にはいまでも澤山の唄をしり、折さへあれば唄はうとして居る人があるものだが、彼等は必ず我々の手帳を取出すのを見て、ミンヨウとは何だと眼を圓くするに相異無い。（略）ウタだと答へるであらうと思ふ

として、民謡という言葉の範囲をきめることに苦労したことを述べている。柳田民俗学では、民謡は

[204] 柳田国男「民謡の今と昔」『定本柳田国男全集第17巻』（筑摩書房、1969年）249頁。初出は1929年で地平書房刊。

「土地に生まれたもの」[205]であり、「人間の社会的行動、即ち人と共に又人に対して、爲さるゝしぐさの一切を意味するもの」[206]であったため、民謡が歌われる目的と場所、歌い手の属性を大切にしたのである。

> 文字が普通人の使用に供せられなかつたのは、さう古い昔のことで無いが、その時代には聲より他の方法を以て、或る日の感動を保存することは出来なかったので、此人たちに取つてはウタは我々の文學よりも、更に何倍か大切なものであつた。その大切なものが今や世の中の變遷には手向かふこと能はずして、毎年三つ二つと早い足取りで、消えて隠れて歌はれなくならうとして居る。

柳田は、古来から日本庶民にあったウタとはその場、その時の社会的な活動と自分というものからの繋がりを当事者たち自身が表現したものとし、近代日本社会が移り変わる中で、生活の中で歌われる本来の民謡は衰退していく状況にあると憂いていた。さらに柳田は古くからあった地方の唄が中央に吸い取られていく「文化の中央集権とでも謂ふべきものが、最近は一層盛んになつて来た。」[207]と危惧を表していた 。

明治後期から新しく創作された民謡は区分けされて新民謡と呼ばれている。大正期には、北原白秋ら詩人たちによって地方にあった民謡の特質を現代に再生させようとする新民謡運動が盛んになっていた。新民謡は、郷土のイメージ、田舎の香りを、民謡の規格を利用して新しい歌謡ジャンルを創出し、従来の「民謡」であるかのような地方ソングとなる 。

大正デモクラシーの時代の中、「かなりや」など『赤い鳥』で誕生した童謡運動と並ぶ文化運動が新民謡で、昭和の初期、1920 年代半ばから 30 年代半ばに盛時を迎える。中山晋平、野口雨情、西條八十らによって作られた、地方宣伝のための新民謡が「地方小唄」とも呼ばれ全国で量産される。これらは、観光のための文化資源としての地方色を添えたローカル・アイデンティティとして、当時普及していたレコードやラジオによって全国に広まったのであった。

このような折、昭和 6 年（1931）4 月にビクターから、レコードが発売された西条八十作詞、中山晋平作曲の「秋田土崎湊小唄」は、 土崎の料理業組合と芸妓屋組合の依頼で作られた。西条らの作った土崎湊の唄は江戸の御座敷文化の唄であって、土崎を表現しきれていないとする金子は、この曲が

---

205 柳田国男「民謡覚書」（前掲書）12 頁。
206 柳田国男「前掲論文」（前掲書）15 頁。
207 柳田国男「民謡覚書」『定本 柳田国男全集第 17 巻』（筑摩書房、1969 年）101 頁。初版は 1940 年で創元社刊。

土崎みなとの唄とされることに不満があり、自ら作ったという。正確な時は不明であるが、「秋田港の唄」は昭和 14 年（1939）頃につくられ、金子の書いた戯曲中でも唄われている。金子の地方へのこだわりを伝える例である。歌詞は以下の通りである[208]。

秋田港の唄　　金子洋文作詞・作曲

ホーラホーサーノサー　エンヤラホー
エンヤホーラホー　サーノサー
エンヤラホー　エンヤー

1. 沖のかもめに　父（ﾄﾄ）さん聞けばョー
私しゃ立つ鳥　波に聞け

ホーラホーサーノサー　エンヤラホー
エンヤホーラホー　サーノサー
エンヤラホー　エンヤー

2. 遠くはなれて　母（ｶｶ）さん思ってョー
うらの浜なす　花が咲く

3. 今日の泊まりは　いずこの空だョー
風と波とで　日が暮れる

4. 男鹿の山だよ　港の浜だョー
春を迎える　にしん船

5. 雪が消えたよ　草履コの道だョー
町は春風　そよそよと

208 民謡の場合、歌詞が統一されていないことも多い。この唄も歌い手によって歌詞が変わるが、ここでは「秋田港の唄全国大会」しおりから引用した。

6.　あちらこちらに　嫁とり話ョー
　　おらが嫁御は　何処にいる

「ホーラホーサーノサー」 は舟漕ぎの櫓のリズムだといい、金子が、子供のころの七夕の時に歌った「ホーラホーサーノサー」というメロディーをくちずさんでいるうち、自然に曲想がまとまったものといわれる。筆者も耳にする機会があるが、毎年 4 月に土崎港町で開催される「秋田港の唄全国大会」には、全国から民謡の歌い手達が集まる、地元秋田はもとより今も広く愛唱されている民謡である。金子の文芸活動は多様な分野にわたっているが、その根底には自らを育んでくれた故郷秋田の音感、風物が裡にあり、秋田の現実が常に念頭にあった。金子が作ったこの新民謡には彼の中にしみ込んでいた櫓をこぎ出す音とリズムが掛け声となって現れ、厳しい冬が明けた春の港の様子を伝える詞には、海の厳しさと豊かさ、その自然と向き合って生きる人の思いが映し出されている。東京人の西条八十らのお座敷小唄風にはない趣きをもつ唄といえる。

この唄以外にも金子は小松平五郎作曲、石井漠振付けの「ハタハタ音頭」を作詞し、昭和 9 年（1934）に在京出身文化人の会である雷魚会で発表された。その前年には小説『雷魚』を書いている。昭和 31 年（1956）12 月の新橋演舞場で新派が金子の演出になる戯曲『鰰』を上演したが、劇中で「ハタハタ音頭」と「港の唄」が使われていた。雷が鳴って大荒れとなった初冬の海、産卵に接近する鰰は秋田の大衆魚であり、正月には鰰鮨にして神に供えた特別な魚であった。金子も鰰鮨やかやき鍋（大きな貝殻の鍋）と秋田の清酒（2 級酒）を口にするのを生涯楽しみとしていた。鰰は彼にとって味覚以上の秋田を伝える存在であり、それらを自らの作品に登場させて、ふるさと秋田を伝えていた。

第5節　最晩年の金子洋文と秋田

大正 10 年（1921）、プロレタリア文化運動の揺籃とされる雑誌『種蒔く人』が、日本海に面した地方の土崎港町から刊行された。同人達は、クラルテという反戦思想を伝え、社会主義に基づく世界国家形成を目指す動きを伝え、社会の様々な問題をとりあげ、批判と行動を行った。この雑誌は、日本の社会思想に新しい波をもたらした。その創刊以来の同人が金子であった。明治・大正・昭和を生きた彼が、戦争に向う日本にあって、どのように生き、何を考えていたのか、十分検証されたとは言い難いことは、序論で述べたとおりである。

明治の後期、東北地方の貧しい家に生まれた金子が、中央で活躍する人物たちとの接点を得ること

ができた背景は何だったのか。新しい思想や運動から何を得ていたのか。彼の生涯で変わったもの、変わらなかったものは何だったのかという主題から捉えてみた。90 才と長命だった彼の生涯は、近代から現代に生きた人物の生き方の一面を示す例といえる。

生地の経済条件の変化によって没落し、経済的に苦しかった家の出である金子は、積極的な働きの甲斐あって能力を認められ、東京の出版社で記事を書く職を得る。しかし、故郷、その地に住む人々の現実を思う気持ちを離すことはなかった。金子を育んだのは秋田の風土、人情であるが、彼の創作活動は、その風土と人情を作品として高め、表現していた。秋田という地方を作品にして全国に伝え、終生、自らの意志で故郷を大切に表現していた。

昭和 8 年（1923）創刊の県出身者の親睦誌、月刊『秋田』の編集者であった鷲尾よし子（1895-1979、旧名：京野世枝子）[209]との交友関係は長く、金子は鷲尾死去時には彼女の息子から雑誌の今後について相談を受けている。結果的にこの雑誌は、昭和 54 年（1979）9 月、44 巻 7 号の 420 号をもって最終号となった。参議院議員時代を含め鷲尾からの依頼に協力していた金子は、単に記事を書くというだけでなく、人をつなげる役割を果たしていたとみてとることができる。この雑誌『秋田』は、秋田県人をつなぐ役割や、秋田の文化を発信する役割を果たしていた。

また、彼は、長く社会主義や労働法を学ぶ労働大学の講師を務めていた。その機関誌『学ぶ』[210]巻頭言を書き続け、地方との関わりを終生大切にしていた。その地方とは、故郷の風物、生活環境、秋田に生きる人々、労働者農民であり、それらへの共感があった。「種蒔く人」顕彰会が催した 55 周年講演の講演会で、80 代になった金子は秋田の人々に次のように語っている。彼の考えが現れているので長くなるがここに紹介する。

> 秋田は特殊な県であります。文化の非常に高い県でもあります。その例として私は佐竹藩のことを挙げました。秋田藩主であった佐竹は、ご承知のように関ヶ原の戦いで徳川に与しないで水戸から左遷された藩であります。半分ぐらいに碌高が減らされました。これに似た所としては毛利藩が最も酷く、半分どころではなく十分の一まではいきませんがそれくらいです。徳川に迫害された県というものはそこから奇傑非常の人が生れている。毛利藩でいえば松下++（ママ）[211]、吉田松陰など偉たる(ママ)革命家が生まれている。秋田県からは平田篤胤、佐藤信渕（ママ）、安藤昌益という人々が生まれている。…（中略）… さてしからばなぜ小牧、今野、金子の三人は社会主義

209『青鞜』の影響をうけた京野は、秋田で初の婦人文芸誌『生長』を大正 5 年（1916）に創刊、金子の評論が掲載されている。
210 労働組合青年部、婦人部の月刊学習誌として 1960 年に労働大学出版センターから創刊された。
211 筆者:「松下村塾、吉田松陰など」かと思われるが未確認。講演の音声聴き取り不明か「++」と記している。

運動に一つになってやったか。これは世界でも珍らしい。小学校の同級生の三人の三人が一つの運動に加わってやったということは世界でもない。これは偶然じゃないだなア（ママ）。僕はやっぱり、水戸から秋田へ移された秋田藩士の血がまず三人に流れているんじゃないかと思う。僕は自分の父や母にはそういう血はないと思うけれど、小牧のお父さんはそういう血をもっていたと思う。彼のお父さんは奇傑非常の人であるかどうかわからんけれどもそれに近い人であったでしょうナ。彼のお父さんは日本海を見て、日本海は庭の池である。秋田の人々はこの日本海を大事にしなけりゃいけない。やがて日本海は太平洋にもの言う時がくる。この日本海から世界を見なけりゃならないと言った。彼は常に反骨の人であった。いつも反対派であった。正義の人であった。そういう奇傑非常の精神というものがお父さんにあったと思うんだ。そこから小牧というものが生まれて来たんだと思う[212]。

金子は自らの故郷を、父祖からの奇傑非常の血脈をもつ特別な地としていた。小牧近江の父で国会議員であり、土崎のために財を投げつくした近江谷栄次という尊敬する先達をとりあげ、金子に大きな影響を与えていたことを垣間みせている。

僕は、民謡も、青森や仙台のと違って、秋田の民謡は明るいとしょっちゅう言うんだけれども、この文化性が高いんですよ。秋田は、私は政治家というのはあんまり尊敬しないな。安藤和風なんかもそうだったよ　「魁」はある時は軍部と戦った新聞社だった。今は非常に穏健となりましたけれど、安藤和風さんが社長の時あたりは軍部と戦った新聞社でしたからね。やっぱりこういう秋田の血を我々が受けたおかげでだね、そこではじめて土崎港に第三インターナショナルの文化の旗が翻った。これは名誉と言っても良いと思うんだなあ。

こういうことを他の県へいってあまりしゃべるといやな顔をされる。長野県へいって僕がしゃべると皆んないやな顔をするんだよ。秋田にお株をとられたというんだなあ。そういう気持ちでしょう。僕らにはそんなケチな気持ちはないんですよ　やがて東京でやって全国の運動となった。

金子は、秋田の文化性によって『種蒔く人』、第三インターナショナルの文化に繋がったのだと、自らの考えを語っていた。ここで、政治ではなく文化に期待すると明言していた。政治を上に文化はその手段としたマルクス・レーニン主義のプロレタリア運動理論との距離をみせていた。

212　金子洋文「「種蒔く人」55 周年記念講演特集」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）11-12 頁。

僕は今まで、小牧君を語る時は、彼は第三インターナショナルとアンリ・バルビュスの“戦争と戦争する”を土産に持ってきた、とこう言ってきた。しかし同時に、小牧君はね、シャルル・ルイ・フィリップスと言う作家を持って来た。このことは我々仲間同志ではしょっちゅう話しているけれども、こういう集会では私はあんまり話したことはない。こないだの大妻女学校の時はじめて、我々はルイ・シャルル・フィリップスを再認識しなければならないと述べたんです。少なくとも我々のこれからの運動は平和の運動に、政治運動も経済運動も文化運動もすべて平和運動でなければならない。暴力革命でなく平和運動である。

フランスであれ、イタリーであれイギリスであれドイツであれ日本であれ、資本主義の一流の国では平和運動は可能である。前衛の運動も大事だが、平和運動を忘れちゃいけない。忘れると世界中みな堕落する。

政治・経済・文化の連携による平和運動に進むこととし、それを忘れると堕落するとの否定があった。資本主義を否定することなく、暴力革命を否定していた言葉は、注目に値する。この講演には小牧近江も出席していた。プロレタリア文化運動の目指す方向を総括した言葉ともとれる。さらに、日本海を挟んだ対岸の国との接し方が語られる。

（中略）…秋田は「種蒔き」運動があったということによって、世界にもっと大きく知られる日がきっとやってくると思うんです。そして日本海というものは、僕は、今や日本を救う海になると思うんだなあ。中国とソ連を無視しては、日本が存続できなくなる時が来る。戦争なんか絶対やめて仲良くなった方がいい。そうなれば、秋田港は燦然と輝くと私は確信している。これは近江谷のお父さんの口まねではないけれど、日本海はやっぱり我々の“箱庭の池”みたいなもんだから。もう少し気を大きくもって、世界と手を握り合って貿易を盛んにすることが、資源のない日本にとっては重大なことであると言うんだ[213]。

日清戦争、日露戦争、さらに第一次・第二次世界大戦を体験し、生き抜いてきた人物からの言葉と捉えるべきであろうか。金子は「飢えと戦争を防げない文化は真の文化ではない」と口にしていた。反戦思想、文化を大切にすることの意味を生涯主張していた金子の精神が伝わる言葉である。故郷を特別なものとする気持ち、文化を伝える仕事の大切さへの信念を、終生変わらず保ち続けていた。

---

213 金子洋文「「種蒔く人」55 周年記念講演特集」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）18-19 頁。

第6節　金子洋文資料

秋田県立図書館には、「種蒔く人」顕彰会が収集したプロレタリア文学関係の資料が[214]「種蒔く人文庫」として所蔵され、平成 4 年（1992）に『種蒔く人文庫目録』が刊行されている。平成 3 年（1991）4 月に秋田市立土崎図書館が移転改築する際、一緒に開設された秋田市立土崎図書館「種蒔く人」資料室に、顕彰会が所蔵していた資料―顕彰活動の記録と今野賢三がのこした資料が寄贈され、平成 13 年（2001）に『「種蒔く人資料室」目録』 が刊行されている。

平成 23 年（2011）10 月から 11 月にかけて神奈川近代文学館で開催された、林芙美子の「没後 60 年記念展　いま輝く林芙美子」では、林芙美子の未発表の児童文学作品の原稿が展示された。これは秋田県立図書館所蔵の真筆原稿である[215]。秋田県立図書館で公開している所蔵目録から神奈川近代文学館の学芸員が見出したものであり、展示にいたったものであった。「種蒔く人」顕彰会[216]が県立図書館に寄贈した資料の中には金子のもつ資料も多かったことから、『文芸戦線』編集の仕事をしていた金子の手元にあった原稿と推測され、プロレタリア文学に林芙美子が関わっていたこと、児童向けの作品を書いていた様子を伝える貴重な資料となっている。

昭和 18 年（1943）11 月の米軍機が東京上空に飛来するようになり、以来、空襲が激しくなる中で、金子家の一帯も直撃弾や機銃掃射が激しくなっていた。金子は庭の畠をつぶし防空壕を三か所作る。ひとつは家財道具を、ひとつは家族を、残りひとつは資料をまもるためのものであった。

小牧近江がのこした資料は、彼の遺族によってあきた文学資料館に託され整理、作業が進捗している。さらに、金子洋文が所蔵していた膨大な資料は、東京在住の遺族から平成 11 年（1999）から数年の年月をかけ秋田市立土崎図書館に寄贈された。

『種蒔く人』同人たちとその資料の保存については割合早い段階から意識されていたが、金子はその中心的存在であった。後に『文芸戦線』復刻を刊行する折にも、金子の資料が使用されている[217]。

金子亡き後の資料の移行と整理には、その容量の膨大さもあって、数年の作業を要するもので、遺族からの献身的な協力がなければ実現は不可能であった[218]。筆者にとって忘れられないエピソードがある。金子が臥していた折のこと、長きにわたって彼を支え続けてきた娘が「お父さん、私はこれか

---

214 『文芸戦線』編集をしていた金子洋文が所蔵していた資料と推測されている。

215 HPで公開されている秋田県立図書館所蔵目録データベースから神奈川近代文学館学芸員が発見、確認された生原稿。

216 種蒔く人顕彰会は、「種蒔く人」顕彰会、『種蒔く人』顕彰会、種蒔く人顕彰会など、混在して呼称されてきている。本章では、「種蒔く人」顕彰会を使用する。

217 祖父江昭二は「『文芸戦線』・『文戦』解説」『復刻版『文芸戦線』(後期) 別巻』(戦記復刻版刊行会、1983 年)で、「この復刻には金子洋文の持つ資料にもよった」と記している。

218 金子功子「竹藪の家」『「種蒔く人」の精神』(「種蒔く人」顕彰会、2005 年)に詳しい。

らなにをして生きたらいいんでしょうね。」と訊くと、うつらうつらとしていた金子は「そうだね、できることをすればいいんだよ。」と答えたという。金子の娘たちは、姉妹そろって金子と暮らし、家で母の介護をし、父の仕事を支えていた。劇場に向かう金子に付き添うことも多かったという。逝く者と遺される者としての会話とみることができないだろうか。金子はその生涯を現役の演劇人として送り、いつも送る側、のこされる側としてあった。その間、次の世代にいた伊藤永之介、政治活動や同人活動の同志たち、幼馴染の小牧を喪っている。娘たちの支えもあって、金子は 80 代を現役の演劇人として過ごし、90 才を迎える頃から体調を崩し家族に看取られながら冬を過ごし、自宅で息を引き取った。

この世から旅立った父が遺した言葉もあり、娘たちは忠実に自分たちが出来ることとして、資料の整理を行ったという。金子が終生大事に保管してきた資料、近代文学研究で評価高い金子洋文資料を、父の生前に秋田の図書館に寄贈していたこともあって、彼を育くみ、彼が終生愛した土崎という土地へ贈るための整理作業を進めることになった[219]。金子洋文資料の寄贈作業はこのようにして、始まったのであった。

土崎図書館に送られた資料が、受け入れられてからの諸作業を経て秋田市立土崎図書館から『金子洋文資料目録』として刊行されたのは、平成 19 年 (2007) のことである。金子の所蔵資料については、その存命時から多くの研究者達が知るところで、長く待たれていた目録であった。90 年の生涯を伝える金子の資料は、明治から昭和にかけて日本の近代化が大きく進み、文化芸術の表現、情報伝達の手段が大きな変化をとげた近代日本の様子を伝える貴重な証となっている。

219 金子功子氏談。当時、金子洋文の直筆原稿、書簡には古書店による値段がつけられていた。

第8章　結論

第8章　結論

第1節　本章の目的

本研究の目的は､プロレタリア文化運動の興隆に大きく寄与した金子洋文が遺した資料群を活用し、金子の生涯を俯瞰した後、金子の広範な創作活動の中から、農民文学、プロレタリア文学同人雑誌、演劇、俳句という分野に焦点をあて、彼の果たした役割を検証することとした。その際金子の活動に地方性があるという仮説をたて、これらの分野における地方との関わりを明らかにすることとした。

本章では、これらの結果をまとめ金子について明らかになったことを、改めて提示する。第 1 章から 7 章まで、金子洋文が携わった創作活動を分野ごとにわけ、その分野における金子がはたした役割の意義をとりあげた。金子がのこした原資料を含む文献調査をもとに金子の役割についての考察を行った。各章については次の通りである。

第2節　金子洋文について

第1章 序論

金子について概略を述べた後、金子の人格、能力形成に大きな影響を及ぼしているものとして、東北の港町、土崎の個性をとりあげる。当時、海外と関わり深い分野で活躍する人材が多く輩出し、進取の気性をもつこの町の個性を、情報環境という側面に着目しながら、その歴史的背景、住民文化に着目しつつ論じた。土崎小学校の同級生で、彼の盟友となった小牧近江もその中に含まれる。大正期の同人雑誌である『白樺』を読むことができる町の文化があった。

第2章 金子洋文と白樺派の人々―書簡を中心に―

母校の土崎小学校に代用教員として勤務していた時期、金子は文筆の道を志す。この時期の彼に影響を与えた雑誌が『白樺』と『第三帝国』であった。彼は両誌の関係者に積極的に接近して、自らの進路を切り拓いていた。まず、当時最も尖鋭な「民本主義」的立場を展開した雑誌『第三帝国』の地

方欄に投稿をし、やがて雑誌の主宰者のひとり、茅原華山の知遇を得て、東京での就職先を斡旋してもらうまでになった。その一方で、『白樺』の武者小路実篤へ自らが書き記した新聞を添え、手紙を送っている。茅原の関連した出版社に就職した直後に武者小路宅を訪問し、後に武者小路の新居に住み込むこととなった。武者小路以外の白樺派、柳宗悦、志賀直哉、有島武郎との交流を示す手紙には、従来見逃されてきた金子と彼等の近さがあった。

金子が小牧近江の伝えるクラルテという反戦思想を理解できる素地は、武者小路と白樺派との交友を間近にみて体感し醸成された。金子吉太郎から金子洋文となる過程でみせた積極的な人との関わりをとりあげた。

第3章 金子洋文と農民文学

『種蒔く人』土崎版における農村の暮らしを描いたものには、地方農村の窮状を書き著した畠山松治郎の小説「貧乏人の涙」と、金子によるロシアの貧農を現したチェーホフ作品「農人」の解説がある。両者を論じ、『種蒔く人』が東京に移った後も持ち続けた農村への目線について考察する。都会と地方、地方都市と農村の格差という現代にも通じる格差が生じた当時の農村の困窮の意味として秋田を例にとりあげた。

金子は『地獄』『赤い湖』など、農村を舞台に描いた作品がある。出世作となった『地獄』は、明るい未来をみることが出来ない農民たち主人公に描いた。文学作品として農民の暮らしをテーマに書ける者は少なかった当時、金子は『種蒔く人』の同人中、最も農民や農村の生活を描いた人であり、農民文学の先達のひとりであった。当時は農村に住み詳しくその実態を知る畠山松治郎という同人がおり、彼を通してみる農村は縁遠い世界ではなかった。後に畠山が運動から離脱し、プロレタリア運動の方針もあって、金子は農民文学から離れ、演劇で地方農村を描いていく。

第4章 金子洋文とプロレタリア文学雑誌

金子の社会主義運動は『種蒔く人』から始まる。ここで世界のプロレタリア文化運動の大きな流れを決定づけたロマン・ロランとアンリ・バルビュスとの議論が『種蒔く人』に紹介された。この論争がもつ意味と金子の目指したプロレタリア文化運動にもたらした影響について論じた。

本章では『文芸戦線』のすべての記事を網羅した掲載記事データベースを作成した。頁面積に置き換えた記事分量を集計し、金子に関わる記事と秋田地方に関わる記事について数値的な解析を試みた結果、金子と秋田関係の頻出度は一定の割合で存在していた。金子編集体制となって以降はその高さは顕著となっている。これは後期『文芸戦線』が、金子ら秋田の関係者によって大きく支え

られていたことを裏づけた。

第5章 金子洋文と俳句

金子が生涯を通じ親しんでいながら、特に注目されていなかった活動に俳句づくりがある。職業作家となる以前の投稿作品が地元新聞に多く見受けられ、戦後からのノートに記された俳句が数多く存在している。秋田地方、土崎という地は俳句が盛んな地であり、長じてからも親しみを持ち、周囲には久保田万太郎をはじめ俳人も数多いが、これはあくまで個人的な楽しみで、晩年まで公表されることはなかった。

長い期間発表される予定もなく書きためられていた金子の俳句は、晩年に句集『雄物川』として一冊の本として、秋田で刊行された。この章では遺されたノートから、金子の俳句との関わり深さを明らかにした。加えて昭和 10 年（1935)に、地元新聞である秋田魁新報紙上で、金子と地元の俳人が繰り広げた俳句論争をとりあげ、その影響について論じた。

第6章 金子洋文と演劇―演劇人として

『日本現代演劇史』（白水社）全 8 巻から、演劇関係者の登場の流れを数量化し、金子が小山内薫、土方与志、岸田国士、村山知義、久保田万太郎といった、日本の演劇史に名をのこすこれらの大物演出家たち準じた位置にあった。特定の劇団に所属していない金子だが、時代の変化に揺れる演劇界の流れの中にあって常に重用される立場にあったことを示している。

さらに早稲田大学演劇資料館の演劇上演記録データベース、秋田市立土崎図書館「種蒔く人」資料室資料、松竹大谷図書館所蔵資料など各種上演記録の中から金子が関与した上演作品を抽出し、金子洋文上演記録データベースを作成した。金子の書いた戯曲がもっとも上演されたのは昭和 4 年(1929)で、金子はその後、演出家、舞台監督といった仕事へ次第に移っていたこと、金子が浅草オペラ、新国劇、新派、歌舞伎といった新しい演劇活動の現場で第一線にかかわり続けていたこと、演劇界における証言者ともいえる位置にあったことが明らかになった。

金子の得意とした彼ならではの特性として、地方の色濃い作品表現がある。晩年の戯曲「雄物川」にいたっては、方言や民謡などを使用した金子の裡なる故郷の情景を表わしている。

第7章 金子洋文と故郷―地方性の存在

金子が秋田の文化にもたらした事例をとりあげる。昭和 43 年(1968) 上半期第 59 回芥川賞候補に秋田在住の同人誌作家、杉田瑞子がなった背景には、当時の芥川賞の選考委員であった石川達三に、杉

田を紹介していた金子の存在があった。文学以外にも、昭和 14 年(1939)頃に舞台演劇にも使用した新民謡「秋田港の唄」の作詞作曲など、文化面で秋田と中央をつなげる役目を果たしていた。

東京在住の金子であるが、従来のプロレタリア文学運動の人物という定義だけではとらえきれない、郷土と密着した作家として、多くの働きをしていたことが明らかになった。

第3節　まとめ

金子洋文は、『種蒔く人』創刊以来、プロレタリア文化運動の揺籃の時代から携わり、終生その活動と関わり続けていた人である。

金子を始めとする『種蒔く人』同人たちと、大正期の白樺派との関わりは、単に金子と武者小路実篤が師弟関係にあった個人的な繋がりというだけでない。金子は武者小路を社会主義者とみていたのである。少なくとも金子については、白樺派からの思想の影響は明らかであった。プロレタリア文化運動の思想の流れに白樺派からの影響をみることができる。

また、『種蒔く人』以来、プロレタリアのための文化運動に参加し、邁進し続けた金子は、この雑誌が伝えた初期クラルテ運動の思想論争を知る者であり、それを伝える側にあった。『種蒔く人』、『文芸戦線』にみられる読者欄には、初期プロレタリア文学運動以来、世界思潮に主眼をおいたプロレタリアの文化運動だけでなく、地方への目線が在り続けている。時に（秋田）帝国主義と揶揄されるほどであった[220]という『種蒔く人』編集には、小牧近江や今野賢三も関与していたが、『文芸戦線』編集[221]は、金子の影響力が大きかった。

本研究では金子の個人研究として彼の文化的な活動をとりまとめ、地方との繋がりが濃厚であることを明らかにした。

金子の作風は声高に革命を叫ぶのではなく、見た人に社会についてなにがしか感じさせるというものであった[222]。弱い立場の人々、働く人々、地方に寄り添いつつ、厳しい環境に住む底辺の貧しい人々の底上げを目指したプロレタリア文化芸術家としての信念が感じられる。

金子は中央で活躍したというだけでなく、秋田の人々にむかって新しい文化を伝え、秋田の後進作家が中央で活躍する支援をしていた。彼の創作活動には、地方への拘泥が濃厚であり、出身地秋田の

---

220 大和田茂「『種蒔く人』における＜地方＞－投稿欄を中心に」『社会運動と文芸雑誌―「種蒔く人」時代のメディア戦略―』(菁柿堂、2012 年)51-59 頁。

221 『文芸戦線』編集後記(山田清三郎)に、表紙絵の件で金子が担当の柳瀬正夢を叱責したことが記されている。

222 北条常久「金子洋文の戯曲と演劇活動」『種蒔く人研究-秋田の同人を中心として-』桜楓社、1992 年)197-216 頁中で、前田河広一郎の金子作品評を紹介している。「金子洋文小論」『新築地』11 巻 1 号(1929 年)とあるが未見。

様子も多く伝えられていた。創作活動の分野すべてで、秋田の風物や暮らす人たちを多くの人たちに伝える郷土作家としても活躍していたこととなる。単にプロレタリア文学作家としてだけでなく、裡なる秋田の情景を外にむかって表現し伝えていた郷土の芸術家でもあった。

大正 6 年（1917）秋に土崎での教員生活を切り上げて上京し、武者小路実篤の家に仮寓して以来、金子は長い年月、東京で暮らし、活動の場の多くは東京にあったが、故郷を忘れることはなかった。自身のもっていた資料を秋田に寄贈していただけでなく、秋田に文化の種を蒔き、地方と中央をつなぐ役割もはたしていた。

金子が生まれ育った秋田の土崎港町には、土崎港に関わる人の生き方をあらわす「港衆」という言葉がある。これは海に開けたこの土地特有の表現で、外へ出て行って外で稼いできて戻り、またしばらくして出ていくことを繰り返す人を意味する。地方によってその地を大切にした、その地に貢献したという言葉があるとすれば、土崎港町にとっての「港衆」はその言葉にふさわしく、金子は「港衆」であった。出郷者が己のルーツを保ち続けるには石川達三が述べた[223]とおり、繋がりを保つための努力も必要である。金子洋文は典型的な「港衆」として繋がりを保ち続けた人であった。彼の生き方を、同郷の後進劇作家の野口達二は、港に住むというだけではなく港に益をもたらす人を指すのが“港衆”だとした後、金子を以下のように評している。

> ひとりで文学・演劇の大海に漕ぎ出し、他人の力を借りずに他国で働きを見せ、港に戻っては文化のうるおいをもたらし、後輩にその刺激を与えるなど衆に分った港衆の中の“港衆”（「洋文さんと“港衆”」『みなと祭りのしおり』[224]より）

さらに金子は、その文化活動で地方と都会という空間をつないだだけでなく、大正・昭和と平成の今日という時間的な隔たりを埋める役割も果たしている。それは、彼が意識的に保存につとめた膨大な資料によって検証が可能となったものである。

都会に住む地方出身者である金子の活動の意義を見直すことは、生地と職業に縛られなくなった近・現代の人々の生き方をみることに繋がる。と同時に現在も進行する地方と中央の乖離という問題をあらためて考えさせるものであった。加えて、時間の経過で記憶が風化し、過去を知る人が次第にいなくなる中で、近・現代を生きた人々の記憶や記録といった情報をどのように将来につなげていくか、資料の保管と活用を考える上でも、金子が遺した資料は重要な事例であった。

---

223 石川達三「祝辞に代えて」『波瀾万丈』（宝蔵新舎出版部、1974 年）の巻頭。
224 野口達二「洋文さんと“港衆”」『みなと祭りのしおり』（土崎経済同友会、1984 年）10 頁。

第4節　今後の課題

種々の形態の情報形態で発生する現代社会においては、金子の時代とは比較にならない膨大なデータが日々生じており、記録媒体も従来の図書だけではなくなっている。金子が早い段階で自覚し、拘泥し保ち続けた資料を、今後その記録の積み重ねをどのように実施するのか。金子洋文という個人がその生涯を通じて保ち続けてきた資料は、時代の記憶が記録として残すことの意味と難しさを伝えている。残された資料は土地の記憶、時代の記憶を伝えるものである。現代社会の情報の変化はめざましく、ますますアーカイブを自覚した資料蓄積と活用が求められてきている。このような意味で金子の資料は、金子本人の生涯を伝えるだけに限らない。時代を伝えるものとして意義深いものとなっている。残念なことに、金子の政治的な活動の研究はまだ行われていない。彼がのこした資料の解析をすすめることで、政治と文化との関わりがみえる可能性がある。その活動を検証することはより大きな意味を伝える可能性をもつかもしれないが、原資料の解析がなかなか進捗しない状況もあり、金子の政治的活動についての研究は、いまだ不十分なままである。金子洋文研究の課題として、彼の政治活動を対象にした分析がのこされている。

謝辞

本研究を進めるにあたって多くの方々からご協力と励ましをいただきました。仕事と家庭、双方を手離さず、ここまで続けてこられたことはその方たちのおかげです。

土崎図書館に着任し、「種蒔く人」資料室内に並べられた山積みの箱、いっぱいに詰められた資料群の静かな迫力を思い出します。伝えるべき何かを守り伝えるという想いがこめられたものでした。この資料の意味を知り、それらを伝えなければという使命感がきっかけで始まった研究でした。

柏倉康夫先生には、放送大学大学院入学時からずっと励ましていただきました。先生との出会いとご指導がなければ、この研究をここまで進めてくることはなかったと思います。闊達で前向きな姿勢のおかげで、怖じずに進むことの意義深さを知りました。本稿作成にあたって、大野哲弥氏、諏訪敏幸氏、長澤直子氏らゼミの先輩から、多忙な折にもかかわらずお時間を割いて、多くの有益な示唆、ご支援を頂きました。

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の諸先生には、いろいろとご配慮とご指導を賜りました。不出来な上に時間に限りがある身を、これまで見放さずに導いてくださったことに、ただ感謝を申し上げるばかりです。殊に指導教授の綿抜豊昭先生には、当初の研究計画どおりには進まず試行錯誤していた、多忙極まりない先生にいろいろとご相談してきました。研究の数々の迷いに適切なご指導をいただきました。どれだけ感謝してもたりません。緩急取り混ぜた態度を以て、研究対象の本質を見据えて離さない先生の研究姿勢こそ、最大の教えであったように思います。後藤嘉宏先生、溝上智恵子先生にもお世話になりました。また、ご多忙のところ、審査の労を取ってくださいました諸先生にもお手数をおかけしました。新しい知見を知ることの楽しみがありました。おかげで研究の醍醐味を垣間見ることが出来たと思います。

北条常久先生、須田久美先生をはじめ、多くの諸先輩、研究者の方たちには、忌憚ない意見を含め多くの示唆をいただいきましたこと、心から感謝しております。先生達が積んでくださった成果があってのことと感じる機会が多くございました。御恩はその上に新しい研究を積み重ね、次に伝えることでお返ししたいと存じます。今後ともどうかよろしく御願いします。

秋田市立図書館司書の椎川順子さんには本当にお世話になりました。資料も含め様々な問題がありました。次々とハードルが上がるたびにくれた叱咤激励と援助の手にどれだけ励まされたかわかりません。

そして子供たちへ。さまざまなことをくぐり抜けてここまで来れたのも、貴方たちの存在と、有形無形の応援があったからです。ここに心から感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとう。

これまでの長い積み重ね作業には、多くの方々からのご支援があったからこそ出来た、という気持ちで一杯です。自分の力だけでここまで辿り着くことはできませんでした。

ともかく、ひとまず形にすることが出来たという喜びと達成感に、現在はただ感無量です。

2014 年　感謝とともに

天雲成津子

文献リスト

論文

1)　秋田魁新報社『マイクロ・フィルム版 秋田魁新報』(秋田魁新報社、1935 年 1 月 1 日－同年 2 月末日)

2) 李修京「1920 年代初期の日本における知識人の動向の一考察－小牧近江の生い立ちと『種蒔く人』期までにみる知識人としての役割－」(上)『言語文化研究』11 巻 3 号（立命館大学国際言語文化研究所、1999 年）129-140 頁／「前同」(下)『前同』11 巻 4 号（前同、1999 年）179-190 頁。

3)　李修京「韓国における日本近代文学運動の評価考察―『種蒔く人』の評価」『山口県立大学国際文化学部紀要』8 号（山口県立大学国際文化学部、2002 年）1-12 頁。

4) 井上隆明「江戸・明治　秋田印刷文化史」『印刷の歴史』秋田県印刷工業組合ＨＰ <http://www.chuokai-akita.or.jp/akitainkoso/history/index.html>2013 年 5 月 15 日閲覧。

5)　伊多波英夫「雑誌『第三帝国』細目（二）－創刊号から 19 号まで－」『秋田近代文芸史研究』3 号（秋田近代文芸史研究会、1973 年）41-61 頁。

6)　近江谷左馬之介「『種蒔く人』と国際性」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）36-41 頁。

7)　小栗一雄（福岡県知事）作 「要視察人関係雑纂／本邦人ノ部 第二巻」(外務省外交史料館所蔵資料、1933 年 7 月 4 日)
＜JACAR（アジア歴史資料センター）:Ref B04013106100＞ 2012 年 11 月 1 日閲覧。

8)　小田切秀雄「現代文学の源流－「種蒔く人」の時代とその意義」『文学』1962 年 10 月号、(岩波書店、1962 年）55-59 頁。

9)　小田切秀雄「＜特集･『種蒔く人』の再検討＞『種蒔く人』の現代的意義」『所報』6 号（日本近代文学研究所、1962 年 7 月）1-6 頁。

10)　小野一二「遣りきれない」『文芸秋田』24 号（文芸秋田社、1975 年 7 月）8 頁。

11)　小野正人「瑞子さんのこと」『文芸秋田』24 号（文芸秋田社、1975 年 7 月）14 頁。

12)　勝部眞人「明治・大正期における農業技術の革新と農民―広島・秋田両県の比較から―」『広島大学文学部紀要』57 巻特集号 1（広島大学文学部、1997 年）1-100 頁。

13)　金子洋文他「『文芸戦線』をめぐって」『唯物史観』15 号（十月社、1975 年）17-42 頁。

14)　金子洋文「『種蒔く人』55 周年記念講演会特集　金子洋文」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）11-19 頁。

15)　金子洋文、尾崎宏次、早川清「金子洋文氏に聞く」『悲劇喜劇』31 巻 7 号（早川書房、1978 年）22-43 頁。

16)　金子洋文「『嬰児殺し』と『同志の人々』」『悲劇喜劇』33 巻 7 号（早川書房、1980 年）8-9 頁。

17)　金子洋文「わが若き日々-2- 『種蒔く人』発刊とインターナショナル」『月刊社会党 』327 号（日本社会党中央本部機関紙局、1983 年）210-218 頁。

18)　金子洋文「わが若き日々-3- 関東大震災と「種蒔き雑記」」『月刊社会党』328 号（日本社会党中央本部機関紙局、1983 年）216-224 頁。

19)　金子洋文「わが若き日々-4- 文戦劇場の新潟公演」『月刊社会党』329 号（日本社会党中央本部機関紙局、1983 年）191-198 頁。

20)　金子洋文「わが若き日々-5- 小牧近江の「異国の戦争」」『月刊社会党』330 号（日本社会党中央本部機関紙局、1983 年）182-189 頁。

21)　金子洋文「わが若き日々-6 完- プロレタリア大学と政治運動」『月刊社会党』 331 号（日本社会党中央本部機関紙局、1983 年）204-211 頁。

22)　「北東北学構築基礎調査事業報告書 ―北東北学の構築を目指して―平成 16 年 3 月北東北学検討委員会－」（『北東北学検討委員会『北東北学構築基礎調査事業報告書』2004』）（秋田県、2004 年）22 頁。＜http://www.pref.akita.jp/tyosei/kitatouhokugaku/houkokusho.pdf＞ 2013 年 7 月 1 日閲覧。

23)　熊木哲「金子洋文―「種蒔く人」創刊以前について―」『九州大谷研究紀要』8 号（九州大谷学会、1981 年）37-60 頁。

24)　熊木哲「金子洋文の思想形成について―＜電営舎時代＞から＜日本評論時代＞まで―《附》金子洋文著作目録」『中央大学大学院論究　文学研究家篇』10 巻 1 号（中央大学大学院生研究機関誌編集委員会、1978 年）29-42 頁。

25)　熊木哲「金子洋文「外務省の一室」をめぐって―《附》金子洋文著作目録稿（大正九年迄）」『九州大谷研究紀要』9 号（九州大谷学会、1983 年）　28-42 頁。

26)　向坂逸郎、金子洋文、小牧近江他「『文芸戦線』をめぐって」『唯物史観』15 号（十月社、1957 年）17-42 頁。

27)　紅野敏郎「『生ける武者小路實篤』のこと」日本現代文学全集第 47 巻『武者小路実篤集』月報 22 号（講談社、1982 年）5-7 頁。

28)　小牧近江・金子洋文・今野賢三・佐々木孝丸・村松正俊・松本弘二・渡辺順三・内藤辰雄「＜特集・種蒔く人の再検討＞思い出」『所報』6 号（日本近代文学研究所、1962 年）20-27 頁。

29)　小牧近江「『種蒔く人』55 周年記念講演会特集　小牧近江」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）6-10 頁。

30)　小牧近江「金子洋文と私」『悲劇喜劇』31 巻 7 号（早川書房、1978 年）6-7 頁。

31)　沢井範夫「杉田瑞子 その人と作品」『秋田の文芸と風土』（無明舎出版、1999 年）215-220 頁。

32)　渋谷鉄五郎「幕洗川・太刀洗川の流痕と流域付近の史跡」『史談』75 号（土崎史談会、2005 年）16 頁。

33)　須田久美「金子洋文の〈眼〉－『種蒔く人』のころ－」『日本文学研究』28 号（大東文化大学日本文学会、1989 年 2 月）161-170 頁。

34)　須田久美「金子洋文と茅原華山および,武者小路実篤に関する一考察」『日本文学研究』33 号（大東文化大学日本文学会、 1994 年 1 月）75-83 頁。

35)　須田久美「秋田在住期間・金子洋文著作目録稿」『日本文学研究』34 号（大東文化大学日本文学会、1995 年）79-85 頁。

36)　須田久美「有島武郎と『種蒔く人』」『有島武郎研究会』9 号（有島武郎研究会、2006 年）21-31 頁。

37)　高見順「＜特集･種蒔く人の再検討＞「種蒔く人」と私の青春」『所報』6 号（日本近代文学研究所、1962 年 7 月）7-12 頁。

38)　照井日出喜「彼岸の築地小劇場（序）－大正デモクラシーから十五年戦争にいたる新劇運動－」『人間科學研究』6 号（北見工業大学、2010 年 3 月）13-52 頁。
〈www.lib.kitami-it.ac.jp/book/humanscience/vol_6_2.pdf.〉2012 年 11 月 15 日閲覧。

39)　内藤由直「犬田卯「開墾」の普通選挙批判－プロレタリア文学運動の方向転換に対する半措定－」『立命館言語文化研究』23 巻 3 号（立命館大学国際言語文化研究所、2012 年）5-19 頁。

40)　中野重治「＜特集･種蒔く人の再検討＞「種蒔く人」の人びとへ感謝」『所報』6 号（日本近代文学研究所、1962 年）13-15 頁。

41)　野口達二「洋文さんと“港衆”」『みなと祭りのしおり』13 号（土崎経済同友会、1984 年）9-10 頁。

42)　濱千代早由美「民謡とメディア―新民謡運動を経た伊勢音頭をめぐって― 」『哲學』128 号（三田哲学會、2012 年）259-284 頁。

43)　平野謙「＜特集･種蒔く人の再検討＞「種蒔く人」の記念のために」『所報』6 号（日本近代文学研究所、1962 年）16-17 頁。

44)　分銅惇作「金子洋文その人と文学－『種蒔く人』55 年記念講演会特集Ⅱ」『雑草』創刊号（雑草舎、1977 年）25-35 頁。

45)　分銅惇作「「種蒔く人」と金子洋文」『悲劇喜劇』31 巻 7 号（早川書房、1978 年 7 月）8-16 頁。

46)　北条常久「金子洋文「地獄」自筆原稿をめぐって」『日本近代文学』28 集（日本近代文学会、1981 年）初出未見、『「種蒔く人』研究－土崎の同人を中心に』（桜楓社、1992 年）160-180 頁。

47)　北条常久「＜論文＞金子洋文の文学的出発」『聖霊女子短期大学紀要』17 号(聖霊女子短期大学、1989 年)107-115 頁。

48)　北条常久「＜論文＞金子洋文の「古川町モノ」」『聖霊女子短期大学紀要』18 号、(聖霊女子短期大学、1990 年)72-79 頁。

49)　北条常久「「種蒔く人」の同人畠山松治郎と近江谷友治」『文芸研究』128 号（日本文芸研究会、1991 年）71-80 頁。

50)　北条常久「金子洋文の戯曲と演劇活動」『日本文芸思潮論』（桜楓社、1991 年初出は未見）同論文『種蒔く人研究―土崎の同人を中心に―』（桜楓社、1992 年）197-216 頁。

51)　北条常久「新資料 小牧近江から犬田卯への手紙と『日本村治派同盟宣言並に綱領草案』―農民文学運動史のなかで―」『国文学 解釈と教材の研究』45 巻 13 号（662 号）（学燈社、2000 年）34-41 頁。

52)　北条常久「『種蒔く人』の「土崎版」と伊藤永之介」『社会文学』 19 号（日本社会文学会、2003 年）90-98 頁。

53)　水谷悟「雑誌『第三帝国』と茅原華山」メディア史研究会編『メディア史研究』11 号（ゆまに書房、2001 年）56-76 頁。

54)　水谷悟「茅原華山の西洋経験 」『史境』44 号（歴史人類学会、2002 年）24-39 頁。

55)　水谷悟「雑誌『第三帝国』と金子洋文　－「種蒔く人」の思想形成」『年報日本史叢』（筑波大学歴史・人類学系 編/筑波大学歴史・人類学系、 2002 年）25-43 頁。

56)　柳田國男「民謡の今と昔」『定本柳田國男集 第十七巻』（筑摩書房、1969 年）249-309 頁。

57)　柳田國男「民謡の覚書」『定本柳田國男集 第十七巻』（筑摩書房、1969 年）1-245 頁。

58)　山口和夫「明治十年代の職業別階層別人口構成」『北海道大學　經濟學研究』13 号（北海道大学經濟學部、1957 年）35-54 頁。

59)　ロマン・ロラン著、宮本正清訳「戦いを超えて」『ロマン・ロラン全集 18 エセーⅠ』(みすず書房、1982 年）3-106 頁。

60)　ロマン・ロラン著、山口三夫訳「先駆者たち」『同前』107-309 頁。

61)　ロマン・ロラン著、新村猛・山口三夫訳「闘争の 15 年（1919-1934)」『同前』311-546 頁。

62)　早稲田大学 演劇資料館「演劇上演記録データベース」2013 年 8 月 1 日閲覧。

図書

1)　秋田近代史研究会編『近代秋田の歴史と民衆』（秋田近代史研究会、1969 年）

2)　秋田近代文芸史研究会編『秋田文芸人名録稿』（みしま書房、1972 年）

3)　秋田県編『秋田縣史　県治部第二冊　教育篇』（秋田県、1917 年）

4)　秋田県編『秋田県史　資料 大正昭和篇』（秋田県、1962 年）

5)　秋田県立図書館『秋田県立秋田図書館沿革誌』（秋田県立図書館、1971 年）

6)　秋田県立秋田図書館編『秋田県立秋田図書館所蔵種蒔く人文庫目録　付・今野文庫目録』（秋田県立秋田図書館、1992 年）

7)　秋田県立図書館『100 年のあゆみ』（秋田県立図書館、2000 年）

8)　秋田市編『秋田市史　近代資料編』（秋田市、2000 年）

9)　秋田市土崎編『土崎港町史』（秋田市役所土崎出張所、1942 年）

10)　秋田市立土崎図書館編『秋田市立土崎図書館沿革誌』（秋田市立土崎図書館、1962 年）

11)　秋田市立土崎図書館編『秋田市立土崎図書館所蔵「種蒔く人資料室」目録』（秋田市立土崎図書館、2001 年）

12)　秋田市立土崎図書館編『秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料目録」』（秋田市立土崎図書館、2007 年）

13)　足達矩水他著『秋田俳諧史』（秋田俳文学の会、1969 年）

14)　安斎育郎編『クラルテ運動と『種蒔く人』－反戦文学運動″クラルテ″の日本と朝鮮での展開』（御茶の水書房、2000 年）

15)　石田玲水『土崎築港・点灯の恩人』（みなと（土崎）文人展企画同人、2001 年）

16)　伊多波英夫『銀月・有美と周辺』（秋田近代文芸史研究会、1979 年）

17)　伊多波英夫『安成貞雄を祖先とす―ドキュメント・安成家の兄妹』（無明舎出版、2005 年）

18)　犬田卯 著,小田切秀雄 編『日本農民文学史』（農山漁村文化協会、1958 年）

19)　井上隆明『新編　秋田の今と昔』（東洋書院、1994 年）

20)　井上隆明編『秋田の明治文学史―〈文人儒者〉の変容と終焉―』（東洋書院、1996 年）

21)　井上隆明編『秋田近代文芸年誌』（秋田ほんこの会、2002 年）

22)　今野賢三編『土崎発達史』（土崎発達史刊行会、 1935 年）

23)　今野賢三『先駆者　近江谷友治伝［附：畠山松治郎伝］』（近江谷友治伝記刊行実行委員会、1967 年）

24)　今野賢三著、佐々木久春編『花塵録「種蒔く人」今野賢三青春日記』（無明舎出版、1982 年）
25)　内山惣一郎『浅草オペラの生活』（雄山閣、1967 年）
26)　浦雅春『チェーホフ』（岩波新書）（岩波書店、2004 年）
27)　浦山政雄・前田慎一・石川潤二郎編『日本演劇史』（桜楓社、1976 年）
28)　大笹吉雄『日本現代演劇史』「明治・大正篇」、「大正・昭和篇」、「昭和戦前篇」、「昭和戦中篇Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「昭和戦後篇Ⅰ・Ⅱ」全八巻（白水社、1985～2001 年）
29)　大地進『黎明の群像－苛烈に生きた「種蒔く人」の同人たち－』（秋田魁新報社、2002 年）
30)　大和田茂『社会運動と文芸雑誌―「種蒔く人」時代のメディア戦略―』（菁柿堂、2012 年）
31)　小田切秀雄編『「種蒔く人」復刻版』（日本近代文学研究所、1961 年）
32)　小田切秀雄編『文芸戦線　第１巻第１号～第５巻第５号（大正１３年６月～昭和３年５月）復刻版』（日本近代文学館、1968 年）
33)　小田切秀雄『昭和文学の成立』（勁草書房、1965 年）
34)　小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年』（上）（下）（集英社、1988 年）
35)　角館歴史村青柳家編『図誌新聞創刊の歴史付・秋田県における新聞の興亡』（角館歴史村青柳家、1990 年）
36)　金子洋文『生ける武者小路実篤』（近代作家研究叢書）（日本図書センター、1993 年）
37)　金子洋文『雄物川』（金子洋文米寿記念刊行会、1918 年）
38)　金子洋文『金子洋文作品集（一）、（二）』（筑摩書房、1976 年）
39)　金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、1984 年）
40)　金子洋文〔著〕、須田久美編『金子洋文短篇小説選』（冬至書房、2009 年）
41)　河竹繁俊『日本演劇全史』（岩波書店、1959 年）
42)　河東碧梧桐『三千里』（下）（講談社、1973 年）
43)　楠山正雄『近代劇十二講』（新潮社、1922 年）
44)　茅原健『茅原華山と同時代人』（不二出版、1985 年）
45)　茅原健『民本主義の論客　茅原華山伝』（不二出版、2004 年）
46)　栗原幸夫『プロレタリアとその時代（増補版）』（インパクト出版会、2004 年）
47)　紅野敏郎『文学史の園 1910 年代 』（青英舎、1980 年）
48)　小島政二郎『俳句の天才－久保田万太郎』（弥生書房、1997 年）
49)　小牧近江『異国の戦争』（日本評論社、1930 年。 かまくら春秋社、1980 年）
50)　小牧近江『ある現代史～“種蒔く人”前後～』（法政大学出版局、1965 年）

51)　小牧近江『種蒔くひとびと』（かまくら春秋社、1978 年）
52)　佐藤卓己『言論統制―情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中公新書）（中央公論社、2004 年）
53)　佐藤卓己『現代メディア史』（岩波テキストブックス）（岩波書店、1998 年）
54)　須田久美『金子洋文と『種蒔く人』－文学・思想・秋田』（冬至書房、2009 年）
55)　戦旗復刻版刊行会編『文芸戦線　後期Ⅰ（1）～（6）復刻版』　（戦旗復刻版刊行会、1983 年）
56)　戦旗復刻版刊行会編『文芸戦線　後期Ⅱ（全）復刻版』（戦旗復刻版刊行会、1983 年）
57)　戦旗復刻版刊行会編『文芸戦線　後期Ⅲ（改題『文戦』）復刻版』（戦旗復刻版刊行会、1983 年）
58)　千田是也『もうひとつの新劇史』（筑摩書房、1975 年）
59)　祖父江昭二『二〇世紀文学の黎明期「種蒔く人」前後』（新日本出版社、1993 年）
60)　高根正昭『日本の政治エリート―近代化と数量分析』（中公新書 429）（中央公論新社、1976 年）
61)　高橋秀晴『七つの心象　近代作家とふるさと秋田』（秋田魁新報社、2006 年）
62)　種蒔く人顕彰会編　『「種蒔く人」のまいた種』（種蒔く人顕彰会、1981 年）
63)　「種蒔く人」の精神編集委員会編『「種蒔く人」の精神―発祥地　秋田からの伝言』（「種蒔く人」顕彰会、2005 年）
64)　『「種蒔く人」の潮流』刊行委員会編『「種蒔く人」の潮流　世界主義・平和の文学』（文治堂書店、1999 年）
65)　「種蒔く人」七十年記念誌編集委員会〔編〕『「種蒔く人」七十年記念誌』（「種蒔く人」七十年記念事業実行七十年記念事業実行委員会、1993 年）
66)　「種蒔く人」の精神編集委員会編『「種蒔く人」の精神　発祥地秋田からの伝言』（種蒔く人顕彰会、2005 年）
67)　『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会編『フロンティアの文学　雑誌『種蒔く人』の再検討』（論創社、2005 年）
68)　千葉三郎『「俳星」明治版の軌跡』（北門文学会、2002 年）
69)　土崎図書館創立 100 周年記念事業実行委員会編『土崎図書館百年史　秋田市立土崎図書館創立百周年記念誌』（秋田市立土崎図書館、2002 年）
70)　永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、2004 年）
71)　永嶺重敏『＜読書国民＞の誕生－明治 30 年代の活字メディアと読書文化』（日本エディタースクール出版部、2004 年）
72)　成田隆一『「故郷」という物語－都市空間の歴史学－』（吉川弘文館、1998 年）
73)　『日露戦役勲績栄誉録』（出版同志会、1908 年）

74)　野淵敏・雨宮正衛『「種蒔く人」の形成と問題性―小牧近江氏に聞く―　秋田県大正文芸史の研究』（秋田文学社、1967 年）
75)　野添憲治『労農運動に生きるー秋田の先覚者たちー』（能代文化出版社、2001 年）
76)　林尚男『冬の時代の文学　秋水から『種蒔く人』へ』（有精堂、1982 年）
77)　樋口十一『風雲児・澤田正二郎』（青育舎、1984 年）
78)　藤田富士男・大和田茂『評伝平沢計七』（恒文社、1996 年）
79)　藤原弘編『江戸時代秋田の俳人たち』（加賀谷書店、1966 年）
80)　ベルナール・デュシャトレ著、村上光彦訳『ロマン・ロラン伝（1866-1944）』（みすず書房、2011 年）
81)　北条常久『『種蒔く人』研究　秋田の同人を中心として』（桜楓社、1992 年）
82)　北条常久『種蒔く人　小牧近江の青春』（筑摩書房、1995 年）
83)　北条常久『種蒔く人研究ー秋田の同人を中心として』（桜楓社、1992 年）
84)　前田愛『近代読者の成立』（岩波現代文庫　文芸）（岩波書店、2001 年）
85)　松本克平『新劇の山脈』（朝日書林、1991 年）
86)　みなと（土崎）文人展企画同人編『近江谷井堂』（みなと（土崎）文人展企画同人、2001 年）
87)　武者小路実篤『武者小路実篤全集第 5 巻』（小学館、1988 年）
88)　村山古郷『明治俳壇史』（角川書店、1979 年）
89)　村山古郷『大正俳壇史』（角川書店、1980 年）
90)　村山古郷『昭和俳壇史』（角川書店、1985 年）
91)　山本安英『女優という仕事』（岩波書店、1992 年）
92)　山本安英『歩いてきた道』（未来社、1987 年）
93)　湯地朝雄『ナップ以前のプロレタリア文学運動『種蒔く人』『文芸戦線』の時代』（小川町企画、1997 年）
94)　吉田謙吉『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と―』（八重岳書房、1971 年）
95)　渡邊一民『岸田國士論』（岩波書店、1982 年）
96)　渡部誠一郎『橋本宗彦・冨治―父と子のひたむきな生涯』（先覚シリーズ①あきたさきがけブック）（秋田魁新報社、1993 年）

全研究業績のリスト

① 査読制度のある学術雑誌に掲載の論文

(1) 天雲成津子,「畠山松治郎が描いた農村―『種蒔く人』と秋田―」, 社会文学, No.32, 2010, pp. 123 -131.

(2) 天雲成津子,「金子洋文の俳句」, 短詩文化研究, No.4, 2011, pp.18-22.

(3) 天雲成津子, 綿抜豊昭,「金子洋文と藤田紫橋との俳句論争について」, 図書館情報メディア研究, vol.9, No.2, 2011, pp.15-21.

(4) 天雲成津子,「100 年前の地方都市におけるコミュニケーション環境　ー秋田土崎港町とその住民にみるー」, 情報化社会・メディア研究, Vol.7, 2011, pp.17-28.

(5) 天雲成津子,「『種蒔く人』同人金子洋文と白樺派―金子洋文資料から―」, 社会文学, No.35, 2012, pp.53-61.

(6) 天雲成津子,「文学館にみる「地方」」, 情報化社会・メディア研究, Vol.10, 2013, pp.17-28.

② 著書

(1) 天雲成津子,「第 6 章　暮らしの中にある図書館とはー秋田県の図書館の高齢者サービス」pp. 101-114, 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿抜豊昭編著, 高齢社会につなぐ図書館の役割 ―高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み, 学文社, 2012, 168p.

③ その他

(1) 天雲成津子,「雑誌『種蒔く人』にみる情報・思想の拡がり：土崎版と同人を中心に」, 情報化社会・メディア研究, Vol. 5, 2008, pp.81-90.

(2) 天雲成津子,「雑誌『種蒔く人』と反戦運動クラルテ、そのつながりについて」, 秋田風土文学, No.14, 2009, pp. 34-44.

(3) 天雲成津子,「「種蒔く人」と白樺派」, 秋田魁新報, 2012 年 10 月 18 日, 文化欄.

(4) 天雲成津子,「『種蒔く人』同人が表現した農村と農民」, 日本社会文学会 2009 年全国大会, 2009 年 10 月 3 日, 口頭発表。

(5) 天雲成津子,「土崎からの芥川賞候補作家　杉田瑞子」, 秋田風土文学会平成 25 年度総会研修会, 2013 年 2 月 15 日, 口頭発表。

（表5）『文芸戦線』目録内容一覧

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
	1924年6月号	**大正１３年６月創刊号**								
1	**(第1巻第1号)**	文藝戦線同人漫像（＊漫画）		柳瀬正夢	4	1				
2	**6月10日発行**	「文藝戦線」以前―「種蒔き社」解散前後―（＊評論）		青野季吉	5-7	3				
3		社会主義的文芸の諸特徴（＊評論）		佐野袈裟美	8-10	3				
4		文藝戦線社同人及綱領規約　（＊注　「綱領」一、我等は無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ。一、無産階級解放運動に於ける各個人の思想及行動は自由である。」同人―今野賢三、金子洋文、中西伊之助、武藤直治、村松正俊、柳瀬正夢、前田河広一郎、松本弘二、小牧近江、佐野袈裟美、佐々木孝丸、青野季吉、平林初之輔）			11	1	○		1	
5		汽笛（＊小説）		今野賢三	12-23	12		○		12
6		旅鴉（＊詩）		田辺若男	24-25	2				
7		登場（＊随筆）		金子洋文	26-27	2	○		2	
8		南島小話（＊随筆）		武藤直治	28-31	3.5				
9		小牧近江再びフランスへ（＊記事と香取丸からの第一信）			31	0.5		○		0.5
10		批評		労働運動諸問題（伊之助）　労働代表と福田博士（伊之助）　広一郎の「快楽師の群」（伊之助）　板挟みの日本（袈裟美）　美術挟時事（弘二）　「一人生記録を読む」―中西伊之助作―（洋文）　ストリンドベルグ女優―先駆座の試演について―（洋文）　新劇協会を観る（洋文）	32-42	11	○		11	
11		奈落（＊戯曲一幕）		前田河広一郎	43-54	12				
12		インタアナショナル　　レーニン―理論家としてのレーニンについて―		ア・タールハイマア	55-57	3				
13		戦線		突進の武器（賢三）　腐れよ文壇（三尺）　菊池君に一言（中西伊之助）　プロ・デカ運動（老ウエートレス）　平沢君の「一つの先駆」（中西伊之助）　地震計（XYZ）　金星堂から出る創作集「鷗」のための後期（金子洋文）	58-61	4	○		4	
14		赤箒―三つの個体―（＊戯評）		(*今野賢三)	62	1		○		1
15		労働祭（＊感想）			表紙4	0.3				
16		編輯後記			表紙4	0.3	○		0.3	
計					16点	59.6	5	3	18.3	13.5
	1924年7月号	**大正１３年７月号**								
1	**(第1巻第2号)**	グロッスによりて構成せるブルジョアの相貌（＊漫画）		柳瀬正夢	3	1				
2	**7月1日発行**	蘇らぬ朝（＊戯曲四幕）		武藤直治	4 － 15	12				
3		新作家論（一）（＊評論、「マドロスの群」の作家、賢三の芸術、「御身」の作者）		伊藤永之介	16 － 21	6		○		6
4		鐘、地に叛く群（＊詩）		伊輪郎	22	1				
5		鎖（＊詩）		田辺若男	23	0.3				
6		若松不知火の死（＊詩）		金子洋文	23	0.7	○		0.7	
7		日向葵はたかく僕等の頭上に光る、現実は斯く僕等にもの語る（＊詩）		越後谷隆二	24	1		○		1
8		赤箒		広一郎	25	1				
9		南京虫と哲学者（＊読物、「有土比良博士伝」中の一節）		佐々木孝丸	26 － 30	5				
10		戦線		赤煉化(ママ)の家から（一）（喬木康）　青啖（元職人）　空腹（＊詩―児玉勉悟）　津田先生（XYZ）　曲光（井東憲）　総同盟の極右傾（高橋光吉）　焦燥（＊詩―早川生）　河原田某（広一郎）　小説家のタワ言（××××）　無産者の児童教育論（MN）　借間の條々（孫虚庵）　拾った手帳の中に（流木星）　地震計（XYZ）　流るゝもの（星再）　時計雑感（三川秀吉）	31 － 37	7				
11		批評		美術時言―仏蘭西現代美術展―（＊未完　弘二）　菊池寛の陰謀―社会主義研究創刊号―（広一郎）　「蒼ざめたる馬」を読んで（袈裟美）　山内封介「レニン」（青野）　洋文の創作集「かもめ」の出版（賢三）　「海戦」―築地小劇場の「実験」―（青野）　築地小劇場祝讃（洋文）	(38-48)	3	○		3	
12		朝顔を作る男（＊小説）		中西伊之助	49 － 54	6				
13		聾人（＊文壇時評）			55	1				
14		編輯後記（洋文）		(洋文)=金子洋文	表紙4	0.3	○		0.3	
計					14点	45.3	3	2	4	7
	1924年8月号	**大正１３年８月号**								
1	**(第1巻第3号)**	人類的立場と階級的立場（＊評論）		青野季吉	4 － 8	5				
2	**8月1日発行**	漫画			9,17,25,3	4				
3		愛国心の濫用を戒む（＊感想）		平林初之輔	10 － 11	2				
4		車力生活（＊随筆）		毛利雨一郎	12-14	2.5				
5		文字で描いた漫画（＊随筆）		前田河広一郎	14-15	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
6		「野外劇の一幕」（＊感想）		中西伊之助	16	1				
7		階級戦のどん底より		中西伊之助	18-19	2				
8		真夏の昼と夜（＊小品）		里村欣三	20-21	1.5				
9		貧乏神と菜葉服の青年（＊小品）		田美野勇蔵	21-24	3.5				
10		輿論と電車罷業（＊感想）		里村欣三	26-27	2				
11		戦線		赤煉瓦の家より（二）（喬木康）　撒水夫（天蓋古毒）　階級愛だ（＊詩―城田徳隆）	28-29	2				
12		未来、秋虫売（＊詩）		信田秀一	30	0.5				
13		女工の唄へる（＊詩）		林芙美子	30-31	0.3				
14		タワーリシチよ（＊詩）		森下伊輪郎	31	0.5				
15		休息（＊詩）		児玉勉伍	31	0.3				
16		局面打開の方策―ブルヂョワ芸術家諸君―（＊時評）			33-35	3				
17		新劇運動者の群―コンマアシャリズムと芸術家魂―（＊時評）			36-39	4				
18		脱営兵とその妻（＊戯曲一幕二場―）		佐野袈裟美	40-45	6				
19		インタアナショナル		英国共産党は労働党政府に対して如何なる態度をとりつゝあるか（エム・リモゼン、本郷一郎）	46-47	2				
20		編集後記		K(=金子洋文)	表紙4	0.3	○		0.3	
計					20点	44.4	1	0	0.3	0
	1924年9月号	大正１３年９月号								
1	(第1巻第4号)	滞船（＊ロ絵）		松本弘二	3	1				
2	9月1日発行	文芸家の社会思想（断感）		青野季吉	4-7	4				
3		老婆の死から（＊小説）		今野賢三	8-18	11		○		11
4		練炭にかぶれる（＊小説）		岡本一郎	19-36	18				
5		屋根裏から微かに漏れる言葉（＊小説）		中西伊之助	37-38	2				
6		泥溝（＊小説）		伊藤永之介	39-44	6		○		8
7		馬（＊小説）		金子洋文	45-53	9	○		9	
8		戦線		青野氏に質す（金耕生）　青野答ふ、断片一二（喬木康雄）　朝（＊詩―田中愁二）	54-55	2				
9		人間と猿（＊戯曲一幕）		武藤直治	56-69	14				
10		太陽は光を失ふ（＊戯曲）		狩野鐘太郎	70-80	11				
11		老工夫の最期（＊戯曲一幕）		山田清三郎	81-85	5				
12		混乱の巷（＊戯曲一幕）		佐野袈裟美	86-107	22				
13		インタアナショナル　英国労働政府と共産党―英国共産党の政府に対する決議―（本郷一郎）　日本無産階級エスペランテイスト聯盟綱領及規約（草案）			108-110	3				
14		編集後記			表紙4	0.3	○		0.3	
計					14点	108	2	2	9.3	19
	1924年10月号	大正１３年１０月号								
1	(第1巻第5号)	戦争と平和―木彫―（＊ロ絵）		ゴーガン	3	1	○		1	
2	10月1日発行	文学革命と革命―現代文学と社会意識―（＊評論）		佐々木孝丸	5 -6	2				
3		牢獄の半日（＊小説）		葉山嘉樹	7-19	13				
4		憎まれ口二三（＊感想）		堺利彦	20-21	2				
5		米山よ、黒姫山よ（＊詩ーほかに新潟の名草）		田辺若男	22	1				
6		夜の河（＊詩）		松山はな	22-23	1				
7		窓を明けはなれてよ、長い道を、家（＊詩三編）		信田秀一	23	0.5				
8		漫画			24	1				
9		青い石―小川未明のこと―（＊感想）		金子洋文	25-27	2.25	○		2.25	
10		窓（＊詩）		伊藤永之介	27	0.75		○		0.75
11		戦線		大阪高工の奴（虹）　憤り（＊詩―本間一咲）　柳虹、啓、光造（康）　烽火はあがてっゐる（有村仁）　赤人罵言（赤人）	28-29	2				
12		批評		社会意識とは（賢三）　常識から（清三郎）　断想（弘二）　「ボルクマン」を観て―築地小劇場―（無署名）	30-33	4		○		4
13		赤箒　新進の二人―岡下、伊藤両君―（＊時評）		賢三	34	1		○		1
14		夫婦喧嘩をする（＊小説）		松本弘二	35-48	13.8				
15		獄中吟（＊俳句）			48	0.2				
16		インタアナショナル　ロシア（第五回コムニストインタアナショナル大会、第十三回ロシア共産党大会印象、共産党へ飛行機寄贈、浦塩の欧州大戦記念日）　イギリス（英国共産党の英国労働政府に対する非難）			49-51	3				
17		編集後記		K(=金子洋文)	表紙4	0.3	○		0.3	
計					17点	48.8	3	3	3.55	5.75
	1924年11月号	大正１３年１１月号								
1	(第1巻第6号)	肥料（＊漫画）		柳瀬正夢	3	1				
2	11月1日発行	アナトール・フランスなれば（＊評論）		小牧近江	4-6	3		○		3
3		赤箒　一つの追憶－平沢計七君の面影―		山田清三郎	7	1				
4		キャムベル事件（＊感想）		本郷一郎	8-9	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
5		頭髪（Burlssqu’＊戯曲一幕）		前田河広一郎	10-19	9.3				
6		種蒔き雑記・リユマニテ紙に転載さる（＊紹介）			19	0.7		○		0.7
7		戦線		赤煉瓦の家より（三）（喬木康） 夜があけた（＊詩―林芙美子） 駄言一束（無言一束）　堺氏に（一文学青年）　道徳の悲哀（＊詩―富田治夫）　悲惨（一工夫） 失業者とパン（＊詩―松永鹿一） 追放された学生（その親友）　農夫の歌へる（＊詩―砂鳥純吉）	20-23	4				
8		新しい旅人と共に、或日没、大きい刀を、腹の中で、（＊詩四編）		信田秀一	24-25	1.3				
9		巡査、電気運転手（＊詩二編）		山田定平	25	0.3				
10		拒否（＊詩）		角田春之助	25-26	0.7				
11		全神経の座興（＊詩）		児玉勉伍	26-27	1.3				
12		カムサッカ半島の別天地（＊随筆）		千田末吉	28	1				
13		批評		「血染めの瀑布」を観て（佐野袈裟美）　旧き民衆及び芸術（田辺若男）	29-31	2.5				
14		富川町から－立ン坊物語―（一）（＊ルポルタージュ）		里村欣三	32-35	4				
15		インタアナショナル		彼方の兄弟は語る（ドイツ、オーストリヤ、フインランド、本郷一郎）	36-38,31	3.5				
16		編集後記		K(=金子洋文)	表紙4	0.3	○		0.3	
計					16点	35.9	1	2	0.3	3.7
	1924年12月号	**大正１３年１２月号**								
1	**(第1巻第7号)**	ふとりきったもの（＊漫画）		柳瀬正夢	扉	1				
2	**12月1日発行**	行動への思想―感想五件―（＊軍事教育、プロレタリア作家、漫心の事、宣伝と小説、十一月七日）		前田河広一郎	4-7	4				
3		石段に鉄管（＊童話）		小川未明	8-11	3.5				
4		獄中近詠（＊俳句）		和田久太郎	11	0.5				
5		赤箒			12	1?	○		1	
6		新しきスツルム時代の人々―前田河君の長編創作「大暴風雨時代」―（＊感想）		武藤直治	13-15	3				
7		「生血の盃」を読む（＊感想）		佐野袈裟美	16 － 17	1.2				
8		芥川氏のプロ文学論（＊批評）		今野賢三	17-18	1.8		○		1.8
9		富川町から―立ン坊物語―（二）		里村欣三	19-21	3				
10		一夜（＊小説）		山田清三郎	22-30	9				
11		戦線		雑誌立読評（鴻の台）　愚鳥問答、赤煉瓦の家より（四）（喬木康）　秋と農民(*詩-橋木康以)	31 － 32	2				
12		現代日本の美術界に就いて（＊評論）		松本弘二	33-36	4				
13		暁前の港（＊詩）		本田昂	37	0.5				
14		弾薬の匂ひ（＊詩）		信田秀一	37	0.5				
15		混成新聞（＊市電怠業、大内山に魔風恋風等の各紙記事をあつめたもの）			38-39	2				
16		「大暴風雨時代」の会（＊報告）		今野賢三	40	1		○		1
17		墓詣り―殺す勿れ―（＊詩）		ジャン・リクテユス　椎名其二（訳）	41-47	7		○		7
18		社会主義及共産主義文学　１反動的社会主義（＊評論―エスペラントと日本の対訳）			巻末	5				
19		編輯後記（小牧・孝丸）		(小牧・孝丸)=小牧近江、佐々木孝丸	表紙4	0.5		○		0.5
計					19点	49.5	1	4	1	10.3
	1925年1月号	**大正１４年１月号**								
1	**(第2巻第1号)**	事実廻避の思惟形式（＊評論）		青野季吉	3-5	3				
2	**1月1日発行**	小言数則（＊感想）		村松正俊	6-9	4				
3		漫画（＊殺されたるものら、売地政策）		柳瀬正夢	10-11	2				
4		プロレタリア読物スパイ考―アゼフの事など		前田河広一郎	12-16	5				
5		年あらたたなる―自分の行くみち―		今野賢三	17-19	3		○		3
6		ラッシュ・アワア		平林初之輔	20-21	2				
7		窟を囲る話		松本弘二	22-33	12				
8		赤電車		小牧近江	34-36	3		○		3
9		女囚物語		中西伊之助	37	1				
10		「闇に悶ゆる」の会（報告）		KS生	38	1		○		1
11		プロレットカルトとしてのローマ字（＊感想）		秦満	39-41	3				
12		高田保馬氏へ（＊感想）		真島栄城	41-42	1.2				
13		戦線		赤煉瓦の家より（四）（喬木康） 或署長の話（浜松の同志から） 積極的に進め（中野博歩）　みぞれ（＊詩、歩田亜公）　詩に火が点いた（＊詩、仁科雄一）　善悪智（＊詩、田中和雄）　絞られる生活（＊詩、司自一郎）	43-46	3.7				
14		インタアナショナル　　万国の革命的プロレタリア著作家に檄す、ソヴエートロシアに於ける出版物の部数、有島武郎作「宣言」のエス訳			47-48	2.2				
15		明日を信ずる人々（＊戯曲三幕）		武藤直治	49-78	30				
16		二新聞の競争と一人の苦学生（＊小説）		山田清三郎	79-99	21				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
17		ノンキナトウサン―花見の巻―（＊戯曲そがの家五九郎上演）		麻生豊・作　　金子洋文・脚色	100-119	20	○		20	
18		ノンキナトウサン上演について		曽我廼家五九郎	120-121	2	○		2	
19		編輯後記	(*6月まで休刊)	(TS生)=佐々木孝丸	表紙4	0.5				
計					19点	119.6	2	3	22	7

注:日本近代文学館による復刻版は前期45冊で終了。以降は、戦記復刻版刊行会によって1983年に刊行されている。

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
	1925年6月号	**大正１４年６月号**（＊復刊号。サイズが異なる4冊が刊行）		*＊誌名下に「批評と感想」とある.この号から山田清三郎が編集・発行責任者(-1927.11)30冊*						
1	**(第2巻第2号)**	芸術で無い芸術（＊評論）		青野季吉	1-2	1.7				
2	**6月1日発行**	小牧より小牧へ（＊感想）		小牧近江	2-3	1.3		○		1.3
3		論理なき論理で云ふ（＊感想）		佐々木孝丸	4-5	1				
4		芸術歌（＊詩）		無名氏	4-5	0.4				
5		俺のこと―附けたり「前田河に」（＊随筆）		尾崎士郎	5-6	1				
6		茶亭復活の辞（＊随筆）		内藤辰雄	6	0.8				
7		おゝ花畑よ（＊随筆）		堀江かど江	7	0.8				
8		私語（＊感想）		前田河広一郎	7	0.2				
9		亀井戸雑記（＊感想）		細井和喜蔵	8	0.7				
10		断片（＊感想）		本地正輝	8-9	0.5				
11		雅号語呂訓（＊漫文）		大正骨皮堂	6-8	0.6				
12		原稿見本市場設立草案			9	0.2				
13		百姓芝居の提唱（＊感想）		伊藤忞	9-10	0.7				
14		新進文壇に（＊感想）		酒井八洲男	9-10	0.5				
15		スポーツと其自信と批評（＊随筆）		小方二十世	10-12	1				
16		散兵線（＊ゴシップ風の記事・批評）			10-11	0.4				
17		百姓（＊随筆）		叶多太平	3	0.3				
18		暮方の街上にて（＊詩）		山田定平	12-13	0.7				
19		折々の感想（＊感想）		佐佐木俊郎	13	0.3				
20		生活は力だ（＊詩）		新島栄治	13	0.5				
21		観覧料金の低減について（＊感想）		今城周久	13-15	1				
22		雑誌五月号短評（＊新潮その他）		T・P	14-15	0.4				
23		俳優と演出者（＊感想）		高橋季暉	15	0.8				
24		分り切った事そして実行出来ぬ事―無産家聯盟のABC（＊感想）		岩崎一	16-17	1				
25		ブルヂョア田野調べ			16	0.2				
26		農民芸術に就て―悦田君に問ふ―（＊評論）		中野正人	17-18	0.5				
27		菊池寛先生へ（＊詩）		田中和雄	17	0.2				
28		此頃の日本文学（＊感想）		前田晃	18	0.1				
29		大衆文学に就て（＊感想）		生田蝶介	18-19	0.2				
30		断想（＊感想）		吉田金重	18-19	0.5				
31		凸凹鏡（＊随筆）		井東憲	19	0.5				
32		人間の愚―中西君の審くものを読んで―（＊感想）		金子洋文	19-20	1	○		1	
33		芸術家と政治（＊評論）		平林初之輔	20-22	1.5				
34		汽船（＊小説）		前田河広一郎	22-23	1.6				
35		河豚（＊詩）		金子洋文	23	0.8	○		0.8	
36		労働哀歌（＊短歌）		伊坂部光哉	24	0.2				
37		散兵線			24	0.2				
38		編輯後記　（＊「編輯後記」中に「我等の「文藝戦線」はここに面容を一新して再び現はれた。何より休刊中頻々と激励と叱汰の言葉を寄せられた読者諸君に対し、多少とも責を果すことの出来たことを先づ歓びたい。」とある。）		山田清三郎	表紙3	0.5				
計				＊ｻｲｽﾞ18.8×26cm	38点	24.8	2	1	1.8	1.3
	1925年7月号	**大正１４年７月号**								
1	**(第2巻第3号)**	文芸の大衆化（＊評論）		佐野袈裟美	1-2	1.4				
2	**7月1日発行**	新時代展望（＊評論）		林房雄	2-3	0.8				
3		「調べた」芸術（＊評論）		青野季吉	3-4	1.2				
4		自画自讃―魯牛荘の記―（＊評論）		レフ・ヤマカワ　（＊表紙では山川亮とある。）	4-5	0.4				
5		プロ文芸を激論せよ（＊評論）		新居格	5-6	1.2				
6		文芸の戦野に於ける青年運動―全国青年文芸聯合のこと―（＊評論）		岩崎一	6-7	1				
7		青空のやうな喜び（＊詩）		信田秀一	6	0.5				
8		雪の憂鬱、吹雪の家（＊詩二編）		渡辺信義	7	0.5				
9		仕事部屋から（＊感想）		江馬修	7-8	1				
10		「ゴシップ考」ほか（＊時評）		大木雄三	8-9	1				
11		一寸一言―小川未明氏に―		山田清三郎	9	0.5				
12		遊蕩大学の設立（＊戯文）			9-10	0.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
13		ポール・モーランは滑稽漫画なり（＊時評）		前田河広一郎	10-11	1				
14		プロレタリアわ滅びない（＊評論）		石渡山達	11-13	1				
15		孤城落日筆合戦―時代笑劇―（＊戯文）		鶴鳩山人戯作	12-13	1				
16		二つの生命（＊詩）		新島栄治	14-15	1				
17		何処が太郎冠者だ――新聞劇評への抗議―		高橋季暉	14	0.5				
18		劇作家連中の顳顬へ（＊劇壇評）		今城周久	15	0.5				
19		今東光氏の言葉（＊感想）		今東光	16-17	1				
20		草に寝て（＊詩）		松本淳三	17	0.3				
21		雨の降る日（＊詩）		佐々木みね子	17	0.3				
22		表現主義へ！（＊評論）		金子洋文	18	1	○		1	
23		「文芸春秋」御大に告ぐ（＊菊池寛へ）		内藤辰雄	19	0.5				
24		夜明け前（＊詩）		竹内一美	19	0.5				
25		先駆座合評（＊長谷川如是閑作「エチルガソリン」その他）		本田信二、武藤直治、前田河広一郎	20-23	1.5				
26		井蛙駄言（＊同人人物評）		伊福部隆輝	20-23	1				
27		毒言二つ（＊菊池寛、久米正雄評）		中野世人	21	0.5				
28		陳謝と広告（＊感想）		小牧近江	22	0.5		○		0.5
29		縦と横（＊評論）		三川秀夫	23	0.5				
30		文壇的我れ等の同志（＊感想）		今野賢三	24	0.5		○		0.5
31		表現派の痩役者（＊感想）		古賀不美男	24-25	1				
32		新ロシア研究の二著（＊梅原北明訳「露西亜大革命史」ほか）		武藤直治	25-26	1				
33		もう終った（＊感想）		飯田徳太郎	26-27	1				
34		蒙御免（＊感想）		米田曠	27-28	1				
35		三科に寄せて（＊美術評）		松本弘二	28-29	1				
36		歯車と人間（＊小品）		岡本一郎	29-30	1				
37		笞の下より起つ（＊小品）		中西伊之助	30-31	1				
38		醜女（＊小品）		細井和喜蔵	31	0.5				
39		編輯室から		山田生（=山田清三郎）	32-33	0.4	○		0.4	
40				国際労働会議―鈴木文治氏へ（浅野純一）　批評のしようなし―所謂無産派文芸家に就て―（千葉亀雄）　青年にささぐ―短歌四首―（矢野綾子）　文壇流行歌（骸骨坊作）　文壇近頃三憤慨（火登乃豆通生）　一隅の謀叛人（前田河広一郎）　戦闘文芸社無産階級文化研究所月報	誌面及び末尾	2.6			
計				＊ｻｲｽﾞ18.8×26cm	40点	33.4	2	2	1.4	1
	1925年8月号	大正１４年８月号								
1	(第2巻第4号)	トロツキイの文学論から（＊評論）		茂森唯士	1-2	1.5				
2	8月1日発行	文芸市場（＊感想）		金子洋文	2-3	0.7	○		0.7	
3		パラドックス（＊感想）		青野季吉	3	0.8				
4		戦の後（＊短歌）		浅野純一	3	0.2				
5		熱風線（＊感想）		井東憲	4	0.8				
6		傍観贏八着（＊感想）		小島徳弥	4-5	0.8				
7		大原雑信（＊随筆）		前田河広一郎	5-6	1.2	○		1.2	
8		「種々の言葉」（＊随筆）		林房雄	6-7	1				
9		散兵線			8	1				
10		井蛙駄言（＊感想）		伊福部隆輝	9	0.8				
11		談話数片（＊随筆）		仁科雄一	9-10	0.8				
12		本来の立場に帰れ―先輩諸兄に呈するの文―（＊感想）		岩崎一	10-11	1				
13		近事料片（＊随筆）		松戸侃治	11	0.5				
14		南京車夫―新嘉披にて―（＊詩）		石垣粂治	11	0.3				
15		文芸家と社会生活―無産派文芸家連盟の要―（＊評論）		山田清三郎	12	1				
16		新しい男達への挨拶（＊随筆）		高群逸枝	13	0.7				
17		独房余戯（＊短歌）		小川柳郎	13	0.2				
18		新カチューシャ節		米田曠	13	0.3				
19		工場地断景（＊詩）		陀田勘助	14	0.2				
20		手紙（＊詩）		信田秀一	14	0.2				
21		仰し流れゆく群（＊詩）		林二郎	14	0.2				
22		嘔吐（＊詩）		渡部信義	14-15	0.2				
23		何がそんなに悲しいのだ（＊詩）		甲斐二朔	15	0.3				
24		胃袋よ（＊詩）		黒田哲也	15	0.2				
25		白骨（＊詩）		没法子	15	0.3				
26		科学的といふ迷信（＊感想）		村松正俊	16	0.8				
27		新聞小説その他（＊感想）		山内房吉	16-17	0.5				
28		「幽寂」とは何ぞ（＊感想）		西村陽吉	17-18	0.7				
29		腰を据えよ（＊感想）		川崎春二	18-19	0.8				
30		帰省した男（＊随筆）		伊藤忞	19	0.7				
31		悦田君の芸術に就て（＊感想）		奥村五十嵐	19	0.3				
32		富川町から（一）―どん底物語―		里村欣三	20	1				
33		無題録（＊感想）		平林初之輔	21-22	1.2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
34		街頭のポイント（＊随筆）		堀江かど江	22	0.6				
35		小川未明氏より（＊私信）		小川未明	22	0.1				
36		小ばなし（＊随筆）		川崎長太郎	23	1				
37		とふ（＊詩）			23	0.04				
38		細胞と近代（＊随筆）		相田隆太郎	24	0.5				
39		通俗入門のこと（＊随筆）		木下白露	24	0.6				
40		隣りの夫婦喧嘩（＊随筆）		新井紀一	25-26	1				
41		「決闘」と「市場・工場」（＊書評）		武藤直治	26-27	1.5				
42		正気の歌（＊詩）		やまだち	27	0.5				
43		赤衛兵士の宣誓―並に赤衛軍の兵数及びその教育に就て―（＊解説）		本郷一郎	28	2				
44		穴を掘る（＊小説）		今野賢三	28-29	1.2		○		1.2
45		霙（＊小説）		藤井亮之助	30-31	1.2				
46		しげ姉妹とその母親（＊小説）		武藤直治	31-32	1.9				
47		断章（＊詩）		竹内一美	32-34	0.1				
48		緩急車―編輯雑記―		山田生（=山田清三郎）	34	0.7				
計				＊ｻｲｽﾞ18.8×26cm	48点	34.1	2	1	1.9	1.2
	1925年9月号	**大正１４年９月号**								
1	**(第2巻第5号)**	社会科学としての美学と文芸批評（＊評論）		武藤直治	1-2	2				
2	**9月1日発行**	一二の疑ひ（＊感想）		村松正俊	3-4	1.3				
3		表現主義の危険と新現実主義の要求（＊感想）		中西伊之助	4	0.7				
4		ミレーの芸術（＊感想）		江馬修	5	0.8				
5		公衆食堂の皿（＊詩）		谷口直平	5	0.2				
6		いはでもの語―季吉、資夫両君の文章を読んで―（＊感想～）		水守亀之助	6	0.9				
7		婦人作家よ、娼婦よ（＊感想）		平林たい子	6-7	0.5				
8		生活なき新劇運動（＊感想）		田辺若男	7-8	1.2				
9		茶亭の書たる頭（＊雑文）		内藤辰雄	8-9	0.7				
10		田舎雑感（＊随筆）		仁科雄一	9-10	0.8				
11		散弾 ― 當るも！當らぬも！―			10	1	○		1	
12		印象戯評		よろよろ道人	11	1	○		1	
13		死の列車（露西亜革命夜話）		梅原北明	12-13	1.9				
14		乱鑿（＊詩）		森田喜子次	13	0.5				
15		詩		電車転撒夫、火の見台監守人（山田定平）　笑ひ（坪田譲治）　暗殺（安岡墨村）　出産の楽譜（平川虎男）　世紀の曙はいつくるのか（大和久雄）　秋（山田清英）　生活短唱（田中聖二）	14-15	2				
16		日本プロレタリア文芸聯盟規定草案（＊綱領、規約）＊注			16-17	1				
17		日本プロレタリア文芸聯盟宣言（一九二五年九月、日本プロレタリア文芸連盟）			16-17	0.4				
18		聯盟について（＊日本プロレタリア文芸聯盟の性格、結成までの経過を山田が解説）		山田清三郎	17	0.4				
19		反響摘録（＊日本プロレタリア文芸聯盟結成に対する）			17	0.2				
20		着物の洗濯（映画台本）		金子洋文	18-20	2.8	○		2.8	
21		戦の後（＊詩）		浅野純一	20	0.2				
22		富川町から（どん底物語、承前）		里村欣三	21	1				
23		へんな誤解―新島君に―（＊感想）		藤森成吉	22	0.8				
24		放尿御免（＊随筆）		佐々木孝丸	22-23	0.7				
25		雑感二三（＊感想）		野村吉哉	23-24	0.8				
26		菊池寛に対する「猟人の態度」（＊感想）		荻原新生	24-25	0.8				
27		暫く振りで（＊随筆）		津田光造	25-26	1.2				
28		プロレタリア文学の新しき前進方向（＊感想）		立野信之	26-27	0.9				
29		生田長江氏の論に就いて		小田謙一	27	0.7				
30		最期の人道主義者（＊随筆）		竜田秀吉	27-28	0.2				
31		二ツの新運動―マヴオと虚無思想研究（＊感想）―		本間巷一郎	28	0.8				
32		思想家？（＊随筆）		壺井繁治	29	0.6				
33		自分の長篇―薄明のもとに―（＊感想）		今野賢三	29-30	0.7		○		0.7
34		牛鍋と散歩（一）（＊随筆）		前田河広一郎	30	0.7				
35		散兵線（林、房雄、孝丸、清三郎）			31	1				
36		船の神神（＊小説）		林房雄	32-33	1.1				
37		幻想鼠は殺された！―九月一日記念の為めに―（＊小説）		山川亮	33-24	1.3				
38		編輯雑記		（山）=山田清三郎		0.5				
計				＊ｻｲｽﾞ18.8×26cm。	38点	34.3	3	1	4.8	0.7
	1925年10月号	**大正１４年１０月号**		*（＊雑誌の判型が元の菊型に戻る。表紙に目次）*						
1	**(第2巻第6号)**	文芸批評の一発展型（＊評論）		青野季吉	2-5	3.5				
2	**10月1日発行**	我等の芸術をジャナリズムから救へ（＊評論）		小川未明	5-7	2				
3		没落の伴奏曲―二三の現代作家に就いて―（＊評論）		林房雄	7-10	3.5				
4		生活創造の芸術へ（＊評論）		磯部清吉	10-12	1.5				
5		未明氏の感銘―選集刊行に当って―（＊評論）		奥山孝一	12-13	1.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
6		静動一束（＊消息）			13	0.5	○		0.5	
7		文壇辻斬行（＊漫文）		白井権八郎	14	1				
8		もどかしき苦悶（＊小説）		山田清三郎	15-23	9				
9		秋景一場（＊小説）		伊藤永之介	24-29	6		○		6
10		散兵線（飯田徳太郎、林）			30-31	2				
11		監獄破片（＊小品）		酒井八州男	32-33	2				
12		母―スケッチ一幕―（＊戯曲）		前田河広一郎	34-37	4				
13		烈日（＊小説）		若杉鳥子	38-41	3.8				
14		金槌を愛する男（＊小説）		内藤辰雄	41-46	5				
15		さらりまん低唱（＊短歌）		山田十四	46	0.5				
16		蚊壇往来(十月)　（＊漫文）			47	1				
17		山蔭の旅から（＊随筆）		松本弘二	48-49	1.4				
18		無題感想（＊随筆）		松本淳三	49-50	1.2				
19		不意打を喰はす（＊感想）		中野正人	50-51	1.3				
20		借金党その他（＊随筆）		米田曠	52-53	1.2				
21		毒舌は廻る（＊随筆）		竹内越村	53	0.8				
22		邂逅―僕と庫輔・渡辺―（＊感想）		青山倭文二	54	1				
23		細井和喜君を悼む（＊特集）　細井君		藤森茂吉	55	0.5				
24		死の前夜		陀田勘助	55-56	1				
25		三つのものとその精神		重広虎雄	56-57	1				
26		細井和喜蔵君の死		本間一咲	57-58	0.5				
27		細井和喜蔵は生きてる		前田河広一郎	58	0.7				
28		御礼と宣言とお願ひ		故　細井和喜蔵	59	1.5				
29		和喜蔵氏に手向く（＊詩）		菅原清生	60	0.5				
30		編輯雑記（やま）		やま（=山田清三郎）	61	0.8				
31		文芸聯盟の世話人から、次号予告			62	1				
計					31点	61	1	1	0.5	6
	1925年11月号	**大正１４年１１月号**								
1	**(第2巻第7号)**	淫売婦（＊小説）		葉山嘉樹	1-19	18.5				
2	**11月1日発行**	日本プロレタリア文芸連盟の世話人から（＊報告）			19	0.5				
3		久太と渋六 ―日なたぼっこの会の約束―（＊和田久太郎の堺宛書簡からの抄録）		堺利彦	20-23	4				
4		牢獄の反響―批評でない批評―（＊感想―未完）		中浜鉄	24-27	4	○		4	
5		散兵線（林房雄、里村欣三）			28-29	2				
6		死は奴隷と主人に無関心である（＊詩）		荻原恭二郎	30	0.5				
7		眼精から太陽を放射する女達（＊詩）		重広虎雄	30	0.3				
8		無題（＊詩）		信田秀一	30	0.3				
9		幸ひ（＊詩）		金熙明	31	0.2				
10		鉄槌は鳴る（＊詩）		平岡虎男	31	0.5				
11		仲間の死屍（＊詩）		長田滋利	31-32	0.3				
12		太陽（＊詩）		竹内越村	32	0.3				
13		自己を棄てるな（＊詩）		佐伯徹郎	32	0.3				
14		奴等へ！（＊詩）		太田竜太郎	32-33	0.3				
15		頭蓋骨（＊詩）		奈良幸夫	33	0.5				
16		百姓の歌（＊詩）		中村孝助	33-34	0.7				
17		流浪断片（＊詩）		三輪猛雄	34-35	0.4				
18		炎に炎を積み重ねよ！（＊詩）		渡辺信義	34-35	0.3				
19		人類は人類だ（＊詩）		新島栄治	35	1				
20		蚊壇往来―十一月―			36	1				
21		「小さな町」とチエホフ（＊感想）		越後谷隆二	37-38	1.8		○		1.8
22		覚え書（一）（＊感想）		本地正輝	38-40	1.3				
23		愚迂多羅の弁（＊感想）		米田曠	40	0.7				
24		「ローザの手紙」―井口孝親訳、同人社版―（＊感想）		本郷一郎	41-42	1.2				
25		言言言言言（＊感想）		内藤辰雄	42-42	1.2				
26		渡部信義君のこと（＊随筆）		レフ・ヤマカワ	43-44	1				
27		不意打返上（＊感想）		野村吉哉	44-45	0.8				
28		感想二つ（＊感想）		松戸侃治	45-46	1.2				
29		細井君の「モルモット」（＊感想）		藤代治秀	46-47	1.3				
30		半歩（＊小品）		佐々木俊郎	48-49	2				
31		河畔の一夜―「放浪挿話」その一―		里村欣三	50-52	3				
32		文壇万案内（＊漫文）			53	1		○		1
33		科学としての認識論（＊評論）		山内房吉	54-56	3				
34		「レフ」の宣言（＊紹介）		尾瀬敬止	56-58	2				
35		新しい言文一致へ（＊評論）		武藤直治	58-60	1.8				
36		文芸連盟に協力せよ―作家及び青年諸君―（＊評論）		今野賢三	60-61	1.2		○		1.2
37		シンクレエアの「ジャングル」（＊評論）		前田河広一郎	61-62	1.5				
38		編輯雑記		山田生（=山田清三郎）	63	0.8				
計					38点	62.7	1	3	4	4
	1925年12月号	**大正１４年１２月号**								

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
1	(第2巻第8号)	四本の煙草（＊小説）		中西伊之助	2-6	5				
2	12月1日発行	「迷児一件」（＊小説）		松村善寿郎	7-9	3				
3		青年（場面劇）		狩野鐘太郎	10-15	6				
4		軍国主義と雷（＊小説）		井東憲	16-19	4				
5		散兵線		山田（=山田清三郎）	20-21	2	○		2	
6		牢獄の反響―批評でない批評―（＊感想）		中浜鉄	22-25	4				
7		泥酔痴語（＊感想）		金子洋文	26-28	2.3	○		2.3	
8		世界は動きつつある（＊随筆）		古賀不美男	28-29	0.7				
9		海（＊随筆）		小牧近江	29-31	2		○		2
10		死刑囚の面影（＊随筆）		米田曠	31-32	2				
11		馬橋雑信（＊随筆）		柳瀬正夢	32-35	3.7				
12		団結（＊詩）		重広虎男	36	0.2				
13		失業者と滝（＊詩）		宇津木正夫	36	0.5				
14		黴の生えた都会だ（＊詩）		遠地輝武	36-37	0.3				
15		世界は叫んでる（＊詩）		太田竜太郎	37	0.5				
16		哄笑！（＊詩）		斎藤包	37	0.2				
17		邪教盲信（＊詩）		安達竜郎	37-38	0.6				
18		汝は真理の演劇家（＊詩）		坂梨清子	38	0.5				
19		馘首者心理（＊詩）		高木洞麓	39	0.3				
20		藁屑（＊詩）		武田亜公	39	0.2				
21		裁判所風景（＊詩）		高松高	39-40	1.5				
22		詩二篇（＊詩）		高橋新吉	40	0.3				
23		答弁二つ（＊感想）		村山知義	41-42	1.3				
24		覚え書（＊承前）		本地正輝	42-53	1.5				
25		非軍国主義雑誌提唱―プロ文士の生きる道―（＊感想）		小滝益夫	43-44	1				
26		悪口種々（＊感想）		平林たい子	44-45	1				
27		詩壇雑感（＊感想）		ドンザッキー	45-46	1				
28		AとBの話（＊感想）		吉田金重	46-47	0.6				
29		敢て松戸君の言明を促す（＊感想）		小川未明	47	0.7				
30		勘十の話（＊小品）		武野藤介	48-50	2.2				
31		立ン坊と女（＊小品）		荻郁子	50-51	1.2				
32		独房余戯		小川柳郎	51	0.5				
33		科学と芸術（＊評論）		林房雄	52-54	2.6				
34		美学其他に関する書簡（＊評論）		岩崎一	54-56	2.3				
35		紹介・感想・質問（＊葉山君と里村君、藤森氏と新島君、木村毅君に）		青野季吉	56-59	3.2				
36		日本プロレタリア文芸聯盟規定修正草案（＊綱領―行動綱領、規約、附則、会員大募集、大会予告）			60-61	2				
37		編輯雑記（山田）		（=山田清三郎）	62	0.8				
計					37点	61.7	2	1	4.3	2
	1926年1月号	大正１５年１月号								
1	(第3巻第1号)	海の軽業（＊小説）		前田河広一郎	2-10	9				
2	1月1日発行	セメント樽の中の手紙（＊小説）		葉山嘉樹	11-13	3				
3		頭の中の兵士（＊小説）		壺井繁治	14-16	3				
4		女乞食（＊小説）		今野賢三	17-21	5		○		5
5		銅貨二銭（＊小説）		黒島伝治	22-26	5				
6		「同志間道徳確立」問題（＊感想）		水野正次	27	1				
7		徳川時代の筆禍者と其書名及刑罰（＊表）			28-29	2				
8		排日主義者（＊随筆）		小牧近江	30	1		○		1
9		「村に襲ふ波」を評す（＊感想）		レフ・ヤマカワ	30-31	1				
10		巣鴨雑筆（＊随筆）		大木雄三	31-32	1				
11		覚え書（＊承前）		本地正輝	32-34	1.2				
12		探偵小説への要望（＊感想）		槇木楠郎	34-35	1.3				
13		中澤氏と私の事（＊随筆）		加藤由蔵	35-36	1.3				
14		謬見一つ（＊感想）		西木洸	36-38	1.5				
15		這麽妥協なら?（＊随筆）		梅原北明	38-39	1.7				
16		村の老嬢　（＊生活記録・小品）		里村欣三	40-42	2.4				
17		トンカトントンカッタカッタ		今埜大力	42-33	1.5				
18		小娘は叫ぶ		入江彦作	43-45	2				
19		生活断片		佐々木義郎	45-47	1.2				
20		戦線縦横		やま（=山田清三郎）	48-49	2				
21		朴烈君のことなど―冬日記―（＊随筆）		中西伊之助	50-53	3.3	○		3.3	
22		遂鹿より白頭翁へ（＊随筆）		吉田金重	53-54	1.8				
23		工場のシッポに結びついた一月の連想―馬端雑信―（＊随筆）		柳瀬正夢	55-58	3.5				
24		忙中小閑（＊随筆）		山田清三郎	58-61	3.5				
25		牢獄私信（＊感想）		中浜鉄	62-63	2				
26		鉄仮面の男（＊詩）		岡本潤	64	0.8				
27		冬の来る日（＊詩）		越後谷隆二	64-65	0.4		○		0.4
28		工場は生首を嚙る（＊詩）		岡崎竜夫	65	0.7				
29		太陽を縛る縄（＊詩）		宮崎九六	66	0.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
30		少年の日（＊詩）		梅田邦夫	66	0.2				
31		潜勢せる次の暴風（＊詩）		大村主計	66	0.5				
32		農村の昏眠と青年（＊感想）		成田鶴二郎	67	1				
33		「ジャングル」を中心に―「調べた」芸術再論―（＊評論）		青野季吉	68-70	2.2				
34		劇に就いて（＊感想）		村山知義	70	0.85				
35		作家・作品及び其の思想（＊評論）		飯田徳太郎	71-74	3.2				
36		批評不振の理由（＊評論）		佐々木孝丸	74-76	2				
37		唯物論とリアリズム（＊評論）		武藤直治	76-78	3				
38		鎖と槌（読者投稿）		「女工哀史」を読む（保坂高知）　永遠の自由（＊詩　権炳吉）　理想の友（加藤保）　百姓の研究（土野武緒）　赤人焦言（あかひと）　迫害よひどくなれ（＊詩、桐谷桐五郎）　特志家はないか（鈴木静雄）　抗議一つ(奔仁殻)　ブルジョア文士の悲哀（＊詩、浩生）　文戦の同志へ（太田黒年男）　百姓哀歌（＊詩　西本洸）	79-81	3				
39		編輯雑記		山田生（=山田清三郎）	82	0.8				
計					39点	80.15	1	3	3.3	6.4
	1926年2月号	**大正１５年２月号**　*(＊発禁となった号)*								
1	**(第3巻第2号)**	文学運動の中心点（＊評論）		山内房吉	2-4	2.3				
2	**2月1日発行**	表現主義小考（＊評論）		金子洋文	4-7	2.7	○		2.7	
3		暴露文学としての「ジャングル」（＊評論）		佐々木孝丸	7-9	3				
4		文芸聯盟の行動―慎重の考慮を要す―（＊評論）		今野賢三	9-11	2		○		2
5		オートバイ競技場、外（＊評論）		前田河広一郎	11-16	5		○		5
6		新しき類型の創造―芸術観断片（＊評論）―		平林初之輔	16-17	2				
7		アンチ・ミリタリストの言葉（一頁評論）		米田曠	18	1				
8		モヒ中毒の日本女―放浪挿話―（＊生活記録）		里村欣三	19-21	2.5				
9		戦線縦横		(山田)（=山田清三郎）	22-23	2				
10		余りに真剣な話（＊随筆）		北野博美	24-25	1.8				
11		自分のために（＊随筆）		飯田豊二	25-27	1.3				
12		人を化かす機械（＊随筆）		井東憲	27-28	1				
13		林房雄氏の所論について（＊感想）		杉青作	28	0.7				
14		亡友雑筆（＊随筆）		成田元雄	28-30	1.3				
15		偶像破壊　（＊随筆）		吉田金重	30	1				
16		お嘲ひ下さい（＊随筆）		松村善寿郎	31-32	1.7				
17		断想二つ―雑司ヶ谷から―（＊感想）		山田清三郎	32-33	1.2				
18		蛇窪に寄す（＊詩）		三川秀夫	34-35	1.2				
19		生活によごれる（＊詩）		山田定平	35	0.3				
20		楼鍋（＊詩）		信田秀一	35-36	0.5				
21		チャルメラ（＊詩）		奈良幸夫	36	0.3				
22		枯木のやうな男（＊詩）		長田滋利	36	0.4				
23		聖代（＊詩）		太田竜太郎	37	0.3				
24		不景気（＊詩）		坂井喜夫	37	0.2				
25		ハガキ（＊詩）		三輪猛雄	37	0.2				
26		泥濘の路へ（＊詩）		菅原弘二	37-38	0.3				
27		夜業（＊詩）		伊藤和	38	0.3				
28		喫茶、一つの意識、眠りよ（＊詩三編）		西谷勢之介	38	0.3				
29		満員電車（＊詩）		高橋新吉	38	0.2				
30		ルンペンインテリリゲンチャの夢（＊詩）		仁科雄一	39	1				
31		鎖と槌		或る皮肉（楠瀬正澄）　暴風（＊詩―加納龍一）　ボイラー（太田龍太郎）　戦の唄（＊詩―浅野純一）　百姓よ・気を附け（＊詩―笛木哀之介）　追憶その他（大和久雄）　鳥なき里のカウモリ（原田響）　無情の音（＊詩―高雄露文）	40-42	3				
32		「潮流」の人々（一頁評論）		飯田徳太郎	43	1				
33		林檎（＊小説）		林房雄	44-48	3				
34		農夫の娘（＊小説）		中野正人	48-54	5.2				
35		断片三つ（＊小説）		酒井八洲男	54-56	0.8				
36		新文化印刷所―大人のための人生の童話―（＊小説）		武藤直治	56-50	5				
37		編輯後記		（やまだ）（=山田清三郎）	61	0.8				
計					37点	56.8	1	2	2.7	7
	1926年3月号	**大正１５年３月号**　*(＊安寧秩序を乱すと警告を受けた号)*								
1	**(第3巻第3号)**	歯車と人間（＊小説）		岡下一郎	2-10	9				
2	**3月1日発行**	童話みたいな話（＊小説）		中西伊之助	11-15	5				
3		窟の女（＊小説）		吉田金重	16-20	5				
4		無智（＊小説）		佐左木俊郎	21-23	3				
5		虐げ合ふ（＊小説）		金子洋文	24-27	4	○		4	
6		戦線縦横		房雄(=林房雄)	28-29	2	○		2	
7		それや何だ（＊小説）		葉山嘉樹	30-33	4				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
8		廻れ右（＊小説）		新井紀一	34-37	4				
9		隣家の鶏（＊小説）		大木雄三	38-43	6				
10		冷たい笑（＊小説）		平林たい子	44-45	2				
11		組織の一角に投げかけた一つの散弾―別名、新聞社を喰ふ―（＊小説）		山田清三郎	46-57	11				
12		火（＊詩）		西谷勢之介	58	0.3				
13		無題（＊詩）			58	0.5				
14		労働者の朝（＊詩）		信田秀一	58-59	0.3				
15		赤児の首を切る（＊詩）		日野春介	59	0.5				
16		馬車馬（＊詩）		奈良幸夫	59	0.3				
17		悲壮の累積（＊詩）		大村主計	60	0.5				
18		無題（＊詩）		菅原紅二	60	0.6				
19		人間一匹の命が十圓だ　（＊詩）		小林兼	60-61	0.5				
20		銀座街頭の歌（＊詩）		太田竜太郎	61	0.5				
21		ミカエル少年（＊小説）		ボビンスキー　佐々木孝丸（訳）	62-67	6				
22		前田河広一郎（＊自伝、連載第一回）		前田河広一郎	68-69	2				
23		鎖と槌		異邦哀愁（＊詩―金熙明）　廃残者（＊詩―深水三郎）　仮想社会の判決（＊詩―屋洲与志）　此の事実（石井安一）　生ける死屍（＊詩―加納龍一）　黒い人影（松本草平）　百姓の挽歌（＊詩―ロク・オンデー）　騎士の如く（豊田夢津夫）　骸骨の群集（＊詩―武田亜公）　細い青白い腕（＊詩―桐谷桐五郎）　集配人から（＊詩―泥丘丈介）　同人雑誌提唱（鈴木静雄）　工場を読みて（平松吉郎）	70-74	5				
24		唯物的文芸史観（＊評論）		武藤直治	75-77	3				
25		階級文化と人類文化（＊評論）		江馬修	78-80	2.3				
26		人間解剖より（＊評論）		今野賢三	80-82	2.5		○		2.5
27		金子君にたつた一言（＊感想）		中西生(=中西伊之助)	82	0.2	○		0.2	
28		文化闘争の基調―レニン主義の残された一面―（＊評論）		青野季吉	83-85	3				
29		編輯後記		（やまだ）(=山田清三郎)	86	0.8				
計					29点	83.8	3	1	6.2	2.5
	1926年4月号	大正１５年４月号								
1	(第3巻第4号)	革命的演劇の限界と任務―革命的ドラマツルギーに対する論綱―（＊評論、新しき海外の社会文芸思潮）		カール・ウキツトフォーゲル　川口浩（訳）	2-5	4				
2	4月1日発行	何を主題とすべきか―当面のプロレタリア派の問題―（＊評論）		赤木健介	6-7	2				
3		プロレタリア文芸家聯盟に就て（＊評論）		平林初之輔	8-9	2				
4		三面記事の歌（＊詩）		三輪猛雄	10-11	1.2				
5		ブルジョアなんて憎悪に価しない（＊詩）		小野十三郎	11	0.3				
6		拳銃、新聞配達へ（＊詩二編）		五十嵐久弥	11	0.5				
7		せめて一ぱいのコーヒが飲みたい（＊詩）		三川秀夫	11-12	0.3				
8		此の火に（＊詩）		信田秀一	12	0.3				
9		大地震の歌二つ（＊詩）		田辺若男	12	0.6				
10		赤き手ぶくろをする幼女（＊詩）		岡田刀水士	13	0.2				
11		高く低く聳ゆる東京市（＊詩）		遠地輝武	13	0.6				
12		ある小景（＊詩）		木村直裕	13	0.3				
13		前田河広一郎（二）		前田河広一郎	14-16	3				
14		手品師のロシア人（＊随筆）		佐野袈裟美	17-19	3				
15		鎖と槌		闇を痴人が行く（＊詩―加藤陸三）　言ひたい事（高畑徳雄）　あひで（＊詩―鞍打巽）　感じたこと（等々力徳重）　靴（＊詩―大沢政雄）　「炭よ燃へてくれ」（＊詩―韓植）　父よ（＊詩―藤田小次郎）　表紙の歌（＊詩―衣笠小松）　「同人雑誌提唱」反対（井垣大造）　空洞（＊詩―秋月泰）　煙（＊詩―竹内一美）	20-23	4				
16		コムミュン戦士のパイプ（＊小説―海外社会文芸作品（二）		イリヤ・エレンブルク　森八郎（訳）	24-34	11				
17		大衆文芸異論（一頁談話）		梅原北明	35	1				
18		プロレタリア・ブックレビキイ　藤森成吉論―主に近著悩み笑ふについて―		倉田潮	36-38	2.7				
19		「十万年前」―神の出ない有史以前の小説―		小牧近江	38-40	2.3		○		2.3
20		「土の歌」小感		中野正人	40-42	1.6				
21		高橋季暉君の「百姓一揆」		佐々木孝丸	42-43	1.3				
22		「薄明のもとに」と「ジャングル」		山田清三郎	43-44	1.2		○		1.2
23		色々な芝居（一頁談論）		高橋季暉	45	1				
24		戦線縦横（山田、林）		山田（=山田清三郎）、林(=林房雄)	46-47	2	○		2	
25		公園の媾曳（＊小説）		林房雄	48-54	7				
26		別離（＊小説）		坪田譲治	55-57	3				
27		富豪（＊小説）		山川亮	58-62	5				
28		姉（＊小説）		今野賢三	63-67	5		○		5
29		日本プロレタリア文芸聯盟消息（＊トランク劇場、漫画市場）			68	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
30		編輯後記		(山田)(=山田清三郎)	69	0.8				
計					30点	68.2	1	3	2	8.5
	1926年5月号	**大正１５年５月号**								
1	**(第3巻第5号)**	メーデーの行進歌			5	1				
2	**5月1日発行**	労働祭をうたふ（＊詩）		労働祭歌（松本淳三）　緑葉炸裂（牧野精一）　春の行進曲（菊池光四次）　労働祭の詩（佐藤円次）　メーデーのマーチ（太田竜太郎）　メーデーの歌（大村主計）　メーデー（渡部信義）　彼は・・・既に彼でなくなった（岡本潤）	6-12	7				
3		行動派の芸術信条―愛するグレゴリッチと若子とへ―（＊評論）		本荘可宗	14-16	3				
4		文芸解剖の二つの姿体（＊評論）		今野賢三	17-19	3		○		3
5		前田河広一郎（三）		前田河広一郎	20-23	4				
6		革命的演劇の限界と任務（二）		カール・ウキツトフォーゲル　川口浩（訳）	24-28	5				
7		ブック・レヴュ		構成派研究の著者へ（荻原恭次郎）　『月夜の喫煙』―Selbstangeige―（新居格）　『奴隷』愚評―細井和善蔵君の贈りもの―（柳瀬正夢）	29-35	7				
8		ピリニャーク氏を迎へて（＊感想）		ピリニャークのこと（尾瀬敬止）　印象断片（佐々木孝丸）　ピリニャク氏（新居格）	36-39	4				
9		芸術に於ける地方性、野生―都会芸術否定の一論拠―（＊評論）		伊福部隆輝	40-45	6				
10		トロツキーのプロレタリア芸術講話（一）（＊トロツキイ「文学と革命」の抜萃）		茂森唯士（訳）	46-90	4				
11		象徴としての歴史（＊評論）		村松正俊	50-52	3				
12		ちよつとした話―堺利彦氏に―（＊随筆）		加藤保	53	1				
13		映画無駄話（＊随筆）		金子洋文	54-55	2	○		2	
14		思ひ出す朴烈君の顔（＊随筆）		里村欣三	56-58	2.8				
15		月光叛逆者―消されゆく二つの魂へ贈る―（＊随筆）		米田曠	58-59	0.6				
16		小劇場運動にたいする一考察―主として「築地」を考える―（＊随筆）		立野信之	59-61	2				
17		芸術的心境（＊随筆）		岡下一郎	61-62	1				
18		コミユン戦士のパイプを読む（＊随筆）		小野十三郎	62-63	1.3				
19		愚論（＊随筆）		進藤進	63-65	1.4				
20		明日の大衆物への希望（＊随筆）		荻原新生	65-66	1.6				
21		幽霊読者（＊随筆）		山田清三郎	66-67	1.4				
22		鎖と槌（＊詩）		反抗しろ（五井政一）　波止場（富田治夫）　街頭にて（北島聖一）　鎖（加納驍村）　燃ゆる心（静村忠夫）　街 冷い人間（仁木二郎）　女工の病（野村喜三太郎）　強ッ芽（星野一時）　所謂真心（大沢政雄）　戦の唄（浅野純一）　「燃ゆる握手」（佐々木義郎）　乞食の自負（五十嵐みかわ）　爆発せよ（新井英）　新聞記者（森島政市）　前科者（島田黒猫）　此の地よ（金鯨波）	68-71	4	○		4	
23		孟子の追放（＊戯曲―第一幕二場）―成人のための童話劇―		武藤直治	72-82	11				
24		子供頌歌（＊小説）		山田定平	83-86	4				
25		どつちへ行くか？（＊戯曲）		葉山嘉樹	87-93	7				
26		編輯余録		(やまだ)(=山田清三郎)	94	0.8				
計					26点	88.9	2	1	6	3
	1926年6月号	**大正１５年６月号**								
1	**(第3巻第6号)**	帝国主義と芸術（＊評論）		青野季吉	5-8	4				
2	**6月1日発行**	社会・芸術家・共産主義（一）―海外社会文芸思潮―第一・（＊社会と芸術家の関係〈上〉）		ウイーランドヘルツフェルト　千田是也（訳）	9-13	4.5				
3		文壇的批評家（＊感想）		細田源吉	13	0.5				
4		前田河広一郎（四）		前田河広一郎	14-18	4.5				
5		新刊紹介（＊「岐路に立ちて」「解放の芸術」「芸術戦線」「農民」「無産階級芸術論」）			18	0.5				
6		緑蔭漫語―最近の感懐―		文芸の解放（吉江喬松）　ボクダノオの本（藤森成吉）　接吻問題（高畑素之）　プロレタリア文学とは（安成二郎）　毛色と眼色（山本実彦）　歌の韻律について（土田杏村）　水仙の芽（堺利彦）	19-21	3		○		3
7		トロツキーのプロレタリヤ芸術講話（＊第二講）		茂森唯士（訳）	22-25	4				
8		文藝戦線同人住所録			25,28	0.5	○		0.5	
9		社会科学的文芸批評（＊評論）		武藤直治	26-28	2.5				
10		おゝ同僚よ！（＊詩）		立野信之	29	1				
11		映画と観客心理の考察―私達の立場から―（＊感想）		今野賢三	30-32	2.5		○		2.5
12		昔物語と将来の話（＊随筆）		松本弘二	32-34	2				
13		彼の首を見よ（＊随筆）		米田曠	34-35	0.8				
14		昔の幻燈（＊随筆）		加藤由蔵	35-36	1.2				
15		復活一年（＊随筆）		山田清三郎	36	0.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
16		メーデーを考える（＊随筆）		柳瀬正夢	37-38	1.8				
17		日本プロレタリア文芸聯盟消息（＊埋草）			38	0.2				
18		鉄橋―海外社会文芸作品（三）―（＊小説）		エル・イヴン　佐々木孝丸（訳）	40-47	8				
19		文藝戦線・ブック・レヴュ		ピリニヤークの「イワン・ダ・マリア」を読んで（秋田雨雀） 「解放の芸術」を読んで（江馬修）	48-52	4.5				
20		在京読者懇親会（＊予告）			52	0.5				
21		六号地帯（＊読者投稿）		同人雑誌提唱反対の可否（水島治男）　哀楽（＊詩―深水三郎） 仲間よ！（＊詩―五十嵐久弥） 太陽・星・月（＊詩―西山勇太郎）　FORMOSAから（＊詩―大宅扶美緒）　櫻の花のひらくころ（＊詩―木山捷平）　わびしい光景(＊詩―木山捷平）　吾子（＊詩―伊藤和）　「同志」に就て（鈴木静雄）	53-56	4				
22		苦力頭の表情（＊小説）		里村欣三	57-64	8				
23		退屈主義者―喜劇―		井東憲	65-71	7				
24		開墾（＊小説）		犬田卯	72-77	5				
25		編輯後記		山田生（=山田清三郎）	78	0.8				
計					25点	71.8	1	2	0.5	5.5
	1926年7月号	**大正１５年７月号＊発禁**								
1	**(第3巻第7号)**	転轍手―一幕―（＊戯曲）		小堀甚二	4-10	7				
2	**7月1日発行**	敵(*小説)		壺井繁治	11-13	3				
3		「妻」一題（＊随筆）		山田清三郎	14-15	2				
4		教化運動と文学運動―「文学運動の中心点」再論―（＊評論）		山内房吉	16-18	3.5				
5		散弾（一）（二）			19,55	0.8				
6		前田河広一郎（五）		前田河広一郎	20-24	5				
7		ロシヤ生粋の農民作家―ネウエーロフの作品―（＊評論―未完）		富士辰馬	26-31	6				
8		感想・随筆　　ピリニャークについて思ふ		青野季吉	31-34	2.3				
9		性欲芸術―胆汁甘汁―		守田有秋	34-35	2				
10		或る役者		田辺若男	34-36	0.8				
11		唯物史観的文芸論―シンクレエア―		前田河広一郎	36-37	0.9				
12		農民自治会に就て		中西伊之助	37-38	0.8				
13		無産階級運動に於けるインテリゲンチャ		佐野袈裟美	38-40	2.3				
14		ブック・レヴュ		『幽霊読者』をよむ（武藤直治） 『農民』を評して―著者の一考を促す―（水野正次）　『シャルル、ルイ、フイリツプ』を読んで（今野賢三）	42-47	6		○		6
15		詩		六月！（宇津木正夫）　機械・人間・絶叫（仁木二郎）　雪の夜（西谷勢之介）　無題（山川景太郎）　懶惰な風景（小徳喜有次） 新緑（佐々木みね子）　眠れない夜の詩（奈良幸夫）　人・飢・馬（菅原紅二）　ダイヤモンドと拳骨（新嶋栄治）　腕二題（多田文三）　インタルナツイオナル（北山哲平訳）	48-51	4				
16		トロッキーのプロレタリヤ芸術講話（＊第三講）		茂森唯士（訳）	52-55	3.8				
17		社会・芸術家・共産主義（二）―海外社会文芸思潮―（＊社会と芸術家の関係下）		ウイーランド・ヘルツヘルト　千田是也（訳）	56-59	4				
18		労働文芸思潮としてのシンクレアリズム（＊評論）		神山宗勲	60-62	3				
19		六号地帯		「鉄橋」断想（諸石晋）　近感愚感（大沢政雄）　旗が行く（＊詩―竹内一美）　六号小感（山田清三郎）　勝利への階段（田淵甫） 新古典主義芸術（田代重雄）　ごたごた言（宮富正）	63-65	3				
20		二階の男―海外社会文芸作品（四）―（＊戯曲）		アプトン・シンクルエア　佐野硯（訳）	66-77	12				
21		編輯後記		(やま)（=山田清三郎）	79	0.8				
計					21点	73	0	1	0	6
	1926年8月号	**大正１５年８月号**								
1	**(第3巻第8号)**	地獄の審判（二齣のメロドラマ）		佐々木孝丸	4-14	11				
2	**8月1日発行**	都会（＊小品）		飯田徳太郎	15-17	3				
3		踏み台（＊小説）		黒島伝治	18-24	7				
4		新刊七つ（＊紹介、荒畑寒村「光を掲ぐる者」中西伊之助「国と人民」野村吉哉「三角形の太陽」勝原雅大「マルキシズムの国家理論」リベデインスキー作池谷信三郎訳「一週間」ｱﾝﾄﾞﾚｼﾞｲﾄﾞ小牧近江訳「シャルル・ルイ・フイリツプ」フランツモルナア作山中静也訳「接吻」			25	1		○		1
5		「労働者の芸術」に就て（＊評論）		本荘可宗	26-28	3				
6		AとBの話（＊感想）		吉田金重	29	1				
7		ロシヤ生粋の農民作家―ネウエーロフの作品―（承前）		富士辰馬	30-34	5				
8		工場文学の提唱―俺達の文芸に就て―（＊評論）		岡下一郎	36-39	4				
9		感想・随筆・小品　子供について―偶感―		葉山嘉樹	40-42	2				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
10		撒水夫と空		朝原吾郎	42-43	1.5				
11		Yに贈る手紙		中西伊之助	43-46	3.4				
12		夕闇を帰る		渡部信義	46-47	1.7				
13		胆汁甘汁―大衆文芸―		守田有秋	48	1.7				
14		調べた批評		小牧近江	48-50	2.3		○		2.3
15		諸家の農民文芸論を評す（＊評論）		犬田卯	51-53	3				
16		社会・芸術家・共産主義（三）（＊芸術家の共産主義へ行く道）		W・ヘルツフェルト　千田是也（訳）	54-57	4				
17		前田河広一郎（六）		前田河広一郎	58-61	4				
18		農民文学断想（＊感想）		平林初之輔	62-63	2				
19		六号地帯		青野氏の活躍（山路真市）　仮面を剥げ（成田元雄）　文壇的文芸家に与ふ（山下進）　煙（＊詩、吉田栄）　希望一つ（山田清三郎）	64-65	2				
20		まんだん―旗―		米田曠	66	1				
21		飢饉―海外社会文芸作品（五）―（＊戯曲）		ネワエーロフ作　井田孝平（訳）	67-78	12				
22		編輯後記		（山田）（=山田清三郎）	79					
計					22点	75.6	0	2	0	3.3
	1926年9月号	**大正１５年９月号**								
1	**（第3巻第9号）**	自然生長と目的意識（＊評論）		青野季吉	3-5	3				
2	**9月1日発行**	社会・芸術家・共産主義（*四）（＊ブルジョア社会に於ける共産主義芸術家の任務）		W・フルツヘ(ママ)エルト　千田是也	6-9	4				
3		前田河広一郎（七）		前田河広一郎	10-14	4.7				
4		「樹木と果実」（＊紹介）		（やま）（=山田清三郎）	14	0.3				
5		文芸批評と弁証法（＊評論）		赤木健介	15-17	2.7				
6		僚誌の災厄（＊「解放」発禁について）			17	0.3				
7		感想・随筆・小品　　西日を浴びつつ		山田三清郎（=山田清三郎）	18-19	1.3				
8		おでん屋		朝原五郎	19-20	1				
9		青白き幻想―若きインテリゲンチャの首に醱酵したる夢―		米田曠	20-21	1.7				
10		「野良に叫ぶ」（＊渋谷定輔詩集）	ブック・レヴュ	中西伊之助	22	1				
11		死刑囚の手記―吉田大次郎の「死の懺悔」を読みて―		武野藤介	23-24	1.9				
12		「国と人民」読後		青野季吉	24-25	1.1				
13		雪と血と煙草の進軍（＊詩）		三好十郎	26-27	1.5				
14		のり出した船だけど（＊詩）		林芙美子	27-28	1.2				
15		断片（＊詩）		三輪猛雄	28-29	1.2				
16		無産階級の恋愛思想（＊評論）		高群逸枝	30-32	3				
17		トロツキーのプロレタリア芸術講話―（第四講―現ロシアに於けるプロレタリア文学の位置）		茂森唯士（訳）	33-35	2.5				
18		実証美学小説（＊評論）		麻生義	38-36	3				
19		子供の腹（＊詩）		槇本楠郎	39	1				
20		「探照燈」と「地獄の審判」（＊合評）		久板栄二郎、水野正次、千田是也、佐野碩、山田清三郎	40-41	2				
21		母 ―一幕の群集劇 ―海外社会文芸作品（六）（＊戯曲）		カアル・アウグスト・ウキツトフォーゲル　川口浩（訳）	42-53	13				
22		新しき出発―農民文学私見―（＊感想）		西本洸	54-55	1.4				
23		「文戦」の下に結集せよ！（＊感想）		太田龍太郎	55-56	1.2				
24		中西氏への返事（＊感想）		水野正次	56-57	0.8				
25		僚誌盗見（＊感想）		大沢生	57-58	0.4				
26		俺達の註文（＊感想）		東川静治	58	0.3				
27		インテリゲンチャ考（＊感想）		水島治男	58-59	0.4				
28		山路真市君へ（＊感想）		中西伊之助	59	0.3				
29		靴の悲哀（＊感想）		ふらっぷ・ちらっぷ	59-60	1.2				
30		新刊紹介（＊藤森成吉「磯茂左衛門」、葉山嘉樹「淫売婦」、小川未明「堤防を突破する波」、辻本浩太郎「強い男」）			61	1				
31		罠（＊戯曲一幕）		金子洋文	62-66	5	○			
32		娘の横ッ面（＊小説）		里村欣三	67-69	3				
33		浚渫船（＊小説）		葉山嘉樹	70-76	7				
34		編輯後記（やまだ）			77	0.8				
計					34点	74.2	1	0	5	0
	1926年10月号	**大正１５年１０月号　（秋季特別号）**								
1	**（第3巻第10号）**	婦人労働者に（＊巻頭詩）		デミヤン・ベエドヌイ　中野重治（訳）	4	1				
2	**10月1日発行**	犠牲者―「無産者新聞」主催「無産者の夕べ」上演脚本―（二幕）		久板栄二郎	5-18	13				
3		罵られた子供（＊小説）		村山知義	18-25	8				
4		盆踊り占領　（全秋田合同労働組合家族慰安会のため執筆せるもの、八月三十一日組合員のみの素人俳優にて上演）		今野賢三	26-29	5		○		5
5		中間派の文学論―大槻憲二氏の「階級意識止揚論」を駁す―（＊評論）		林房雄	30-37	7.8				
6		左翼文壇新作家論（一）小堀甚二論（＊座談会）		久板栄二郎、水野正次、佐野碩、千田是也、山田清三郎	38-41	3.7				
7		淫売婦を読んで（＊感想）		岩井生	41	0.3				
8		新発展期を迎へたプロレタリア文学運動（1）我国プロレタリア文学運動の発展（＊評論）		谷一	42-44	2.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
9		最近に於るプロレタリア文芸論の諸問題（＊評論）		岩崎一	44-47	3.5				
10		戦線語（耿、やま、水野、英、碩）			48-49	2				
11		近事感想　　短信		青野季吉	50-52	2	○		2	
12		山から二つ（＊白樺その他、プチブル意識）		佐々木孝丸	52-54	2.7				
13		贅肉一擲		前田河広一郎	54-56	1.5				
14		何でもないことのやうだが		山田清三郎	56-57	1.5				
15		第二闘争期は今来てゐる（＊感想）		松本淳三	58-59	1.5				
16		秋風に寄せて（＊随筆）		和田伝	59-60	1.8				
17		日本を見よ―水野君へ―		中西伊之助	61	0.7				
18		新生活意慾の文学―その素描―（＊評論）		芳賀融	62-63	1.3				
19		革命劇夜を讀め!!-マルチネを知れ-		水野正次	63-65	2.7				
20		前田河広一郎（八）		前田河広一郎	66-71	5.5				
21		社会・芸術家・共産主義（*五）（＊ブルジョア社会に於ける共産主義芸術家の任務２）		W・ヘルツフェルデ　千田是也（訳）	72-76	4.6				
22		前号の作品から（＊合評会ウキットフォーゲル「母」、金子洋文「罠」）		久保栄二郎、水野正次、佐野碩、千田是也、谷一、山田清三郎	77-78	2	○		2	
23		炭坑夫―海外社会文芸作品（七）―（＊戯曲）		ル・メルテン作　佐野碩（訳）	80-95	16				
24		編輯後記（＊無署名）			96	0.7				
計					24点	91.3	2	1	4	5
	1926年11月号	**大正１５年１１月号（秋季特別創作号）**		＊注 この号は発売禁止。						
1	**(第3巻第11号)**	プリスタワルトの死骸（＊巻頭詩）		エルンスト・トラ　中野重治（訳）	5	1				
2	**11月1日発行**	豚群（＊小説）		黒島伝治	6-14	9				
3		銅像になつた将軍と馬（＊小説）		飯田豊二	15-19	5				
4		当世実業家気質―続新いそっぷ物語―		林房雄	20-23	4				
5		スロットル・ヴァルブ(節汽弁)（＊小説）		久板栄二郎	24-26	6				
6		逃走（＊小説）		佐左木俊郎	30-37	8				
7		誰が殺したか―長篇小説の一節―		葉山嘉樹	38-47	10				
8		足袋―「与吉短篇集」その一―		山田清三郎	48-50	3				
9		「無産者の夕」演劇写真		十月二、三日両夜 於 芝協調会館	51	1				
10		智識階級世界観の分裂過程終る（＊評論）		赤木健介	52-55	4				
11		感性と理念と―（新発展期を迎へたプロレタリア文学運動（2））（＊評論）		鹿地亘	56-58	2.7				
12		マルチネ「夜」を読んで（＊感想）		箱崎四郎	58	0.3				
13		社会・芸術家・共産主義（*六）（＊共産主義国家に於ける芸術家）		W・ヘルツフェルデ　千田是也（訳）	59-63	4.7				
14		戦線語（林、碩、山田）			64-65	2				
15		大衆劇、その他雑感（＊素人監督の経験、無産者の夕べを見て、ほか）		今野賢三	66-68	7.3		○		7.3
16		「暁」の冠頭譜（＊詩）		米田曠	68-69	1				
17		プロレタリアの文章（＊感想）		内藤辰雄	69-70	1.5				
18		日記小信（＊随筆）		三川秀夫	70-72	1.6				
19		生命と解放の劇芸術（＊感想）		田辺若男	72-73	1.5				
20		左翼文壇新作家論（二）林房雄（＊座談会）		今野賢三、鹿地亘、小川信一、松井謙、北里仲、中野重治、久板栄二郎、山田信道、佐々木孝丸、山田清三郎	74-77	4		○		4
21		一言なきを得ない（新作家論に対する被批評作家の答）		小堀甚二	78-80	3				
22		展望小感（＊感想）		小田隆	81	1				
23		前田河広一郎（九）		前田河広一郎	82-87	5.5				
24		前号の作品から（＊合評、今野賢三「盆踊り占領」、久板栄二郎「犠牲者」）		鹿地亘、佐々木孝丸、今野賢三、小川信一、北里仲、松井謙、山田清三郎	88-89	2		○		2
25		小さいペーター―海外社会文芸作品（八）―（＊小説―未完）		ヘルミニヤ・ツール・ミユーレン　林房雄（訳）	90-97	8				
26		編輯後記		(＊無記名)	98	0.8				
計					26点	97.9	0	3	0	13.3
	1926年12月号	**大正１５年１２月号**								
1	**(第3巻第12号)**	万年大学生の作者に（＊巻頭詩）		中野重治	4	1				
2	**12月1日発行**	第二の発展期と「文藝戦線」―「文藝戦線」の陣容更新に就て―（＊評論）		山田清三郎	5-8	4				
3		社会・芸術家・共産主義（*完）（＊共産主義国に於ける芸術家）		W・ヘルツフェルデ　千田是也（訳）	9-13	4.5				
4		前号創作一人一評　豚群（林房雄）　スロトル・ヴァルブ（松井謙）			13	0.5				
5		崩壊期の文学（＊評論）		河尻修一郎	14-17	4				
6		プロレタリヤ文芸批評家の当面の任務（新発展期を迎へたプロレタリア文学運動（三））		遠藤慎吾	18-21	3.5				
7		前号創作一人一評―「銅像になつた将軍と馬―飯田豊二　―足袋―山田清三郎		（佐々木孝丸評）（金子洋文評）	21	0.5	○		0.5	
8		左翼文壇新作家論（三）葉山嘉樹論（＊座談会）		林房雄、小堀甚二、前田河広一郎、金子洋文、佐野碩、中野重治、鹿地亘、佐々木孝丸、山田清三郎	22-27	6	○		6	
9		批評について（＊新作家に対する作家の答）		林房雄	28-30	2.5				
10		聯盟旗（日本プロレタリア文芸聯盟会報より）			30	0.5				
11		前田河広一郎（十）		前田河広一郎	31-35	4.7				
12		戦線語（山田、林、久板）			36-37	2				
13		我等の劇団前衛座生る！（＊報告）前衛座宣言			38	1.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
14		我等の劇壇「前衛座」について（＊紹介）		久板栄二郎	39-40	1.5				
15		前衛座キャラバン		佐々木孝丸　小河宮吉	40-41	1.3	○		1.3	
16		秋の軍隊（＊詩）		三好十郎	42-43	2				
17		反抗心について（＊随筆）		葉山嘉樹	44-45	1.5				
18		「親と子」（＊随筆）		大河内信威	45-47	2.2				
19		作品の整正（＊随筆）		岡下一郎	47-48	1				
20		母と子の記録（＊随筆）		伊福部敬子	48-50	2				
21		三人を送る（＊随筆）　＊注３		小牧近江	50-53	3	○		3	
22		ヘッド・ライト		「海に生くる人々」を読む（赤木麟）　黎明前期のプロレタリヤ文学（松本悟郎）　学聯の立場から水島氏へ（幌原浩）　トロッキーの文化観小考（黒住大助）　無産階級運動に於ける芸術に地位（和田一郎）　佐々木孝丸氏に（小笠原勝）　堤防を突破する浪（松本草平）	54-60	7				
23		神主の子（＊小説）		松井締子	61-70	10				
24		早鐘（＊戯曲、一幕）		小野宮吉	71-79	9				
25		古戸棚（＊小説）		平林たい子	80-84	5				
26		当世実業家気質―続新いそっぷ物語―		林房雄	85-89	4.5				
27		小さいペーター（＊完結）―海外社会文芸作品（九）―		ヘルミニヤ・ツール・ミューレン　林房雄（訳）	90-98	9				
28		編輯後記（＊山田）		(=山田清三郎)	99	0.8				
計					28点	94.8	4	0	10.8	0
	1927年1月号	**昭和２年１月号**								
1	**(第4巻第1号)**	小さい田舎者（＊小説）		山田清三郎	5-26	22				
2	**1月1日発行**	「足」（＊戯曲一幕）		西光万吉	27-33	7				
3		疥癬（＊小説）		里村欣三	34-47	14				
4		彼れ（＊小説）		今野賢三	48-58	11		○		11
5		降って来た人――幕、三場―（＊戯曲―未完）		葉山嘉樹	59-65	7				
6		世界地図（＊小説）		赤木健介	66-70	5				
7		棄てる金（＊小説）		若杉鳥子	71-73	3				
8		橋梁を行く二人―兄より弟への手紙二通―（＊小説）		小堀甚二	74-78	5				
9		白い坂をのぼる―過ぎ去った年の暮とそして今―（＊小説）		金子洋文	79-86	8	○		8	
10		メキシコ人―五場―（＊戯曲）		ジャック・ロンドン原作　前田河広一郎脚色	87-101	15				
11		自然生長と目的意識再論（＊評論）		青野季吉	102-105	4				
12		文壇の階級的文化その他（＊文芸時評）		林房雄	106-110	5.5				
13		新刊案内（＊文学評論、義人ジミー）			110	0.5				
14		無産者文芸の質的転換（＊評論）		谷一	111-113	3				
15		文藝戦線（健介、碩、前田河、房雄）			114-115	2				
16		随筆　　牛めし		山川均	116-117	1.5				
17		実際にあった会話		関鑑子	117-119	2				
18		小豆島にて		黒島伝治	119-121	1.5				
19		祖国		小牧近江	121-122	1.5		○		1.5
20		新しき村を嘲う		久板栄二郎	122-125	3				
21		我々は何を読むべきか（一）（＊「プロレタリア経済学」ほか八冊）			126-127	1.8				
22		消息			127	0.2				
23		前田河広一郎（十一）		前田河広一郎	128-121	4				
24		前衛座第一回公演を終って　　自評一端		佐々木孝丸	132-133	1.2				
25		前衛座第一回公演を見て		谷一	133	0.8				
26		前衛座の舞台から		小野宮吉	134	0.7				
27		「解放されたドン・キホーテ」演出後記		佐野碩	134-137	2.6				
28		廊下の立ち話		越智英夫	137	0.6				
29		ラ・フロント　　松本悟郎氏の所論を駁す		木部正行	138-140	1.3				
30		プロレタリアの演劇・映画		立野信之	140-142	2				
31		子供・童話・社会主義		隅田真市	142	6				
32		レエニンと芸術（＊評論）		ルナチャルスキー　千田是也（訳）	143-148	6				
33		ドルダーショフの死―海外社会文芸作品（十）―（＊小説）		イサーク・バーベル　辻　恒彦（訳）	149-152	4				
34		編輯後記		（山田）(=山田清三郎)		0.8				
計					34点	153.5	1	2	8	12.5
	1927年2月号	**昭和２年２月号**								
1	**(第4巻第2号)**	ハミット王と小説（＊巻頭言）		前田河広一郎	5	1				
2	**2月1日発行**	―社説―社会主義文芸運動（＊自然成長性と目的意識性、社会主義文学と芸術価値）			6-9	4				
3		現代日本文学と無産階級―現代日本文学の歴史的考察―（評論）		蔵原惟人	10-15	5.4				
4		理論的闘争と其目的―戦線小論―		松原敏夫	15	0.6				
5		「無産者新聞」の文芸版―附、大槻憲二氏に答ふ―（文芸時評）		林房雄	16-20	5				
6		国際無産文芸運動の現勢（＊北米合衆国、英国、フランスその他）		辻恒彦	21-23	3				
7		犯人（＊小品）		葉山嘉樹	24-26	2.3				
8		酒場の男―或る自治寮生の話―（＊小品）		岩永胖	26-29	2.8				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
9		幽霊（＊小品）　　映画時評（＊ロシヤ映画ポチョムキンほか）		渡部信義	29-31	2.9				
10		演劇・映画・美術　　「平行」を見る―築地小劇場とコンマアシャリズムの話―		金子洋文	32-34	2.3	○		2.3	
11		上野の美術		千田是也	34-36	2				
12		前衛座演劇研究所に就いて		木部正行	36-38	1.3				
13				久板栄二郎	38-39	1.7				
14		ブック・レビュ		海に生くる人々小感（山田清三郎）　義人「ジミー」を読んで（里村欣三）　「シャルル・ブランシャル」（前田河広一郎）	40-43	4				
15		文藝戦線（山田、前田河、佐野碩、林）			44-45	2				
16		流れに抗して（＊感想・評論）	(1)新居格氏を嘲ふ	小堀甚二	46-49	3.5				
17		流れに抗して（＊感想・評論）	(2)小野十三郎君を駁す　アナーキズムの反動化	末永茂喜	49-53	4				
18		流れに抗して（＊感想・評論）	(3)林癸未夫氏に　偉大なる笛吹き―科学的文学論者 林癸未夫氏に―	遠藤慎吾	53-56	3.5				
19		前田河広一郎（十二）		前田河広一郎	57-62	6				
20		アギートカ万歳		ゲ・レレーウィッチ　蔵原惟人（訳）	63-64	2.5				
21		戦の唄　(*詩)		浅野純一	65	0.5				
22		レエニンと芸術（＊評論）		Ｌ・Ｓ・ソスノフスキー　千田是也（訳）	66-71	6				
23		手を！（＊詩）		水上雅雄	72	0.9				
24		街を作る魔法使ひ（＊詩）		奈良幸夫	72-73	1.1				
25		ラ・フロント		我等の美論（久板栄二郎）　弁証論者の非弁証法的思考―赤木健介氏所論を評す―（砂田秀三）　小ブルジョアイデオロギーの排撃（岡本陽造）	74-78	5				
26		パン無しジャン（＊童話）　海外社会文芸作品(11)		ヴィヤン・クチュリエ作　佐々木孝丸（訳）	79-99	21				
27		老給仕人（＊小説）		村山知義	100-106	7				
28		點京城の顔の點描（＊小説）		赤木麟	107-112	5				
29		朝が眼を開くまで（＊小説）		今野賢三	113-120	8		○		8
30		編輯後記		（山田）(=山田清三郎)	121	0.8				
計					30点	115.1	1	1	2.3	8
	1927年3月号	**昭和２年３月号**								
1	**(第4巻第3号)**	虱の芸術至上主義（＊巻頭言）		佐々木	5	1				
2	**3月1日発行**	彼等の一生（＊小説）		黒島伝治	6-20	14				
3		あらし―一幕―（＊戯曲）		武藤直治	21-29	9				
4		戸籍謄本（＊小説）		岡下一郎	30-47	18				
5		『戦闘は継続する！』―三場―労農党東京北部支部主催「無産者の夕べ」上演台本		久板栄二郎	48-67	20				
6		無産階級文芸運動と政治闘争―社説―（＊芸術の社会的役割、無産階級文学の社会的役割、無産階級の政治闘争及び政党、政治闘争段階に於ける無産階級文学、所謂「文壇」に於ける闘争）			68	3				
7		マルキシズムに立脚する文芸運動（＊評論）		佐野袈裟美	71-74	3.5				
8		お前は知ってゐるか（＊詩）		石井安一	74	0.5				
9		進出より展開へ―文芸家の立場より―		今野賢三	75-79	4.6		○		4.6
10		「こぼす」こと（＊感想）		青野季吉	79	0.4				
11		文芸運動の政治的意義（＊感想）		小牧近江	80-81	2		○		2
12		海外プロレタリア詩集		鼓手の唄（Ｆ・Ｃ・ワイスコップ、辻恒彦訳）　我等（ウラヂミール・キリルロフ、蔵原惟人訳）　戦ひの言葉（エドキン・ヘルソレ、辻恒彦訳）　党員証No.224332（アベ・ズイミョーンスキイ、蔵原惟人訳）　帽子に就いて―トローツキイに―（青年等より）	82-86	5				
13		四詩人小伝（＊「海外プロレタリア詩集」の各作品者の小伝）			87	1				
14		流れに抗して	村松正俊氏の所論を駁す	高杉暢夫	88-92	4				
15			加藤一夫氏に答ふ	末永茂喜	92-95	2.3				
16			今東光氏の膠見	中野正人	95-97	1.7				
17			或る人道主義者―この一篇を木村荘五氏に捧ぐ―	津村敏夫	97-100	3.8				
18		前田河広一郎（十三）		前田河広一郎	101-105	5				
19		文藝戦線（佐々木、林、山田）			106-107	2				
20		感想・随筆・小品	僕と文芸前線（＊同人になったことに関する感想）	藤森成吉	108-109	1.8				
21			演説会一景	里村欣三	109-111	2.2				
22			冬籠り	荒畑寒村	112-113	2				
23			漁場行	等々力徳重	114-117	3.6				
24			余白へでも	青野季吉	117-118	1				
25			去年の春から夏	小堀甚二	118-119	1.5				
26		相互批判＊注１	結晶化しつつある小市民生	中野重治	120-122	2.3				
27			目的意識把握に対する異論	森矢久治	122-123	1.3				
28			プロレタリヤ文学と「目的意識」	蔵原惟人	124	0.5				
29			公式適用的芸術論	山田清三郎	124-126	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
30		ブック・レビュ		『暁』の第三部（前田河広一郎）、絵のない絵本―同志、林房雄の短篇集を読んで―（葉山嘉樹）	127-129	3		○		3
31		演劇・映画・美術	映画時評	金子洋文	130-132	2.3	○		2.3	
32			舞踊の第四階級化	武田忠哉	132-135	3.2				
33			新劇の掃き溜め―演劇漫語―	佐々木孝丸	135-136	1.5				
34		レエニンと芸術（3）		クルプスカヤ　千田是也（訳）	137-142	6				
35		自然文学主義の消長―現代日本文学と無産階級（２）―（現代日本文学の歴史的考察）		蔵原惟人	143-148	6				
36		テーゼに関する誤解について―鹿地君に答へる―		林房雄	149-155	7				
37		ボリシェウィチカのマリヤ―海外社会文芸作品（12）―（＊小説）		ア・ネウエーロフ　蔵原惟人(訳)	156-162	7				
38		編輯後記		（山田）(=山田清三郎)	163	0.8				
39		社告			164	0.5	○		0.5	
計					39点	156.3	2	3	2.8	9.6
	1927年4月号	**昭和２年４月号**								
1	**(第4巻第4号)**	「腋の下」・・・・・・（＊巻頭言）		小堀甚二	5	1				
2	**4月1日発行**	プロレタリヤ文芸運動の現段階と其任務―プロレタリヤ文芸運動の指導理論としての芸術理論確立の急務―		田口憲一	16-28	24				
3		世界の動き＊注２	支那の国民革命とその必然的展開	佐野袈裟美	30-37	7.2				
4			ジャワの争乱	小牧近江	37-41	4.8		○		4.8
5		北浦氏「アンチ福本イズム」の分権的基礎（＊評論）		蔵原惟人	42-45	3.8				
6		演劇・映画・美術	映画時評（＊帝国ホテル、ウキンダミヤ夫人の扇について）	金子洋文	46-47	2	○		2	
7			新劇協会の行衛	小川信一	48-50	2.2				
8			説明者の階級意識	守谷治久	50-52	1.2				
9			新しき俳優の芸術	田辺若男	52-53	0.8				
10		文藝戦線（山田、里村、林）			54-55	2				
11		感想・随筆・小品	楚王とモリス、孔子とレーニン	堺利彦	56-58	3.7				
12			戦争について	黒島伝治	58-59	1.3				
13			長篇小説の批評に答ふ（＊前田河「光に生きる」にふれて）	今野賢三	60-62	2.5		○		2.5
14			思想と生活と	平林たい子	62-63	1.3				
15			大阪を背景にして	岡下一郎	63-65	2.1				
16		流れに抗して	「無産者文芸運動の認識錯誤につき」―芳賀融氏の愚論を一蹴す―	田口憲一	66-70	4.2				
17			今東光氏「推論の途中」を読むで	松原敏夫	70-72	2				
18			所謂農民文学論―五十公野清一君に答ふ―	山田清三郎	72-73	1.8				
19		ブック・レビュ		「小さい田舎者」の印象（小牧近江）、「人間機械」（岡下一郎）、「転換期の文学」のもつ意義（平林初之輔）	74-78	5		○		5
20		われらの詩は（＊詩）		上野壮夫	79	0.5				
21		上海総罷業の日に（＊詩）		上里春生	79-80	1.3				
22		朝は来るのだ（＊詩）		葉山嘉樹	81	0.5				
23		前田河広一郎（14）		前田河広一郎	82-87	5.5				
24		映画革命への呼声（＊評論―未完）		袋一平	88-95	8				
25		バアーナード・ショオ―ブルジョアジイの幇間―（＊評論）		K・A・ウィットフォオゲル　佐野碩（訳）	96-100	5				
26		プリンス・ハアゲン演出前記（＊感想）		村山知義	101-103	2.7				
27		タワーリシチ（自由評壇）		我々の要望（石川漏次）　私信にかへて（叶多太平）　農民文芸発生の姿（豊田勇）　葉山嘉樹氏の近業（奈良幸夫）　言葉に就て望む（森田一二）　農民作家よ（佐々木義郎）	104-109	6				
28		息子―海外社会文芸作品（14）―（＊小説）（＊先号に（13)はない。前号の海外プロレタリア詩集を数えた可能性がある）		セルゲイ・ブタンツェフ　蔵原惟人・小林吉作（訳）	110-126	16.5				
29		東北地方講演旅行記		葉山嘉樹　山田清三郎	127-128	2				
30		娘の時代（＊小説）		里村欣三	129-140	12				
31		農村一景―一幕―（＊戯曲）		伊藤忞	141-149	9				
32		鉄窓の花		林房雄	150-160	11				
33		編輯後記（山田）			161	0.8				
計					33点	15.7	1	3	2	12.3
	1927年5月号	**昭和２年５月号**								
1	**(第4巻第5号)**	メーデー（＊巻頭言）		前田河	5	1				
2	**5月1日発行**	メーデー讃歌、五月の歌（＊詩）		ヴェ・キリルロフ　蔵原惟人（訳）	6-7	1.3				
3		我等の五月祭（＊詩）		エル・イヴン　本郷一郎（訳）	7	0.7				
4		文芸の領域に於ける露国共産党の政策（＊ウロンスキーの「文学の現状と露国共産党の任務」、クルヂンの報告演説、ウヤチ・ポロンスキーの見解、ゲ・レレーウチツの論駁、エム・プハーリンの注意）		千田是也・蔵原惟人（訳）	8-32	25				
5		世界の動き	太平洋の争奪戦と沿岸労働組合会議	小牧近江	33-38	5.2		○		5.2

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
6			帝国主義者から見たロシヤの対支政策	佐野袈裟美	38-43	5.8				
7		プロレタリヤ文芸運動の方向転換は如何にして可能である？　―左翼文芸家意識は如何にして戦ひ取るべきか？―（＊評論）		田口憲一	44-55	11.7				
8		電車（＊詩）		金子洋文	55	0.3	○		0.3	
9		「アンチ福本イズム」の誤訳に就て（＊蔵原の批判に対する反駁）		北野千太郎	36-59	3.8				
10		演劇・映画・美術	映画時評（＊我若し王者なりせば、ポー・ジェストほか）	金子洋文	60-62	2.2	○		2.2	
11			紳士俳優その他（＊感想）	佐々木孝丸	62-63	1.3				
12			「母親」について（＊感想）	鎌倉好雄	63	0.5				
13		前田河広一郎（15）		前田河広一郎	64-67	4				
14		相互批判	自己清算の為めに―併せて、田中憲一氏に―	遠藤慎吾	68-72	4				
15			現段階に於ける無産者芸術の危険性	黒住大助	72-76	3				
16			実践的考察の提言の一部	今野賢三	76-79	3.5		○		3.5
17		文藝戦線（山田、里村）				2				
18		科学と熱情―時評―（＊勝本清一郎「社会文芸論の修正」にふれて）		藤森成吉	82-84	2.3				
19		文芸時評（＊再び文学理論の確立へ、文芸運動の限界と任務、ほか）		山内房吉	84-87	3.5				
20		文化闘争と無産階級運動―青年共産インターナショナルは之を如何に把握したか―（＊評論）		田口憲一	87-89	2.2				
21		ブック・レビュ		『芸術と社会生活』（林房雄）、『浚渫船』を読んで（小堀甚二）、『解放されたドン・キホーテ』（武藤直治）	90-93	3.7				
22		メーデーの列（＊詩）		藤森成吉	91	0.1				
23		五月祭の農民（＊詩）		黒島伝治	53	0.2				
24		感想・随筆・小品	ガンガラ河のはなし	田口運蔵	94-98	3.9				
25			二三の火花（＊屑を拒め、単純化へ、詩を見ろ）	三好十郎	98-101	2.7				
26			モダン・ガアルを嗤ふ	中野正人	101-103	1.9				
27			発禁寸言	米田曠	103-105	1.8				
28			林房雄氏の「転形」	平林たい子	105-106	2.2				
29		タワリツシ		秋田雨雀氏へ抗議（森田一二）　「小さい田舎者」を読む（奈良幸夫）　田口氏への感謝状（宅昌一）　失業の巷から（竹内生）　同人諸氏へ（森元一）　再組織のプロ芸に望む（沼田法雄）	107-111	5				
30		魔天閣―海外社会文芸作品（15）―（＊戯曲―一幕）　前衛座第三回上演台本		K・A・ウキットフォーゲル　佐野碩・江馬貞雄（訳）	112-123	12				
31		前衛座の稽古部屋から･･･―第二回公演に際して―（＊座談会）		千田是也、佐野碩、佐々木孝丸	124-127	4				
32		東海地方講演旅行記		里村欣三	128-129	2				
33		メーデー前後の記（＊感想）		我等のメーデー（桶口弘）　メーデーを前にして（金熙明）　メーデーの思ひ出（浅野純一）　函館から（水谷三重三）　食ふ為の一期間（安武善広）　労農ロシア農府に送る建議案一つ―メーデーの賀状特別扱ひの件―（松村善寿郎）　五月一日のクレムリン（L・S・ソスノフスキー）	130-141	12				
34		抗夫の子（＊小説）		葉山嘉樹	142-149	8				
35		労働祭（＊小説）		岡下一郎	150-161	12				
36		脚を折られた男（＊小説）		黒島伝治	162-171	10				
37		或る校正係（＊戯曲一幕		山田清三郎	172-176	4.5				
38		編輯後記		（山田生）(=山田清三郎)	177	0.8				
計					38点	170.1	2	2	2.5	8.7
	1927年6月号	**昭和２年６月号**								
1	**(第4巻第6号)**	無題（＊巻頭言）		青野季吉	5	1				
2	**6月1日発行**	新諸日本無産階級文芸界同志（＊檄文―原文と共に、「日本の無産階級文芸界同志に訴ふ」という筆者の訳になる日本文がある）		郁達夫	6-7	2				
3		文戦漫画（＊京都学生事件の正体、支那プロレタリアートの威力）		柳瀬正夢	8-9	2				
4		千田是也の渡欧を送る		文藝戦線同人	10	1				
5		文芸時観（＊評論について、彼等の鑑賞、芥川氏の待望、憎悪の問題）		青野季吉	11-17	7.5				
6		党へ！党へ！（＊詩）		菅原紅二	17	0.5				
7		文藝の領域に於ける露国共産党の政策（２）（＊エル・トローツキイの所説）		外村史郎（訳）	18-33	16				
8		小ブルジア革命主義者の文学論（＊評論）		田口憲一	34-37	4				
9		青天白日の国へ（＊支那紀行）		小牧近江　里村欣三	38-46	9		○		9
10		マルクス主義精髄の言葉（１）		カール・コルシュ　水沢清（訳）	47-51	5				
11		演劇・映画・美術	映画時評（＊喜劇、弥次喜多従軍記、キートンの映画）	金子洋文	52-54	2.1	○		2.1	
12			演劇雑記（＊感想）	小野宮吉	54-56	1				
13			時代物映画一考	守谷治久	56-57	1.2				
14			断片	青野季吉	57	0.5				
15		文藝戦線（山田）		（山田）(=山田清三郎)	58-59	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
16		お前は戦争に行くのか―海外社会文芸作品（16）―（＊長詩）		マルセル・マルチネ　佐野碩（訳）	60-64	4.7				
17		映画革命への呼声（＊承前）		袋一平	65-69	5				
18		小さい同志―子供の欄―（＊夜の顔、五月一日の檄）		林房雄（編）	70-72	3				
19		相互批判	無産派文学の現段階に於ける問題とその批判―「文戦」当面の問題―	本荘可宗	74-81	7.3				
20			再び北浦氏の誤謬に就いて	蔵原惟人	81-84	3.5				
21			精算の誤算―再び遠藤氏に附黒住氏に―	田口憲一	84-87	2.5				
22			「相互批判」について	原口亮	87	0.5				
23		全世界の同志は（＊詩）		上野壮夫	88-89	2				
24		世界の動き	支那国民革命の危機	佐野袈裟美	90-96	6.6				
25			反殖民地圧迫大会に於けるアンリ・バルビスの演説	近谷新作(=近江谷晋)	96-98	2.4		○		2.4
26		中国文学家の英国知識階級及び一般の民衆に対する宣告			99-103	5				
27		前田河広一郎（十六）		前田河広一郎	104-109	6				
28		感想・随筆・小品	泣言追放―或は清算的感想―	林房雄	110-112	2.6				
29			我等は彼等と闘ふ	中野正人	112-117	4.5				
30			勲八等瑞宝章―よぼよぼ爺さんの胸に光る勲章―		117-119	3				
31			「彼等」の愚劣なる武器―藤森淳三氏の謬論―（＊評論）	宮本顕治	119-125	4				
32			病中語	山田清三郎	128-125	2				
33		千田是也より		千田是也	125	0.3				
31		新軍閥蒋介石の正体？（革命支那事情）		本誌特派員＊注２	126-137	12		○		12
32		宣言と声明（＊宣言、日本無産派文学聯盟に対する声明書）		日本プロレタリア芸術聯盟	138-139	2				
33		千葉市講演会記		岡下一郎	140	1				
34		塔―一幕―（＊戯曲）		小堀甚二	141-149	10				
35		彼を殺さうとしたが（＊小説）		松浦清一	150-163	14				
36		広い世界へ―三場―（＊戯曲）		佐野袈裟美	164-182	19				
37		編輯後記		（山田）(=山田清三郎)	183	0.8				
計					37点	178.5	1	3	2.1	23.4
	1927年7月号	**昭和２年７月号**		*同人組織から労農芸術家聯盟機関誌になる*						
1	**(第4巻第7号)**	新主体の確立と「文藝戦線」（＊巻頭言）		（山田）(=山田清三郎)	5	1				
2	**7月1日発行**	新ロシア美術展画報（＊口絵）			6-7	2				
3		声明		労農芸術家聯盟	8-9	2				
4		綱領（草案)(＊一般的及び特殊的理論、具体的行動の規準の二部からなる）		労農芸術家聯盟　（＊青野末吉・田口憲一執筆）	10-23	14				
5		闘争理論としての芸術理論―プロレタリヤ芸術理論序説―（＊芸術理論の方法論―未完）		田口憲一	24-37	14				
6		芸術と科学及び政治との関係に就て（＊評論）		山内房吉	38-40	3				
7		演劇・映画・美術	新ロシヤ美術展の教訓（＊評論）	小川信一	41-46	5.7				
8			戦闘艦ポテムキン（＊感想）	本郷一郎	46-49	2.7				
9			新劇協会と築地（＊感想）	立野信之	49-50	1.6				
10			映画時評（＊プロレタリア映画、曲芸団を見る、日本の映画）	金子洋文	51-53	2.7	○		2.7	
11		文藝の領域に於ける露国共産党の政策（三）（＊ア・ルナチャールスキイの意見、文芸の領域に於ける党の政策に就て）		蔵原惟人（訳）	54-63	9.5				
12		小さい同志（子供の欄）		光に向って立て！―ドイツ無産少年団の檄―（林訳）　人間は昔の召使を忘れてしまふ（童話、ヘルマン・バウヘル、田口憲一訳）　母よ（詩、菅原芳助）　学校闘争（＊評論、林房雄）	64-71	8				
13		マルクス主義精髄の言葉（2）		カール・コルシュ　水沢清（訳）	72-75	4				
14		灰―海外社会文芸作品（17）―（＊小説）		マックス・バルテル　辻恒彦（訳）	76-80	5				
15		前田河広一郎（十七）		前田河広一郎	81-85	5				
16		ブック・レビュ		ゴーリキへの手紙（田口憲一）　『社会民主々義の行方』を読んで（小堀甚二）　『何が彼女をさうさせたか！』（山田清三郎）	86-89	4				
17		我々は何故彼等を排撃するか	芸術至上主義と「政治闘争主義」との機械的結合―良心的小ブルヂョア・イデオロギーの典型的表はれとしての久板栄二郎君の所論―	佐々木孝丸	90-95	5.3				
18			日本プロレタリヤ芸術聯盟幹部諸君の迷蒙	小堀甚二	95-97	3				
19		真夏の生活（＊小品集）	若き農夫の一日	石井安一	98-99	1.3				
20			岱赭に染まる	安井善広	99-101	1.5				
21			硝子吹き	松居康廣	101-102	1.3				
22			腐った油の悪臭	岡下一郎	102-103	1.6				
23		詩（＊投稿詩）		装甲列車―党に捧ぐ―（町谷順）　黒潮（日振濤夫）　一日（石井安一）　整列（内野壮児）　あの声は？（寺沢資郎）　土を覆す（豊田勇）	104-106	3				
24		感想・随筆・小品	ルート・フキシェル	近藤栄蔵	107-110	3.3				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
25			艦底に生きて唄ふ	松戸侃治	110-113	3.3				
26			古川町の火事	金子洋文	113-115	2.5	○		2.5	
27		タワリツシ		農村青年に（奈良幸夫）　「労働祭」を読んで（浅田種郎）　メーデー随感（福家大樹）　五十公野清一氏に与ふ（佐々木義郎）　第二次戦線（山岡清七郎）　一無産者から（奥村健次郎）　一寸一言（岡山信夫）	116-120	5				
28		モスクワだより（＊写真）		千田是也	121	1				
29		文藝戦線（佐々木、小堀、林、山田、里村）			122-123	2				
30		労農芸術家聯盟情報	新潟地方行―プロ芸の共同戦線拒否―	葉山嘉樹	124-125	2				
31			労働農民党候補秋和松五郎君後援、対支出兵反対決議、労農芸術聯盟創立大会議		126-127	2				
32		散弾（＊小説）		藤森成吉	130-135	6				
33		やっぱり奴隷だ（人形芝居）		村山知義	136-146	11				
34		嫁支度（＊小説）		橋本英吉	147-154	8				
35		仁丹を追っかける（＊小説）		葉山嘉樹	155-159	5				
36		編輯後記		（山田）（=山田清三郎）	160	0.8				
計					36点	153.1	2	0	5.2	0
	1927年8月号	**昭和２年８月号**								
1	**(第4巻第8号)**	検閲官を監視せよ！（＊巻頭言）		佐々木	5	1				
2	**8月1日発行**	労働ロシヤ漫画集（＊「プラウダ」「イズバシチヤ紙」）		バイエル作、エフィーモフ作、モール作	6-8	3				
3		言論出版自由獲得の闘争	無産階級指導下の言論自由獲得競争	大山郁夫	9-13	4.5				
4			近代立法の傾向と検閲制度	神道寛次	13-17	3.5				
5			暴圧反対について	青野季吉	17-19	2.8				
6		支那革命新詩抄	宿屋の夜（賀樹）　我等の誓詞（失名）　風声（紅黄）　北伐諸将士の前に（劉啓龍）　歌（無名）	山口慎一（訳）	20-23	4				
7		闘争理論としての芸術理論（続）―プロレタリア芸術理論序説―（＊第二回―芸術理論の方法論）		田口憲一	24-28	5				
8		我々は何故彼等を排撃するか	理論拘泥主義の好典型	田口憲一	29-34	5.3				
9			究明か混迷か	佐々木孝丸	34-37	3.7				
10		国際芸術戦線		ソウエート文学集団の対英抗議運動、政治家と文学（茂械唯圧）　ソウエートの劇場に関するカリーニンの演説（蔵原惟人）	38-41	4				
11		真夏の生活（＊小作品集）	共同販売所と漁師	清国三郎	42-43	2				
12			小さい怒	高木芳雄	44	0.6				
13			人夫生活の実際	村旗羅生	44-46	1.6				
14			一つの追想	佐々木義郎	46-48	1.6				
15			新聞配達	伊勢龍雄	48-49	1.5				
16		爆撃飛行機―海外社会文芸作品(18)―（＊小説）		ヨハネス・エル・ベッヘル　辻恒彦（訳）	50-54	4.5				
17		伯林一九一九年（＊同―戯曲）		エルンスト・トルラー　高淵基（訳）	54-59	5.5				
18		ブック・レビュ		理髪師（村山知義）　「新しき改宗者」を読む（武藤直治）　「スカートをはいたネロ」（佐々木孝丸）	60-63	4				
19		文藝戦線（佐々木、山田、ジミーヒギンズ）			64-65	2				
20		小さい同志（子供の欄）		勇吉と鶏（童話、小木三郎）　十月革命（童話、モロソワ作、小川信一訳）　預金帳事件（生きた資料、坂本英）　教壇の上の同志（林房雄）	66-75	7.5				
21		婦人の頁		女性の同志よ！―婦人同盟について―（平林たい子）　黒土の母（＊詩・遠藤孤子）	66-75	2.5				
22		詩人たちに―あらゆる詩人的偽瞞を警戒せよ―（＊詩）		上野壮夫	76-77	2				
23		演劇・映画・美術	プリンス・ハーゲン演出後期（＊感想）	村山知義	78-81	3.1				
24			明治大正の美術（＊評論）	小川信一	81-85	4.9				
25		ハアゲンの初日（＊感想）		荒畑寒村	86-87	2				
26		前田河広一郎（十八）		前田河広一郎	88-92	5				
27		タワリツシ―支持の声―		労農芸術家聯盟を支持す（第三戦線社）　われらの為に！（加藤美樹矢）　分裂賛成（矢名氏）　寸言（天岡生）　愛読者から（尾原与吉）　山形の党員から（砂田秀三）　新鐘を鋳る人々（野上清）　文藝戦線に希ふこと（石川漏次）　漢口より（伊藤久夫）	93-97	5				
28		労農芸術家聯盟情報		創立大会、労芸演劇部(前衛座)、当局に抗議、文芸講演会、日支懇談会、検閲制度改正期成同盟準備会、聯盟第一回文芸講演会、検閲制度改正期成同盟発会式、暴圧反対演説会、講演会報告（前田河）	98-99	2				
29		前衛座第二回公演画報（＊真実）			100-101	2				
30		デマゴーグ（＊小説―連載第一回）		里村欣三	103-112	10				
31		雨傘屋長屋（＊小説）		山田清三郎	113-121	9				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
32		売られた彼等（＊小説）		岩藤雪夫	122-131	10				
33		嵐の起る前（＊小説）		中野正人	132-147	16				
34		馬は死にかねる（＊小説）		今野賢三	148-157	10		○		10
35		傍観者（＊小説）		前田河広一郎	158-163	6				
36		編輯後記（山田）		（山田）（=山田清三郎）	164	0.8				
計					36点	157.9	0	1	0	10
	1927年9月号	**昭和２年９月号**								
1	**(第4巻第9号)**	不法検閲制度について再び同志諸君に訴ふ！（＊巻頭言）			5	1				
2	**9月1日発行**	労農ロシア漫画集（＊イズヴニスチャ、プラウダ）		エフィーモフ作、モール作	6-9	4				
3		マルクス主義文芸批評の基準（＊評論）		蔵原惟人	10-16	7				
4		自他、或ひは一般―組織反組織、平林初之輔を送る、目的意識、芥川竜之介の死ほか―（＊感想）		前田河広一郎	17-19	3				
5		世界欄	戦争と戦へ！―支那革命擁護のために―（青年労働者に激す）万国の労働者の子供に与ふ！―少年国際週間のために―	佐々木孝丸（訳）編	20-23	4				
6		闘争理論としての芸術理論(続)―プロレタリヤ芸術理論序説（＊第三回）		田口憲一	24-30	7				
7		感想・随筆・小品	蟻の反抗	葉山嘉樹	31-32	1.5				
8			養豚の道徳	岡下一郎	32-35	2.9				
9			若き日の返逆的追想	中野正人	35-37	3.6				
10		文藝戦線（佐々木、林、金）			38-39	2				
11		労農ロシア「紙上映画」	革命映画「風」のストオリー（＊解説）	佐々木孝丸	40-47	7.5				
12			画報の説明其の他（＊写真解説）	井阪次男	47-49	1.6				
13			「機械師ウホムスキイ」と「世界を震憾させた十日間」（＊感想）	本郷一郎	49-50	1.9				
14		ブック・レビュ		「一九〇五年」（小堀甚二）、林房雄創作集「牢獄の五月祭」（蔵原惟人）、リヤザノフ「マルクス・エンゲルス伝」（田口憲一）	51-55	5				
15		暴圧実験談	不当馘首	小野貞二郎	56-58	1.2				
16			家を借りてやったが	田賀正	58-59	1				
17			警察の飯	横田敏雄	59-60	1.6				
18			或る女の手記	石井安一	60-61	1.3				
19		支那へ行くのか（＊詩）		上野壮一	62-63	2				
20		伯林だより（＊感想）		千田是也	64-65	2				
21		小さい同志		少年伝令隊（＊童話―米沢健一）赤い旗のお国（＊童話―小野貞二郎）　メーデーごっこ（童謡―槇木楠郎）　風見の牡鳥（＊童話―ジムロック）	66-72	7				
22		詩		われらの刀（久保格）　渚にて（菅原紅二）　御用学者（藤井浦蔵）　小さき者達へ（藤森慎一郎）　罷士前夜（浅野純一）　光（白井敏夫）　われら（豊田勇）	73-75	3				
23		産婆―海外社会文芸作品（19）―（＊小説コレッチェイの鎖）第二部「アルパートフの青年」の中の一断片の訳出）		ミハイル・プリシヴィン　蔵原惟人（訳）	76-83	8				
24		婦人の頁	最も新しい恋愛（＊感想）	平林たい子	84-85	1.7				
25			女工の一日（＊生活記録）	岩田キミ	85-86	1.3				
26			エセ無産婦人団体の簇出	小池小枝	86-87	1				
27		検閲制度改正期成運動	検閲制度改正要求運動を通して曝露した日労党幹部の無能	細迫兼光	88-89	2				
28			映画検閲に反対せよ	井阪次男	90-91	1.2				
29			綱領及び規約＊注１	検閲制度改正期成同盟	91	0.8				
30		芸術運動に於ける極左翼の妄動（附―分裂の真相）		小堀甚二	92-95	3.8				
31		本聯盟に関する「テーゼ」に就て（＊日本プロレタリヤ芸術聯盟）		田口憲一	95-97	2.2				
32		タワリツシ		感謝と不満（韓雪野）　文戦について（山岡清七郎）　自称左翼文学者の稚気（溝口辰夫）　芥川の死（小木三郎）　南溟に叫ぶ児（福田千々穂）　北米から（森元）　憫笑を以て排撃する（浅田種郎）	98-101	4				
33		労農芸術家聯盟情報（自七月十三日至八月十一日）			102-103	2				
34		或る結婚人（＊小説）		山田清三郎	104-125	22				
35		橇（＊小説）		黒島伝治	126-140	15				
36		施療室にて（＊小説）		平林たい子	141-155	15				
37		デマゴーグ（＊第二回）		里村欣三	156-166	11				
38		苔の下を行く（＊小説）		金熙明	167-171	5				
39		泥溝（＊小説）		金子洋文	172-177	6	○		6	
40		文戦倍加（二万部突破）運動と「文戦読書会」の意義		労農芸術家聯盟執行委員会	178-180	3				
41		編輯後記（山田記）		（山田記）（=山田清三郎）	181	0.8				
計					41点	176.9	1	0	6	0
	1927年9月号＊注	**臨時増刊号　―震災殉難記―　震災の殉難者を哀悼するために**		*＊注この号は『種蒔き雑記』（『種蒔く人』最終号）を再刊したもの。発禁になった。*						

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
	9月10日発行	目次								
1		この雑記を亀戸で暗殺された犠牲者			3	1	○		1	
2		関東大震災四周年声明　九月の日を銘記せよ——一斉に人権を叫べ—		労農芸術家聯盟	4-5	1.3	○		1.3	
3		声明書		労働農民党	5	0.7	○		0.7	
4		平沢君の靴			6-8	3	○		3	
5		騎兵第十三連隊の紙片—川合義虎君の死とお母さん—			9-12	4	○		4	
6		おとなしい鈴木直一さん—検束に来た人々—			13	1	○		1	
7		鮮人へ同情して—山岸、近藤両君の追懐—			14	1	○		1	
8		北島君と蜂須賀刑事			15-16	2	○		2	
9		夫の残して行った賃金—加藤高寿君の妻女と二刑事—			17-19	3	○		3	
10		骨—吉村光治君の実兄と森亀戸署長—			20-21	2	○		2	
11		鮮人とあやまられて—殺された佐藤欣治君—			22	1	○		1	
12		地獄の亀戸署			23-25	3	○		3	
13		満堂悲憤—当時の関西労働大会—		野田律太	26-27	2				
14		日本の労働者農民及青年学生諸君に激す		共産主義青年インターナショナル執行委員会	28	1				
15		編輯言		（山田）（=山田清三郎）	29	0.8				
計					15点	27.8	12	0	23	0
	1927年10月号	**昭和２年１０月号**								
1	**(第4巻第10号)**	ソウエート飛行家歓迎の辞（＊巻頭言—神田松本亭歓迎会の席に於て蔵原述）			5	1				
2	**10月1日発行**	労農ロシア漫画（ザッコ・ヴァンセッチ事件、プラウダ）		マルケル作、モール作	6-7	2				
3		ウイン革命画報			8-11	4				
4		前衛座大阪京都公演に対する暴圧に就いて（＊抗議文）		労農芸術家聯盟演劇部	12-16	3.4				
5		声明（＊前衛座に対する弾圧に対して		労農芸術家聯盟	14-15	0.6				
6		プロレタリアートの芸術運動と其作品（＊評論）		田口憲一	17-23	7				
7		グロースの言葉		辻恒彦	24-34	10.5				
8		世界欄	ウキン革命真想	本郷一郎	35-37	3				
9		戦争の脅威に抗して—ソウエート作家統一聯盟の新聞について—		蔵原惟人	38-41	4				
10		脱獄囚の研究（特別読物＊Ｔｏｓｅｐｈ　Ｆｉｓｈｍａｎの著に依る）		前田河広一郎	42-48	7				
11		演劇・映画・美術	映画漫談（＊感想）	中野正人	49-51	2.8				
12			プロレタリア劇雑感	田辺若男	51-53	2.2				
13			映画雑感（＊感想）	守谷治久	54-55	1.7				
14		メイエルホリドの発展過程（＊聯盟部研究所で行った講義筆記、講義通訳蔵原、文責在佐々木）		ゲ・ガウズネル	56-70	15				
15		随筆・感想	少年と無能力者	向山辰夫	71-75	4.6				
16			農民独語	石井安一	75-77	2.4				
17			製絲工場回想	金熙明	78-80	2.5				
18			実際政治と芸術	今野賢三	80-83	3.5		○		3.5
19		荷車—海外社会文芸作品（20）—（＊戯曲、一幕）		オットーミュラー　辻恒彦（訳）	84-93	10				
20		報告〈＊詩〉		上野壮夫	94-96	3				
21		ブック・レビュ		『トルストイとマルクス』（山田房吉）　『レエニン主義と民族問題』（金熙明）	97-99	3				
22		文藝戦線（山田）		（山田）（=山田清三郎）	100-101	2				
23		小さい同志（子供の欄）		納税美談か？（＊感想—岡田重緒）　裏切りした狐（＊童話—上野壮夫）　小さいどうしよ（＊詩—井原森野）　猿と鞭（童話—ミューレン作）	102-107	6				
24		婦人欄		同志よ、仮面をはごうではありませんか？（伴ちいこ）　小学校女教員から（椙山八重子）　婦人問題（小山喜美子）　百性の女に!!（＊詩、石井安一）　学窓より見たる女教員（遠藤孤子）	108-113	6				
25		詩		素晴らしき今月の歌（村上達）同志の墓前に—勇敢なる戦士阿部幹君の墓前に捧ぐ—（仁木二郎）肉親よ！（吉沢資郎）　俺等の一票（日振濤夫）　夜業行進曲（三土京太）　みんな不具になれといふのか!!（藍野筍三）	114-117	4				
26		タワリツシ		シネマへ、シネマへ—労農芸術家聯盟に訴ふ—（原田紅二）　忘れられた一面（越智礼二）　ブル文士の自殺（浅田種郎）　私の感想（関口小耕）　九月号を読んで（白川生）	118-121	4				
27		コミンテルンに於ける日本無産階級運動の批判—コミンテルン執行委員会の決議について—（＊評論）		蔵原惟人	122-124	3				
28		マルクス主義と芸術理論—併せて二三の問者に答ふ—（＊評論—未完）		本荘可宗	125-123	8.6				
29		パルチザン（喜劇）		小堀甚二	134-140	7				
30		一水兵の手記（＊小説）		村田信三	141-147	6.5				
31		デマゴーグ（＊第三回—未完）		里村欣三	148-156	9				
32		女囚徒—一幕—（＊戯曲）		小林多喜二	157-169	12.5		○		12.5
33		戦闘艦ポチョムキン（＊小説—連載第一回）		林房雄	170-172	3				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
34		前衛座上演脚本募集		労農芸術家聯盟	173	1				
35		労農芸術家聯盟情報（＊注―自八月十二日至九月十四日）			174-176	3				
36		編輯後記―（山田）		（山田）（=山田清三郎）	177	0.8				
37		文戦二万部突破運動、「文芸読書会」の意義（＊記事）		労農芸術家聯盟執行委員会	178-179	2				
計					37点	171.6	0	2	0	16
	1927年11月号	**昭和２年１１月号**								
1	**(第4巻第11号)**	ソウエート作家聯盟に送る（＊巻頭言）			5	1				
2	**11月1日発行**	労農文化建設の十年―ソウエートロシヤ写真画報―			6-16	11				
3		ソウエート文化の十年間（＊評論）	文学革命の十年間	蔵原惟人	18-21	4				
4			革命後のロシヤ演劇	吉田好正	22-26	5				
5			新ロシヤ画壇	矢部友衛	27-31	4.3				
6			サウエート映画界の概観	志波溪生	31-35	4				
7			労農露西亜最近の科学界	田口憲一	35-38	3.7				
8		ロシア革命の十年に際して（ソウエート作家連盟に送る）		労農芸術家聯盟	39-43	5				
9		全無産階級的政治闘争と芸術家の組織―「プロ芸」組織理論の根本的誤謬―（＊評論）		林房雄	44-51	8				
10		二科院展を観る（＊感想、評論）	批評に就いて	小川信一	52-58	6.6				
11			二科会は何処へ行くか	永田一脩	58-62	3.6				
12			ブルジョア美術のフアシズムへの躍進―二科十四回展に於ける―	岡本唐貴	62-67	5.6				
13		其の夜の紐育―サツコ、ヴアンゼツチイ事件の真相―		田中綾子	68-73	6				
14		ロシヤの子供らに（＊詩）		上野壮夫	74-76	2.5				
15		十一月七日（＊詩）		石井安一	76-77	0.9				
16		白い手は延びる（＊詩）		仁木二郎	77-78	2.1				
17		レーニンは我等と共にあり		素郷共三	78-79	1.2				
18		十三人の戦士に		赤木麟	79-80	1.3				
19		検閲制度に		北村弥吉	80-81	1.2				
20		文藝戦線（山田、小堀、正人、林）			82-83	2				
21		随筆・感想	寄席で	藤森成吉	84-86	2.1				
22			平時に於ける非常事―府県会議員選挙運動の感想―	金子洋文	86-89	3.2	○		3.2	
23			血を吸ったビルヂング	伊藤貞	89-91	2.1				
24			手帖から―モガとモボほか―	田口憲一	91-94	3.3				
25			我等の希望―十一月七日―	山田清三郎	94-95	1.5				
26			選挙漫談	黒島伝治	96-98	2.7				
27			「インターナシヨナル」を歌ふ	小牧近江	98-100	2.1		○		2.1
28		ブック・レビュ		『死の爆弾』（林房雄）、『けれども地球は廻ってゐる』（永田一脩）	101-103	3				
29		婦人欄	レエニン夫人の自伝	川口浩（訳）	104-110	4.2				
30			伴ちい子氏に	瀬川繁子	104-106	0.7				
31			婦人よ（＊詩）	山県克一	107-108	0..5				
32			一妹達よ一緒に（＊詩）	矢名氏	109-110	0.3				
33		小さい同志（子供の欄）	三匹の牡山羊（童話）	槇本楠郎（訳）	111-113	3				
34			黒表教員の手帖（＊感想）	泉本三樹男	113-115	3				
35		十一月七日の前夜（一場）―海外社会文芸作品（20）―		ベルタ・ラスク作　辻恒彦（訳）	116-121	5.5				
36		文戦読書会に参加せよ！			121	0.5				
37		検閲制度改正期成運動	検閲制度に就いて	降松秋彦	122-124	2.7				
38			不法の一二例	山田清三郎	124-125	1.3				
39		マルクス主義と芸術理論（二）―併せて二三問者に答ふ―（＊評論）		本荘可宗	126-133	8				
40		タワリツシ（＊読者投稿）	二つの言葉（＊感想）	橋本一彦	134-135	1				
41			必要なこと（＊詩）	五十嵐久弥	135-136	0.5				
42			秋の山を行く！（＊詩）	町谷順	136	0.4				
43			うじ虫娘等（＊詩）	溝淵文夫	136-137	0.5				
44			台湾に於ける暴戯以上！（＊感想）	西本平一	137-139	1.2				
45			労働者舞踊の提称（＊感想）	白須孝輔	139	0.7				
46		前衛座第三回公演(*築地小劇場 11月18日・19日・20日の通知)			140-141	2				
47		ソウエート作家聯盟に送る（＊露文の写真邦文巻頭）			142-145	4				
48		戦闘艦ポチョムキン（二）		林房雄	146-152	7				
49		子守娘が紳士を殴つた（＊小説）		鶴田知也	153-167	15				
50		冬の夜（＊戯曲）		西光万吉	168-175	8				
51		組合旗（＊小説）		岡下一郎	176-190	15				
52		労農芸術家聯盟情報（自九月一五日至十月十六日）			191-192	2.8				
53		「文藝戦線」読者会情勢			193-194	1.2				
54		正誤訂正（*前号の蔵原惟人「コミンテルンと日本無産階級運動」の主なる正誤）			195	0.3				
55		前衛座上演脚本募集(*囲み記事)			195	0.7				
56		文戦二万部突破運動、「文戦読書会」の意義		労農芸術家聯盟執行委員会	196-197	2				
57		編輯後記（Ｙ生）			198	0.8				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
計					57点	191.3	1	1	3.2	2.1
	1927年12月号	**昭和２年１２月号**	*(*この号は発売禁止となる)*	*(*山田清三郎編集の最終号)*						
1	**(第4巻第12号)**	リーブクネヒトと戦争（＊巻頭言「軍国主義と非軍国主義」から）			5	1				
2	**12月1日発行**	声明（＊分裂に際して―十一月十一日付）		労農芸術家聯盟	6-7	2				
3		なかま（＊小説）		鶴田知也	8-33	26				
4		畸形児（＊小説）		岩藤雪夫	34-39	6				
5		農場と別れる（＊小説）		村中豊	40-45	6				
6		炎の中―海外在会文芸作品（22）―（＊小説）		エヌ・リヤシコ　外村史郎（訳）	46-49	3.4				
7		去るものは去れ！（＊読者投稿）		吉岡敬太郎	49	0.6				
8		或る同志への書翰（＊評論）	（＊福本理論を批判、この掲載採否から労芸分裂）	山川均	50-58	9				
9		反戦争読物	ブリエー盆地	荒畑寒村	59-63	2.3				
10			兵営夜話	寺島幸夫	63-68	3.5				
11			軍服に捕縄（＊未完）	吉田正一	68-74	3.2				
12		美術部再組織声明!!		労農芸術家聯盟（竹本明）	75	0.5				
13		日本無産階級運動に対するコミンテルンの批判を読む（＊論評）		猪俣津南雄	76-92	16				
14		コミンタンは如何に日本の運動を批判したか？（１）（＊評論）		青野季吉	93-96	3.8				
15		無題(*読者所感)		新井浩二	96	0.2				
16		反帝国主義反植民地抑圧国際会議（＊報告）		千田是也	97-99	2.5				
17		ロシア革命十年記念祭への祝電		アプトン・シンクレーア	99	0.5				
18		文藝戦線		（前田河、小堀、里村）	100-101	2				
19		何故彼等は逃亡したか？―分裂までの経過―	（＊注 第三次分裂までの経過）	労農芸術家聯盟(＊ 文責 小堀甚二)	102-107	6				
20		安藤氏対久米氏盗作問題の法律的考察（＊評論）		布施辰治	108-112	4.8				
21		無題(*読者所感)		白川虎一	112	0.2				
22		ブックレビュ		『豚群』を評す（前田河広一郎）、『苦力頭の表情』（葉山嘉樹）	113-115	3				
23		赤衛軍入営（＊詩）		デミヤン・ベドニイ　本名隆次（訳）	116-117	2				
24		随筆・感想	入営前後	黒島伝治	118-120	3				
25			これでよいのか（＊猿廻しと猿、無産者新聞について）	志保田茂夫	121-123	1.3				
26			人間は何を求めるか	石井安一	123-125	2.5				
27			軍用線	岡下一郎	125-132	6.3				
28			労働者になれぬ彼	茂岡亥之助	132-136	4.5				
29			映画礼讃	米田曠	136-137	1				
30			「ウオルガの船唄」	鶴田知也	141-140	3.1				
31			佐藤春夫氏と田漢君	小堀甚二	141-144	3.4				
32			エルネスト・ルナン号並に祝賀について	小牧近江	144-145	1.5		○		1.5
33		検閲制度に反抗したシンクレーアの「石油！」発売禁止反対事件（＊評論）		前田河広一郎	146-149	4				
34		アプトン・シンクレーアの立場（＊評論）		フロイド・デル	150-152	1.5				
35		トルラーの演説＊注３		（千田是也訳）	153-156	4				
36		詩		炭坑にて（横山清一）君達のスローガンを示せ！（寺沢資郎）空が見える（加藤漣）　同志に与ふ（石井安一）　何故手を握らないのだ？（河野勉）	157-160	3.8				
37		無題(*読者所感)		藤田譲	160	0.2				
38		タワリツシ		プロレタリア演劇雑考（田辺幸男）　死んだ父親（＊詩―キムラ）　十月号漫言（白川虎一）教壇の同志へ（石坊武夫）　Ｔと語って（関口小耕）　徹底的に克服（木村清治）	161-165	3				
39		婦人欄		勲章（＊随筆―平林たい子）　愛する少女達へ（＊詩―井原森野）看護婦（＊感想―大杉寿栄子）酌婦であるお前に(キムラ)　無題（＊書簡―中田栄子）黎明(＊随筆-前田河咲子)	166-172	7				
40		編輯を了って（編輯局）	*(*次号から編集は石井安一)*		173	0.8				
計					40点	155.4	0	1	0	1.5
	1928年1月号	**昭和３年１月号**								
1	**(第5巻第1号)**	生長の原理（＊巻頭言、文芸戦線に対する撲滅宣言の小史）		是	5	1				
2	**1月1日発行**	火夫の顔と水夫の足（＊小説）		葉山嘉樹	6-15	10				
3		「屈伸道」講演会（＊小説）		細田民樹	16-23	8				
4		機関車・人間（＊小説）		岡下一郎	24-29	6				
5		老朽船（＊小説）		岩藤雪夫	30-42	13				
6		電工見習日記帖（＊小説―連載第一回）		金子洋文	43-53	11	○		11	
7		犬と寝る女の家にて（＊小説）		今野賢三	54-63	10		○		10
8		海鳴り（＊小説）		鶴田知也	64-78	15				
9		小作人（＊小説）		伊藤栄二	79-93	15				
10		穿きもの（＊小説）		細田源吉	94-112	19				
11		農夫の鞭（＊小説）		黒島伝治	113-132	20				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
12		我等の請願運動に参加せよ（＊呼びかけ）		検閲制度改正期成同盟	133	1				
13		芸術運動に現はれた宗教的分裂主義の諸相（＊評論）		寺島幸夫	134-149	16				
14		文藝戦線（小堀、Ｋ、黒島、平林たい子、里村）			150-151	2				
15		中国国民革命の反動化（＊評論）		柏八里	152-163	12				
16		レーニンの死（＊記録読物）		岡一夫	164-174	11				
17		随筆・感想	近代風景	前田河広一郎	175-180	5.2				
18			旧るい暦はとぢろ！	米田曠	180-181	1				
19			剣戟映画	守谷治久	181-182	1.8				
20		我等の同志（＊読者投稿欄）		読書会員として去った友に与へる（林田伊輔）　兵士を（田辺幸夫）　札幌の同志に送る（＊詩、木村郷児）　漲ぎる声援（深谷千枝子、熊谷冷光、井上喜代松、古川生、立花竹次郎、Ｋ・Ｋ生）	183-189	7				
21		ブックレビュ		コロンタイ女史の『赤い恋』について（平林たい子）　シンクレーアの計画せる新長篇『ボストン』の概説（Ａ・Ｍ）	190-194	2				
22		海の見へない街（＊詩）		林芙美子	192-194	1.25				
23		我が友に送る		石井安一	192-194	1.75				
24		戦争―海外社会文芸作品―（＊小説）		シャック・ロンドン　前田河広一郎（訳）	195-199	5				
25		米利堅兵―同―（＊小説）		フセオロド・イワノフ　荒畑寒村（訳）	200-206	7				
26		無産青年読本（労農芸術家聯盟　＊特輯附録）	青年に対する演説（＊一九二〇年十月四日、ロシア共産主義青年同盟第三回大会における演説）	レーニン　笹尾幸太郎（訳）	2-16	15				
27			若きアンチ・ミリタリストに訴ふ（＊赤旗授与式で行った激励演説）	アンリ・バルビュス　小牧近江（訳）	17-19	3		○		3
28			青年インタナショナルの歴史から	チチエリン　北浦千太郎（訳）	20-24	5				
29			中学生諸君（＊一九〇三年、出身校アルビ中学に卒業式に行った呼びかけ）	ジャン・ジョレス　小牧近江（訳）	25-26	2		○		2
30			戦時中の社会主義的―共産主義的青年運動―	ウイリイ・ムュンツエンベルグ　金子房雄（訳）	27-30	3.2				
31		編輯後記（編輯局）			237	0.8				
計					３1点	231	1	3	11	15
	1928年2月号	**昭和３年２月号**								
1	**(第5巻第2号)**	鉄鎖（＊巻頭詩）		前田河	5	0.5				
2	**2月1日発行**	「捕虜」（＊同カット）		コレウイツチ画	5	0.5				
3		拵へられた男―Ｔｏｍ　Ｍｏｏｎｅｙ　事件の再録―（＊戯曲―八場）		前田河広一郎	6-24	19				
4		動乱（＊小説）		里村欣三	25-44	20				
5		天井裏の善公（二）―電工見習日記帖改題―（＊小説）		金子洋文	45-56	12	○		12	
6		避難線（＊小説）		小堀甚二	57-67	11				
7		我らは帝国主義をどう見るか（無産階級政治問答）		石賀毅	68-83	16				
8		文藝戦線（里村、洋文、前田河、石井）			84-85	2	○		2	
9		露国共産党の紛糾	トロツキー派の陰謀	片山潜	86-89	3.5				
10			ソヴエット聯邦共産党紛争事件の真相	高山生	89-94	5				
11			デミヤン・ベッドヌイの演説―第六回ザモスコーレッキー区の党支部大会に於て―	北浦千太郎（訳）	94-99	5.5				
12		いとしのカチウシヤ（＊詩）		林芙美子	100-102	2.5				
13		無産婦人の「生活記録」を募る！			102	0.5				
14		随筆・感想	ファツシズム雑考	前田河広一郎	103-107	4.7				
15			木賃宿で逢った老人	岩藤雪夫	107-111	3.3				
16			黒い軍艦	林田伊輔	111-115	4.5				
17			小ブルジョア革命主義の作品を排す―久板、鹿地両君の戯曲に現はれた反動性に就いて―（＊評論）	青木壮吉	115-124	8.8				
18		農奴の夢（長篇叙事詩）		石井安一	125-128	4				
19		特別読物	野田争議の実状	黒島伝治　鶴田知也	139-133	4.5				
20			続兵営夜話	寺島幸夫	133-138	5.3				
21		詩	拷問（＊詩）	大山三太郎	139-140	1.3				
22			俺はこうして育てられたのだ（＊詩）	鳴田好天	140	0.5				
23			印度は××と同じですか？（＊詩）	季長啓	140-141	0.6				
24			俺ら死なゝい（＊詩）	木村郷児	141-142	1				
25		我らの同志（＊読者の投稿）	我らの同志（＊読者の投稿）	筑紫次郎、川田友良、福岡生、鮫島友夫、呉興教、谷純之介、佐藤松露、横山玉樹、岡島栄一、吉田一正、神谷龍子	143-146	4				
26		ブックレビュ	『石油帝国主義』（ルキズ・フキッシア著　荒畑寒村（訳））	山崎生	147-148	1.3				
27		新劇協会「盗人」其他（＊劇評）		影山明	149-150	1.4	○		14	
28		資料	全民族的単一戦線破壊陰謀に関し全朝鮮民族に訴ふ（＊声明書）	新幹会東京支会々員	147-150	1.3				
29			「理論家」の理論的誤謬（＊評論）	小堀甚二	151-156	6				
30		私は如何に「策謀」したか（＊感想）		山川均	157-162	7				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
31		思ひ出より		アナトリ・ルナチヤルスキー　笹尾幸太郎（訳）	164-170	7				
32		編輯後記（編輯局）			171	0.8				
計					32点	165.3	3	0	28	0
	1928年3月号	**昭和３年３月号　―無産婦人特輯号―**								
1	**(第5巻第3号)**	われらの月―三月八日（＊巻頭言）			5	1				
2	**3月1日発行**	無産階級の婦人運動（＊評論）		山川菊栄	6-20	15				
3		無産婦人問題集（特輯九篇）	レーニンと婦人問題	クルプスカヤ	21-22	2				
4			吾等の軍勢は拡大す	クルプスカヤ	23	1				
5			全世界の農夫よ、団結せよ！	農民インターナショナル　同婦人部	23-25	2				
6			最善の努力を婦人大衆の組織に	シノヴィエフ	26-27	1.7				
7			最初の婦人デー	スタール	27-28	0.5				
8			労働婦人と労働組合	イザ・ストラッサー	28-31	3.5				
9			労働婦人の統一戦線へ	クララ・ツエトキン	31-33	0.9				
10			ツエトキンの祝辞		34-35	2.5				
11			英国婦人代表者会議	スコット	36	1				
12		ソヴィエット聯邦における婦人（対話）		ケーテ・ドウンケル　波多野俊夫（訳）	37-51	14.5				
13		無産婦人読物	赤い広場にて	マグドレエヌ・マルクス　矢田部純（訳）	51-54	2.7				
14			カンテラの光―礦山労働者の生活―	新妻伊都子	54-57	3.4				
15			クララ・ツエトキン	近藤栄蔵	58-62	4.5				
16		広東の彼女達―広東ソビエット政権の動乱―		真砂洋史	62-66	4				
17		短い感想		鶴田勝子	66	0.5				
18		豆畑、土管の唄、敵（＊詩三編）		岩淵威夫	67-71	2				
19		故郷のタノよ（＊詩）		米田曠	71-75	3.8				
20		朱帆は海へ出た（＊詩）		林芙美子	75-79	3.8				
21		総選挙資料（＊国会選挙に対する声明書、東京都五区我党立候補に関する声明―労働農民党本部、ほか）			67-79	4				
22		文藝戦線		（葉山、里村、H生、T生）		2				
23		唯心論か唯物論か―続「理論家の理論的誤謬」―（＊評論）		小堀甚二	82-91	9.5				
24		総選挙応援日誌（1）（2）（3）			91,97,112	1	○		1	
25		外部から注入される知識―××的インテリゲンチャの話―（マルクス主義講話＊論評　未宗）		青島佐四久	92-97	5.8				
26		婦人随筆（特輯）	洗濯板―一ツの追憶から―	林芙美子	98-101	4				
27			思ひ出	伊藤福子	102-106	4.3				
28			職婦生活	志田唯子	106-108	1				
29			選挙演説会	前田河咲子	108	0.7				
30		農奴の夢（長篇叙事詩）		石井安一	109-113	3.7				
31		詩欄		糸捲工場の窓（楠生ちか子）　呪咀なくて何であらう（大友光代）　女子青年団（佐藤美津）　母親の世界（三谷彫子）　留守居（荒野明子）　無題（森川千代）	113-117	5				
32		「前田河広一郎集」を読みつつ（＊書評）		里村欣三	118-120	2				
33		エイチ・マイダゴウ（＊前田河宛私信）		アプトン・シンクレーア	118-119	0.3				
34		「農民生活に於ける新経済運動」―エヌ・レーニン著、北浦千太郎訳―（＊書評）		青木壮一郎	120	0.8				
35		築地小劇場を見て―「相恋記」と「拵へられた男」―（＊劇評）		前田河広一郎	120-121	1.2				
36		夜風（＊小説）		平林たい子	122-141	20				
37		暴風を貫く呼声（＊小説）		岩藤雪夫	142-158	17				
38		天井裏の善公（三）		金子洋文	159-173	15	○		15	
39		ボストン（＊小説―連載第一回）		アプトン・シンクレーア　前田河広一郎（訳）	174-190	16				
40		編輯後記（編輯局）			191	0.8				
計					40点	184.4	2	0	16	0
	1928年4月号	**昭和３年４月号**								
1	**(第5巻第4号)**	（＊巻頭言）		里村欣三	5	1				
2	**4月1日発行**	電燈の油（＊小説）		葉山嘉樹	6-12	7				
3		線路工夫（＊小説）		山内謙吾	13-24	12				
4		ホテルの一夜（＊戯曲）		小島勗	25-36	12				
5		陥穽（＊小説）		カー・ボリシャコフ　島田文麿（訳）	37-51	15				
6		政治的見解その他一二（＊わが聯盟の政治的見解について、平林初之輔君に敷言、文芸運動の統一について）		青野季吉	52-58	7				
7		カベシンブン（1）―「モンド」の発刊について、一言―			59	1				
8		論評二つ（＊ゾラ雑感、新リアリズムの問題）		前田河広一郎	60-63	4				
9		三月作品評（ブルジョア文壇批判、＊中村吉蔵「鬼ケ島から来た男」、正宗白鳥「一万円」、岡田三郎「窓あかり」など）		小堀甚二	64-69	6				
10		彼等の本質は何か―本荘氏の「運動としての芸術」批判―	（＊投稿原稿）	林史郎	70-75	5.5				
11		マルクス主義意識と桃太郎	（＊『労農』3月号所載より）	山川均	75	0.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
12		文藝戦線		（石田丑之助、小堀、たい、Y、前田河、石井）	76-77	2				
13		随筆・感想	荒れた手万歳	葉山嘉樹	78-80	1.3				
14			選挙運動に依って感じた事	今野賢三	80-83	2.6		○		2.6
15			製糸工場	伊藤栄二	83-86	3.7				
16			共同便所と大学生	岡下一郎	86-89	3				
17			ルムペンの日記	岩藤雪夫	89-96	6.5				
18		インテリゲンチアの折鞄	(＊『労農』3月号所載より)	山川均	96	0.5				
19		カベシンプン（2）―「労農友の会」生る、カベシンプン欄について―			97	1				
20		世界資本主義の現段階と無産階級運動―「労農テーゼ」解説その一―		山岡一郎	98-112	15				
21		総選挙批判―「無産政党敗北の遠因と新代議士の任務」―		笹尾幸太郎	113-119	7				
22		農民運動における左翼婦人の任務	資本主義国における農民婦人の教育及び組織（＊農民インタナショナル代表者報告）	山川菊栄（訳）	120-125	5.6				
23			ロシヤにおける経験（＊ロシヤ××党報告）	山川菊栄（訳）	125-128	3				
24		カベシンプン（3）	シンク・ルーア(ママ)　前田河広一郎（訳）『地獄』（＊書評）	黒島伝治	129	1				
25		呻吟、凶作、冬（＊詩三編）		岩淵威夫	130-132	2				
26		反Ｘは芸術である！―赤露にてうたへる―		丘文夫	133-135	3				
27		和田久太郎の事ども（＊感想）		堺利彦	136-139	2.5				
28		エンマ・ゴルドマン（＊感想）		田口運蔵	139-144	5				
29		カベシンプン（2）―「銃火」を読んで（＊書評）(*2とあるが誤り)―		岡下一郎	145	1				
30		天井裏の善公（三）(*三は四の誤り)		金子洋文	146-151	6	○		6	
31		マドロスの遺稿より（海の小品1）		寺沢資郎	152-155	4				
32		海上八大地獄（海の小品2）		小畠亀吉	156-159	3.5				
33		無産婦人の生活記録　3篇	一女教師の手記	和田操	160-162	2				
34			紡績女工より	岡光江	162-166	2.5				
35			或る私信	等々力とも子	166-169	2.7				
36		見ねえ兄弟・朝の工場（＊詩）		加藤進	160-164	1.3				
37		無言の叫喚―労農ロシアの十周年記念祭の日に―（＊詩）		内堀勝利	164-165	0.3				
38		投げ出した身体―勇敢な同志に捧ぐ―（＊詩）		蘆原暮太郎	165-166	0.3				
39		一切の権力を（＊詩）		寺沢資郎	166-169	1				
40		労働農民党は各無産党合同実現のためには斯る態度でなければならぬと思ふ（戦線資料）		大道憲二	170-171	1.3				
41		ボストン（2）		アプトン・シンクレーア　前田河広一郎（訳）	172-190	19				
42		編輯後記		（編輯局）	191	0.8				
計					42点	181.4	1	1	6	2.6
	1928年5月号	**昭和３年５月号　―メーデー特輯―**								
1	**(第5巻第5号)**	メーデーが来た（＊巻頭言）(*6-7群集写真)			5	1				
2	**5月1日発行**	メーデーに際して宣言する		労農芸術家聯盟　文芸戦線	8-9	2				
3		我等の五月（＊海外・国内のメーデー年表）			10-13	4				
4		社会・文芸についての時評（＊現実と運動のこと、性向と理論について、理論と作品について、プロレタリアの批評について）		青野季吉	14-19	6				
5		社会主義の方へ―小ブルジョア作家の転向を吾等は何と見るか？―	ソシャル・トロピズム	青野季吉	20-21	1.8				
6			社会主義の方へ	平林たい子	21-22	1.2				
7			問題は今後に	青木壮一郎	23-24	1.3				
8			転向迎へて可なり	金子洋文	24	0.5	○		0.5	
9			真理の敵	細田民樹	24-27	3.3				
10			如何に行かんとするか？	今野賢三	28-30	2.3		○		2.3
11			社会主義の方へ	石井安一	30	0.7				
12			左へ	伊藤栄二	31-33	1.5				
13			黙殺	岩藤雪夫	33-34	0.5				
14			苛措なき批判を要求する	里村欣三	34-35	1.5				
15			新感覚派からプロレタリヤ文学へ！	小堀甚二	35-38	2.7				
16		カベシンプン（5）―今野氏の「汽笛」（＊書評　平林たい子）―			39	1		○		1
17		谷崎潤一郎論（ブルジョア文学批判）		前田河広一郎	40-47	7				
18		メーデー雑記（＊感想、詩）		思ひ出のメーデー（阪本英） メーデー（武田亜公）　メーデーの檄（出口芙二夫）　傍観の闘争（喜田麻沙雪）　メーデーと私達の感想（権均）彼岸オアシス―争闘軍の同志等へ―（羽賀龍浪） プロレタリアートの新しき旗の下に（田畑春四郎）　奴等をけとばしてこい（浅野純一）　乳配の叫び（岡本一郎）　五月だ！（菊本東吾）　海上労働者諸君！！（梶原藤雄）　兄弟よ（棚橋貞男） メーデー（豊島公正）　動員（松田八十二）　金沢最初の貧しきメーデー（前田美与志）	48-62	15		○		15
19		カベシンプン（6）―水平社芸術聯盟生る（宣言、声明書）			63	1				
20		留置所（曝露小品１）		遠藤清吉	64-67	4				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
21		呪はれたる教材（曝露小品２）		酒井八州男	68-73	6				
22		天井裏の善公（五）		金子洋文	74-81	8	○		8	
23		文藝戦線		（前田河、洋文、里村、今野）	82-83	2	○		2	
24		無産政党合同のスローガン（文戦政治講話）		青島佐四久	85-88	4				
25		中国国民党の反動政策―国民革命失敗以後―		柏八里	89-95	6.3				
26		李宝華よ、健かなれ！（＊詩）		窪朴秀	95	0.7				
27		赤都のメーデー（＊感想）		荒畑寒村	96-99	3.5				
28		黒　　箱（チョルスイヤーシチク）―労農ロシア監房日誌―（＊小説、連載第一回）		黒海千々香	100-108	9				
29		小ブルジョアと革命（＊評論）		マキシム・ゴルキー　山岡一郎（訳）	109-111	3				
30		驀進―おいらがメーデーのために―（＊詩）		岩淵威夫	112-113	1.3				
31		ＬＡ　ＦＲＯＮＴ（＊詩）		米田曠	113-114					
32		押しひしがれた街―上海―		寺田資郎	114	1				
33		五月祭（＊詩）	五月祭	リヒャルト・デメエル 藤井清士（訳）	115	0.5				
34			示威運動	イワン・ゴオル	115	0.5				
35		カベシンブン（7）	主張・批判・論駁（ＭＰ生、山本生、秋田雨雀、島徹）		116-117	2				
36		廃人―海外社会文芸作品―		リヂャ・セイフーリナ作　波多野俊夫（訳）	118-136	19				
37		婦人の問題	婦人代表者会議について	アーチウゼ　山川菊栄（訳）	138-143	6				
38			党の婦人間に於ける仕事一般―一九二七年××党年刊に掲載の表記の項全訳―	島田元麿（訳）	144-147	4				
39		暴圧に抗して声明す		労農芸術家聯盟　文藝戦線社	148	1				
40		新党樹立に関する声明書		労農芸術家聯盟　文藝戦線社	149-150	1.2				
41		戦線資料			150-151	1.8				
42		穴（＊小説）		黒島伝治	152-166	15				
43		十姉妹（＊小説）		山本勝治	167-182	16				
44		酒樽（＊小説）		岡下一郎	183-187	5				
45		佐渡の唄（＊小説）		里村欣三	188-203	16				18.3
46		ボストン（3）		アプトン・シンクレーア　前田河広一郎（訳）	204-221	18				
47		編輯後記		（編輯局）	222	0.8				
計					47点	209.9	3	3	10.5	18.3
	1928年6月号	**創刊五年記念号**								
1	**(第5巻第6号)**	巻頭言	出兵費反対!即時撤兵!!		5	1.0				
2	**6月1日発行**	創作	戯曲　ポスター(一幕)	前田河広一郎	6-12	7				
3			(*小説)牧場を逐はれて	鶴田知也	13-29	17				
4			(*小説)見えない鉱山	伊藤永之介	30-39	10		○		10
5			(*小説)三つの棺	山内謙語	40-66	27				
6			(*小説)草にころぶ	黒島伝二	67-70	4				
7		漫画時評		堤寒三	71、78、113	2				
8		我等の六月			72-75	4				
9		随想、論駁		石田丑之助	76-78	2.2				
10		コミンテルン日本無産階級運動批判を読む			79	0.4				
11		ソヴィエット聯邦はマキシム・ゴーリキィから何を期待するか？		ニコライ・ブハーリン（波多野訳）	80-82	3				
12		カベシンブン―8	「ジャングル」に就いて	里村欣三	83	0.8				
13			〔ナップに就いて〕	田中仙吉	83	0.2				
14		美術論	具体的事実としての絵画――日本の若き芸術家に与へる芸術の根本問題――	福田新生	84-93	9.6				
15		組合旗、マーク、ポスター、装幀、等の制作依頼に応じる。		労農芸術家聯盟美術部	93	0.4				
16		文芸戦線		小堀　岩藤　石田　石井　洋文　伊藤	94-95	2	○		2	
17		文芸戦線創刊五年記念に際して	顧みて思ふ	小牧近江	96-97	1.6		○		1.6
18			「種蒔く人」「文芸戦線」略年譜		97	0.4	○		0.4	
19			文戦初期の頃の部分的な事ども	今野賢三	98-99	2	○		2	
20			種は実つた	細田民樹	100-103	4		○		4
21			「文芸戦線」回顧	吉江喬松	104-105	2		○		2
22		『種蒔く人』『文芸戦線』表紙画集	グラフ		106-107	2				
23		詩	泥溝は汎濫する	岩淵威夫	108-109	1.5				
24			海を越えて	高橋辰二	109-110	0.4				
25			我等	中山鏡夫	110	0..4				
26			守れ戦線を	米田　曠	110-111	1.3				
27		カベシンブン―9	中野重治をわらふ	北川健一郎	112-113	1.6				
28			少年I	浅野純一	113	0.4				
29		グッド・フライデー		田口運蔵	114-119	6				
30		異母弟の贈物		山本勝治	120-123	4				
31		我党と労働婦人		エ、ヤロスラフスキ(島田元麿訳)	124-126	3				
32		カベシンブン―10	雑誌『労農』の婦人版生る	労農社内婦人版係	127	0.5				
33			ロシアより	雨　雀	127	0.2	○		0.2	
34			佐々木孝丸の言つた事	山本生	127	0.3				
35		詩欄	七百の首	松田八十二	128	0.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
36			赤いたすき	勝目照子	128-129	0.7				
37			マルクス・ボーイよ	宗　成夫	129	0.5				
38			労働者のために	吉田峡路	129-130	0.4				
39			忍耐の唄――全国少年労働者諸君へ	加藤　漣	130-131	0.6				
40			夕暮れの南京路で――インターナショナル行進曲	内堀勝利	131	0.4				
41		随筆・感想	紋付羽織	平林たい子	132-134	2.1				
42			軍港地一情景	林田伊輔	134-136	1.3				
43			自己整理	岡下一郎	136-138	2				
44			『文戦』復活の前後	前田河咲子	138-139	1.5		○		1.5
45		労農ロシア監房日誌	黒箱―その二―	黒海千々香	140-112	13				
46		戦線資料	支那出兵反対(一)	日本労農党本部	153	0.3				
47			対支出兵反対声明(二)	日本労農党	153	0.3				
48			対支出兵反対声明書	労働組合統一全国同盟	153-154	0.7				
49			声明書	高橋亀吉	154	0.4				
50		長編小説	ボストン・Ⅳ	アプトン・シンクレーア（前田河広一郎訳）	155-171	17				
51		編輯後記		編輯局	172	8	○		8	
		挿絵(*以降、本表表記では、表紙、挿絵、カットについて点数としていないが記入)		寒三〔堤寒三〕						
計					51点	171.9	5	5	12.6	19.1
	1928年7月号	**夏期特輯号**								
	(第5巻第7号)	(*表紙)		(福田新生)						
1	**7月1日発行**	巻頭言	実在の怪奇探偵小説	小　堀	5	1				
2		創作	返される包	細田源吉	6-15	10				
3			荒療治	山本勝治	16-32	17				
4			吹雪	岩藤雪夫	33-57	25				
5		海外社会文芸作品	戦争の良心的反対者	ベーター・シュヌール(波多野俊夫訳)	58-65	12				
6		我等の七月			66-71	6				
7		一つのサンプル		石田丑之助	72-76	4.4				
8		雑誌『労農』〔宣伝用見本頒布〕			76	0.5				
9		『消極的唯物論』から無思想、無批判へ――鉄兵氏に――		小堀甚二	77-80	3.5				
10		六月五日深更海上大罷業の指令を発す――最低賃金制度獲得運動――			80	0.5				
11		カベシンブン―11	海員の最少限度の生活標準！		81	1				
12		マルクス主義と文化		A・デボーリン(井上満訳)	82-91	10				
13		詩	夏　谷川	高橋辰二	92	1				
14			シベリアの鹿のやうに	豊村群平	93-94	1.2				
15			敵	石井安一	94-95	1				
16			世界の眼よ！	黄　瀛	95	0.8				
17		笑劇	孫悟空	金子洋文（堤寒三画）	96-107	12	○		12	
18		労農ロシア監房日誌	黒箱―Ⅲ	黒海千々香	108-113	6				
19		文芸戦線		前田河　小堀　里村　石田　たい子　葉山　鶴田　岩藤	114-115	2				
20		日本資本主義の発展――「労農テーゼ」解説その二		山岡一郎	116-121	6				
21		戦線講話	コンムニズム雑俎	田口運蔵	122-126	5				
22		カベシンブン―12	本誌を通じての旧労農党の問題二三	谷純之介	127-129	2.7				
23			檄	海員待遇改善促進運動有志	129	0.3				
24		国際消費組合デーと無産階級		アルゴー（山川菊枝訳）	130-133	3.7				
25		「時」		寺沢資郎	134	0.3				
26		ときを待て		松田八十二	134-135	0.3				
27		騒乱		伊吹哲夫	135	0.5				
28		××よ支那を蹂なむ		高畑信吉	135-136	0.6				
29		トタンを張る男		東利根夫	136	0.5				
30		急いで行かう		喜田麻沙雪	136-137	0.6				
31		指の敵は機械じやねえぞ!!		北岡　実	137	0.4				
32		天井裏の善公(六)		金子洋文	138-143	6	○		6	
33		不思議な殺人事件		前田河広一郎	144-152	11				
34		戦線資料	声明書――治安維持法改正反対と同法撤廃に関して――	日本農民組合中央常任委員会	153	0.5				
35			抗議文	日本農民組合総本部	153	0..3				
36			惨敗声明書	日本労働組合同盟内閣印刷局争議団	153-154	0.5				
37			海上争議経過		154-156	2.8				
38		長編小説	ボストン〔Ⅴ〕	アプトン・シンクレーア（前田河広一郎訳）	157-177	21				
39		編輯後記		編輯局	178	0.8				
40		労働者農民の解放運動に理解と同情ある諸君は、解放運動犠牲者救援会に加入せよ		解放運動犠牲者救援会	179	1				
41		我等の請願運動に参加せよ！		検閲制度改正期成運動	180	0.5				
		挿絵・カット		Saburo〔尾崎三郎〕　竹本 明						
計					41点	179.9.	2	0	18	0
	1928年8月号									

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
	(第5巻第8号)	(表紙)								
1	**8月1日発行**	巻頭言	無産大衆党の結成に際して（労農六月号山川氏論文より抜粋）		5	1				
2		画	これが自由か　どうぞこちらへ	フレツド・エリス	6-7	2				
3		創作	玖瑰(はまなす)の花	今野賢三	8-19	20		○		20
4			或る砲手の死	細田民樹	20-31	12				
5			我等街路を埋める時――幕―	小島　勗	32-46	15				
6			法の執行官	里村欣三	47-51	5				
7		我等の八月			52-55	4				
8		社会・文芸に関する時観		青野季吉	56-62	7				
9		固形化文芸の行衛		山村梁一	63-70	8				
10		プロレタリア作家としての藤森成吉氏		青木壮一郎	71-82	11.5				
11		全国労働組合会議創立協議会開かる		全国労働組合会議創立協議会	82	0.5				
12		葉山嘉樹の芸術		黒島伝治	83-86	3.5				
13		検閲制度改正運動に参加せよ		検閲制度改正期成同盟	86	0.5				
14		文芸戦線社の出版部が出来た!!!			87	1				
15		トルストイ論		ニコライ・レーニン（山本甚介訳）	88-91	4				
16		カベシンブン―13	『十月』を読んでの感想	里村欣三	92-93	1.5				
17			読者諸君に		93	0.3				
18		路上の瞳		岩淵威夫	94	0.5				
19		故郷		高橋辰二	94-96	0.4				
20		夜更けに嵐だ		山本勝治	96-97	0.4				
21		自責		山口はぎ	97	0.4				
22		失業記録(一)	飢えたる家族	山内謙吾	98-104	7				
23		K・Y・T・B		和田軌一郎	105-113	9				
24		文芸戦線		前田河　小堀　青木　石田　里村　四郎　北川　伊藤	114-115	2				
25		問題の人、トロツキー	革命家としてのトロツキー	田口運蔵	116-125	9				
26			トロツキーの革命観	近藤栄蔵	125-128	3.8				
27		レーニンは如何に働いたか		エヌ・クルプスカヤ(鞍仙幹夫訳)	129-132	4				
28		天井裏の善公(七)(*大衆小説と目次に記載)		金子洋文	133-139	7	○		7	
29		姉妹よ皮を脱がうではないか!!		伊藤花子	140	1				
30		犬		蘆原暮太郎	141	0.2				
31		誰だ!!――呪はれたる支那		寺沢資郎	141	0.6				
32		嵐を衝いて		東利根夫	141-142	0.4				
33		妾しやね……		小林春代	142	0.3				
34		田を守れ		鵜沼雄志郎	142	0.3				
35		誤魔化されるな		野島淳介	142-143	0.3				
36		ぼくたちの若い日本のために		桜井忠雄	143	0.5				
37		或る行進曲		秋元　久	143	0.2				
38		労農ロシア監房日誌	黒箱―Ⅳ―	黒海千々香	144-150	7				
39		随筆・感想	その頃の日記	黒島伝治	151-154	3.3				
40			黄ばむだ麦と『野郎』	鶴田知也	154-155	2.4				
41			失業者と失業者	伊藤永之介	156-158	1.5		○		15
42			生きてる人間の仏名	石井安一	158-160	2.6				
43		急告!!光輝ある処女出版!!スターリン『無産階級の戦略戦術』		文芸戦線社出版部	161	1				
44		資料	無産大衆党の結成		162-163	2				
45		長篇小説	ボストン〔Ⅵ〕	アプトン・シンクレーア(前田河広一郎訳)	164-185	22				
46		編輯後記		編輯局	186	0.8				
		挿絵・カット		尾崎三郎						
計					46点	186	1	2	7	35
	1928年9月号									
	(第5巻第9号)	(表紙)		(労芸美術部)						
1	**9月1日発行**	無産大衆党に関する宣言		労農芸術家聯盟　文芸戦線社	4-5	2				
2		独房語		葉山嘉樹	6-15	10				
3		シベリアから返つて来た手紙		鶴田知也	16-25	10				
4		木枕		伊藤永之介	26-42	17		○		17
5		頭蓋骨		岡下一郎	43-52	10				
6		足音		平林たい子	53-57	5				
7		映画断片			58	1				
8		文芸時評		前田河広一郎	59-63	5				
9		「文芸戦線」とプロレタリア文化――一寄稿者の希望――		山岡一郎	64-65	2				
10		ソヴィエット文学の発展		ア・ルナチャイスキー(波多野俊夫訳)	66-69	3.6				
11		五百円募集		検閲制度改正期成同盟本部	69	0.4				
12		マキシム・ゴルキイ		ペ・エス・コーガン(前田河訳)	70-73	4				
13		文芸戦線		小堀　前田河　里村　木村　鶴田	74-75	2				
14		戦争と流言		小牧近江	76-85	10		○		10
15		大衆講座	レーニン主義講義(一)	青野季吉	86-91	6				
16		カベシンブン―14	文戦八月号を合評す	横須賀文戦読書会	92-93	2				
17		随筆・感想	跛と盲	岡下一郎	94-97	3.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
18			鞭	寺沢資郎	97-101	4				
19			露領での出来事	島田元麿	101-104	3.5				
20		急告!!!申込殺倒(ママ)！愈々近日刊行!!『無産階級の戦略戦術』		文芸戦線社出版部	106	1				
21		暴露小品　施療患者		斎藤貞次	107-111	4				
22		タマをこめろ！		岩淵威夫	112	0.6				
23		戦争から退却する俺達		東利根夫	113-114	1				
24		墓		高野英二	114-115	0.6				
25		海		高橋辰二	115	0.3				
26		同志の叫び	病床にて	斎藤生	112-113	0.5				
27			鉄兵よ	M・T	113	0.2				
28			遠い田舎から	三浦清士	114	0.2				
29			文芸春秋に巣食う奴等よ	小木三郎	114	0.1				
30			無産大衆党万歳	大北慎吾	114-115	0.2				
31			忠言	酒井生	115	0.2				
32		我等の九月			116-120	5				
33		詩の書けない詩人		北岡　実	121	1				
34		無産大衆党の輝ける任務		鈴木茂三郎	122-125	4				
35		旧労働農民党々員諸君に訴ふ		無産大衆党	126-127	2				
36		労働農民新聞の裏切的逆宣伝		石川 譲	128-129	2				
37		日本資本主義の発展――「労農テーゼ」解説その三		山岡一郎	130-134	5				
38		借地借家調停委員の威厳		布施辰治	135-137	3				
39		投稿創作短評		編輯局	138-139	1.3				
40		短篇小説募集		文芸戦線社	139	0.6				
41		争議実情報告	滑川電燈争議調査報告書	小堀甚二	140-159	19.3				
42			秋田県一日市　小作争議現状の報告	今野賢三	159	3		○		3
43		新興文学全集〔購読のすすめ〕			162	0.4				
44		カベシンブン―15	「改造」に現はれた鉄兵の作品	S・Y生	163	0.6				
45			或る私信	加藤生	163	0.4				
46		天井裏の善公(八)		金子洋文	164-170	7	○		7	
47		ルスキー・デレェヴニ――倉庫番の溺死その他		北浦千太郎	171-178	8				
48		戦線資料	宣言	無産大衆党創立大会	179	0.9				
49			対支干渉に対する声明書	無産大衆党	179-180	0.3				
50			富山県民衆諸君に檄す！	無産大衆党常任執行委員会	180	0.3				
51			宣言	無産大衆党豊多摩支部	180	0.3				
52		ポストン(Ⅶ)		アプトン・シンクレア(前田河広一郎訳)	181-201	21				
53		編輯後記		編輯局	202	1				
		挿絵		尾崎三郎						
計					53点	196.3	1	3	7	30
	1928年10月号	(*この号は発禁となる)								
	(第5巻第10号)	(表紙)								
1	**10月1日発行**	巻頭言	階級文芸と芸術至上主義	青野季吉	5	1				
2		パルチザン・ウオルコフ(*小説)		黒島伝治	6-24	19				
3		砲声(*小説)		伊藤貞助	25-41	17				
4		三等機関兵と乞食(*小説)		有馬純二	42-53	12				
5		血と花――三場(*戯曲)		小堀甚二	54-67	14				
6		海外社会文芸	同志ジョアニタの死	ペトロス・ピクロス（前田河広一郎訳）	68-71	4				
7		我等の十月			72-75	4				
8		九月作品評　作品十三篇評		金子洋文	76-79	3.7	○		3.7	
9		『橇』を評す		細田民樹	80-84	5				
10		謝告		青野	79	0.3				
11		カベシンブン―16	吾等の書架『黙禱』を評す	金子洋文	85	1	○		1	
12		映画戦線	プロレタリア映画上映と合法性に関して	野川 茂	86-89	4				
13		歌舞伎『義民録』		前田河広一郎	90-93	4				
14		随筆・感想	雨の八月	里村欣三	94-99	5.3				
15			既成文芸内の二つの傾向	今野賢三	99-100	1.7		○		1.7
16			母の誇	平林たい子	101-103	2.7				
17		文芸戦線		前田河　木村　石田　伊藤　岩藤	104-105	2		○		2
18		社会時評		高杉登	106-111	6				
19		戦線講話	妥協と非妥協の話	田口運蔵	112-117	6				
20		中華民国		高橋辰二	118-119	0.8				
21		的を外すな！		伊藤花子	119-120	0.6				
22		汗		米田　曠	120-121	0.4				
23		噴火		寺沢資郎	121-122	0.4				
24		隧道を掘る工夫達		塩野筍三	122-123	1				
25		同志の叫び	改造九月号の大山郁夫氏の論文	エス・ワイ生	118	1				
26			江間某に	白井市郎	121	0.6				
27			俺は動揺してゐる	木崎九十八	122	0.5				
28		全戦列から投稿せよ！		編輯局	123	0.2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
29		ピョートル・スモーロヂン		ア・ベズイミョンスキー(波多野俊夫訳)	124-128	4.5				
30		労農		労農社	128	0.5				
31		カベシンブン―17	全国水平社芸術聯盟に就いて	小堀	129	0.3				
32			全国水平社芸術聯盟	全国水平社総本部	129	0.7				
33		失業記録（二）	毛皮の女	山内謙吾	130-137	7.6				
34		短篇小説募集について追記す。		編輯局	137	0.4				
35		警戒線を突破して		浅野純一	138	0.9				
36		爺さん		山室孝	138-139	0.4				
37		進軍のラッパは聞える		椿千枝子	139	0.7				
38		モーターとベルト		桐生房雄	139-140	0.3				
39		聞いてくれ理論家よ		黒杉佐羅夫	140-141	1				
40		或る詩集の序曲		深谷千枝子	141	0.5				
41		鶏の群よ		抗夫生	141	0.3				
42		戦線資料	無産大衆党の結成に関してプラウダ記者に与ふ(公開状)	雑誌「労農」	114-144	3				
43			宣言	無産大衆党合同大会	145-146	2				
44			日本清算主義者の陰謀(プラウダ紙七月二十日所載記事)		147	1				
45		文芸戦線社出版部の新刊書、読者カード			148-150	3				
46		長篇小説	ボストン(Ⅷ)	アプトン・シンクレーア（前田河広一郎訳）	151-179	30				
47		編輯ノート		編輯局	180-183	3.8				
		挿絵		尾崎三郎						
計					47点	179.1	2	2	4.7	19
	1928年11月特輯号(*この号は前号と同様発禁、前号と同じイラストを使用)									
	(第5巻第11号)	表紙								
1	**11月1日発行**	民衆よたて!!		デミヤン・ベドヌイ	4	1				
2		漫画			5	1				
3		ロシア革命と日本の運動		青野季吉	6-8	3				
4		レーニン 〔肖像写真〕			9	1				
5		一九一七年十一月七日――世界を震撼させた十日間より――		ジョン・リード（伊藤貞助訳）	10-31	22				
6		レーニンとクロンシタツト要塞との会話		ウエ・ポリヤンスキー（島田元暦[ママ]訳）	32-35	4				
7		レーニンと農夫		シリフテル（MS生訳）	36-39	4				
8		十一月七日のクーデター		田口運蔵	40-48	8.7				
9		PANORAMA	「文戦」朝鮮では	朝鮮の読者	48	0.3				
10		ソヴィエツト・ロシアに於ける教化的発展			49	1				
11		文芸時評		小堀　甚二	50-54	5				
12		ペチ・ブル急進主義の諸相		平林たい子	55-59	4.7				
13		PANORAMA	日本資本の南進		59	0.3				
14		『施療室にて』――平林たい子短篇集		黒島伝治	60-62	2.4				
15		民衆の怨嗟の的たる暗黒裁判に抗して	「公判公開要求聯盟」成立す		62-63	1.6				
16		俺いらの生活のビラ――一労働者の手帖		武本龍夫	64-66	2.6				
17		秋		岩淵威夫	66-67	0.4				
18		さらば灰色の家よ!		伊藤花子	67-68	1				
19		祖国		寺沢資郎	68	0.5				
20		茫然としてゐる詩人等――こゝに過去の、一切の自分の詩を否定する――		伴野英夫	68	0.5				
21		講談全集修養全集を読むな！文芸戦線の直接読者たれ！			69	0.5				
22		モスクワ通信		丘 文夫	70-81	11.5				
23		闘争記録、詩、生活記録、其他のレポートを送れ!!			81	0.5				
24		文芸戦線		石田 前田河　小島　岩藤　青木 北川　里村	82-83	2				
25		大衆講座	レーニン主義講義（二）	青野季吉	84-90	7				
26		社会時評		檜六郎	91-97	6.5		○		6.5
27		PANORAMA	フアシヨの親分 国際労働協会		97	0.5				
28		大衆の叫び	『戦旗』の小説のザマを見ろ――十月号所載――	豊田平太郎	98-101	1.3				
29		機械の奴隷か？、おれ等の餓鬼		藤本杏子	98-99	1.3				
30		人間狩猟者		高畑信吉	99-100	0.5				
31		プロレタリア行進曲		大坪実夫	100-101	0.3				
32		希望		丸田六郎	101	0.1				
33		氾濫する群集		桐生房雄	101	0.2				
34		上官の復讐		アンリ・バルビユス（小牧近江訳）	102-105	3.5		○		3.5
35		『モンド』の予約申込について			105	0.5				
36		海上の叛逆		アール・ダブリユー・ポストゲイト（前田河広一郎訳）	106-116	11				
37		勇敢に清算せよ！		岩藤雪夫	117-121	5				
38		労農美術十一周年		エフ・アイ・シュミット(山添房夫訳)	122-127	4.8				
39		悪検閲制度改正の為めの五百円募集		検閲制度改正期成同盟	127	0.2				
40		我等の十一月			128-131	4				
41		暴風		里村欣三	132-145	14				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
42		小作人の犬と地主の犬		葉山嘉樹	146-152	7				
43		漂流		村中豊次	153-184	32				
44		員章を打つ		山本勝治	185-203	19				
45		無産者美術団体協議会主催プロレタリア美術大展覧会作品募集			204	1				
46		編輯ノート		編輯局	206-206	1.9				
計					46点	201.1	0	2	0	10
	1928年12月号									
	(第5巻第12号)	表紙		尾崎三郎						
1	**12月1日発行**	巻頭言			5	1				
2			ガトフ・フセグダア	岩藤雪夫	6-43	38				
3			山越え	伊藤永之介	44-52	9		○		9
4			然り!!弾丸になりたい	武本龍夫	53-55	3				
5			組合旗は動く	岡下一郎	56-72	17				
6		闘争の生活から	新聞配達夫	前田俊夫	73-75	2.5				
7		PANORAMA			75,93,134	1.5				
8		一九二八年の文壇的決算に関するノート		山村梁一	76-84	9				
9		ブルジョア文学の再検討――有島武郎について		林一郎	85-93	8.5				
10		プロレタリア作家としての資格		長岡八十一	94-97	4				
11		文芸戦線		岩藤　石井 鶴田　里村	98-99	2				
12		社会時評		檜 六郎	100-103	3.5		○		3.5
13		ダラ幹トーマの正体――レーニンの言葉			103	0.5				
14		大衆講座	レーニン主義講義（三）	青野季吉	104-109	6				
15		人買ひトーマ来る		鎌田稲三	110-111	2				
16		映画戦線	プロレタリア映画上映と合法性に関して（続稿）	野川茂	112-114	3				
17		支那革命と文芸・女性		柏八里	115-117	3				
18		新刊紹介	『国際情勢と我等の任務』	舶迫生	118	0.8				
19			『革命の陣頭に起ちて』『マルクス主義芸術論』	山内生	118-119	0.8				
20			『階級社会の芸術』	平田生	119	0.4				
21		村よ・お前の求める――党へ！		高橋辰二	120-124	2.8				
22		我等の旗		寺沢資郎	124-125	0.6				
23		日本の同志よ 耳があつたら聞いてくれ		葉山健助	125-127	1.2				
24		俺は足を折られた		青柳杏樹	127-128	0.6				
25		警哨線を守れ！		米田曠	128-129	0.6				
26		全日本無産芸術聯盟を何故脱退したか		星川周太郎	120-127	2.7				
27		読者通信		(京橋)柴山啓吉	126-127	0.4				
28		読者通信		(埼玉)岡野正太郎	128-129	0.5				
29		原稿・レポートを送れ！			129	0.3				
30		各国に於ける工場新聞（１）	アメリカに於ける工場新聞	オイゲン・パウル（倉瀬幹夫訳）	130-134	4.5				
31		革命と文化		A・デボーリン（船迫勝彦訳）	135-142	8				
32		壁新聞[ママ]16	無産青年デーについて	浅野純一	143	1				
33		最近数年間の文学（一九一七-二三年）		ペ・エス・コーガン(井上満訳)	144-154	8.7				
34		一九二八年度合本予約募集			154	0.3				
35		中篇小説	四十一人目〔１〕	ボリス・ラウレニエフ(長野兼一郎訳)	155-179	15				
36		編輯ノート		編輯局	180	1				
計					36点	163.7	0	2	0	12.5
	1929年1月特輯号									
	(第6巻第1号)	表紙(*この号は発禁となる)		青木壮一郎						
1	**1月1日発行**	巻頭言	一九二九年を迎へる	青野	5	1				
2		カール・リープクネヒト		アンリー・ギルボウ（長野兼一郎訳）	6-10	3				
3		絵	カール・リープクネヒト　憤激		7,11	1.5				
4		二人の歩いた道			8-10	1				
5		カール・リープクネヒトとローザ・ルクゼンブルグ		クララ・チエトキン（長野兼一郎訳）	12-15	4				
6		スパルタカス・ブンド		田口運蔵	16-19	4				
7		同志レーニン		N・ブハーリン	20-21	2				
8		文芸戦線		青木　長野　北川　石井　伊藤　里村	22-23	2		○		2
9		黒あざ(*小説)		岩藤雪夫	24-37	14				
10		ある機械の最後(*小説)		野口一郎	38-45	8				
11		政戦日記(*小説)		今野賢三	46-61	16		○		16
12		古い長靴――青年訓練所の仲間に――、党へ!!(*詩)		岩淵威夫	62-63	2				
13		差出された手(*詩)		寺沢資郎	64-65	2				
14		闇の怒(*小説)		鶴田知也	66-93	28				
15		大検挙の後(*小説)		細田民樹	94-104	11				
16		太陽を孕む黎明、レールに刻む生活者のトン――一線路工夫の手帖―(*詩)		武本龍夫	105-107	3				
17		俺達のタマ--労農新聞が出たぞ!!(*詩)		伊藤花子	108-109	2				
18		マルーシヤ(*小説)		金子洋文	110-120	11	○		11	
19		崖下の家(*小説)		黒島伝治	121-125	5				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
20		看視付の自殺(*小説)		細田源吉	126-133	8				
21		掃除夫(*小説)		山内謙吾	134-140	7				
22		血の日曜日		T・I	141-143	3				
23		プロレタリア文学運動の一偏向――小ブルヂョア××主義化の簡単なスケッチ――		青野季吉	144-147	4				
24		ブルジョア文学の再検討（承前）――有島武郎について――		林一郎	148-155	8				
25		ソウェート（ママ）・ロシヤ十年間のプロレタリア文学論研究（一）		岡沢秀虎	156-169	14				
26		常に用意せよ！		平林たい子	170-173	3.5				
27		PANORAMA			173	0.5				
28		木更津附近の漁民を見よ		斎藤貞次	174-177	4				
29		社会時評		檜六郎	178-184	6.6		○		6.6
30		本誌旧号を利用せよ			184	0.3				
31		『戦旗』の附録その他一二		青木壮一郎	185-191	6.7				
32		九州遊説報告		鶴田	191	0.3				
33		各国に於ける工場新聞（２）	ドイツの工場新聞	オイゲン・パウル（倉瀬幹夫訳）	192-196	5				
34		壁新聞　１７	果して『労働者は神聖なり』や？	野原峰一	197	0.8				
35			壁新聞の通信を送れ！		197	0.2				
36		支那通信	揚子江岸から	前田河広一郎	198-202	4.9				
37		革命尚未成功、同志仍須努力		孫文	202	0.2				
38		大衆通信		（高知）林直流　（大井）S・A生　（九州飯塚）荒牧潤　（大阪）竹野朝二　（岩手）菊本東吾　（愛知）竹村敏男　（東京）一愛読者　（淀橋）IT生　（横浜）T生　（砂町）田川大吉　（福岡）西島芳雄　（府下）田端俊	203-206	4				
39		中篇小説	四十一人目〔２〕	ボリス・ラウレニエフ(長野兼一郎訳)	207-225	18.2				
40		編輯ノート		編輯局	226-227	1.8				
計					40点	221.5	1	3	11	24.5
	1929年2月号									
	(第6巻第2号)	表紙								
1	**2月1日発行**	日本大衆党に関する宣言		労農芸術家聯盟　文芸戦線社	4-5	2				
2		海外プロレタリア詩篇　ソヰエート・ロシヤ―プロレタリア詩抄―（黒田辰男訳）	カタワーシヤ	デミヤン・ベードヌヰ	6-7	1				
3			我等は鉄の中より成長する	ガスチヨフ	7-8	0.7				
4			全宇宙の女神に	サドーフイエフ	8-9	0.6				
5			集団の意志　太陽の撒布者	アールスキイ	9-10	1.5				
6			われ等	ゲラーシモフ	10-11	1				
7			われ等	キリーロフ	11-12	1.2				
8			俺は鎚で打つ、打つ	カーヂン	12	0.5				
9			私の花婿	ブヰコワ（園田時子訳）	13	1				
10		監獄の歌外一篇（長野兼一郎訳）	監獄の歌	フランツ・カール・ワイスコップ	14-16	2.4				
11			われわれは静かに築く	マツクス・バルテル	16	0.6				
12		人間肥料		葉山嘉樹	17-23	7				
13		新しき血		鶴田知也	24-33	10				
14		巷の断層		鈴木清次郎	34-62	29				
15		環境の子		里村欣三	63-76	14				
16		社会時評		檜六郎	77-81	5		○		5
17		大衆講座	レーニン主義講義（四）	青野季吉	82-88	7				
18		各国に於ける工場新聞（３）	フランスに於ける工場新聞	D・コストランスキー（倉瀬幹夫訳）	89-93	4.5				
19		PANORAMA			93	0.5				
20		文芸戦線		石田 小堀 平林 岩藤 葉山	94-95	2				
21		悪魔		ドストエフスキー（幸徳秋水訳）	96-100	4.5				
22		妹へ		岩藤雪夫	101-109	10				
23		プロレタリア文学の大衆性の問題に関連して――林房雄君の愚論を駁す――		青木壮一郎	110-118	9				
24		一月の作品に就いてのノート		伊藤永之介	119-125	6.7	○		6.7	
25		予約募集	一九二八年度合本全三冊		125	0.3				
26		暴風 、 怒濤(*詩)		武本龍夫	126-129	2.3				
27		青年××よ！即時××しろ！		伊藤はな子	129-132	2				
28		宣言（草案）		全国労農青年同盟創立大会	127-130	1.2				
29		宣言（草案）		無産婦人同盟創立大会	130-132	0.6				
30		論戦・論駁・論評	愚劣な広津氏の良心主義	北川健一郎	133-134	1.7				
31			「大衆」の一人として言ふ	渡辺孝治	134-135	1.3				
32		原稿を送れ！			135	0.2				
33		半端な上海地図		柏八里	136-143	8				
34		闘争の中から	赤い腕章	大友鉄男	144-148	4.3				
35			社会主義を知る＝一女工より諸兄姉に送る＝	深谷千枝子	148-151	3.2				
36			炭坑争議の夜	古賀不美男	151-154	3.2				
37		本誌に全国的色彩を横溢せしめよ！〔原稿募集〕			154	0.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
38		大衆通信		（姫路）金井秀雄　（岡山）吉田政志　（大分）佐々木義郎　（静岡）三井武雄（朝鮮）聖祚（東京）杜東（福岡）荒牧生（鳥取）遠藤博 R生（山梨）中山和夫（神戸）O生（京都）BOS生（宇都宮）大原狂人（佐世保）井上生（岩手）菊本東吾（東京）成田荘治（九州）稲田啞郎	155-161	6.2				
39		三月八日は「無産婦人」デーだ!!〔原稿募集〕			161	0.6				
40		文芸戦線大講演会			162	1	○		1	
41		中篇小説	四十一人目〔３〕	ボリス・ラウレニエフ(長野兼一郎訳)	163-177	15				
42		編輯ノート		編輯局	178	0.8				
計					42点	173.9	2	1	7.7	5
	1929年3月号									
	(第6巻第3号)	表紙								
1	**3月1日発行**	巻頭言	三月十五日事件に関連して	小堀甚二	5	1				
2		国際婦人デーの意義		アレキサンドラ・コロンタイ	6-8	3				
3		婦人間の仕事を強化せよ――最近の争議の教訓――		ケーテ・ポール(大山敏子訳)	9-11	3				
4		婦人革命家列伝		田口運蔵	12-17	6				
5		支那国民革命に現れた婦人首領		X・Y生	17-19	2				
6		パリコンミユン女戦士 ルキズ・ミツシエル小伝		堺　枯川	19-21	1.5				
7		一人一評	『環境の子』（里村欣三）　『新らしき血』（鶴田知也）	小堀甚三（ママ）	21	0.5				
8		党の組織と党の文学		レーニン(岡沢秀虎訳)	22-25	3.2				
9		一人一評	『人間肥料』（葉山嘉樹）	岩藤雪夫	25	0.4				
10			『巷の断層』（鈴木清次郎）	平林たい子	25	0.4				
11		各国に於ける工場新聞（４）	イギリスに於ける工場新聞	オイゲン・パウル（倉瀬幹夫訳）	26-29	4				
12		闘争の記録三篇	渡辺さんを想ふ	小島すみ子	30-33	3.3				
13			キリストからマルクスへ！	西沢よしえ	33-35	2				
14			女工手よ団結せよ	(紡績女工）雪枝	35-37	2.7				
15		笑話一束			37	0.3				
16		論戦・論駁・論評	小児病模倣ガールの一典型	藤波千代子	38-39	1.8				
17			大衆を忘れないでくれ	大原定雄	39-40	0.9				
18			文戦への要求	S生	40-41	1.3				
19		のぞき眼鏡		山本和子	42-47	6				
20		文芸戦線		石田　平林　井上　黒島　前田河　里村	48-49	2				
21		ソーニア・イヴノーブナ―特別読物―		近藤栄蔵	50-60	11				
22		婦人の解放とツエトキン女史		加賀信子	61-63	3				
23		大衆通信		(米国)石垣生（宇都宮)大原狂人(朝鮮)李慈漢　(奈良)笹岡繁宏(岡山)中島比呂詩　(信州)孟彦生(福岡)荒牧潤　(東京)別府春子(姫路)山本隆良	64-67	4				
24		紀陽染工争議記録		幡鉾道夫	68-71	3.3				
25		デモの思ひ出		木下晃	71-73	2.7				
26		文芸戦線大講演会傍聴記		川口虎夫	74-75	2				
27		社会時評		檜六郎	76-86	10.2		○		10.2
28		一言す		小堀甚二	86	0.8				
29		新世紀座観劇記		広谷敬三郎	87-89	3				
30		ソヴェート・ロシヤ十年間のプロレタリヤ文学論研究（二）		岡沢秀虎	90-97	7.4				
31		資料	声明書	鈴木茂三郎　黒田寿男　大道憲二	97	0.4				
32			声明書	浅原健三　古市春彦	97	0.2				
33		三月の記憶から	〔写真〕　共和党員の壁		98-99	2				
34			第三インターナシヨナル創立大会開会の辞	レーニン(田中九一訳)	100	0.8				
35			第三インターナシヨナルの創立に際して	(田中九一訳)	100	0.8				
36			マルクス送葬の辞	エンゲルス(田中九一訳)	100-103	2				
37			三月十八日巴里コンミユンの蜂起	長野兼一郎	103-106	3				
38			八日革命の概観	K・S・Y	106-108	2				
39		(*広告)	文芸戦線社出版部の新刊書		109	1				
40		鉄		岩藤雪夫	110-173	64				
41		驟雨（一幕７場）――支那の伝説から		前田河広一郎	174-182	9				
42		日本大衆党若干の幹部に纏はる醜聞事件の真相を暴露して、読者諸君に訴ふ		平田孝一　里村欣三	183-188	6				
43		抗議書		労農芸術家聯盟	189-190	1.5				
44		声明		日本大衆党豊多摩支部有志	190	0.5				
45		編輯ノート		編輯局	191	0.8		○		0.8
計					45点	186.7	0	2	0	11
	1929年4月号	表紙								
	(第6巻第4号)	グラフ								
1	**4月1日発行**		火の法則	青野生	5	1				
2		大衆の意志を叩きつけた同志石井			6-7	2				
3		山本代議士の死を銘記せよ！			8-9	1.7				
4		三月五日を超えて		米田曠	8	0.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
5		同志山本勝治の死		前田河広一郎	10-11	2				
6		三月二日の石井安一君		一傍聴者	12-13	2				
7		山の一頁		伊藤永之介	14-40	27		○		27
8		写真		田口運蔵	41-53	13				
9		闘争の歌はやまない　春をもとめて		岩淵威夫	54-55	2				
10		鉄の翼		武本龍夫	56	0.8				
11		私と弟		古賀不美男	56-57	1				
12		処女地		今野賢三	58-83	26		○		26
13		文芸戦線		前田河　里村　北川　青木　伊藤　岩淵　山口	85-85	2		○		2
14		プロレタリヤ文学の問題その他		青野季吉	86-89	4				
15		ソヴェート・ロシヤ十年間のプロレタリヤ文学論研究（三）		岡沢秀虎	90-103	14				
16		ロシアの日本プロレタリア文学研究家より		エヌ・フエルドマン	104-107	3.3				
17		文芸戦線社からの返信		文芸戦線同人（文責前田河）	107	0.7				
18		ゴリキーの母		細田民樹	108-111	4.6				
19		ロシヤのカブキ			112	0.4				
20		ブツクレビユ	「前田河広一郎集」続篇に就いて	里村欣三	113	2				
21			『ソウエート・ロシヤ詩選』	岩淵威夫	115	0.8				
22		野田争議敗戦まで		黒島伝治	116	4.3				
23		資本家側から見た争議日誌抄			117	7				
24		一九二八年度文芸戦線社合本希望者は直ちに申し込め			123	0.2				
25		檄〔東京朝日新聞社への抗議〕		労農芸術家聯盟	126	0.5				
26		社会時評		檜六郎	127	7		○		7
27		三団体解散の一周年を迎ふ			134	2				
28		田中内閣反動史一覧表		米田曠	136	7.5				
29		全戦列から投稿せよ!!メーデ号原稿を募る			143	0.5				
30		各国に於ける工場新聞	オーストリヤに於ける工場新聞	オイゲン・パウル（倉瀬幹夫訳）	144	3.6				
31		図書取次開始			147	0.4				
32		論戦・論駁・論評	『創造社』の解散	前田河広一郎	148	1.7				
33			一言答える――中野重治に	米田曠	149	1.6				
34			林房雄よ、恥を知れ！	里村欣三	151	1.6				
35			プロレタリア芸術の大衆性に付(ママ)いて	TY生	152	1.2				
36		塵埃		青野季吉	154	2.8				
37		「死について」		葉山嘉樹	157	0.7				
38		作家の覚え書――プロレタリア文学に於ける筋の変化――		平林たい子	159	1.6				
39		故山本宣治君		前田河広一郎	161	1.6				
40		漫画			154	0.6				
41		詩	友に送る	小夜河虚人	156	0.4				
42			弟の歌ふ	石島健	157	0.2				
43			海がある	辻本忠一	158	0.2				
44			新聞配達夫	吉柴助次	159	0.6				
45			工場労働――断章	上村実彦	161	0.7				
46		大衆通信		（東京市外）岳辺生　（兵庫）ABC生　（東京）菊地生	164	2				
47				（岡山）PLO生　岡美俊策	165	3				
48		戦線資料	東京朝日岩月監理所従業員ストライキ		179	4				
49		編輯ノート		編輯局	183	1		○		1
計					49点	179.1	0	5	0	63
	1929年5月特輯号	**メーデー特集**								
	(第6巻第5号)	表紙								
	5月1日発行	扉・絵	第十回メーデー		5	0.5				
1		(*巻頭言か、目次に記載なし)	出兵費反対!即時撤兵!!	(*無題、無記名)	(*5)	0.5				
2		グラフ	各国のメーデー		6-9	4				
3		メーデーに檄す		レーニン	10-11	2				
4		吾等の日メーデー		田口運蔵	12-14	3				
5		散文詩	メーデーの前夜	岩淵威夫	15-17	3				
6		メーデーの思ひ出		堺利彦	18-19	1.5				
7		栄えある五月一日に（ゴーリキーの母〔村田訳〕より）			19	0.5				
8		〔メーデー詩集〕	牢獄にメーデーを聴く	岩淵威夫	20-21	2				
9			その日の街	長谷川進	22-25	3.5				
10			我等は叫ぶ	古賀不美男	25-26	1				
11			行軍の中に――メーデーの記	今村桓夫	26-27	1.3				
12			津浪だ！	TI生	28	1				
13		田舎町のメーデー		小島すみ子	29	1				
14		英国ゼネ・ストの九日間		伊藤貞助	30-42	13				
15		鉄窓の同志より		石井	43	0.5				
16		(*戯曲)群盗　五幕（六場）		小島勗	44-95	52				
17		文芸戦線		長野　岩淵　伊永　木村　伊貞　里村　山内　和　黒島	96-97	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
18		文芸時評		細田民樹	98-105	8		○		8
19		階級的裏切り者の見本――主として中野重治に関して		松村洋蔵	106-112	7				
20		ソヴェート・ロシヤ十年間のプロレタリヤ文学論研究（四）		岡沢秀虎	113-117	4.5				
21		大衆通信		（東京）島中生	117	0.5				
22		サツコ・ヴアンゼツテ事件の裏		前田河広一郎	118-126	8.5				
23		鉄窓の同志より（第二信）		石井安一	126	0.5				
24		俺達の五月祭		滝沢二一	127-128	1.1				
25		集約された力線で！		佐藤恕	128	0.7				
26		われらの誕生日		樺谷幹生	128-129	1.2				
27		春の深夜		青野季吉	130-132	2				
28		二つの感想と思ひ出		今野賢三	132-135	2.2		○		2.2
29		グレーボフ君からの手紙		尾瀬敬止	135-137	2.3				
30		『策動』したのは誰だ――救援会との交渉顛末		今野賢三	130-135	2		○		2
31		ブツクレビユ	『赤旗の靡くところ』	里村欣三	138-139	1.5				
32			『史的一元論』	黒島伝治	139	0.5				
33		社会時評		檜六郎	140-146	6.6		○		6.6
34		本誌旧号を利用せよ！			146	0.4				
35		各国に於ける工場新聞	ベルギーに於ける工場新聞	コストランスキー	147-149	2.6				
36		一九二八年度文芸戦線合本			149	0.4				
37		我等の五月			150-154	3				
38		警官暴行事件	対支出兵反対演説会で　済南事件		150	1.5				
39		英露国交断絶			154	0.4				
40		闘争ニュース	大衆的批判を求む	（全国新聞労働組合）大隈幸郎	155-164	10				
41			前垂れの旗、日の丸の旗、赤い木綿布の旗、東京モスリンの争議を観る	里村欣三	165-171	7				
42			全日本の漁民よ起て	斎藤貞次	172-173	2				
43		大衆通信		（九州）TM生　（大連）タケナカ生　（大阪）飯田輝次　（北海道）管義盛　（岡崎）SH生	174-175	2				
44		(*小説)労働		平林たい子	176-190	15				
45		(*小説)『題を××にした小説』		黒島伝治	191-202	12				
46		長篇小説	貧農委員会（Ⅰ）	エヌ・パンフイロフ（長野兼一郎訳）	203-213	11				
47		編輯ノート		編輯局	214	0.8				
計					47点	209.5	0	4	0	18.8
	1929年6月号									
	(第6巻第6号)	表紙　(*発禁になる)		安藤秀男						
1	6月1日発行	グラフ	武器――それは誰に××××てゐるか？	黒島伝治	4	5				
2		漫画		グロツス・ホルツ	9	1				
3		詩	歩哨戦	今村桓夫	10	2				
4			腕を	米田曠	12	1				
5			鉄鎖に縛された象よ	寺沢資郎	13	.0.6				
6			紙鳶は勝たせた！―モスリン争議で私達は見事に勝つた――	堀ひで子	13	0.7				
7			ブルーズを着た男	長谷川進	14	1.8				
8			俺達は前衛！	佐藤恕	16	2				
9		長編戯曲	蒋介石	前田河広一郎	18	15				
10		人間売りたし		鈴木清次郎	33	19				
11		文芸戦線		石田	52	2				
12		大衆講座	レーニン主義講義(五)	青野季吉	54	8				
13		社会時評		檜六郎	62	6		○		6
14		分裂と対立の新潟県無産階級戦線		若枝敬三	68	6.3				
15		一人一評	『群盗』(小島勗)	前田河広一郎	74	0.7				
16		詩	われらの心臓と標的　同志山本貞治の死	樺谷幹生	75	1.6				
17			治安維持法に×××な	桐生房雄	76	0.3				
18			エンヂンは自ら動く	勝目てる子	77	0.5				
19			愚感	岡田政之	77	0.3				
20		流刑者の拵へた街イルクチツク		田口運蔵	78	8				
21		演芸時評		小島勗	86	4	○		4	
22		ブルジヨア文学批判に就いて――その階級制・政治性を暴露せよ――		青野季吉	90	2				
23		ソヴエート・ロシア十年間のプロレタリヤ文学論研究(五)		岡沢秀虎	92	7.5				
24		一人一評	『題を××にした小説』(黒島伝治)	細田源吉	99	0.5				
25		我等の六月			100	2.5				
26		俺達の目			100	2.5				
27		各国に於ける工場新聞	アルゼンチンにおける工場新聞	コストランスキー(倉瀬幹夫訳)	105	2.7				
28		ロシヤ語教授〔広告〕		落合文雄	107	0.3				
29		カベ新聞	(A)八幡市議戦を顧みて	金城陽介	109	3.7				
30			(B)塀を突破して――大阪合同紡績神崎工場争議	銭屋五郎	111	3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
31			(C) 〇P製薬の争議解決迄	栗山泰治	114	2.6				
32			(D)鹿児島市外の暴動事件	川路利昌	117	1				
33			(E)東京朝日新聞争議解決報告	(全国新聞労働組合)渡辺俊夫	118	1.5				
34		随筆	小児科医院にて	小牧近江	120	1.8		〇		1.8
35			戦死者の統計(*日清戦争)	里村欣三	122	2				
36			盛岡行	前田河広一郎	124	2.1				
37		東京のメーデー		石川	121	0.2				
38		神戸市のメーデー		鶴田	125	0.2				
39		大阪のメーデー		佐藤	125	0.1				
40		一人一評	「労働」(平林たい子)	伊藤永之介	126	0.5		〇		0.5
41		「芸術的価値」の問題をめぐりて		青木壮一郎	127	9.5				
42		大衆通信		(朝鮮)森脇正之　(大阪)川辺一雄 (神戸)遠山鬼人 (新潟)大山国麿 (東京)菊地進　(埼玉)武谷永之助 (栃木)若林はつ子　(福岡)桐生房雄	137	2.5				
43		鉄窓の同志より		(市ヶ谷)石井安一	138	0.5				
44		海に生くる人々		葉山嘉樹作　金子洋文脚色	140	25	〇		25	
45		本部より読者諸君へ			165	1				
46		長篇小説	貧農組合〔*Ⅱ〕	エフ・パンフイロフ(長野兼一郎訳)	166	15				
47		文芸戦線第六巻第六号附録	大衆の力で日本大衆党の階級性を守れ		181	1				
48		資料	臭幹平野の反動愛国党樹立計画とはどんなものか		182	2.4				
49		日本大衆党多数派幹部の裏切行為に関し全国二万の『文芸戦線』愛読者に檄す！		労農芸術家聯盟　文芸戦線社	184	0.6				
50		日本大衆党分裂反対統一戦線同盟が生れた!!本誌読者は一人残らず加盟せよ			186	1				
51		資料（２）	分裂反対戦線統一同盟の声明書	日本大衆党分裂反対統戦同盟	188	0.5				
52			左翼三幹部声明書	猪俣津南雄 鈴木茂三郎　黒田寿男	188	0.5				
53		編輯ノート		編輯局	189	0.8				
計					53点	182.2	2	3	29	8.3
	1929年7月号									
	(第6巻第7号)	表紙								
1	**7月1日発行**	扉	打倒帝国主義		5	1				
2		支那ブルジョワジイの政治的安定と日本帝国主義		青田三五郎	6-9	4				
1		五卅記念日まで		池田博	10-19	9				
4		今年のモスクワのメーデー		山本生	19-24	3.5				
5		『立憲労働党』内閣の再現		野村一平	24-25	1.8				
6		印度議会爆弾事件と其後		小牧近江	25-26	1.2		〇		1.2
7		樺太山火の放火犯人は誰か？		(樺太にて)土方農夫男	27-29	1.4				
8		水雲教の教義について		在朝鮮生	29-31	2.6				
9		歯車		赤司正	32	0.3				
10		前を見ろ!!		永井正春	32-33	0.6				
11		勝利の歌を唄ひながら		逸名氏	33-35	1.3				
12		各国××党機関紙の現勢			32-34	1				
13		ソウイエートロシヤの現勢			35	0.3				
14		一労働者の質疑に答へる		青野季吉	36-39	4				
15		牢獄断片		石井安一	40-45	3.6				
16		我等の七月			40-45	1.8				
17		七月の闘争	同志中蔦からの手紙		46	0.4				
18			川崎造船所大ストライキを想ふ	中蔦増二	46-59	13				
19		文芸戦線読書会万歳！文芸戦線読書会規約			59	0.6				
20		レーニン主義講義(六)		青野季吉	60-66	7				
21		長篇小説	貧農組合３	エフ・パンフイロフ(長野兼一郎訳)	67-76	10				
22		文芸戦線		石田　青木　里村　北川	77-78	2				
23		プロレタリア芸術の対象と素材の問題		山村梁一	79-86	8				
24		六月の劇壇		小島昂	87-90	3.5				
25		岡下一郎君に！		小堀生	90	0.5				
26		無産大衆経済講座第一講	全解禁と無産大衆	青山北一	91-98	7.5				
27		この暴圧を見よ			93	0.4				
28		書記から全読者諸君へ！			98	0.5				
29		作家の覚え書（二）		平林たい子	99-101	3				
30		ソウエート・ロシヤの戯曲家より　一のつ提議		尾瀬敬止	102-103	2				
31		資料	宣言	日本大衆党分烈反対全国実行委員	104-109	2				
32			無産市民諸君！国際消費組合デーに参加せよ	関東消費組合聯盟	109-110	0.4				
33		六月の映画	世界大戦を刻む	伊藤貞助	104-107	2.4				
34			大都会労働篇　東京行進曲	石山健二	108-110	1.5				
35		移住鮮人を密航者として送還		(福岡)山田生	110	0.3				
36		トーキーの出現は何を語る――街頭に投げ出された楽師の群――		石山健二	111	1				
37		俺達の眼			112-113	2		〇		2
38		本部より読者諸君へ			114	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
39		壁新聞	六月十五日――反動主義者との戦	中西伊之助	115-118					
40			秋田農民運動官憲弾圧方針――日本大衆党秋田県支部聯合会――	小川二郎	118-120	2		○		2
41			簡単に答へる――救援会問題について	青木壮一郎	121-122	1.5				
42			八幡市雑観――彼らは如何に階級的裏切を為したか―	金城陽介	122-124	1				
43			浅沼田所両氏武勇伝の巻	小堀生	124-125	2				
44			裏切今東光――関東俸給者支部	水野晴作	126	1				
45		戦線用語			116,119,123,170	0.6				
46		大衆通信		自覚なき大衆！（大牟田・赤司正）　海上より(一水夫)　苦しむほど偉くなる(神戸・青江茂照)　死人の行列(大阪・卜部四条)　階級性を確立せよ(姫路・TY生)　陸の同志兄弟よ！(神○丸・英夫生)	127-130	4				
47		階級的性道徳		ゼシカ・スミス(山本和子訳)	131-135	5				
48		詩	病んでゐる弟に　街頭にて(他一篇)	菅野秀夢	136	0.7				
49			地底から叫ぶ	桐生房雄	136-137	0.4				
50			土の呻き	中島北海	137	0.4				
51			我等の叫び	岡田政之	137	0.3				
52		長篇戯曲	蒋介石（２）	前田河広一郎	138-149	12				
53		掉取男		桐生房雄	150-157	8				
54		ある村の素描		里村欣三	158-169	12				
55		新劇協会　『海に生きる人々』を見て		一火夫見習	170	0.7	○		0.7	
56		特輯附録	ピオネールの生活と活動	ア・イルクトーフ(西野哲訳)	171-186	17				
57		編輯ノート		編輯局	187	0.8				
計					57点	175.8	1	3	0.7	5.2
	1929年8月号	(*この号は発禁となる)								
	(第6巻第8号)	表紙								
1	**8月1日発行**	闘争グラフ			4-8	5				
2		闘争の八月　米騒動実記	米騒動の思出	高瀬謙二	9-12	3.3				
3			上野万世橋附近	米村嘉太郎	12-14	2.6				
4			各地の米騒動	朝田浩二	14-19	5.2				
5		詩	手	今村桓夫	20-22	1.8				
6			皆んな聞け	永井正春	22-24	0.8				
7			返事	米田曠	24-26	1.4				
8		七月の法廷日誌			20-26	1.9				
9		日本新写実派代表傑作集(上海楽群書店出版)			26	0.2				
10		長編戯曲	蒋介石（３）	前田河広一郎	27-38	12				
11		暁		伊藤貞助	39-53	14				
12		こめかみの傷あと		田口運蔵	54-73	20				
13		暴徒		山内謙吾	74-90	17				
14		大衆を信頼する文学		小堀甚二	91-93	2.5				
15		一人一評	「掉取男」	細田源吉	93	0.5				
16		無産大衆経済講座第二講	預金部と無産大衆	青山北一	94-105	11.7				
17		一人一評	「掉取男」	金子洋文	105	0.3	○		0.3	
18		文芸戦線			106	2				
19		世界プロレタリア文学抄	釈放	ミチエール・ゴールド（前田河広一郎訳）	108-112	5				
20		真夏の労働	車力	平林たい子	113	1				
21			蛸つけドツコイ	里村欣三	114	1				
22			電工	小堀甚二	115	1				
23			警視庁建築場の仲間達！	鶴田知也	116	1				
24			土方の能書	伊藤永之介	117	1		○		1
25			四角な丸いコノ野郎	前田河広一郎	118	1				
26		七月の創作		細田民樹	119-121	3				
27		我等の八月			122-124	1.8				
28		七月の日本映画		石山健二	122-124	0.9				
29		社会時評		檜六郎	125-130	6		○		6
30		七月の劇場	レツド・スポート	小堀甚二	131-136	6	○		6	
31			左翼劇場『全戦』	田辺若男	137-138	1.1				
32		ソヴイエツト・ロシヤを守れ			139	1				
33		民政党財閥物語		杉並一馬	140-142	3				
34		所謂「左翼労働組合」の全国的結成に反対す		高杉登	143-151	8.7				
35		全産業労働組合全国会議創立に対するメツセージ		労農社	151-152	1.3				
36		壁新聞	１沖電気争議の真相	(一組合員)長田和吉	153-156	3.5				
37			２戦旗七月号の星川某を笑ふ	綿貫一	156-157	1.3				
38			３京都市『大毎』従業員のストライキ	(全国新聞労働京都支部)柳史郎	158-159	1.8				
39			４盛岡に於ける円太郎争議	(岩手無産党)横田義重	159-164	4.3				
40			５台湾の大衆運動	（新竹台中）日種明子	164-165	1.2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
41			６千葉県民漁民の進出	(千葉)斎藤貞次	165-169	4.5				
42		プロレタリヤ文学論研究(六)――ソウェート・ロシヤ十年間の――		岡沢秀虎	170-175	6				
43		詩	夜明前	青砥正	176	0.2				
44			さあ腕を組まう	森沢大小	176-177	0.7				
45			闘ふ	坂井正三	177	0.3				
46			捨てられた俺	岡田政之	177	0.3				
47		大衆通信		沖電気争議団幹部よ左翼の精神を忘れるな（沖青年部員・AC生）　不平不慢(ママ)は我慢して居るのだ（沖電気・よし雄生）　早く命令を下してくれ（沖警備隊員・O生）　一水兵より（××海兵団・松本一雄）　満州より（満州独立守備隊・笹木生）　技術競技（岡山・田利喜太）　戦旗から文戦へ（小石川・野口勇）　御用組合（横浜ドツク・佐藤一郎）	178-180	3				
48		川崎造船所大ストライキを想ふ(完)		中蔦増二	181-196	16				
49		長篇小説	貧農組合４	エフ・パンフイロフ(長野兼一郎訳)	197-208	12				
50		本部より読者諸君へ		労農芸術聯盟(ママ)(ママ)	209	1				
51		編輯ノート		編輯局	210	0.8				
		カット		S.F.〔福田新生〕						
計					51点	202.9	2	2	6.3	7
	1929年9月号									
	(第6巻第9号)	表紙								
1	9月1日発行	巻頭言	世界の像	青野	5	1				
2		賃金奴隷宣言――V・R・トラスト		岩藤雪夫	6-51	46				
3		廻る球の上の七人の人物		長谷川進	52-68	17				
4		夏		鶴田知也	69-90	22				
5		プロレタリヤ文学の材料問題		青野季吉	91-93	3				
6		我等の九月			94-97	4				
7		『新労農党樹立の提案』を読む		山口徳夫	98-104	7				
8		労働総同盟のダラ幹征伐		高木茂吉	105-109	4.3				
9		ブツクレビユ	「悪漢と風景」	古賀不美男	109	0.7				
10		足の一本足りないお前―		米田曠	110-111	1.3				
11		誰よりも星に近い！		赤司正	111-113	2.7				
12		文芸戦線		黒島　長野　石井　曠	114-115	2				
13		清算さるべき作家的傾向の二三に関し		山村梁一	116-125	10				
14		腰抜け列車		アンリ・バルビユス（前田河広一郎訳）	126-128	3				
15		社会時評		檜六郎	129-132	3.8		○		3.8
16		「新建築思潮講演会」開催		創宇社建築会	132	0.2				
17		八月の劇場	井上正夫の「父」を観る	金子洋文	133-135	3	○		3	
18		九月の第一日曜日は国際青年デーだ		長野兼一郎	136	1				
19		プロレタリヤ文学論研究（七）――ソヴエート・ロシヤ十年間の――		岡沢秀虎	137-140	3.5				
20		一言		青野	140	0.5				
21		無産大衆経済講座第三講	賠償問題と無産大衆	青山北一	141-149	9				
22		如何なる態度を取るべきか（大山氏等の合法政党主義に対して）		中西伊之助	150-151	2				
23		モダン研究	モダーン・スポート	長野兼一郎	152-155	2				
24			避暑地のモダン	今野賢三	155-157	1.5		○		1.5
25			登山者の二つのタイプ――山に於けるモダニズム	伊藤貞助	157-159	1.2				
26			合法のモダン化	小牧近江	159-161	1.2		○		1.2
27			近代的監獄記	石井安一	161-163	1.1				
28			マネキン・ガール	米田曠	163-165	1.3				
29			ダンス	黒島伝治	165-166	1				
30			モダン跳躍	里村欣三	167-169	1.3				
31			失業を産むトーキー	古賀不美男	169-170	0.8				
32		資料	新労農党樹立の提案に対する声明書	日本大衆党分裂反対全国実行委員会	170-172	1.5				
33		壁新聞	××判事糺弾大演説会記	大島俊夫	152-161	3.3				
34			坂炭鉱の爆発	（歌志内村）北川武夫	161-164	1				
35			愚かなる芝居――円太郎争議後日物語――	(岩手無産党）横田義重	165-172	2.6				
36		俺等の生活から	磐木炭坑から	K・T生	173-174	1.3				
37			監獄部屋の虐待を見よ！	北野一三	174-177	3.8				
38		八月の映画	蜂須賀小六	戸田哲一	173-177	1.6				
39		無産婦人の頁	女給とマネキン	山本和子	178-181	4				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
40		大衆通信		四千の兄弟を救へ（北海道・岡部利雄）　『新労農党』の諸君へ(岩手・横田義重)　感想(東京・棚橋喜一)　八月号発禁に就いて（大牟田・赤司潤）　炭坑から(福岡・荒牧潤)	182-183	2				
41		本部より読者へ			184	1				
42		長篇小説	貧農組合５	エフ・パンフイロフ(長野兼一郎訳)	185-201	17				
43		編輯ノート		編輯局	202	0.8				
計					43点	198.3	1	3	3	6.5
	1929年10月号									
	(第6巻第10号)	表紙								
1	**10月1日発行**	巻頭言	途のない風景	青野生	5	1				
2		宣言	本聯盟の政治的立場を闡明し、新労農党樹立に対する本聯盟の態度を宣言する	労農芸術家聯盟　文芸戦線	6-9	4				
3		長編戯曲	蒋介石（４）（一幕五場）	前田河広一郎	10-20	11				
4		(*戯曲)維新一揆戦(四幕)		金子洋文	21-55	35	○		35	
5		(*長編小説)賃金奴隷宣言――V・R・トラスト〔２〕		岩藤雪夫	56-89	34				
6		塀の中で		セルゲイ・セミヨノフ（長野兼一郎訳）	90-93	4				
7		文芸戦線		里村　青木　平林　小堀　木村	94-95	2				
8		プロレタリヤ作家の個人的特性の問題		青野季吉	96-102	7				
9		ローマ進撃		長野	103	1				
10		材料について――たゞノートとして		黒島伝治	104-105	1.2				
11		小説の中の論理的要素		平林たい子	105-107	1.5				
12		婦人車掌のデモ		渡辺四郎	107	0.5				
13		演劇時評		小島勗	108-111	4				
14		旗(*詩)		今村桓夫	112-115	1.8				
15		プロレタリヤのおっかあ(*詩)		四〔石〕河四司(ママ)	115-117	1.5				
16		壁新聞	宗教心を捨てゝ合同へ	(岩手無産党)横田義重	112-115	1.2				
17		九月の法廷日誌			116-117	0.6				
18		国際的社会運動雑話		田口運蔵	118-123	5.5				
19		余白に		青野生	123	0.5				
20		私の生涯		クルプスカヤ(青山緑訳)	124-130	7				
21		ポーランドの労働者劇団		ヴエー・ワンヅユルスキー（長野兼一郎訳）	131-133	2.5				
22		ライオン咆えて狐踊る		(東京)丸山亀吉	133	0.5				
23		東京行進曲――俗謡に現はれたモダン		岩淵威夫	134-135	2				
24		社会時評		檜六郎	136-140	3.5		○		3.5
25		九月の巷から			137	0.5				
26		本部より読者諸君へ			142	1				
27		無産大衆経済講座第四講	ブル財政と無産大衆	水木棟平	143-151	9				
28		詩	この稲を見ろ！ I村の意志	赤堀昌宏	152-153	1.5				
29			今日の叫び　青年訓練所を××せよ！	半田杜史郎	153-154	0.9				
30			○○を高くかゝげろ！	木下晃	154	0.3				
31			俺達の祖国を救へ	平井真治	154-155	0.5				
32			同志よ突破せよ	桐生房雄	155	0.3				
33			遺言	稲村弥作	155	0.3				
34		時事問題コント集	勲章	里村欣三	156-158	2.1				
35			二人の失業者	山内謙吾	158-160	2				
36			ライオンの感激――探訪記者Hのノートから	長谷川進	160-162	2				
37			効目のあつた賄賂	鶴田知也	162-163	1.8				
38		衆生済度の仮面		鈴木信吉	164-167	4				
39		大衆通信		平野はこんなことをやつてゐる(甲府・杉田史郎)　道化役者(島根・ＳＫ生)　『修養団』をつぶせ！(和歌山・北野襲一路)　戦旗から文戦へ(福岡・岡崎平吉)　郵便屋の呻き(大阪・衣川晴児)　読書会を作らう！(愛知・高野光三郎)	168-171	2.8				
40		ブツクレビユ	『唯物史観』	鶴田知也	168-170	1				
41		戦線資料 総同盟大阪聯合会左翼派を支持せよ!	西支部聯合会の態度声明に答へつゝ吾組合の態度を声明す!	日本労働総同盟大阪合同働労組合(ママ)緊急拡大本部員会	172-176	4.9				
42			再び西尾一派の正体を暴露す――彼等の逆宣伝に答へつゝ――	本山茂貞	176-179	3.1				
43		特輯附録	明治初年の政治的農民一揆	田村栄太郎	180-204	25				
44		文芸思想大講演会		労農芸術家聯盟　日本大衆党分裂反対実行委員会	205	1				
45		編輯ノート		編輯局	206	0.8		○		0.8
計					45点	197.6	1	2	35	4.3
	1929年11月特輯号									
	(第6巻第11号)	表紙	××を衛る砲艦「オーロラ」							
1	**11月1日発行**	巻頭言	『十一月の日』――新たに	青野生	5	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
2		俺等のジョウの誕生日だ！		ミチエール・ゴールド（前田河広一郎訳）	6-8	3				
3		兄弟よ、その腕だ		鶴永真一	9-10	2				
4		桜花散る頃――「日本」を歌ふ		長谷川進	11-13	2.5				
5		復讐は澱なく氾濫する		米田曠	13-14	1.2				
6		鋼鉄		今村桓夫	14-15	0.6				
7		煙草工場にて		古呉房子	15-16	0.8				
8		煙突		曠静夫	16	0.5				
9		労働者の心		石井安一	17	1				
10		(*中篇小説)土鼠と落盤		黒島伝治	18-35	18				
11		(*長編小説)賃金奴隷宣言（３）――Ｖ・Ｒ・トラスト		岩藤雪夫	36-60	25				
12		長編戯曲	蒋介石（５）（一幕五場）	前田河広一郎	61-72	12				
13		形象と思想との遊離に就て		小堀甚二	73-76	3.5				
14		プロ作品の技術問題――フアヂエーエフの『壊滅』に関連して		細田民樹	76-80	3.7				
15		アイン・ビルド		青野生	80	0.6				
16		のらくら文士と党		青木壮一郎	81-83	2				
17		戦線資料１	声明書	無産政党戦線統一協議会	81-83	1				
18		文芸戦線		里村　青木　北川　長谷川　鶴田　長野	84-85	2				
19		随筆	黒パンと勲章	田口運蔵	86-87	1.6				
20			田中義一が死んだ!	里村欣三	87-89	2				
21			左翼婦人運動の衰微について自己批判的に	平林たい子	89-92	3				
22			留置場志願者	石井安一	92-94	1.5				
23			飯と自由を奪る為に	長谷川進	94-85	2				
24			生保会社の金融合理化	鈴木清次郎	96-98	1.6				
25			強盗被就縛者	米田曠	98-99	1				
26			三面記事雑録――東京を中心として	鶴田知也	99-101	2				
27			財産と掏摸	小堀甚二	101-103	2				
28		文芸戦線臨時増刊―十一月七日号が出る！		文芸戦線社	103	0.3				
29		文芸戦線臨時増刊―十一月七日号！直ちに申込め！		文芸戦線社	104-105	2				
30		ブツク・レビュ	田辺和子氏の「プロレタリヤ意識のもとに」	平林たい子	106	0.8				
31			『西部戦線異常なし』	伊藤貞助	106-107	1.2				
32		無産大衆経済講座	貿易政策と無産大衆	水木棟平	108-112	4.7				
33		十一月書籍特売	『ある農夫の家』	文戦図書取次部	112	0.3				
34		十月の法廷日誌			113	1				
35		戦線資料２	総同盟分裂問題に関し吾等の態度を声明し併せて全国の組合員諸君に檄す	戦闘的現実主義擁護同盟関東地方協議会	114-115	2				
36		会匪・軍閥・××党の支那		日種明子	116-122	6.5				
37		文戦ニュース			122	0.5				
38		蛸		フュードル・グラトコフ（長野兼一郎訳）	123-153	31				
39		文芸思想大講演会の記		Ｔ生	154-155	1.5				
40		関西・中国・九州地方『文戦』大講演会！			155	0.5				
41		情報	神戸湊川駅専属仲仕のストライキ	(兵庫県合同)高瀬謙二	156-159	3.5				
42			組織を持たない四万の女工	(信州)森谷夢路	159	0.6				
43			農村を熟視せよ！	(島根)小川義郎	159-160	0.4				
44			雄別炭坑並びに北海道全炭坑の坑山労働者諸君!!	(北海道)岡部利雄	160-162	2				
45			漫画	仰木磯美	161	0.3				
46			一人の仲間を獲得して	(京都)田中喜一郎	162	1				
47			拡大し行く戦列	(九州)荒牧潤	162-163	1				
48			佐々木孝丸よ恥を知れ！	(山口)まき・よしを	163-164	1				
49			沈黙を破つて	(大阪)坂本英	164	0.5				
50			感想	(東京)元島雄輔	164-165	0.4				
51			社民の政治学校に就いて	(福岡)橋本重彦	165-166	1.2				
52		本部移転		労農芸術家聯盟本部　文芸戦線社	166	0.6				
53		明治初年の政治的農民一揆(続)		田村栄太郎	167-189	22..4				
54		積極的に文戦を支持せよ！		編輯局	189	0.6				
55		編輯ノート		編輯局	190	0.8				
		カット		ＩＳＯＭＩ〔仰木磯美〕						
計					55点	163.3	0	0	0	0
	1929年11月7日臨時増刊号									
	(第6巻第12号)	表紙	「11月革命――それは明るい未来への橋梁である」							
1	**11月7日発行**	巻頭言	プチロフ工場	今村桓夫	1	1				
2		口絵	レーニン		3	1				
3			(*漫画)	アプシート	5	1				
4			宣伝ポスター〔２点〕	筆者不詳	6	1				
6		ロシア――自由の歌(*詩)		マルセル・マルチネ	7	5				
7		鉄の戦列へ(*詩)		長谷川進	12	4				
8		ロシア革命と日本プロレタリアート		青野季吉	16	6				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
9		〔ロシア〕革命の経済的背景		（前田河広一郎訳）	22	14				
10		反動期のロシア――統治者と労農大衆と党		（長野兼一郎訳）	36	14				
11		レニンが与えた日本への贈物		田口運蔵	50	3				
12		ロシア文学の歴史と『十月』		小堀甚二	53	3				
13		ロシア革命日誌(*三月から十一月まで)			56	1				
14		(漫画)	ソヴイエト蕪	モール	57	12				
15		編輯ノート		編輯局	69	1				
計					15点	67	0	0	0	0
	1929年12月号									
	(第6巻第13号)	表紙								
1	12月1日発行	巻頭言	無題	青野生	5	1				
2		恐慌		伊藤永之介	6-37	32		○		32
3		犠牲――この一篇を全国の鉄道従業員に捧ぐ		田川清	38-48	11				
4		賃金奴隷宣言（４）――Ｖ・Ｒ・トラスト		岩藤雪夫	49-79	31				
5		共産党事件について		青野季吉	80-81	2				
6		日本共産党事件記事解禁に際して		田口運蔵	82-87	6				
7		鉄橋の上で		石川四司	88-89	2				
8		労働者街から		長谷川進	90-91	1.5				
9		同志よ　樵夫・炭焼・小作人		高橋辰二	91-92	1.5				
10		工場		今村桓夫	93	1				
11		没有法子――馮・蔣の河南争奪など		柏八里	94-98	5				
12		中国プロレタリアートの生活		池田博	99-101	3				
13		文芸戦線		里村　小堀　長野　平林　石田	102	1				
14		プレハノフとルナチヤルスキーとの論争の回顧――芸術の価値批判の基準と方法について――		小堀甚二	104-110	7				
15		否！			111	1				
16		墓参		小島すみ子	112-118	7				
17		文芸作品に現はれた婦人の役割		山本和子	119-124	6				
18		冬　飢餓		永井正春	125-126	1.3				
19		俺達の農民組合		北川武夫	126-127	1.1				
20		職を失つた鮮人よ――		杉田利久	127-128	1				
21		工場への途次		登龍介	128	0.3				
22		その日を		石島健	128-129	1				
23		白蟻		半田杜史郎	129	0.2				
24		社会時評		檜六郎	130-137	7.5		○		7.5
25		関西地方文戦講演会から帰りて		鶴田	137	0.4				
26		無産大衆経済講座	貿易政策と無産大衆（二）	水木棟平	138-144	7				
27		俺達の生活	弟に送る	水城霊山	145-146	2				
28			妹に送る	山本隆良	147-148	1.8				
29			なまけ者	西代義治	148-150	1.3				
30			逓信現業員	無名生	150-151	1				
31			ビラ撒き	梶並為司	151-153	2.6				
32		ブツク・レビユ	『ボストン』（上巻）	伊藤貞助	154-155	1.1				
33			『ゲオルゲ・グロッス』	宗十三郎	155	0.8				
34		東京湾漁民運動に就いて――敢て同志諸君の教示を乞ふ。――		斎藤貞次	156-161	6				
35		情報	団結の威力をもて進め――当り矢ゴム争議	(東京)棚橋義一	162-163	1.8				
36		十一月の法廷日誌	万有代議士一褒美		164	0.6				
37			朝鮮の近状	(朝鮮)納三千雄	164-165	0.6				
38			総同盟ダラカンの醜体曝露	（下関）彦島栄吉	165-166	1.2				
39			お人好しの群から俺達はしてやられた	(東京)衣川晴児	167-168	0.6				
40			雑感	(京都）ＢＯＳ生	168-169	0.5				
41			ミイラ取のミイラ	(京橋)篠笛一郎	169-170	0.5				
42			文戦に云ふ	(朝鮮)谷川秀夫	170	0.6				
43			レート化粧品工場の陰険と××署員の暴圧を糺弾す	ＴＴ生	170-171	1.1				
44			犠牲者慰安会の美名に隠れて農民ボス労働ブローカたちが安来町で芸妓をあげて大騒ぎ、小作人を踏台にする旧日農のダラ幹共	(全農安来支部所属）山根一郎	172-174	1.3				
45			反動と化した京都のウルトラ	(京都)山崎五郎	174	0.2				
46		予後備兵一千余名演習を避忌(ママ)す(東日より)			169	0.4				
47		写真	労働手帳		173	0.4				
48		ストライキだ！―大衆朗読劇―		ミチエル・ゴールド（大谷政吉訳）	175-183	18				
49		編輯ノート		編輯局	184	0.8				
		挿絵・カット		英〔安藤英夫〕　仰木磯美						
計					49点	184	0	2	0	39.5
	1930年1月号									
	(第7巻第1号)	表紙		青木壮一郎						
1	1月1日発行	巻頭言	我々の行進曲	青野季吉	5	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
2		一九三〇年を闘争の年として迎へよ	１東京市電ストライキ	(三の輪)長岡八十一	6-15	7.5				
3			東京市電ストライキ経過	井口今治編	11-15	2.5				
4			２騒擾の三日間――高知県漁民暴動の実相――	(高知)土肥頼正	16-27	12				
5			３流血の前田村――官憲の弾圧に抗して戦へる秋田県の小作争議	(秋田県)山谷三吉	28-33	6		○		6
6		（＊小説）兵乱		里村欣三	34-48	14.5				
7		画	平和十一週年記念	エリス	48	0.5				
8		（＊小説）笑つた男		小堀甚二	49-67	19				
9		（＊小説）朦朧百貨店		鈴木清次郎	68-78	11				
10		（＊小説）狂人をつくる		今野賢三	79-103	26		○		26
11		（＊小説）サイレン		平林たい子	104-112	9				
12		（＊小説）冬の労働一景		葉山嘉樹	113-116	4				
13		昭和四年度の主なる作品批評		小堀甚二	117-123	7		○		7
14		十二月の文戦作家		山村梁一	124-128	5		○		5
15		「賃金奴隷宣言」を批評す		宗十三郎	129-133	5				
16		『プロレタリア大衆娯楽文学』不可能論		青木壮一郎	134-137	4				
17		演劇時評		金子洋文	138-141	4	○		4	
18		平林初之輔君に与へる		青野季吉	142-143	1.4				
19		作品の魅力の問題――十時三郎に答へる		長野兼一郎	143-144	1.6				
20		資料１	脱退声明書	社会民衆党大阪府支部聯合会有志代議員一同	145	1				
21		指導者レーニン		エヌ・クルプスカヤ	146-147	1.3				
22		指導者レーニンの足あと		長野生	146-147	0.7				
23		一月十五日を記念せよ！その名は太陽と丶もに――カールとローザ――		ア・ベズミヨンスキー（長野兼一郎訳）	148-151	3.5				
24		（＊詩）あいつは鉄を殺してゐた――おいらの村の農民組合の創始者百姓徳郎兵衛の思ひ出に		岩淵威夫	152-154	2.8				
25		（＊詩）おれ達の意志		半田杜史郎	154-156	1.5				
26		（＊詩）飢えたる百姓達		今埜大力	156-158	2.6				
27		（＊詩）工場のあいつ		今村桓夫	159-161	2.4				
28		文芸戦線		前田河　鶴田　石田　里村	162-163	5				
29		講話	合法的政治運動と議会	田口運蔵	164-168	5				
30		『労農派の分析』の分析		井居啓	169-173	5				
31		日本社会史話		田村栄太郎	174-195	22				
32		ブツクレビウ	『殴る』メモ	前田河広一郎	196	0.9				
33			「鉄」の出版を喜ぶ	鶴田知也	196-197	0.5				
34			『マルクス主義文学闘争』	小堀甚二	197	0.5				
35		ガストニア事件		前田河広一郎	198-220	23				
36		資料２	日本大衆党神戸支部除名問題の反動的非階級制を暴露す	兵庫県合同労働組合本部執行委員会	221-222	2				
37		読者諸君へ！		編輯局	223	1				
38		特輯	金融資本の話	向坂逸郎	226-232	7				
39			共同戦線党の話	青野季吉	233-239	6.3				
40			労働組合の話	大森義太郎	239-240	6.7				
41		編輯ノート		編輯局	246	0.8				
		挿絵		安藤英夫						
計					41点	242.5	1	4	4	44
	1930年2月号									
	(第7巻第2号)	表紙		青木壮一郎						
1	**2月1日発行**	巻頭言	選挙の一則	青野生(＊＝青野季吉)	5	1				
2		失業群		山内謙吾	6-29	24				
3		前進する雑踏		長谷川進	30-46	17				
4		牝牛と故郷		鶴田知也	47-60	13.5				
5		写真	職業紹介所の朝		60	0.5				
6		兵乱（２）		里村欣三	61-72	11.5				
7		読書会通信	読書会を作らう	松岡剣	72	0.5				
8		定価値下げに就いて檄す!!		労農芸術家聯盟	73	1				
9		（＊詩）奴隷の唄		高橋辰二	74-76	1.5				
10		（＊詩）夜業に急ぐ女工の列		北川郁也	77-78	1.3				
11		（＊詩）時代の冬		森耕一郎	78-81	1.3				
12		ロシア詩人紹介１	ベヅィミョンスキイ	尾瀬敬止	74-81	3				
13		我々の詩に就いて		宗十三郎	82-85	2.6				
14		検閲問題を如何なる方法に於て取あげるか	――演劇時評――	金子洋文	85-89	4.4	○		4.4	
15		社会時評	金解禁と産業合理化-新なる資本攻勢-	檜六郎	90-93	4		○		4
16		文芸戦線		前田河	94-95	2				
17		分裂対立の無産政党とその統一への展望		西田光治	96-99	4				
18		東京無産党の成立とその任務		（東京無産党）福島一郎	100-103	3.4				
19		大山氏の合同統一論		中西伊之助	103-105	2.2				
20		読書会通信	炭坑町から	（福岡県伊田町）堀木勝夫	105	0.3				
21		読物二篇	ブルジョアの『お邸』から	長野兼一郎	106-114	8.5				
22			ナウーモフの殺人――ソヴエート犯罪実話	水谷健作	114-119	5.5				
23		希望社の真の希望は何であつたか？		平林たい子	120-123	4				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
24		選挙闘争を如何に戦ふか？		（東京無産党）堺利彦　（旧労農系）布施辰治　（日本大衆党）浅原健三　（日本大衆党）加藤勘十　（労農党）細迫兼光　（全国民衆党）宮崎龍介　（東京無産党）中西伊之助	124-134	10.5				
25		読書会通信	大牟田から	Ｓ・Ｋ生	134	0.5				
26		ブツク・レビウ	『員章を打つ』の上梓	山内謙吾	135	0.4				
27			『飛ぶ唄』	伊藤貞（ママ）	135	0.3	○		0.3	
28			『賃金奴隷宣言』	鈴木清次郎	135	0.3				
29		情報	ゼネラル・モータース千三百名の兄弟蹶起す！	（大阪）篠原	136-138	2.4				
30			合同毛織の解雇問題――巧妙なるその偽慢政策を見よ！――	鶴義介	138-139	1.5				
31			雪を蹴つて闘ふ秋田農民――下井河村の小作争議	一組合員	139-141	2		○		2
32			退却戦術か取引か――浅野セメント門司工場のストライキ――	(下ノ関)ＴＳ生	141-145	4.2				
33		ストライキの研究		Ｅ・Ｔ・ヒラー(前田河広一郎訳)	146-161	16				
34		編輯ノート		編輯局	162	0.8				
		*挿絵・カット		Sab.〔尾崎三郎〕　仰木磯美						
計					34点	155.9	2	2	4.7	6
	1930年3月号									
	(第7巻第3号)	表紙		*福田新生						
1	**3月1日発行**	巻頭言	早春	青野季吉	5	1				
2		（＊詩）山宣を憶ふ		石井安一	6-7	1				
3		（＊詩）農奴の要求――北海道蜂須賀農場の小作人へ		今野大力	7-8	1				
4		（＊詩）飢えたる階級		深町璃美子	8-9	1				
5		（＊詩）農民!		高橋辰二	9-11	2.6				
6		兵乱（３）		里村欣三	12-21	20				
7		スパイの一家　一幕		川内唯彦	22-29	8				
8		（＊評論）「日本プロレタリヤ傑作集」の人々		宗十三郎	30-39	9.5	○		9.5	
9		大衆の声	休みたい奴は休め	(京都)衣川精二	39	0.5				
10		（＊評論）論労農ロシヤ新作家論(二)		尾瀬敬止	40-43	4				
11		社会時評	(一)新無産議員に與ふ(二)操短第一時代	檜六郎	44-49	5.3		○		5.3
12		秋田政戦記		金子洋文	49	0.7	○		0.7	
13		文芸戦線		里村	50-51	2				
14		日本工場婦人の組織状態――国際婦人デーに際し		山川菊栄	52-55	4				
15		無産婦人の声	求職者の日記	枝川雪枝	56-58	2.5				
16			女中憤言	田口とくよ	58-59	1				
17		国際戦線欄			60-69	9.6				
18		軍隊はどれだけの病人をつくり出したか？			69	0.4				
19		無産大衆経済講座	産業合理化と無産大衆(上)	青山北一	70-76	6.6				
20		読書会通信	札幌から	浜地丑之助	76	0.4				
21		ブツク・レビウ	『ソヴエート風土記』	長野兼一郎	77	0.8				
22			山川均著『単一無産政党論』	小堀甚二	77-78	0.8				
23		ポスターを貼らう！		宣伝部	78	0.2				
24		余白へでも――宗十三郎君へ		岩淵威夫	79	1				
25		苦悩の底より　情報・記録	朝鮮紡績株式会社二千二百名の大罷業	(朝鮮)姜昌虎	80-85	5.7				
26			池上電鉄争議	(池上電鉄)花木生	85-86	1.1				
27			川北モートル移転問題――ダラ幹を注視せよ	坂本英	86-87	1				
28			新聞印刷地獄――印刷工発送人団結せよ！	一組合員	87-91	3.2				
29			北海道炭坑地獄から		91	1				
30		松明（＊長篇叙事詩）		ネクラーソフ(岡沢秀虎訳・序)	92-97	6				
31		戯曲	オイル 四幕・五場	アプトン・シンクレーア（前田河広一郎訳補）	98-160	63				
32		編輯ノート		編輯局	161	0.8				
計					32点	165.7	2	1	10.2	5.3
	1930年4月号									
	(第7巻第4号)	＊表紙	＊産業合理化と無産大衆	＊フレツド・エリス						
1	**4月1日発行**	巻頭言	全合同へ	青野季吉	9	1				
2		産業合理化グラフ			10-12	3				
3		『合同機運』の展望		山川均	13-22	9.6				
4		山川均『単一無産政党論』		文芸戦線社	22	0.4				
5		実践されたプロレタリヤ・リヤリズムの検討		青野季吉	22-31	9				
6		文芸時評	松本・貴司両君の駄弁を駁す	青木壮一郎	32-39	7.8				
7			正宗・広津両氏を批判す――その文芸時評に就いて――	宗十三郎	39-44	4.8				
8		メーデー特輯号！四月廿日発売		編輯局	44	0.4				
9		映画批評	『何が彼女をさうさせたか』を推す	米田曠	45	1				
10		（＊詩）労働者		長谷川進	46-48	2.4				
11		（＊詩）街頭にて		米田曠	48	0.6				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
12		（＊訳詩）松明(二)		ネクラーソフ(針木谷之助訳)	49-53	4.3				
13		文芸戦線発行部数三万部突破運動に就いて		組織・宣伝部	53	0.7				
14		国際戦線	軍神が『軍縮』会議を見ながらニタニタ笑ふ(*漫画)	フレッド・エリス	54	1				
15		国際戦線			55-63	9				
16		ブツク・レビウ	洋文の『天井裏の善公』	今埜大力	64	0.6	○		0.6	
17			山田清三郎著『日本プロレタリア文芸運動史』	鶴田知也	64	0.4				
18			山川均氏『社会主義の話』	檜六郎	65	0.7		○		0..7
19			田村栄太郎氏著『明治初年の政治的農民一揆』	鈴木清次郎	65	0.3				
20		労働随筆	兵器工廠	岩藤雪夫	66-67	0.7				
21			鶴嘴をふりあげてゐた瓦斯会社定夫時代	今野賢三	67-69	0.7		○		0.7
22			バア・テンダー	鈴木清次郎	69-70	1.2				
23			天井裏の生活	金子洋文	71-72	1.2	○		1.2	
24			建築労働者の制裁	山内謙吾	72-74	1.2				
25			馬耕	今埜大力	74-76	1.2				
26		大衆通信		区議選に敗れて(浅草読書会・堀城英夫)　名古屋プロ文芸陣の押山普夫君逝く(神谷睦夫)　茨城から（Ｍ・Ｓ生）　提議(山梨・保延雪江)　立看板をあつめる(区議戦のあと)（牛込・××生）　仙台から（Ｓ・Ｓ生）　関東州から(戸田康雄)　福岡の炭坑地から(武田勇次)	66-76	3.7				
27		社会時評		檜六郎	77-86	7.3		○		7.3
28		奴等の平和とはこんなものだ！		塩川二郎	77-80	1.3				
29		山口市に於ける反動的教育家共に警告する！		山口勤	81-84	1				
30		プロレタリア作曲家出でよ！		Ｔ生	84-86	0.9				
31		青山北一・水木棟平共著『ブル経済ＡＢＣ』			86	0.2				
32		募集！すべての戦野から投稿せられよ!!			87	0.5				
33		新刊紹介			87	0.5				
34		文芸戦線		青木	88-89	2				
35		槐樹社美術展のプロレタリヤ作家		福田新生	90-93	3.5				
36		画	八幡から	仰木生	93	0.5				
37		無産大衆経済講座	産業合理化と無産大衆(下)	青山北一	94-102	8.5				
38		予告！五月号から連載される二大文字――		編輯局	102	0.5				
39		苦悩の底より　情報・記録	東洋モス五千の男女工蹴(ママ)起す！	長谷川	103-107	4.8				
40			派出看護婦組合の設立を叫ぶ		107-110	3				
41			北洋漁民組合結成の急務		110-112	1.9				
42			北海道蜂須賀農場争議		112-113	1.5				
43		雲助の生活と唄(研究)		田村栄太郎	114-126	12.5				
44		文戦の合本が出来ました。		経営部	126	0.5				
45		（＊小説）殺人！		岩藤雪夫	127-133	6.4				
46		投稿家諸君に		編輯局	133	0.5				
47		氾濫は堤をきる（１）――三幕八場		伊藤貞助	134-167	34				
48		兵乱（４）		里村欣三	168-181	23.5				
49		文戦三万部突破運動の為めに！		宣伝部	181	0.5				
50		編輯ノート		編輯局	182	0.8				
		*カット		仰木磯美						
計					50点	183.5	2	3	1.8	8.7
	1930年5月号	メーデー特集五月号(*この号は発禁)		（*発売禁止）（4月末　東京市電争議で配布予定の号外10万部印刷中に押収）						
	(第7巻第5号)	表紙		福田新生						
1	**5月1日発行**	グラフ	全労働者農民はメーデーに参加せよ！ 第十一回メーデー来る！ 世界の兄弟は戦つてゐる！ 同志は働き出した 市電争議を前にして		5-12	8				
2		巻頭言	五月と日本	青野季吉	13	1				
3		メーデー詩集	メーデー	森彬雄	14-15	1.1				
4			未開地の野に――都会の同志へ贈る	今村桓夫	15-16	1.1				
5			俺達の旗	石井安一	16	1				
6			兵隊へ行く	高橋辰二	16-17	0.8				
7			百姓仁平は起つ！――北海道××村争議団へ	今埜大力	17-19	1.2				
8			嵐の戦列へ！	米田曠	19	0.8				
9			五月一日	長谷川進	20	1				
10		一九三〇年のメーデーの意義		田口運蔵	21-23	2.6				
11		スローガン			23	0.4				
12		（＊詩）メー・デー		ヨハネス・エル・ベツヘル（長野兼一郎訳）	24-35	12				
13		鐘紡三万五千の従業員起つ！	今や仮面は剥がれた!――×人タケダケしい彼奴等の挑戦！――		36-38	2.5				
14			俄然――大阪淀川工場闘争の火蓋を切る！		38-40	1.9				
15			火は飛ぶ――矢継早に――兵庫、京都両工場のゼネ・スト		40-41	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
16			東京隅田川工場でも盟休申合せ——会社と馴合の交渉委員糺弾さる——		41	0.4				
17			全国の兄弟続々立つ！——相呼応してゼネストで闘へ！——		42	0.4				
18			無産諸政党の共同闘争委員会成る		42-43	1				
19			大分県中津にも火の手上がる！	（中津）英彦鉄郎	43	0.3				
20		紡績地獄	これが『温情王国』の真相だ！	ＳＡ生	44-46	2.6				
21			紡績にゐた頃	長谷川進	46-47	1.4				
22		カベシンブン	罷業を排む市電局長筧!!——勇敢に、且つ冷静に、資本の陰謀を叩き伏せろ——	（大塚）Ｏ・Ｍ生	48	0.8				
23			農民の激怒！——新潟県王番田事件		48-49	0.8				
24			小学校教員の失職者一万！——ここにも吹き荒ぶ失業と減給の嵐——		49	0.4				
25		我々の方向についての覚え書		青野季吉	50-57	7.3				
27		四月のプロレタリア作品批判		青木壮一郎	57-65	8	○		8	
28		出版資本と文学——『課題創作』が提供する問題の範囲に於いて——		小堀甚二	65-67	2				
29		演劇時評		金子洋文	67-71	3.7	○		3.7	
30		飯塚地方文戦読者諸君へ！		文芸戦線読書会	71	0.5				
31		文芸戦線		Ａ石田	72-73	2				
32		ガンジー及び商会——ブルジョア新聞の読み方について——		前田河広一郎	74-84	11				
33		軍縮会議から何を学ぶか——ロンドン協定の暴露		塩川二郎	85-93	9				
34		国際戦線		文戦調査部編	94-106	13				
35		即時・合同の実現へ!!——最大の可能なる範囲において——		青山健三郎	10-113	6.3				
36		読め!即刻!!		文芸戦線出版部	113	0.7				
37		無産大衆政治講座	無産大衆党をいかに理解し、合同運動の基準をどこにもとむべきか？	高杉登	114-125	12				
38		社会時評		檜六郎	126-129	4		○		4
39		渦巻の中から——メー・デーから英国総同盟罷業へ——	1926年5月英国ゼネラルストライキ実記	宮島新三郎	130-141	10				
40		血の前田村を訪ふ		今野賢三	142-151	10		○		10
41		随筆・小論	危険な学校	小牧近江	152-156	2.6		○		2.6
42			「新潮社」の反動性を撃て——	岡田宏	156-158	0.6				
43			プロレタリア文学とジヤナリズムの功罪	石川譲	158-164	3.5				
44			最初のデモの思ひ出	山本和子	164-168	4				
45			五年前のメーデー	小島すみ	168-169	0.6				
46			小学校断片	南芙美子	169-171	1				
47		大衆通信		「戦旗」支持から「文戦」支持へ（久賀畑助）　宮城県から（ＭＳ生）　九州人吉から（永井松善）京都から（七以良夫）　小作人の歌（不二零一郎）　同志石垣栄太郎より　女工同志から　長野県から（吉尾鎌太郎）　山梨から（保延雪江）　文戦への希望（中島俊郎）	152-171	7				
48		東京都市電ゼネ・ストに入る！	市当局の挑戦に対し市電一万数千の従業員立つ！	グラフ多数	172-174	2.1				
49			市電争議雑感	葉山嘉樹	174-175	0.3				
50			塩町変圧所の警戒厳なり	山内謙吾	175-176	0.5				
51			四月二十日	間宮茂輔	176	0.5				
52			争議の朝	小堀甚二	176-178	1				
53			雨でも降りあがれ!	岩藤雪夫	178	0.8				
54		腹が減つてはいくさは出来ぬ、闘争する鐘紡と市電の兄弟を救へ!!			179	1				
55		飢饉		ミチエール・ゴールド（米沢秀夫訳）	180-186	7				
56		来れ文芸戦線春季大講演会			188	1	○		1	
57		創作欄）	（＊小説）真野君の四月	金子洋文	189-196	8	○		8	
58		（*戯曲）	（＊戯曲）氾濫は堤をきる（２）	伊藤貞助	197-219	23				
59			（＊小説）四日間——或る一兵卒の手記	中務保二	220-231	12				
60			（＊小説）つけ火！（殺人!続—）	岩藤雪夫	232-237	6				
61		『文戦劇場』宣言			238-239	2		○		2
62		圧倒的進出をして更に進出せしめよ——機関誌三万突破運動を支持せよ——		文芸戦線宣伝部	240-241	2				
63		編輯ノート	*＊この号から編集人は金子吉太郎（＝金子洋文）*		242	0.8	○		0.8	
計					63点	231.3	5	4	21.5	18.6
	1930年6月号									
	(第7巻第6号)	表紙		福田生						
1	**6月1日発行**	グラフ	惨!!万国のプロレタリアートは来らんとする帝国主義××に抗争せよ！　メーデー・グラフ帝国主義の魔手と吾等のロシア		5-12	8				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
2		巻頭言	欺瞞と指導	青野季吉	13	1				
3		世界は失業者で動いている!!		前田河広一郎	14-30	16.5				
4		我国最近の失業問題		水木棟平	30-37	7.5				
5		拡大する飢餓戦	俺・そして仲間	M・K生	38-41	3.1				
6			俺は助からねえ	仁科常吉	41-43	2.6				
7			縄をなふ人々	田所啓	43-46	2.8				
8			失業した老女工	佐藤弘一	46-48	2.2				
9		土地を死守して苦闘する王番田の同志を救へ			48	0.3				
10		市電総罷業詳報		佐藤金吾	50-57	7.5				
11		鐘紡兵庫工場罷業惨敗の真相		（神戸）時岡富吉	57-59	1.8				
12		抜剣騒ぎの川口から		東京鉄工組合川口支部一鋳物工	59-60	1				
13		これが俺たちの失業反対闘争か		藤田常夫	60-61	1.5				
14		メーデー情報	東京のメーデーはどうだつた	（東京）山田孝太郎	62-65	2				
15			メーデーのスナツプ	（東京）宗十三郎	65-66	1.9				
16			ブタ箱の中のメーデー	（東京）田中忠一	66-68	1.2				
17			新潟見附町のメーデー	（新潟）高木保太郎	68-69	0.6				
18			神戸のメーデー	（神戸）藤井忠千代	69-70	0.6				
19			名古屋のメーデー	（名古屋読書会）岡本耕一	70-71	1				
20			対立に禍されたメーデーの八幡	谷川浩二	71-72	0.7				
21			五月一日の我が下関市	(下関)鶴永真一	72-74	2.2				
22			小倉と門司のメーデー	H・O生	74	0.6				
23		カベシンブン	京都小笹木材工場争議大勝す	(京都)T生	63	0.4				
24			スキヤツプをやつた東京市青年団へ――長野県青年団が厳重警告す――	(信州)清水平一郎	63	0.4				
25			組合の合同が必要だ	(神戸)森川富貴子	65	0.4				
26			霞ヶ浦北浦漁民組合の結成へ	(茨城県麻生町)大沼勝三	67	0.5				
27			原稿を送れ	文芸戦線社編輯部	69	0.4				
28		我々の作品の実質について(シンクレヤの「資本」の範例を通じて)		青野季吉	76-79	3.7				
29		プロレタリア芸術の大道――芸術運動の特殊性		宗十三郎	79-83	4				
30		演劇時評		金子洋文	83-86	2.5	○		2.5	
31		文戦旧号を利用せよ!!		文芸戦線社	86	0.3				
32		プロレタリア喜劇への進展		大山広光	87	1				
33		『合同』をいかに見るか		青山健三郎	88-92	5				
34		社会時評	特別議会の反動的役割	檜六郎	93-97	4.6		○		4.5
35		新刊紹介			97	0.4				
36		第一回全日本婦選会議を傍聴して		木田きわの	98-99	1.6				
37		馬鹿な反動教育屋の見本――弘高当局の猿智慧―		(弘前)藤木貞郎	99	0.4				
38		印度支那の暴動		小牧近江	100-101	1.7		○		1.7
39		監獄か天国か――ガンヂの贅沢な獄中生活			101	0.3				
40		国際戦線		文戦調査部編	102-112	11				
41		横浜を眺める		高橋辰二	114-118	3				
42		下足番事件		中井正晃	118-120	2				
43		大衆通信		大阪のメーデーに列して(大阪・半田生)　農村の女性より（滋賀・浅田芙美子）　五月号を手にして（奄美大島・聖光）	114-120	2.3				
44		日本最初の製糸大争議――岡谷争議の思出		平林たい子	122-127	5.8				
45		血の前田村を訪ふ〔２〕		今野賢三	127-131	4.2		○		4.2
46		文芸戦線		ＳＯ北川	132-133	0.7				
47		文芸戦線春季大講演会の記			132-133	0.3				
48		（＊小説）闇		間宮茂輔	135-152	18				
49		（＊小説）無銭飲食者同盟		葉山嘉樹	153-155	3				
50		乞食(６場)		前田河広一郎	156-173	18				
51		（＊小説）金なし猶太人		マイクル・ゴールド（石垣綾子訳）	176-188					
52			推薦と訂正	前田河広一郎	188	12.8				
53		編輯ノート		編輯局(＊発行編集兼印刷人　金子吉太郎=金子洋文)	189	0.8	○		0.8	
計					53点	176.1	2	3	3.3	10.4
	1930年7月号									
	(第7巻第7号)	表紙		村上英明						
1	**7月1日発行**	グラフ	建設の国ソヴエート・ロシア　東京市電の兄弟は戦つてゐる　もつと失業者を出したい晩餐会仕事かでなきや手当を　餓死の歴史を抛つて！		5-12	8				
2		巻頭言	或る截断	青野生	13	1				
3		詩	街路の権利	ゲルハルト・リーガー	14-15	2				
4			俺達の世の中	今埜大力	16-17	1.2				
5			誰が誰の奴隷となつたか？	長谷川進	17	0.8				
6		国際戦線		文芸戦線調査部編	18-29	21				
7		漫画		フレツド・エリス	18	1				
8		中国赤衛軍に進出		池田博	30-32	2.7				
9		大衆通信	搾取の地朝鮮から	R・M生	32	0.3				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
10		トラクター化された村で――ソヴエート・ロシアの農村共同化運動はどう進んでるか？―		ルートリツヒ・レン（長野訳）	33-35	3				
11		拵へられる事件		田口運蔵	36-42	6.4				
12		三つの話――時評的随筆		小堀甚二	42-47	4.5				
13		貰子殺しと菊池寛		平林たい子	47-48	1				
14		血の前田村を訪ふ（３）		今野賢三	48-53	5.3		○		5.3
15		短篇小説	メー・デー罷業	フオン・ヨツト・ヒツシユ（長野兼一郎訳）	54-56	3				
16		戦線レポート	秋田、湖東部の空は嵐だ！全国の労働者農民諸君、下井河の兄弟を勝たせろ!!	Ｍ・Ｏ	58-61	3.3		○		3.3
17			ホシ製薬従業員苦闘録	（東京）高井健	61-63	2				
18			学校企業のからくり＝盟休騒ぎの日大から＝	中山哲夫	63-65	2.3				
19			開港記念日か失業デーか	（横浜）志摩敏平	63-67	1.8				
20			市電争議は続行する		67-68	1.2				
21		レポートを送れ!			68	0.2				
22		壁シンブン	全国労働組合結成大会傍聴記	（大阪）福森□美	69	0.9				
23			函館地方無産戦線統一協議会の創立		69-70	0.3				
24			国際消費組合デーを闘へ――七月五日の土曜日だ!――		70	0.3				
25			広島自由労働者組合の結成		70-71	0.5				
26			減員航海絶対反対！	（神奈川）山下謙三	71	0.7				
27		全農から　農村ピオニールの活躍		ＳＫ生	72	1				
28		おい等の見た社会		（愛知ピオニール）正利	73	1				
29		飢餓通信	失業―放浪	鈴木庄太郎	74-77	4				
30			失業地獄より（詩の形式で）	更木丈二	78-79	2				
31		速かに合同の実現へ！		高杉登	80-85	5.7				
32		自由労働者の会話　ある工場労働者の歌		中井正晃	85	0.3				
33		時評	資本の組織的攻勢と労働組合法案	檜六郎	86-89	4		○		4
34		文芸戦線		Ｓ、Ｏ、 Ｋ・Ｋ	90-91	2	○		2	
35		文戦劇場基本テーゼ		文戦劇場	92-94	3	○		3	
36		文芸時評	彼等は何故に狼狽へてるか	宗十三郎	95-99	4.4				
37			六月号のプロ作品	間宮茂輔	99-104	5				
38		文戦読者を獲得せよ、一人は一人の同志を作れ!			104	0.6				
39		マルクス主義美学の問題		カア・ア・ヴィツトフォーゲル（長野兼一郎訳）	105-107	3				
40		ユージン・オニール論		前田河広一郎	108-117	9.4				
41		プロレタリヤの女の手、同志への手紙		石田きみ	117	0.6				
42		ブツク・レビウ	フリーチエに『芸術家社会学』	藤川靖夫	118-119	1.3				
43			東洋社会党考を読む	Ｔ生	119	0.3				
44			新刊紹介		119	0.4				
45		入山炭坑より		森田宗治	120-123	3.5				
46		圧殺！――鉄道従業員の手記		蔵内六朗	124-125	2.1				
47		或る『馘首戦術』		枝川雪枝	126-128	1.6				
48		海上より		田中逸雄	128-130	1.8				
49		大衆通信		全逓信従業員に（ＳＭ）　八幡の現状（岡田政之）　軍港にて（佐世保・石河治）　大分の工場町より（山村八郎）　「戦争映画」に就いて（宮村生）　自由労働者と文芸戦線（遠道神氏）	121-129	2.5				
50		（＊小説）能率工場法		井上健次	133-150	17.5				
51			推薦の言葉	岩藤雪夫	150	0.5				
52		（＊小説）『インテリゲンチヤ』		鶴田知也	151-158	8				
53		（＊小説）搾るか搾られるか		鈴木清次郎	159	15				
54		編輯ノート		編輯局	174	0.8	○		0.8	
		挿絵・カット		Ｅ．Ｍ〔村上英明〕　ｓ　ｔｏ〔斎藤〕　青木						
計					54点	163.8	3	3	5.8	12.6
	1930年8月号									
	(第7巻第8号)	表紙		福田新生						
1	**8月1日発行**	グラフ	闘争へ!労働もこうなれば涼しいものだ!! ソヴエート・ロシア政治漫画集　バリケードの印度の夏だ!		7-14	8				
2		小話マルキン		青野生	15	1				
3		国際戦線	スターリンはかく報告する　――ソヴエート聯邦××党第十六回大会速報――		16-26	10.5				
4			帝国主義××の危機に抗して――八月一日は国際的闘争デーだ!!――		26-27	1				
5		仏国プロレタリア漫画集			18-21	0.7				
6		社会時評		檜六郎	28	4.7		○		4.7
7		或る大工の歌		桜吉五郎	32	0.3				
8		労農詩集	おい、お前も来い	山路英世	34-36	2.5				
9			炭山の人々（坑内編―断章六篇）	渋田南二	36-37	1				
10			さあ、押し出せ――	米田曠	37-38	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
11			電柱の話	高橋辰二	38-39	0.5				
12			ひでえ野郎さ!!	岩淵威夫	39-40	1.5				
13		失業世相の鳥瞰図		金子洋文	42-52	11	○		11	
14		コムムニズム雑俎		田口運蔵	54-59	5.3				
15		わらぢのような肩で押せ！――新宿駅前○○工事場にて――		面高秀生	59	0.7				
16		鉄の組織へ		石山健二	60-67	7.3				
17		浅野セメント争議六月三十日夜の素描		今野賢三	67-69	2.1		○		2.1
18		下井河事件の犠牲者を救へ！			69	0.4				
19		俺の村ではこうだ！	農村の現状	(山梨)保延雪江	70-72	2.1				
20			農村青年の運動に就て	(山口)Ｎ生	72-73	0.8				
21			農村断片	(茨城)Ｓ・ヤクシヂ	73-75	1.5				
22			青訓をあばく	(新潟)木田鉄二	75-77	1.5				
23			いゝ奴隷だ	(鹿児島)Ｔ・Ｉ生	77-79	2.7				
24		大衆通信		読者網(大森・哲郎)　信州の一青年より(宮島桂一)　台湾通信(平田生)　森の都熊本から(河野貢)　ガンばれ、文戦よ(一読者)	71-75	1.5				
25		短篇小説	農夫のゐない村	オツトウ・ビーハア(長野訳)	80	4				
26		ブルジョア新聞の読み方	第一講　この研究は何故必要か？	阿部慎吾	84-88	4.6				
27		戦線レポート	朝鮮咸興炭坑より		90-92	2.6				
28			全農秋田下井河争議詳報	石山生	92-95	3.4		○		3.4
29			東日の兄弟遂に立つ ――争議団が勝つまで大毎・東日を読むな！――		96-98	2.6				
30			地主襲撃 ――土地を奪はれた奥野田村の農民――	(山梨)山崎一郎	98-99	1				
31			徳山鉄板の兄弟罷業に入る	(徳山)村上五郎	99	0.3				
32		壁シンブン	佐渡の漁村では	Ｍ・Ｋ生	100	0.8				
33			仕事をさせろ	(浦賀) 小山田富房	100-101	1				
34			支那に於ける自由運動大同盟の成立	谷孝雄	101-102	0.7				
35			広島合同運送争議――警官の傷害事件	(広島)木村生	102	0.3				
36			安田養蔵君訃		102	0.1		○		0.1
37		マルクス主義美学の問題（２）		カア・ア・ヴィツトフォーゲル	104-107	4				
38		さまざまの問題と感想		青野季吉	108-113	5.5				
39		ブツク・レビウ	同志伊藤の『恐慌』を読む	檜六郎	114-115	1.1		○		1.1
40			『赤い広場を横ぎる』	里村欣三	115	0.9				
41		文戦劇場は斯くして出発する	――秋田・新潟地方巡回公演演出プラン――	文戦劇場演出班	116-122	6.6	○		6.6	
42		父よ闘はう　近頃の俺		中井正晃	122	0.3				
43		『労農芸術家聯盟』臨時総会声明		労農芸術家聯盟	124-127	4	○		4	
44		文芸戦線		Ｏ・Ｋ、Ｍ・Ｍ、Ｆ 、Ｓ・Ｓ	128-129	2				
45		（＊小説）組合旗の下に		杉田英男	130-153	14				
46		売られる田地――文戦劇場演用台本		伊藤貞助	154-162	9	○		9	
47		（＊小説）警鐘		田中忠一郎	163-183	21				
48		編輯ノート		編輯局	184-185	1.7	○		1.7	
		挿絵・カット		安藤英夫 村上英明 Ｓ．ｔｏｓｈｉｏ〔斎藤〕 福田新生						
計					48点	161.1	5	5	32.3	11.4
	1930年9月号									
	(第7巻第9号)	表紙		白銀功						
1	**9月1日発行**	グラフ	労働政府の正体 餓死か闘争か!! おれ達の手で生活権を　ソビエトロシア聯邦共産党第十六回大会! ビオニール第二回世界大会 インド革命の危機を救へ!!		7-14	8				
2		巻頭言	鉄の力で	青野生	15	1				
3		国際戦線	支那革命は進展する!!――ボルシエヴイキ革命の長江進出――	文芸戦線調査部編	16-24	9				
4		国際戦線	一九三〇年八月一日第二回赤色デー　――海外の兄弟は如何に戦つたか？――	文芸戦線調査部編	25-27	2				
5		国際戦線	国際青年デーを踏み出せ　――九月第一日曜日の用意はいゝか！――	文芸戦線調査部編	28-31	4				
6		印刷工の歌――活版工場に就いて		山路英世	32-34	3				
7		海のデモ		柴田安兵衛	35-39	5				
8		戦線レポート	東京モス二千五百の兄弟は起つた！ ＝亀戸工場の大ストライキ＝	中井正晃	40-42	3				
9			苦戦五十日、柏紡の闘争白熱化す ――紡織資本家の殺人的攻勢に抗して――	(大阪)高岡梅吉	43-45	2.3				
10			柏原紡織争議の同志よ	大津一郎	45	0.8				
11			抜剣に血塗られた東京鋼板のストライキ	棚橋生（＊棚橋貞雄か？）	46-49	3.5				
12			戦ふ五百の農民狂乱する白色テロ ＝山梨県東山梨郡奥野田の小作争議＝	(睦沢読書会)保延雪江	49-50	1.3				
13			地主・資本家の手先は誰だ!? ＝全農に策動する小児病患者を粉砕しろ!	(全農)ＳＳ生	52-53	2.6				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
14			レート大阪工場ストライキ		53-54	1.3				
15			西沖野田製樽工場争議	西沖野田製樽工場争議団一同　全国大衆党宇部支部　宇部合同労働組合	54-55	0.5				
16			九鬼紙工所場(ママ)争議	九鬼紙工所争議団本部	55	0.3				
17			お詫び	編輯局	55	01	○		0.1	
18		労働組合運動のＡＢＣ		吉川一郎	56-59	4				
19		社会時評	隠蔽された農業恐慌	檜六郎	60-65	5.3		○		5.3
20		文戦八月号を読んで		篠田泰政	65	0.7				
21		電燈料値下運動を捲き起せ		宮田保郎	66-71	5.3				
22		餓死に直面する諏訪八万の養蚕家		浜崎秀司	71-75	4.7				
23		窮乏農民は如何うなる？――千葉県の一角を覗く――		今野賢三	76-79	4		○		4
24		ブルジョア新聞の読み方	第二講　表面から見たブル新聞の製作	阿部慎吾	80-85	6				
25		合同問題を語る		鈴木茂三郎	86-89	4				
26		宗教暴露	法衣を纏へる資本主義！――ある坊主の話――	里村欣三	90-95	6				
27		貧困児童――或る農村教員の日記		高橋辰二	96-108	13				
28		海とプロレタリア		井上健次	110-111	1.4				
29		飢餓		中井正晃	111-113	2.6				
30		弟子		棚橋キ一	114-116	2.3				
31		難破船		岩藤雪夫	116-117	1.7				
32		短篇（＊小説）	子供が生れる	チヤールス・エール・ハリソン（前田河広一郎訳）	118-129	12				
33		共同製作に関するテーゼ(草案)		『共同制作』研究委員会金子、細田、間宮、青木、宗(欠席)、青野	131-135	5	○		5	
34		最近の文戦の作品から――文芸時評		大森義太郎	136-139	3.5				
35		演劇研究生男女募集		文戦劇場	139	0.5	○		0.5	
36		マルクス主義美学の問題〔３〕		カア・ア・ヴィツトフォーゲル(長野兼一郎訳)	140-143	3.5				
37		帯広読書会より		(北海道)北島生	143	0.5				
38		『事故暴露』を読む		田口運蔵	144-146	1.2				
39		ソヴエートロシア文学理論を読む		今野賢三	146	0.6		○		0.6
40		文芸戦線		前田河	144-145	1				
41		新刊紹介			146	0.2				
42		（＊長篇）町工場		鶴田知也　菅野好馬	148-184	36.5				
43			作品「町工場」について	『共同制作』研究委員会	184	0.5				
44		（＊小説）トラック	（長編魚河岸の一章節）	金子洋文	185-198	12.5	○		12.5	
45		文戦劇場より			198	0.5	○		0.5	
46		（＊小説）狂人と偽狂人		細田民樹	199-214	16				
47		原稿を送れ！		文芸戦線社編輯部	215	0.8	○		0.8	
		挿絵・カット		村上英明　福田新生　斎藤						
計					47点	204.4	6	3	19.4	9.9
	1930年10月号									
	(第7巻第10号)	表紙		安藤英夫						
1	**10月1日発行**	グラフ	やれツ！勝利はおれ達のものだ！　ストライキは続発する！　文戦劇場農村巡回公演　労働者農民は××主義戦争絶対反対だ！　一路ソヴエート・チヤイナの完成へ！		7-14	8	○		8	
2		巻頭言	『公式』と『平凡』	青野生	15	1				
3		国際戦線	プロフインテルン第五大会ニユース		16-18	3				
4			支那革命における都市プロレタリアートの苦闘		19-21	3				
5			ロシア五ヶ年計画の前進的労働遂行デー		22-23	1.2				
6			失業反対のブタ＝ペスト――ハンガリー反動階級の反動突破戦――		23-24	0.9				
7			北フランスのゼネ・スト――社会保険法の実施に抗して――		24-26	2.6				
8		手の波		渋田南二	27-29	3				
9		「納税延期」		高橋辰二	30-31	2				
10		戦線レポート	新潟県大蒲原争議の実相	北川冷二	32-36	4.6				
11			江東地方争議共同闘争委員会成る		36-37	1.4				
12			全国俸給者組合評議会の成立について	福島一郎	38-39	1.2				
13			青年労働者の自主的組織、労働青年聯盟確立す		39-40	1.3				
14			全下関印刷工ゼネ・ストに入る	(下関)澄田英司	41-42	4.6				
15			隅田合同運送の船夫諸君起つ		42-43	1.5				
16			康文社争議団を勝たせろ!	(争議団員)小林末吉	43-45	2				
17			完全に地主共をブチノメシタ下井河ピオニール	村山洋一	45-46	1.3		○		1.3
18			未曽有の弾圧を蹴つて下井河争議勝利解決！		47	0.4		○		0.4
19			山梨農民学校設立さる		47	0.4				
20			戦旗九月号東日争議のデマに関する共同声明書	藤原・日暮・瀬藤・秋葉・景山・松本・関根・杉山(争議団員)　吉田・加藤・堀切・石塚・伊藤(応援団)　田中・高野・山本(組合本部)	47-48	1.2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
21			悪辣なる陰謀の犠牲となつた六十四名同志を救へ!!		49	1.6				
22			印刷工の兄弟よ!産業別ゼネストのトツプを切らう!!	(印刷工、東京出版) 中村武男	49-51	2.5				
23		帝国主義ブルジヨアジーか資本家地主のプロツクか	――戦略論における「戦旗」派の一進歩？(一)――	山口徳夫	52-60	8.5				
24		労農党解消問題の経緯とその批判		福島一郎	61-66	5.5				
25		スパイの非合法運動――ダンゼンケツ飛ばせ		(八幡) Ｓ生	66	0.5				
26		労働組合運動のＡＢＣ〔２〕		吉川一郎	68-71	4				
27		社会時評		檜六郎	72-77	5.7		○		5.7
28		××室とぶた箱　秋風		中井正晃	77					
29		国際農業恐慌の話		近田久	78-81	2.1				
30		租税と農民		宮田保郎	81-90	8.8				
31		エトロフ丸漁雑夫虐殺事件		熊谷正男	91-95	4.3				
32		山の飢餓		高橋辰二	95-96	1.2				
33		漁民は上ツたりだ		伊藤永之介	96-87	1.2		○		1.2
34		俺達の職場	帝国人造絹糸岩国工場暴露記	山田武夫	98-100	2.3				
35			坑山より	高木生	100-103	2.7				
36		搾る為の工事		間宮茂輔	104-106	2.3				
37		人を喰つた奴		田中忠一郎	106-107	1.7				
38		新アヂ文学論――われわれの文学的実際の一方向。及び新作家の出発への一要請――		青野季吉	108-117	10				
39		鹿地、貴司二君と散歩する！		小堀甚二	118-123	5.7				
40		八、九月の戦旗の作品		山本和子	123-126	3.3				
41		文戦劇場は如何に闘つたか？	――秋田農民組合巡回公演報告――		128-129	1.3	○		1.3	
42			演出班の報告	間宮茂輔	129-130	1.5	○		1.5	
43			俳優班の報告	森本隆嗣　大日方憲 宮村敬介	130-132	1.5	○		1.5	
44			舞台班の報告	安藤英夫 大葉衆人　生出辰太郎 末崎静児	132-134	1.2	○		1.2	
45			経営班の報告	工藤恒	134	0.5	○		0.5	
46			我々は次の闘争に対する確信を得た	金子洋文	134-135	1.3	○		1.3	
47		ソヴエート映画『トウルクシブ』を見る		檜六郎	136-137	2		○		2
48		中小商工農業者は没落か？更生か？		山川均	138-140	1.2				
49		山川均氏著『労働組合の話』		青山北一	140-141	1.5				
50		文芸戦線		Ｃ・Ｃ　Ｓ	138-139	1				
51		バルチツク艦隊(五幕十場)		伊藤貞助	143-170	28				
52		工場管理		今野賢三	171-194	24		○		24
53		町工場（２）		鶴田知也 菅野好馬	195-220	26				
54		原稿を送れ！		文芸戦線社編輯部	221	1	○		1	
		挿絵・カット		福田新生　安藤英夫　斉藤						
計					54点	210.5	8	6	16.3	34.6
	1930年11月号	(*この号は発禁)								
	(第7巻第11号)	表紙	ロシヤ革命記念号　特別附録ソヴェート連邦五ケ年計画一覧図							
1	**11月1日発行**	グラフ	ボルセヴキーの旗の下に！ 血をあびて戦ふ洋モス三千の女工を勝たせろ！ 今や全く持久戦に入つた大島製鋼争議団 闘争へ!闘争へ!全闘争力を集中して失業反対闘争へ！ ドイツ総選挙と共産党!!		11-18	8				
2		巻頭言	統一時代	青野季吉	19	1				
3		革命第十三週年を迎へたソヴエト聯邦の社会主義的建設	――全世界のプロレタリアートは、いかにして『十一月の日』を迎へるか？――		20-31	12				
4		十一月の断想		前田河広一郎	32-39	8				
5		日露経済関係小観	――ルーブル貨問題の進展を監視せよ――	水木棟平	40-46	7				
6		革命随筆	価値の転倒	田口運蔵	47-49	3				
7		敵は正面に!フアシズムの新展開		長野兼一郎	50-60	11				
8		（＊詩）カラチの鷗に 島の炭山 寒夜		田中逸雄	62-67	6				
9		社会時評	大豊作に大飢饉	檜六郎	68-73	5.3		○		5.3
10		見ろ!これが農村の現状だ!!	農村断片	(山梨)保延雪江	73-76	3				
11			生きてゐるのが不思議なくらいだ!	(福岡県)上原正義	76-77	1.2				
12			駅、道路、そして貧農	斎藤常治	77-78	1.7				
13		争議ビラ・チラシの研究		金子洋文 鶴田知也	80-93	14	○		14	
14		血ぬられた洋モスのゼネ・スト	――女工三千の団結にコヅキ出された暴力団――	中井正晃	94-99	5.9				
15		洋モス争議応援団			99-100	1.1				
16		×の闘争へ(秋田より)		村山洋一	101	1		○		1
17		ピオニールのページ	弾圧化に成長する東京最初のプロレタリア小学校	東京プロ少年団本部	102-105	3.4				
18			愛知ピオニールより		105-106	1.5				
19		も一度、戦略の方向について――戦略論における「戦旗」派の一進歩？(二)――		山口徳夫	107-113	7				
20		ブルジョア新聞の読み方	第三講 新聞は如何にしてブルジョアの機関となるか(上)	阿部慎吾	114-119	6				
21		俺達の職場	餓死か?闘争か?――磐炭に於ける労働者の現状――	上遠野英夫	120-126	6.1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
22			筑豊の炭坑より	高木生	126-128	2.2				
23			全国の逓信従業員よ立て！	(東京××郵便局) 岩本鉄夫	128-131	3.2				
24			官船の同志に与ふ	(下関)中村信哉	131-133	2				
25			電話事務員の生活	(大阪)哲子	133-134	1.5				
26		文芸時評		細田民樹	135-140	5.8		○		5.8
27		観念論的芸術学の排撃――個性の文学と類型の文学の批判――(*谷川徹三批判)		榊山晃	140-145	5.3				
28		詩人よ、『唄へる詩』を作れ！		湊朝夫	146-147	1.7				
29		「荒つぽい村」に関連して		等々力徳重	147-150	2.5				
30		原稿を送れ！		文芸戦線社編輯部	150	0.5	○		0.5	
31		ブツク・レビウ	猪俣津南雄氏著『没落資本主義の第三期』	塩川二郎	151	1.3				
32			世界経済年報第十輯	檜六郎	152	1.2		○		1.2
33			布施辰治氏の『死刑囚十一話』を読む	米田曠	153	0.8				
34		アジアの嵐寸前		洋文生	154-155	1.7	○		1.7	
35		『文戦劇場』公演		洋文生	155	0.3	○		0.3	
36		（＊小説）総督府模範竹林		伊藤永之介	157-193	37		○		37
37		（＊小説）地下線工夫		原木雄一郎	194-202	9				
38		町工場（３）		鶴田知也 菅野好馬	203-210	8				
39		『文芸戦線』を『文戦』と改題する可否に就て読者諸君に問ふ！			211	1	○		1	
		挿絵・カット		Ｙｏｓｍａ〔菅野好馬〕 福田新生 斉藤						
計					39点	198.2	5	5	17.5	50.3
	1930年12月号									
	(第7巻第12号)	表紙		福田新生						
1	**12月1日発行**	グラフ	軍事予算か失業手当か	長野 鈴木 編	9	8				
2		巻頭言	『大衆の一九三〇年』	青野生	17	1				
3		合同運動の新段階		山川均	18-23	5.6				
4		『文戦』を大衆の中へ持ち込め！		文芸戦線社	23	0.2				
5		『ソヴエート連邦建設五ヶ年計画一覧図』		文芸戦線社	23	0.2				
6		社会時評		檜六郎	24-27	4		○		4
7		国際戦線		文芸戦線社調査部編	28-36	8.2				
8		ブツクレビウ	田口運蔵著『世界を震撼さすスターリン』	鶴田知也	36	0.8				
9		食はせろ！働かせろ!!		高橋辰二	37	1				
10		鉄槌を準備する		面高秀生	38-39	2				
11		夜月		田中逸雄	40-41	1.7				
12		詩を送れ!			41	0.3	○		0.3	
13		戦線回顧・一九三〇年	歴史的な展望	前田河広一郎	42-43	2				
14			河上肇氏の行き方について	青野季吉	44-45	1.7				
15			日本資本主義の一九三〇年度興行	檜六郎	45-47	2		○		2
16			左翼演劇一年	金子洋文	47-48	1.1	○		1.1	
17			出家と自殺	細田源吉	49-50	1.5				
18			自己短評	葉山嘉樹	50-51	0.9				
19		ブツクレビユー	同志青野の近著『社会は何故に悩むか』を読む	水木棟平	51	0.7				
20		転化の問題、その他	――戦略論における「戦旗」派の一進歩？（三）――	山口徳夫	52-60	9				
21		ブルジョア新聞の読み方	第四講 新聞は如何にしてブルジヨアの機関となるか(中)	阿部慎吾	61-67	6.7				
22		読者より		蒲田文戦読者会	67	0.2				
23		豊作飢饉だ!農民は何故食へぬ？		宮田保郎	68-83	15.5				
24		奴等を笑ふ		(広島)中村生	83	0.5				
25		戦線レポート	解散の労農議会を報告する	一党員	84-85	1.7				
26			東洋モスリン争議第二報	井上健次	85-87	1.8				
27			共同闘争のバリケードは成つた!!――江東・南葛地方ストライキの渦だ！――		87-88	1				
28			錫箔工のゼネストを応援せよ！	（全国労働京都聯合会）幾山福三郎	88-89	0.6				
29			日立製作所笠戸工場より	全国労働組合同盟都農合同労働組合	89-90	0.7				
30			頑張る緒方鉄工所争議団員	緒方鉄工所争議団	90	0.8				
31			支配階級の意識的差別に対して計画的に逆襲せよ！――全国水平社第九回大会に備へよ!!――		90-91	0.7				
32			獄中の同志は元気だ――全農下井河支部ニユース		91	0.3		○		0.3
33			引続く弾圧に屈せず闘ふ下岩川支部を応援せよ!		91-92	0.3		○		0.3
34			新愛知争議レポート		92	0.8				
35		闘争の生活から	炭坑内での伝単には便所を利用せよ	Ｔ生	93-94	1.9				
36			私はこうして組合に加盟した	(京都全国労働組合員)片山たけ	94-95	0.6				
37		急告		文戦劇場	95	0.4	○		0.4	
38		製紙工場風景		加久保あつし	96-107	108				
39		カムチヤツカの回想		北見猛	107-110	2.7				
40		汚しいウルトラ宣言		(新潟) 吉田一策	110	0.5				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
41		俺達の職場	搾取の牙城亀戸日立	(亀戸)赤林辰馬	111-113	2.7				
42			曳きふね船	沖吉伊佐美	113-114	1				
43			魚河岸の横ツ面	島健二	114-117	2.5				
44			坑山より 見ろ――温情主義の仮面を被つた三井の正体を	高木行雄	117-118	1.7				
45			俺の抗山	野村省吾	119-120	2				
46		文戦劇場秋期公演報告		大山広光	121-122	1.5	○		1.5	
47		経済的報告その他二三について		金子洋文	122-124	1.8	○		1.8	
48		六名の除名に就て			124-125	1.7	○		1.7	
49		町工場(完)		鶴田知也 菅野好馬	126-140	15				
50		(*小説)鉱山の私娼窟		間宮茂輔	141-153	13				
51		(*小説)官業		井上健次	154-167	14				
52		前号附録を分売する！ 『文芸戦線』を『文戦』と改題する可否に就て再び読者諸君に問ふ！			168	1	○		1	
		挿絵・カット		福田新生 Ｓｈｉｒｏ〔白銀功〕 菅野好馬					7.8	6.6
計					52点	158.3	7	4	7.8	6.6
	1931年1月号									
	(第8巻第1号)	表紙	文芸戦線改題							
1	**1月1日発行**	グラフ	弾×に抗して ソヴェート聯邦の生産力〔他〕		7	4				
2		チヤーレー・チヤツプリン行進曲		マイクル・ゴールド（前田河広一郎訳）（オツトウ・ソグロウ画）	11-42	32				
3		断層		青野生	43	1				
4		燈台(続鷗供養)		岩藤雪夫	44-48	5				
5		狂人と偽狂人	二場	原作細田民樹 脚色工藤恒	49-61	12.7				
6		寄稿家諸君へ！			61	0.3				
7		母の思ひ出（長篇「誰が殺したか？」の続き）		葉山嘉樹	62-65	3.5				
8		文戦劇場の諸君よ！		(愛知県)長谷川生	65	0.5	○		0.5	
9		爆発		田中忠一郎	66-75	10				
10		××炭坑気罐場	三場	渋田南二	76-90	24.5				
11		あゝ俺は春を待つ		酒井みさを	90	0.5				
12		旅順		里村欣三	91-94	3.5				
13		『文戦』支局員を警戒せよ！！		文戦社	94	0.5	○		0.5	
14		九九九九人と一人		細田源吉	95-102	8				
15		与茂七は死なゝい(四幕十場)		間宮茂輔	103-126	22.5				
16		闘争の写真を募集す			126	0.5				
17		最近の政治的実践に関連して文学的実践の方向について論ず		青野季吉	126-140	15				
18		にせ物の社会		高橋辰二	141-142	1.3				
19		戦ふ者が勝つ		面高秀生	142-144	2				
20		産業合理化		鋼研二	144-145	1				
21		一九一九年一月十五日――ウィルヘルムの子カール――		米田曠	145-147	1.5				
22		労農芸術家聯盟員名簿			147	0.5	○		0.5	
23		国際戦線		文戦調査部編	148-156	9				
24		アルパゴンと泥棒――オニールの為めに		鶴田知也	157-163	5.8				
25		前々号附録を分売する!!!			163	0.2				
26		文芸戦線		前田河 葉山 長野 檜 中井 曠 M・N生 田中 S・S T・T	164-165	2		○		2
27		全国聯合××同窓会の情勢		山野利一	166-170	3.3				
28		西本願寺募財を拒絶せよ!!			170	0.7				
29		永遠愛好者の文学論――土田杏村氏の哲学と文学論の批判――		榊山晃	171-174	4				
30		ブルジョア新聞の読み方	第五講 新聞は如何にしてブルジョアの機関となるか(下)	阿部慎吾	175-181	6..4				
31		岡山県に於ける児童差別問題		全国水平社総本部	181	0.5				
32		社会時評		檜六郎	182-183	2		○		2
33		レニンは×××の為に生れた人間である		スターリン	184-190	7				
34		全国大衆党第二回大会報告		井上健次	191-194	3.5				
35		光輝ある三党合同協議会の結成			194-195	1.4				
36		ブツクレビユウ	大仏次郎君の『ドレフユス事件』	青野季吉	196	0.6				
37			山川均氏『産業合理化の批判』	青山北一	196-197	0.5				
38		綜合ヂアーナリズム講座執筆者並びに全国出版関係者諸氏に訴ふ		内外社争議団	196-197	0.5				
39		労農芸術家聯盟員並びに『文戦』読者諸君に訴へる		里村欣三 岩藤雪夫 長野兼一郎 井上健次 葉山嘉樹 前田河広一郎	198-201	3.4				
39		文戦劇場脱退者の醜悪なる正体を暴露す			201	0.6	○		0.6	
40		演劇講座	労農素人芝居(一)	金子洋文	202-209	4.8	○		4.8	
41		ブツクレビウ	北郷逆氏訳『反フアシズム闘争』を読む	阿部生	209	0.6				
42		レポート	闘ひは之れからだ	（凸版印刷）H生	202-205	1				
43			犠牲者救援共同耕作	保延雪江	205-206	0.6				
44			変つた争議、鬼工場主はブタ箱へ！	緒方争議団本部 緒方鉄工技工会本部 全国大衆党福岡支部	206-209	1				
45		旦男爵の午後		檜六郎	210-212	2.5				2.5

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
46		社会雑俎A			212	0.5				
47		大衆通信		北海道から(岡田利一)　文戦十一月号評(伊藤兼一)　夢遊病者を叩き出せ(大衆党広島支部組織部)　読書会を(小樽・若月秀一)　或る女の叫び（下谷・一労働者）　絶対支持（鳥取・門協武顕）　同志を葬る（南和朗）　文戦のもとに（神戸××組合・B生）　近く読書会を作ります（大阪・U生）　策動を叩きつぶせ（愛知・城木生）	213-218	5.7		○		5.9
48		誌代を完納せよ！			218	0.1	○		0.1	
49		飢餓日記		中井正晃	219-221	2.6				
50		雪崩		棚橋軌一	221-224	2.3				
51		泣いてゐるのだ		山本和子	224-225	1.6				
52		労働者の日記		菅野好馬	226-230	4.5				
53		青年訓練所		高橋辰二	230-232	1.5				
54		コツク		里村欣三	232-233	2				
55		編輯ノート			234	1	○		1	
		表紙・挿絵・カット		福田新生　白銀功　青木　菅野好馬　安藤英夫						
計					55点	234	7	3	8	12.4
	1931年2月号									
	(第8巻第2号)	表紙		安藤英夫						
1	**2月1日発行**	グラフ	指導者の跡　失業、重税、飢餓反革命陰謀は裁かれる		7-10	4				
2		(巻頭言)	必然の基軸へ	青野生	11	1				
3		国際戦線		長野兼一郎編	12-21	10				
4		官林にかこまれた村		高橋辰二	22-24	2.4				
5		闘争へ！		永井正春	24-25	1.6				
6		鉄道線路の同志へ		真野隆彦	26-27	2				
7		沢山の腕がものを云うぞ！（全国大衆党昭和五年度大会）		面高秀生	28-29	1.7				
8		重やん一		米田曠	29-30	1				
9		印度洋の夜		田中逸雄	30-31	1.2				
10		漫画	紙きれだけの「失業救済」「組合法」	白銀功	32	1				
11		漫画	今に御自身が解けて消えるらしい	福田新生	33	1				
12		××的芸術家は何を為すべきか？		藤川靖夫	34-39	6				
13		プロレタリア美術の諸問題		福田新生	40-46	6.5				
14		また兄弟がやられたゾツ			46	0.5		○		0.5
15		『組織的生産』とは？		青木壮一郎	47-52	6				
16		労農党大会を聴く		松尾五郎	52	0.5				
17		新段階に於ける合同の基準と左翼の任務		鈴木茂三郎	53-61	7.5				
18		社民大会を見る		松尾五郎	61	0.5				
19		今議会の展望		宮田保郎	62-67	5.7				
20		文戦の旗の下に		（山梨）一読者	67	0.3				
21		ブルジョア新聞の読み方	第六講　記事のいろいろとその読み方	阿部慎吾	68-74	7				
22		俺の村ではかうだ	農民よ！これでいゝのか――宮崎県下農村を報告する――	児玉力夫	75-85	10.7				
23		労働者農民の名に於て		高木行雄	85	0.3				
24			村の弟から	鈴木仁夫	86-91	6				
25		文芸戦線		S・S　水木　和子　阿部　檜六郎　A　P・P　S生　M・N　FK	92-93	2		○		2
26		シンクレーア・ルイス研究		前田河広一郎	94-108	15				
27		社会時評		水木棟平	109-111	3				
28		文芸国際戦線		文戦調査部　（責任執筆M）	112-113					
29		演劇講座	労農素人芝居(二)	金子洋文	114-118	4	○		4	
30		富士瓦斯紡績対工女募集人紛議と我等			115	0.5				
31		全国の同志諸君!!王番田の争議は勝つたぞ！		全国農民組合王番田争議団本部　同大番田支部　同青年部大番田支部	117	0.5				
32		同志の作品を読む	前田河広一郎『支那から手を引け』	檜六郎	119	1		○		1
33			伊藤永之介『暴動』	中井正晃	120-121	0.6		○		0.6
34			青野季吉『或る時代の群像』	長野兼一郎	121-123	1.3				
35			今野賢三『女工戦』	宮田保郎	125-125	1.6		○		1.6
36			小牧近江『異国の戦争』	里村欣三	125-127	1.2		○		1.2
37			葉山嘉樹『稚き闘士』	石井安一	127-128	.0.8				0.8
38			金子洋文『魚河岸』	山本和子	128-129	1.3	○		1.3	
39			細田源吉『陰謀』	伊藤永之介	130-131	1.2		○		1.2
40		レポート	何事ぞ、失業救済地獄？――八号線工事ストライキ　第二信――	保延雪江	119-124	2				
41			電燈料値下運動――全国大衆党山梨聯合会の活動――		125-126	0.5				
42			全×信従業員は遁友同志会へ！	（東京×○支部）川田保夫	1216-131	1.8				
43		飽くまで文戦だ		（札幌読者会）XYZ生	131	0.2				
44		共同闘争を通じて戦線の強化・統一へ！		江東地方争議共同闘争委員会	132-133	1.7				
45		文戦劇場新潟公演日取			133	0.3	○		0.3	

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
46		大衆通信		文戦絶対支持だ!!（下関・K生）　去らば去れ（関本×一）　〔無題〕（名古屋・ビオニール）　プロ童話大会（本山生）　一水夫の叫び（×基丸・沢田初之×）　改題賛成（沖吉伊佐美）「プロレタリヤ」を見る（山梨・大田×雄）　文戦は大衆のものだ（岡山・出×優）　脱退事件について（長野県・佐藤×義）　大衆の声（×沢読書会）	134-138	5				
47		石(*小説)		鶴田知也	139-145	6.5				
48		ブツクレビユ	街頭社叢書第一編「帝国議会舌戦史」を読む	中井正晃	145	0.5				
49		盲目の子を抱いて		中井正晃	146-145	10.5				
50		修学旅行費国家ふたんせよ。		（愛知労×少年団）釣屋生	156	0.5				
51		与茂七は死なゝい(四幕十場)（続）――文劇戦場新潟公演台本――		間宮茂輔	157-173	16.5	○		16.5	
52		「文戦劇場」新潟巡回公演を支持せよ！――読者諸君に訴ふ――			173	0.5	○		0.5	
53		誰が殺したか？（二通の手紙）		葉山嘉樹	174-180	6				
54		編輯ノート		文戦編輯局	180	1	○		1	
		挿絵・カット		福田新生　安藤英夫　白銀功					23.6	8.9
計					54点	171.1	6	7	23.6	8.9
	1931年3月号									
	(第8巻第3号)	表紙		福田新生						
1	**3月1日発行**	グラフ	警官の垣を越えて　決死的闘争へ		7-12	6				
2		巻頭言	アウエイ・ウイズ・ライ	青野生	13	1				
3		暗澹たる農村を歩く――主として群馬県下の農村に就いて――		里村欣三	14-31	18				
4		パリ・コムミユーンを記念せよ！	コムミユーンは進む　レニン	(M)	32-33	2				
5			七十二日の労働者政府――巴里コムミユーンの記録――	文戦調査部	34-38	4.4				
6		鉄板分会の同志は協親会を戦闘化しろ！		都農合同労働組合	35	0.3				
7		全硝子産業の労働者に告ぐ		SK争議団	37	0.3				
8		社会時評		水木棟平	39-43	4				
9		国際戦線		文戦調査部編	44-52	8.5				
10		師範学校からの内燃		青山浩	52-54	2.2				
11		工場から、村から血の滲んだ、レポ、記録、通信をドシドシ送つて呉れ		編輯局	54	0.3	○		0.3	
12		ブルジョア新聞の読み方（完）	第七講　報道記事は如何にして書かれるか	阿部慎吾	55-63	8.5				
13		ブツクレビユー	フリーチエの『欧洲文学発達史』（外村史郎訳）	青野季吉	63	0.5				
14		文芸戦線			64-65	2				
15		大谷石場から		米田曠	66-67	2				
16		俺達の歴史		轟九部	68-70	2.4				
17		抗山の雰囲気		長藤泰	70-71	1				
18		海を此の手に！		木白原	71-73	1.4				
19		指導者を求める農村！		石井安一	73	0.8				
20		国際文芸戦線		文芸調査部（責任執筆M）（ママ）	74-75	2				
21		短編小説　赤い船		オツトー・ビーハー（長野兼一郎訳）	76-79	3.7				
22		文戦同志よ！		（大分）佐×高×	79	0.3				
23		演劇講座	労農素人芝居（三）	金子洋文	80-85	6	○		6	
24		国際婦人デーを闘ひ取れ		山本和子	86-88	1.6				
25		ブツク・レビウ	トロツキイの『革命裸像』	檜六郎	88	0.4		○		0.4
26		プロレタリア文学運動に於ける二潮流の批判――××主義が社会民主主義か――		榊山晃	89-93	3.6				
27		何といふ奴だ		木村五郎	93	0.4				
28		『文戦』作品の批判		評論委員会	94-97	23.2				
29		我々の詩について		高橋辰二	97-98	1.8				
30		レポート	勝利を得た竹内争議	S生	99-100	0.5				
31			西瓜検査撤廃闘争	平山売吉	100-101	0.4				
32			この××を見よ	宇部紡績争議団	101-103	0.6				
33			反動的小作法案を粉砕しろ!!	全国農民組合中央常任委員会	103-105	0.9				
34			内閣印刷局の暴露	村山幸次	106-108	1				
35		吹雪を衝いて戦ふ――決死的な秋田農民の闘争を展望する――		今野賢三	99-106	5.2		○		5.2
36		血に飢えた仇敵同業組合を叩き潰せ！			106-108	1.8				
37		俺の村ではかうだ――村は飢えてゐる	十勝の村から	（北海道）宇部得栄	109-111	2.7				
38			佐渡の農村現況	（佐渡）柏原生	111-113	1.6				
39			私の村の断片	（山梨）保延雪江	113-115	2.7				
40			血を吸ふ枠	（信州S町）砂戸嘉数	116-117	1.4				
41			養蚕の暴落	（岡山県）出原優	117-118	1.3				
42			豊作農村風景	（愛知県）斎藤常治	118-119	1				
43		(*農村通信掲載を次の機会に)	秋田県 古野金一郎ほか		119	0.1	○		0.1	
44		暴×の嵐を蹴飛ばして秋田合同大会成る		(港生)	120-121	1.7		○		1.7
45		「文戦劇場」新潟へ出発した！			121	0.3	○		0.3	

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
46		大衆通信		天上の遊戯者（松本市・×野勇）　読書会を（加藤×吉）　闘ひ奪ふのみだ！（×××読書会・×田×吉）　〔無題〕（川×読書会・日×龍二）　読書会のテーゼを送れ（宮崎県××郡・児玉×夫）　我等の文戦（木下生）　崎戸炭坑（吉岡芳司）　中央の同志諸兄（静岡県×田郡・内藤×一）	122-125	4				
47		文戦三万部突破運動開始!!		文芸戦線社　労農芸術家聯盟	126-127	2	○		2	
48		貧しい砂丘		浜崎秀司	128-160	32.8				
49		横田直氏訃		文戦同人	160	0.2	○		0.2	
50		仲間		田中忠一郎	161-167	7				
51		健康保険患者		加藤龍郎	168-184	17				
52		赤鉛筆と黒鉛筆		前田河広一郎	185-192	7.5				
53		文戦読書会について		（八幡読書会）堀田昌夫	192	0.5				
54		編輯ノート			193	1	○		1	
		挿絵・カット		白銀功　福田新生						
計					54点	203.8	7	3	9.9	7.3
	1931年4月号	ピオニール特輯								
	(第8巻第4号)	表紙								
1	**4月1日発行**	グラフ	闘争は激化する　植民地の白色テロと欺瞞政策至る処闘争のフキルムが展開する		7-12	6				
2		グラフ	石垣栄太郎の画＝腕、リンチ、栄太郎・綾子夫妻の肖像		13-14	2				
3		巻頭言	それぞれの『藁』	青野生	15	1				
4		国際戦線		文戦調査部編	16-25	9.5				
5		インターナシヨナル反×国主義展覧会			25	0.5				
6		社会時評		水木棟平	26-31	6				
7		（*詩）	留置所にて	中島彰二	32	1				
8			やせ衰へた農村	一農夫	33-34	2				
9			未練の灯	田中逸雄	35-36	1.1				
10			河原の子馬	下遠野赤心	36-37	1.9				
11			母子	米田曠	38	0.7				
12			九十九里	高橋辰二	38	0.3				
13		実践的文学論に於ける実践の意義に就いて		榊山晃	39-45	7				
14		『文戦』作品の批判		批評委員会(*檜参加)	46-49	3.6		○		3.6
15		文戦直接読者に激す		経営部	49	0.4	○		0.4	
16		国際文芸戦線		文戦調査部	50-53	4				
17		プロレタリア文学の進出――ハリコフ市に於ける××文学国際大会の総決算		（長野兼一郎訳）	54-56	3				
18		アメリカの左翼文芸運動		石垣綾子	57-64	8				
19		文芸政策の若干の問題		ペ・ケルジエンチエフ（尾瀬敬止訳）	65-69	4.6				
20		闘争記録・写真・報告を送れ！		「文戦」宣伝部・編輯部	69	0.4	○		0.4	
21		文芸戦線		里村欣三　檜六郎	70-71	2		○		2
22		千葉に於ける八日間		高橋辰二　石井安一	72-86	15				
23		『文戦劇場』新潟公演報告	上演禁止と新戦術	金子洋文	87-91	3.2	○		3.2	
24			文戦劇場新潟闘争記	間宮茂輔	91-96	4				
25			報告に代へて	（劇場員）真野醇	87-88	0.6				
26			初めての舞台に立つた	（劇場員）古野丁一郎	88-90	0.7	○		0.7	
27			新潟雑感	(劇場員)大日方憲　正木俊雄	91-93	1				
28			衣装、小道具	（劇場員）大葉衆人	94	0.3				
29		『文戦劇場』への通信		演劇部	96	0.2	○		0.2	
30		ガツト欄		文戦調査部（売(ママ)任執筆H）	97-98	2				
31		ブツク・レビウ――新刊紹介	同志青野の新著『実践的文学論』	青木壮一郎	99	0.8				
32			ルイスの傑作『本町通り』	里村欣三	99-100	1				
33			前川正一氏『左翼農民運動組織論』	檜生	100-101	0.6		○		0.6
34			淡徳三郎訳『共産主義の恋愛・結婚・家族論』	阿部生	101	0.6				
35		闘争レポート	大和運輸の兄弟を勝せろ！		102-104	0.8				
36			土地取上と戦ふ山口県全納各支部		104-107	1				
37			闘争三十日茫原館争議大勝利解決！		107-109	1				
38			東京製パン、ストライキ決行に際し全国の同志諸君に激す!	東京製パン争議団	109-111	0.5				
39			労・農協力の争議は勝つた――鈴木製紙工場ストライキ――	保延生	111-118	2				
40			八幡警察署鍋島巡査部長の非行に対する抗議書	全国大衆党福岡支部聯合会執行委員会	118-120	1				
41		第一期堺利彦農民労働学校報告		落合久生	102-112	6.5				
42		醜悪議会解散要求演説会		井上健次	113-116	1.9				
43		別府市の無産者政治学校報告		書記	116	1				
44		逆上した秋田××局		港生	117-118	1		○		1
45		東京市立野方療養所のストライキ		（全国大衆党豊多摩支部）松尾五郎	119-120	1				
46		町からレポートを送れ！		編輯部	120	0.2	○		0.2	
47		詩	村よ醒めよ！	一村民	121	0..3				

No.（点）	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子（点）	秋田関連（点）	金子（頁）	秋田関連（頁）
48			おつ母アさんさようなら	×和朗	121	0.7				
49			税金をどうする！（九州の一角より）	×原×平	122	0.5				
50			肥るのはどいつだ	長谷川×良	122	0.5				
51			何とした自分だ	津田×雄	123	0.2				
52			今に見ろ	×岡×次	123	0.2				
53			燈りを消せ	大野×	123	0.6				
54		大衆通信		組織をしやう（川××郎）　闘つたぞ！（×藤×人）　報告！（××茂）　ナツプは令嬢の友だ（岩×××）　文戦はスパラシイ（×京××彦）　青年団へもぐれ！（××堀×××）　同志を獲得した（小川××）　この他の多数の通信業者諸君！（編輯部））	124-127	3.3				
55		下ノ関市賀来大阪毎日新聞店従業員結束して起つ！			127	0.7				
56		メーデーに備へよ！			128-129	2				
57		ピオニール特輯	グラフ		130-131	2				
58			詩（幼き同志たちに――）	由木土也	132-135	4				
59			新あらびあんないと	小牧近江	136-143	7.3		○		7.3
60			親牛とその犢の話	伊藤永之介	143-149	6		○		6
61			息子を殺す――労農少年の為めの物語	細田民樹	149-157	8.7				
62		むらからまちから ぴおにーるの しやうたやおはなしを		ぶんせんへんしゅうぶ	157	0.3				
63		小説四篇	カムサツカ	等々力徳重	160-201	41.5				
64			百二十五人目	井上健次	202-208	6.5				
65			全休前	細田源吉	209-217	9				
66			被害地域	里村欣三	218-233	16				
67		文戦読書会を作れ！		文戦組織宣伝部	201	0.5				
68		ブツクレビウ	ピスカトール『左翼劇場』	工藤恒	208	0.5				
69		文戦発行部数三万突破へ！		文芸戦線社　労農芸術家聯盟	234-235	1	○		1	
70		闘争基金応募者氏名			234	1		○		1
71		編輯ノート			236	1	○		1	
		挿絵・カット		福田新生　城木要〔白銀功〕注						
計					71点	226.9	8	7	7.1	21.5
	1931年5月号									
	（第8巻第5号）	表紙	メーデー	福田新生						
1	**5月1日発行**	グラフ	メー・デー小史〔他〕		7-10	4				
2		巻頭言	大尉の長靴	青野生	11	1				
3		漫画	これもメー・デー！	福田新生	12	1				
4			ブル議会と大衆	城木要	13	1				
5		坊主々義の三つの場合		青野季吉	14-17	4				
6		吾々の文学における自然主義的要素の残存について		青木壮一郎	18-21	4				
7		『文戦』四月号作品批判		批評委員会(*伊藤出席、金子参加)	22-26	4.5	○		4.5	
8			大衆批判のために！	批評委員会	26	0.5				
9		労農詩集	壁の中のメーデー	石山健二	28-29	1.1				
10			メーデーの歌	面高秀生	29	0.9				
11			メーデーを待つ	石井安一	30-31	1..2				
12			行列の声、旗の列――ピオニールの為めに	由木土也	31	0.8				
13			機関銃	高橋辰二	32-33	2				
14		社会時評	『浜口』より『若槻』への意義	水木棟平	34-38	4.5		○		4.5
15		メー・デー		コ゜ルキー、シンクレア、レーニン、エンゲルス	38, 50, 77, 93, 153	2.3				
16		国際戦線		文戦調査部編	39-50	9.5				
17		国際戦線グラフ			42-43	2				
18		町工場を覗く		間宮茂輔	51-60	10				
19		ソヴエート支那少女の生活		公姑（長野兼一郎訳）	61-67	6.8				
20		文戦闘争基金を送れ！		文戦社基金募集係	67	0.2	○		0.2	
21		文芸戦線		前田河　里村　檜　金子	68-69	2	○		2	
22		演劇講座	労農素人芝居（完）	金子洋文	70-75	6	○		6	
23		国際文芸戦線		文戦調査部　（文責M）	76-77	1.8				
24		社会観察	犬殺し	前田河広一郎	78-79	1.5				
25			農村一景	石井安一	79-80	1.3				
26			五人の無銭飲食犯人	棚橋軌一	80-82	1.8				
27			なさけない妻君！	中井正晃	82-84	1.6				
28			克己週間・野戦の一光景	細田源吉	84-85	1.4				
29			欠食児童	伊藤永之介	85-86	1.1		○		1.1
30			飢餓時代	高橋辰二	86-87	1.5				
31			空つぽの胃の腑	田中忠一郎	88-89	1.3				
32			『一太郎ヤーイ』鉄砲あげろ	山本和子	89-90	1.5				
33			『涙』が要求するものは何だ？	鶴田知也	90-91	1.5				
34			人を××た失業者	岩藤雪夫	91-94	1.6				
35		ガット欄		(H生)	94-95	2				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
36		労芸、春季総会開かる！	宣言　一九三一年秋季大会迄に於ける聯盟活動方針		96-97	2				
37		闘争レポート	全食料産業のゼネ・ストへ――東京製パンストライキ――		98-101	1.3				
38			工場閉鎖を蹴飛ばせ――浅野大理石工場の暴挙――	関東合同労働組合、浅野大理石争議団	101-102	0.3				
39			相沢ヤスリ工場争議	関東金属労働産業組合北部支部相沢争議団	102-104	0.3				
40			同志山田孝野次郎君の霊を弔へ	全国水平社本部	104-105	0.3				
41			鯛生金山争議		105	0.2				
42			全北海道を沸騰せしめた『鰊漁業合同計画』解剖	糸××三郎	98-104	3.8				
43			女工達の村の現状	木山鉄二（ママ）	104-106	2.2				
44			朝鮮大農場の内情暴露！	吉×忠平	107-108	1.9				
45			大分第二次の大争議	（別府読書会）川上政三	108-109	1.1				
46		闘争レポート（ママ）・生活記録・メーデー情報続々			109	0.1	○		0.1	
47		農民戦線の統一へ――全国農民組合全国大会の内部対立真相		全国農民組合新潟県聯合会常任執行委員会	110-112	3				
48		読書会報告	新潟読書会準備会報告	×原×夫	113	0.7				
49			川崎読書会報告	日××三	113-114	0.6				
50			満州の植民地にも文戦の旗は輝く	×××××	114-115	1				
51			樺太××読書会報告	原×造	115	0.3				
52			愛知県××読書会結成報告	S・N・生	115	0.3				
53			小樽読書会より	（書記）×宮×三	115-116	0.3				
54		獄中から		今野賢三	116	0.6		○		0.6
55		大衆通信		福岡県八幡氏から（×木×雄）　山口県から（野田×二）　岡山市から（×山×保）　南米に闘ふ同志達（在ペルー・本島作兵衛）　ブリンスと札ビラ（在ペルー・鮫×一郎）　大分市から（森××英）　十勝から（×部××）	117-119	3				
56		文戦発行部数三万突破へ		文芸戦線社　労農芸術家聯盟	120-121	1.6	○		1.6	
57		『文戦』闘争基金応募者氏名			120-121	0.4				
58		（*小説）	葬式デモ	伊藤永之介	122-131	10		○		10
59		(*戯曲)	サラリーマン　一幕	工藤恒	132-144	12.7				
60		投稿者諸君へ！			144	0.3	○		0.3	
61		(*小説)	倉庫	金子洋文	145-149	4.5	○		4.5	
62		日本人の根性への宣言		小牧近江	149	0.5		○		0.6
63		(*小説)	谷底のメーデー	マーテ・ザルカ（長野兼一郎訳）	150-153	3.5				
64		(*小説)	無数の死がある	鈴木清次郎	154-161	7.5				
65		サヴエート文化研究所の結成		サビエート文化研究所	161	0.5				
66		(*小説)	被害地域（二）	里村欣三	162-174	13				
67		編輯ノート		編輯部	175	1	○		1	
		カット		白銀功						
計					67点	166.8	9	5	18.3	16.8
	1931年6号									
	(第8巻第6号)	表紙		白銀功						
1	**6月1日発行**	グラフ	労働者農民は実践する　戦禍・罷業・動乱　彼等の弾圧・我等の闘争		7-10	4		○		4
2		巻頭言	新マルコ・ポロ物語	前田河	11	1				
3		リベツト		岩藤雪夫	12-51	40				
4		部落		田中忠一郎	52-87	36				
5		国際戦線欄		文戦調査部編	88-96	9				
6		文芸政策の若干の問題（二）		ペ・ケルジェンツェフ（尾瀬敬止訳）	97-101	4.5				
7		○○主義ルンペン		（向島読書会）KW生	101	0.5				
8		文芸戦線		青木壮一郎　山本和子　岩淵威夫	102-103	2				
9		一万五千人の大デモンストレーション！――東京に於ける第十二回メーデー記――	常に××の飜る日を	井上健次	104-105	1.7				
10			メーデー待合所	伊藤永之介	105-107	1.8		○		1.8
11			メーデーに参加する	石井ゆき	107-108	1.5				
12			メーデーの戦列から	棚橋軌一	109-111	2.1				
13			出発前の一景	中井正晃	111-112	1				
14		何処へ行く！？		生×嘉郎	112	0.5				
15		起重機と軍艦――横浜から横須賀へ		伊藤永之介	113-129	17		○		17
16		全国に沸騰したメーデー・デモの報告	横浜、大阪、神戸、長野		130	0.8				
17			秋田のメーデー	（秋田）港生	130-132	1.3		○		1.3
18			上越最初のメーデー	（高田）滝本生	132-133	0.9				
19			山梨のメーデー	（山梨）斎藤快哉	133-135	0.9				
20			名古屋のメーデー	（名古屋）M・T生	135-136	0.6				
21			長岡のメーデー	（長岡）木田鉄二	136	0.9				
22			新潟のメーデー	（新潟××読書会）×波和×	137	0.3				
23		漫画物語	米作・工吉物語	白銀功	132-136	1.6				
24		単一無産政党論の徹底化へ！		（小樽）山×梭×	137	0.3				
25		銃工場		高橋辰二	138-140	1.8				
26		労農詩集『赤い旗』から	労働者と農民	失名氏（尾瀬生訳）	141-142	0.6				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
27			工業化の為に	パルラジエフ	142(*112)	1.2				
28		ガツト――（ブル社会のはらわた）			138-143	1.7				
29		われわれの作家の自己訓練のために――その一つのネヂとしての文化的遺産の問題――		青野季吉	144-152	9				
30		源吉・勗・民樹の茶番的政治論		北村大助	153-155	3				
31		『文戦』作品批判		批評委員会(*金子・伊藤)	156-158	3	○		3	
32		世界ブル政局の動き		文戦調査部（責任執筆者檜六郎）	160-164	5		○		5
33		除名の経過と彼等		書記局(* 書記長は金子)	165-168	4	○		4	
34		声明〔細田、間宮ら１１名除名〕		労農芸術家聯盟	165-168	3	○		3	
35		ハリコフ大会日本委員会への抗議		労農芸術家聯盟　「文戦」同人一同	169-171	3	○		3	
36		編輯ノート		文戦編輯局	172	1	○		1	
37		文戦発行部数三万突破へ！！			後付	0.8	○		0.8	
38		闘争基金応募者氏名			同	0.2	○		0.2	
		挿絵・カット		菅野好馬　福田新生　白銀功						
計					38点	163.5	7	5	15	29.1
	1931年7月号									
	(第8巻第7号)	表紙								
1	**7月1日発行**	グラフ	海外の同志は如何に戦つたか？九州炭坑夫はなぜ敗れたか		5-9	4				
2		巻頭言	国際的新検閲法のフアース	前田河広一郎	10	1				
3		合同政党の任務・方向の展望		鈴木茂三郎	11-20	10				
4		国際戦線欄		檜六郎	21-26	6		○		6
5		PROTEST		RONO GEIJITSUKA RENMEI THE BUNGEI SENSEN SHA	折込	2				
6		国際文芸戦線			27-30	4				
7		漫画	レールを間違へた列車	白銀功	31	1				
8		詩	馘首になつた同志へ	田中逸雄	32-34	2.6				
9			鴨緑江	下遠野赤心	34-36	2.4				
10			上陸禁止	高橋辰二	37-39	3				
11		闘争レポート	三千五百尺の高原に血の雨降らす鯛生金山ストライキに参加して	北村一夫	40-43	2.4				
12		獄中通信	秋田の監獄から	今野賢三　近江谷友次　泉甚次郎　木村利三	40-43	1.2		○		1.2
13		文戦発行部数三万突破！		文芸戦線社　労農芸術家聯盟	44-45	1.6	○		1.6	
14		『戦線』(ママ)闘争基金応募者氏名			44-45	0.4				
15		ニユー・ヨークの『赤い広場』		（在米聯盟員）石垣綾子	46-48	3				
16		ひとこと		青野生	49	1				
17		世界経済現段階速報――一九三一年第一四半期（一月十六日から四月二十日まで）に於ける経済及経済政策――		ヴアルガ編（檜六郎譯）	50-60	11		○		11
18		通信		〔無題〕（山梨県・保延雪江）　大連の読書会より（××親×）　別府読書会（×藤×人）　田植が来たぞ？（或る鮮農の悲話）（朝鮮・×田生）　読書会報告（×慎×）　我々の文戦だ！（堀××）　奔走の中から（×田剛×）　一人の仲間を得た！川柳闘争（岡山県××市・岡呑狂）	61-63	3				
19		文戦踏査記事	養蚕地帯を行く	田中忠一郎	64-73	10				
20		文芸戦線		Y・Y生　Y生	74-75	1.5				
21		平林初之輔君の死		青野季吉	74-75	0.3				
22		戦線統一運動はいかなる芸術を要求するか？		青木壮一郎	76-85	10				
23		六月の作品を批判する		評論委員会(伊藤出席)	86	3		○		3
24		リベツト〔二〕(*小説)		岩藤雪夫	89-105	17				
25		投稿者諸君へ		労農芸術家聯盟	106	1	○		1	
26		海外通信	巴里だより	（在パリー）聯盟員Y生	107	1				
27		巡洋艦		井上健次	108-163	56				
28		文戦劇場夏期東北巡回公演プログラム			163	0.3	○		0.3	
29		三河島「同志劇場」の旗上げ！			163	0.2	○		0.2	
30		編輯ノート		長野	164	1	○		1	
		カット		白銀功						
計					30点	160.9	5	4	4.1	21.2
	1931年8月号									
	(第8巻第8号)	表紙								
1	**8月1日発行**	グラフ	反動支配に抗して日常闘を×発せよ　同志劇場文戦劇場共同公演		4-6	3	○		3	
2		巻頭言	左翼線	青野季吉	7	1				
3		国際戦線			8-22	14.6				
4		上越農民学校生る		滝本徳治	22	0.4				
5		日本労働クラブの成立		本田重美	24-31	8				
6		詩欄	せち辛い人生	高橋辰二	32-35	2				
7			幼年工	下遠野赤心	35-39	2.5				
8		スケッチ踏査		福田新生　城木要	32-39	4				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
9		大衆通信		向島読書会結成報告（書記・×田生）　北九州から（××勇）　新読書会から（山×政×）　美作の山奥から（剣××）　文戦を撰んだ！（長野県諏訪郡・吉××子）　ポスターを送れ！（少××数策）　朝鮮西部より（福井×生）　一読者より（青森県・金子××）　街頭宣伝のために！（金沢××××研究所）　読書会（山梨県・××那生）　西×新読書会より	40-51	4				
10		随筆	首きり医者	岩藤雪夫	40-42	1.7				
11			旦男爵の夜	檜六郎	42-46	2.5		○		2.5
12			貼り紙	野木敏彦	46-51	4				
13		特別原稿募集！			51	0.3	○		0.3	
14		小作争議の話１――ビラ・チラシに附随した		石山健二	52-58	7		○		7
15		労農大衆党の成立と吾等の任務		水木棟平	59-62	3				
16		文戦劇場報告	労働者劇団の生誕について	金子洋文	63	1	○		1	
17			同志劇場との共同公演	泉嘉夫	64	1	○		1	
18			ローヤルセルロイド争議応援報告	同志劇場	65	1	○		1	
19		第一回労農夏期講習会聴講生募集！		労農社	66-67	2				
20		レポ	三党合同大会報告――社民党及び労農党の一部を残して――	井上健次	68-69	1.4				
21			日本労働倶楽部排撃に関する声明	全国労働組合同盟東京地方聯合会所属八組合	69-71	2				
22			江刺耕整反対運動	岩手県江刺郡羽田村反対同盟事務所	71	0.5				
23			住友製鋼ストライキ		71-72	1				
24		〔原稿募集〕			72	0.3	○		0.3	
25		文戦発行部数三万突破へ！！闘争基金応募者氏名			73	1	○		1	
26		文芸政策の若干の問題（三）		ペ・ケルジエンツエフ（尾瀬敬止訳）	74-77	2.8				
27		〔文戦の作品に対する批判求む〕		批評委員会	77	0.2	○		0.2	
28		批評委員会の報告		(伊藤出席)	78-80	3		○		3
29		特別原稿を募集する！		文戦編輯スタツフ	81	1	○		1	
30		基礎工事場(*小説)		棚橋軌一	82-93	12				
31		母(*小説)		等々力徳重	94-110	17				
32		サウエート文化研究所の陣容		サウエート文化研究所代表尾瀬敬止	110	0.5				
33		裁断機(*小説)		岩田久男	111-122	11.7				
34		お詫び（*ほかの作品と組み方が異なると作者読者にわびる）		編輯者	111	0.3	○		0.3	
		編輯ノート		鶴田	123	1	○		1	
計					34点	118.7	11	3	10.1	12.5
	1931年9月号									
	(第8巻第9号)	表紙								
1	**9月1日発行**	グラフ	帝国主義戦争迫る！社会主義建設を守れ！北フランス紡績工の苦闘すでに十週間！		4-6	3				
2		巻頭言	原稿『ウルトラ行進曲』	前田河広一郎	7	1				
3		サヴエート同盟における集団化の意義		マキシム・ゴルキー（檜訳）	8-10	3		○		3
4		アメリカ炭坑夫罷業、全国炭坑夫の共同戦線会議へ！		長野兼一郎	11-15	4.7				
5		同志バルビユスより		アンリー・バルビユース	15	0.2				
6		国際戦線			16-17	2				
7		詩集	山越え	石山健二	18-19	2				
8			街	下遠野赤心	20-22	2.5				
9			淋しい横浜港	高橋辰二	22-23	1.5				
10		当面せる二つの闘争		水木棟平	24-29	5.5				
11		『文戦』発行部数三万突破へ！文戦闘争基金をおくれ！！			29	0.5	○		0.5	
12		文戦講座	社会民主々義について	山岡良一	30-33	4				
13		小作争議の話（２）――ビラ・チラシに附随した		石山健二	36-41	5.5		○		5.5
14		稲村隆一、稲村順三共著『日本に於ける農業恐慌』		阿部生	41	0.5				
15		レポ	三井クロードの同志は起ち上る――打倒三井財閥――	下関市彦島町クロード争議団本部　下関合同労働組合本部	42-43	1.4				
16			ダラ幹久保時造を葬れ	×谷×	43-44	1.7				
17			映画従業員遂に起つ	関東映画従業員組合	45	0.6				
18			無産婦人同盟を攪乱する者！	大埜こうめ	45-46	1.4				
19		プロレタリア画集	グロツパ　ドーミエ　クールベー　ゴツホ　グロツス　エリス	美術部編	48-55	8				
20		職場から叫ぶ！	海上・右翼組合と海上労働者の現状	田中逸雄	56-60	2.4				
21			製紙・赤い糸枠	等々力徳重	60-62	1.8				
22			炭坑・崎戸から	田中鋭鋒	63-65	2				
23			店員・徒弟制度の崩壊	×川×郎	65	1.9				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
24		大衆通信		八幡製鉄の同志四千人の首が飛ぶぞ（八幡市・××××）　馬一頭十五円だ（北海道・木××夫）　吾々は闘うぞ！（徳島・新読者）　所謂『傾向映画』を看視せよ（百々猛男）　北九州の同志から（岩×生）　文戦旧号を送れ（福岡県・山××市）　ダラ幹のデマに乗るな（組合同盟・×生）　T・U読書会第一回研究会報告	56-64	2.7				
25		特別原稿募集			68	0.1	○		0.1	
26		第一回労農政治学校開催予告！！		労農政治学校	69	1				
27		新アヂ文学論以後		青野季吉	70-73	4				
28		文芸政策の若干の問題（四）		ペ・ケルジエンツエフ（尾瀬敬止訳）	74-77	3.5				
29		同志劇場第三回公演報告			77	0.5	○		0.5	
30		八月のプロレタリヤ作品批判		批評委員会(伊藤出席)	78	2		○		2
31				批評委員会	78	0.1				
32		大衆から(*批評)		（福島県）吉田頼×	78-79	0.6				
33		飛行機の乱舞		里村欣三	81-82	1.2				
34		労農夏期講習会日記		石井安一	82-84	2.3				
35		出獄して――驚くべき抽象的起訴事件		今野賢三	84-85	1.3		○		1.3
36		『兎と猟犬の話』に似た話		山本和子	85-86	1.2				
37		長編小説	朝鮮１	前田河広一郎	87-103	17				
38		(*小説)霜		田中忠一郎	104-108	5				
39		(*小説)幸福――或ひは地獄		鶴田知也	109-113	4.7				
40		大山岩雄訳レーニン著『ロシアに於ける資本主義の発達』		阿部生	113	0.3				
41		(*小説)脱走者		中井正晃	114-116	3				
42		(*小説)報告演説会		伊藤永之介	117-129	12.7		○		12.7
43		移転！		労農芸術家聯盟　文芸戦線社	129	0.3	○		0.3	
44		編輯ノート		青木	130	1	○		1	
計					44点	121.5	5	5	2.4	24.5
	1931年10月号	表紙	(*発禁号)	白銀功						
1	**(第8巻第10号)**	グラフ	シヤムの『地獄』×されるのは誰だ！！		4-6	3				
2	**10月1日発行**	巻頭言	プロレタリア文学十年	金子洋文	7	1	○		1	
3		国際××文学者同盟の回答に対して		労農芸術家聯盟　『文戦』	8-9	2	○		2	
4		日本××文学と国際××文学者同盟（『ニューマツセス』八月号掲載全文）		国際××文学者同盟書記局（IURW）ベラ・イレス（H・M訳）	10-11	2				
5		国際戦線――国際××デモは闘はれた		文戦調査部	12-19	7.7				
6		ロシヤ革命記念臨時号発行			19	0.3	○		0.3	
7		創作特輯	(*小説)組織だより	岩藤雪夫	20-34	14.7				
8			(*小説)血をつぐ者	田中忠一郎	35-41	7				
9			(*小説)密閉	中井正晃	42-53	9.5				
10			(*小説)報復者	里村欣三	54-67	13.7				
11			(*小説)信号兵	井上健次	68-79	11.5				
12			(*小説)部落の筋金	等々力徳重	80-90	11				
13			(*小説)闘ひの現実	今野賢三	91-102	12		○		1.2
14			長編小説　朝鮮（２）	前田河広一郎	103-120	17.6				
15		僅少な闘争資金を送る		（××鉄山）堀×××助	34	0.3				
16		新潟読者会から			53	0.5				
17		キユーバの暴×			67	0.3				
18		文戦発行部数三万突破へ！！闘争基金応募者氏名			79	.0.5	○		0.5	
19		読め！！！労農大衆新聞		全国労農大衆新聞社	120	0.4	○		0.4	
20		十年――忍苦苦闘の	蒔かれてから実るまで	山川均	121-122	1				
21			十年	檜六郎	122124	1.5		○		1.5
22			十年を顧みて	今野賢三	124-126	1	○		1	
23			子供と十年	前田河広一郎	126-127	1				
24		ブツク・レビユ	『無産政党の話』（山川均著）	青野季吉	121-122	0.5				
25			『マルクス主義美学』メーリング・ウイツトフオーゲル著	青野季吉	122-123	0.4				
26			魯迅著、松浦珪三訳『阿Ｑ正伝』	棚橋軌一	124-125	0.5				
27		山本印刷争議		和田生	125-127	0.8				
28		生きた通信を送れ！！		編輯スタツフ	127	0.1	○		0.1	
29		帝国××××絶対反対だ！		労農芸術家聯盟　『文戦』	128-129	2				
30		満蒙・軍部・ブルジョアジー		塩川二郎	130-133	4				
31		(*詩)蘭貢河を下りつゝ		田中逸雄	134-135	1.6				
32		(*詩)李少年		小宮山守	135-138	3				
33		(*詩)農村		高橋辰二	138-140	2.5				
34		文戦講座	極左主義とは何か？	山岡良一	141-144	3.6				
35		「帰農者の経験」を送れ！		編輯スタツフ	144	0.3	○		0.3	
36		美術の唯物弁証主義に就いて		福田新生	145-148	4				
37		九月の作品批判（批評委員会）		青野季吉	149-152	2.4		○		2.4
38		〔九月の作品〕大衆批判(*伊藤永之介)		小樽読書会	149-152	1.2		○		1.2

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
39		ピオニールのページ		えらい小作人（×野×夫）　にくい地主（高等一・×藤憲×）　ピオニール（尋三・高×忠夫）　我らの生活（尋五・×形××）	153	1				
40		労農政治学校生徒募集！		労農政治学校	154-55	2				
41		大衆通信		山梨読者会より（×藤××）　小樽読者会報告（××秀三）　佐世保読者会より（×××）　注文する（静岡・渡××作）　ポスターを送れ（福岡・×松×夫）　デモをやつた（山梨・抽那生）　ウルトラと戦へ（山梨・×延×江）	156-163	2.1				
42		ストライキの経験　大之浦炭坑のストライキ		（福岡）藤原勇	156-163	3.6				
43		街上スケツチ（１）、（２）、（３）		白銀功	157, 159, 161	1.2				
44		小作争議の話（３）――ビラ・チラシに附随した		石山健二	164-167	3.5		○		3.5
45		インドのゼネ・スト			167	0.5				
46		レポ	右翼組合と海上労働者――最低賃銀復旧問題について――（二）	田中逸雄	(168)-172	4				
47			全農新潟第四回大会報告	木田鉄二	172-173	1.5				
48		平和なるインドの七月！			173	0.3				
49		編輯ノート		編集スタッフ-伊藤	174	1	○		1	
		挿絵・カット		福田新生　白銀功						
計					49点	166.6	9	5	6.6	9.8
	1931年11月号外	11月革命記念　号外　(*発禁となる)(*現物なしのため復刻版には無し)								
	1931年11・12月合併号									
	(第8巻第11号)	表紙		白銀功						
1	**11月16日発行**	グラフ	飢餓と洪水に追はれて　資本の断末魔的攻勢に抗して		4-5	2				
2		漫画	農民は自分の作つた米で押し潰されやうとして居る	白銀功	6	2				
3		秋季総会の新意義		金子洋文	7	1	○		1	
4		国際戦線		文戦調査部編	8-14	6.7				
5		前号発禁！！			14	0.3	○		0.3	
6		(*小説)遭難船の同志		広野八郎	15-35	21				
7		(*小説)夜襲		伊藤永之介	36-40	4		○		4
8		「文戦」新年号予告			41	1	○		1	
9		(*小説)突破（デモ戦術の挿話）		ルドルフ、ブラウネ（浜崎秀司訳）	42-45	2.7				
10		投稿者諸君		文学部	45	0.3	○		0.3	
11		長編小説	朝鮮（３）	前田河広一郎	46-70	24.7				
12		「文戦」を通じて労働者農民の階級的情熱を全国にバラ撒け！		編輯部	70	0.3	○		0.3	
13		暗黒街スケツチ		白銀功	71-73	2.5				
14		「文戦」三万突破へ　文戦闘争基金を送れ！！			73	0.5	○		0.5	
15		一九三二年春季総会迄に於ける聯盟活動方針		労農芸術家聯盟秋季総会	74-75	2				
16		帰農者の手記	松太の日記	保延雪江	76-79	3.4				
17			鉄道廃疾者	レールの錆生	79-80	1.5				
18			二等×	浅草伸	80-82	1.2				
19			帰休除隊	荻原忠重	82-84	2				
20			村の居候	野口輝次	84-85	1.3				
21		階級的「医師」を求む		全国労農大衆党新潟県聯合会	85	0.5				
22		小作争議の話（３）――ビラ・チラシに附随した		石山健二	86-91	5.9		○		5.9
23		読者網の拡大へ！読書会の状勢をどんどん送れ！		組織宣伝部	91	0.1	○		0.1	
24		文芸時評	農民作家の『用意』についての走り書	檜六郎	92-94	3		○		3
25			『朗読小説』に就いて	鶴田知也	95	1				
26		美術時評	画壇の反ブルジョア的要素に就いて――二科・帝展批判――	福田新生	96-100	4.8				
27		十一月××記念号外〔発行のお知らせ〕			100	0.2	○		0.2	
28		詩	店	下遠野赤心	102-106	4.7				
29		原稿募集		編輯部	106	0.3	○		0.3	
30		文芸政策の若干の問題（完）		ペ・ケルジエンツエフ（尾瀬敬止訳）	108-111	4				
31		危機を胎む北海の漁業問題		W・H生	112-114	3				
32		戦線から	中田争議団の大衆デモ黎明をついて	中田回漕店争議団本部	115	1				
33		闘争レポート	われわれの学校を守れ！――堺利彦農民労働学校第二教育記報告―	落合久生	116	0.5				
34			裏切り者を粉砕しろ！――建鉄ストライキの報告	泉生	116-117	1				
35			文戦劇場公演を支持しろ！――第三回農村巡回公演――		117	0.7	○		0.7	

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
36		大衆通信		炭坑の穴ぐらから！（福島・××男）　文戦を手から手へ（長野・×××子）　僅かだが資金に！（アキタ・タカノユ・×西×吉）　必ず同志を！（神奈川・××寺光）　ナツプの労働通信者（赤心）　スパイに注意しろ！（朝鮮の一角から・李×××）　今夜はポスター張りだ（第百四十二号読者会）　手を見つめる人達（平塚明）　俺の頼みはかうだ！（綿××好）　読者獲得に突進だ！（東北・大×××介）　ナツプのダラシナサ！（東京・増田××郎）　地区を単位に（北海道・高×政×）	118-121	4				
37		十月の作品批判(*今野賢三)		批評委員会（水木棟平　山本和子　岩藤雪夫　鶴田知也）	122-128	7		○		7
38		「文選一九三一年集」を手にして		中井正晃	129	1				
39		編輯ノート		鶴田　工藤	130	1	○		1	
		カット		福田新生						
計					39点	124.1	11	4	5.7	19.9
	1932年1月号									
	(第9巻第1号)	文戦新年号（印刷できなかった号）								
	休刊									
	1932年2月号									
	(第9巻第2号)	表紙		城木要						
1	**2月1日発行**		海外グラフ（ロシア）	文戦調査部編	4	1				
2		グラフ	カメラのレポート	TU読書会編	5-6	2				
3		巻頭言	一九三二年へ！	青野季吉	7	1				
4		プロレタリア・リアリズムの実践について		青野季吉	8-13	5.1				
5		読者および編輯者へのお詫		山川均	13	0.3				
6		兵糧攻めに抗して		『文戦』経営部	13	0.5	○		0.5	
7		詩	太平洋よ	下遠野赤心	14-17	3.5				
8			一生	石山健二	17-19	2		○		2
9		読め！『全国労農大衆新聞』『プロレタリア日記』			19	0.5				
10		釦を押す話――フランク・ノリスの事柄		前田河広一郎	20-26	7				
11		軍法会議に起つ――女教員エレヌ・ブリオンのこと――	エレヌ・ブリオンの陳述	小牧近江	27-34	7.6		○		7.6
12		東北・北海道飢饉下の農民を救へ！		労農芸術家聯盟　『文芸戦線』社	34	0.3	○		0.3	
13		現中国文壇における左翼文芸運動		出上万一郎	35-39	4.5				
14		闘争基金応募者氏名			39	0.5				
15		随筆　酒と煙草の害について		葉山嘉樹	40-42	3				
16		労農政治学校第二回生徒募集		労農政治学校	43	1				
17		創作	(*小説)濁り酒	伊藤永之介	44-55	12		○		12
18		(*小説)	(*小説)母への文	松村清子	56-63	8				
19		国際聯盟と支那		檜六郎	64-72	9				
20		番地のない田圃		金子洋文	73-78	3.3	○		3.3	
21		右翼組合と海上労働者		田中逸雄	78-80	1.5				
22		第四回プロ展を評す		福田新生	73-78	1.7				
23		支那からの手紙		赤心	78-80	0.8				
24		文戦劇場第三回農村巡回公演報告			81-83	3			3	
25		レポートと通信	同志に伝へる	本郷読書会	84	0.7				
26			豊津中学に於ける退校問題	猪本軍兵　林友信　中原諄	84-85	0.6				
27			新聞に載らない新聞争議――時事争議の兄弟を救へ――	松岡初男	85-86	1				
28			悲惨	ＲＳ生	86-87	0.6				
29			北海道	桐谷比呂志	87-88	0.6				
30			年末闘争を前に	（札幌）信×	88	0.3				
31			異郷から	赤心	88	0.1				
32			プロ劇団を組織して	（和歌山）小宮山生	88	0.2				
33			収穫	湯浅梅二	88	0.2				
34		読者及び読者会へのアツピール		組織宣伝部	89	1				
35		ベルリンのレポタージユ		ポール・ブラント	90-91	2				
36		(*小説)立入禁止		田中忠一郎	92-102	11.7				
37		短編小説募集		文学部	102	0.3	○		0.3	
38		(*小説)脱落		等々力徳重	104-117	14				
39		編輯ノート		編集スタッフ 長野兼一郎	118	1	○		1	
		挿絵・カット		白銀功　福田新生						
計					39点	113.4	5	3	8.4	21.6
	1932年3月号									
	(第9巻第3号)									
	休刊									
	1932年4月号									
	(第9巻第4号)	表紙（*この号は発禁）		福田新生						
1	**4月1日発行**	アツピール(共同戦線党ファッショ化の陰謀に抗して)、(*表紙背面４よりつづく)		労農芸術家聯盟　文戦	1	2	○		2	
2		漫画	国家社会主義は俺たち労働者の敵だ！	城木要	4	1				

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
3			フアツシヨはバーバリズム（野蛮主義）の化身だ	ゲオルグ・グロツス	5	1				
4		われらフアツシズムと如何に闘ふべきか		生田雄三	6-12	6.5				
5		文戦劇場第四回農村巡回公演			12	0.5	○		0.5	
6		ヒトラーとその運動――奴らのドス黒いツラを暴露する！――		長野兼一郎　前田河広一郎	13-19	6				
7		漫画	搾取強化の守護神　忍従政策の珍料理　ヒトラーの政策		13, 15, 17	0.6				
8		各読者会とその責任者は即時誌代を完納せよ！！			19	0.5				
9		社会時評		檜六郎	20-24	4.7		○		4.7
10		戦線語		A・A	24	0.3				
11		美術を労働者・農民の中から！		労農美術研究所	25	1				
12		希望(*詩)		下遠野赤心	26-32	3.2				
13		埠頭に叫ぶ		広野八郎	32-34	1.5				
14		野宿をして生きる時代		高橋辰二	34-35	1				
15		大衆通信		血の努力に対して（日野読書会・右京寅彦）　俺達は闘ってる！（北葛農民組合・増×××）　農村研究会を（茨城・×内×之）おい等の春はいつ来るか（森下進）　呪ひ（斎藤常治）　堕落の骨頂だ（東北の学生・××××）結婚をデモに（福島・×××勇）座談会を開いて（西郊読者会・杉浦）　戦つたぞ！（×××読書会・丸山啓造）　しつかりやれ（北海道・松田正二）　百姓より（群馬・RS生）	26-33	3.6				
16		戦線語		きくち得	32,35	0.5				
17		鬼門について		葉山嘉樹	36-37	2				
18		凶作地スケツチ踏査		福田新生	38-44	7				
19		私達を助けてくれ！――		（岩手）飢えた一農民	45	0.5				
20		青森でもこうだ！――		牧村信三	45-46	0.9				
21		自廃について		松村清子	46-47	1.6				
22		中国左翼通信		尾上××郎	48-51	2.8				
23		上海だより		MO生	48-51	1				
24		レポートを送れ！！！			51	0.1	○		0.1	
25		(*小説)失業救済事業		浜崎秀司	52-70	19				
26		海外短編集・１	ヘルマン・シユルトは考へることを知つた	フランツ・シユトライト（長野兼一郎訳）	71-74	3.4				
27		『岩藤雪夫新選集』を読む		田中忠一郎	74	0.6				
28		全農第五回大会傍聴記		今野賢三	75	1		○		1
29		文芸時評（すこし露骨に）		前田河広一郎	76-85	9.2				
30		大衆の苦悩に答へろ		岩藤雪夫	85-88	2.5				
31		大衆批判(*伊藤永之介濁り酒)		T・U読書会	86	1		○		1
32		西原雑記		青野季吉	89-94	6				
33		全国通信従業員諸君に告ぐ		（東京××郵便局）MF生	95-96	1.7				
34		赤いゴム風船		保延雪江	96-97	0.8				
35		取継販売要求週間を闘ひ抜いたぞ		T・U読書会	97	0.6				
36		(*小説)第一歩		岩藤雪夫	98-110	13				
37		(*小説)立入禁止（２）		田中忠一郎	111-119	9.5				
38		戦線語		OS　AA	119	0.5				
39		「文戦」全読者大衆に告ぐ！闘争基金応募者氏名			120	1			1	
40		アツピール！！〔１ページへつづく〕			表4				3.6	6.7
		挿絵・カット		白銀功　福田新生　仰木磯美						
計					40点	119.6	3	3	3.6	6.7
	1932年5月号									
	(第9巻第5号)	表紙		白銀功						
1	**5月1日発行**	スローガン			表2					
2		「文戦」全読者大衆に告ぐ！		文戦経営部	1	1	○		1	
3		三二年のメーデーの意義を貫徹しろ！		青野季吉	4-5	2				
4		メー・デー号特輯創作四篇	喜劇　落選二人代議士　一幕	金子洋文	6-22	16	○		16	
5		(*小説)	十一人目の兄	畑辰太	23-37	15				
6		(*小説)	地主寺と万吉	棚橋軌一	38-48	11				
7		(*小説)	長篇　立入禁止（３）	田中忠一郎	49-54	6				
8		社会時評		檜六郎	55	2.9		○		2.9
9		メーデーに参加せよ！			57	0.1	○		0.1	
10		独立美術展を批評する――労農美術研究者第三回研究会にて		出席者＝福田　白銀　村太　今井荒木	58-60	2.3				
11		美術を労働者・農民の中から！		労農美術研究所	60	0.7				
12		原稿を募集する！		文芸戦線社	61	1	○		1	
13		(*詩)不滅の火柱		広野八郎	62-63	1.7				
14		(*詩)産業予備軍		高橋辰二	63-65	2				
15		戦争について		レーニン	65	0.4				
16		童謡	レポーター　僕等も続く　子供はうたふ　杏の木	由木土也	66-71	2.4				
17		童謡を募集する。		文芸戦線社文学部	71	0.1	○		0.1	

No.(点)	巻号	題	副題	著者	頁	誌面量(頁)	金子(点)	秋田関連(点)	金子(頁)	秋田関連(頁)
18		大衆通信		文戦の頑張り（福岡県××町・鈴木）　飛弾(ママ)の高山から（滝沢金孝）　発禁何ものぞ！（北海道・×××S生）　大胆なれ！（東京・×原×太郎）　驚いた同志（東京・町田×次）	66-71	1.8				
19		随筆	失業者の手記	高橋辰二	72-73	1.6				
20			負けて勝つた岐阜の公演	金子洋文	73-74	0.7	○		0.7	
21			留置場と赤ン坊	中井正晃	74-75	1.2				
22			先生と物価	原木雄一郎	75	0.6				
23		映画	チャツプリンの『街の灯』――彼の内面的闘争――	ダーヴ・ベンネット（檜生訳）	76-77	1.2		○		1.2
24			反戦トーキー『私の殺した男』	檜六郎	78-79	1.2		○		1.2
25			『熊の出る開墾地』	T生	80-81	1				
26		戦争と平和　自己批判		レーニン	81	0.2				
27		資料	国家主義団体一覧	調査部	76-81	1.8				
28		凶作地救済はこれからだ！――ブルジョア救済を暴露する――		泉嘉夫	82-84	3				
29		文戦劇場第四回農村巡回公演報告		浜崎	85-88	3.5	○		3.5	
30		文戦劇場の巡廻公演と申込みに就いて		文戦演劇部	88	0.5	○		0.5	
31		メー・デー闘争四十年		長野兼一郎訳編	89-96	7.7				
32		スローガン			96	0.3				
33		漫画	メーデーだ！	白銀功	97-99	3				
34		編輯ノート		鶴田生	100	0.7	○		0.7	
35		本部移転		文芸戦線社	100	0.2	○		0.2	
		挿絵・カット		福田新生　白銀功						
計					35点	94.8	10	3	23.8	5.3
	1932年6月号									
	(第9巻第6号)									
	休刊									
	1932年7月号									
	(第9巻第7号)	表紙		福田新生						
1	**7月1日発行**	文戦二万の読者諸君！！新雑誌レフト（左翼）に就け！！		左翼芸術家聯盟　レフト社	表2	2				
2		声明		文戦　労農芸術家聯盟	4-5	2	○		2	
3		文戦の旗よ！左様なら		金子洋文	6	1	○		1	
4		建設的躍進へ！		岩藤雪夫	7	1				
5		文化戦線の全線的統一へ！――労農文化聯盟の結成に際して―		鶴田知也	8-9	1.7				
6		労農文化聯盟結成大会と「労農文化の夕」に来れ！		労農文化聯盟	9	0.4				
7		漫画	フアツシヨを打ち破れ	白銀功	10-11	2				
8		(*小説)雨の話――或る調書の一節		前田河広一郎	12-13	2				
9		(*小説)或る農夫の話		鶴田知也	14-18	5				
10		階級的合同カムパを捲き起せ＝対合同闘争の第二期戦に当面して＝		生田雄三	19-22	3.5				
11		同志加藤龍郎君を悼む		伊藤永之介	22	0.5		○		0.5
12		研究会試作『帰つてくれ』		里村欣三	23-26	3.3				
13		戦線語			26	0.6				
14		社会時評		檜六郎	27	2.8		○		2.8
15		戦線語		ABC生	29	0.2				
16		浮浪児と不良児の話		等々力徳重	30-33	2.6				
17		「人生案内」は呼びかける		金子洋文	31,33	1.3	○		1.3	
18		(*小説)映画街裏にて		鈴木清次郎	34-36	3				
19		(*小説)留蔵父さん		今野賢三	37-40	3.5		○		3.5
20		文戦劇場第五回巡回大公演！		文戦劇団部	40	0.5	○		0.5	
21		レポーター（童謡）		由木土也詩　桐野一郎曲	41	0.8				
22		「唱える詩」を送れ！			41	0.2	○		0.2	
23		信念をいかせ		下遠野赤心	42-44	1.6				
24		黒い土壌は俺達の母胎だ		平岡亘	44-45	1				
25		大衆通信		愈いよ来たぞ！（四国・及川△次）（高知・荻野）（静岡・幸原生）（大阪・山口生）（秋田・宮本生）	42-45	1.2				
26		玩具になつた『農村救済』運動		檜六郎	46-48	1.8		○		1.8
27		溜息をついてゐる時ではない		越後谷隆治	46-48	1.8		○		1.8
28		農民文学のために		伊藤永之介	49-52	3		○		3
29		(*小説)立入禁止（４）		田中忠一郎	53-63	11				
30		編輯ノート		編集者-伊藤永之介	64	0.5	○		0.5	
31		投稿者諸君に注文す		文学部	64	0.3	○		0.3	
32		「左翼芸術雑誌レフト」を諸君のレポでうめろ！！		左翼芸術家聯盟　レフト社	表3	1	○		1	
		カット		福田新生						
計					32点	63.1	8	6	6.8	13.4

（表 10）金子洋文上演作品記録

※金子洋文の原作者である演目は赤.、演出した演目は緑、脚色した演目は青とした。演目の色は原作>演出>脚色として着色。

［出典表記］ 博 ； 早稲田大学演劇博物館 所蔵する国内外の演劇・映画に関する資料から金子洋文の氏名が明記されたもの

金 ； 金子洋文資料　　プログラム・パンフレットより。台本は、上演期日がある程度特定できるもの。

現 ； 日本現代演劇史　　大笹良雄著 白水社 明治・大正篇～昭和戦後篇 から金子洋文と関わりがある作品

大 ： 松竹大谷図書館　　松竹所蔵資料から把握できるもの。

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
1	1918	?	日本館		浅草 オペラ	金子洋文台本	若いニナさん	若いニナさん	?		○	現
2	1924	12	浅草松竹座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 麻生豊 脚本: 金子洋文	ノンキナトウサン	ノンキナトウサン	麻生豊		○	現
3	1925	??	凌雲座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 内山惣十郎/小橋梅夜/中村吉藏/小橋梅夜 演出: //金子洋文/	心中未遂/愚痴/終點/湯屋と床屋	終點	中村吉藏	○		博
4	1925	??	凌雲座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 小橋梅夜/鎌田透水/エルトン・トマス/小橋梅夜 演出: //金子洋文/ 脚色: //金子洋文/		バグダッドの盗賊	エルトン・トマス	○	○	博
5	1925	8月	大阪・角座	喜劇	曾我廼家五九郎劇		漫画劇 ノンキナ・トウサン	漫画劇ノンキナ・トウサン	麻生豊		○	現
6	1925	??	凌雲座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 小橋梅夜/小橋梅夜/武者小路実篤/小橋梅夜 演出: //金子洋文/	安香水/凄い酒/ある日の一休/首の洋行	ある日の一休	武者小路実篤	○		博
7	1926	0501～?	大国座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 小橋梅夜/麻生豊/佐々木杢郎/五九郎/小橋梅夜 脚色: /金子洋文///	銀座の買物/漫画劇ノンキナ・トウサン/彼女の父/すゝり泣/置土産	漫画劇ノンキナ・トウサン	麻生豊		○	博
8	1926	0511～?	大国座	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者: 尾崎倉三/麻生豊/尾崎倉三/金子洋文/五九郎	戀愛結婚/ノンキナ・トウサン/結ぶ神の悪戯/靴/三畳と四畳半	ノンキナ・トウサン/靴	○		○	博
9	1926	0601～?	邦楽座	新国劇	新国劇　澤田正二郎一座	第二部「剣」(二幕四場) 作者: 菊池寛/金子洋文/神田伯山 脚色: //瀬戸英一	敵討以上(恩讐の彼方に)/剣/荒神山	剣	○			博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
10	1926	0619～	松竹座(浅草松竹座)	新派劇	井上正夫一座	作者: 久米正雄/金子洋文//藤森成吉	夏の日の戀/息子/舞踊三保の松/磔茂左衛門	息子	○			博
11	1926	??	秋田、土崎、能代	新劇	前衛座キャラバン	作者: 長谷川如是閑/ｱﾌﾟﾄﾝｼﾝｸﾚｱ/今野賢三/金子洋文	ｴﾁﾙ･ｶﾞｿﾘﾝ/二階の男/青山田一家/牝鶏	牝鶏	○			
12	1926	1001～?	浪花座	新国劇	新國劇澤田正二郎一座	作者: 国木田獨歩/金子洋文/神田伯山 脚色: 眞山青果//瀬戸英一	富岡先生/劔/次郎長と石松	劔	○			博
13	1926	1115～1121	帝国ﾎﾃﾙ演芸場	新劇	新劇協会	作者: チェホフ/關口次郎/村山知義/金子洋文 演出: ///岸田國士 訳者: 米川正夫	記念祭/鴉/勇ましき主婦/盗電	盗電	○			博
14	1927	0312～?	公園劇場	新国劇	澤田正二郎一座	作者: エドモン･ロスタン/金子洋文 脚色: 額田六福	白野辨十郎/劔	劔	○			博
15	1927	03?末	朝日講堂	新劇	新劇座･松竹新劇団	作者: 金子洋文/菊池寛 演出: 田中總一郎/	狐/盆栽	狐	○			現
16	1927	05?～?	新国劇巡業	新国劇	新國劇澤田正二郎一座	作者: 金子洋文/菊池寛/菊池寛/行友李風	劔/戀愛病患者/兄の場合/國定忠次	劔	○			博
17	1927	06?～??	帝国ﾎﾃﾙ演芸場	新劇	新劇協会	作者: 正宗白鳥/金子洋文/クウルトリイヌ	人生の幸福/牝鶏/我家の平和	牝鶏	○			金
18	1927	0702～?	新橋演舞場	新国劇	新国劇	作者: 眞山青果/中村吉藏/金子洋文	彰義隊/星亨/髪	髪	○			博
19	1927	0714～?	浅草松竹座	新派劇その他	松竹新劇団	作者: 神田伯山/北村喜八/上遠野京三/金子洋文 演出: /巌谷三一/田中總一郎/鈴木善太郎	次郎長と石松/海の呼聲/母校の前に/牝鶏	牝鶏	○			博
20	1927	08～?	帝国劇場	新国劇	新國劇澤田正二郎一座	作者: 尾崎紅葉/中村吉藏/金子洋文 脚色: 川村花菱//	金色夜叉/星亨/劔	劔	○			博
21	1927	09?～??	名古屋新守座	新劇	新劇協会	作者: 山本有三/クウルトリイヌ/金子洋文	嘉門と七郎右衛門/我家の平和/牝鶏	牝鶏	○			金
22	1927	1001～??	浪花座	新国劇	新國劇	作者: 中村吉藏/金子洋文/エドモン･ロスタン	星亨/髪/劔客商賣	髪	○			博
23	1927	1014～1023	帝國ホテル演藝場	新劇	文芸春秋社経営新劇協會パンフレット	作者: 長谷川如是閑/久米正雄/長與善郎/金子洋文 演出: 畑中蓼坡/池谷信三郎/遠山静雄/金子洋文 装置: 柳瀬正夢/繁岡鑿一/遠山静雄/繁岡鑿一	岸田国士と畑中蓼坡　根管充填/危機の人妻/武蔵とト傳/出帆	出帆	○	○		金
24	1927	1101～1107	八千代座(神戸)	新国劇	新国劇	作者: 中村吉藏/金子洋文/エドモン･ロスタン 脚色: //小林宗吉	星亨/髪/劔客商賣	髪	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
25	1928	0114～0123	帝國ホテル演藝場	新劇	文芸春秋社經營　新劇協會公演	作者: /前田河廣一郎/(ジョンストン・マッカレー?) 演出: 川口松太郎/川口松太郎/金子洋文 脚色: 仲木貞一//金子洋文	文芸春秋社經營　新劇協會公演 マダムX/盗人/地下鉄サム	地下鉄サム	ジョンストン・マッカレー	○	○	金
26	1928	03?～?	帝国劇場	新国劇	新國劇	作者: 杉村楚人冠/金子洋文/中村吉藏 脚色: 川村花菱//	うるさき人々/浪人の群/鬼ヶ島から来た男二世ドン・キホーテ	浪人の群	○			博
27	1928	0401～	公園劇場	新劇・軽演劇・大衆芸能	根岸喜劇団・楽天会・新劇協会	作者: /佐々木邦/夏目漱石/門脇陽一郎 演出: /門脇陽一郎/金子洋文/門脇陽一郎 脚色: 亭々園/門脇陽一郎/金子洋文/	紺屋高尾/次男坊/吾輩は猫である/なんせんす舞臺放送	吾輩は猫である	夏目漱石	○	○	博
28	1928	0424～0429	八千代座(神戸)	新国劇	新国劇澤田正二郎一座	作者: 杉村楚人冠/金子洋文/廣津和郎/長谷川伸 脚色: 川村花菱///	うるさき人々/浪人の群/勝者敗者/掏摸の家	浪人の群	○			博
29	1928	0501～?	浪花座	新国劇	新國劇澤田正二郎一座	作者: 杉村楚人冠/金子洋文/長谷川伸/鐵谷來水 脚色: 川村花菱///	うるさき人々/浪人の群/掏摸の家/金平化生討	浪人の群	○			博
30	1928	0616～?	朝日会館	新劇	新劇協会	作者: /前田河廣一郎/眞山青果 演出: 畑中蓼■/畑中蓼■/鈴木氏亨 脚色: 仲木貞一 「舞台監督」金子洋文	マダムX/盗人/江戸城総攻め	マダムX/盗人/江戸城総攻め		○		博
31	1928	1126～1128	本郷座	新劇	新劇協會	作者: 眞山青果/金子洋文/北村小松 演出: 鈴木氏亨/金子洋文/村山知義	明君行状記/手を/令狐生冥夢録	手を	○	○		博
32	1929	0101～?	山手劇場改築披露	新国劇	新国劇澤田正二郎一座	作者: 行友李風/大佛次郎 脚色: /金子洋文	國定忠治/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎		○	博
33	1929	0201～?	新橋演舞場	新國劇	澤田正二郎一座	作者: 長谷川伸/廣津和郎/大佛次郎 脚色: //金子洋文	沓掛時次郎/勝者敗者/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎		○	博・金
34	1929	0301～?	市村座	新派劇		作者: 松居松翁/金子洋文/泉鏡花/菊池寛 演出: 松居松翁/金子洋文/久保田万太郎/新様式演出 脚色: ///川村花菱 舞台監督: 松居松翁・金子洋文・久保田万太郎	乃木将軍/動物園近く/通夜物語/受難華	動物園近く	○	○		博・金・大
35	1929		小石川小劇場		小石川小劇場初開場	作:「動物園近く」(一幕) 演出「古枯」(四場)	三番叟(そう)/恋女房染分手綱/古枯/驟雨/動物園近く 小石川小劇場初開場	古枯/動物園近く	○	○		金
36	1929	04?～?	浪花座	新国劇	新国劇	作者: 長谷川伸/澤田正二郎/大佛次郎 脚色: //金子洋文	沓掛時次郎/殺陣/赤穂浪士(前篇)	赤穂浪士(前篇)	大仏次郎		○	博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
37	1929	0416～?	浪花座	新国劇	新国劇	作者: 大佛次郎/行友李風/大佛次郎 演出: /土方與志/ 脚色: 金子洋文//金子洋文	赤穂浪士(中篇)/澤田正二郎の死/赤穂浪士(後篇)	赤穂浪士(中篇)/赤穂浪士(後篇)	大仏次郎		○	博
38	1929	0504～0512	築地小劇場	新劇	新築地	作者: 金子洋文/片岡鐵兵 演出: 土方與志/土方與志 脚色: /高田保	飛ぶ唄/生ける人形	飛ぶ唄	○			博・金・現
39	1929	0515～0517	朝日会館	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/片岡鐵兵 演出: 土方與志/土方與志 脚色: /高田保	飛ぶ唄/生ける人形	飛ぶ唄	○			博
40	1929	0618～0624	帝国ﾎﾃﾙ演芸場	新劇	新劇協会	作者: 前田河廣一郎/葉山嘉樹 演出: 畑中蓼坡/金子洋文 脚色: /金子洋文	クレオパトラ/海に生きる人々	海に生きる人々	葉山嘉樹	○	○	博
41	1929	622	日比谷公園音楽堂		女人藝術創刊一周年記念藝術祭	第1部　神近市子/中本たか子/上田文子/望月百合子/林芙美子/松村喬子/平林たい子 第2部　石井小浪/アルト四家文子・ピアノ井口愛子/新築地劇団　金子洋文原作、土方與志演出	講演「未定」「女流作家の社会的地位」「新劇運動若干」「女人よ何処に行く?」「白帆を呼ぶ」「無産婦人と廃娼」「感想」 第2部　舞踊小曲3、音楽、演劇「牝鶏」	女人藝術創刊一周年記念藝術祭演劇「牝鶏」	○			金・現
42	1929	0704～0705	大阪朝日会館	新劇	新築地劇団	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか？	牝鶏	○			博
43	1929	0705～	常盤座	新劇		作者: 金子洋文/瀬戸英一///岡本綺堂	飛ぶ唄/怪談小車草紙/娘道成寺/瓢箪鯰/雁金文七	飛ぶ唄	○			博
44	1929	0707～0708	京都公会堂	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか？	牝鶏	○			博
45	1929	710	豊橋東雲座	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか？	牝鶏	○			博
46	1929	0711～0712	名古屋御園座	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか？	牝鶏	○			博
47	1929	713	松本建国座	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか？	牝鶏	○			博
48	1929	714	上諏訪都座	新劇	新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志/土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたか	牝鶏	○			博
49	1929	0801～?	浪花座	新派劇・歌舞伎・その他	第一劇場	作者: 金子洋文/谷崎潤一郎/田中總一郎 演出: //田中總一郎	飛ぶ唄/永遠の偶像/夢の浮橋	飛ぶ唄	○			博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
50	1929	0824～?	天王寺公園新音楽堂	新劇	七月座	作者: 金子洋文/マルセル・アシヤール 演出: 豊岡佐一郎	洗濯屋と詩人/ワタクシと遊んでくれませんか	洗濯屋と詩人	○			博
51	1929	0901～?	公園劇場	大衆芸能	河部五郎一座	作者: /金子洋文/行友李風 演出: 急速度レヴュー/金子洋文/河部五郎	旗本五人男/讐敵/國定忠次	旗本五人男	○	○		博
52	1929	0907～?	本郷座	歌舞伎		作者: 金子洋文/岡鬼太郎/眞山青果 演出: 金子洋文//眞山青果	進軍/虎御前/鼠小僧次郎吉	進軍	○	○		博・大
53	1929	0915～?	公園劇場	大衆芸能	河部五郎一座	作者: 畑耕一/行友李風 演出: 福井野紅/金子洋文	直助と伊右衛門/月形半平太	月形半平太	行友李風	○		博・現
54	1929	1001～?	市村座	新国劇		作者: 長谷川伸/中村吉蔵//大佛次郎 脚色: //金子洋文 備考: //西條八十　作詞？/	沓掛時次郎/無籍者/新国劇行進曲/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎		○	博
55	1929	1001～?	公園劇場	大衆芸能	河部五郎一座	作者: 大佛次郎//金子洋文 演出: 金子重香/福井野紅/金子洋文	鞍馬天狗角兵衛獅子/清水次郎長/佐野治郎左衛門	佐野治郎左衛門	○	○		博
56	1929	1001～?	浪花座	新派劇・歌舞伎・その他	第一劇場	作者: 吉田絃二郎/門脇陽一郎/長谷川伸/金子洋文 演出: 田中總一郎///野淵昶	足輕三左衛門の死/心中みづ鏡/馬の背/日清談判	日清談判	○			博・金
57	1929	1017～?	市村座	新国劇		作者: 永田衡吉/長谷川伸/大佛次郎 演出: 永田衡吉//金子洋文 脚色: //金子洋文	大久保利通/舶来巾着切/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎	○	○	博
58	1929	12?～?	新橋演舞場	新國劇	新國劇	作者: 本田一郎/池谷信三郎/竹田敏彦/金子洋文/長谷川伸 脚色: 麻生可澄	説教強盗/ツエツペリン挿話/早慶決勝の日/家賃値下運動/關の彌太ツペ	家賃値下運動	○			博
59	1929	1217～1226	新橋演舞場		更正新國劇公演番組	作者: 本田一郎/池谷信三郎/竹田敏彦/金子洋文/長谷川伸	昭和四年風景(春)説教強盗/(夏)ツエツペリン挿話/(秋)早慶決勝の日/(冬)家賃値下運動/改訂 關の彌太ッペ	家賃値下運動	○			金
60	1930	?～?	松竹巡業部	歌舞伎・新派劇・その他	第一劇場	作者: 金子洋文/長谷川伸/佐藤紅録 演出: 田中總一郎/田中總一郎/田中總一郎 脚色: //田中總一郎	飛ぶ唄/股旅草鞋/麗人	飛ぶ唄	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
61	1930	0101～?	南座		第一劇場	作者: 金子洋文/タケタイヅモ/門脇陽一郎/菊池寛 演出: 田中總一郎/野澤昶/門脇陽一郎/ 脚色: 川村花菱///	飛ぶ唄/マツ/お嬢吉三/不壊の白珠	飛ぶ唄	○			金
62	1930	0101～0119	市村座	新国劇	新国劇	作者: 行友李風/金子洋文/村上浪六 演出: /金子洋文/ 脚色: //真山青果・額田六富	国定忠治/日清談判/原田甲斐	日清談判	○	○		博・金
63	1930	0118～0127	南座(京都)	新派劇・その他	第一劇場	作者: 佐藤紅録/長谷川伸/金子洋文/門脇陽一郎 演出: 田中總一郎/田中總一郎/野淵昶	麗人/中山七里/日清談判/心中みづ鏡	日清談判	○			博・金
64	1930	0201～?	市村座	新国劇	新国劇	作者: 大佛次郎/中村吉蔵/村松梢風 脚色: 金子洋文//豊田豊	赤穂浪士外傳堀田隼人/星亨/綾衣絵巻	赤穂浪士外傳堀田隼人			○	博
65	1930	0715～?	角座	新国劇	新國劇	作者: 金子洋文/竹田俊彦/子母澤寛	劒/父・母・子/新訳天保水滸傳	劒	○			博
66	1930	1001～?	公園劇場	大衆芸能	河部五郎一座	作者: 大佛次郎/眞山青果/大佛次郎 脚色: 岸本雄一郎//金子洋文	ごろつき船/虎/赤穂浪士	赤穂浪士			○	博
67	1930	1026～1028	市村座	歌舞伎	誠座	作者: 水木京太/近松門左衛門/金子洋文//	殉死/女殺油地獄/柳/判官首邪正梶原/かさね	柳	○			博・金
68	1931	0101～??	新宿新歌舞伎座	新派劇	昭和六年　新歌舞伎座初春	作者: 尾崎紅葉/菊池寛/中内蝶二/ゲオルク・カイザー/木村錦花/金子洋文 演出: 瀬戸英一/宇野四郎//園池公功/川尻清潭/金子洋文	伽羅枕/時の氏神/大尉の娘/朝から夜明けまで/花井お梅/大名教育	大名教育	○	○		博・金・大
69	1931	0113～?	新宿新歌舞伎座	新派劇		作者: ゲオルク・カイザー/木村錦花/金子洋文/佐藤紅録?/菊池寛/中内蝶二 演出: 園池公功/川尻清潭/金子洋文//宇野四郎	朝から夜明けまで/花井お梅/大名教育/侠艶録/時の氏神/大尉の娘	大名教育	○	○		博
70	1931	0705～?	新橋演舞場	新国劇	新国劇	作者: 平山蘆江/ベイヤード・ウェイラー/金子洋文 演出: 樋口住一/牧逸馬/金子洋文 脚色: /小林宗吉/	元寇/女優奈々子の審判/忠彌行状記	忠彌行状記	○	○		博
71	1931	0816～?	松竹座(浅草松竹座)	新国劇		作者: 金子洋文/中野實/子母澤寛 演出: /樋口佳一/	新釋丸橋忠彌/三等水兵の日記/紋三郎の秀	新釋丸橋忠彌	○			博
72	1931	1010～?	浅草金龍館	新派劇・新劇	大谷友三郎一座	作者: 佐藤紅録?/小林宗吉/金子洋文 脚色: 音羽六藏//	野に叫ぶもの/女優の裁判/忠彌行状記	忠彌行状記	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
73	1931?	1010	連雀座		勞農演劇同盟　文戰劇団公演	作者：金子洋文、/金子洋文、	勞農演劇同盟　文戰劇団公演入場券 村の戦ひ(一幕)、なぞ/牝鶏(一幕)、紙芝居「太いステッキ」(一幕)	村の戦ひ、牝鶏	○			金
74	1931?	7?17	日暮里 愛隣団		同志劇場第3回 文戰劇場公演	作者：金子洋文/岩藤雪夫 (*人手不足のため金子が舞台に出たとある)	村の闘ひ/賃銀奴隷宣言 金子洋文/岩藤雪夫	村の戦ひ	○	○		金
75	1931	1013～?	公園劇場	喜劇	曾我廼家五九郎劇	作者：和老亭主人/大隈俊雄/尾崎倉三/金子洋文/	一時間の色男/センチメンタル・ワイフ/振られ武士/三畳と四畳半	三畳と四畳半	○			博
76	1931?	1024・25／1102・03	荏原演舞場・蒲田梅宮館・羽田劇場		文戰劇場巡回公演番組	作者：伊藤貞助/金子洋文	売られる田地/蒼ざめた大統領	蒼ざめた大統領	○			金
77	1931	1101～?	東京劇場	歌舞伎・新派劇		作者：直木三十五/木村富子/長谷川伸 脚色：金子洋文//	南國太平記/舞踊劇盲人/勘太郎月の唄	南國太平記	直木三十五		○	博
78	1931?	1122	赤穂常盤座		文戰劇場公演プログラム	細田民樹原作・工藤恒脚色/里見欣三原作/伊藤永之介原作/金子洋文原作	狂人と偽狂人/権十と組合/鉱山の学校/村の戦ひ　　作「村の戦ひ」(一場)	村の戦ひ	○	○		金
79	1932	02??～	松竹座(浅草松	歌舞伎・新派	松竹座(浅草松竹座)	作者：紅葉山人/田邊尚雄/長谷川伸/長谷川伸/金子洋文///（ 作者よみ：こうようさんじん/たなべひさお/はせがわしん/はせがわしん////） 演出：川村花菱//園池金公功/////	金色夜叉/舞踊劇　與那國物語/喜劇第一の春/縄抜け治兵衛白波財布/足軽は強いぞ/新曲　戀巴/満州事変挿話/弥次郎兵衛北八九州膝栗毛	足軽は強いぞ	○			大・博
80	1932	(0530)?～??	昭和座(吉本興業)	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤タイムス　第11号	作者：河竹黙阿弥/金子洋文/鈴木泉三郎/長谷川伸	梅澤タイムス　第11号 天保六歌撰直侍/劔/山芋秘譚/雪の渡り鳥	劔	○			金
81	1932	0531～0602	帝国ﾎﾃﾙ演芸場	新劇	新劇座	作者：谷崎潤一郎/久保田万太郎/金子洋文 演出：里見?/久保田万太郎/金子洋文	愛すればこそ/一周忌/秋田名産佃煮行商	秋田名産佃煮行商	○	○		現
82	1932	0701～?	新橋演舞場	新国劇	新國劇	作者：牧逸馬/金子洋文/中野實 演出：小堀雄/金子洋文/青木齊一郎	呆れたものですわね/浄瑠璃坂の仇討/乾杯！學生諸君	浄瑠璃坂の仇討	○			博
83	1932	0702～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅沢昇戟党	作者：河竹黙阿弥/金子洋文/鈴木泉三郎/長谷川伸	天保六歌撰直侍/劔/山芋秘譚/雪の渡り鳥	劔	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
84	1933	0303～?	東京劇場	歌舞伎・新派劇・その他		作者：眞山青果/金子洋文/大森痴雪/前田河廣一郎/龜屋原徳 舞台監督：川尻清潭/巌谷三一/巌谷三一/園池公功/水谷竹紫	阿國歌舞伎/處女日記/女殺油地獄/盗人/青春の人々	處女日記	○			博・金
85	1933	.030?	（小石川小劇場）		新社会喜劇団	作者：金子洋文	私の青空	1933	○			金
86	1933	0325～?	小石川小劇場	新劇	小石川小劇場　第二回公演	原作：武者小路実篤/伊藤永之介/岸田國士/中野孝次/ 演出：工藤恒/泉喜夫/金子洋文/伊藤晴雨/ 4月2日の第三回予告に「お父さんの唄」「忠臣蔵」あり(二幕)	小石川小劇場第二回公演 みない鳥/鉱山の学校/動員挿話/兜町のルンペン/神霊 矢口渡	動員挿話	岸田國士	○		金
87	1933	0421～?	小石川小劇場		新社會・喜劇團・新流行歌合唱團第四回公演　新流行歌集	作詞：金子洋文「商賣の唄」「こまったもんだよ」	新社會・喜劇團・新流行歌合唱團 第四回公演　新流行歌集 「お父さんの唄」	新流行歌集「お父さんの唄」	○			金
88	1933	0617～0622	松竹劇場		関西新派大合同劇	作：大島多摩雄夫/行友李風/金子洋文/ 作：處女日記」(三場)	関西新派大合同劇 南地の女/国定忠治/処女日記/日高川	処女日記	○			金
89	1933	1020～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤昇戟党	作：上田純也/長谷川伸/長谷川伸/金子洋文	梅澤タイムス　秋の6号 大学の顔役/鯉名の銀平/掏摸の家/首売り山左郎	首売り山左郎	○			金
90	1933	1101～?	大阪歌舞伎座	新派劇	十一月興行各派大合同劇 二部興行	作者：長谷川伸/小ヂューマ/金子洋文/眞山青果/里見?/國木田獨歩 演出：田島淳//水谷竹紫/巌谷三一//水谷竹紫 脚色：/////眞山青果	十一月興行各派大合同劇　二部興行 旅の者心中/椿姫/魚河岸の朝/お夏清十郎/親樹/酒中日記	魚河岸の朝	○			博・金
91	1933	?	早稲田大學大隈大講堂		第一早稲田高等學院學藝大會	作：金子洋文 演出：林俊夫 「息子」(一幕)	第一早稲田高等學院學藝大會フランス語部上演「息子」	息子	○			金
92	1934	0102～?	明治座	新派劇	昭和九年初春興行　明治座番組	作者：松居松翁/佐々木邦/金子洋文/谷崎潤一郎 演出：松居桃太郎/巌谷三一/水谷竹紫/田島淳 脚色：/巌谷三一//田島淳	フランチェスカ/續新家庭双六/魚河岸の朝/お艶殺し	魚河岸の朝	○			博・金・大
93	1934	0107～0113	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤戟党	作：松島誠二郎/原巌/門脇陽一郎/金子洋文/原巌	梅澤タイムス　春の特輯第2号 兄上京/槍は錆びても/春雷/有罪花籤抄/山形屋	有罪花籤抄	○			金
94	1934	0414～?	浅草公園劇場		陽春特別大興行　早川雪洲一座	作：中井櫻渓/金子洋文/中野実/ 脚色：///田口櫻村	二等待合室/剣/新撰妻君読本/天晴れウオング	剣	○			金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
95	1934	0812～?	明治座	新国劇	新國劇	作者: 金子洋文/竹田敏彦/子母澤寛 演出: 金子洋文//	再生の死刑囚/東郷盃/紋三郎の秀	再生の死刑囚	○			博・金
96	1934	0920～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤昇一座　秋第3号	作者: 津村京村/原巌/藤島鶴三郎/金子洋文	ピクニック挿話/片腕伊太郎/雪の夜話/再生の死刑囚	再生の死刑囚	○			金
97	1934	1031～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤昇一座　秋第7号	作: 土師清二/アーミテージ・トレイル「暗黒街の顔役」より額田六福翻案/金子洋文 演出: 濱田秀三郎/額田六福/金子洋文	女禁制/顔役/噫無情	噫無情	○			金
98	1934	1227～1229	帝国ホテル演芸場	新派・その他	第拾壹回新劇座公演	作者: シアアル・ヴィルドラック(シャルル・ヴィルドラック)/菅裸馬/小山内薫 演出: /金子洋文/久保田万太郎 脚色: /金子洋文/	第拾壹回新劇座公演　小山内薫七回忌追悼 商船テナシチー/錦島三太夫/三人と三人	錦島三太夫	菅裸馬	○	○	博・金・劇
99	1935	0101～	大阪歌舞伎座	新派劇		作者: 菊池寛/金子洋文/瀬戸英一/川口松太郎/菊池寛/小出英男/長谷川伸/吉屋信子 演出: 田島淳/////巌谷三一/田島淳/川村花菱 脚色: //田島淳//川村花菱/青果小史//川村花菱	舊戀/母の土産/春色色懺悔/愛憎峠/三家庭の内袋地の家/明路暗路/前科もの二人女/女の友情	母の土産	○			博
100	1935	?～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤昇一座タイムス　新春第3号(昭和10年度)	寿々木米若師口演「佐渡情話」より原巌劇化演出/金子洋文作・演出/長谷川伸作	佐渡情話/必勝足軽剣法/沓掛時次郎新春第3号(昭和10年度)	必勝足軽剣法	○	○		金
101	1935	0219～0227	新宿歌舞伎座	喜劇	昭和十年二月興行　新宿歌舞伎座番組	作者: 尾崎倉三/林十九/朝間幸夫/金子洋文/尾崎倉三	氣まぐれ/助人商売/未亡人の求婚/魚河岸の朝/處女からお嫁になる迄に	魚河岸の朝	○			博・金
102	1935	0222～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤昇一座　新春第7号(昭和10年度)	作: 中野孝治/原巌/金子洋文/神田伯山口演 脚色・演出「噫無情(疾風の丈助)」(四場)	若殿行状記/人間安兵衛/魚河岸の朝/森野石松 梅澤タイムス　新春第7号(昭和10年度)	魚河岸の朝	○			金
103	1935	?～?	不明	大衆芸能・剣劇・その他	梅沢昇一座(梅澤タイムス臨時増刊號)	作: 原巌/原巌/長谷川伸/神田伯龍口演/ビクトルユーゴ—原作金子洋文翻案/長谷川伸/長谷川伸/直木三十五原作/神田伯山 演出: 原巌/原巌//原巌/金子洋文/原巌//原巌/梅澤昇 直八子供旅　脚色・演出「噫無情(疾風の丈助)」(四場)	浪人長屋/闇/沓掛時次郎/兄弟やくざ/噫無情/直八子供旅/夫婦鎹/討たず斬り/森の石松	噫無情	○	○		金
104	1935	0628～0630	日比谷公会堂	その他	日本俳優學校	作者: 濱村米藏/岡本綺堂/金子洋文/渥美清太郎 演出: 加藤長治/渥美清太郎/加藤長治/	黒鯨亭/雨月物語淺茅ケ宿/お父さんの唄/舞踊劇髭矢倉	お父さんの唄	○			博
105	1935	0701～??	東京劇場	歌舞伎	昭和十年七月興行　東京劇場番組	作者: /河竹黙阿弥/金子洋文/岡本綺堂//	一條大藏譚/大杯觴酒戰強者/もぐら/鐵舟と次郎長/雷船頭/六玉川	もぐら	○			博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
106	1935	0707～0730	有楽座	歌舞伎・新劇・女優劇	東寶劇団専属男女優	作者: 河竹黙阿弥/亀屋原徳/中野實/矢田挿雲 演出: /水木久美雄/園池公功/青柳信雄 脚色: ///金子洋文	壽美渡月繪草紙/別れの汐路/貸別荘とお嬢さん/新版太閤記	新版太閤記	矢田挿雲		○	博・金・現
107	1935	0801～?080	新宿第一劇場	新派新劇	新劇座第十二回公演	作者: 谷崎潤一郎/菅裸馬/瀬戸英一 演出: 喜多村緑郎/ 金子洋文/久保田万太郎 脚色: //久保田万太郎	新劇座第十二回公演 問題の春琴抄/錦島三太夫/夜の鳥	錦島三太夫	菅裸馬	○		博・金・現
108	1935	801～?	明治座	新国劇	新國劇八月公演筋書	作者: 大佛次郎/甲賀三郎/長谷川伸 演出監督: 金子洋文/小堀雄/谷屋充 脚色: 大仏次郎・小田博//	新國劇八月公演筋書 霧笛/闇とダイヤモンド/關の彌太ッペ	霧笛	大仏次郎	○		博・金
109	1935	0811～?	昭和座	大衆芸能・剣劇	金井修一座	作者: 島田宏一/金子洋文//神田ろ山 脚色: //小林宗吉/島栄光	激情の嵐/劔/女優奈々子の裁判/次郎長外傳竹川の森太郎	劔	○			博
110	1935	0911～?	昭和座	新国劇	梅澤昇一座　秋の2号(昭和10年度)	作: 豊田豊作/長谷川伸/大島萬世/矢田挿雲 脚色: ///金子洋文	仇討輪廻/夕暮れ富士長脇差試合/やもめ/「太閤記」(三幕六場) 梅澤タイムス　秋の2号(昭和10年度	太閤記	矢田挿雲		○	金
111	1935	092?～?	湊川松竹劇場		新國劇　第一回公演	作者: 大佛次郎/中野實/長谷川伸 演出: 金子洋文/小堀雄/谷屋充 脚色: 小田博	新國劇　秋季公演 霧笛/人生登龍門/關の彌太ッペ	霧笛	大仏次郎	○		金
112	1935	1001～?	新橋演舞場	新派劇・新劇		作者: 北村小松/井上靖/北村小松/竹田敏彦 演出: 北村小松/松居桃多郎/巌谷三一/金子洋文 脚色: 小田博	虹晴/明治の月/嫁選び/女よ男を裁け	女よ男を裁け	武田敏彦	○		博
113	1935	1013～?	中座	新国劇	新國劇	作者: 大佛次郎/中野實/長谷川伸 演出: 金子洋文/小堀雄/谷屋充 脚色: 小田博	霧笛/人生登龍門/關の彌太ッペ	霧笛	大仏次郎	○		博・金
114	1935	1101～1110	御園座		新國劇　秋の公演	作者: 大佛次郎/中野實/長谷川伸 演出: 金子洋文/小堀雄/谷屋充 脚色: 小田博	霧笛/人生登龍門/關の彌太ッペ	霧笛	大仏次郎	○		金
115	1935	1101～1125	有楽座	新劇・新派	芸術座水谷八重子一座	作者: 巌谷三一/室生犀星/佐藤紅録 演出: 水木久美雄/金子洋文/川村花菱 脚色: /金子洋文/川村花菱	昭和十年十一月興行番組　藝術座水谷八重子一座出演 新東京見物/兄いもうと/侠艶録	兄いもうと	室生犀星	○	○	博・金
116	1935	1102～?	明治座	新派		作者: 永田衡吉/金子洋文/菊池寛/川口松太郎 演出: 田島淳//喜多村緑郎/	双思樹/母の土産/蚊帳の屋根/明治一代女	母の土産	○			博・現
117	1935	1110～?	築地小劇場	新劇	日本大学演劇科	作者: グレゴリイ/眞船豊/金子洋文 演出: 長谷川正/中山文一/秋元實	噂のひろまり/水泥棒/飛ぶ唄	飛ぶ唄	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
118	1935	11?～?	横濱寶塚劇場	歌舞伎、新劇、日舞・新舞踊	昭和十年十一月興行番組 東寶劇団出演	作者: 河竹黙阿彌/菊地寛/矢田挿雲 演出: 青柳信雄/園池公功/青柳信雄 脚色: 八住利雄//金子洋文/	脚色「新版太閤記－木下藤吉郎の巻－」(三幕六場) 世話喜劇　人間萬事金世中/現代劇　屋上の狂人/新時代劇　新版　太閤記/所作事　京鹿子娘道成寺	新版太閤記－木下藤吉郎の巻－(三幕六場)	矢田挿雲		○	博・金
119	1935	1208～1230	新宿第一劇場	新国劇	新國劇　十二月公演筋書	作者: 和田勝一/長谷川伸/中野實 演出: 金子洋文/谷屋充/樋口十一	新國劇　十二月公演筋書　監督「海援隊」(三幕六場) 海援隊/母親人形/新兵行進曲	海援隊	和田勝一	○		博・金
120	1935	1226～1228	帝国ホテル演芸場	新派劇	新劇座	作者: 石川達三/中野實/龜屋原徳/水上瀧太郎/眞山青果 演出: 金子洋文//村山知義/田島淳/巖谷三一 脚色:青江舜二郎 ////	蒼氓/初旅	蒼氓	石川達三	○		現
121	1936	0101～?	大阪歌舞伎座	新国劇		作者: 和田勝一/川口松太郎/長谷川伸 演出: 金子洋文/樋口十一/	海援隊/號外五圓五十錢/森の石松の戀	海援隊	和田勝一	○		博
122	1936	0101～?	明治座	新派劇	井上正夫一座・水谷八重子一座大合同劇	作者: 石川達三/中野實/龜屋原徳/水上瀧太郎/眞山青果 演出: //村山知義/田島淳/巖谷三一 脚色: 金子洋文////	蒼氓/細君三日天下/海鳴り/武士と町人と狼/貫一と滿枝	蒼氓	石川達三		○	博・現
123	1936	0101～0126	有楽座	歌舞伎・女優劇	東寶劇団	作者: 矢田挿雲/菊池寛/長谷川伸/ 演出: 青柳信雄/西村晋一/青柳信雄/ 脚色: 金子洋文///	羽柴秀吉の巻/時と恋愛/直八子供旅/春姿競花槍	羽柴秀吉の巻	矢田挿雲		○	博
124	1936	0302～	東京劇場	新派劇	新派大合同三月興行	作者: 金子洋文/瀬戸英一/牧逸馬 演出: ///川村花菱 脚色: //川村花菱	新派大合同三月興行　作「母とともに」(一幕) 母とともに/今様かしく/悲戀華	母とともに	○			博・金・大
125	1936	0401～0427	寶塚中劇場	新派劇	水谷八重子一座　寶塚公演脚本解説集	作者: 中野實/室生犀星/川口松太郎 演出: 中野實/金子洋文/川口松太郎 脚色: /金子洋文/	水谷八重子一座　寶塚公演脚本解説集 細君三日天下/兄いもうと/母なればこそ	兄いもうと	室生犀星	○	○	博・金
126	1936	0401～0426	有楽座	歌舞伎	東寶劇團	作者: 長谷川伸/菊池寛/金子洋文/ 演出: 青柳信雄/西村晋一/金子洋文/	舶来巾着切/戀愛と結婚の書/新版河内山/義經千本櫻	新版河内山	○	○		博・金・現
127	1936	0503～?	明治座	新派劇	昭和十一年五月興行　明治座番組	作者: 長田秀雄/金子洋文/三好一光/泉鏡花 演出: //田島淳/ 脚色: ///川口松太郎	昭和十一年五月興行　明治座番組 夜嵐お絹/牝鶏/片時雨/新版つや物語	牝鶏	○			博・金・現
128	1936	～0516	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤タイムス　昭和十一年・新緑第二号	金子洋文 作・演出/穂積驚　作/管裸馬　作・金子洋文 演出/藤島一虎　作・演出	梅澤タイムス　昭和十一年・新緑第二号 私の青空/下駄ツ八仁義/錦島三太夫/秋山要助	私の青空/錦島三太夫	○	○		金
129	1936	0530～0625	有楽座		昭和十一年六月興行番組 新國劇出演	作者: 甲賀三郎/長谷川伸/金子洋文 演出: 濱田右二朗/谷屋充/金子洋文	恐怖の家/一本刀土俵入/髪	髪	○	○		博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
130	1936	?～?	昭和座	大衆芸能・剣劇・その他	梅澤タイムス　昭和十一年・新緑第四号	竹中荘吉作・演出/長谷川伸作/金子洋文作/菊池寛原作　額田六福脚色	犬を飼ふのは考へものです/勘太郎月の唄/牝鶏/敵討兄弟鑑 梅澤タイムス　昭和十一年・新緑第四号	牝鶏	○			金
131	1936	0602～0621	寶塚中劇場	新派他	昭和十一年六月　寶塚中劇場公演脚本解説集　東寶劇團宝塚公演	水木京太作水木久美雄演出/長谷川伸作青柳信雄演出/菊池寛作・西村晋一演出/金子洋文作演出	昭和十一年六月　寶塚中劇場公演脚本解説集　東寶劇團宝塚公演 殉死/舶来巾着切/恋愛と結婚の書/新版河内山	新版河内山	○	○		金
132	1936	0701～?	新橋演舞場		澤田正二郎追善公演　新國劇スジガキ	作者: 菊池寛/中村吉藏/長谷川伸 演出: 關口次郎/金子洋文/長谷川伸 脚色: 谷屋充//	澤田正二郎追善公演 仇討禁止令/海の兄弟/瞼の母/殺陣	海の兄弟	中村吉蔵	○		博・金
133	1936	0901～?	大阪歌舞伎座	新国劇		作者: 菊池寛/中村吉藏/長谷川伸/ 演出: 關口次郎/金子洋文/長谷川伸 脚色: 谷屋充//	仇討禁止令/海の兄弟/小平次神楽/殺陣田村	海の兄弟	中村吉蔵	○		博
134	1936	0902～0927	有楽座	歌舞伎	東寶劇團	作者: 吉川英治//金子洋文/ 演出: 八住利雄//金子洋文/渥美清太郎 脚色: 八住利雄///渥美清太郎	宮本武蔵/三社祭/ふるさと/浮名巽夜舟稲妻	ふるさと	○	○		博・金
135	1936	0930～?	南座	新国劇	澤田正二郎追善公演　新國劇	作者: 菊池寛/中村吉藏/長谷川伸/ 演出: 關口次郎/金子洋文/長谷川伸 脚色: 谷屋充///	仇討禁止令/海の兄弟/小平次神楽/殺陣田村	海の兄弟	中村吉蔵	○		金
136	1936	10?～10?上	京都宝塚劇場	東宝劇団	昭和十一年九月興行番組東寶劇團出演	作者: 吉川英治/金子洋文/ 演出: 八住利雄/金子洋文/ 脚色: 八住利雄//	昭和十一年十月興行　東寶劇團出演 宮本武蔵/ふるさと/	ふるさと	○	○		現
137	1936	1001～?	中座	新派劇		作者: 室生犀星/益田甫/室生犀星/三好十郎/菊池寛 演出: 龜屋原徳/千田是也/金子洋文/杉本良吉/川口松太郎 脚色: 龜屋原徳//金子洋文//川口松太郎	紙幣/夜中から朝まで/兄いもうと/彦六大いに笑ふ/新道	兄いもうと	室生犀星	○	○	博
138	1936	1101～?	明治座	新派劇		作者: 龜屋原徳/八木隆一郎/本庄桂輔/片岡鐵兵 演出: 金子洋文/杉本良吉/巖谷三一/村山知義 脚色: ///村山知義	生ける聖母/熊の唄/當世女大學/朱と緑	生ける聖母	亀屋原徳	○		博
139	1936	1201～?	明治座	新派劇		作者: 中野實/川口松太郎/久米正雄 演出: 中野實/川口松太郎/杉本良吉 脚色: //金子洋文	パパの青春/三等局長/新月抄	新月抄	久米正雄		○	博・現
140	1937	0101～?	浪花座	新国劇	新國劇	作者: 眞山青果/徳田秋聲/金子洋文 演出: 高田保/關口二朗/金子洋文 脚色: /寺崎浩/	草三と四郎藏/勲章/髪	髪	○	○		博
141	1937	0101～0124	有楽座	歌舞伎・新劇	正月公演脚本解説　東寶劇團出演	作者: 永田衡吉/マルセル・アシャアル/河竹黙阿彌 演出: 金子洋文/金杉惇郎・高木次郎/ 脚色: 東寶文芸部	正月公演脚本解説　東寶劇團出演 左馬頭源頼朝/愉しき哉人生/白浪五人男	左馬頭源頼朝	永田衡吉	○		博・金・史

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
142	1937	0129～0207	横浜宝塚劇場	日舞・新舞踊/歌舞伎/新劇/歌舞伎	東宝劇団	作者: /永田衡吉/マルセル・アシヤアル/河竹黙阿弥 演出: /金子洋文/金杉惇郎、高木次郎	春霞壽草摺/左馬頭源義朝/愉しき哉人生/辨天娘男女白浪	左馬頭源義朝	永田衡吉	○		博
143	1937	0131～?	昭和座	大衆芸能・劍劇・その他	梅沢昇戟党	作者: 金子洋文/原巌/渥美清太郎 演出: /原巌	ふるさと/山形屋/敵討春亀山	ふるさと	○			博
144	1937	0312～0321	名古屋寶塚劇場		三月興行番組　東寶劇団出演	作者: 永田衡吉//金子洋文/菊池寛 演出: 金子洋文//金洋文/水木久美雄	三月興行番組　東寶劇団出演 源義朝/春霞壽草摺/ふるさと/藤十郎の恋	ふるさと/左馬頭源頼朝	○	○		金
145	1937	0401～?	明治座	新派劇		作者: 郷田惠/三好一光/吉屋信子 演出: 金子洋文/田島淳/川村花菱 脚色: //川村花菱	煙る故郷/戀すてふ/良人の貞操	煙る故郷	郷田惠	○		博
146	1937	0401～?	御園座	新国劇	新國劇　二十周年記念公演すじがき	作者: 和田勝一/北條秀司/子母澤寛 演出: 金子洋文監督/関口次郎監督/	新國劇　二十周年記念公演すじがき 海援隊(坂本龍馬)/表彰式前後/紋三郎の秀	海援隊(坂本龍馬	和田勝一	○		金
147	1937	0401～0425	有楽座		昭和十二年四月興行　東寶劇団出演	作者: 野田源六//長谷川伸 演出: 青柳信雄//金子洋文	昭和十二年四月興行　東寶劇団出演 葉隠記/勸進帳/瞼の母	瞼の母	長谷川伸	○		博・金
148	1937	05?	寶塚中劇場		昭和十二年五月　東寶劇團寶塚公演脚本解説集	作者: 村松春水/河竹黙阿弥/長谷川伸/ 演出: 青柳信雄//金子洋文/ 脚色: 水木久美雄///	昭和十二年五月　東寶劇團寶塚公演脚本解説集 唐人お吉/土蜘/瞼の母/越後獅子花曙	瞼の母	長谷川伸	○		金
149	1937	0518～?	御園座（名古屋）	新派劇		作者: 郷田惠/三好一光/吉屋信子 演出: 金子洋文/田島淳/川村花菱 「金子洋文舞臺監督/田島淳舞臺監督/川村花菱舞臺監督」 脚色: //川村花菱	煙る故郷/戀すてふ/良人の貞操	煙る故郷	郷田惠	○		博
150	1937	0602～0627	有楽座		昭和十二年六月興行　新国劇出演	作者: 山本有三//尾崎士郎 演出: 金子洋文//上泉秀信 脚色: //高田保	坂崎出羽守/荒神山/人生劇場	坂崎出羽守	山本有三	○		博・金
151	1937	0605～0630	横浜宝塚劇場	歌舞伎・新劇	東宝劇団	作者: 村松春水//長谷川伸 演出: 青柳信雄//金子洋文 脚色: 水木久美雄//	唐人お吉/一條大藏譚/瞼の母	瞼の母	長谷川伸	○		博
152	1937	0701～0725	有楽座	歌舞伎	東寶劇團	作者: 金子洋文/三好十郎/河竹黙阿弥/長谷川伸 演出: 金子洋文/八田元夫//關口次郎	足軽劍法/妻戀行/土蜘/檻	足軽劍法	○			博
153	1937	0820～?	大阪歌舞伎座		二十周年記念公演　新國劇	作者: 甲賀三郎/谷屋充/長谷川伸 演出: 濱田右二朗/谷屋充/金子洋文	恐怖の家/上海陸戰隊/安達元右衛門	安達元右衛門	長谷川伸	○		博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
154	1937	0909～0901	名古屋宝塚劇場	その他	東寶劇團	作者: 八住利雄//中野實/長谷川伸 演出: 青柳信雄//水木久美雄/金子洋文	肉弾列車/歌舞伎十八番の内　勧進帳/二等寝臺/瞼の母	瞼の母	長谷川伸	○		博
155	1937	1001～?	大阪歌舞伎座		關西大歌舞伎	作者: 大西利夫/金子洋文/近松門左衛門/幸田露伴//鳥江銕也/ 演出: 大西利夫/金子洋文////野淵昶/	敵國降伏/藍染川/心中天網島/名和長年/神霊矢口渡/母の手紙/双面水照月	藍染川	○	○		博・金・大
156	1937	1101～?	新宿第一劇場	新派劇	藝術座水谷八重子一座	作者: 徳富蘆花/室生犀星/久米正雄 演出: 田島淳/金子洋文/川口松太郎 脚色: 眞山青果/金子洋文/川口松太郎	終曲篇定本不如帰/水谷八重子當り狂言兄いもうと/光の漣	水谷八重子當り狂言兄いもうと	室生犀星	○	○	博
157	1937	1203～1227	東京寶塚劇場	新派劇・新劇・その他	東寶劇団／藝術座水谷八重子　合同公演	作者: 額田六福//吉屋信子 演出: 青柳信雄/八住利雄/金子洋文 脚色:　//水木久美雄	東寶劇団／藝術座水谷八重子　合同公演 静と義經/上海/母の曲	母の曲	吉屋信子	○		博・金・現
158	1938	0201～?	新橋演舞場		新國劇　二月公演すじがき	作者: 高田保/大佛次郎 演出: 高田保/金子洋文 脚色: /金子洋文	日本人/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎	○	○	博・金
159	1938	0201～?	明治座	歌舞伎		作者: パアル・バック//永田衡吉/三世瀬川如皐 演出: 關口次郎//鈴木英輔/ 脚色: 金子洋文///	大地/歌舞伎十八番の内勧進帳/山彦瀞八丁/與話情浮名横櫛	大地	パアル・バック		○	博・現・大
160	1938	0301～?	明治座	新派劇		作者: 永田衡吉/北條秀司/泉鏡花 演出: 金子洋文/遠藤慎吾/久保田万太郎 脚色: //巖谷三一	温泉紅葉/屋根裏の辯護士/日本橋	温泉紅葉	永田衡吉	○		博・現
161	1938	0301～?	東京劇場	歌舞伎		作者: パアル・バック//岡本綺堂/川口松太郎 演出: 鈴木英輔///川口松太郎 脚色: 金子洋文// 舞台装置: 伊藤喜朔作	大地（第二部）息子達/月雪花/品川の仇討/愛国行進曲	大地（第二部）息子達	パアル・バック		○	博
162	1938	0303～0327	有楽座	新派劇	昭和十三年三月　藝術座水谷八重子一座公演	作者: バアル・バック/松本起代子・三好一好/中野實 演出: 村山知義/久保田万太郎/中野實 脚色: 金子洋文//	昭和十三年三月　藝術座水谷八重子一座公演 脚色「大地」(八場) 大地/春の淡雪/新しき門	大地	パアル・バック		○	博・金
163	1938	408～?	角座	新派劇	関西新派劇　お名残り公演	作者: 大倉桃郎/金子洋文/川口松太郎 演出: 中井泰孝/金子洋文/高屋貞澄	関西新派劇　お名残り公演 琵琶歌/ふるさと/人生の日蔭	ふるさと	○	○		博・金
164	1938	O517～0525	大阪歌舞伎座	新国劇	新國劇　五月興行	作者: 高田保・樋口十一/大佛次郎 演出: 高田保・樋口十一/金子洋文 脚色: /金子洋文	脚色・演出「赤穂浪士」(四幕十一場) 白壁の家/赤穂浪士	赤穂浪士	大仏次郎	○	○	博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
165	1938	0601～??	明治座	新派劇		作者: 広津柳浪/大島萬世/川口松太郎 演出: 巌谷三一/金子洋文/川口松太郎 脚色: 巌谷三一	八幡の狂女/新しき麓/明治三十七八年	新しき麓	大島萬世	○		博
166	1938	0602～0626	有楽座	歌舞伎・女優劇・レビュー	昭和十三年六月　東寶劇団公演	作者: 三好十郎//中野實 演出: 金子洋文//中野實/東寶文藝部 脚色: 金子洋文///	昭和十三年六月　東寶劇団公演 戦国の密使/かさね/大いなる審判/義經千本桜	戦国の密使	三好十郎	○	○	博・金
167	1938	0719～?	国際劇場(浅草国際劇場)	歌舞伎・新派劇		作者: 角田喜久雄/長谷川伸/田村西男 演出: 金子洋文/早瀬亘/大山貞夫 脚色: 小菅一夫	時代劇髑髏銭/時代劇股旅草鞋/現代劇女の選んだ道	時代劇髑髏銭	角田喜久雄	○		博
168	1938	0901～?	国際劇場(浅草国際劇場)	新派劇・大衆芸能		作者: 陶山密/泉鏡花/獅子文六/川口松太郎 演出: 巌谷三一/川村花菱/金子洋文/田島淳 脚色: 巌谷三一/川村花菱/伊田和一/	海の荒鷲南郷少佐/婦系圖/断髪女中/愛憎峠	断髪女中	獅子文六	○		博
169	1938	1001～?	明治座	新派劇		作者: 川口一郎/瀬戸英一/村松梢風 演出: 岩田豊雄/久保田万太郎/金子洋文 脚色: /久保田万太郎/巌谷三一	島/東京のゆくえ/呂昇物語	呂昇物語	村松梢風	○		博・現
170	1938	1005～1023	有楽座	歌舞伎・女優劇	東寶劇團	作者: 監野國四郎/村上浪六/利倉幸一 演出: 金子洋文/高木次郎/八住利雄 脚色: /菊田一夫	人生讀本/當世五人男/明け行く大陸	人生讀本	藍野國四郎	○		博
171	[1938? 明治座]		北野劇場		第二十九回文化向上運動演劇と映画の會	脚色「鶯」名曲鑑賞/文化映画/映画「ワルツ合戦」/脚本朗読/演劇「鶯」	第二十九回文化向上運動　演劇と映画の會　鶯	鶯	伊藤永之介	○	○	金
172	1938	1005～1023	有楽座		昭和十三年十月　東寶劇団出演	作者: 利倉幸一/監野國四郎/村上浪六 演出: 八住利雄/金子洋文/高木次郎 脚色: //菊田一夫	昭和十三年十月　東寶劇団出演 明け行く大陸/人生讀本/當世五人男	人生讀本		○		金
173	1938	1006～1027	北野劇場		新國劇一座公演脚本解説	作者: 山本有三/中村吉蔵/子母沢寛 演出: 金子洋文/関口次郎/ 脚色: 遠山静雄//	新國劇一座公演脚本解説 「坂崎出羽守」(三幕五場)/つはもの/紋三郎の秀	坂崎出羽守		○		金
174	1938	1030～1031	飛行館	新劇	劇團演伎座	作者: 北條秀司/金子洋文 演出: ?水秋良・村上權/?水秋良	丸ノ内英雄傳/牝鶏	牝鶏	○			博
175	1938	1101～?	明治座	新派劇		作者: 八木隆一郎/川村花菱/北條秀司/川口松太郎 演出: 八田元夫/川村花菱/竹中荘吉/金子洋文 脚色: ///金子洋文	焔の人/涙の四つ辻/愉快な先生達/愛染かつら	愛染かつら		○		博・現
176	1938	1101～?	中座	新派劇	新生新派	作者: 川口松太郎/川口松太郎/眞船豊/村松梢風 演出: 關口次郎/川口松太郎/眞船豊/金子洋文 脚色: ///巌谷三一	兵站宿舎/藝者讀本お桂ちやん/なだれ/呂昇物語	呂昇物語		○		博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
177	1938	1201～?	明治座	新派劇		作者: 伊藤永之介/川口松太郎/坪田譲治/川口松太郎 演出: 金子洋文/川口松太郎/上泉秀信/關口次郎	鶯/お桂ちやん/子供の四季/兵站宿舎	鶯		○		博・現
178	1939	0102～?	東京劇場	歌舞伎		作者: /野村胡堂/幸田露伴/岡本綺堂//眞山青果/福地櫻痴/邦枝完二 演出: /金子洋文////巌谷三一//巌谷三一 脚色: /金子洋文/右田寅彦/////巌谷三一	吉例壽曾我/銭形平次捕物控/名和長年/杏花戯曲十種の内修禅寺物語/壽式三番叟/元禄忠臣藏/新歌舞伎十八番の内素襖落/喧嘩鳶	銭形平次捕物控		○	○	博・大
179	1939	0201～?	角座	新派劇・その他		作者: 亀屋原徳/野村胡堂/郷田悳/長谷川伸 演出: 木下計治//高屋貞澄/早瀬亘 脚色: /金子洋文・瀬川春郎//	島の人々/銭形平次捕物控/審きの旗/長脇差試合	銭形平次捕物控	大仏次郎		○	博
180	1939	0201～?	東京劇場	歌舞伎		作者: 岡本綺堂/眞山青果//長谷川伸/鈴木彦次郎 演出: 巌谷三一/巌谷三一//田島淳/金子洋文 脚色: ////金子洋文	熊谷出陣/元禄忠臣藏/お染久松松縁東錦繪/旅の風来坊/両国梶之助	両国梶之助		○	○	博
181	1939	0201～??	明治座	新派劇		作者: 菅■(「しめすへん」に「果」)馬/菊池寛/泉鏡花 演出: 金子洋文/金子洋文/久保田万太郎 脚色: 金子洋文/金子洋文/巌谷三一	錦島三太夫/結婚天氣圖/白鷺	錦島三太夫/結婚天氣圖	菅裸馬	○	○	博・大
182	1939	0201～？	明治座	新派劇	昭和十四年　新派大合同二月興行	作者: 菅■(「しめすへん」に「果」)馬/菊池寛/泉鏡花 演出: 金子洋文/金子洋文/久保田万太郎 脚色: 金子洋文/金子洋文/巌谷三一	昭和十四年　新派大合同二月興行 錦島三太夫/結婚天氣圖/白鷺	錦島三太夫/結婚天氣圖	菅裸馬	○	○	博・金
183	1939	0323～0330	名古屋寶塚劇場	歌舞伎	昭和十四年陽春興行　東寶劇団出演	作者: 吉川英治/金子洋文/ 演出: 坪内士行/金子洋文/ 脚色: 八住利雄/金子洋文/	昭和十四年陽春興行名鷹にニュース第178号　3月23日より30日まで 不破数右衛門/出征隣り同志/勧進帳	出征隣り同志	○	○	○	金
184	1939	0401～?	明治座	新派劇	新生新派奮闘四月興行	作者: 青江舜二郎/大池唯雄/吉屋信子 演出: 久保田万太郎/池田大伍/金子洋文 脚色: 久保田万太郎/宇野信夫/金子洋文	一葉舟/吉原堤の仇討/妻の場合	妻の場合	吉屋信子	○	○	博・金・現・大
185	1939	0504～0528	有楽座	歌舞伎・新劇・女優劇	春秋座・東寶劇團	作者: 野村胡堂/山本有三 演出: 金子洋文/坪内士行	銭形平次捕物百話/同志の人々/隅田川續俤	銭形平次捕物百話	野村胡堂	○		博・金・現
186	1939	0701～0715	有楽座	歌舞伎・新劇	昭和十四年七月　東寶劇団出演	作者: 長塚節/山本有三/吉屋信子/長谷川伸 演出: 千田是也/関口次郎/金子洋文/高木次郎 装置: 佐藤弘/長瀬直諒/島公/	東寶劇團公演番組脚本解説 土/不惜身命/女の教室/一本刀土俵入	女の教室	吉屋信子	○		博・金・現
187	1939	0702～?	明治座	新派劇		作者: 野村胡堂/八木隆一郎/川口松太郎 演出: 金子洋文/村山知義/川口松太郎 脚色: 金子洋文//	平次の女難/海の星/黒潮	平次の女難	野村胡堂	○	○	博・大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
188	1939	?～?	東京寶塚劇場	歌舞伎	東寶劇団	作者: 矢田挿雲/川口松太郎/福地櫻痴居士/長谷川伸/ 演出: 青柳信雄//// 脚色: 金子洋文////	東寶劇團公演番組脚本解説 新版太閤記/號外五圓五十銭/春輿 鏡獅子/瞼の母/奴江戸花槍	瞼の母	矢田挿雲		○	金
189	1939	08??～??	国際劇場(浅草	歌舞伎		作者: 三上於兎吉 脚色: 金子洋文	雪之丞変化	雪之丞変化	三上於兎吉		○	大
190	1939	0901～?	大阪歌舞伎座	歌舞伎		作者: 菊池寛/野村胡堂//岡本綺堂/ 演出: /田島淳/// 脚色: 林和/金子洋文///	忠直卿行状記/平次の女難/玩辭樓十二曲の内土屋主税/おその六三浪華春雨/壽萬歳　引き抜き「團子賣」	平次の女難	野村胡堂		○	博
191	1939	1101～?	大阪歌舞伎座	新派劇		作者: /獅子文六/八木隆太郎/伊原青々園/渡邊霞亭 演出: 永田衡吉/金子洋文/村山知義//川口松太郎 演出: 金子洋文/遠藤愼吾/久保田万太郎	温泉紅葉/断髪女中/海の星/小梅と一重/渦巻	断髪女中	八木隆太郎	○	○	博
192	1939	1101～?	明治座		新生新派	作者: 森鴎外/吉屋信子/堤千代/久米正雄 演出: 關口次郎/八田元夫/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 關口次郎/阿木翁助/川口松太郎/金子洋文	雁/村と兵隊/小指/白蘭の歌	白蘭の歌	久米正雄	○	○	博・現・大
193	1939	1201?～?	歌舞伎座	歌舞伎	昭和十四年十二月興行 歌舞伎座番組	作者: /吉川英治/福地櫻痴居士/岡本綺堂 脚色: /金子洋文//宇野信夫	脚色「太閤記一藤吉郎編一」(四幕) 鯨のだんまり/太閤記/新歌舞伎十八番の内鏡獅子/半七捕物帳の内春の雪解	太閤記	吉川英治		○	博・金・現
194	1939	1202～1225	東京寶塚劇場	歌舞伎新派劇	春秋座市川猿之助一座／藝術座水谷八重子一座出演　大合同豪華興行	作者: 大佛次郎/平山晋吉/川口松太郎 演出: 金子洋文//川口松太郎 脚色: 金子洋文// 舞台装置: 荒島鶴吉/松田青風/繁岡鑿一 衣装考証: 長瀬直諒/津田青風/	脚色・演出「赤穂浪士」隼人とお仙(三幕六場) 赤穂浪士/舞踊　武悪/明治一代女	赤穂浪士	大仏次郎	○	○	博・金
195	1940	0101～?	南座(京都)	新制新派	新生新派	作者: 谷崎潤一郎/吉屋信子/堤千代/久米正雄 演出: 喜多村緑郎/八田元夫/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 川口松太郎/阿木翁助/川口松太郎/金子洋文	春琴抄/村と兵隊/小指/白蘭の歌	白蘭の歌	久米正雄	○	○	博
196	1940	0101to?	明治座	新派劇		作者: 伊原青々園/北條秀司/三好一光/川口松太郎 演出: /村山知義/田島淳/金子洋文 脚色: 眞山青果///金子洋文	春模様花の咲分小梅と一重/閣下/娘の寫真/明治女書生	明治女書生	川口松太郎	○	○	博・大
197	1940	0119～?	御園座(名古屋)	新派劇		作者: 谷崎潤一郎/吉屋信子/堤千代/久米正雄 脚色: 川口松太郎/阿木翁助/川口松太郎/金子洋文 演出: 喜多村緑郎/八田元夫/久保田万太郎/金子洋文	春琴抄/村と兵隊/小指/白蘭の歌	白蘭の歌	久米正雄	○	○	博
198	1940	0201～	歌舞伎座	歌舞伎	尾上菊五郎／中村吉右衛門　両座合同二月興行	作者: /吉川英治///岡鬼太郎 脚色: /金子洋文// 装置://前田青邨/小村雪岱/	奉祝紀元二千六百年 一谷嫩軍記　生田森陣屋の場/太閤記藤吉郎篇/汐汲　鳥羽繪/義士盡忠録の内　松浦の太鼓/我が大八洲	太閤記藤吉郎篇	吉川英治		○	博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
199	1940	0401～?	大阪歌舞伎座	歌舞伎	六代目尾上菊五郎一座	作者: /吉川英治////川尻清潭 脚色: /金子洋文//岡鬼太郎// 装置考証: /前田青邨//// 装置: ///小村雪岱//小村雪岱	春を彩る豪華大歌舞伎 六代目尾上菊五郎一座脚色「太閤記ー藤吉郎篇ー」(五幕) 根元草摺引/太閤記藤吉郎篇/和田合戦女舞鶴/藤娘/傾城反魂香/昔噺桃太郎	太閤記藤吉郎篇	吉川英治		○	博・金
200	1940	0401～?	明治座	新派劇		作者: 關口次郎/川口松太郎/鈴木彦次郎/吉屋信子 演出: 關口次郎/久保田万太郎/金子洋文/阿木翁助 脚色: //金子洋文/阿木翁助	鴨緑江/春ふる雪/土俵/未亡人	土俵	鈴木彦次郎	○	○	博・大
201	1940	0501～?	帝国劇場	新派劇	新生新派	作者: 谷崎潤一郎/堤千代/眞船豊/川口松太郎 演出: 久保田万太郎/金子洋文/千田是也/川口松太郎 脚色: 久保田万太郎/阿木翁助///	蘆刈/雛妓/太陽の子/夫婦相合傘	雛妓	堤千代	○		博・金
202	1940	0601～？	歌舞伎座		昭和十五年六月興行 恒例菊五郎劇	作者: /吉川英治//宇野信夫 脚色: /金子洋文// 装置考証: /前田青邨/鏑木清方/ 装置: ///田中良	歌舞伎十八番の内矢の根/太閤記(藤吉郎の巻終篇)/高尾ざんげ/初松魚	太閤記(藤吉郎の巻終篇)	吉川英治		○	博・金
203	1940	0601～?	明治座	新派劇		作者: 國木田獨歩/里見?/石川達三 演出: 村山知義/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 眞山青果/久保田万太郎/阿木翁助	富岡先生/墓参/轉落の詩集	富岡先生/墓参/轉落の詩集	石川達三	○		博・金
204	1940	0701～？	歌舞伎座	歌舞伎	昭和十五年七月興行大歌舞伎	作者: //金子洋文/川尻清潭 装置: //長坂元/田中良	昭和十五年七月興行大歌舞伎 作「黒猫」(二場) 夏祭浪花鑑/色彩間苅豆/黒猫/御伽噺かちゝ山	黒猫	○			博・金・大
205	1940	0701～?	明治座	新派劇		作者: 泉鏡花/石川達三/吉屋信子 演出: 久保田万太郎/八田元夫/金子洋文	歌行燈/平和な物語/蔦	蔦	吉屋信子	○		博
206	1940	0803～?	歌舞伎座	歌舞伎		作者: /木村富子/金子洋文 演出: 八田元夫/市川定花/金子洋文	黎明曙光/二人知盛/大岡政談權三と助十	大岡政談權三と助十	○	○		博・現
207	1940	0831～?	新橋演舞場	歌舞伎		作者: /岡鬼太郎/貴司山治 演出: //金子洋文	繪本太功記/藤娘・鳥羽繪/坂本龍馬の妻	坂本龍馬の妻	貴司山治	○		博
208	1940	0901～?	明治座	新派劇		作者: 川村花菱/三好一光/石坂洋次郎 演出: 川村花菱/久保田万太郎/金子洋文 脚色: //金子洋文	私なき牧人/續々戀すてふ/曉の合唱	曉の合唱	石坂洋次郎	○	○	博・大
209	1940	0901～0925	帝国劇場	新国劇	新國劇 九月公演	作者: 眞山青果/秘田余四郎/金子洋文 演出: 谷屋充/高田保/金子洋文 脚色: /高田保// 装置: 吉田謙吉/濱田右二朗/遠山静雄	新國劇 九月公演 西郷隆盛/解決/改訂髪	改訂髪	○	○		博・金
210	1940	09?～?	新橋演舞場			作者: ///貴司山治 演出: ///金子洋文	尼ケ崎/藤娘/鳥羽絵/坂本竜馬の妻	坂本竜馬の妻	貴司山治	○		現

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
211	1940	1006～1029	有楽座	新国劇	新國劇	作者: 眞山青果/秘田余四郎/長谷川伸 演出: 谷屋充/高田保/金子洋文 脚色: /高田保	西郷隆盛/解決/本所八景	本所八景	長谷川伸	○		博
212	1940	1006～1029	有楽座	新国劇	昭和十五年十月　新國劇出演	作者: 眞山青果/秘田余四郎/長谷川伸 演出: 谷屋充/高田保/金子洋文 脚色: /高田保// 装置: 吉田謙吉/濱田右二朗/濱田右二朗	西郷隆盛/解決/赤穂浪士外傳　本所八景	本所八景	長谷川伸	○		博・金
213	1940	1005～1018	南座(京都)	新制新派	新生新派	作者: 眞船豊/川口松太郎/堤千代/川口松太郎 演出: /久保田万太郎/金子洋文/川口松太郎 脚色: //阿木翁助	太陽の子/春ふる雪/雛妓/夫婦相合傘	雛妓	堤千代	○		博
214	1940	1101～?	松竹劇場湊川・新開地松竹劇場)(			作者: 岡本綺堂/眞山青果/木村富子/金子洋文 演出: /巌谷三一//金子洋文	修禪寺物語/江戸城總攻の内　慶喜命乞/日本刀の神秘　小鍛冶/大岡政談　權三と助十	大岡政談　權三と助十	○	○		博
215	1940	1203～	歌舞伎	歌舞伎		作者: 吉川英治//宇野信夫 脚色: 金子洋文	太閤記/京鹿子娘道成寺/維新の次郎長	太閤記	吉川英治		○	博
216	1941	0101～?	明治座	新派	新生新派	作者: 川口松太郎/堤千代/溝口健二・依田義賢 演出: 關口次郎/久保田万太郎/金子洋文 脚色: /久保田万太郎/川口松太郎	二十五人の學生/黒髪の心/浪花女	浪花女	川口松太郎	○		博・現
217	1941	0201～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 北條秀司/礫々會/溝口健二・依田義賢 演出: 關口次郎/金子洋文/金子洋文 脚色: /阿木翁助/川口松太郎	北國日和/同宿十人の兵隊/浪花女	同宿十人の兵隊/浪花女	礫々會/溝口健二・依田義賢	○		博・金・現
218	1941	0301～0327	有楽座	新劇・新派	藝術座水谷八重子一座	作者: 北條秀司/若竹露香/石川達三 演出: 衣笠貞之助/金子洋文/川村花菱 訳者: (訳者よみ:) 脚色: /金子洋文/川村花菱	機場/北支の旅/母系家族	北支の旅	若竹露香	○	○	博・金
219	1941	0501～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 吉屋信子/ルネ・ベルトン/川口松太郎 演出: 關口次郎/金子洋文/久保田万太郎 訳者: /水谷謙三/ 脚色: 阿木翁助//	花/地下壕/夫婦太皷	地下壕	ルネ・ベルトン	○		博
220	1941	0601～?	角座	歌舞伎・新派劇	新舊合同劇　三の替り公演	作者: 林二九太//堤千代/野村胡堂 演出: 中井泰孝/食満南北/高屋貞澄/早瀬亘 脚色: 中井泰孝//龜屋原徳/金子洋文	新舊合同劇　三の替り公演脚色「銭形平次捕物控－両國橋畔の殺人－」(六場) 勲八魚屋と画家/江戸風俗初すがた/和解/銭形平次捕物控	銭形平次捕物控－両國橋畔の殺人－	野村胡堂		○	博・金
221	1941	0601～0622	大阪歌舞伎座	新派劇	井上正夫演劇道場／水谷八重子藝術座　合同劇	作者: 室生犀星/北條秀司/清水宏 演出: 金子洋文/園池公功/川村花菱 脚色: 金子洋文//川村花菱	井上正夫演劇道場／水谷八重子藝術座　合同劇 兄いもうと/天高き日/歌女おぼえ書	兄いもうと	室生犀星	○	○	博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
222	1941	0701～0720	歌舞伎座	歌舞伎	昭和十六年七月興行　第三回歌舞伎会	作者: 岡本綺堂//河竹黙阿弥/ 演出: 金子洋文/// 装置: 伊藤熹朔///	昭和十六年七月興行　第三回歌舞伎会　演出・監督「白虎隊」(三幕) 白虎隊/鬼一法眼三略巻/新古演劇十種の内戻橋/假名手本忠臣藏	白虎隊	岡本綺堂	○		博・金
223	1941	0801～?	明治座	新派劇	新生新派　八月興行	作者: 庄司總一/石坂洋次郎/川口松太郎 演出: 久保田万太郎/佐々木孝丸/金子洋文 脚色: 森本薫・田中澄江/阿木翁助 装置: 伊藤寿一/吉田謙吉/伊藤熹朔・(木村荘八・衣装考証)	演出「明治一代女」(四幕九場)演出「明治一代女」(四幕九場) 陳夫人/かつこう/明治一代女	明治一代女	川口松太郎	○		金
224	1941	0831～?	明治座	新派劇	昭和十六年九月興行　明治座 番組　本流新派	作者: 堤千代/眞山青果/阿木翁助/金子洋文 演出: //久保田万太郎/金子洋文 脚色: 富澤一郎/// 装置: 繁岡聡一/数馬英一/吉田謙吉/伊藤熹朔・(鴨下晃湖・意匠考証)	親/雲の別れ路の一節柏家夏吉/草の花/陸奥宗光と富貴楼お倉明治の朝	陸奥宗光と富貴楼お倉明治の朝	○	○		博・金・大
225	1941	1001～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 多田裕計/久保田万太郎/川口松太郎 演出: 佐々木孝丸/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 阿木翁助	長江デルタ/雨空/愛怨峡	愛怨峡	川口松太郎	○		博
226	1941	1001～?	東京劇場	歌舞伎座		作者: /永田衡吉//長谷川伸 演出: /金子洋文//巌谷三一	鬼一法眼三略巻/海國兵談/歌舞伎十八番の内勸進帳/瞼の母	海國兵談	永田衡吉	○		博・現
227	1941	1101～?	新橋演舞場	新派劇	新生新派	作者: 阿木翁助/眞船豊/川口松太郎 演出: 關口次郎/久保田万太郎/金子洋文	柳號櫻號/山参道/すみだ川	すみだ川	川口松太郎	○		博・現
228	1941	1130～?	歌舞伎座	歌舞伎	昭和十六年十二月　恒例尾上菊五郎単独興行	作者: /・山岸荷葉/菅感次郎/ 演出: //金子洋文/ 装置: //伊藤熹朔/	義經千本櫻/羽根の禿/うかれ坊主/恩讐以上/道行浮塒鴎	恩讐以上	菅感次郎	○		博・金・現
229	1942	0101～?	南座(京都)	新派劇	新生新派	作者: 眞船豊/埴原一亟/川口松太郎 演出: 久保田万太郎/佐々木孝丸/金子洋文	山参道/並木洋品店/すみだ川	すみだ川	川口松太郎	○		博
230	1942	0102～?	歌舞伎座		昭和十七年初春興行　歌舞伎座番組	作者: 並木正三/福地櫻痴///岡鬼太郎/岡本綺堂 演出: /////金子洋文 脚色: 木村綿花/////	昭和十七年初春興行　歌舞伎座番組 監督「権三と助十」(二幕) 和布苅神事/二人袴/名橘譽石切/一谷嫩軍記/藤娘/權三と助十	權三と助十	岡本綺堂	○		金
231		0109～0115	築地國民新劇場	新劇	移動演劇綜合公演(移動演劇連盟)	作: 松崎博臣 演出金子洋文/真船豊作金子洋文演出	移動演劇綜合公演　演出「灯消えず」(四幕五場)/「狸」(一場)	灯消えず、狸	松崎博臣、真船豊	○		金・現
232	1942	0116～0125	松竹劇場(湊川・新開地松竹劇場)	新派劇	新生新派	作者: 眞船豊/埴原一亟/川口松太郎 演出: 久保田万太郎/佐々木孝丸/金子洋文 脚色: /阿木翁助/	山参道/並木洋服店/すみだ川	すみだ川	川口松太郎	○		博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
233	1942	0122～?	明治座	新派劇		作者: 室生犀星/北條秀司/川口松太郎 演出: 金子洋文/園池公功/佐々木孝丸	兄いもうと/高粱風/小春狂言	兄いもうと	室生犀星	○		博・現
234	1942	0201～?	東京劇場	新派劇		作者: 埴原一亟/吉屋信子/川口松太郎 演出: 佐々木孝丸/金子洋文/久保田万太郎 装置: /藤田嗣治/	下職人/十二月八日の西貢/淡路人形	十二月八日の西貢	吉屋信子	○		博・現
235	1942	0301～?	角座	厚生劇	昭和十七年三月興行　厚生劇	作者: 金子洋文/瀬川春郎/堤千代/野淵昶 演出: 巌谷三一/早瀬亘/巌谷三一/野淵昶 脚色: //土築太郎/ 装置: 大塚克三	昭和十七年三月興行　厚生劇　作「牝鶏」(一幕) 牝鶏/忠霊/夕雀草/續五代友厚	牝鶏	○			博・金
236	1942	0301～0325	東京寶塚劇場	新派劇・大衆芸能・その他	新演技座旗擧公演　東京寶塚劇場番組	作者: 菊田一夫//川口松太郎 演出: 菊田一夫/藤間勘十郎/金子洋文 装置: 島公靖/遠山静雄/繁岡鑿一	昭和十七年三月　新演技座旗擧公演　東京寶塚劇場番組　演出「お島・千太郎」(四幕) ハワイの晩鐘/新所作鷺娘/お島・千太郎	お島・千太郎	川口松太郎	○		博・金・現
237	1942	0301～0325	有楽座	新派劇・新劇	藝術座水谷八重子一座	作者: 金子洋文/井伏鱒二/里見? 演出: 金子洋文/水木久美雄/久保田万太郎 脚色: /八木隆一郎/阿木翁助	午前二時の板木/簪/釜芋さん	午前二時の板木	○	○		博・金・現
238		0310～?	国民新劇場	新派劇・新劇	藝術座水谷八重子一座	作者: 八木隆一郎/南川潤 原作 演出: 八木隆一郎/ 金子洋文 脚色: /金子洋文	ばんざい/生活の罪	生活の罪	南川潤	○	○	現
239	1942	0310～?	日本移動演劇連盟	新派劇・新劇	文化座 日本移動演劇連盟	作者: 金子洋文/伊馬鵜平/チェーホフ原作 演出: 佐佐木隆/佐佐木隆/佐佐木隆 脚色: //伊賀山昌三翻案脚色	梅咲く村/大東亜築く力だこの一票/結婚申込	梅咲く村	○			現
240	1942	0601～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 川口松太郎/齋藤良輔、野田高梧/川口松太郎 演出: 金子洋文/久保田万太郎/溝口健二	松花江/家族/風流深深川唄	松花江	川口松太郎	○		博・現
241	1942	0704～?	歌舞伎座	歌舞伎	恒例尾上菊五郎単獨興行	作者: 平田弘一/岡村柿紅/岡本綺堂 脚色: //宇野信夫 演出: 金子洋文// 装置: 伊藤熹朔//長坂元	恒例尾上菊五郎単獨興行 監督「洋船事始」(四幕) 洋船事始/棒しばり/河豚太鼓	洋船事始	平田弘一	○		博・金・現
242	1942	804		新派劇	新生新派移動演劇隊　第二班(秋田縣下)	作者: 金子洋文/阿木翁助/阿木翁助 演出: 金子洋文/阿木翁助/阿木翁助 主催: 増田青年団・増田女子青年団 後援: 須田大日本婦人会・増田銃後奉公会	新生新派移動演劇隊　第二班(秋田縣下) 配役表 川風/勝利の国/十六夜の頃	川風	○	○		金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
243	1942	1001～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 久保田万太郎/金子洋文/川口松太郎 演出: 高田保/金子洋文/金子洋文	萩すすき/牝鶏/新版隅田川	牝鶏、新版隅田川	○	○		博
244	1942	1001～1025	有楽座	新国劇	昭和十七年十月　新國劇出演	作者: 北條秀司/眞山青果 演出: 金子洋文/谷屋充 装置: 伊藤熹朔/濱田右二郎	昭和十七年十月　新國劇出演 東宮大佐/荒川の佐吉	東宮大佐	北條秀司	○		博・金
245	1942	1003～1025	東京寶塚劇場	新派劇・大衆芸能・その他	昭和十七年十月　新演技座第二回公演　東京寶塚劇場番組	作者: 阿木翁助/川尻清潭/三村伸太郎・八住利雄 演出: 久保田万太郎/藤間勘十郎/金子洋文 装置: 伊藤熹朔/遠山静雄/島公靖	新演技座十月公演脚本解説　演出「伊那の勘太郎」(三幕七場) ともしびの國/徂く春の曲/伊那の勘太郎	伊那の勘太郎	三村伸太郎・八住利雄	○		博・金・現
246	1942	?～?	松竹巡業部	歌舞伎・新派劇・新劇・厚生劇	劇団厚生劇	作者: 岡本綺堂/室生犀星/瀬川春郎/瀬川春郎 演出: 早瀬亘//中井泰孝/早瀬亘 脚色: /金子洋文//	京の友禅/兄いもうと/新曲近江獅子/權三と助十	兄いもうと	室生犀星		○	博
247	1942	1101～?	角座	歌舞伎・新派劇・新劇・厚生劇	厚生劇／関西歌舞伎大合同	作者: 食満南北/室生犀生//瀬川春郎/阿木翁助/河竹黙阿弥/志智左右六/長谷川伸 演出: /中井泰孝///中井泰孝//郷田悳/早瀬亘 脚色: /金子洋文//////	厚生劇／関西歌舞伎大合同　脚色「兄いもうと」(一幕) めをと人形/兄いもうと/歌舞伎十八番の内勸進帳/新編有馬猫/十六夜のころ/新古演劇十種の内土蜘/町の歌/別れ囃子	兄いもうと	室生犀星		○	博・金
248	1942	1101～?	東京劇場	新派劇	劇団新派	作者: 吉屋信子/川口松太郎 演出: 佐々木孝丸/金子洋文	新らしき日/紅鬼灯	紅鬼灯	川口松太郎	○		博
249	1942	1101～?	北野劇場	新国劇	新國劇　十一月公演脚本解説集	作者: 北條秀司/眞山青果 演出: 金子洋文/谷屋充 装置: 伊藤熹朔/濱田右二郎	新國劇　十一月公演脚本解説集 東宮大佐/荒川の佐吉	東宮大佐	北條秀司	○		金
250	1942	1202～1226	有楽座	新派劇	昭和十七年十二月　藝術座水谷八重子一座公演	作者: 龜屋原徳/福地櫻痴居士/獅子文六 演出: 水木久美雄//金子洋文 脚色: //阿木翁助	昭和十七年十二月　藝術座水谷八重子一座公演 子別れ/鏡獅子/南の風	南の風	獅子文六	○		博・金
252	1943	0101～?	明治座	新派劇	新派劇	作者: 眞山青果/舟橋聖一/菊田一夫 演出: 田島淳/金子洋文/ 脚色: /三好一光/	岩崎谷/川音/桑港から歸つた女	川音	舟橋聖一	○		博
253	1943	0101～?	南座(京都)	歌舞伎・新派劇	厚生劇／關西歌舞伎大合同　初春公演	作者: 郷田悳・食満南北/岡野三郎/志賀左右六/瀬川春郎/瀬川春郎/室生犀星//額田六福 演出: 郷田悳・/中井泰孝/郷田悳/早瀬亘/瀬川春郎/中井泰孝//早瀬亘 脚色: /////金子洋文//	厚生劇／關西歌舞伎大合同　初春公演 脚色「兄いもうと」(一幕) 前線の正月・銃後の正月/新しき商道/町の歌/堀部安兵衛/有馬猫/兄いもうと/五條橋/朧夜河岸	兄いもうと	室生犀星		○	博・金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
254	1943	0101～0102	御園座（名古屋）	新派劇	劇團新派	作者: 北村小松・富澤一郎/西榮八郎/川口松太郎/高田保/堤千代/川口松太郎 演出: 脇屋光伸/巖谷三一/久保田万太郎/久保田万太郎/脇屋光伸/金子洋文 脚色: ////脇屋光伸/	新編上陸第一歩/人生のお荷物/愛する權利/真珠灣/海驢の茶碗/紅鬼灯（劇中劇『伊達娘戀緋鹿子』）	紅鬼灯	川口松太郎	○		博
255	1943	0102～0107	北野劇場		新演伎座関西初公演　一月公演脚本解説集	作者: 菊田一夫//八住利雄、三村伸太郎 演出: 菊田一夫/藤間勘十郎/金子洋文	京町堀/鷺娘/伊那の勘太郎	伊那の勘太郎	三村伸太郎・八住	○		博・金
256	1943	0116～0125	松竹劇場(湊川・新開地松竹劇場)	新派劇	劇団新派	作者: 富澤一郎/西榮八郎/川口松太郎/高田保/堤千代/川口松太郎 演出: 脇屋光伸/巖谷三一/久保田万太郎/久保田万太郎/脇屋光伸/金子洋文 脚色: ////脇屋光伸/	新編上陸第一歩/人生のお荷物/愛する権利/眞珠灣/海驢の茶碗/紅鬼灯	紅鬼灯	川口松太郎	○		博
257	1943	0131～?	大阪歌舞伎座	歌舞伎	大歌舞伎二月興行	作者: //五世瀬川如皐///金子洋文/ 演出: /////金子洋文/	作・演出「白梅記」(一幕)軍事保護院委嘱脚本 假名手本忠臣蔵/菅原傳授手習鑑/梅ヶ枝/うぐひす/小原女奴/白梅記/近頃河原の達引	白梅記	○	○		博・金
258	1943	0131～?	中座	新派劇	井上正夫演劇道場・水谷八重子藝術座	作者: 眞山青果/舟橋聖一/菊田一夫 演出: 田島淳/金子洋文/ 脚色: /三好一光/	岩崎谷/川音/桑港から歸つた女	川音	舟橋聖一	○		博・現
259	1943	0131～0225	有楽座	新派劇	新生新派	作者: 眞船豊/阿木翁助/溝口健二・依田義賢 演出: 眞船豊/久保田万太郎/金子洋文 脚色: //川口松太郎	北斗星/うぐいす笛/浪花女	浪花女	溝口健二・依田義賢	○		博
260	1943	0201～?	明治座	歌舞伎	歌舞伎	作者: 巖谷三一//金子洋文 演出: 巖谷三一//金子洋文	仇討三日間/壽式三番叟/大岡政談權三と助十	大岡政談權三と助十	○	○		博
261	1943	0303～0328	有楽座	新派劇・新派	昭和十八年三月　藝術座水谷八重子一座公演	作者: 阿木翁助//岸田國士 演出: 水木久美雄//金子洋文 脚色: //金子洋文	當陽舎の人々/鷺娘/暖流	暖流	岸田國士	○	○	博・金
262	1943	0305～0326	帝國劇場	喜劇	昭和十八年三月　東寶古川緑波一座　第一回國民演劇公演	作者: 金子洋文/菊田一夫 演出: 金子洋文/菊田一夫	撃ちてし止まむ(二幕三場)/花咲く港	撃ちてし止まむ	○	○		博・金・大
263	1943	0401～?	中座	新派劇	新生新派	作者: 多田裕計/齋藤良輔・野田高梧/川口松太郎 演出: 佐々木孝丸/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 阿木翁助/川口松太郎/	長江デルタ/家族/すみだ川	すみだ川	川口松太郎	○		博
264	1943	0501～?	明治座	新派劇	新生新派	作者: 川口松太郎/鈴木彦次郎/八木隆一郎 演出: 川口松太郎/金子洋文/八木隆一郎 脚色: 川口松太郎/金子洋文/	雛鷲の母/土俵/虹の輪	土俵	鈴木彦次郎	○	○	博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
265	1943	0701～?	東京劇場	新派劇	新派劇	作者: 火野葦平//川口松太郎 演出: //金子洋文 脚色: 久板榮二郎//	幻燈部屋/上の巻羽根の禿　下の巻五月雨/み民われら	み民われら	川口松太郎	○		博・金
266	1943	0901～0926	帝国劇場	新派劇	新生新派	作者: 吉井勇/斉藤良輔・野田高梧/川口松太郎 演出: 久保田万太郎/久保田万太郎/金子洋文 脚色: 川口松太郎///	蓮月/家族/牡丹花	牡丹花	川口松太郎	○		博
267	1943	1001～1012	松竹劇場(湊川・新開地松竹劇場)	新派劇	芸術座	作者: 川口松太郎/中野實 演出: 金子洋文/中野實	み民われら/女の使者	み民われら	川口松太郎	○		博
268	1943	1128～1130	東劇		日本移動演劇連盟、吉本移動演劇隊、東宝移動文化隊、くろがね隊	作者: 前田喜朗、栃沢冬雄、原巌 演出: 伊藤熹朔、久保田万太郎、金子洋文、青山杉作	決戦の誓い、枳殻、馬は言う、はだか琴	馬は言う	柳沢冬雄	○		現
269	1943	1202～?	有楽座	新派劇	藝術座水谷八重子一座	作者: 知切光歳/八木隆一郎/高田保 演出: 水木久美雄/八木隆一郎/金子洋文 脚色: //脇屋光伸	山ふところ/霧の島/二人姿	二人姿	高田保	○		博・金
270	1944	0102～0123	国民新劇場	新劇	苦楽座	作者: 菊岡久利 演出: 金子洋文	永遠の天	永遠の天	菊岡久利	○		博・現
271	1944	01?中旬～0	移動演劇(9回目)		文学座 東京・新潟・長野	作者: 菊田和夫、亀屋原徳、伊賀山昌三 演出: 金子洋文、戌井市郎、	海はあかね雲・レイテ島、	海はあかね雲・レイテ島	菊田和夫	○		現
272	1944	0212～0220	移動演劇(5回目)		文学座 2/12 伊予三芳 2/13愛媛県泉川 2/14詫間 2/15香川県宇多津 2/17徳島県小松 2/18脇町 2/19 高知県土佐山田 2/20赤岡	作者: 金子洋文 演出: 金子洋文	笑う村	笑う村	○	○		現
273	1944	0310～?	国民新劇場	新劇	水谷八重子芸術座	作者: 八木隆一郎/南川潤原作 演出: 八木隆一郎/金子洋文 脚色: /金子洋文	ばんざい/生活の扉	生活の扉	南川潤	○	○	現
274	1944	05?～05?	松竹座(浅草松竹座)	歌舞伎・その他	市川猿之助一座	作者: /金子洋文 演出: /金子洋文	壽操三番叟/大岡政談權三と助十	大岡政談權三と助十	○	○		博・現
275	1944	080?	新宿第一劇場	歌舞伎	市川寿美蔵・片岡仁左衛門一座	作者: 吉川英治 / 演出: 金子洋文/ 脚色: 脇屋光伸/	新書太閤記/朝顔日記	新書太閤記	吉川英治	○		現

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
276	1944	0801～0901	移動演劇(7回目)		文学座 8/1広島 8/2呉 8/3広島宇品8/4広島陸軍被服廠8/26千葉県香取 8/319/1日比谷公会堂	作者: 平田弘一 演出: 金子洋文	我等何をなすべきか	我等何をなすべきか	平田弘一	○		現
277	1944	1224	移動演劇			作: 中江良夫	海の音	海の音	中江良夫	○		金・現
278	1946	0101～0125	新宿第一劇場	新派劇	新生新派	作者: 金子洋文/川口松太郎 演出: 金子洋文/川口松太郎	生きてゐる幽霊/明治一代女	生きてゐる幽霊	○	○		博・金・大
279	1946	0101～0125	南座	歌舞伎	東西合同大歌舞伎	作者: 野村胡堂 演出: 食満南北 脚色: 金子洋文	明朗新日本再建第一春を飾る初春興業 銭形平次捕物帳（平次女難の巻）	銭形平次捕物帳（平次女難の巻	野村胡堂		○	大
280	1946	01?～?	邦楽座	市川猿之助一座・水谷八重子		作者: 夏目漱石 /稲田龍夫/木村富子/ 八木隆一郎 演出: 金子洋文///	坊ちゃん/いなづま/独楽/裸の殿様	坊ちゃん	夏目漱石	○		現
281	1946	0203～0227	大阪歌舞伎座	新派新派	新生新派	作者: 金子洋文/川口松太郎 演出: 金子洋文/川口松太郎	生きてゐる幽霊	生きてゐる幽霊	○	○		博・金・大
282	1946	02?～?	東京劇場	市川猿之助一座・水谷八重子		作者: 金子洋文/木村富子/舟橋聖一 谷屋充作//川村花菱 演出: //竹越和夫/ 谷屋充作//巌谷三一	嵐の中の人々/酔奴/滝口入道の恋 何をなすべきか/二人二番叟/愛を忘れた女	嵐の中の人々	○			博・金・大
283	1946	0606～0631	有楽座	新国劇	新國劇 六月公演	作者: 北條秀司/三好十郎/金子洋文 演出: 北條秀司/三好十郎/金子洋文	新國劇 六月公演 ぼんぼん/稲葉小僧/作・演出「髪」(三場)	作・演出「髪」(三場)	○	○		金・現・大
284	1946	622	移動演劇			作: 金子洋文	改訂本 飛ぶ唄	飛ぶ唄	○			金・現・大
285	[1946]		平沢?		同志座公演番組東京移動演劇連盟提供 金子洋文全演出指導	作者: 伊藤吉久/北條秀司//金子洋文	同志座プログラム （「月刊さきがけ」当選作)鰊(ｶﾄﾞ)の来る頃/金のかんざし/演芸の花籠/「花と泥棒」(三場)	花と泥棒	○	○		金
286	[1946]	719	秋田県記念会館		同志座プログラム	作者: 伊藤吉久/北條秀司//金子洋文 演出: 金子洋文//金子洋文/	同志座プログラム 鰊の来る頃/金のかんざし/演芸の花籠/花と泥棒(三場)	花と泥棒	○	○		金
287	1946	1020～1020	群馬会館	新劇	群馬演劇文化集団劇団ポポロ座	作者: 金子洋文/アントン・チェーホフ/村山知義 演出: 落合義雄/大熊一雄/大熊一雄、永井潤	洗濯屋と詩人/熊/初恋	洗濯屋と詩人	○			博

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
288	1947	0202～?	新宿第一劇場		(株)松竹	作者: 額田六福//野村胡堂/大森痴雪//野村胡堂 演出: //華果荘主人///華果荘主人 脚色: //金子洋文/巌谷眞一//金子洋文	天一坊と伊賀亮/新古演劇十種の内 戻橋/錢形平次捕物帳(平次女難の巻)/望の港/勢獅子/錢形平次捕物帳(受難の通人)	錢形平次捕物帳(平次女難の巻)、錢形平次捕物帳(受難の通人)	野村胡堂		○	博・現・大
289	1947	0501～0626	移動公演	新国劇	前進座	作者: 金子洋文/近松半二/黙阿弥 演出: // 脚色: //	花と泥棒(三場)/新版歌祭文(野崎村)/弁天娘女男白浪	花と泥棒	○			金・現
290	1947	0603?～08?	新宿第一劇場	歌舞伎・その他	市川猿之助:劇団・市川寿美蔵劇団	作者: 岡鬼太郎//長谷川伸、 岡本綺堂//金子洋文 演出: 巌谷真一//脇屋光伸、 //金子洋文改訂	今様薩摩歌/蚤取男/瞼の母　鳥辺山心中/操三番/大岡政談・権三と助十	大岡政談・権三と助十	○	○		現・大
291	1948	0502～05??	大阪歌舞伎座	歌舞伎	東西合同大歌舞伎、五月興業	作者: 島崎藤村 演出: 八田元夫 脚本: 金子洋文 装置: 大塚克三	破戒	破戒	島崎藤村		○	大
292	1948	06?～06?	東劇	新制新派	新生新派	作者: 石川達三/川村花菱/室生犀星/泉鏡花 演出: 八木隆一郎/川村花菱/大江良太郎/久保田万太郎/ 脚色: 八木隆一郎//金子洋文/巌谷真一	望みなきに非ず/母三人/兄いもうと/白鷺	兄いもうと	室生犀星		○	金・現
293	1948	0601～0625	南座	歌舞伎	六月興業東西合同大歌舞伎、	作者: 島崎藤村 演出: 八田元夫 脚本: 金子洋文 装置: 大塚克三	破戒	破戒	島崎藤村		○	大
294	1948	0806～0827	東京劇場	新派	八月興行　新生新派 水谷八重子合同公演	作者: 室生犀星 演出: 大江良太郎 脚色: 金子洋文 装置: 伊藤熹朔	兄いもうと	兄いもうと	室生犀星		○	大
295	1948	0902～0926	南座	新国劇	澤田正二郎二十年祭追善、申告下区特別公演	作者: 山本有三 演出: 金子洋文 装置: 田中良	坂崎出羽守	坂崎出羽守	山本有三	○		大
296	1948	1002～1020	有楽座	新国劇	新國劇　十月公演	作者: 八木隆一郎/金子洋文 演出: 八木隆一郎/金子洋文 装置: 伊藤熹朔/長瀬直諒	ここに薔薇咲く/丸橋忠弥新國劇　作・演出「丸橋忠彌」(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金・大
297	1948	1101～1123	御園座	新派	新生新派・水谷八重子合同新劇祭	作者: 室生犀星 演出: 大江良太郎 脚色: 金子洋文 装置: 伊藤熹朔	兄いもうと	兄いもうと	室生犀星		○	大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
298	1948	1106～1129	宝塚大劇場	新国劇	新國劇　宝塚公演	作者: 新井一/金子洋文 演出: 佐々木孝丸/金子洋文 装置: 河野国夫/長瀬直諒	ボス/丸橋忠彌(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金
299	1948	1201～1225	大阪歌舞伎座	歌舞伎	東西合同大歌舞伎、十二月興行	作者: 金子洋文 演出: 野淵昶		飛ぶ唄	○			大
300	1949	0213～0226	御園座	新国劇	新國劇二月公演	作者: 金子洋文 演出: 金子洋文 装置: 長瀬直諒	丸橋忠彌	丸橋忠彌	○	○		大
301	1949	0226～0227	不明		みかん座第二号　新春第十一回後援	作者: 進藤兼人/金子洋文 演出: 藤田祐美/藤田祐美 舞台監督: 奥村智計/岩橋三郎 装置: 野口秦三郎/柳野節男	安城家の舞踏会/一週間の戀人(一幕)	一週間の戀人	○			金
302	1949	09??～？	松竹巡業部	新国劇	新國劇公演	作者: 北條秀司/金子洋文 演出: 北條秀司/金子洋文	高原日和/丸橋忠彌(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金・大
303	1949	1001～1025	南座	新国劇	新國劇　十月興行	作者: 北條秀司/長谷川伸/中野實/金子洋文 演出: 北條秀司//中野實/金子洋文 装置: 濱田右二郎/志賀岳美/長瀬直諒	ぼんぼん/關の弥太つぺ/女看守殺人事件/丸橋忠彌	丸橋忠彌	○	○		博・金・大
304	1949	1203～1227	大阪歌舞伎座	新派	師走大顔合興行	作者: 室生犀星 演出: 大江良太郎 脚色: 金子洋文	兄いもうと	兄いもうと	室生犀星		○	大
305	1950	0102～0127	東京劇場	歌舞伎	吉例初春興行大歌舞伎 十七世中村勘三郎襲名披露	金子洋文「歌舞伎への希望」に回答 吉田絃二郎作「上覧猿若舞」	吉例初春興行大歌舞伎 再春菘種蒔/十七世中村勘三郎襲名披露/金閣寺/上欄猿若舞/一條大蔵譚/顔揃櫓前賑/林爛三人生醉/引窓/乗合船恵方漫歳	上欄猿若舞	吉田絃二郎	○		金
306	1951	0404～0428	明治座	新派劇	四月興行　春の新派祭	作者: 室生犀星/眞船豊/菊池幽芳/瀬戸英一/田中澄江/村松梢風/ 演出: 金子洋文/眞船豊//大江良太郎/菅原卓/喜多村緑郎 脚色: 金子洋文//川村花菱///巌谷真一 装置: 伊藤熹朔/伊藤熹朔/織田音也/織田音也/北川勇/伊藤熹朔	兄いもうと/嫉妬/乳兄弟/二筋道/水のほとり/残菊物語 春の新派祭 脚色・演出「兄いもうと」(一幕)	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・現・大
307	1951	1102～1126	明治座	新派劇	十一月興行　新派祭	作者: 金子洋文/川口松太郎/川口松太郎/木下杢太郎/泉鏡花 演出: 金子洋文/大江良太郎/川口松太郎/久保田万太郎/喜多村緑郎 装置: 北川勇/伊藤熹朔/伊藤熹朔/織田音也/長坂元弘	鬼の面/お桂ちゃん/浪花女/和泉屋染物店/婦系図	鬼の面	○	○		金・現・大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
308	1952	0103～0122	御園座	新派劇	初春　新派祭	作者: 金子洋文 演出: 金子洋文 装置: 北川勇	鬼の面	鬼の面	○	○		大
309	1952	0201～0225	大阪歌舞伎座	新派劇		作者: 室生犀星/眞船豊/村松梢風/川口松太郎/岸田國士/泉鏡花 演出: 金子洋文/眞船豊//金子洋文/菅原卓/喜多村緑郎	兄いもうと/嫉妬/残菊物語/宮城廣場/顔/日本橋	兄いもうと・宮城広場	室生犀星・村松梢風	○		博・現・大
310	1952	0502～0526	明治座	新国劇	新國劇	作者: 菊田一夫/里見/金子洋文/尾崎士郎/行友李風 演出: 菊田一夫/里見/金子洋文/高田保/行友李風 脚色: ///高田保/	ミスター浦島/たのむ/丸橋忠彌/人生劇場/義士間新六	丸橋忠彌	○	○		博・現・大
311	1952	1004～1027	明治座	新国劇	創立三十五周年記念新国劇十月公演	作者: 山本有三 演出: 金子洋文 脚色: 装置:	坂崎出羽守	坂崎出羽守	山本有三	○		大
312	1953	0702～0726	大阪歌舞伎座	新国劇	新國劇　七月公演	作者: 菊田一夫/金子洋文/立野信之原作/大佛次郎原作 演出: 菊田一夫/金子洋文/ 脚色: //田中千禾夫/高橋博 装置: 濱田右二郎/長瀬直諒/北川勇/濱田右二郎	十八度線のペテン師／丸橋忠彌(三幕六場)/叛乱/鞍馬天狗「青面夜叉」前篇	丸橋忠彌	○	○		金・大
313		0704～0723	東横ホール	新派	新派　東横公演	作者: 宇野信夫/林房雄/川口松太郎/室生犀星/川口松太郎/北条誠 演出: 吉川義雄/中野実/中野実/金子洋文/村山知義/北条誠 脚色: /北条誠//金子洋文//	新派　東横公演　下町/お婆ちゃんの青春/赤線地帯/兄いもうと/初夜/この世の花	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・現
314	1953	0806～0831	明治座	新国劇	八月興行　新派大合同	作者: 金子洋文/源氏鶏太/川口松太郎/尾崎紅葉/日野葦平/川口松太郎 演出: 金子洋文//川口松太郎/村山知義/久保田万太郎/大江良太郎 脚色: /井手俊郎//村山知義/知切光蔵// 装置: 北川勇/織田音也/長瀬直諒/古賀宏一/伊藤熹朔/伊藤熹朔	花と泥棒(三場)/母と娘/風流花笠祭/むらさき/大砲と撫子/明治美人館	花と泥棒	○	○		金・現・大
315	1954	1102～1125	御園座	新国劇	新國劇　十一月公演	作者: 北条秀司/金子洋文/霜川遠志/村山知義/長谷川伸 演出: 北条秀司/金子洋文/霜川遠志/村山知義/谷屋充 装置: 伊藤寿一/長瀬直諒/濱田右二郎/伊藤熹朔/濱田右二郎	司法権/丸橋忠彌(三幕六場)/前原党の最期/緑の葉と黄色い葉/一本刀土俵入	丸橋忠彌	○	○		金・大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
316	1954	1207～1228	新橋演舞場	新派	十二月新派大合同	作者: 瀬戸英一/室生犀星/火之葦平/北村小松/樋口一葉/中野実 演出: 川口松太郎補綴/金子洋文/知切光蔵/村山知義/久保田万太郎/中野実 装置: 伊藤熹朔/伊藤熹朔/織田音也/伊藤熹朔/伊藤熹朔/伊藤熹朔	今様かしく/兄いもうと(一幕)/馬賊芸者/上陸第一歩/大つごもり/明日の幸福	兄いもうと		○		金・現・大
317	1955	0201～0224	明治座	新派	二月興行　新派大合同	作者: 矢田弥八/泉鏡花/中野実/管裸馬/真船豊/川口松太郎 演出: 村山知義/久保田万太郎/中野実/ 金子洋文/真船豊/川口松太郎 脚色: /久保田万太郎//金子洋文// 装置: 村山知義/織田音也/伊藤熹朔/北川勇/伊藤熹朔/長瀬直諒	琉球の簪/逢坂の辻/谷底は花盛り/錦島三太夫(三場)/訪問客/風流深川唄	錦島三太夫		○	○	金・大
318	1955	0602～0627	明治座	新国劇	新國劇　六月公演	作者: 菊田一夫/中里介山/伊藤永之介/管裸馬/真船豊/川口松太郎 演出: 菊田一夫/濱田右二郎/金子洋文/濱田右二郎 脚色: //阿木翁助/ 装置: 濱田右二郎/長瀬直諒/濱田右二郎/長瀬直諒	私は騙さない/大菩薩峠　甲源一刀流の巻/警察日記/大菩薩峠　京島原連幕の巻	警察日記	伊藤永之介	○		金・大
319	1955	1001～1026	明治座	新国劇	新国劇　十月公演	作者: 北條秀司/長谷川伸/ゴーゴーリ原作より霜川遠志/金子洋文 演出: 北條秀司/谷屋充金/霜川遠志/金子洋文 装置: 河野国夫/長瀬直諒/伊藤寿一/長瀬直諒	山鳩/一本刀土俵入/外套/「髪」より「聳人騒動」(三幕) 金子著「髪より聳人騒動へ」	「髪」より聳人騒動	○	○		金・大
320	1955	1105～1127	明治座	新派劇	十一月興行秋の新派祭	作者: 伊賀山昌三/泉鏡花/川口松太郎/北條秀司/中野実 演出: 金子洋文//村山知義/北條秀司/中野実 装置: 吉田謙吉/釘町久磨次/伊藤熹朔/伊藤熹朔/織田音也	「なみのおと」(一幕)/日本橋/雨月物語/女将その三　太夫さん/結婚新書	なみのおと	伊賀山昌三	○		金・大
321	1956	0104～0124	産経ホール	新派劇	寿　新派初春興行	作者: 飯沢匡/泉鏡花/中野実/壷井榮/溝口健二・依田義賢原作 演出: 飯沢匡//中野実/金子洋文/川口松太郎 脚色: ///金子洋文/川口松太郎 装置: 伊藤寿一/釘町久麿次/織田音也/織田音也/伊藤熹朔	怖ろしい子供達/婦系図/鞄/雑居家族/浪花女	雑居家族	壷井栄	○	○	金・大
322	1956	0303～0327	南座	新国劇	新國劇　三月特別公演	作者: 北條秀司/行友李風/伊藤永之介原作/神田伯山口演 演出: 北條秀司/金子洋文/谷屋充 脚色: //阿木翁助/谷屋充 装置: 長瀬直諒/松田種次/濱田右二郎/津田種次	高砂/国定忠治/警察日記(四幕)/森の石松	警察日記	伊藤永之介	○		金・大
323	1956	0401～0425	大阪歌舞伎座	新国劇	新國劇　四月公演	作者: 北條秀司/長谷川伸/池波正太郎/金子洋文 演出: 北條秀司/谷屋充/池波正太郎/金子洋文 装置:河野国夫/濱田右二郎/河野国夫/長瀬直諒	山鳩/関の弥太っぺ/名寄岩/丸橋忠彌」(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金・大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
324	1956	0704～0723	東横ホール	新派	新派東横公演	作者: 室生犀星 演出: 金子洋文 脚色: 金子洋文	兄いもうと	兄いもうと	室生犀星	○	○	大
325	1956	1103～1125	御園座	新国劇	十一月興行　新國劇	作者: 北條秀司/神田伯山口演/池波正太郎/金子洋文 演出: 北條秀司/谷屋充/池波正太郎/金子洋文 装置: 河野国夫/松田種次/河野国夫/長瀬直諒	山鳩/森の石松/名寄岩/丸橋忠彌」(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金・大
326	1956	1204～1226	新橋演舞場	新派	恒例　十二月新派名作祭り	作者: 金子洋文	恒例　十二月新派名作祭り　作・演出「鰰」(三場)	鰰	○	○		金・大
327	1957	0130～0227	明治座	新国劇	新國劇　二月公演	作者: 金子洋文 演出: 金子洋文 装置: 長瀬直諒	新國劇　二月公演 作・演出「丸橋忠彌」(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金・大
328	1957	0303～0327	大阪歌舞伎座	新派	新派大合同三月公演	作者: 伊賀山昌三 演出: 金子洋文 装置: 中島八郎	新派大合同三月公演 松は緑	松は緑	伊賀山昌三	○		大
329	1957	0605～0626	御園座	新派	新派大合同六月興業	作者: 伊賀山昌三 演出: 金子洋文 装置: 中島八郎	新派大合同六月興業 なみのおと	なみのおと	伊賀山昌三	○		大
330	1957	1203～1225	大阪歌舞伎座		創立四十周年記念　新國劇12月公演		創立四十周年記念　新國劇12月公演 脚色・演出「鶯」(二幕)　著「『鶯』と作者と同時演出	鶯	伊藤永之介	○	○	金・大
331	1958	0503～0527	御園座		新國劇　五月公演	作者: 伊藤永之介 演出: 金子洋文 脚色: 金子洋文 装置: 長瀬直諒	新國劇　五月公演　脚色・演出「鶯」(二幕)	鶯	伊藤永之介	○	○	金・大
332	1958	8.16～9.28.	新宿コマ劇場		新国劇(盛夏公演)	作者: 金子洋文 演出: 金子洋文	新国劇(盛夏公演) 作・演出「丸橋忠彌」(六場)	丸橋忠彌	○	○		金
333	1958	1007～1012	読売ホール		劇団中芸	作者: 阿木翁助 演出: 金子洋文	演歌有情　演出「演歌有情」－のんき節・石田一松の生涯－	演歌有情　のんき節・石田一松の生涯	阿木翁助	○		博・金
334	1958		産経会館		劇団中芸特別公演　演歌有情「石田一松の生涯」	演出「演歌有情－石田一松の生涯」(四幕十一場)	劇団中芸特別公演　演歌有情「石田一松の生涯」（四幕十一場）	演歌有情「石田一松の生涯」	阿木翁助	○		金
335	1958		川崎公民館		川崎演劇協会　第9回演劇発表会	金子洋文作「鰰」(一幕三場)	川崎演劇協会　第9回演劇発表会　作「鰰」(一幕三場)	鰰	○			金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
336	1958？	1210	教育会館		千葉市民劇場第10回公演	金子洋文作「鰰」	千葉市民劇場第10回公演　作「鰰」／「笛」田中千壬夫	鰰	○			金
337	1959		東京宝塚劇場		新國劇　九月公演	著「微笑のおもかげ」	新國劇　九月公演「微笑のおもかげ」	微笑のおもかげ	○			金
338	1959	1101～1125	御園座		新國劇　十一月公演	作者：金子洋文	新國劇　十一月公演 作･演出「丸橋忠彌」(三幕六場)	丸橋忠彌	○	○		金･大
339	1959	1203～1227	新橋演舞場		新派	作者：西沢揚太郎 演出：金子洋文 装置：伊藤寿一 考証：三角寛(山窩考証)	新派　演出「山に生きる女」(二幕三場)	山に生きる女		○		金･大
340	1960	0401～0425	大阪新歌舞伎座		新國劇　四月公演	作者：金子洋文 演出：金子洋文 装置：長瀬直諒	新國劇　四月公演　作･演出「丸橋忠弥」(三幕)	丸橋忠弥	○	○		金･大
341	1962	0201～0225	明治座		二月公演　明治座まつり	作者：川口松太郎 演出：金子洋文	二月公演　明治座まつり　演出「延命院日當」(二幕三場)	延命院日當		○		金･大
342	1962	0623～0627	歌舞伎座	歌舞伎	六月大歌舞伎(松竹歌舞伎審議会第一回企劃公演)	金子洋文著「『夏祭』の監修について」	大商蛭子島/秋燈記/夏祭浪花鑑/けいせい倭草子/生贄/新皿屋舗月雨暈 六月大歌舞伎(松竹歌舞伎審議会第一回企劃公演)	夏祭浪花鑑		○		金
343	1962	0802～0829	歌舞伎座	商業演劇	吉例　三波春夫特別公演	作者：野村胡堂 演出：金子洋文 脚色：金子洋文 装置：長瀬直諒	吉例　三波春夫特別公演 沖縄物語/風流奈良丸くづし/歌の大饗宴/　脚色･演出「銭形平次捕物控平次女難の巻」(三幕四場)　/新内片袖しぐれ/三波春夫ヒットパレード 金子洋文著「『平次の女難』の劇化･演出」	吉例　三波春夫特別公演 銭形平次捕物控平次女難の巻	野村胡堂	○	○	金･大
344	1963	0404～0428	明治座	新派	再開場五周年記念　四月公演　春の新派祭	作者：八木隆一郎/室生犀星/川口松太郎/大垣肇/戸塚文子原作/川口松太郎 演出：八木隆一郎/金子洋文/久保田万太郎/程島武夫/中野実/川口松太郎 脚色：　/金子洋文///中野実/川口松太郎 装置：　/伊藤熹朔/伊藤熹朔/伊藤寿一/織田音也/河野国夫	再開場五周年記念 命美わし/兄いもうと/鶴八鶴次郎/水沢の一夜/ドライ･ママ/憂愁平野	兄いもうと	室生犀星	○	○	金･大
345	1963	0603～0626	歌舞伎座	歌舞伎	松竹歌舞伎審議会　六月特別公演	作者：菊池寛//近松門左衛門/金子洋文/近松門左衛門//萩原雪夫/並木正三 演出：今日出海/武知鉄二/戸部銀作/菅原卓/宇野信夫//// 脚色：　//戸部銀作//宇野信夫///	松竹歌舞伎審議会　六月特別公演 袈裟の良人/歌舞伎草子/長町女腹切/守銭奴/井筒業平河内通/藤娘/大江山酒天童子/宿無団七時雨傘	守銭奴	○			金･大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
346	1963		常盤座		曾我廼家五九郎祭		曾我廼家五九郎祭　脚色「ノンキナトウサン」(二場)	曾我廼家五九郎祭　脚色「ノンキナトウサン」(二場)	麻生豊		○	金
347	1963		浅草常盤座		初代曾我廼家五九郎祭		初代曾我廼家五九郎祭　脚色「ノンキナトウサン」(二場)	初代曾我廼家五九郎祭　脚色「ノンキナトウサン」(二場)	麻生豊		○	金
348	1964	0903～0928	歌舞伎座	歌舞伎	四世中村雀右衛門襲名大歌舞伎	作者: 岡本綺堂///岡本綺堂/近松門左衛門///長谷川時雨/宇野信夫 演出: ///金子洋文/巌谷槙一///宇野信夫 脚色:////村井富雄/////	四世中村雀右衛門襲名大歌舞伎 修善寺物語/金閣寺/汐汲/権三と助十/堀川波の鼓/襲名披露口上/妹背山婦女庭訓/江島生島/ひと夜	権三と助十	岡本綺堂	○		金・大
349	1964	0903	芸術座		東宝撮影所演技ゼミナール　試演会プログラム	作者: 金子洋文///中村吉蔵 演出:岩村久雄	東宝撮影所演技ゼミナール　試演会プログラム　金子洋文作「漫画家」(二幕五場)/殺陣/擬斗/剃刀	漫画家	○			金・大
350	1965	0401～0425	歌舞伎座	歌舞伎	四月合同特別公演	作者: 岡本綺堂/北條秀司/川口松太郎//長谷川伸 演出: 金子洋文/北條秀司//川口松太郎・平岩弓枝/村上元三	四月合同特別公演　演出「頼豪阿闍梨」(一幕)/浮舟/百花繚乱/櫻しぐれ・傀儡師/年増・まかしよ/檻/	頼豪阿闍梨	岡本綺堂	○		金・大
351	1965	0502～0526	新橋演舞場	新派	新派	作者: 久坂栄二郎/瀬戸英一/水木洋子/室生犀星原作/松山善三/火野葦平 演出: 程島武夫/大江良太郎/梅本重信/金子洋文/松山善三/川口松太郎 脚色: ///金子洋文/	新派命みじかし/二筋道/春の嵐/兄いもうと(一幕)/おこりんぼ/馬賊芸者	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・大
352	1966	0201～0226	歌舞伎座	新派	歌舞伎／新派　合同特別公演	作者: 田島淳/川口松太郎/久松一声/河竹黙阿弥/室生犀星原作/谷崎潤一郎/田中青磁/ 演出: 竹越和夫/川口松太郎////宇野信夫/// 脚色: ////金子洋文/宇野信夫//	歌舞伎/新派　能祇と泥棒/明治一代女/高杯/三人吉三巴白波/合同特別公演(一幕)兄いもうと/盲目物語/飛梅/人情噺文七元結	兄いもうと	室生犀星		○	金・大
353	1966	0505～0529	歌舞伎座	歌舞伎	五月興行歌舞伎祭大合同	作者: /巌谷槙一//近松徳三/岡本綺堂/// 演出: /巌谷槙一//戸部銀作/金子洋文////	宮島だんまり/長恨詩/熊谷陣屋/二人夕霧/曽我物語/源太勘当/茨木/川庄	曽我物語	岡本綺堂	○		金・大
354	1966	0804～0830	歌舞伎座	商業演劇	三波春夫特別興行	金子洋文著「歌の大饗宴」	三波春夫特別興行鵜腕の喜三郎/浪曲一代男/歌の金字塔/聖女台風/北海の星/歌の大饗宴	歌の大饗宴	○			金

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
355	1966	0903～0927	新宿コマ・スタジアム	新国劇	新國劇　新宿コマ・スタジアム9月公演	榎本滋民作田中林輔演出/金子洋文作・演出「丸橋忠彌」(六場)	新國劇　新宿コマ・スタジアム9月公演 天保水滸伝/作・演出「丸橋忠彌」(六場)	丸橋忠彌	○	○		金
356	1967	0430～0525	道頓堀中座	喜劇	松竹新喜劇　五月公演	作者: 茂林寺文福/金子洋文/館直志/河竹五十鈴/平戸敬二/花登筐/館直志 演出: 茂林寺文福///川竹五十鈴/平戸敬二/花登筐/館直志 脚色:　/平戸敬二/////	松竹新喜劇　恋愛免許証/メロンの詩/たそがれの虹/駕や捕物帳/可愛い放火魔/だいこん百年/とも網	メロンの詩	○			金・大
357	1967	0902～0926	大阪新歌舞伎座	商業演劇	東宝劇団　新秋公演	作者:野村胡堂原作/滝口康彦原作 演出:平山一夫/安部広次 脚色:金子洋文/小幡欣治	東宝劇団　新秋公演　脚色「銭形平次捕物控-迷子札-」(二幕六場)/上意討ち	銭形平次捕物控-迷子札-	野村胡堂	○		金・大
358	1970	0704～0828	新橋演舞場	喜劇	松竹新喜劇　70年夏	作者:金子洋文/館直志/館直志/館直志/館直志/一竜斉貞鳳 演出:平戸敬二/館直志/館直志/館直志/館直志/ 脚本: /////平戸敬二	松竹新喜劇　70年夏　　作「メロンの詩」(三場)/どん吉の恋/愚兄愚弟/名代きつねずし/男と女ともう一人/浪花の夢宝の人船	メロンの詩	○			金・大
359	1971	0903～0926	歌舞伎座	歌舞伎	新秋九月大歌舞伎	作者: 吉屋信子/杉昌郎/岡本綺堂/深沢七郎/宇野信夫/長谷川伸 演出:寺崎嘉浩//金子洋文/有吉佐和子//長谷川伸 脚色:田中喜三///有吉佐和子//	新秋九月大歌舞伎 大江廣元の恋/船渡聟/権三と助十/楢山節考/浮かれ地蔵/暗闇の丑松	権三と助十	岡本綺堂	○		金・大
360	1976	0503～0526	新橋演舞場	新派	五月新派特別公演(坂東玉三郎特別参加)	作者: 樋口一葉/北條秀司/室生犀星/久保田万太郎/泉鏡花 演出:戌井市郎/北條秀司・乾譲/金子洋文・永井孝男/久保田万太郎/戌井市郎 脚色:久保田万太郎作//金子洋文//川口松太郎	五月新派特別公演(坂東玉三郎特別参加) おりき/京舞/兄いもうと/蛍/つや物語	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・大
361	1977	0402～0424	中日劇場	新派	陽春特別公演	作者: 室生犀星 演出: 金子洋文 脚色: 金子洋文	兄いもうと	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・大
362	1978	0906～0920	国立劇場	新国劇	劇団新国劇 新國劇(九月公演)	作者: 榎本滋民/金子洋文 演出: 榎本滋民/金子洋文	同期の桜／丸橋忠弥	丸橋忠弥	○	○		博・金・大
363	1979	0304～0328	歌舞伎座	歌舞伎	三月顔合せ大歌舞伎	作者: 城山三郎//福地櫻痴/岡本綺堂// 演出: 戌井市郎///金子洋文// 脚色: 市川森一///金子洋文//	三月顔合せ大歌舞伎 黄金の日日/祇園祭礼信仰記/侠客春雨傘/権三と助十/神楽諷雲井毬	権三と助十	岡本綺堂	○	○	金・大
364	1983	0104～0128	三越ロイヤル・シアター	新派	劇団新派　新春公演	中内蝶二作/齊藤喬演出 室生犀星原作/金子洋文脚色・演出/吉村忠矩演出「兄いもうと」(一幕)	劇団新派　新春公演　大尉の娘/脚色・演出「兄いもうと」(一幕)	兄いもうと	室生犀星	○	○	金・大

N..o.	上演年	初日～終日	劇場	ジャンル	劇団名	作者、演出、脚色等 （公演作品順）	公演演目	金子の演目	作者	演出	脚色	出典
365	1984	0216～0219	東芸劇場		劇団表現劇場	作者: 金子洋文 演出: 夏川大二朗	ふるさと	ふるさと	○			博
366	1987	1203～122	国立劇場	新派劇	第十四回十二月新派公演	作者: 室生犀星 /北條秀司 演出: 金子洋文 /北條秀司 脚色: 金子洋文/	兄いもうと/京舞	兄いもうと	室生犀星		○	博・金・大
367	1987?	0402～0424	中日劇場	新派	陽春特別公演	脚色: 兄いもうと	陽春特別公演　京舞/兄いもうと	兄いもうと	室生犀星		○	金
368	2004	0113～0118	シアターX		シアターX	作者: 金子洋文/吉井勇 演出: 川和孝	牝鶏/俳諧亭句楽の死	牝鶏	○			博・大
369	2004	1116～1117	日比谷公会堂		新築地劇團	作者: 金子洋文/藤森成吉 演出: 土方與志	牝鶏/何が彼女をそうさせたのか？	牝鶏	○			博